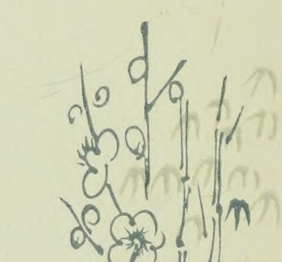






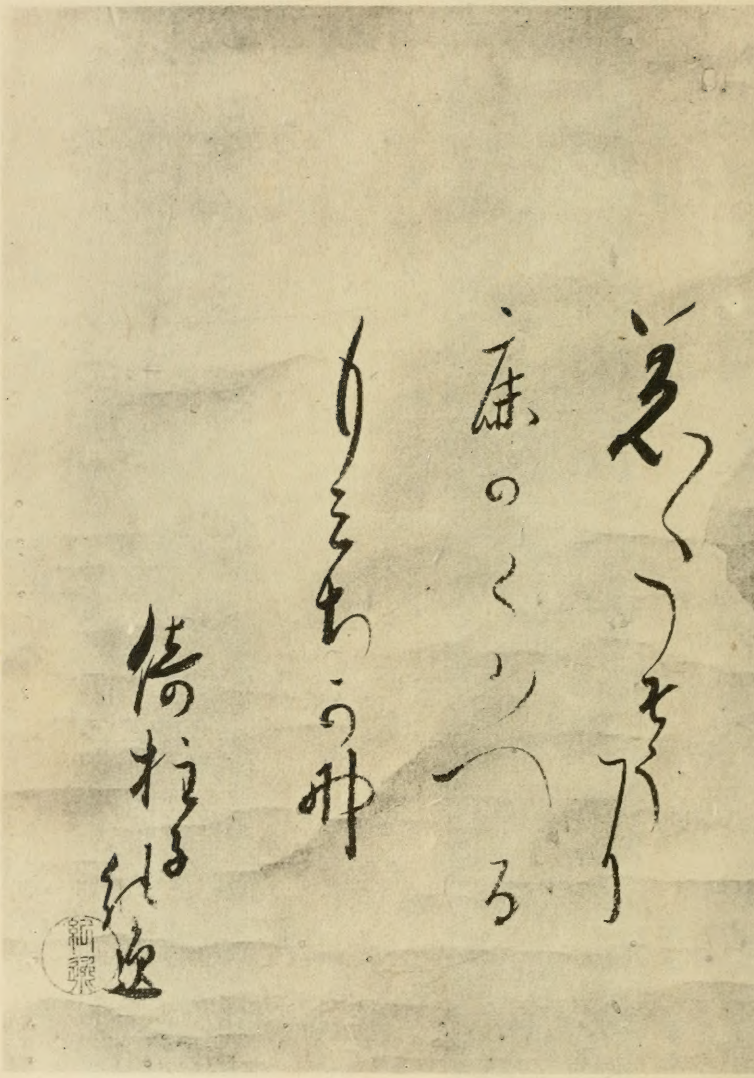


天明名家句選

装幀津田青楓

紀逸眞蹟

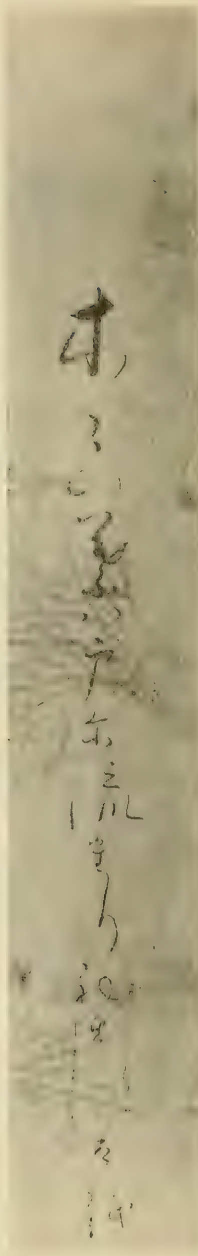
（久保田秋雨氏藏）



着たそうに鹿のくはへるもみぢかな

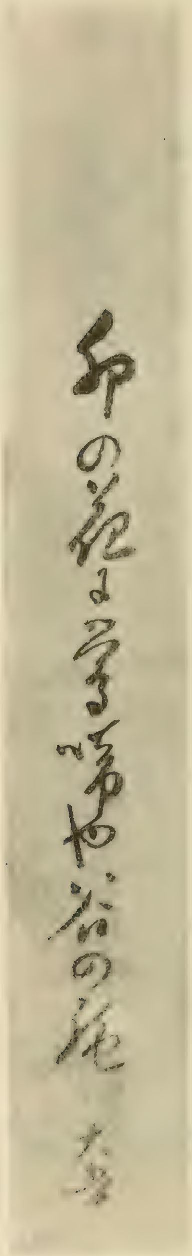
倚桂子紀逸

太祇短册　（武藤一郎氏藏）



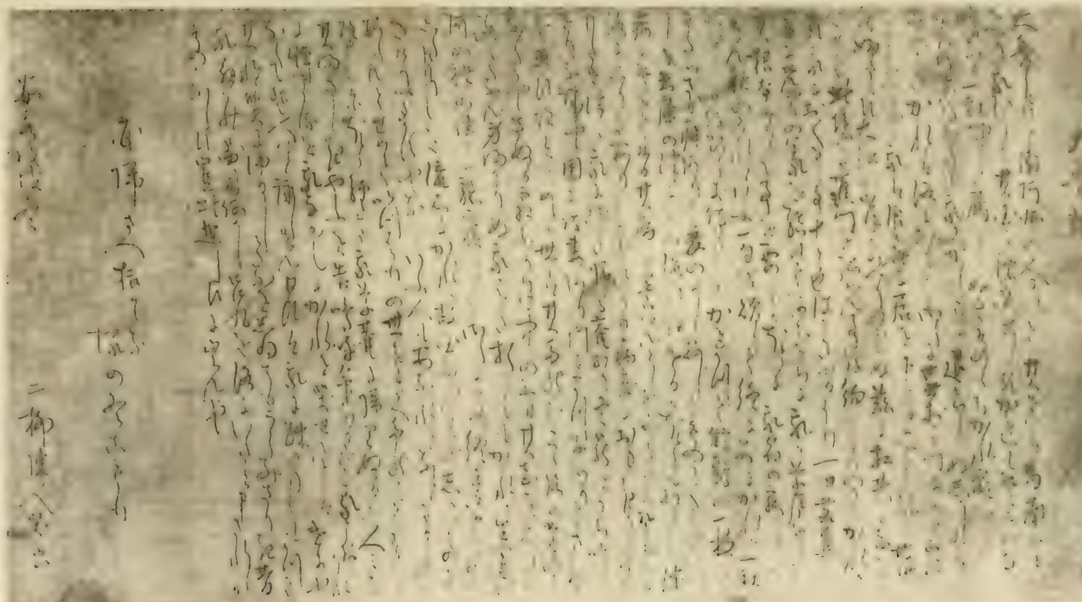
木々の葉は戸に流たり初あらし　太祇

大魯短册　（同　）



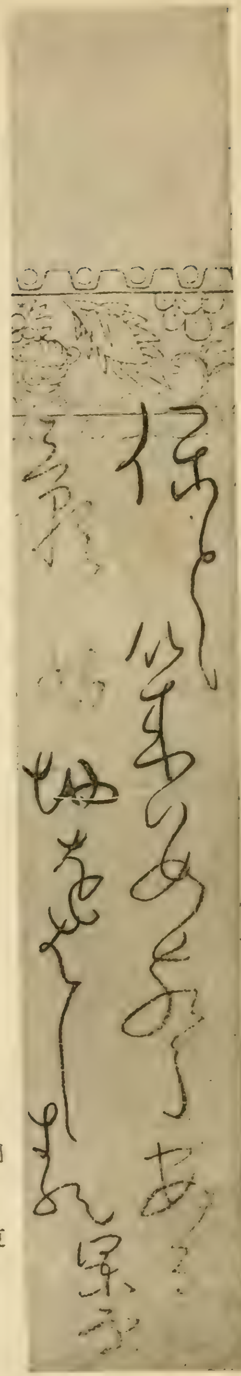
卯の花に鶯啼や谷の庵　大魯

大魯諫（二柳筆）



（川西和露氏藏）

闌更短册

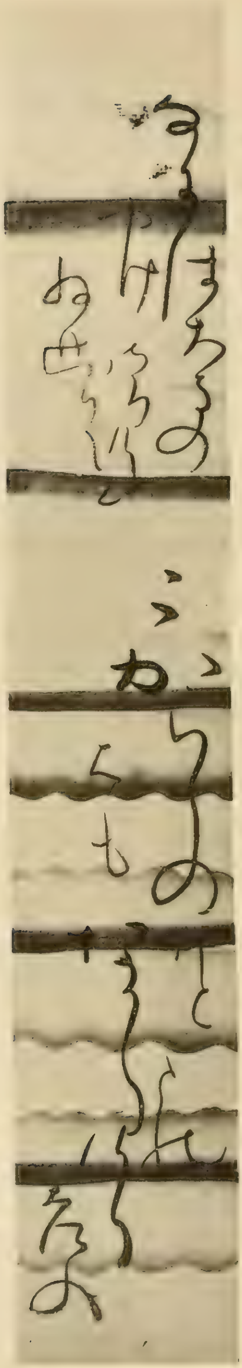


ほとゝぎす聲ある影の地をはしる

闌更

（久保田秋雨氏藏）

大江丸短册



こがらしのあとをのはもなかりけり

大江丸

（同）

解題

蘇明山莊發句藻

天明四年板　中本一冊

犬公方綱吉の嬖臣として其の榮達を爪はぢきされた柳澤吉保の孫であるため、松平美濃守信鴻として政治的に才幹を現はし得なかつたが、江戸座の俳人月村所米翁としては平民的に寛濶な天分を以て風流に名を得てゐた。安永二年大和郡山の所領十五万一千石を嫡子甲斐守保光にゆづり、江戸下駒込の染井別莊に隱居後は殊に自由な生活に入つたので、そのころの俳書に米翁の落款ある序跋を屢ゝ見るように、大名なるが故の阿諛でも追從でもなく、職業的俳人の間に畏敬されて天明時代の一家をなして居た。沾徳座の紫子春來を入門の師としたので生粋の江戸座育ちであり、同門の八楽庵米仲を後の師に招いて、米翁の表徳も後にあやかつて附けたらしいが、その後淵十座の洪珠來が常に出入して俳事に就いての祐筆の格で專らその用を辨じてゐた。この『蘇明山莊發句藻』は米翁が退隱十年の吟詠を「みづから彩毫をふるひ玉ひて、かれこれあつめさせ玉ひ」さて後、珠來をして適宜その中から選抄させた米翁の家集である。その句作の着眼は自然の觀照よりは、人事現象の滑稽化にあるので、用語の俗に落るを嫌はず都會風俗の情調を本位としてゐる。これは江戸座の通人趣味から生れたので、米翁その人の個人色もおのづからそこにあり、一面には句その者がその個人色によつて彩られてもゐる。江戸文學の門に入るにはこれ位の洒落を寛容する餘裕がなければならぬ。かの抱一上人は米翁の感化によつて、『輕擧觀句藻』の題名を本集の句藻の二字から思ひ附いたのである。米翁

の意を汲んで本集を板に起した珠成は、六角家の養子になつた第五子の信濃守里之である。父と同じく俳諧の愛好者であつた。

哲阿彌句藻　　寛政十年板　　大本二冊

黄表紙には喜三二、狂歌には手柄岡持で知らるゝ同じ秋田藩の月成は、哲阿彌が談林・正風の孰れにも依怙の心を持たずして、自ら高談林ゝとする心境に同じで、その談林なり正風なりの一方から一方を笑ふ世俗の者は、「共に句藻くらへと云てやまんにはしかじ」と喝破してゐる。蓋し「句藻くらへ」は汚い洒落だが「屎くらへ」に外ならぬ。かうして痛快がる通人の洒落氣分を頭に入れて讀めば「哲阿彌句藻」の一句ゝゝが飛躍して來るが、その洒落を殺して句の境地だけを發見しようとすると、悉く謎のようなものになつてしまふ。月成の序文にもあるが哲阿彌は、朝四の號をやめて、三年その三年のうち桃栗と號して、三年過ぎると、もとの朝四に戻つたといふ桃栗三年の諺を洒落の材料にするため、正直に三年を限つて桃栗の號を用ひたような莫迦ゝゝしさが、どこまでも洒落本位に人生を見る心事を強調してゐる。哲阿彌は佐藤氏、月成と同藩の秋田角館の人で、佐竹家の江戸定府であつた。書畫や篆刻の技に通じて、俳諧は堪露とよび早く江戸座に入つたが、「後時ゝ庵が門に入つて北彌と云」とあるので、淡々系統の渭北に就いた事も疑ひない。「浪速の宗因が俳風を慕ひ」一に清談林と號したのは、春來の『東風流』に刺戟されたので、いくつも號を持つてゐたが哲阿彌晩得を晩年まで用ひた。『哲阿彌句藻』は生前稿を脱して天明三年の月成の序文を添へ、その家に藏されたものを歿後七回忌に抱一上人の跋を附して出板したのである。帝國圖書館の藏本は銀箔の雲母表紙の美本であるが、飛丁になつてゐるので、或は一枚挿み洩れがあるのでないかと疑はれたので、和露文庫の別本を借覽する

と果して一枚の落丁を發見して、既に校了となつたものを再び組直して、手落ちなき事を得たのである。

瓢簞集　明和六年板　大本一冊

枕もとには門人の買友が附添つてゐる。武然は炉に寄つて藥を煎じてゐた。病床の宋屋は指で蒲團に何か書いて見せる。買友が鼻帋に筆を持添へさせると「西へ行ひがんざくらや道のつれ」と辭世を書いたが、紙も筆も疎末に過ぎるので、再びよき紙とよき筆をすゝめると起坐して、「西へ行ひがん櫻や……」と同じように書いて、あとは暫らく眠る風であつたが、やがて「……道案内」と墨をつぎ、「道のつれより此方然るべきにや」と言葉も爽やかに語つてその日、明和三年三月十二日故人となつたのである。武然の『香世界』にある此の終焉の模樣で見て、宋屋平常の純な氣持、態度が思ひ合される。蕪村と同じく巴人門から出たが、嘯山の題せる「身世一瓢、豈ニ佳ニセンヤ哀樂ニ」の洒々落々たる人間で、行脚生活のうちに一生を過した。俳諧は師巴人と同じ道を履んで一歩もわき道に入らないので、自由に行く道を求めた蕪村とは同門ながら全然行き方を異にしてゐた。個人としての二人は生涯何意のない友情を以て接近したので、その門人も互ひに提携して一方の功を嫉み、そねみ、傷つける事をしなかつた。これは宋屋の「貧ツテ財ノ無レ貯フル、好レンテ色ノ不レ着セ」と嘯山の評せる恬淡な人格の現はれで、蕪村も亦年長の先輩なるが爲に數歩を讓つてゐた故でもあつた。宋屋は別に百葉泉、富鈴房、机墨庵、と號したが、巴人の別號宋阿の一字を取つて通號となしたので本姓は望月氏である。『瓢簞集』は門人嘯山・買友が編者となつて歿後四年にその初編として板行したので、雅因の序には「叟は句達者にして數萬の什あなれば、相續ひて二篇・三篇の出なん事また樂しからずや」とあるが、續刊に至らなかつたようである。遠藤氏舊藏本によつて原稿をつくり、それとは別の和露文庫藏本を以て校合したのである。

太祇句選

明和九年板　　中本一冊

に[illegible]の趣向を嶋原の廓へ資つて年中行事とさせたのも太祇なら、江戸座の人情味、氣分を京坂の人に傳へたのも太祇だつたのである。されば言葉を大きくして太祇は江戸情調の上方移入者であるといつても好い。つれ〳〵庵の者や芝居道の人と往來して、華かに賑かな生活をしたらしいが、知己の望みでその子弟のため手習の先生ともなつて、いろ〳〵變化のある境遇に自分を置いたので、太祇の句には太祇その人の生活とも、又、世相の反映とも見らるゝものがあつて簡單に評されない。江戸の人で炭氏、水語といひ、紀逸の門に入つて太祇と號し、京の嶋原に不夜庵を結び、晩年發心して眞珠庵に法名道源で行ひ澄ましてゐた。俳諧道に精進して一七日の禁足に三昧境に徹した事は、呑獅が居風呂を沸かし、それを男どもにさし擔はせて、奇拔な贈り物をしたので、「頭巾脱でいたゞくやこのぬくひもの」と詠んだ句の前書で知られる。居常「日課の句を怠らず」に吟じて、會があれば「一の題に十餘章をならべて」諸吟を示し。趣向の取り方に苦心して「上に置、下になし、あるは中にもつゞりて、一句を五句にも七句にもなし」その意に適するまで倦怠の色のなかつたのを、嘯山は序文中に感嘆してゐる。蕪村も太祇の句稿を見て、「あなおびたゞし、人のイぬる屑ばかりにくらべおぼゆ」と驚異した程の多作者であつた。呑獅から遺稿の選を托された嘯山・雅因は夥しい句に眩惑して、「たゞ四時のはじめごとに出せる五六帋がほどをゑらみ取つて初稿と題し」それを取敢ず出板して置けばよいでないかとの蕪村の勸告に從つて、歿後この『太祇句選』が板行されたのである。家藏本は茶表紙の初刷本であるが、嘯山の太祇像賛を除いた異本もある。多分後編出板の時に再刷したものであらうが本文に相違はない。

太祇句選後編　安永六年板　中本一冊

石の月　同二年板　同一冊

不夜庵二世は太祇の遺弟五雲が相續して、亡師の七回忌に『太祇句選』に洩れた四季發句三十六句を錄して追善集『石の月』を出した。それ位の句を拾つたのでは、夥しい句稿に對して甚だ呆氣ないので、七回忌に五雲は復『太祇句選後編』を選抄したのである。出板の順序からは『石の月』の方が四年前になるのだが、『句選』から『後編』への連絡を考へて、『石の月』を後廻しにした事を誤解のないよう斷つて置く。五雲は江戸の人、太祇を慕つて京に上り、その筑紫紀行に隨つて師弟の關係が淺くないので、呑獅のはからひで不夜庵をつぎ太祇の舊庵に入つて、寛政元年『ふた夜の月』を京への名殘に撰集して江戸へ歸るまで住つてゐた。後援者の呑獅は豪奢で聞えた炭木屋幸齋の孫で嶋原の廓中でも見世構の大きい桔梗屋の主人であつた。太祇のためには身後の世話までしてやつたので、『石の月』に其の亭に藏する太祇の短冊をかゝげて脇起しを行ひ、その席には蕪村や几董も列席して歌仙滿尾したものを載せてある。

『太祇句選後編』も亦呑獅の援助で出來たので、蕪村も嘯山も雅因も五雲から序文を求められて「祇と因み深きものをよしとす」といつて斷り、まはり廻つて呑獅が序を書く事になつたのである。『石の月』の太祇の句は『後編』に再錄されたのもあるが、句數からいつて前後兩編の比較にならない。『後編』は既に嘯山、雅因が責任を以て『句選』を選んだ條件なので、編者五雲の鑑識が乏しいといふ譯でないが、前編に對して遜色あるを免れない。『石の月』は『その秋』と共に太祇の追善集として知らるゝ二集で、『後編』と共に和露文庫にある珍本である。太祇の遺著は未發見の

も少くないが、俳句は本集に收めた三書で大して不足ないと思ふ。

春泥發句集　　安永六年板　　中本二冊

蕪村は手紙を通じて見ると、その云ふ事に表裏があるので盡信されないが、『五車反古』の解題にも引用したやうに、召波の死を哭して「余三たび泣て曰、我俳諧西せり。我俳諧西せり。」とその涙滂沱たる告白に、彼が『夜半茗話』に特記した如く、永久に眞實な言葉である事を信じたい。召波は蕪村が夜半亭の文臺を立てざる以前、四條烏丸の三葉軒をもり立てゝ、百池の大來堂及びその春泥舍に社中を會し、蕪村の捌きに服してゐたので、洛西等持院の別業で蕪村より俳諧離俗の法を聞いて頓悟し、且つ終焉の期に蕪村の手を握つて「恨らくは叟とゝもに流行を同じくせざることを」とまで絶對に心服したのであるから、蕪村の愛惜も又思ひ量られる。その年忌〳〵の句もあまたあるが、殊に召波七回忌の追善に

いざ雪車にのりの旅人とく來ませ　　蕪村拜

は既刊の蕪村文獻にこれを逸してゐるが、蕪村の心から愛弟子の魂によびかけた句として強く響く。召波は黑柳氏、春泥舍はその別號である。遺子維駒また蕪村社中で、父の十三回忌に『五車反古』を梓行した。召波はその句境閑雅に、描寫の線また太からず、柔らかくやさしいが豪宕の氣なく、深刻の情なく、淺近に低調になりやすいので、清雋の才に於て几董に輸するところがある。其の『春泥發句集』は稀覯の書で、藤井紫影博士が揷架中より本大系のため特に貸與されたもので、題簽には明らかに「春泥發句集」とあり、立標題には「春泥發句選」となつてゐる。蕪村の序は難しい書躰でないから、原本の眞蹟板下を凸版として揭げたのである。太祇の「かの後家のうしろに踊る狐かな」

が混入してゐるが、さうと氣が附けば太祇の小説的構想に類似の句もちらり〳〵見受ける。太祇とも常に同席したのでその影響がある可き筈である。

井　華　集　　天明七年板　　中本二冊

鶯の枝移りするような雋拔な几董の書は、手刷の柔い紙に板下美を映發して、彼の撰集を通じて高雅な特色となつてゐる。『井華集』はその筆觸の快美なる上に彫刀の冴を添へ、鑑賞的に句品を高めるところがある。活字に組めばその幻影はあとかたもなく消えてしまふが、漢字と假名を巧みに書分けた文字の配置が、活字と活字とをうつり好く調和させて、氣分的に几董の藝術的關心をどこまでも幻滅させない。彼が『井華集』に注いだ彫琢の苦は慘憺たるもので、幾度か稿をあらためて漸く一編の『晋明集』となつたが、なほ自分にあきたらない處があつて、この『井華集』を別に書き起したのである。かつて二十年來の句帖を塗抹してしまふ決心をしたが、門人の諫めで思ひ止まり、舊知の上田秋成にその相談をしたところが、詩文・哥集さへ市に售らるゝに「俳士のみ壁に藏むべきにあらず」との言質を得たので、こゝに出板に着手したので、几董の消極的な用意はかうした事にも行屆いてゐる。几董の句は桐火鉢を抱へて、庭前の梅を硝子越しに見てゐるような趣で、品の好い家庭向であるが、現實の生活に觸るゝ活動性がない。庭木らしき雅致はあるが、野生の梅の遒勁な印象を得られない。又、蕪村を漢畫の山水を躰得した者とすれば、几董はやまとの繪の手法を寫生的にして、それに淡彩を施したところに清新味があるとも評されやう。其角の本の體裁書風を慕つてゐたが、其角の放膽で自由な表現を模倣するには、几董は磊落性に缺けて居たといはねばならぬ。几董の位置と連句の技倆に就いては、第九卷の解題に述べて置いたから參照されたい。碧梧桐氏の所持さるゝのは丹表紙で

あるが、大集の覆刻に用ひたのは和露文庫の藏本で、表紙はやゝ粗末であるが内容は同一である。

蘆陰句選

安永八年板　中本一冊

大魯は陰性の人物である。其の「蘆陰句選」を讀んでの印象も、一句の境地よりは光りのない生活の陰に忍苦する彼が、じめ／＼濕つた空氣を通して人生を灰色に見る痛ましさが後に殘る。感懷八句の在坂五年の芦陰舍を退去する時、庭中の竹を伐つて節にかへ、「妻兒が漂泊ことに悲し」とふり向きふり返りつゝ、庵を出れば「行路茫々然たり」で、衷心せんばかりに「夏艸やまくらせんにも蛇嫌ひ」と呻吟した陰慘な場面は、全く性格的悲劇である。彼は阿波の藩士で蕪村の文臺を開く前、その社中に入つて馬南の号で京住居をしてゐた。安永二年薙髮して大魯となり、大坂に移つて芦陰舍を構へ、狂歌師の芙蓉花その他彼の社中が生活を扶けてゐたが、「さはるとの侍りて」その芦陰舍を解散する事になつたのである。蕪村の東菑宛書翰に「もちろん芦陰法師不埒は嘸と存ゆへ共」と二人の絶交に驚いて仲裁に入つた事件が、「さはるとの侍りて」の原因らしく思はる。その後兵庫に假寓して三遷舍と稱したが、一年後の安永八年十一月京都で死歿してゐる。大魯の姓には數說あつて、吉別氏――又は吉分といふのが通說で、兵庫筑嶋の大魯墳にはその子春魯が、今田氏、名は鶴虎と記してある。『誹諧家譜拾遺集』には宋屋門文誰の系統に馬南の名があつて、司氏、号三月下菴、寓舍、釜座通下立賣上町と出てゐる。此の司馬南は疑問があるが吉別氏、今田氏の兩說あるは確實で、大魯が世を避けてその孰れをも使用してゐたと見える。蕪村が彼の死後「蘆陰句選」の序を乞はれて、「遺稿は出さずもあらなん」と一度は拒んだのも、大魯のうしろ暗い事件を憚つて、婉曲に發企者を諷したのであらう。原本は和露文庫の藏本を碧梧桐氏が摸寫出板したものがある。本覆刻もそれに據つたので、彼の追善集『霜月十

二日』と共に容易に獲難いものである。

蓼太句集

安永六年板　　中本一冊

師の吏登は「我に句なし」と謙遜して、たつた十八句しか短冊の類に書かなかつたようにいはれてる。『吏登句集』で見ても其の寡作であつたことが頷かれる。蓼太は多作である。そんな微温的な「我に句なし」などゝ、或る意味での自己否定をすればこそ、どん〳〵發表して寧ろ一句でもよけいに、人の心を支配するものがあればいゝ事を望んで居た。それでも『蓼太句集』を出板する段になつて、いたづらに句數を貪るのを制して、「俳士に句のおほきは、硯に筆のおほきに似たりと誰やらもいはれき」と、その編輯を托した吐月をいましめて、手許にある句帖の十分が一をあたへたに過ぎない。『蓼太句集二編』の編者三傍は「明和のむかし吐月・月巣が拾ひ」と記して、蓼太は二人の選ぶがまゝに關渉しなかつたようにいつてるが、蜀山の序文には「蓼太載レ酒ヲ顧ニ余ガ半門一請レ序ヲ其集ニ」とあるから、決して門人まかせにしたのでなく、我が家集として充分洗練をした上で、みづから蜀山の許に赴いて序文を囑したので、その「載セテ酒ヲ」といふのが、すべてに如才のない蓼太の交際振りを見るようである。『蓼太句集』は前記三傍が天明五年に編集した二編、及び歿後寛政五年に同じく、三傍の拾遺した三編と合せて三部存在する譯であるが、蓼太の句の傾向を知るにはこの『蓼太句集』が一部あれば澤山で、二編・三編は彼の「硯に筆のおほきに似たり」の不感服なものなので、本集には除いて載せなかつた。その方が蓼太の本懷でもあるであらう。蓼太は作者である。俗惡といはれようが、月並者流と罵られようが、中興時代に逸する事の出來ない人物である。その連句の技倆に就ては第九卷の解題に述べたが、發句は蕪村一派の眼前致景の趣を得て清儁なるとは反對に、萬人向で低俗なるは爭ひのなき定評でな

ければならぬ。

白雄句集　寛政五年板　中本一冊

高踏的な白雄は一盃又一瓢その淡泊な生活を詩にまぎらし忘れたので、一洒百錬の評さへあつて頗る享楽的な人物らしいが、内心は限りなき寂寞を感じてゐながら、その感情を自制してさり氣なきを得たのである。彼のこの性格は俳諧の上に再現されて、迫眞的に對境を寫生する事なく、對境はあるがまゝに手を觸れず、たゞ感情の動きを内面的に暗示しようとしたので、客觀的主觀ともいふ可き句が多いのである。白雄はまた感情の純ならんがために内容の洗練につとめたが、その表現に就いて形式的の技巧を求めなかつたので、同語の繰返しを厭はない。あの時代の人の關心した切字の如きも問題としてゐない。白雄が系統的には伊勢風である可き筈で、その支配と色彩とを免れたのは、彼の自由を掣肘する師烏酔の故人となつた結果であるが、蓼太のように一門の宗家となる野心もなく、同派の者との交際もなる可く避け、それが爲め誤解されて惡評を受けたのが、伊勢風と義絶する導火線となつたのである。高踏的な白雄は春秋庵を開いて以後も門戸を張るやうな事をしないのは當然で、俗世間的の事件には一切無關心であつたが、其の門下によい人物があつまつたのは彼の人格の力である「白雄句集」は生前出板する意志はなかつたので、其の三回忌に門人の碩布が發企して、これも門人の巣兆が板下を書き、道彦の序文を得て板行したのである。白雄の号はしら居坊昨烏の舊号をあらためたので、「しらを」と訓讀するのは疑ひないにもかゝはらず、「はくいう」と音讀す可きであると強調する人があるのを聞いて意外としたが、道彦の序文に「しらをの翁」とあるので、「はくいう」説の成立しない事は明瞭であらう。家藏本は上下の二冊であるが、全編四卷づゝ分冊になつた四冊本もたま〲見受けるので、逐

一對校したら假名の異同位はあるかも知れない。

樗良發句集　　天明四年板　　中本一冊

怒じ、家集を出して力量を輕んぜらるゝより、そんなものは拵へないがよいと考へる者が多かつたが、一冊の句帖もない樗良のような潔癖の人も變つてめづらしい。樗良の言葉として或は「むさしのゝ露に」或は「越路の雪に」吟魂をなやまして「言出せることとぐさもあめれど」それも「忘れがちにして」書止めて置いたものもない。「今はたおもひいでんもむづかし」とうるさがつて、頻りに句集を望む門人玄化に「心とめたるほ何百吟かいつけてくれぬ」とあるのが『樗良發句集』の根本資料となつて、その玄化も樗良もなくなつた後、玄化の弟甫尺がさらに諸集から拾遺して編集出板したのである。句帖さへない樗良の句をこれだけ集めるには苦心を要した事と思はれる。樗良の發句は茶人の庭の飛石一つの置き方も約束に叶つてゐるように、そつのない言ひ廻しで、どこといつて點のうち處がない上、一脈の細みもあり、蓮の糸のような巧緻さを持つてゐるが、平板で變化のないため、伊勢風を蟬脫したものとは評し難い。京都で蕪村一派の知己を得たが、樗良自身の勢力は中興諸派の中で最も微小で、門人にも振つた者は出なかつた。『樗良發句集』は別に編輯した樗良の附合及び文集と共に『樗良三部集』として合冊した後刷本が行はれたが今はこれも尠い。又、樗良の句集にはこの外、蘚室久安編の『八瀬』と題して元治元年の板本があつて、句數は相當增補されてゐるが、出板の時代から見て天明板の方により多くの信用が置かれるので、『八瀬』の方は見合せて本書の覆刻を決定したのである。原本は和露文庫に藏するので、天地の二卷、題簽も完全して元表紙の初刷本である。甫尺の序、秦夫の跋、樗良の行狀の一部を傳へてゐるが、此の二人とも伊勢に住せる樗良門人である。

俳壇の系圖の上で青蘿を美濃派に入れて取扱ふのは當り前である。青蘿入門の師江戸の玄武坊は、支考の直系廬元坊の弟子であるからである。その一事で以て中年以後の青蘿が、美濃派に反抗した如くに考へるのは誤解である。青蘿の玄武坊に入門したのは十三歳の時で、彼が江戸の酒井侯から姫路の本藩に引移りを命ぜられた後まで、玄武坊門下にあつて美濃派に心服してゐたとは思はれないのと、青蘿が蕪村その他に接近して中興諸派の運動に加はつたのは、俳壇の形勢に刺戟されたので、美濃派の非を意識して蹶起したものとは考察されないからである。青蘿が明和五年、明石に蛸壺塚を建立した山李時代、その青蘿と改號してからも美濃派とは沒交渉で、『青蘿發句集』の中にも美濃派臭味は全然ないといつてよい。それと同時に青蘿の中興俳諧史に於ける位置は蕪村や樗良より遙に後輩で、几董か、やゝ下つて月居あたりと同格と見るのが公平であらう。二俳家の允許で栗の本となつた晩年の青蘿を考へると、その事が一そうはつきりして來る。『青蘿發句集』は後の門人で栗の本を繼承した玉屑が編集したので、江戸の成美及び江戸談林から義絶されて中國流浪中の花顚の序があるが、二人とも青蘿の親友といふのではなく、玉屑の知己で序文をたのんだ譯であらう。青蘿の句は流石に其の交際した人々が中興時代の俳傑であつたので、錚々たる天明調の響きをつたへて、後の月居のごとく俗了しなかつたが、彼の勢力が播磨一國に限られたので、全國的に反響を與へなかつたのは殘り惜しくも思はるゝ。原本は遠藤氏舊藏本により、校正の際は更に和露文庫本を借覽したのである。玉屑の序に「栗のもと青蘿は句集前の卷とし」とあるが、前編だけで後編は終に出板に至らなかつたのではある。

青蘿發句集

寛政九年板　中本三冊

半化坊發句集　天明七年板　小本二冊

北越に蟠居した美濃・伊勢の餘風を打破した闌更である。古蕉門の逸事に感激して、その高潔な心境に徹した筈の闌更である。彼の作品の甚だしく通俗的なのは不審である。同國麥水の『新虚栗』が餘りに古調で佶屈なため、反感的に平明な調子を專一にした結果が流俗になつたのであるか、花の本の允許を得て世俗的宗匠になつたので、彼の趣味が一般的に低下したためでもあるのか、『半化坊發句集』に收めた句はまだ〳〵よいとして寛政以後は殊に嫌味が多い。麥水の序に舊作としてはぶくとあるが、「宵闇波に眠らんとすれば月我に照る」のやゝ虚栗的な句調を持續したならば、晩年のあゝまでの俗情にはならなかつたであらう。復古調の成功して闌更も、其の一人にかぞへらるゝ天明年間に編集されたものとしては『半化坊發句集』中の句と雖、推讃の辭を呈する譯にいかぬ。半化坊は闌更の別號である。麥水は「我半化翁も、其はじめ中比の風に遊び」加賀の淺野川に二夜庵を結びて三年、「古調の爲に」その夢を破られて復古に志し、諸國を旅して洛東山に芭蕉堂を構へた事を記して、麥水自ら闌更の「年比よみ捨られし」句を拾ひつどり、「好士の爲にもやとおもふ折ふし」同門の車蓋が「東行脚のかへるさ、四山に一嚢をひらき、師の句ある事を告る」といひ、舊作の數句を除いて「千餘章に及ぶ」と序に述べてあるので、闌更の自選ではないが、その一代に渡つての句集と見て差閊ないもので半紙二つ折の二冊本である。これも和露文庫の藏本で、奥附に「半化發句集後編嗣刻」とあつて車蓋の編集で出板の見込みであつたが、後編は出板にならなかつたようである。原本は流布の範圍が狹かつたものか、『中興五傑集』のようなものも本書によつたとは思はれないし、明治の活字本に覆刻された事を聞かない。闌更の事は『落葉考』の解題にも一言して置いた。

曉臺句集

文化六年板　　中本二冊

蕪村をかた昔の詩人といふならば、曉臺はまた書の歌人と評したい。この二人を對句として品隲するのでないが、曉臺の句を鑑賞するには蕪村と對照して見る事が必要である。蕪村の線は太くてつよい。弓の弦をぴんと張つたようである。曉臺の線は弱さうでつよい。筬の糸の一本々々が緊張してたるみがないようである。蕪村の着眼は遠心的である。曉臺の焦點は求心的である。其の構圖は蕪村は寫生的であり、曉臺は印象的である。境涯から見ると蕪村は江戸座から出て京都に夜半亭を結び、曉臺は美濃派から分れて同じく京都に龍門を構へたので、蕪村は流浪困苦したが、曉臺は安易平坦であつた。書債を負うて死んだ蕪村と、二條家から花の本の中興を許されて俳諧一道を以て世を終つた曉臺とは、現世的には曉臺の方が幸福であつた。蕪村に几董あれば曉臺に士朗ありで、門系はほゞ同樣であるがこれも曉臺の方が勢力があつた。『曉臺句集』は蕪村の研究に追はれて看過されて來たが、かうした二人物の比較對照からいつても、もつと重視されなければならない。士朗の序文によると、編者臥央は「俳諧三傑集」に掲ぐる曉臺の六百餘句中、過誤の甚だしきもの百七十餘句ある。「いかにして其謬を正すべき」と慨歎したので、士朗は「暮雨巷句集を木にえらば、世おのづから其訛を知べし」と、臥央、師在世の時その許しなきをいひ、士朗「其事ありてそのことをなす、はゞかりなかるべし」と勸說したので、亡師曉臺の机下の一冊子、自筆の句帖を以て編集開板したのが此の「曉臺句集」二卷である。家藏本と共に和露文庫の板本を借覽して校合したが、和露文庫には別にその稿本を所藏するが、板本の方が類題別に整つて、讀むにも便利である事を思つて、稿本は一部分をたゞ參照したゞけであつた。

葎亭句集　享和元年板　中本五冊

俳句の正しき鑑賞と正しき批評と――その精神を俳壇に招來したのは葎亭嘯山である。嘯山が一片の學識のみで俳句を理解し得なかつたなら、かの『俳諧古選』の如きも支那詩文の評語を轉用したものに過ぎなかつたらう。幸ひ嘯山は俳諧の愛好者だつた。中興各派に關係のある宋屋に師事したので、その時代精神ともいふ可き天明調に觸れる機會が多かつた。蕪村より太祇の方に接近してゐた。『平安廿歌仙』で見ても連句の呼吸がしつくり合つてゐる。嘯山の評語は漢文ながら流暢で誰にも解るものであつたのが、彼の古選を啓蒙的の意味で有名にしたのである。『新選』及び『獨喰』がその後出來たが句ばかりで評語がない。尤も『獨喰』には漢詩風の批圏が附いてゐる。嘯山その人の句は『葎亭畫贊集』正續でほゞ窺はれるが、彼は古い俳書を讀んだので、後年は俳諧を字義通り滑稽と解するやうになつて、可笑味を覗ふ事に興味を持つたので、頗る不感服のものになつたのは惜しい。『葎亭句集』は歿後その男李流の校定で出板されたので、その可笑味もそんなに目につかない。藝術的に蕪村や太祇とは同視し得ないが、闌更あたりより價値の低い句集とは思へない。別名を『鈴鹿越』といふのは嘯山が太ゝ講に加つて伊勢參をした紀行に、冷泉爲村が題號を與へたので、その紀行を第一卷としたからである。第二卷よりは彼の發句集で四季に類題してあるが、詞書のあるものを除いたので、嘯山知己の消息を知る資料とならないのが遺憾である。三宅氏、葎亭は別號である。嘯山、滄浪居、橘齋の諸號を有し、跋に「書法奇雋」とあるように能筆で、且つ詩に巧みで『嘯山詩集』の遺稿がある。俳諧は前述の宋屋門人であるから、蕪村一派の巴人系統と親類筋にあたつてゐる。詩人呑響は嘯山の女婿であつた。

葛箒　一冊　嘉永二年寫

僅に麥水の句集である。麥水は伊勢風の平話調を詠んだ後に、かの虚栗調の復古を叫ぶ事になつたので、寛政二年に遺弟其叟の板行した追善集『落葉かく』には前躰・後躰として彼の句境を二期に分けて百句かゞげてある。麥水の句集としては此の『葛箒』あるのみで、『落葉かく』の如く後躰即ち新虚栗時代の作と思はるゝもののないのは、麥水の本心に添はないかも知れない。併しこの『葛箒』すら安全に保存されて來たのでない。青城の後記にあるように屏風の下張から發見されたのである。金澤の俳人青城が古い屏風を張替へるつもりで、紙を剝して行くうちに其の張交ぜの反古に、發句の書いてあるのを怪しみ、熟視するとまさしく麥水手記の句帖である。「こはよき得ものを」と喜んで、汚れたるを洗ひそゝぎ一冊子としたが、既に屏風に張られる位であるから、ところ〴〵缺丁が出來て句帖の體裁に復し得なかつた。『葛箒』の發見は全く偶然で、もし青城の目に觸れなかつたなら、永久に屏風の下張になつてゐるか、破毀されたか、孰れにしても其の運命は決定的であつたのである。青城は大橋氏・加賀金澤の人で明治になつて後も存命であつた。本集は青城の發見した『葛箒』の寫本で、藏月明氏の少年時代に手寫して置いたものを借覽したのである。四季に類題された原本を屏風から剝して一冊とする際、數枚の綴違ひをしたと見えて、春の部にある可き同族の部が夏の部に混入して居り、春・夏は完備してゐるが、秋・冬は類題の本句集を逸して旅の部ばかりで句數もはるかに尠い。藤井紫影氏の『有朋堂文庫』に收められたのは、此の寫本とも相違した別本のようで、順序幷に句數も同一でない。校正の際は『有朋堂文庫』を參照して、明らかに誤寫と思はるゝものは訂正したが何意の孰れにも解さるゝものは寫本通りにして置いた。

素丸發句集　寬政八年板　中本二冊

江戸へ、いつのまにか闖入した美濃・伊勢の俗談平話が、江戸座の下り坂になつたのに原因して、『五色墨』時代から侮り難い浸潤力を以て、蕉門・葛飾派を同化した事は前卷の解題に辯じた。蓼太は俳論に支考の說を失敬したのみで、その句境を侵される事はなかつたが、葛飾派の素丸になると、まぎれもない俗談平話で、俳系は素堂の直統であるように高く標榜したが、句作の技巧は全く田舍蕉門化したと評して過言でない。その方が人氣に投じたと見えて葛飾派は世間的勢力を得て、江戸及び近國へ傳播して美濃・伊勢の兩派を地方に於て壓倒する立場になつた。素丸の句集を『天明名家句選』に收めるのは藝術的見地からは多少憚かられもするが、歷史的に同時代の江戸俳壇を見るには、その勢力と影響を看過し難い事も認めねばならぬ。素丸は溝口氏、『五色墨』の素丸が馬光となつて後、その二世の号をつぎ、且つ其日庵三世として葛飾正風の宗家となつたので、幕府に仕へて御書院番を勤めた家柄が、俳諧の宗匠には過ぎたような感じを以て畏服する者もあつたであらう。『素丸發句集』は門人絢堂の編集したもので、春夏秋冬の類題別で、その季每に目錄があり、讚賛・神釋・餞別留別・懷舊追善の部を季末に別錄して、句集の體裁は頗る整備してゐる。素丸の句に對して嚴正な批評を下したので、人格的にも疑はれるかも知れないが、素丸は學識ある士で芭蕉の發句を詳解した『說叢大全』の如き立派の著書があつて、名家の躰面を傷けるような人物ではない。一茶が素丸の意にそむき、葛飾派を勘當された說もあるが、一茶は素丸の同門竹阿の弟子であるからその事は信じられない、序ながら附記して置く。（勝峯晋風）

日本俳書大系 第十一巻 天明名家句選 目次

筆蹟

蘇明山莊發句藻

米翁

句藻序

昔誰やらむが硯銘をよみ侍りけるに、硯ト與ニ筆墨一氣類にして獨天壽不ニ相近一といひ、はた天壽は數也といへるを、つら〳〵おもひめぐらし侍るに、物を不朽に傳ふるにおいて、三のものゝちから、ひとりもかけ侍りては、こととゝのひ侍らず。さてそれをなしおゝするにいたりては、今やひとり筆の壽をかぎりしられぬものとなん申侍らむか。されば　月郎公、はやくよりなしおかせ給ふける寧樂の都のさくら、武藏のゝ月はことをまたず。くはゝれる春の猫も、しやくしも、やらひすて給はで、時につけつゝものし玉ふ陽春白雪若干句、みづから彩毫をふるはせ玉ふて、かいあつめさせ玉ひ、小生をめして、雨夜のつれ〳〵ならむ折ふし、よしあしにつけて踏ニ襲左典厩一し、かたはら、藤黄門の日を經て染る青柳のいとぐしを、ときまいらせよと仰らるゝより、おこがましくつら杖に曲レ肱、めがねに鼻つまゝせ、うちかへし〳〵し侍るほど、邪の手すれ、于思ゝゝと毛ぬきもてぬき盡すべきものかは。髮そりにそりすてまほしきばかり、もゝに一二つを除きつ。それとても世のわらへなるものには侍らねど、よきが上にもなほさらにと、老婆心やむにやまず、かくゑらび侍るが、おそらくはひがめにあやまりやし侍りつらん。

とぢふみやいとゆふ長く見れどあかず

としるしつけ侍り。かのふみに添てまいらせければ、日あらず上梓の功なりにき。是一時の佳興にして、强て不朽に傳へさせたまはんとには侍らねど、おのづから滑稽の龜鑑とはなれり。於レ是乎かの三の物の殊にながく傳はらむものは、管城子の壽に侍らずやと、其命毛のみじかゝらぬためしをつゞくり、序と名づけ侍りてまいらする ことしかり。

于時天明四年甲辰春　　城南　洪珠來謹撰

發句藻序

(嗒)
塔焉としてつら〳〵世の風雅をさぐるに、陽炎のおゝ空にとりとゞめず、いな妻の雲間にうつり行て、何かまたそれならん。さればほどにつけ、おり〳〵の花もみぢに心を染てひとりごちたらむこそ、限なき友とも云べき。

(後)和うたの高みにより、かの目に見へぬ鬼神を泣しめむ沙汰ぞ及びなかるべし。只いもとせの中だちにのみもて行もあさましくや。投から歌のかたび過て、平仄とやらんもむづかしう、對・不同はたうるさからむ。そも〳〵俳諧は和哥より出て、其源久しく猶ひろくもあり。南花實をそなへ、作法止しう、一句またをかしくもあれさるを、世の心のわたくしにもてひがめる人の、鄙言・俗話をはぶかざる姿に寄て、只くだれる道にのみおとしめ哄せむ事かは。三綱・五常はもとより、世法よくかなへる業なりかし。貴となく賤となく、雨雪のつれ〴〵を忘れうちかたらひ、淡きと何にか比せん。一机一室の上には、千山万水をおもひめぐらし、遠つ八嶋のさかひも眼裏にちゞめ、袂には露もはらはず、草鞋のほつれもなく、あらぬ湍山を心に奔走し、秋はつる案山子の身の果、章魚壺の底のそこ迄尋もとめ、みる物・聞もの無碍自在にして、其情及び詞たれらん。おのづからの際には、其徳もいかであだならむ。幽なる家居しづかに、はかなき身のくいもなくて半時を樂るなど、俳諧とこ何にどもたき益なしごとゝばかりはいかむ。淺きに似て、いと〳〵深き道なりけん。大人若うより此道に一歩を起して、素子・八樂の道しるべにしたひ、鶴をよお解をこへ、塵をうかゞひ、細に入て問尋し、春のうらゝかなる、秋のさびしきに付て俳筵をのべ、其餘かれにひとしき輩つどひ集め、句ゝに頭をひねり、工夫に首をしびらかして解脱せむとするに、二師世をふり捨行、いかむせん、もたる杖うしなひ、むすべる菜あと絶にたり。さるからいとゞたゆめがちに成ゆけど、あら玉の年のあしたに剛せしより、かしこき君をことぶき奉り、身をも祝そめ、春風千里に光わたり、柳さくらのこびさかえたる前栽に谷の底をさらし、例のさみだれ降しきり、ほとゝぎすおり得顔なる比は、たれこめて尙も沈思に睡をさそふ。秋の雁江天に聞へては、書樓に足を爪だつ。名に滿る月光にうそぶきては、すめる隅田川・くまなきむさし野をおもひやり、あられ亂るゝ夕・雪つめるあしたは、炉邊に硯の氷をくだく。又一とせおきづゝ故郷へのいとまくだし玉ふる旅すがらは、ふじの雪・淺間のけぶり、をかしとうちながめ、ある

は女川のわかなに春色をあじわひ、あるは木曾のまそばに旅情をやしなふ。美濃むまや路・い賀の山ごえあまたゝびしつゝ、かくてしるよしは、花の都に隣るものから芳野・たつ田遠からず。春日の里いやちかく、三輪の神がき・初せのみてらも餘所ならねば、おりごとにぬかづき、そこら耳なし山のみゝなれたらん處〳〵まで見めぐり、常に此ものゝ滑稽を提撕して、とさまかうさま行かひ、いとま少きにも、事として倏時なくあかしくらしつゝ、朝に文をとゝのひ、家に武を講ずるなど、何くれと五十霜はた弓を擲ち、世をわすれて、ひた山里に引籠り、月花三昧に打傾けることこゝに十有餘歲、わくらはに訪ひ來れるは、洪珠來のみはやくよりのちなみに、心をも合せぬるはとて、定めかねたるくま〴〵、いさゝか事迄語かはし侍る。予閑おほかる春の一日、梅が香ふかく霞る月村所の柴扉をうかゞふに、ふどのに數筐をひらき、依然として端坐す。やがて見おこせていふ、是はこれきしかた物したる俳調、ものさがしのまぎれ取出たるなり、つどひてよと有に、いよのゆげたの數かさね行うちより、其折のふとおもひ合らるゝあり。亦まれ〳〵をかしと見あつるもあれば、さしものくさ〴〵、終に揩魚が糧に投ぜんもくちおしからむ。いでやこゝろに世ゝの人ゝをかうがえ侍るに、是かれ通はして道〳〵あまねかれと、只みぬ諸(書)こしの人すら面影もまの前にそふばかりおぼへ、心こと葉の忍ばれもうらやまれもすれ。皆〳〵おしなべて、絶ぬ鳥のあとのみ、えもしらぬ昔のかたみにして、盡せぬ世ゝの寶とも是なむいふなるべしなど、そゝのかし聞ゆれば、さかし、さればよ、露の世の生涯、何かはきえずもあらん。實や其世に名もうとからぬすら、しのばるべきかたみもおかず成行もあれ。せめてかゝる有りとだに、後の世にはかなき名をも詞をもとゞめむにはと、思ひ寄ぬる心のいさおしに、よきあしき共に知らさで、例の洪に挖し、ゑらび出つるを、みづから走筆をくだして、同じうとゞむと也。さはいへ俳諧の風姿のかはり安く、きのふにけふの趣ありて、明日香川の淵瀬にもたくへつべく、まいてその世の花に愛うつり、此道に入やすしとみて遊ざるもなく、物定の師と呼るゝ輩迄、げにや野邊のかつら・

林の木の葉にして、其好るやうもおなじからず。いはゞたゞ世の変りゆかしとて是にもとづき、いとなみ世に盡てこれに入る有。是にいりて風雅をうかゞひ、風雅に世をふらんと是にさまよふなど、みな山ぐちにイむらむ。ひたすら世の中の俳諧に遊んで、風雅をこゝろにわびしまむとするはた〳〵おほからずとするも、かゝるも風雅を出されば、よし、さはすつる方、拾ふかた、又一かたならじと、やがて梓にちりばむることは成けらし。後の好士らが手にふれらんよしもあらば、大人の此志の時を得て、いかばかり面おこし侍らむ。返〳〵かゝるほゐたがはで、水くきの沫ともきへ行ず、人しらぬ山松の名はうづもるゝとも、その葉の散うせずして君が代の長くとゞまり、竹の千とせの春秋をかけて、露しのばるゝ一ふしも侍らば、さばかり此道に遊るいたずら事も、などや空しとおもほへざらましかも。

かゝる人わらへのこと加へぬるは、先に集いまだしきほど、此おこりをとけよと承るに、ありのまゝを記し付参らすれば、是を糸ぐちには物さめ。其まゝ蘇明山莊本句そうとよべ、是はこれ世とも風雅とも思ひためらはず。年比公私のいとま〳〵、心の顯るにまかせて、只(亡)忘師の口まねにひとしきのみ。その風情時めく家に散らんもはぢかゞやかしけれ。また小子が発端の詞筆おこなるをも、みむ人ともにゆるさしめ玉へかしと、ことはりいへるを唯してしるすとになむ。

于明甲辰夏日　　城東桂花園星羅珠成書

蘇明山莊發句藻

春部

改正

初富士や八幡大名見あげ皺

鸞鳳の羽裏うつくし初日の出

(太)大郎冠者けふ元日ぞ鼻の穴

片肌と襌と井戸の御慶哉

元日やにらみの助が梳油

かはらず君恩をいたゞきて

初時服手にしだり尾の抱心

知命の年、仕へをかへして

君恩にまづ元日の朝寐かな

宿の春烏帽子の夢も五十年

隱者氣の出ぬも愛たし宿の春

兒輩みな官位たまはりて、此春は直垂・狩衣ほこらかにそうぞき、初春の壽き申さんさて、此山里へもうち連つゝ來れるさま、御めぐみの身にもあまれるをよろこび謠ふ。

子寶のいはれとけたり今日の春

舊さしは月くはゝり猫も抄子も、さいへろこさはざのごさく、いづこも〱むまごあまた生れぬれば、

孫の顔行さき〱に花の春

初朝日老を養ふ脊中かな

此三年ばかり、双白鶴庭樹に來りすみ、雛を育し。人を怖れず、飼たるがごとし。

たつ春や鶴の伸する宿の松

万歳

才藏になじみのはやき童哉

喰摘

喰摘へさそひ出るやまめ鼠

梅

鶯の喰ふにはあらずむめの花

北野の神詠に寄る。

むめ咲や家をはなれて三四間

竹の戸や梅に小さき草履取

御床机や芝の正面松のわき

三里丈みす卷れたり御所の梅

流しけり御詰の外に梅の枝

雪をさそひし筑波颪も、やゝ春風に吹かはり、軒端の梅もほころび初て、人もかすまへぬ山住も、やぶしわかざる長閑さに

晝ははや裸巨燵のむめ見かな

我すむあたりは

梅若菜巢鴨染井のすべり道

神風や伊勢の波臣がもとへ、無音房か頭陀などめけるころ、發句せしさて梅のすりものを、西吹風のたよりにおこせたるを、無下に見てやまむも本意ならねば、發句かきて贈る。

さま／＼の梅に驛使の薫哉

閑居春興

我庵は鶯ござれ梅御座れ

よき人や羽織かさねて梅見舟

梅の風今日剃たてのぼんの窪

澤庵の塩まだからし梅の花

棒ほどの梅の薫りや針の穴

嚔ゝはし居初めや梅の花

銀鷺のもとより、

閑居さぞ國の鶯恋の梅　と申こされければ

梅鶯共隙ゝはあくびかな

鶯

世捨酒さてお肴ははつ音かな

鶯がこはすべらせつ雪解道

黄鳥一聲酒一盃

二盃めは隣の藪のはつね哉

柳

左儀長の煙につゞく柳かな

まだ暮ぬあすか井殿の柳かな

彼岸　丸かれや彼岸團子の娵姑

雪解　頭巾きてふみこむ俗や雪解川

霞　遠がすみ笊程黒し三上山

關札や霞む驛路の水尾つくし

米洲がもとより白魚をおくりけるに

白魚の眼ばかり黒し春のゆき

陽炎　糸ゆふや六郷の家根さとのやね

陽炎や此跡されてうつされず

雉　雨の雉離宮の築地倒れけり

蛙　聞すさむ我も蛙も眞むき哉

ほれなき蚯蚓〱

力なきかはづの身すら軍哉

脊松のもとゝり、

烏より早き櫻の夜明哉　といふ句を

見せたまふ。その弟にて

烏より遲き蛙の日くれかな

雜春　東風とくやつり花生の薄氷

目印の木瓜咲にけり村酒屋

十牛賛

野面もうら〱と青みたるに、世の業も忘れはてゝ、をのれ〱が生涯を樂むもめでたし。

草笛や人牛ともに春ごゝろ

園中の土筆を茜堂へ贈る。

喰ふ程にこそ隱家の春の色

彌生末つかた、菊貫の主、はる〱此山里を訪ひたまふ。かの清女が杜鵑聞んとて北山里へ行しに、下蕨を調じてあるじまうけしたりしを、都人のわらひ興ぜしもかくや。

大名に蕨おませむ世すて酒

蝶　賣きりて蝶に別るゝ花荷哉

汐干　莊子曰、藏天下於天下。

大海を大海がのむ汐干かな

唯今海路に赴け。

僕が脊を五丈の鰐や汐干狩

雛　傳奏と吾妻へくだる雛かな

似たもの丶中にも雛の夫婦哉

犬の前犬つくばひの雛見哉

鼻かけは下段にならぶ雛かな

雛の兒卯の売に目鼻かな

宗盛を餓鬼大將やゆやが雛

みな人にまいらせあげて尼が雛

晋子が罍なすらせし梅の頃もすぎのし

御祕藏に鶯をかゝせて雛見哉

人かずに檜扇たらぬ雛かな

君の臣をつかふ事、薪を積がごとし、賈誼がいさめを思ひ合せて

新雛ののしあがりたる上座哉

雛幕や此御やかたの桃華源

宿下りを賓人さねや乙が雛

雛さまの河原院や丁子釜

花満り池を鏡の女子たち

あはれ親なしとも花の子順禮

上野にて

花一面中堂ひとり舌を吐く

藩城の東南なる内山の永久寺にて

山寺や法螺貝にちる花もなし

ゑいとう〳〵田樂火鉢庭の花

毛虫わく共いろとしも櫻かな

櫻

銀鷺の許より、吉野の種とて櫻の花が筒にいけて、

先達に見て貰ひたき櫻哉　といふ句を贈られければ

御祕藏を木守かつてや櫻がり

ねがはくば花のもとにて春死なん、と西上人はよみたれど、予は

散らず死なず花の下にて晝ねせん

夏部

卯花　御むかひの奴黑主はな卯木

若葉　所詮なく若葉喰ふたる女かな

岡釣に毛虫あびせる若葉哉

闇の夜は出る森も若葉かな

柊を鬼のあなどる若葉かな

焚捨の草鞋ふすぶる若葉哉

郡山に夏をむかへて

喰はず聞かず目には素堂が若葉哉

雜司谷にて

神鏡の底まで靑葉若葉哉

牡丹　御亭主を驕者とや夕牡丹

畫賛

むかし男の俤を今も殘して

華も葉も冠の巾子や燕子花

ほとゝぎす　ぬり桶のうしろ姿やほとゝぎす

子規占は雨なり月の暈

卯月の末つかた、有明の月影いと覺束なく、時鳥しきりに啼く。

枕紙に涎かけたかほとゝぎす

上野に詣て

靑葉若葉大師やいづこ杜宇

さみだれの晴間なき頃、往來の人の、吉祥閣の茶うる翁がもとに雨やどりするを見て

山門に耳をあつめて子規

我が上館は、西は日吉山王のしげみ深く、愛宕の山の梢より南につゞく。

杜宇雨の火の見の如意が嶽

晴間なきさみだれの雲間の、すこしあかみたるさへうれしきに、折ふし一聲音づれければ

月を少し目に掛たかと子規

幽人眼覺時

杜鵑啼や加賀どの和泉殿

月か雨かさは卯花かほとゝぎす

松魚 吾妻にて梅の花とは鰹かな

大宮のうち迄聞げ、その
御歌もおもひ出られて

御曲輪の内迄鰹〳〵うり

あかすも有哉とおぼめきて

猶めづらこゝらの年を松魚哉

初鰹祇王召されし初めかな

左拶右青背押やりて鰹哉

蓬萊山の賛

はつ松魚是も蓬が嶋つもの

竹の子 蝉の筍守がめざしかな

四つ道に筍盗む座頭かな

筍な在轉に贈る。

筍や夢ほど老がちから瘤

捨人の役は竹の子めぐり哉

また珠來に贈る。

筍や瓜木の道の手むだごと

かしは餅 いとし子の手の筋見ばやかしは餅

鶯のすむその栫とはかしは餅

人眞似に猿もさするやかしは餅

端午 そとに策て薬降夜の乞食哉

はつ幟一日視のはなの穴

米道、男子をまうけられし時

御幟の赤きを見れば金太郎

清水 犬蝿をふりこぼしたる清水かな

晋其堤に袂六曳へ

蔭雀の中に鮮や捨やかた

雑夏 閑子鳥似合ぬ俗の胡弓哉

紫陽花やのろま遣ひのさし扇

酒中花は萍よりの案じかな

擇題宇治螢

へんぐへに墺とられな螢狩

富士詣 時しらぬ布子羽織や富士詣

後水尾の御製によりて

白瓜も塩のひかたのあつさ哉

蚊 乘掛の鼻で蚊を追ふ合羽哉

五月の末つかた、暑さいと堪がたき夜、(幃)蜩の外に蚊の聲かしまし。昔梁の孔稚珪が蛙聲を愛せしことをおもひ出て

納涼 蚊の聲を鼓吹にかへて寐ぬ夜哉

町すゞみ十歩に團子五歩に瓜

涼船尿念じたる座頭かな

御門の御日には、龍田河の紅葉をにしきと見たまひ

よし野丸人丸が目に雲五色

秋部

七夕 道哲へ横すぢかひやあまの川

寐勝手の後ろさびしや銀河

盆 蜻蛉つれ我も昔は盆しらず

白瓜の馬の行衛や佃じま

朝顔 朝皃の莚の胴はこぶし哉

曉の露をふくむ花のつるもの、あやしの玄關に東しらみたるは、ゆやがもとのつかひかさなかし。

朝がほやまいりて卯薬とり

ある人、句合い点をこひける時、桑末に

句合や西瓜なりせば擲き見む

老がね覺の曉を待いけて、閑窓を押ひらけば

霧 一面夜明がらすを目鼻哉

魚游が孫女を預りし頃、柴扉を音づれければ、萩の枝にむすびつけて

預りて風にも見せぬこはぎ哉

一度女の手より、ものを取れば、五百生が間手なきものに生るゝと聞けば、此虫いかなる僧の後身ぞや。

芋虫や女の手から何とりて

日ぐらし 蜩の小便ふかんほんのくぼ

荏苒として秘にもなりぬ。さなきだに物さびしき隠家なれば、朝な〳〵在五中将の、起ていにけん朝ぼらけ、もおもひ出らる。

露秋霧ひぐらし寒き朝戸哉

畫つかたは

その聲の無常や責る秋の蟬

夜にもなれば

蟀や秋の一夜を下駄の下

すゝき　日照雨拏の住家は花すゝき

ひき船や尾花の浪の首ッ丈

雁　雁の聲木賃とまりの片ゝ寐

園中の芋を米洲へ贈る。

君がため我衣手は芋の露

公桒、鯊釣に行しとて小鮮を贈らる。

鯊釣や御手を戴く竿の露

十五夜　名月や心の牛もねそべらし

朝觀の日数ちかづきぬる頃

いでや月團子喰ふ里五十三

今宵一輪満り、清光いづれの所にかなからん、と口ずさみて

足で太鼓尻を鼓の月見かな

初老に

四十何くらがりどこにけふの月

山姥は腮に杖つく月見かな

名月や式部が肘のつくへずれ

染井の山里へ退隠の後、草村ごとの虫の聲も、おりからの情にかなひ、心すむ幽居のさまも、太田持資の詠吟には事かはりて

海遠く松原近き月見かな

大和哥には、海の原振さけみれば、と思ひなのべ、詩には牀前月光なみると慷慨を吐く。

名月や頭を低て三笠やま

名月や物くさ太郎居ざり這
七賢の竹に生るゝ月見かな
名月のいよの湯桁や栗團子

月は昔の月ならねば、秋も昔の秋にあらず。我身ひとつとよみぬれど、歳〻年〻人同じからず。

本の身は松ばかり也けふの月

白雪園主人より消息あり。良夜は宵のほどは雨さへこぼれしが、忽清光にかはりし卽興など見せものしたまふ。返事に、庭の面はまだ乾かぬ、の古歌も思ひ寄せしなど書續けて

賴政の氣でさりげなき月見哉
寐よ〳〵と曉の鐘を月見哉

花は盛に月は隈なきをのみ見る物かは。今日を最中の秋しり顔に各〻興趣を設け、盃盤取ちらし、糸竹の音いろをかしう調べ合たるなど、世にあるとある今宵の遊び、みなまことに月を賞する徒にあらず。

月見する人に月見る人はなし
名月の滿珠投たり上總沖

寛美が柳橋に新居をもとめし時

家見客最中の月を上座哉

壬寅の秋、良夜蝕なりければ

名月の中の曇や世界の圖

近江の玉河の萩の文臺の裏に

文臺に色なる波や月の下

野分

武藏野はむさし野程の野分哉
吉原を宙につゝむで野分哉

栗

燒栗に大藏流のあぐら哉

冬映へ園中のくりを贈る。

路次下駄の跪くさきやこぼれ栗

珠來、金澤紀行

瀨戸の秋我も畫中のあたま數

初だけを閑中にさりて、在轉に贈る。

秋もはや終初茸夢ばかり

此かへしに

夢かさよきのこたふべる露の恩　在得

さかや聞へし。

武田長春院、山住なさぶらひ來りし時、初茸取て參らせんさて、かなたこなたもさめしかど、あへにくに求め得ざりしに、その明る日十ばかり出たりしを取て贈るさて

初茸や夜の間の雨のこぼれ物

たけ狩

是させと尾花招くや菌がり

長月の頃、銀鷺、公栄など伴ひ、隱栖を訪ひたまひければ

村酒や鴈も紅葉も亭主がた

菊を出格子にいけて南山をみる。

此虻の後更に虻なし菊の虻

あたり近き村落の菊を見めぐりて

酒の香や虻をさそふて菊めぐり

秀國が菊見に來りし時

心ある日を待得たり菊紅葉

返しに

蝸牛秋に長居をなそれかな　寸圃

十三夜

栗むしの栗は有けり十三夜

月に問へ其夜此夜の八仙歌

鳴蛬に啼蚊すくなし十三夜

足袋の色も黄菊白菊月見哉

秋もやゝ更行山里のさま、五柳先生の田園にもかなふべし。

松菊に下戸を痴なる月見哉

中秋は曇がちなれども

十三夜雨月の姥が機嫌かな

今年は太郎より三郎・四郎迄たかき位給はり、玉敷のあたりを立ならす事、類ひまれなる君恩を忘れざれど、膝下に並べ置

て
子ども見よ滿ぬ教へぞ十三夜

致仕の表奉りし日、九月盡なりければ

此夕ぐれ大名と秋の名ごり哉

西郊に出て秋を惜む。

三夕の果の果見る野ずゑ哉

秋の盡る日、珠來を伴ひて園中をめぐりて

秋も終鳥見けしつ雲の末

冬部

時雨　馬の蓑西日さながら村しぐれ

水海に見るや時雨の尻かしら

閑栖卽與

富士を軒端筑波の時雨ぼんの窪

庭の殘菊を公來へ贈る。

殘菊やさらでも虻の喰あまし

木がらし　閼伽桶に凪氷る月夜かな

木枯に九輪つれなし七大寺

枯野　吼つきて犬の目赤き枯野かな

火繩の火藥にほしきかれ野哉

蓑かりて我を句にする枯野哉

草よりも人目ははやく枯野哉

落葉　仁王はけ堂守迯て落葉哉

大根曳　朝比奈が尻のひゞきや大根曳

惠比須講　夜をこめて鯛のそらねや夷講

冬籠　蘭菊に馴染返しつ冬籠り

大素より、園池の事など思ひやりして、

芦眞菰枯ても鴨のたち居かな

といひ贈られしに

冬籠鴨にくれたる芦間哉

爐邊の句

家内寐て中〻寒き巨燵哉

はね炭に小野共云ぬ圍爐裏哉

帋子

一升は炭に掛しあはび貝
川よりも炬燵にはまる紙子哉

光陰に驚く。

質をさけて慰にかへりたる紙子哉
いつのひま我に似合し紙子哉

老生ご靜なる山居

風か人か柴の網戸の干菜哉

火桶

火桶抱き帋子を脊負ふ姿哉
灰がちに座禪の尻の火桶哉

頭巾

あら不沙汰烏帽子の下の角頭巾

探題二句　寒卯

喰盡て籾にふくほや寒卯

霰

捨猫を憎さげにふるあられ哉

ちどり

一汐に殖二汐に減る千鳥哉
須磨鼠衛も星もふる夜かな
九郎兵衛が城森ゝと千鳥哉

雪

木兎と雀に見せて雪見かな
女房に尻たゝかるゝ雪見かな
猿も子を膝にはさむか夜半の雪
雪御覧太刀持一人手傘哉
雪見廻咫尺千里の隣かな
海原の音や埋れてけふの雪
月雪や更て柱の破れる音

煤とりの日、書齋に入て

舎哲が枕のしなへや古疊
雲あらざるにいか成雷ぞ煤のをと
煤はきや親父が枕ものぐるひ
革頭巾ちよつぺい頭巾すゝ退治
世の塵の煤掃竹は拂子哉

師走の半過る頃、雨夜庵の扉を音信しに、いづこも同じ年の急ぎさて、庭も籬も取ちらして、けさの程疊の表かへたるに、はや大名の來りたまふは、來んさしの吉光ならんとよろこぶ。

置霜にあぐらの跡や疊の粉

年市　年の市黄衣にはふすべの革羽織

老の冷水ながら、もゝひき穿、しい引からげて

さし艾ごまめも年の市交り

餅花　雪に餅に苦は色かはる柳かな

吹風も二十五番や餅に花

歳暮　年の瀬の蛇籠に錢を積上たり

年もはや縮の尻尾の行衛かな

掛乞に門はづかしや于定國

かけ乞もあるか師走の無盡藏

下馬ゆるせ伊勢の御が家年の馬

年の尾を引ずり御前夕化粧

行年や源の内侍が寐ほれ顔

掛こひに佛性ありや趙和尚

目でつかふ小冠者もがもな年の昏

頬ばらぬ昔慕はし年の豆

迦葉は笑ひ維摩は默る師走哉

取て置て鬚剃聰ぞ年の髯

片ゝは夫の足袋ぞとしの足

置頭巾天のゆるせる師走かな

年の瀬の渡りも入間言葉哉

馬にて海を渡すよりも

年の瀬や月のすゑには錢に在

鬼神の心をも和ぐると聞けば

掛こひよ是がよめる歟古今の序

園中假山の絶頂に上りて

靜さよ江戸の師走を高みから

雪の降日は寒くこそあれ、さすさみしは、何所へ逃れても一圓相の中はのがれぬこゝろなるべし。

西行は西行ほどの師走かな

六祖すら足のひまなき師走哉

爰もとへ寄や年浪見上皺

掛乞に憂き中川の宿もがな

年の尾を各ゝ胅にはさみけり

素堂が青葉の空も昨日けふ也。

目に門松山折敷賣塩松魚

鏡餅年の五菜が重荷かな

政仕ののち塵中の苦をしらざれば、身にいたつきの使す事もなきをよろこびて

喰はゞ喰へ百まで年の日の鼠

鵜の座家も年のいそぎかな

世中を何に譬へん朝ぼらけ

昨日の非みな年の瀬のあとの浪

年暮ぬまた月花につかはれん

行年に賣居へはるや伊勢が家

行年に面隱しして木偶つかひ

乾鮭に垂氷からつくしはすかな

夜座自閑

行年に古めき人の薄茶かな

離別部

米道が大和より浪華にかへるを送る。

翌からは七里が外のかすみ哉

米叔が乙未の年二月初つかた、雞が啼吾妻の空を跡になして、玉櫛笥箱根の霞を分、箬竇や鈴鹿の小ぬか雨に笠うち傾け、足曳の大和路さして、影さともに四人連にて首途せしに

吾妻出て吉野見る日や幾日頃

木下架水歸藩を送る。

梅雨晴の富士を御後ろ姿かな

青木三花、なにはへ赴くを送る。

御とまりか御晝休みか雲の峰

一萬坊が菊貫に從ひ、信濃に趣(赴)くを送る。

さつき空淺間かくすな五六日

保牛、信濃へ旅だちける時

馬の脊蹴こむ碓井の若葉哉

米叔がふたゝび大和へ赴しに

唯薫れ江戸な忘れそ富士南

甘棠歸藩を送る。

日和旅蟬ばかりこそ時雨けれ

在轉、卯木咲空に浦嶋が箱根路を越て、はる〴〵の都路に節を曳き、我古郷へも足を留め、泊瀬やよし野の葉櫻見むとて旅だちぬる馬の餞して

蟻の羽も旅も身がるし薄衣

保牛が、たち歸り又もきて見む、さよみし松が浦嶋へ旅だちし其雄嶋のさまやよりも

檜木笠旅にあらすなさつき雨

菊貫、信濃路に旅だち給ふ。予も程なく同じ山路を分ぬれば

花薄君が枝折の御あとから

長月の頃、斗來、宇都宮へ旅だちたまふ時

旅の酒他郷の菊はけふばかり

太郎米徳が初めて大和へ趣く時餞別の辭

帝王の籍田を耕し、皇后の桑葉を採給ふも、下の勞を知召むためとかや。晏子が曾子に馬の餞せしごとく、小むづかしき事をいはんとにはあらず。是より旅のうさをもしり、從駕の勞をも思へかしとて

可愛子に今ぞ見せたる旅の月

菊貫歸藩に

鴈鹿虫秋に富たり御旅日記

片岡菊圃が君より先だちて信濃路へ趣けば、例の心設けの柄短き筆の用意もあるまじ。

惟光が懐ろ輕し秋のたび

古郷へ旅だつとて、西尾の君秀非のもとへ

鴈がねに成て上うぞ三河まで

銀鷺の姫が城へ趣給ふ時

御句もさぞとのお泊や九月盡

　壬寅の秋、米僊が大和へ旅だつ時、米叔も供して上りぬ。凡古郷を出る人は、箱根の峠を越て家を忘れ、大井の逆浪を渡りて江戸をわするゝならひなり。今秋日和の晴たる頃は、いつも吉田・二川のあたりまで、十峯の蒼天を摩して見ゆれば

秋の富士江戸を忘るゝ日數迄

　神無月朔日、菊貫、松代に旅だちたまふ時

日和風神に連だつ首途かな

　小夜・宇津谷の北時雨、樫木・さるすべりの雪吹にも瞑眩る事なかれと、米蛙が首途を壽ぐ。

月も雪も江戸迄くすと頭巾哉

　米何が旅だちに

寐ずに聞け興津の衛久能の鐘

羇旅部

　八月十六夜、梅澤より日は入りぬ。月に興じて歩行し、鴫たつ澤の菴を敲きて、一ぷくの閑に昔をしのぶ。

脊は明る鴫たつ澤の月下の門

　歸藩の旅だちしける時、桶川の驛まで米仲の送來り、背間過るほど酒汲かはして、

旅の酒猩ゝ菊を捧うよ　など聞へければ

馬の尾に振捨られて穐の蠅

　生麥村のほとりの賤が垣根に白く咲るは何の花ぞも。

夕がほの能にも似たり野雪隱

　良夜、さよの中山を越ゆ。

新月に高挑灯をくもりかな

　一させ三枚橋の落て、はからずも

早雲寺に信宿せしに、けふは九日にあたりしとて、主の僧の菊の花をいけて見せたるを、供なる米洲に贈るとて

旅幾日菊が教へて九日かな

美濃路をすぐる頃、重陽にあひて

いけながら胡座の膝やかゝへ菊

大津の郵亭の樓に登りて

唐崎の秋は花よりゆふべかな

鳴海にて重陽にあふ。

馬柄杓に菊折そへて長柄かな

神祇部

玉馬上邸稻荷年ゝ初午奉納の句

初午や作事奉行を神司

初午にもまれ初めや國家老

初午や夫は因幡の上やしき

町ゝの稻荷祭を見めぐりて

はつ午や負れて歸る武者一騎

二月のむまし乙女やおふく女郎

雨夜庵、牛天神奉納

梅さくや和光の風も東より

長門國住吉法樂

紅梅や海を守りの目あての燈

石壽觀、江嶋奉納法樂

待得たる巳の曉やほとゝぎす

山口瀾長、澁谷氷川社奉納

冥加あれや露のまに〳〵菊の幣

釋教部

達磨贊

糸遊や空ふく風も無一物

やよひの頃、雜司谷にて

櫻たもみな長房や雜司が谷

布袋贊

和尚ゝゝ、嚢中何物あれば行住坐臥に身をはなさゞるや。世智賢き者は天地萬物の無盡藏といひ、愚

者は金銀寶貨の入物と羨む。迷へる哉〳〵。囊中本來鄽然たる大空、色もなく香もなし。此中別に何物か仰べき。

月華にくゝりめもなき袋哉

城西の靈仙寺へ松茸取に行侍しに、此寺は古へ婆羅門僧正の竺土より渡りて、行基菩薩にあひ給ひし所ときけば

松茸や眞如朽せず雨の後

月ごとの中の八日には、淺草の大悲閣に歩みを運びぬるに、乞食法師の、朝は霧を戴き、夕は露にしほたれつゝ物乞ふを憐む。

物貰ひさせもが露のいのち哉

各〻眉毛橫眼上

師は吟じ弟子は指す月夜哉

戀　部

盜人さいふもこさはり小夜中に
きみが心をさりに來たれば

ぬす人といふは若衆か梅の月

降くらしたる宵の雨・是ぞ雨夜の物がたり。

喰つみを燒や藻しほの妹が許

長恨歌の古事をおもひて

梨花一枝共雨ふりや局下り

扇面贊　三句

其角が鶴の曙を此夕暮におもひよせて

八法の春の日永きあゆみかな

夕簾かゝげて人待風情・ねたしや。又連歩して出來るもなつかし。

駒下駄に降るやむら雨櫻陰

札付の君狩くらす櫻かな

神樂坂の茶屋に休みて

藤咲て四五日鄽に佳人哉

黄昏にほの〳〵見ゆる。

卯花を見眞似に妹がけはひ哉

あるº侯の許にて、主のしめゆひ給ふ婦人の、牡丹を一輪おりて、是に一句なさ所望ありければ、彼天寶年中貴妃の一捻香の事など思ひ出て

楊貴妃に又つめらるゝ牡丹かな

英氏畵賛

蓮の船西施ふりたる姿かな

淺草川の早舟も、おもふ人には又遲しと、三枚かたに袖すりの宮をしのぶらめ。

蠅帳を額にかけてや夕頭巾

鬼灯

鬼灯やかぶろが帶に一つづゝ

源氏探題山路露

文やある小君にすがる筆つ虫

雜躰部

笠志が俳名を改めし時申つかはす。

春はぬふてふ鳥の名にし淺からず。秋は三笠とよみしゆかり深し。是は〳〵とばかり花にめでしも、檜笠のてがらぞや。

月花のよき宿りあり笠の下

浦夕、新宅へ移し時

新宅の釘にめでたし古團扇

吾山が庵を移せしに 詞書有略

新宅の簷拂ひや誰が御秡

笠志が万句せし時、十德姿のつき〳〵しきを

是は〳〵世を空蟬の点者振

寛美が万句に

父に似て翔れかひこの杜鵑

易離が万句

賜の土用ぼしする万句かな

やう〳〵九夏の空にもうつり行まゝに、魚游が、何ばかりもなきたぶさもうろさくや有けむ、やがて剃こぼちて俗塵を離れ、風流三昧の

しぼら入道となりしをよろこびて

汗とりをかぶれば本の魚游哉

人はいさ心もしらず、と貫之はよみぬれども、古き昵近のよしみわすれず、中澤嘯博が許より、古郷の名たゝる團扇てふ物を、よき便り求めて贈りぬ。實手馴す風も昔の香に匂ふこゝちせられ、清女が過にしかたゆかしき物の譬へも思ひ出られて

なら團扇雛祭より葵より

梅動、癸巳の秋、かしら丸めて、名も書鏡とよぶを賀して

宿の月初めて壁に坊主くり

おぼこてふ魚の、次第〳〵に長じて伊勢鯉に至れば、夫を名よしと呼びて目出たき魚とす。今才魚も米魚と改め、今宵三五の荒海にひれふらん事を祝す。

浪に躍る魚は月下のなよし哉

山花が万句せしとき

膝の月文臺わきの羅漢たち

沾宿が万句に

木まふりの先日立けり文臺坐

月村所の号を師より請て

寒梅や日増年増下手にさへ

菊堂、初めより金丸を恐るべき身にもあられば、菊いたゞきの友雀、住吉の隣を卜して、小石川餌さしてふ里に雨夜菴の柴扉を開く。かくするより倍々鶺鴒の間に世情をとゝなへ、二つ梟三つ木兎のをかしみに遊び、軒の滴りに時雨の撃筑を味ふ。予その壽きを物せんとて、似げもなく剞劂の俤を書くろめて、側のひさご引寄するに、例の米駒つと走り出たり。門の守りにもといひふくめて贈る。

寒梅をあうんに植よ風雅門
曾嵐新宅の賀
あるじ振疊の霜のおきな鏽
回向院にて翁の像開帳ありし頃、
翁の忌日に詣て
兩國に瀬田のゆふ日や翁の忌
杠春禪苔先師の道を慕ふあまり、
万句興行の巻頭の發句を予に請ふ。
辭するも亦風流にたがひぬれば、
先師六盤の、下手にさへ道はつく也
雪の人　といへる發句を思ひ出て
風雅門上手につけよ雪の道
自在菴千頂が万句せしとき
つよからぬは女のほ句よ雪柳

哀傷部

月日は磨盤のごとく廻り、春秋は
白駒の影より速なり。指を屈すれ
ば、師沒して十三周に成ぬ。
其夢の其覺ぞはやほとゝぎす
四時菴竹棠は竹馬の俳友也。病類
みすくなきなど聞え給ふける頃、
人まいらせたるに、頓て歸來りて、
今朝の程に卯華の雪と共に消たま
ひぬと聞ゆ。
友鳥の八千八聲啼日かな
同じ十三回　詞書、追善集に在。
青嵐無絃の琴の調べかな
亭龜十三周
風雅の名殘して君がもぬけ哉
亡師のしるしに詣て
なれひとり花咲がほや塚の苔
十七回追薦
子規あれといふ間や遲八刻
古雨夜庵龜成十七周忌に、門人菊
堂追善の句もさめしに
在し名をせめて夏書の筆の留
樂山觀拾翠身まかり給ひしとき

露や夢ゆめの世や露けさの秋

冬映、壬寅の冬家を移して、隣家なる梨樹を憐める隣梨菴と有のまゝに表し、その額は予に書てよと、かれていひおこせつれど、造作いまだ終らず、其事にも及ざりしが、此八月末の四日身まかりぬと、雨澤五陵が消息にうち驚かされ、今更世の定なきを悲泣して

ありの實もみな水梨の一字哉

蛩水の許より、古蛩水十七回とて追薦の發句求めらる。此君は同齢同嗅のよしみ深ければ、懷舊の情押へがたし。

僞りのなき泪かな初しぐれ

先師六盌青峨居士十三回

冬籠る茶碗の昔其むかし

おばの喪に籠りし頃、雪のふりければ

犬の伯母は今年も死ず降にけり

妻に後れし歳の暮に

鴛鳥の巴も出来ず年の浪

慶賀部

森米洲四十の賀に

百はまだ躍盛りぞ春すゞめ

樓川八十賀

三老の上座しめたり福壽草

土肥其流が七十賀

百に手を伸せば屆く柳かな

米洲五十賀

鶯や万年枝上のちよつほ先

百福壽の文字の數々、蒼頡が筆をたて初しより、史籀・鼎文など樣々分れ、世々をこめたる竹の節に似たるも有、千年ふるてふ鶴の舞ふ姿になぞらへたるも有。是を以て西都が六十をことぶく。

梅に似た枝振もあり百福壽

　山口瀾長四十の賀に

三十九を越え給ふても花の春

　一万坊菊堂六十の賀

祝壽盃先とれ花のせうと役

　若菜巻に、若く清らにて、かく御賀といふ事は、僻かぞへにやと覺ゆ、と有。意をもて菊貫の初老を壽く。

御四十と申せど御德若菜哉

　老蚕・冬映六十賀

　玄中記に、松脂淪而入于地千年にして

茯苓に幾十かへりぞ老がはる

　岱翁七十の賀

壽饅頭一畑書けよ紅の花

　高野氏某六十一の祝ひに

澁ひきて壽命目出たき團哉

　中村舞扇七十賀

親骨は千代ませと開く扇哉

　祇井のもとより、秋の季にて祝辭の發句需められしに

此殿は宜も百きく百もみぢ

　在轉、編集功畢りし賀筵の發句

菊の宴こは亭坊の彭祖ぶり

竟宴

小生年たかされて、染井隱君の恩顧を蒙る事淺からず。常に參通ひ、花の朝・月の夕の宴席に連りぬるに、こたび發句の集撰たまへば、其竟宴を物し給ふを賀し奉りて、神風やいせをの三熊野に生ふてふ草のしげり行御ことの葉のすゑを祝しまいらせて

濱木綿の百重やうるふ春牡丹　在轉

　烏帽子のおもくひかたそよふく　米翁

飛石をたどる手燭の跡にて　仝

菲は白かちに月のぼるなり　轉
斧の刄に袋掛たるすさまじや　仝
をちの摺臼も是秋の聲　翁
ウ
室の戸の唯心經にいまぞかり　仝
頭痛いぶせく有爲の浪たつ　轉
勾當の妻になどゝは聞も憂や　翁
くすと着溜て奥の奉公　轉
御百度を標茅が原の絣買ん　翁
また一しきりくらき秋霧　轉
やゝ川の筧に洗ふ鼠わな　翁
大學寮の庫の秋ほし　轉
古くよりきつゝ茶賣が翁さび　翁
手折たまゝの梅の年だま　轉
吾國の富士を花とも筆初め　仝
聞ごとに霞む書院小書院　翁
ナ
かゝる寺持た所が眉に霜　轉
此穴しめて狸さぶらふ　翁
絃音もよつぴきひようとから風に　轉
泄瀉ましませ敗軍の宮　翁
せつくろしいつのまにやら舟のあか　轉
三つ目四つ目のたれやかれ時　翁
辻君の手拭ふはと面にゆけ　轉
ねこの爪をと幽篁の隈　翁
酒の池肉のはやしのとし儲　轉
飛ゝかへのたゝみ蜘手に　翁
本陣の星と移りて月漏て　轉
うるまの芋の蔓ニも出來秋　翁
ウ
歸去來のきの字もしらぬ菊作　翁
針もやらるゝとは無分別　轉
猿樂の世はならはしの大醫　翁
異ならざりし白き襪子　轉
御秣もよしとて花の御座所　翁
いしくもぬるむ四の澤水　轉

延寶・寛延の頃は米德・拾翠・廣水・
甘棠・鸞臺・清秋さ、花にむつび月

に語らふ友どち六人なん有ける。鸞ははやく飛去、棠もいくほどなく常なき風に散行、水・翠の二人も終に泉に歸り、今や米翁とやつがれさのみぞのこりける。齡も同じ友千鳥・北に南に塞れども、裏なき心は明暮行通ふて、互に額は渭濱の浪をよせ、眉に商山の霜をたれ、腰に梓の弓をはれ共、俳諧の矢たけ心は、かたみに替らずなむ有ける。今年此翁の年月つめる所の發句を、息の珠成、櫻木にきざみ、紙に押て、世に廣くせんの願ひをゆるされ、せちに物したまへば孝心に驚かされて

先見たき校合ずりの一葉哉　清秋
蔦のかつらにうそくらき窓　珠成
露の月虫すらすだく所得て　米翁
鐮のさがる用心の腰　秋

時雨雲船待人も立さはぎ　成
小あけのこゑのとがる木枯　翁
ウ
拍子迄あほう鳥やさらへけむ　翁
隣れる庵に朝寐つゝまし　成
畠から重げに妹が紅粉かたみ　秋
馬上の若衆袖は蟬の羽　翁
川ぞひの物見西日をいとはめや　成
生洲と沖を喰ひ分る鯛　秋
山獨活の座頭が鼻に春も早　翁
綿ぬきいそぐ花の此やど　秋
竹たるきかぞへて虻の穴這入　仝
御名唱へ來るまろかしら共　翁
月明て汲涸したる秋清水　秋
鹿も通はぬ城をせめぬく　成
ナ
消殘る露よと老をけなせ共　仝
祕曲終れば卷上る雲　秋
汐風やしとゞに須磨の床たゝみ　翁
繪をかきたむる忍ぶ身のほど　成

面瘡の跡耻しき髮はづれ　秋
徒士の目見の威風揚ゝ　翁
薄雪の松のあたりを掃のこし　成
鴛も御法にむれつゝの寺　秋
しれ者と知てすられし無念やな　翁
帶しめなほす酒のさめぎは　成
今月の入る山の端を高廊下　秋
滑り〳〵くゞる長露地の萩　翁
ウ
嗽ぐ水に秋なをしみわたり　成
腹卷ながら傾城がもと　秋
あらぶさた妻の祥月かい忘れ　翁
くさき雜煮に向ふきさらぎ　成
しるよしの花の大和へ貰ひ繪符　秋
菜種につゞく四方の八重山　翁
竟宴の句つかうまれとおほせごと
はべりければ
物讀の座に積りけり花の雪　珠來

朱にまじはれや眞白なる蝶　米翁
けふも亦霞汲むと野ら掛て　珠成
させば刀と見ゆるつり竿　米洲
智惠袋よき錦にも限るまじ　春禪
さはぐばかりで果ぬ夜普請　白抄
竹箆で柹わる興を月の前　易難
鱸鱠にひやりおほゆる　米魚
ウ
供船の添て洲崎へわたり鳥　梅堂
はれなば富士は雲のあそこら　成
すでの事二階の額で御つぶり　翁
舞囃子にて夜はふけにつゝ　來
年ゝにいさむ昔のいくさの日　魚
世を楪に餅をいたゞく　難
鶴龜を兼て手飼の松の春　洲
扇が谷の風ひかるなり　堂
尼君へ附ゝの衆のあでやかに　抄
いづれ戀病隱しめさるな　禪
武藏鐙かけの弓弦喰しめし　難

近習廻りのちやうのさや〳〵　翁
生壁に匂へる月もあらたにて　堂
小豆の色もつや〳〵と秋　抄
二
兄弟は網もて出る生身魂　成
やつとで起し野渡の棹取　魚
摺燧是仙術のひとつなり　禪
咽をうるほす故事は何やら　洲
さしかゝる日待狂言書かねて　來
うかり〳〵と來れば吉原　成
伊達にせし蓑の襟元見てくれと　抄
冬田の塵に流す鷄藁　難
醉しれて何が家中の小侍　洲
毛請に清きさんだはらかな　禪
くはら〳〵と終日橋のむな(原註)空車　翁
血煙はれぬ應仁の月　來
他の子を育つる宿の露けくて　魚
我身世にふる秋のてふ〳〵　洲
二
干返す筵にきくの殘を見る　難

玄關の硯首のない筆　翁
流行出す驗者も物や付ぬらむ　成
豆腐の外に飢はあがらず　魚
日和よくて事少なる早どまり　來
笄をかりて居る熊野踏　抄
鍬鍛冶の業に矢の根は覺束な　禪
ひけこぢれたる役所むしつく　來
雷の音はるか遠くに暮の月　抄
三井寺戻り女はら〳〵　成
下簾源氏の御すそ露ばかり　翁
方角もよし日あたりもよし　禪
軒並の物みな賣れる神の花　魚
十万石へまはる春水　難
三
眞先に獲の雉子ふら〳〵と　洲
あやまる馬士も棒下の禪　翁
はやく戸をさせとや雪の北風　來
機音寒き郡内の町　魚
偖向ふ媼は襷をときながら　成

有がたなみだ膝にほつちり　抄
百しきは此川西に古都　難
平家ばかりがわるいでもなし　洲
入むことそゝのかしてもいかな叓　禪
おもひに重き彫ものの槌　難
今日もきて廓をふさける点者殿　翁
禁酒破るゝ月の此ごろ　成
鮭の魚布川の秋の色に出て　魚
在所のわすれられぬかりがね　來

ウ

笈摺に改元の字はまだしらず　抄
團子の木鉢幾世經ぬらむ　禪
牟ゝの劍を彈じて人宿に　洲
ずんずとのびるばかり若竹　抄
あの見ゆる注連が苔路の行留り　來
華山院のおみあしの痘　洲
多葉粉迄翠の川意は無ぞよき　禪
長鯨のごと馬桶杓の水　翁
幕打て月見る狩の山寒し　難
矢立で一句つくばふてかく　魚
あひしれる愛の小娘眉とりて　成
蜥蜴のこなたうち捨にけり　來
鳳巾花の木の間に遠近の　抄
尋て三里桂のみなもと　禪

ナ

夕霞蜃や吐しかくれ里　翁
犬はしらする兒共ひなびす　成
辨慶は砂の黒汗をし拭ひ　洲
珠數さら〳〵は茶漬にもあり　難
明烏御夜詰觸はいましがた　魚
はらませらるゝ猫も抄子も　翁
繪暦の拙いところしほらしや　來
さゝらへ男いつかのぞきて　洲
雪隠はしけり倒れの八重葎　成
幻住菴の秋の夕ぐれ　魚
奥州の紀行泣く事笑事　禪
落馬の打身雨間風間に　抄
拔影のみもひも寒き土用研　難

堀出しをする石菖の鉢　來
くりくと車をかけし朝より　洲
獨居たがる山水の癖　難
筆結が來て明て行湊筒　抄
持佛ばかりをわざと煠とる　成
もりながら霞聞なるあられ酒　魚
短冊ほしとしるゝ顔つき　來
痳㑣匐ふ花にまさなき丁ども　翁
東南のかすみことさら　禪

染井の山莊にて集つくらせたまふに、彼小倉山の昔をおもひよせて

花なれや筆を染井の山屋敷　冬映

月に滿ち雪につゝむ君が佳作の無盡藏なるを

染井のやかく咲花も涌にこそ　梅堂

御發句集を賀し奉りて

名に高き葉の花や風薫　秀國

父君の玉句あまた、珠成公櫻木に載せらるゝ事を許され給ひ、彼是文飾まします端に、やつがれが一句も加へ給はむとの仰もいなみがたくて

桐一葉天下にしるや色表紙　易難

竹によしある此君のおぼしたち、庭松の鶴によせられ、御句集を春に改められむとて册子なりぬ。其竟宴の瓊筵にもまじらひ、人〻と共に句〻仕りぬる事を

名月やその一籠の花千種　春禪

おなじく

霧晴て仰げばたかし秋の山　笠志

一集を撰たまへば、菊を竹によせて

此君の千年や花のおきな草　雪齋

御ふづくえのかたはらにはべりて

靜さの御伽は御桐火桶哉　米伯

今年霜ふり月の中、四年ぶりにて東へかへり、染井の草菴に移住しぬるに、旅衣をぬぐ間だにあらで老君に侍座す。御かたはらのふづくゑなるみづからの發句集一册を、くりかへし校したまふ。拙衲も拜覧を許され参らせて、眼鏡に鼻はさみて沈吟するに、くさ／＼寶玉の高調なれば感伏のあまりに

水仙やこがね白かね玉のかず　僧米叔

逢に賀し奉りて

園の雪御發句藻の貢哉　米洲

父の年頃佳致を得給ふけることさ種をさりかされて、やゝ冬のほどにいたり、一册子にはさゝのひはべりければ、なをくちせで殘らん事を壽て

かきませし松葉よ千代の門の雪　珠成

此十年餘り八重櫻奈良の古郷を離れ、夕紅葉染井の隱家に世をのがれ、風流三昧を己が役とし、春の雨の暫め難きも、秋の夜の寐覺がちなるも、口重くなほ／＼しき發句をうめきて、老らくの至るをもしらず。物の端にそこはかとなく書集し句ゞの、いつしか塵泥と積りぬるを、物の序に例の珠來に見せて、是が中に浪華の濱のあしきを捨、伊勢をの浦のよきを撰てよとて囑しぬれば、口をへず撰定終りぬとてかへしぬるを、五郎なる珠成らが、世籠り埋れんもやくなしとて勸めぬる程に、世上の譏笑をうくる媒としりつゝも櫻木にちりばめはべる。

甲辰の夏　桑門米翁

哲阿彌句藻（てつあみくさう）

乾・坤

晩得

哲阿彌句藻序

我滑稽の先生清談林主人、初の名を堪露といふ。後、時ゝ菴が門に入て北窓と云。又、朝四と改む。故有て朝四の名を息る事三年、桃栗と号す。三年を終て再、朝四に復し、一號木雁哲阿彌と云。嘗て寶暦の末明和の初めより古調の風雅を甘んじ、中にも浪花の宗因が俳風を慕ひ、紫隱春來ひそかに古調に志ある事を東風流にかよみて、彌この道の高きを說く。されども諸の楚人に交る。折〱は桃青が說く所の正風をもつらねもてゆくといへども、何かは本意なるべき。よて自高談林の額を製して壁上に掛く。宗因末流一陽井素外、此額を見てせちに乞得まくほしと、朝四の男仰鼻に書を寄せて、主人の留守を計り推て携去なんことを通ず。朝四許してこれを素外にあたへ、ふたゝび清談林の文字を解菴に書しめ、彼素外が仰鼻に寄せたりし書翰を共しりえに繼て、又壁上にかけて、今は素兒が号となせり。將此稿や、朝四壯年より云出たる句ゝの幸に忘ざるを、新古の風調をえらばずかひつけつゝ哲阿彌句藻とありの儘に題す。古調を慕ふ人は正風の句を笑ふべく、正風をしたふ人は古調の句を笑ふべし。共に句藻くらへと云てやまんにはしかじと、雨後莽月成腰押して白す。

時に天明三癸卯年清明前一日

清談林 哲阿彌句藻（乾）

春之部

万歳や藪も例のつかみどり
山出しが稽古の酌や花の春
初空や清少納言おもふ戀
寶酒に下馬は幾重の霞哉
下駄のはも餅を喰たる若菜哉
外の樹はまだ墨書なり梅花
春風の苦みや少し蜆汁
梅さくや土間に屏風の片田舎
梅が香や我行かたに人も往く
かつしかの香や行とゞく梅の時
いつ梅にふれたる袖やたもと屎

亀井戸參詣

二十四や二十五日の梅の風
給仕には若衆ぞよけれ梅の宿
晝までは皆素襖嫌の梅見哉

蝦夷紅毛の器に投入て

春といふ通辭は入らじ梅柳
帙入のいつ見る本ぞ梅の宿
鬚そらぬあるじ馨し梅の宿
春のよのやみにも梅や白魚や
出遊ふは梅のあるじや志野俗
紡錦のひらき乾けり梅の軒
寧丸の鳴る馬せめつ梅の門
梅さくや昨夜のあたゝかにめでて

壬寅二月廿九日、梅翁の百年忌さて寶馬・素外など百川亭に集會す。予も是につらなるうれしさた

花の日や念佛衆生拙者風情
梅散や既に宗因矢ごとし

戊申春

餅ほどに雪山のこれ花の春

飛〱にすくも俵やむめのみち
此ほとり御師龍大夫梅の花
肌に負ふ乙が眠りやむめの花
あみ笠のむかし男や梅の道
十分に梅の咲く日や大鼓賣
すき〲の頭巾かむりて梅見かな
手本にもかくは有りけり梅やしき
かひ燈す狐の尾久や白魚船
火もらひやしら魚船に夜の聲

今の海老藏に與ふ。

文机に可愛のものや福壽艸
鶯や里馴そむる乳母が子も
一休の杖は似氣なし雪若菜
春を見よ大空よりも庭の土
春風や長吉やあの船よばひ
捨がねのあとのふたつや雉子の聲
片肌は脱ぐ女あり雉子の聲
はつ午や穴一ゆるす宮所
初午や飛〱雨後の道清水
初午や是ぞ薄着の始なる
遅〱も足は持たる田にしかな
涅槃會の場にも水戸の目附哉
きりぬきてほしきもの有涅槃像
春雨の一枚ぬれぬかはらかな
錦織いとのはじめや春の雨
初午やおさな馴染の宮も有
はつむまや午をも化て二十題
駕籠舁に見覺られつ朧月
やぶ入を容あしらいの硯かな

母の薙髪おりし時

如月や風薪貰のさかな尼

朝鮮人來朝之春

高麗人よ覺て歸れ犬櫻

清兒榮軒を悼む。

直傳の百囀もむかしかな
花よりも此きさらぎは柳哉

白壁の江戸の中にも柳かな
傾城のたまりしあとを蛙かな
三日月の船見なくすや汐干狩
初雛はふき合せずの傘かな
名月の出處さがせ潮干狩
汐干るや十里もゆかば初鰹
ちりひぢて雲を手に取花見哉
日も永し雛の壺中の造り花
潮干貝とるや濡手に安房上總
行合ふてかたるや花のもと旦那
寛永の錢を蒔てや山ざくら
花に樽荷ふや誰か歌のさま
散れと吼る鯨や花の波間より

三月廿一日ほとゝぎすを聞。

彌生にも雨のふる瀬歟ほとゝぎす
山吏に粕煮の鰤やはなの春
葉に落て夫から落る椿かな

泰琳が母の八十を賀して

船唄や帆は八合の東風靜
らうそくのかひなく立や四日の雛

前書有略す

またことし阿ほうよばりや初烏
ふみ惜しむ土筆の原や菫艸
万歳は兄弟よりも從弟かな
音のして雪をくゞるや春の水
柳見る人の風情や杖と笠
散る花に韻字も踏て惜けり

すごろくすりもの土山を題す。

地をみれば柳を見れば雨が降

寛美万句

万天の雲もさくらの莟より

醉武贐(餞)別

ゆく春やまて芝小鯛ひとつ汲ん

茶わんを贈りて

ちんと鳴りて花を惜や茶碗酒

伯牙・鐘子期がことを前書して

鶯とりの琴彈やまんことしより

二代目木奴參宮暇別

旅は寶日に諸〳〵の貝盡し

西外を送る。

見送るや笠間ふかくも夕雲雀

人丸堂

雲かとよ花の梢もしら幣

おもひ出の字を浮たる蛙かな

離レ然大地皆黄金なりと、僧の教け
るをこばみて

山吹や離るべからず馬の口

長崎屋所班が額に

月に寐ぬからすよ花の夜も啼

大藏何がしを訪ふ。

陽炎や有かと見へし太郎冠者

田長の春致仕の願ひをたて、病の
床に臥て

龜の尾の山師が髭や千代の春

薙髮の朝

水も汲め佛の弟子の坊主凧

誓願寺存義居士墓前

日暮までは居られぬ春の寒哉

牡蠣売に船着く音や朧月

漁火に續く湯舟やおぼろ月

庭に見てもとの坐敷や春の月

庭までの御ふみ使やおぼろ月

菜の花や橋から見れば明屋鋪

足輕の花見て行や高晝間

鶯や船から聞ば峰の聲

苗代や檜杪も立ん水のたけ

三月十六日松魚到來

天晴をのれは春に魁の鰹かな

花守と成る古雛や棚のすみ

桃源をおもふ。

雛見の出所迷ふ御館かな

弘法大師九百五十年忌、眞言一派

大津會、於二護國寺一興行

花ちるや佛きざめるけづり屑

野遊びの土筆摘つ童かな

鶯や終日汲める井のほとり

うぐひすの門には除けよ馬車

初春やまだ鶯はサヽ非

屋鋪より若菜つみにと女かな

かいこしかの菴中

むづかしや七種菜めし豆腐汁

捨かねて沽るやうき世に懸(想)相文

遠州屋楪四郎が雜煮の中に錢の入たるを賀す。

此もちの御あしは强し宿の春

井戸ありとうしろに告る菜摘哉

牛隣こいふ額を和田某に贈る。

牛部屋のなかばかくれつ桃の花

牛嶋のほとりに菴を結し時、三圍奉納

此神の田にしも習らへ歌の端

鶯に春中をあぶる茶無垢哉

ぬくときや梅の日向の猫背中

不空居士墓前

から臼の音は合點歟春の月

白魚や塵も吸べき玉の肌

菜の花や長者が家のあとならん

池清て桃に登れる緋鯉かな

喧嘩する兄弟もある蕨かな

村長が水籠ふるしつばくらめ

富士うつすまでは春けき田打哉

惡水が伊勢より戻したを賀す。

ふだん着に成ても匂ふさくら哉

賑ふや雛のへつつる雛のかま

しどみをも買に往けり梅の時

悼二木丹一

(齋)齊日や焰魔の廳に一句せよ

藤浪や名殘のうらの花處

淺草八丸堂奉納、雲溪顧主

妹とよむ癖はゆるすや櫻がり
麥はむぎ菜は菜としるや春の雪
あくがれし日頃や嶺にけさの花
獺のつくものにはあらじ種卸
苗代に遣ひそめたる附木哉
妹がりの雛のおましや繻子の帶
はご板の懺悔ばなしや雛の前
艸もちに黄粉の色や何がさね

二代目穴山源七兵衛七回忌

涙ぐむ七合入のかすみかな

はるかに人家を見て花あれば則入る、といふ事を書て路丸に與へられしをおもひ出て珠來叟を悼む。

花散らぬ佛の國に入る日哉
吉原の鳥籠廣し夕ざくら

大こく屋七五郎が藤を

紅毛がいて來し珠歟雨の藤
鳥追やふり袖はさむ諸つばき
とり追のゑりまきしたる娘かな

和水新宅 春風樓と云

澄む水や春は四澤に三ツ葉芹
出代やいく夜歟寐たる夜着包

菊武老母年忌 前書略

ほろ〳〵となるや雉子の空車

長松院三回

やく瓦ともへの紋のかすみ哉

行脚の後、歳旦

見しや夢松が浦島太郎月
鶯の弓にも矢にも茶杓かな
福壽草硯にあまる水かけむ

三河稻荷

から衣きつねも二月はれ小袖
初午や我は藤棚かきつばた
老猫の戀や互達の臍まぎれ
我を見よことしも有て初櫻
雲とよむさくらに啌の上手かな

賤が家に庖丁光る蚕かな

うぐひすや土鍋の欠は藪の中

帳かきの竹の雫や春の雨

風鈴を別のかねや猫の戀

しのぶにも藥屋は安し田舍猫

神稻判者披露

ひとり手に淺瀬は見ゆれ春の水

あめ色の花瓶ねぶる胡蝶哉

蝶ひとつ野ごゝろ誘ふ小庭哉

遠からぬ彼岸の道や西が原

初午の三味線交る夜更かな

前書あり略

菜のはなや兒は嵯峨野の女郎花

梅に折る膝を伸たるさくらかな

内に居て雪見し人歟初ざくら

身の丈を枕に曲て櫻かな

きげんよく旅人立し蚕かな

一しきり波たて打や桑子棚

曲笠万句

初虹や長点かくる筆はしり

手習のまき

閨のつまちかき紅梅の色も香もかはらぬを、春やむかしの、とこと花よりも是に心よせのあるは、あかざりしにほひのしみけるにや。

手習の反古ひらくや梅の墻

棚かりて藤も世に住委かな

三月十五日

白魚や此川岸にちからなき

三月盡、本久寺會

鶯のしはがれ聲や作禮而去

松葉屋の瀬川、劔に伏せしは、今より五代ばかりもむかしの事也。其年回にあたりて、墓前諸人の作りたる歟七言絶句のからうたを手向られし、いとあはれなるしらべにて、手も老筆と見へたれば、いさゞ昔もおもひやられ侍る。

其光はや幾とせ歟忘れ霜

漢句

惠方先徒囀
竹生黄鳥笛
醉花有頂天
僧厭人來鳥

手拭に帋衣濡たる初湯かな
はんの木の小枝集て霞かな
いつの日に笑顔見するや野老賣
初午やはつかに見する帶の伊達
秋は野菊初午頃のよめ菜哉
聲ふるくいきとし池の蛙かな

二月十五日、春來忌

きさらぎや色則是空あめの鳥

芳川子更名

曲水の居處替てもらひ梟

洲さき村名主平十郎初雛

鍬鎌の調度もあらん雛の鯛
山吹のなきにも恥ぬなたね哉

來何万句

かけ長き池のおしてや藤の花

浅艸觀音開帳

かん木の削り屑もや花ざかり

普賢ぼさち奉納

花に茶屋かりのやどりもよし簀哉

夏之部

ほとゝぎす聞ての後の朝寐哉
桑人や羊さがりの衣がへ
よし切や得もの〳〵に船の飯
宿とりも逆さに掛る扇かな
ほとゝぎす揚屋に聞し人は誰
夜も船も三十石やほとゝぎす
やみの夜も蔓は見へつ郭公

母の勘氣をかふむりたる者に

寐處に幾夜迷ふぞほとゝぎす
ほとゝぎす屋ねなき船の手がら哉

宜時が夜更て捜す茄子かな
砂糖なき賤が垣ねのいちご哉
我罪を燈して見せるうぶね哉
もろこしの土間にもの食ふ牡丹哉

霞暁が名あらために

名に狂ふ人間十九や廿日艸
歌人より子持ははやし蜀魂
うら店に其佛やなすび漬

芳澤五郎一に申遣す。

五月雨や虎が藥屋は漏る斗

巴屋の虎に題して

引置の茶は覺束な郭公

靑樓にて

やれば又貰ふ夜も有鰹哉
生垣の蜘の巣けぶるあつさかな
夕立の浴せて廻る七溫泉哉
山駕の息や集て雲のみね
墻と成り橋となる夜の扇かな

のぼる日や青田の中の戻り駕
田樂の御祓の串や角田川
芳野川花なつかしき御祓かな
生肝を乾す日やなくて時鳥
むし干や通鑑の中の裸むし
永代の沖にや雨の幟竿
ぬけがらも共に並ぶや蟬の聲
また水のすなほに習ふ青田哉

愛岩(宕)

香せん湯口には白壁ほとゝぎす
菴よりはふとき牡丹の柱かな
短夜を茶屋は水鷄の空ね哉
何貢ぐ四手の駕や不二まつり
痩馬の重荷憐め草いきれ
すし賣のすの字も高し夏の月

兩國橋上

空に投る礫の玉や夏の月

或人の子の異見に賴れて

横町に飛事はやしほとゝぎす

江澤屋か酒店をひらきし時

呑口の音を水鷄に聞せばや

送別

鑓や〱やりや皐月の旅装ひ

、

おのづからなるや旅寐のかしわもち

、

若竹のふし事習へ奥坐頭

昼に殘る花柚や小さかづき

夜啼は淋しさいかにかんこどり

歌よみは鬼の首獲つ時鳥

涼しさや江戸にもひとつ椎が本

寐はまして先手や後夜の時鳥

二の腕に笑ひつゝむやかしは餅

身をいろ〱五百羅漢の暑哉

隱題

一聲のほと時酒や過るとも

二番目もありと聞ゆる松魚かな

かつほ　いわし　いな

初がつほいなとはいわし伊勢が錢

浦島が直やつけかねて初がつほ

捨置ししのぶ見出すや椽の下

寶鐸の湯と成日あり蟬の聲

大名小名揃ふて待やほとゝぎす

子規耳にもほしき日がねかな

土用洗ひ百人前の暑かな

五月雨や降晦日のやみかけて

送別

來る秋の風の枝折や雲の峰

蟬の聲は木の間に湧る泉かな

行水は寒き日もあり佛生會

子雀の口がらは立ぬ誕生會

ほとゝぎす人の聞日に聞がよし

お寺からさかなの來たる牡丹哉

花街百花歷亂

誰袖を落て手鞠の花や咲く

服紗にも肴籠にも粽かな

むづかしき事有りて女客を得たる時

初夏の天糸を繰にも能日かな

獻上

五月雨や松の御間のさぐり足

帷子の鐶をきたる節句哉

雞口牛後にはあらで

蚊の觜とならでうれしき螢哉

寐冷して人の暑を見る日かな

樽・が新宅

足る事を知れ三郎兵衛夏坐鋪

山彦源四郎が妙手を感じて

帶曳の共手も薫れ夏の風

御祭に追ひ廻さるゝあつさ哉

くつさめの暑わするゝ事暫く

六月なかばやうやく稀也。

近付を既に返しつほとゝぎす

白壁にまた取付きぬ蝸牛

蚊屋釣りてうき世遁るゝ稽古哉

むく起の豆腐の耳や時鳥

ばかまちの耳をこく日や郭公

十七家引わかるゝ時

むつかしの離れ加減やかしは餅

聞ほどに十聲に過つ時鳥

米仲追悼

松魚好おもへば是もかたみぞと

送別

荷印の軒端につゞく幟哉

武藏野や何疑ん雲の峰

初袷いかに淋しき膝小僧

卯の花の雪にもそゝげ古布子

ほとゝぎす朝陽斗の揚屋町

畫讃

立とまり連におくるゝ清水かな

夏の夜や鐘の聲短うもなし
いたゞくやけふの佛の御はな屎

佐野氏を悼。

よしきりや是も血に啼おもひ有
ほとゝぎす隱居の後の朝寐哉

湯島蓮光院

晝は口に土用が入歟ほとゝぎす
雨に聲をむらなく蒔や郭公

染井

竹の子も御家の子也半夏生
五月雨やおもふ事有古小袖
乘掛や五月雨こぼす油紙
いかめしき夏桃うりの楞哉
二度たかぬ飯のかはりの蚊遣哉
釜かけて暑忘るゝ爐もがな
忘れんと暑に釜のかけ直哉
蜀魂腐りし墨の枕もと

雛冠を訪ふ。

まだ花のあらば尋むほとゝぎす
燕もはたらき顏や早苗時

新宅

おもひつゝぬるや五月の泥大津
夜ほどに晝の靜やかんこ鳥

坂田杉曉に與ふ。二句

鬼か人歟遠目に風の幟哉
田舍にも男壹疋かつほかな
聞送る山の端にけよほとゝぎす
誰が方にさす盃やほとゝぎす
聞初て來ぬ夜待るゝ水鷄哉

龜文新宅

ふく軒のあやめも三葉よつば哉

杵屋佐吉に與ふ。

御秡せん佐吉は杵やつゞみ唄
ほとゝぎす是をや江戸の鉢扣
かや釣りて身は飼鳥や郭公
ほとゝぎす江戸は入べき山もなし

遠雷

ばせを葉の松魚と聞て開けり
二日めは板はしまでも松魚哉
かつほ見て参れと寮の御馬哉
御次にもあらめづらしの鰹哉

送米遷を
前書あり略す

見送の星歟ほたる歟銀こじり

郭公　飛　玕　塩

ほとゝぎすとつてかへす歟海の上
細腰のはちすにさすや船の棹

梅雨　數　醫　「一彫殘」

寐まきより移れば寒き袷かな
今ぞ啼花の昏ほとゝぎす
つく遣て侍すゞむ川邊かな

夬水三千句

ふしつけて發句も唄へ田植どき

蓮　開　泥　總　中、

薪水婦人追善

梅の雨しめらぬ菓子はなかり鬼

百萬十三回

冷しおく瓜なつかしや爪印

座　禪　六　月　寒

布袋の讃

夏の日を袋にいれて風やかぜ
ほとゝぎす帯を掛たる屏風かな
病人の見ゆる二階の若葉かな
朔日の袷さよりや笊の尻
大根のことし子賣るや佛生會
一日づゝ越る暑や雲のみね
片手にて波を文どる鵜川哉
五月雨やまくらに飽て机
さみだれの晴間極よ三郎兵衛
紅るの舌も喘ぐや富士詣
守る人の是も碎くや心太

いくち小左衛門を憐む。

皿山や素麪上手今はなし

雨を得て涼しき土の匂ひ哉

歴々になる心なき暑かな

船頭に多葉粉のかゝる涼かな

悼二魚岱一

蛸さらへんさいもの葉がくれ　さ
いふ句なして手がら有しも、きの
ふけふの事なりけり。

蓮は何いもの葉がくれ失にけり

(莨)箕紫の秋水子より朝くらの蕗な、
からの帋にすりて送られたるに

神馬藻の玉もの得たり夏の月

天明八年奥羽行脚

さき觸もなき旅人や郭公

結川の波の幾重や夏ごろも

白川市中

むかし朱の椀を洗ふや杜若

関明神にて、はじめて聞。

ほとゝぎす奥ある聲の始かな

二本松釋迦堂川

ゆび指すや薬屋に鳶尾の花御堂

辨慶すゞり石

墨色の曇やいかにほとゝぎす

夏川の糸はみだれぬ柳かな

旅十日まだ綻ぬほたむかな

多賀城

しのぶ草取盡してや古瓦

ゑさしや文十郎勧進

けし散や緒絶の橋の鉋屑

鞍に寐て何も岩手の夏つゝじ

新庄關守佐藤久七所望

通れとの聲につゞくや郭公

金三郎といふ男を倶せしが、一日
はやく此ものを先へ遣す。予は横
手に逗留。

斯人をもつて初音や時鳥

小野村

芍薬や似たる姿は皆老女
強からぬは田舎造りや一夜酒
蚕飼ふ生れのまゆの女かな
横手蛇が崎中村忠七を憐む。
既に手を掛んとするや蛇いちご
院内山中
木曾に似たり箱根に似たり花卯木
横手大燈國師の詠によりて
万石の青田障子の引手より
牛嶋といふ驛にて
牛嶋と聞ばふるさと五月雨
能登屋嘉衛門亭にて
死なで我百里若葉にうかれ鳥
おもひ出し〳〵卯月の寒哉
山屋鋪岩屋何がし別莊を守る男に
麥の穗のあとへすさらぬ男かな
蚊もひとつはや近付の聲す也
天德寺參詣
早乙女の袖をもかりて涙哉
此土も序に返せ田植ども
法燈寺といふ處に晋子の擬あり。寶永四丁卯二月二十九日皐鶴の手跡と見へたり。
五月雨や障子の反古よみ盡し
早乙女は遠目ながらも女哉
八郎潟、鮒の名物なれば
近江にて五郎よく聞け郭公
柳町といふ所、遊女とつかぶし・まかきなどいふ哥なうとふ。其唱哥に君はさま野のきり〳〵すといふ。
啼ぬこそうけれ夏野のきり〳〵す
江口のさとのむかしもおもひやられて、法師が袖もうく斗になむ覺うるはし。
まきのとのまいる夜くもれ夏の月
と書てとらせぬ。
あさはかな咒ひ事や夏はらい

三世流通の御眼にも
おはぐろの柄杪ともしらず佛生會

賣水のふもとや路次の井戸印

水賣の額もかけけり不二祭

是も雨けふの艾の虎御前

なゝ人がらのなつかしきかな
喜八よべおもとは來ずやほとゝぎす

畫讃
ほとゝぎすはやから衣から簟笥

泰室更名
新麥や道中腹の手際見ん

ほろがやの身は山住歟ほとゝぎす

蒼海の匂ひ嗅出す涼かな

祇園會や御歷〱の腕まくり

六月やしぶき眼鏡の厚氷

祇園會や江戸は引べき山もなし

染井翁御百箇日
けふも啼け般若波羅蜜の蟬の聲

然云君が髮無きが如、と聞へしは
万葉の上世・今のよには
逆さまの宵に髭剃る蓮見哉
晉子の風に學ぶ自贊。

清談林 哲阿彌句藻（坤）

秋之部

驚けと七夕竹のそよぎかな
初秋の既にはら／＼扇哉
桐一葉撫とも石の井桁かな
みそ漉に膝を容るやきり／＼す
あらがねの土にうへたるすまひかな
もゝ種の花に碎くや角力の手
踊らせぬ親しなければ魂祭
土器のゆかしき土や魂まつり

大道寺遊斎老人入道せられし時

氣にかゝる蜘の巣拂へ月の秋
朝顏の蔓やきのふの古元結
天津星入の小袖の膝や菊の酒
強く引く鷹鷲の弓やあたり年

米國の米の精なる角力哉
菊作我家を旅寐こゝろかな
溫泉の山や肌骨に徹る鹿の聲
かよひ路や馬追ひ虫は有ながら

十寸見蘭洲名あらため

蘭の香や障子を透し幕を拔け

此すりもの、龜成のし畫に二見事なる畫なりけり。

眞夜中に釣瓶の音や天の川
初雁や雲井に文字の一くだり
名月や駒とめ石もあからさま
降はるゝ花野を雲の岡雨
傘ともにかつぐや生姜市の人
生姜市千早振着の店迄も

脫さいふ狂言せし時

池ちかき下部が酒の紅葉哉
江戸繪圖の赤處は紅葉かな

射稽出精の人に

たゆむなよ殊に八幡の竹の春

こと國の尺を遣ふ歟きく作り

蚊屋を漏る銀の調度や天の川

良夜海望

くまなしや月の八ッ山九品佛

おどり見は御江戸の人ぞ合點歟

椋鳥や何を松戸の一やすみ

千代帋に折ばや菊ののし包

買色、地名の題を探て洲濯島を得たり。

月一夜爰も仕舞へのゆるしぶみ

又、音羽を得たり。

きぬ〲や九町は雫の深如海

名月や樒にとゞく湛汐

悼二既醉一

帷子もけふ脱すつる別哉

おもへばの人と成けり片月見

九日

是も又黄ぎくしら菊足袋の節

悼二木奴一

惜しや此人も三十九月盡

既醉一周忌

醒て後しるや月日も走り酒

三回の追善會

けふをまた八月盡と惜みけり

伊丹の人のもとにて

けふ浸す酒や故園の菊しるし

飛石も藥の臼やきくの庭

もみぢある寺の枝折や賣紅葉

耳ひとつ枕につぶすきぬた哉

裳裾ふみ又はふまるゝ踊かな

月におもふ昔は爰も海ならむ

狂ひしをぬきも捨ずや菊作り

既醉七回

艸雨に臥て鬼灯ほどの淚かな

煙草にも名あるをのむや菊の宿

置く露や石にも見ゆる國の風俗
人も來ず夜食もはてつ暮の秋
白露や有ほどの葉にひとつ充
喰あたる眞珠めづらしけふの月
角田川月に柳の有やなし

三圍奉納

春は初午秋は半の田面かな

眞崎奉納

掛稻やかけてぞ頼む御瑞籬
初雁や文月過て廿日あまり
其數も珊瑚珠とりや海の月
四間五間宿の月見や芳野丸
谷千疊手の舞踏や足かゝり

題　畫

うす頭巾かづくや月の維摩暮
初鴈や都の人は腹を見る

木奴十三回

阿羅漢を今や集て西の闕

秋かぜに凋まぬや此男へし
辻番も薄一株月見かな

百菴八十、翁五十、夢また八十。ちふ屋の店に居並びて俄を見る。

邯鄲の夢のまつりや九月蜩(幅)

本立山の和尚は越の産

近寄て越のすが日や夜の菊
仙境はひとへ隣やきくの籬

寄樓のうしろなればなるべし。

玉などの降るべき夜かも星祭
七夕の淸書見せよ小傾城

百和が退役のしらせを驚く。

七夕の短尺飛ばす風にくし

箕作貞曉を悼む。

ほや〱の團子も淋し盆の棚
秋を知るや蕣は葉を以て鳴

秋水如レ練

川は又しら絹ねるや龍田姫

落栗や先とり敢ず從者が笠
幾秋や硯洗の水白し
しかばねや瓦やあはれ花野原
前文あり略す
かりがねの我腮長しアまつ空
中村慶子七化浪華の名殘、摺ものあり。
七種や秋もめでたき拍子事
朝顏や隣家の讀書同じ處
夜中より荒手加はる躍かな
五十年稽古の下戸や月の秋
茶汁せし僕が手がらや朮の秋
禪刹
看板に夕日を掛て紅葉かな
、
金鳥飛で海に入れども紅葉哉
藥研堀不動奉納
山ほどに動かぬ時や秋の水

河東上るり本したゝめ遣す。
前文略す
汲や月としもますみのかよみ樽
前書あり略す
石となる星もあるよし漢河
星合や四ツ谷の宿は馬斗
我宿もむさし野近し女郎花
よつく見よ目はぢき草に秋の風
去ながら白髪は見せぬ月夜哉
丁子屋雛莚が盃をひらく。
秋の蚊に額撫るやしたみ酒
公家衆、秋參向あり。
土御門月見かとこそ聞へけれ
隅田むらや月の夜頃も十二三
万古燒秀平薙髮
よく澄むや嵐の後の秋の水
題虫籠
松むしや宵の間の一とちろり

菊咲くや淺黄に置る幕の露

髑髏贊

秋の野や頓て枯野の御用心

新宅や建もの足らぬ今朝の秋

枝豆のさやかに見るや今朝の秋

七夕や夕顔棚の香つゞみ

淚落ていし〱と成ぬ魂まつり

名月や蚯蚓の唄に蜘の舞

世ゝの人は遠し去年のけふの月

悼宗芸

初雁のまだ聞足らぬ日數哉

ひやゝかを知るや瓦に篦の音

小町畫贊

手燈の移りにけりな夜半の菊

一時を我揚詰やおみなへし

姫糊の身に知る衣や今朝の秋

索麪は糸に似むとの願ひかな

半造作引越

魂棚やせまい處は御堪忍

朝皃の花をほり出す葉の後ろ

木母寺

石垣よ瓦よ露の秋をしれ

秋の日や欄に暫く樹ゝに暫し

新月や萬戸頃しも磨の聲

松島をこゝろに畫く月夜哉

病人は起すもいかゞ夜半の雁

船中對禪僧

秋の海隻手漕なる小船かな

醉ざめの又の夜食や後の月

點滴の痕にはあらじ菊の露

名月に瓦を江戸の眞砂かな

秋葉万願寺

三尺に足らざる丈の案山子哉

弘福寺せがき

火とも見へ水ともおもふ西瓜哉

押上普現

しら萩や足もと迄も象の鼻

三阿坊が同菴を悼む。

秋風やされば屆かぬ舟よばひ

名月やおの〳〵虫の神調

北川子に一宿

朝霧や帆を手拭の寐起顔

名月や瞿麥の中なる世界まで

初雁やわんぱくものが灸の聲

菊といふ宗旨の花の咲にけり

悼二蓮馬一

極樂へ迎ふる駒の別かな

秋は又菊を本尊の菴哉

七十年賀

きせ綿に壽の字書べし菊の宿

洪水後、菴室再興の奉加

片手にて夜食ほどある零餘子哉

御屋鋪に聞ゆる夜有遠きぬた

月のある秋とおもはぬ野分かな

菊は花の又其上の野ぎくかな

船頭は帶をかしてや漢河

立出て見れば我家は虫籠哉

俵に大黒畫讃

物成や杉をこゝろの秋の月

乙矢にて速矢を立たる蜻蛉哉

蜻蛉や待合せては先へゆく

洲走や臍もかくさぬ生身魂

病後の吟

明ば又花見る慾や秋の月

家橋追善

馬具も雲井にかけれ秋の月

羊田や三膳喰ふて今少し

掛稲や先豐年の餝藁

悼二蓼太一

水蓼の花にかけ見ぬ小川哉

蓮馬三回

何〳〵と聞く人戀し虫の聲

日蓮の御へらず口や后の月

前書略

此事よ人の言けむ秌の暮

傾城と腰掛て見む秋の暮

つら杖や眼鏡の裡に秋の空

朝皃の晝顔に咲を名殘かな

何處となく月夜とみゆる野分哉

おもしろう賴ぬものゝ砧かな

茸狩や被めしてもかくれなし

新そばや犂の河津は勝手詰

むしこよりさきに崩るゝ燈籠哉

燈籠見や硝子世界羅綺世界

かさゝぎのさゝぎの橋歟天の川

白露や眠れる雀の羽にも置く

猪牙といふ船はしらずや男七夕

是迄の念佛はうそ歟今朝の秋

初秋やまた一手からほとゝぎす

柿ひとつ殘る梢や百舌の聲

毒むしの薬施すはな野かな

合羽干す旭に赤き蜻蛉哉

赤壁のはたごや淋し梅もどき

二代目連馬を悼む。

うき世何糸瓜のとくり酒德利

夜は灯のもるゝ垣根やからす瓜

川海老のくもらぬ腹や秋の月

うたるゝは古き棊盤の礎哉

中屋しき上やしきより野分哉

名月やうかれて岸の川鼠

たけ狩やひとゝせ京にありし時

茸狩や松原遠く川近し

前書略す

贏得たり梶原二度の梅もどき

笠島對坐

膝組にながき夜かたるいとゞ哉

聖天

葉を抱て通夜する合歡の紅葉哉

沾山玉兎集

名月や春は戀せし屋根の猫
菊の露にうたれて窪き硯哉
伊豆石に流たる酒や菊の宿

甲長子駿府御番奉送

月に見ん誠の眞乳すみだ川

傾城の畫賛

鼈甲のくもらぬ峯や秋の月
倒れぬも中〱耻のかゝし哉
笑ふ歯のこまかにみゆる角力哉
乳をのみし昔もありや角力取
拂へどもとりつく子あり小夜碪

畫賛

三客にもてなす柚子の鼎哉

無常

かの事の夕を諭せ風のつゆ
郊原に口なき虫の行衛かな

餞子賤別（前）

手をこめた事を聞せよ遠碪
掛稲の屏風立けり后の月

同甚が薙髪を憐む。

かゝれとて霜の色見る冬瓜哉
名月の手拭掛や利根の船
落栗のうれしき道に出にけり
起よきは寐よき始ぞ月の秋

此句は曲笠菴同案の句也。亡人の爲にこひ受ぬ。男 素兄

鬼つらは何を得たるぞ菌狩

冬之部

帆ばしらは沖に時雨のしの字哉
しぐるゝや顔に笘ふくものゝ本
時雨〱朧夜も有るしぐれ哉
茶の花にひとつ見知らぬ小鳥哉
聲しほる鳴海の沖の千鳥哉
郷黨のへんくつやめよ河豚汁
山里や雪もいろりのこぼれもの
あじろ守口びる動く斗なり

遠乘にそば屋が城の落葉かな
方便のむだ口たゝけ鉢叩
かほみせやいはゞ神代の山かづら
枯し埜中を月の桂かな
夷講やがて役者に打手哉
使者馬に蔵の岡見や駿河臺
橙やながれて年を待乳川
雨肉の鐺の間に〳〵時雨哉
人に能くもまれた上の捨衣哉
北へむくあたまも持たぬ海鼠哉

送別

おこたらぬ旅や六からむつの花

更名

鈴鴨の名やふりはらん終夜
山出しが酌の稽古やとしの暮
長唄の引のばしても師走哉
おし鳥や三人は乘らぬ池の船
鍋の中はいさしら粥や夜の雪

美濃将の力聞ゆるあられかな
芭蕉忌や其こんにやくの薄墨
はせを忌や十七文字の作り花
芭蕉忌や南无妙俳諧連華經
夜半に見し心つもりや今朝の雪
はたご屋の夜明のさまや煤拂
うそつかぬ侍おかし恵比壽講
つらみせや茶蕢が股もくゞる時
雪の日や觀音のうらによき泊
色分る五日十日の落葉かな
蹴ものゝ氷にはしる月夜かな

所月君に御名ㇾ奉ろ。

盆山や千里の居間の冬籠
老らくの玉を抱ける火桶哉
大雪や淺黄にみゆるものゝ隙

業平

是ぞ此つもれば雪も佛かな

康秀

吹からに爰は日本のちどり哉

塩はゆき夜食や須磨の浦衛

はせを忌や茶飯ながらもみの尾張

蕎麦前にこのわた入よふとん酒

日の延をはつかに知るや歳の暮

伊介が來りし暮

來かゝりし角力屈はむ追儺

能登屋路丸松島行脚より、予がかたに笈をおろせし歳

待春や爰も小島のとまり客

狆の畫

しのべとのうれしさ寒き時雨哉

山田氏屏風、傾城の畫

沖までは暫く返す千どり哉

古寺のかなものかるゝ落葉哉

大久保主膳正殿三回忌

おとゝしの寒さほどには無り梟

そば粉を人のもさへ送る。

うす墨にかく玉章の氷かな

若ひ衆に誘ひ出されて寒哉

餅花の指に忘れぬ乳房かな

ハルシヤ國より十寸六寸の馬を貢す。

年の背をはるしやの馬や一またぎ

青木氏加増を賀す。そのむかし拾ひたる扇のもよふ富士なるに書す。

不士高し雪の力はからずとも

木曾旅行の人に

寒しとも起よ寐覺の床離れ

蛙鳴に送る。

撓まじやゆふき紬の冬籠

言子送別

明がたは猶いさましや鴨の鈴

越前家の臣大道寺遊翁、九十二にて身まかりたまふ靈前に備ふ。此翁常に廬山烟雨湘江潮といふ句を唫ぜられしによりて

雪と雨と交ぜて浮世や墨流し

兒見世の東方朔や馬の足

かほみせや雪の花道からす飛

春禪万句

長安の大根漬や何萬本

千頂万句

けふ得たる友や何万何千鳥

堅 氷 御 川 馳

丁子屋もちつき

餅つきの唄は夜明ぬに出來にけり

歳 關 冠 化 革

求 年 疾 如 砲

達磨忌や亭主の尻の重き事

雪月花

突崩す炭は流れて雪の音

一体のからす扇

おもひ出て雪にも月夜からす哉

達磨の畫讃

盜むとも歳の尻目や市みやけ

福 内 年 蹤 押

鴛央(鴦)や凡夫の目には鴨番ひ

初雪やみそ漬の鯛もちたるぞ

はつ雪やけふは隙有金もあり

船よりも筏に見する時雨哉

宿かさむ我にひとしき一しぐれ

雪の日を番頭いかに樽拾ひ

百菴叟追悼

冬籠もう引越さぬ菴かな

貞德忌

立鳴の白く聞ゆる霜夜哉

とふふいと冬の旭や二寐覺

所思

かほみせや休のとしは贖帑子

初雪や詩の引出しに歌の棚

世の師走唯しら著や〳〵

壯士ないましむ。

心にもことしは着する帋衣哉
木がらしや椎の木の間の星一ッ
篊簗やこがらし通る跡の聲
捨し世に何が怖ふて頭巾哉

帆立貝な送るとて
豆腐煮て聞けや霜夜の板屋貝
三介がもどりし音や雪の暮

短尺稲荷奉納
拍掌や是も凋まぬ冬木立
鉢たゝき里に何乞ふ山の鹿

飯田水静老八年回
今朝筆もかまれぬほどの氷哉

渡部氏初七日
乘捨し手綱に殘る氷かな
時雨るや沖にもなやむ船の脚
芭蕉忌や晝短ふて句を不レ成

悼白抄　二句
ぬけがらと成て冷き巨燵かな
けふ見れば鼻毛も白し雪佛
かくれ家は袂にもある頭巾哉
かくれ家の心に淺き落葉哉

探題關羽
臥て見る偃月刀や竹の雪

探題風鎮
しのぶうち胸の板間の寒哉
夜のうちのいたづら者や門の雪
五色はむづかし歳の坐禪豆
ひとりよし二人は憎き巨燵かな
水鳥の胸はあし分小船かな
よの鳥のひとつ交ぬ千鳥哉
炭がまや里より白き水の筋
人の世のあなかしましや帋衾
馬乘のすゝ掃しかる大路哉
北風のちからや見ゆる不士の雪
起されて起たはむかし年の暮

古亟賤別
水仙の折句はいかに旅ごろも
旅送る小春や老の月は霞

十月晦
手を取てけふや小春の別れ霜
碑文谷
弘く說く花のひもんや冬至梅
行脚の後
足の出ぬとしの泊のふとん哉
茶は母に千種は醫者に衣配
大隱は懷中にある頭巾かな
山里や世のよきよりもこぼれ炭
かた炭のたどんに添ぬ夜中哉
千光追善
くだら野の招き返さむ艸もなし
染非
落葉まで手厚き御下屋鋪哉
檻干を折る顏見世の勢ひ哉
かほみせに起る家あり鉢たゝき
待人は轉んで來ぬ歟雪の宿
めし鉢をたゝく夜寒し鉢叩

宋の世の鷹の畫絹や枯かしは
掛取に松魚合せん繪空事
ふろ吹のあまり甞るやみそさゞゐ
一蝶がかしま躍やすゝ拂ひ
くらき夜ぞ靜にまはれ鉢たゝき
使者の間に使者の心や年の暮
畫讃
猫は寐て鼠の音の時雨哉
むらさきのゆかしきものや昔足袋
白足袋や室町どのゝ埃だらけ
海鼠かな汝元來痰氣の時
海鼠たゝみやこがね花咲むしり菊
しぐるゝや是も枯葉の鴛桐油
岡持の形にしたがふ海鼠哉
埋火やいざ明方のみやこ鳥
うづみ火や曉ごとの探りむめ
埋火や先鼻をよせ耳をよせ
芭蕉忌や鯛喰あきし人の果

（一字闕）拍子ぬけたる朴の落葉かな

朝比奈の賛

酔ざめやかたじけ菜汁今朝の霜

白猿に送る。

朔日や舞棧敷は音にも聞け

賀

雪のみのかけても強き屏風哉

古札よまてこと傳ん發句屑

能く買うて往けや師走の發句屑

書讀

忘れよや年の上るり十二段

かどみとぎ加賀までさせや年の關

たま／＼書を披て燈下に讀む。子列子居二鄭圃一四十年、無二識者一。國君卿大夫師レ之、猶二衆庶一也。嗚呼 露入道晩得、はるかいに遊ぶ事四十余年、人その高調を知らず。積年の草稿むなしく淸談林の文庫におさめて、蠹魚の腸をこやさんとす。晩叟世を去て星霜既七年。門人等是を歎き、ひたすら素兄に乞ひて書寫せしめ、やがて梓に行とにはなりぬ。蒿目の俳遊客あながちに是を論讀せよと言にあらず。伯牙が調をよく聞知たらん人には、花晨月夕の友ともなるべしと、こゝに筆を擱くものは誰や、千束の隱士抱一堂屠龍。[illegible]

寛政戊午秋日

寛政十年戊午玄冬

東武淺草諏訪町 彫工 星野淸八

瓢簞集(へうたんしふ)

初編

嘯山
貫友編

瓢箪集序

人生百年にて七十古來稀なり。宋屋叟と予は四十年風雅の友たり。指をかゞめてかぞふれば、其餘には類ふべきもあらず。それがあいだに假初の爭ひをだもせで、明くれ翠筆に膝を組けん事、實に渺茫として又まのあたりの樣におもほゆるは、またく老屈の故にやあらん。叟沒してすでに四とせ、其徒萑亭主人遺稿をさぐつて、ほくの初編なるものを選み出し、梓に鏤んとす。予その志の厚を感じ、且交りの久しきをもて、爲に序してこれをひろむ。瓢箪は其居を用ひて題号とせるなるべし。叟は句達者にして數万の什あなれば、相續ひて二篇三篇の出なん事、また樂しからずや。嗚呼ひようたん〳〵、果報人なるかな。かの張果郎が瓢箪より出せる駒は何にか用ひけん。ひようたんしうの月花は、永く世に傳へて朽ざらむ。予蝿拂ひを斜にかまへて曰、善哉〻〻、瓢箪集辨レ道吐レ眞。又曰、萑亭主人是瓢箪先生之千里駒、喝。

明和六歳丑五月上浣

西山隱士雅因

㊞　印



東隄富之書 印 印

瓢簞集　初編

平安　望月宋屋著

春部

歳首

初空や机にうつる日枝の影
昨日は忘れ翌を笑へ花の春
幾年歟流れ次第の水若き
蓬萊のかざりすがたや朝朗
莵角して今朝と成けり門の松
門松や我衰へのわすれ草

奥羽の行脚二とせを經て草庵へ歸り、新年を迎へて

愚さは旅と思はず宿の春

梅

雑鳥の聲は分れてうめの花
はなれ鵜の岩に顔出すや梅の花
行暮てうめに動くや馬の鼻
水音や野咲の梅の右左り
梅咲て火桶の繪の具さめに鳧
藪陰に風を握るや夜の梅
編笠は望ある身歟むめの花
さく梅の梢も白し都富士
紅梅や手染のきぬの涼

柳

青柳をくはへて長し馬のつら
馬の尾に柳の風や今出川
鳥たつて雨のこぼるゝ柳哉

初午

初午や畠几ゆく水薬師
初午や鼠も空へ深草野

春雨

春雨や蒲團に落る鼠の子
春雨や待も惜むもあらし山

蝶

麥菜種見分て蝶の行衛かな
口をたゝむ蝶の翅やくれの鐘

鷹司殿へはじめて召れし時

拱ひて雨の蛙や書院迄
炭賣の通ひの上やつくづくし

櫻

殘る雪消て濁すか賀茂桂
白魚のいかで遊ばぬ京の水
拍子なき涅槃參や方廣寺
弓張にむかふて入りぬ夕雲雀
わか草のすら〱樂し雨の明
春の野やしらぬ男に借火繩
見る度に藥共思ふ櫻かな
雨の日やさくら案じて暮に㒵
方丈へしらぬ人ゆくさくら哉

臨川寺

水滔ゝ松も櫻もゆすりけり

嵐山

網打や花にまぶれし女容
花ともに戸無瀨汲とる野風呂哉
川上は何を炊ぐぞ花の波
花筒の青侍や築地の內

庚申

花の道三のましらが枝折かな

巳の春又よし野へ行、多武峯を越るほど、烈しき風雨にあふて谷川へ落、しばらく氣を失ひて蘇る。面あまた所疵つき、辛き目見ながらも

養ひつ殺す歟花の雨おろし
足もとの怪我もよし野の盛哉
吉野出て虻の離れぬ袂かな

奥仙臺國分寺木下藥師如來の堂前に石碑を建て、不斷塚と号す。其壺中へ、曇るまじ木の下陰に月不斷　石面に自ら筆せし句

極樂や人の願ひの花のかげ

琴佐子が越前に歸るを送りて

やがてきく聲に名殘や歸る鴈

再び住吉浦に遊びて

覺ある石迄ゆかん汐干哉
出替りや古主の門を三ッ輪組

安良の御代のすがたや荷ひ太刀

遲日

日に花に物忘草昨日今日

子園母七十賀

養ひに程こそあめれ菊の苗

鳴海鍋世七十賀

升搔を松の影なる種下し

山吹や窓に非人のさし向ひ

夏部

更衣

人の氣に風や通ひてころも更

寐所へ袷はいかに朝ほらけ

牡丹

花の後世にゆるさるゝぼたん哉

見る人の手を拱くや牡丹畑

時鳥

戀わたる雨夜になりぬほとゝぎす

杜宇まつや鼠のかぢる音

ほとゝぎす額へかゝる夜の雨

隣にも雨夜の手燭ほとゝぎす

明方や互に手帋ほとゝぎす

夜盗にも天の與へや郭公

下闇や乞食の灯すほとゝぎす

田植

白鷺も袂をけがす田植かな

老が腰共にまぎれて田植かな

松江すり物に

假初の門田となりぬもらひ苗

螢

追つめて要のはしる螢かな

飛下りて肴につかむ螢かな

因幡へ出火見舞に

棚橋に怪我はあらじな螢の火

五月雨

せめてもの鳥きく夜あり五月雨

五月雨や夜かと思へば炊ぐ音

さみだれや川を隔し友心

霪雨に新屋丁に訪て

川音や寐覺に變る梅の雨

假橋や人に抱つくさつき川

望月庄左衛門が家に買けるに

雨に猶白山をしる歟蝸牛
日盛りや一足づゝにかたつぶり
白鷺の芦間がくれや水粽

伏見夜舟

蚊の聲や酒うる舟に附て來る

武然がさぬきより歸りし日

雨をうけ日に補ひや菱の瓜

閨怨

誰思ひ齒形の殘る塗團

六朔

鶯も連て歸る歟氷室守
掛鯛の煤は流れて暑さ哉

炎天

水書の偏を失ふ暑さかな
楔うつ車大工のあつさかな
珍客に下座をまいらす暑さ哉
塩鳥や水にうきたつ雲の峯
凌霄の一輪光るあつさかな
いけながら炭火の消る暑さ哉

雲の峯險しくも日の光かな
印籠の薬も湧や雲の峯
巡禮の浴衣おそろし雲の峯
我家に居所捜すあつさ哉
炎天に美人の皃の定りぬ
柊を蜂の飛のくあつさ哉
蓮の葉の裏迄しらむ暑さ哉

糺森

水すくふ我手にある歟蟬の聲
儘ならばこゝに寐もせんすゞみ床
日盛りや乞食の寄る賀茂の水
とろ〳〵と扇も眠るすゞみ哉

相國寺懺法

松風の鉢や聞知る蟬の聲

薩摩の猶云を送りて

帷子のうらなくぬるゝ袂かな

武侯賛

優ゝと羽扇に蠅を拂ひけり

月に蝙蝠の畫に

誰やらん扇のうごく月の影

小槌より人を數百うち出したる圖

古家に皆主つかん飛蟻かな

福祿壽の頭に綱付て布袋の引繪に

から入梅の舟引人よ荷にまけな

千而が娘の死せしをいたむで

ほり捨し青鬼灯もしなへけむ

御祓

けふ烁へ越すや茅輪の〆くゝり

秋部

初秋

はつ秋や自然と蟬の聲變り

桐の葉を被きて蟇の命かな

七夕

梶の葉に何を遊女の願ひ書

獨寐やふけて見に出る天河

織女に見せたき裂や本國寺

星合に雲な汚しそ瓦やき

六道

老が手に誰から呼ん迎ひ鐘

圓光寺智山禪師迁化

魂棚の中に紛れぬ佛かな

世を見れば乳を土器に魂祭

送火

山の端に殘る暑さや大文字

しらぬどし夫婦と妖て踊かな

秋戀

殘る蚊もせめて待夜の力かな

一生を判じ乘てや捨團

直にたつ竈馬の髭や風の中

八朔や烁を定し虫の聲

搗臼を見こして蓼の盛哉

撞捨の芭蕉に障る夕かな

芭蕉翁五十年忌

道側の槿はみちのあかり哉

雲母坂

京の氣のはなれ切たり鹿の聲

溪川や氣に流れこむ鹿の聲

吸売の膝に烱るや鹿の聲

月

旅一夜草履求る月見かな
人もしれ今宵を月の晴曇
年に一夜晴のもの哉月見哉
名月や花には關す隱家も
名月や夜すがら替る水の面
名月に曬ひ合せり須磨の塩

布袋贊

名月や子ども寐させてよい機嫌

堀川

牛房引都女や夕月夜

見臺に向ふ圖

月影に尋入ばやむかし道

重陽

杖をつく友は誰〳〵けふの菊
山城の谷や久しき菊の露

信濃の大鶴、任官を賀して

杯深く錦となりぬ位山
取盡す梢に柹の入日かな

爲朝像

鬮取も得手は有けり左さし

十三夜

未滿ぬ月に余波や人ごゝろ
捨人も看經遲し後の月
かくしけむ桂男の額際

老懷

身の程もいつ究むべき種茄子

鬼灯畵

秋たつや末摘花の屋敷跡

山崎尤哉を悼む。謠師なれば

叢や一ふしづゝをよるの虫

土佐の筆粟に鶉贊

深艸や鳴子も付ぬ人ごゝろ

冬部

時雨

山姫の手をこぼるゝや初時雨
雞の尾に入日はさしてしぐれ哉
馬の尾に拂ひ行なる時雨哉
軒口の亂るゝ穂屋のしぐれ哉

しぐるゝや机に上る鶺鴒
さよしぐれ又寐覺けりたばこ盆

麥蒔

麥蒔や五人が中に五升樽

木枯

凩や北より動く馬の耳
こがらしや松前物の魚むしろ

仙鶴七回忌

埋火の底に殘りし光かな
友送る手燭の影や石蕗の花

鶴の田に遊ぶ繪に

鷹匠も回らぬ道や神の領

明心居士百年忌

霜と月行道やすし十五日

畫賛

五位鷺の流れに添や北まつり

朱英子に訪れて

聞初て忘ぬ物ぞ鷹の風
石龜の世へ手も出さず冬構
初雪や風にもまるゝ櫻ほど

雪

初雪やいか様草の有所
はつ雪や器量の分る沙の上
はつゆきや居所替る蘭の鉢
雪ふりやよごれをかくす草の庵

寛保二年十二月五日の夜大雪ふる。折しも草庵歳暮の會にして、人々あまた頭さしつどへて酒くみ居たりしに、ふくるに隨ひて次第に深う積來る程に、はし居して詠さうじ明はなし、こや豐年の瑞ならまし、滅路の空はいかゞあるらんなど云もてさはぐが中、近き限はいぬるもあり。牙院のぬし、予が簑を打かけ杖取て出しが、さみに立歸り、穴うしや〳〵、はや此わたりにてころびにたり。よしや今宵はこゝに泊り定めてんさ、わらぢさくぬぎて、こたつに踏こめる、いさおかし。たゞにやはと、殘れ

ろ人と共に又放言す。

雪二尺花のみやこのよし野哉

煤掃　すゝ掃や榮螺の奥に水の音

すゝ掃や菴に過たる大階子

歳暮　一とせの手柄は老ぬ物わすれ

拾人の何買に出る年の市

花も實も忘て年を糸瓜の皮

月花の女少ナしとしの市

鴨の脚継やうき世のとしの波

住馴て尊き除夜の日枝おろし

一とせの胎内潜り滿にけり

稲妻の隠れすますや年の底

とし波や芦の達磨の風まかせ

韋駄天の足弱つれてとし暮ぬ

年もはや賣るゝ馬の蛭子薦

幾年歟光の陰にふるや帋

一年も十綱の橋の手ぐり哉

節分　節分も佛と誓ひし老にける

厄拂こゝろの鬼も連て行

年内立春　鞍馬荷に花の匂ひやとしの内

煤取てみどりやうつる青疊

老懐　雷木の減つゝも亦春ちかし

雜躰

北野　曙や梅より分る一夜松

月雪に見しられ衣きそはじめ

奥に春を迎へし歳　雲水の今年すがたや日の烏

犬の猿引を吠る繪に　はつ空や松に輝く金華山

春情　福引に何を爭ふ嫁舅

巴人師の幼息を悼みて　聾なふて思ふ方より小蝶哉

草の芽にうたてき暮の蹄かな

西賀茂神光院弘法大師四十二歳像

摘草の芹は除る歟祖師の膳

清水坂

紅梅やゆかり久しき阿古屋株

半身達摩圖

川越の尻を見せぬやはなの浪

富士畫賛

春の日やすそ野を渡る鶴の聲

多武峯

紫や雲と抱あふ藤の門

花〳〵と花をちからの一期哉

感ずる事ありて

月花と一日借りの座鋪かな

宮嶌奉納

神灯の影や朧に蟻の浦

元御室

裏御所やさくらの匂ひ静なる

窗鳥初ての日

唯歩め終には解ん雪の道

仁和寺

夕暮や帶〆直すさくらかげ

野村又三郎追悼

出替りを誰もおしみぬ太郎官(冠)者

故郷二哥がすり物せしに

月花の種や難波津淺香山

旭峯をいたむ。

長旅やわがぬる甲斐も玉柳

堀川や柳をはさむたゝみ傘

山寺の帋帳まで來る蛙かな

諸師のもとより盃の賛頼み來りし

に

月花にヿミろ(廻シ持チ香ミ)舞うたふ

梅畫賛

鶯の來啼や補之が硯まで

賈友が薩摩へ下るを送りて

御代の春鬼界が島も市たゝん

葉櫻や志賀の都の莚織

堅摸葉が打ちこぼれつ郭公

母の五十年に

五月雨や晝寢の夢と老にける

寛留妻をいたみて

入相に思はず咽ぶ蚊やり哉

やごとなき御會席に侍りて

茂り葉のひとつになりぬ雨の後

敬雨七回忌

うの花や暮ても人の日に殘る

申輔を悼む

人に馴て消し螢よ水むけん

弟に別れし人のもとへ

一雫かゝへて蓮のうき葉哉

千梅松島行脚集へ

菅薦の三符に寐る人蚊や追し

夏野繪贊

山路來て心便りや瓜ばたけ

さみだれや常來る人を思ひ出す

壬戌の六月六日、宋阿老師の訃な東武より告來りしに驚きて

鉾闇もおくれ先だつ南無佛

追悼

數ふれば花の數ある紫苑かな

去年に似ず昨日に變る雲の峯

壽老人川わたりの圖

夏川にこゝろまかせやはなし龜

布帯、子をつれて川渉の繪に

水艸やこゝろの闇を飛ほたる

野葉がはじめて來しに

さよふけて居所替る凉かな

長崎繪の蘭に

雨を得て追ぬく物よことし竹

羅人一周忌

秋來ぬと鼻に告るや草の風

目にありや去年わかれし組踊

既老境に入て中村先生へまみへ、書を學ぶの日、みづから嘲り自ら祝す。

道筋よ深ヶなばてらん十九初夜

秋田湊三島明神領地藏堂に、社中余が石碑をたてゝ行脚の節の句を刻む。

秌田領の穗波に寐るや鳥おとし

心あれ今宵の星に鐘つく事

さぬきへ趣(赴)く首途吟

降ながら小春の笠に入日かな

漕出すや賀茂ははるかに川千鳥

姫路にて同行八百彦象友に分れて、金毘羅へ趣く留別

千鳥ひとつ山路へわたる心しれ

室明神

室に詣賀茂の時雨ぞ思ひ出る

白峯

君やよしと捧げし僧も神無月

丸亀留別吟

順風也頭巾御免と立わかる

鍾馗贊

誰と見てよけて通るぞ厄拂

河津・俣野角力畫

めざましや雪をかつぎし竹の音

いたゞくは我失物やすゝ拂

奥羽行脚首途の吟

夜となく月に喰入れ杖の士

白河關

白河に袖かき合すしぐれ哉

淺香沼

冬枯にいづれと分ん花かつみ

佐藤兄弟婦人像

里人もこゝへ手向よ寒の紅脂

實方馬塚

くだら野や杖に音ある馬の骨

羇中

物音の夜な〳〵變るしぐれ哉

松島鳴泉亭へ麥飯にて招れしに、廿一日なれば

御影供やいろはの恩も麥めしも

衣川

蟬の羽やこぼれて戰ぐ衣川

石の卷にて岡潮にあふ。

人並に旅馴衣更てけり

小野の途中に時鳥を聞て

馬上也初ほとゝぎす御免〳〵

九十九橋

栗さくや白髮ばらけてつくもばし

達谷窟

日盛に角は出さじかたつぶり

上太子

いかならむ太子の耳へほとゝぎす

江刺机墨菴に碑をたつ。

假初を大木の陰や蟬の宿

同所留別

帷子の袖をさかるゝ別れかな

南部病中吟

旅に病て蚊の膓見るも心ほそ

盂蘭盆

魂祭ぬしは誰を歟くりや川

角館の道にて大風雷雨にあふ。一晝夜の艱難言語を絶す。

したらてん尾花に虫の命哉

湊の渡川亭に舎りて

川隈を便りに鴫の假寐かな

象潟

象潟の冬は美人の墨繪にて

尼剝川の實を記す。

北國や女の髩をわり頭巾

亡師墓、淺草帥随寺に詣て

袖しぐれ百二十里を墓參り

安部川

茶の花も帋子も見へて冬近し

柴屋寺

物音は木の葉ばかりぞ柴屋寺

遺集校考なるの日

懷舊雨吟

月花にほつくり往生せられたり　嘯山

　壬生千本の念佛も西　買友

[イト]稚達を肩車ほつほ(京集)寢長閑にて

　又鶴がりん氣いさかひ

濱風の隙吹拂ひ〳〵

　松こんもりと生つゞきぬる

[ウ]的場から反箭尋ねに奴ども

　飯綱のはやる家中そは〳〵

着の儘の帷子ながら連て出て

　空おそろしやアノ雲の峯

ゆら〳〵と鹿頭横たふ勢田の橋

　鯉の鱗を壁に黏らん

板疊それさへいたきから風に

　御文章や御開山様

まのあたり越後の國の七不思議

　武者修行とて野の月に寐る

露霜に褌の虱さらしおき

　鉢唐がらし扨も照たは

[ナ]山も川も古き都の道なれや

　揉にもふだる衆徒五六百

つら〳〵と今見る如く講じける

　やつぱり降歟傘抑く音

夜興引る狸の圖に餌を入て

　系圖が武士を捨させぬ也

姿には擱取なる口もあれと

　あかずめでたき髮のかうたう

新艘の船美々しくも柳ちる

　大内崩れの世をうたふ妹

印刓れ裂のみ月の鏡にて

　そりや繋驢橛の屋破が起つた

[ウ]かくまふてあろとは本に神もいさ

　しら重ね哉青簾哉

嵯峨淳和淸味陽成後陽成

　さは去ながら白氏文集

選なす心の花の匂えとぞ
猶や祝せむ行末の春

明和六年己丑春三月

彫工
京油小路下立賣上ル町
西尾重助

太祇句選

嘯山
雅因
編

太祇句集序

交は易からぬもの也。始は剃頭にして半に寇歸たるの類、古より少からず。太祇はもと江戸の產にて、中年都に上り、住心やよかりけむ、其まゝに廿餘年の春を迎へ、秌風のたつを、さまで蓴鱸をも思ず。本より山水の癖ありて、みちのく・つくしの果迄も杖を引、弱かりしより好る俳諧をもて生涯の樂とす。はた其好るや樂るや尋常にかはりて、行住座臥燕飲病床といへども、日課の句を怠ず。まいて誰某が會など云には、一の題に十餘章を並べ、三に五に及るにも此規矩を違ふ事なく、もし趣を得れば上に置下になし、あるは中にもつゞりて、一句を五句にも七句にも造りなし、唯意をうるをもてせとす。故に其篇什佳境に入もの許多也。又連ね句をなすにも、いつも沈唫する事他に倍せり。こゝをもて何れの卷にも造語渾績の率易なるを見ず。惜哉去年の秋文月の半より半身痿るのやまふみ感じて、幾程なく葉月上の九日に、折からの草の露と消失ぬ。平生友とせる人あまたなる中に、わきて嵯峨の宛在主人と予と三人雅莚を共にせし事、亦復他に類ふべきにあらず。あるは雨しめやかなる春の夕、はた雪面白き冬の夜など硯にむかひて、おのがじゝ得たると得ざるの自らなるをしらべ合、亘燵に倚居て櫓の上に杯をめぐらし、果ゝはなき跡の事まで語出て、吾儕かうやうに此道に執深うとゞめぬれば、誰にまれながらへ殘たらん者、志を一にして草稿を選出、世に殘さましかば、生に死に改ざるの交ならんかし。質もさ也やなど、五に契り約せしとも亦幾度にか及けん。されば今雅因とゝもに遺草數十卷を閲して、その中より先初稿を編緝して世に廣うせんとす。事成の日雅因亦來會して、一は此功を終るを喜び、一は多からざる心友の欠ぬるを嘆じけるに、予頭を掉て、それもさる事なれど、兄も我も元來二腰を横たふ身ならねば、生前剃頭の交は思懸ず、されど風雅の可否を討論せしより外、さらに市道の交をなさゞりしがうへ、契し事のかうなんとみに成ぬるは、易からぬ交のよく終あん也と、祇もまた我等が相倍ざるのこゝろを、黄壤の下に眉を開ざらましや。遂に

此語をもて序とす。

明和九年壬辰夏五月

浴　嘯山書





太祇師年ごろいひ捨おかれしほくの草稿なるもの、みな我に譲られ侍る。蠧魚のためにむなしくせむ事本意なく、選を葎亭・夜半亭の兩匠へまかせ、老師生涯のあらましまで序跋に述、一冊となして給りぬ。さるを竹護叟の清書を乞、さくら木にゑるさて、今の不夜庵のあるじ、師の俤ないたづらに書うつし置れし反古を、あながちに所望して、こゝに彫刻し侍りぬ。

菸　獅


朱雀柳巷
歌酒常酣
叟之雪月
覺不夜庵
嘯山題
五雲訪泌化寫

太祇曾而小言すらく、青丹よしなら漬と云んより、なら茶と云んこそ俳諧のさびしみなれ。焦遂が五斗はそちにさはがし。蕉翁の三斛こそ長く静にして鉄杵を鍼に磨し、點滴の石を穿つをしへにも叶て、我業の卒る時もありなむ。かりにもおこたりすさむべからずとて、佛を拜むにもほ句し、神にぬかづくにも發句せり。されば祇が句集の艸稿を打かさね見るに、あなおびたゞし、人の彳める肩ばかりにくらべおほゆ。げにやいせのはま荻のおきふしにもふんでをはなたず、勃窣として口よりいづるにまかせ書おけるものにしあれど、なにはのあしのいづれ刈すつべきも見へねば、葎亭・宛在の撰者も眼つかれ、こゝろまどひて、まめやかにゑらみ得べうもあらじかし。余二子にいふ、さははつべき期あらめや。大かたにこそあらまほしけれ。たゞ四時のはじめごとに出せる五六帋がほどをゑらみ取て初稿と題し、木にきざみて世にひろうし、二稿・三稿といへるものは、年を經てもほるとぐべきわざなれとすゝめければ、二子もうけひて、かしこうこそ申つれ、さらば其ことを世にことはり聞へよとあるにぞ、やがてしりへにかいつく。

明和壬辰九月

蕪村書

不夜菴太祇發句集

春

目を明て聞て居る也四方の春

饅喰し我にもあらぬ雑煮哉

元日の居ごゝろや世にふる疊

元朝や鼠顔出すものゝ愛

年玉や利ぬくすりの醫三代

とし玉や抄子數添ふ草の庵

けにも春寐過しぬれど初日影

七草や余所の聞へもあまり下手

子を抱て御階を上る御修法哉

初寅や慾つらあかき山おろし

春駒や男顔なるおゝなの子

春駒やよい子育し小屋の者

萬歳や舞おさめたるしたり顔

万歳やめしのふきたつ竈の前

羽つくや用意おかしき立まはり

はねつくや世ごゝろしらぬ大またけ

北山やしさり／＼て殘る雪

家遠き大竹はらや殘る雪

梅活て月とも侘んともし影

虚無僧のあやしく立り塀の梅

春もやゝ遠目に白しむめの花

な折そと折てくれけり園の梅

紅梅の散るやわらべの呑つゝみ

誓願寺

紅梅や大きな彌陀に光さす

東風吹とかたりもぞ行主と従者

春風や薙刀持の目八分

糊おける絹に東風行門邊哉

投出すやをのれ引得し胴ふぐり

情なふ蛤乾く余寒かな

色／＼に谷のこたへる雪解かな

里の子や髮に結なす春の草

丸盃に八幡みやげの弓矢かな

元船の水汲うらや露の臺

花活に二寸短し富貴の臺

朱を研や蓬萊の野老人間に落

こゝろゆく極彩色や涅槃像

ねはん會に來てもめでたし嵯峨の釋迦

引寄て折手をぬける柳かな

善根に灸（炙）居てやる彼岸かな

起ゝに蒟蒻囉ふ彼岸かな

川下に網うつ音やおぼろ月

海の鳴南やおぼろ〳〵月

月更て朧の底の野風哉

島原へ愛宕もどりやおぼろ月

歎て行キぬけ寺やおぼろ月

連翹や黄母衣の衆の屋敷町

實の爲に枝たはめじな梨の花

皮ひてし穢多が入江や芦の角

江をわたる漁村の犬や芦の角

野をやくや荒くれ武士の烟草の火

畑うつやいづくはあれど京の土

耕すやむかし右京の土の艷

山葵ありて俗ならしめず辛キ物

春雨のふるきなみだや梓神子

はる雨や芝居みる日も旅姿

春雨や晝間經よむおもひもの

徳門より春雨の句聞ゆ。それに對す。

春雨やうち身痒がるすまひ取

聲眞似る小者おかしや猫の戀

草をはむ胸安からじ猫の戀

おもひ寐の耳に動くや猫の戀

諌めつゝ繫ぎ居にけり猫の戀

遲き日を膝へ待とる番所かな

春の日や午時も門掃く人心

扨永き日の行方や老の坂

遲き日を見るや眼鏡を懸ながら

長閑さや早き月日を忘れたる
矢橋乘る娵よむすめよ春の風
春風にてらすや騎射の綾藺笠
燕來てなき人問ん此彼岸
ゆた／＼と畝へだて來る雉子かな
雉子追ふて呵られて出る畠哉
葉隱れの機嫌伺ふ桑子哉
髪結ふて花には行ず蚕時
華稀に老て木高きつゝじ哉
蚕飼ふ女やふるき身だしなみ
小一月つゝじ賣來る女かな
御影供やひとの問よる守敏塚
菜の花やよし野下來る向ふ山
猪垣に余寒はけしや旅の空
川の香のほのかに東風の渡りけり
東風吹や道行人の面にも
下萌や土の裂目の物の色
やぶ入や琴かき鳴す親の前

出替や朝飯すはる胸ふくれ
親に逢に行出代や老の坂
出替りの疊へおとすなみだかな

春江華月夜

花守のあづかり船や岸の月

きさらぎの比嵯峨の雅因がいさなめる家見にまかりけるに、そこらいまだ半なり。木の工ミどもきそひはげみぬる其かたはらに、むしろ設、酒うち呑居たるに、句を乞れて

大工先あそむで見せつ春日影

又彌生廿日餘行ぬ。元の竹林にあらず、もとの水にあらず、おかしう造りなして宛在樓に(マヽ)たり。

すみけりな椀洗ふ水もありす川

中風めきて手痿ける春

不自由なる手で候よ花のもと
付まとふ內義の沙汰や花ざかり

雛の隣みこさぬ御身躰
ふらこゝの會釋こぼるゝや高みより
寒食に火くれぬ加茂を行や我
介子推お七がやうにならればけむ
うぐひすの聲せで來けり苔の上
うぐひすや聟に來にける子の一間
うぐひすの葉の動く次の篠がくれ
江戸へやるうぐひす鳴や海の上
鶯の日には篩なき高音かな
人をとにこけ込鶏や春の水
行舟に岸根をうつや春の水
堀川や家の下行春の水
穂は枯て接木の臺の芽立けり
接佗ぬ世になき一穂得てしより
奉る花に手ならぬわらびかな
紫の塵やつもりて開屋もの
つみ草や背に負ふ子も手まさぐり
摘草やよそにも見ゆる母娘

來るとはや往來數ある燕かな
あなかまと鳥の巣みせぬ菴主哉
落て啼く子に聲かはす雀かな
あながちに木ぶりは言ず桃の花
大猫の岩におそるゝ霞かな
ふりむけば灯とぼす關や夕霞
つぎねふの山睦じきかすみかな
田螺みへて風腥し水のうへ
山獨活に木賃の飯の忘られぬ
崖踏行寺の背や松の藤
朝風呂はけふの櫻の機嫌哉
したゝかなさくらかたげて夜道かな
塵はみなさくら也けり寺の暮
咲出すといなや都はさくら哉
京中の未見ぬ寺や遲櫻
身をやつし御庭みる日や遲櫻
あるじする乳母ふ御針ふ庭の花
兒つれて花見にまかり帽子哉

ちる花の雫の草鞋や二王門

歯なたゝ事三十六、我白樂天にならふ。

歯を鳴し何成先立り花の陰

宗屋に枝引こさまめなる叟、みちのく・西の海邊より近所はさら也、花に凉に我わたり灯籠の夜までもらさず。此春身まかりけるな猶幻に有心地す。

死れたを留守とおもふや花盛

蛙居て啼やうき藻の上と下

出代や厩は馬にいとまごひ

出代やきのふからいふいとまごひ

養父入の兒けば〱し草の宿

やぶ入の寐るやひとりの親の側

商人や干鰹かさねるはたり〱

長閑さに無沙汰の神社回りけり

からくりの首尾のわるさよ鳳巾

落かゝる夕日の鐘やいかのぼり

屋ね低き聲の籠りや茶摘哥

世を宇治の門にも寢るや茶つみ共

桃ありてます〱白し雛の殿

華の色や頭の雪もたとえもの

御僧のその手嗅たや御身拭

百歳賀

口馴し百や孫子の手毬うた

太宰府の神池に鳬・鴈群をなす。

飛ためにもどらぬ鴈を拜みけり

陽炎や景清入れし洞の口

墨染のうしろすがたや壬生念佛

爐ふさぎや老の禮嫌の佚事

春の夜や女を怖す作りごと

節に成る古き謡や傀儡師

山吹や葉に花に葉に花に葉に

腹立て水呑蜂や手水鉢

人追ふて蜂もどりけり花の上

聲立て居代る蜂や花の蝶

見初ると日ゝに蝶みる旅路かな
苗代や日あらで又も通る路
御供してあるかせ申汐干哉
女見る春も名殘やわたし守
春ふかし伊勢を戻りし一在所
夜歩く春の余波や芝居者
行春や旅へ出て居る友の數

夏

物かたき老の化粧や衣更
いとをしい瘦子の裾や更衣
綿脱ておます施主有旅の宿
かしこげに着て出て寒き袷哉
行女袷着なすや憎きまで
能答ふわか侍や青すだれ
盜れし牡丹に逢り明る年
猫の妻かの生節を取畢
夜渡る川のめあてや夏木立

甘き香は何の花ぞも夏木立
高麗人の旅の厠や夏木立
孑孑やてる日に乾く根なし水
景清は地主祭にも七兵衛

呑獅老宮を送る。

餘花もあらむ子に教へ行神路山
西風の若葉をしぼるしなへかな
みじか夜や今朝關守のふくれ面

ある人のもさにて

めかしさよ夏書を忍ぶ後向
青梅のにほひ佗しくもなかりけり
抽てむめ勝けりな寺若衆
青梅や女のすなる飯の菜
傘燒し其日も來けり肩が雨
さみだれの漏て出て行庵かな
つれ／＼に水風呂たくや五月雨
歸來る夫の咽ぶ蚊やりかな
蚊屋に居て戶をさす腰を譽にけり

事よせて櫚へさし出す腕かな
蚊屋くゞる今更老が不調法
やさしやな田を植るにも母の側
早乙女や先へ下りたつ年の程
蚊屋くゞる女は髪に罪深し
蓴菜やしるよししける水所

閨怨

飛螢あれといはむもひとりかな
三布に寐て蚊屋越の蚊に喰れけむ

御卽位きのふありて、けふは庭上の御規式の跡拜し奉るさて、みなつどひまふのぼるを聞て

蚊屋釣て豐に安し住る民
蚊屋釣や夜學を好む眞ッ裸
蚊の有に誇るふりや稚がほ
蚊遣火もみゆや戸ざゝぬ門並び
下手乘せて馬もあそぶや藤の森
妾が家は江の西にあり菰粽

武士の子の眠さも堪る照射かな
月かけて竹植し日のはし居哉
しらで猶余所に聞なす水雞かな
妾人にくれし夜ほとゝぎす
追もどす坊主が手にも葵かな
葵かけてもどるよそめや駕の内
碓の幕にかくるゝ祭かな
低く居て富貴をたもつ牡丹哉
こゝろほど牡丹の撓む日數かな
門へ來し花屋にみせるぼたん哉
切る人やうけとる人や燕子花
深山路を出抜てあかし麥の秋
麥炼や馬に出て行馬鹿息子
笋を堀邊彌兵衛や年の功
筍のすへ筍や丈あまり
白罌粟や片山里の朦の中
牡丹一輪筒に傾く日數かな
麥打に三女夫並ぶ榮へかな

さつき咲庭や岩根の黴ながら
雷ともと[illegible]立けり朝のさま
くらべ馬顏みへぬ迄譽にけり
なぐさめて粽解なり母の前
物に飽くこゝろ耻かし茄子汁
列立て火影行鵜や夜の水
舟梁に細きぬれ身やあら鵜共
いで來たる硯の蠅の一つかみ
ひとくゝる繩も有けり瓜作り
姫顏に生し立けむ瓜ばたけ
盗人に出合ふ狐や瓜ばたけ
二階から物のいひたや鉾の兒
あふぎける團を腕に敷寐かな
書棄し歌らこし折うちは哉
風呂布のつゝむに餘る團かな
幮ごしに柄から參らすうちはかな
扇とる手へもてなしのうちは哉
貯ともなくて數あるあふぎ哉

雷止んで太平簫ひく凉かな
蠅をうつ音も嚴しや閑の人
夜を寐ぬと見ゆる歩みや蝸牛
有侘て這ふて出けむかたつぶり
怠ぬあゆみおそろしかたつぶり
引入て夢見顏也かたつぶり
折あしと角おさめけむ蝸牛
水の中へ錢遣りけらし心太
もとの水にあらぬしかけや心太
蚊屋釣てくるゝ友あり草の庵

偶成

よしはら鳥のよしとおもへば
　これも鳴音のあらぎやう〳〵し
氣のゆるむあつさの顏や致仕の君
世の外に身をゆるめる暑かな
めでたきも女は髮の暑サ哉
あつき日に水からくりの濁かな
朝寐してをのれ悔しき暑さ哉

病で死ぬ人を感ずる暑哉
色濃くも藍の干上るあつさかな
釣瓶から水呑ひとや道の端
虫ぼしや片山里の松魚節

かこつことある人の許へ

来し跡のつくが淺まし蝸牛
草の戸の草に住蚊も有ときけ
水練の師は敷革のすゞみ哉
空をみてすゞみとる夜や宿直の間
前鬼にも呑せて行や香需散
川狩や夜目にもそれと長刀
あしらひて巻葉添けり瓶の蓮
蓮の香や深くも籠る葉の茂

寄蓮戀

蓮の香の深くつゝみそ君が家

百園より東寺の蓮贈られて

先いけて返事書也蓮のもと
たつ蟬の聲引放すはづみかな
澤瀉や花の數そふ魚の泡
かたびらのそこら縮て晝寐かな
晝顔や夜は水行溝のへり
夕皃やそこら暮るに白き花
夕顔のまとひも足らぬ垣根かな
白雨や膳最中の大書院
白雨や戸さしにもどる艸の庵
ゆふだちや落馬もふせぐ旅の笠
白雨やこと鎮めたる使者の馬
橋落て人岸にあり夏の月

琴泉と東寺へ蓮見にまかりて醉中の吟

引寄て蓮の露吸ふ汀かな

秋

すゞしさのめでたかり鳧今朝の秋
初秋や障子さす夜とさゝぬよと
七夕や家中大かた妹と居す

月入て闇にもなさず銀河

家づとの京知顔やすまひとり

裸身に夜半の鐘や辻相撲

勝迯の旅人あやしや辻角力

引組で猶分別やすまひとり

山霧や宮を守護なす法螺の音

さし鯖や袖とおぼしき振あはせ

明はなし寐た夜つもりぬ虫の聲

城内に踏ぬ庭あり轡むし

見かけ行ふもとの宿や高灯炉（盆）

夕立の晴行かたや揚灯炉

聲きけば古き男や音頭取

彼後家のうしろにおどる狐かな

末摘のあちら向ひてもおどり哉

番椒疊の上へはかりけり

つる草や蔓の先なる秋の風

痩たるをかなしむ蘭の苔けり

あるかたより蘭を贈らるゝに、名立事ありて

蘭の香や君がとめ奇楠に若も又

長月の末、召波訪來りし時

何もなし夫婦訪來し宿の秋

行先に都の塔や烁の空

岩倉にて雨にあひ、金藏寺大德の情に一夜の舍り免され、嬉しさ這上りて

笠ぬげば鹿の聞度夜とぞなる

南谷上人の書の額あり。藥師の寶前に二種の草あり。

南無藥師藥の事もきく桔梗

なぐら山のふもとなる灑蓮子の庵を、卯雲子と共に尋侍るに、あらざりければ扉にかいつく。

留守の戸の外や露をく物ばかり

此鑪口明せずと足ゞぬべし

畠から西瓜くれたる庵かな

遺言の酒備へけり魂まつり
懸乞の不機嫌みせそ魂祭
おもへども一向宗やたま祭
魂棚やぼた餅さめる秌の風
たま祭る料理帳有筆の跡
送り火や顔覗あふ川むかひ
いなづまや舟幽靈の呼ふ聲
鬼灯や摑み出したる袖の土産
乞ければ刈てこしけり草の花
二里といひ一里ともいふ花野哉
鮹追へば蟹もはしるや芋畠
餓てだに痩んとすらむ女郎花
其葉さへ細きこゝろや女郎花
鶏頭やはかなきあきを天窓勝
鶏頭やすかと佛に奉る
蜘の圍に棒しばりなるとむぼ哉
静なる水や蜻蛉の尾に打も
荻原に棄て有けり風の神

荻吹や燃る淺間の荒殘り
椋鳥百羽命拾ひし羽をと哉

經師何がし、芭蕉書る扇に賛望れて

裂やすきばせをに裏を打人歟
秋さびしおぼえたる句を皆申す
簗をうつ漁翁がうそやことし限
ものゝ葉に魚のまとふや下簗

京へのぼりし時

蕣に垣ねさへなき住居かな
みどり子に竹筒負せて生身魂
野分して樹々の葉も戸に流れけり
淺川の水も吹散る野分かな
渡し守舟流したる野分哉
片店はさして餅賣野分かな
芋莖さへ門賑しやひとの妻
おもはゆく鶏なく也蚊屋の外
畠踏む似せ侍や小鳥狩

身の秋やあつ燗好む胸赤し

いさわかき大女に秋來て、柳巣の才も一葉と散行、鬪蕙の質も芳しき名のみに歸り來ぬ。道のくま〳〵聞よる中に交りて、父の闌（閫）所によす。

此夕卩ぬしなき櫛の露や照

花燭をゝくりて靈前にさしよするは、いさゝか其情を慰するにあり。

みそなはせ花野もうつる月の中
あさがほに夜も寐ぬ嘘や番太郎
ミか月やかたち作りてかつ寂し
三日月の船行かたや西の海
みか月や膝へ影さす舟の中
雨に來て泊とりたる月見かな
狂はしやこゝに月見て亦かしこ
來ると否端居や月のねたり者
名月や君かねてより寢ぬ病
名月や花屋寐てゐる門の松
うかれ來て蚊屋外しけり月の友
後の月庭に化物作りけり
灯の屆かぬ庫裏やきり〴〵す
雪ふれば鹿のよる戸やきり〴〵す
大根も葱もそこらや蕎麥の花
うら枯ていよ〳〵赤しからす瓜
萩活て置けり人のさはるまで
石榴喰ふ女かしこうほどきけり
喰ずともざくろ興有形かな
菊の香やひとつ葉をかく手先にも
見通しに菊作りけりな問れがほ
菊の香や山路の旅籠奇麗也
旅人やきくの酒くむ晝休み
殘菊や昨日逃にし酒の禮
朝露や菊の節句は町中も
古畑の噂ありながら野菊かな
泊問ふ船の法度や秋の暮
有侘て酒の稽古やあきの暮

おどり人も減し芝居や秋のくれ
ひとり居や足の湯湧す秋のくれ
夕露に蜂這入たる垣根哉
出女の垣間見らるゝきぬた哉
泊居てきぬた打也尼の友
菊の香や花屋が灯むせぶ程
剃て住法師が母のきぬた哉
寐よといふ寢ざめの夫や小夜砧
夜あらしに吹細りたるかゞし哉
やゝ老て初子育る夜寒かな
旅人や夜寒問合ふねぶた聲
舟曳のふねへ來ていふ夜寒哉
水瓶へ鼠の落し夜さむかな
朝寒や起てしはぶく古ごたち
椽端の濡てわびしやあきの雨
茄子賣揚屋が門やあきの雨
夜に入ば灯のもる壁や蔦かづら
引けば寄蔦や梢のこゝかしこ

町庭のこゝろに足るやうす紅葉
鐵槌に女や賜るうちもみぢ
空遠く聲あはせ行小鳥哉
露を見る我戸や草の中
青き葉の吹れ殘るや綿畠
柿賣の旅寐は寒し柿の側
關越て亦柿かぶる袂かな
殘る葉と染かはす柿や二ッ三ッ
かぶり欠く柿の澁さや十が十
戀にせし新酒呑けりかづら結
よく飲ば價はとらじことし酒
きりはたりてうさやようさや呉服祭
新米のもたるゝ腹や穀潰し
どうあろと先新米にうまし國
芦の穗に沖の早風の餘哉
迷ひ出る道の藪根の照葉かな
藥堀(掘)蝮も提てもどりけり
身ひとつをよせる籬や種ふくべ

口を切る瓢や禪のかの刀
此あたり書出し入もふくべ哉
ひとつ家に年あるさまや若烟草
夜の香や烟草寐せ置庭の隅
事繁く臼ふむ軒やかけたばこ
小山田の水落す日やしたりがほ
永き夜を半分酒に遣ひけり
あきの夜や自問自答の氣の弱
長き夜や夢想さらりと忘れける
寐て起て長き夜にすむひとり哉
永き夜や思ひけし行老の夢
落る日や北に雨もつ暮の秋
長きよや餘所に寢覺し酒の醉
壁つゞる傾城町やくれのあき
塵塚に蕣さきぬくれの秋
行秋や抱けば身に添ふ膝頭
孳せし馬の弱りや暮の秋

冬

玄關にて御傘と申時雨哉
うぐひすのしのび歩行や夕時雨
濡にける的矢をしはくしぐれ哉
しぐるゝや筏の棹のさし急ぎ
中窪き徑わび行落葉かな
米搗の所を替る落葉哉
盜人に鐘つく寺や冬木立
冬枯や雀のありく戸樋の中
爐開や世に遁たる夫婦合
川澄や落葉の上の水五寸
麥蒔や聲で鳫追ふ片手業
達磨忌や宗旨代ゝ不信心
おどらせぬむすめ連行十夜哉
なまふだや十夜の路のあぶれ者
夜歩行の子に門で逢ふ十夜かな
追〳〵に十夜籠りや遣ッ手迄

あら笑止十夜に落る庵の根太
莟しはしらでゐにけり歸花
京の水遣ふてうれし冬ごもり
身に添てさび行壁や冬籠
冬ごもり古き揚屋に訊れけり
なき妻の名にあふ下女や冬籠
尻重き業の秤やふゆごもり
僧にする子を膝もとや冬ごもり
いつまでも女嫌ひぞ冬籠
來て留守といはれし果や冬籠
それ〳〵の星あらはるゝさむさ哉
帋子着てはる〴〵來たり寺林
紙子着しをとや夜舟の隅の方
わびしさや旅寐の蒲團數をよむ
活僧の蒲團をたゝむ麗風哉
足が出て夢も短かき蒲團かな
旅の身に添や鋪寐の鴛ぶとん
夜明ぬとふとん剝けり旅の友

人ごゝろ幾度河豚を洗ひけむ
死ぬやうにひとは言也ふぐと汁
鰒喰ふて酒呑下戸のおもひかな
鰒賣に喰ふべき顏とみられけり
河豚喰し人の寐言の念佛かな
意趣のある狐見廻す枯野かな

不夜庵に芭蕉翁を祭る。

塀越の枯野やけふの魂祭
行ゝてこゝろ後るゝかれ野かな
行馬の人を身にする枯野かな

分稻一周の忌さたりぬ。此叟のすゝめにて、大原野吟行せし往事を思ひて

なつかしや枯野にひとり立心
鼠喰ふ鳶のゐにけり枯柳
目にぞしむ頭巾着て寐る父が皃
新尼の頭巾おかしや家の內
頭巾をく袂や老のひが覺へ

法躰をみせて又着る頭巾かな

庚寅冬十月、亦例の一七日禁足して俳諧三昧に入に、草の屋せばく、浴も心にまかせれば、やう〳〵かゝり湯いとなむに、時雨さへ降かゝりて、いとゞ寒きを侘ゐしに、呑獅より居風呂わかして、男どもにさし荷せ來したり。贈ものゝ珍らしくうれしさ、やがてとび入て、

心ゆく泣浴しつゝかく申侍る。

頭巾脱でいたゞくやこのぬくい物

眠までくる頭巾あぐるや幾寐覺

歸來て夜をねぬ音や池の鴛

草の屋の行灯もとほす火桶哉

塩鮭や旅はる〴〵のよごれ面

手へしたむ髪のあぶらや初氷

朝顔の朝にならへりはつ氷

勤行に起別たる湯婆かな

茶の花や風寒き野ゝ葉の園。

口切や花月さそふて大天狗

口きりやこゝろひそかに聟撰ミ

菊好や切らで枯行花の數

ちどり啼曉もどる女かな

爐に銚子かけて酒あたゝむる自在の竹に、鬼女の面かけたるを、人の仰ぎ居る圖に賛をせよと、田福より頼れて

吹きやす胸はしり火や卵酒

鴨の毛を捨るも元の流かな

胴切にしもせざりける海鼠かな

海鼠だゝみや有し形を忘れ顏

身を守る尖ともみへぬ海鼠哉

うぐひすや月日覺へる親の側

大食のむかしがたりや鰤の前

剛の座は鰤たばえに見へにけり

立波に足みせて行ちどりかな

薫漬や妻なく住を問ふおゝな

草の庵童子は炭を蔵く也
水仙や胞衣を出たる花の數
瞬の時はいす遊女や納豆汁
曲輪にも納豆の匂ふ齋日哉
僧と居て古び行氣や納豆汁
御命講の華のあるじや女形
人の來て言ねばしらぬ猪子哉

喜介を江戸へ下せしあくる日

初雪や旅へ遣たる從者が跡
はつ雪や酒の意趣ある人の妹
木がらしの箱根に澄や伊豆の海
陰陽師歩にとられ行冬至哉
野ゝ中に土御門家や冬至の日
雨水も赤くさび行冬田かな
たのみなき若草生ふる冬田哉
木がらしや柴負ふ老が後より
今更にわたせる霜や藤の棚
腰かける舟梁の霜や野ゝわたし
鷄の起けり霜のかすり聲
苫ぶねの霜や寐覺の鼻の先
行舟にこぼるゝ霜や芦の音
耻かしやあたりゆがめし置火燵
埋火に猫背あらはれ玉ひけり
埋火にとめれば留る我が友
あてやかにふりし女や敷巨燵
火を運ぶ旅の巨燵や夕嵐
淀舟やこたつの下の水の音
草の戸や巨燵の中も風の行
攝待へよらで過けり鉢たゝき
曉の一文錢やはちたゝき
はけしさや鳥もがれたる鷹の聲
鷹の眼や鳥によせ行袖がくれ
雪やつむ障子の帋の音更ぬ
小盃雪に埋てかくしけり

汲公と萑亭に宿して、そのあした
道にて別るとて

見返るやいまは互に雪の人
宿とりて山路の雪吹覗けり
空附の竹も庇も雪吹かな
うつくしき日和になりぬ雪のうへ
降遂ぬ雪におかしや簑と笠
御次男は馬が上手で雪見かな
足つめたし目におもしろし手にかゝむ
里へ出る鹿の背高し雪明り
長橋の行先かくす雪吹かな
交りは葱の室に入にけり
寒垢離の耳の水ふる勢かな
寒月や我ひとり行橋の音
寒月の門へ火の飛ヲ鍜治(冶)屋哉
寒月や留守頼れし奥の院
鶴を出て寒月高し己が門
鍋捨る師走の隅やくすり喰
日頃經て旨き顔なり藥くひ
枯草に立テは落る囮かな

氷つく芦分舟や寺の門
御手洗も御燈も氷る嵐かな
垣よりに若き小草や冬の雨
父と子よよき椙くべしうれし顔
勤行に腕の胼やうす衣

几圭、師走廿三日の夜死せし。
節分の夜明なりければ

死ぬとしもひとつ取たよ筆の跡

梅幸へ言遣る。

積物や我つむ年をかほ見せに
大名に酒の友あり年忘れ
夢殿の戸へなさはりそ煤拂
聲立る池の家鴨やすゝ拂
煤を掃く音せまり來ぬ市の中
剃こかす若衆のもめや年の暮
褌に二百くゝるや厄おとし
すゝ掃の埃かつぐや奈良の鹿
怖す也年暮るよとうしろから

年とるもわかきはおかし妹が許

寶ぶね譯の聞へぬ寐言かな

聲よきも頼もし氣也厄拂

年とりて内裏を出るや小洮（挑）灯

谷越に聲かけ合ふや年木樵

兼てよく兒見られけむ衣配

唐へ行屏風も書やとしの暮

雅因を訪ふ。

年の暮嵯峨の近道習ひけり

年内立春

歳のうちの春やいざよふ月の前

書林　京　室町中立賣上ル
平野屋善兵衛

太祇句選 後編

五雲撰

太祇句選（後編）

不夜庵太祇句集を撰して序を夜半翁にもとむ。翁曰、序はかりそめにすべからず。祇と因ミの深きものをよしとす。これを碓亭・宛在に歸せよ。退て碓亭・宛在の二翁にはかる。二翁曰、序はかりそめにすべからず。祇と因ミの深きものをよしとす。これを呑獅に歸す。退て序つくる。意匠万端つゐに章をなさず。ひそかに思ふ、序のこと既前集に盡たり。今はた何をかいはん。たゞちに三翁の言をもて序とす。

不夜城
呑　獅

春

小書院のこの夕ぐれや福壽草
二日には箒のさきやふく壽草
七くさや兄弟の子の起そろひ
初寅や額光しばし市原野
鉢の子に粥たく庵も若なかな
あら手きて羽子つき上し軒端かな
萬歳のゑぼし姿やわたし船
穴一の筋引すてつ梅が下
若くさや四角に切し芝の色
若草ややがて田になるやすめ畑
旅立の東風に吹する火繩かな
駕に居て東風に向ふやふところ手
紅梅や公家町こして日枝山
囀れしが思ひもすてず猫の聲
白魚やきよきにつけてなまぐさき
閑かさを覗く雨夜の柳かな

嫁入せし娘も多し御忌詣
はる寒く葱の折ふす畠かな
白雲や雪解の澤へうつる空
芹の香や摘あらしたる道の泥
ぬす人の梅やうかゞふ夜の庭
うつくしき男もちたる雉子かな
つみ草や馬のはせきぬ馬場の末
鶴を書く雲井の空や雛合
物音は人にありけりおぼろ月
歸來て灰にもいねず猫の妻
髭につく飯さへみへずねこの妻
漏る雨をひとゝかたるや春の宵
はる雨や風呂いそがする旅の暮
水吸に鼠出けり瓶の花
宵月や船にもさくら打かたげ

女を供して旅だつ人へつかはす。

女にかはりて

枕香の梅をみよとの旅路かな

はる風や殿まちうくる船かざり
濡れて來し雨をふるふや猫の妻
挑灯で若鮎を賣る光かな
拾ひあげて櫻に珠數や御忌の場
餅やくをおいとま乞のどんど哉
籠耳に山の名を問ふかすみ哉
陽炎や板とりて干す池のふね
踏つけし雪解にけり深山寺
うぐひすや君こぬ宿の經机
（午）
初牛や狐つくねしあまり土
はつ牛やもの問初る一の橋
おそろしの掛物釘やねはん像
ちるなどゝみへぬ若さやはつ櫻
見へ初て夕汐みちぬ芦の角
すみの江に高き櫓やおほろ月
春寒し泊瀬の廊下の足のうら
陽炎や筏木かはく岸の上
かげろふや夜々の網干す川の岸

涅槃會や醴いひありく十五日
はる雨や音もいろ〳〵に初夜のかね
今日は身を船子にまかすかすみかな
若鮎や水さへあれば岩の肩
散てある椿にみやる木の間かな
蝶飛ぶや腹に子ありてねむる猫
うばかゝのさくらを覗く彼岸かな
歸る雁きかぬ夜がちに成にけり
吹はれてまたふる空や春の雪
いろ〳〵の名は我言はすさくらかな
情なの荅さくらやひなの前
むかひ居てさくらに明す詞かな

あらし山の花みにまかりて

筏士よ足のとまらぬ花ざかり
はる雨や講尺(釋)すみて殘る顏
三日月に木間出はらふ茶つみ哉
行雁の高キや花につりあはず
地借衆へ一枝づゝやもゝの花
掃あへぬ桃よさくらよ雛の塵
紙びなや立そふべくは袖の上
照り返す伏水のかたやもゝの花
二里程は鳶も出て舞ふ汐干哉
勝雛の抱く手にあまる力かな
下手の焚くひなの竈ぞ賑はしき
巣を守る燕のはらの白さかな
山吹や腕さし込て折にけり
船よせてさくらぬすむや月夜影
塀ごしやさくら斗の庭の躰
半ば來て雨にぬれいる花見哉
狂言は南無ともいわず壬生念佛
暮遲く日の這わたる疊かな
口たゝく夜の往來や花ざかり
しなへよく疊へ置や藤の花
遲日の光のせたり沖の浪
几巾持て風尋るや御側の衆
山路きてむかふ城下や几巾の數

家内して覗からせし接木かな
永日やいまだ泊らぬ鶏の聲
堀川の畠からたつ胡蝶かな
寄添て眠でもなきこてふかな
ひと眞似のおぼつかなくも接穂哉
泊らばや遲き日の照る奥座敷
膝たてゝおそき日みるや天の原
池のふねへ藤こぼるゝや此夕べ
蕨採て筧にあらふひとりかな
几巾白し長閑過ての夕ぐもり
諸聲やうき藻にまとふむら蛙
京へきて息もつきあへず遲ざくら
のびよかし藤の莟の咲かで先
寒食や竈をめぐるあぶら虫
はるの行背や夜すがら雨のあし
下戸の子の上戸と生れ春暮ぬ

夏

立むかふ廣間代りや更衣
ほとゝぎす今見し人へ文使ひ
卯の花はまはりこくらの垣根かな
かきつばたやがて田へとる池の水
切るひとの帶とらへけり杜若
湖へ神輿さし出てほとゝぎす
ほとゝぎす江戸のむかしを夢の内
布子賣回國どのよころもがへ

江戸雅光訊來て旨原・珠來などが噂申いでゝ、予が顔の年よらぬ事、おもひしにたがへるなどゝむかしかたり出て興じける。

年よらぬ顔ならべたやはつ鰹
など我は寢ざめぬ老ぞ時鳥
灌佛や假りに刻し小刀目
新茶煮る曉おきや佛生會
麥秌や埃にかすむ晝の鐘

あまた蚊の血にふくれ居る座禪哉
蠅を打おとや隣もきのふけふ
年よれば疲もおかし更衣
濃く薄く奥ある色や谷若ば
ほり上てあやめ葺けり草の庵
川風に水打ながす晒かな
用意せし袷出す日や晝旅籠
葉ざくらのひと木淋しや堂の前
川留の伊東どのやな扉が雨
あら浪に蠅とまりけり船の腹
麥を打ほこりの先に翠鳥
穗にむせぶ咳もさはがしむぎの秌
みじか夜やむりに寐ならふ老心
雨に倦く人もこそあれかきつばた
泥の干る池あたらしや杜若
寐た顔へ蝈(栖)吹あてるはし居哉
飲きりし旅の日數や香需散
みじかよや來ると寢に行うき勤

うつす手に光る螢や指のまた
音ほして行みづくらき木がくれな
てらすほたるの影もすゞしき 通村
螢火や岸にしづまる夜の水
柳みんよそに夕立あまり風
帷子や明の別のすそかろき
蝙蝠や千木みへわかる闇の空
白雨はあなたの空よ鷺の行
みじか夜や雲引殘す富士のみね
雨の日は行かれぬ橋やかきつばた
蚊の聲は打も消さぬよ雨の音
一日は物あたらしき五月雨
たけの子や己が葉分に衝のぼる
笋やおもひもかけず宇津の山
底見へて鵜川あさまし夜の水
八重雲に朝日のにほふ五月哉
手から手へわたしわづらふ螢かな
若竹や數もなき葉の露の數

ゆふだちの月に成ぬる鶴川かな
今朝みれば夜の歩みやかたつむり
さみだれや夜半に貝吹まさり水
笋やほりつゝ行けばぬいた道
早乙女　下りたつあのたこの田哉
旅びとや曾我の里とふ五月雨
みじかよや旅寐のまくら投わたし
古き代を紋に問るゝのぼりかな
幟たつ母なん遊女なりけらし
塩魚も庭の雫やさつきあめ
岩角や火縄すり消す苔の花
ほうふりや蓮の浮葉の露の上
　香獅またこさしも
旅立を人もうらやむ袷かな
ほとゝぎすきくや汗とる夜着の中
影高き松にのぞむや蝸牛
君めして突せられけりこゝろぶと
かはほりや繪の間みめぐる人の上

蝙蝠やけいせい出る傘の上
わびしげや麦の穂なみにかくれ妻
麦埃樗にくもる門邊かな
思案して旅の袷にうつりけり
側に置て着ぬ斷や夏羽織
ひるの蚊の顔に鳴り行廣間かな
かやり火のうたてのこるや夜の儘
とりにがす隣の聲や行ほたる
寺からも婆を出されし田植哉
白雨のすは來るおとよ森の上
雨あれて筍をふむ山路かな
隣には木造のぼる新樹哉
孑孑やなまなか澄るくされ水
回國の笈にさし行團かな
　竹酔日
草の戸や竹植る日を覺書
物あぶる染どのふかし五月雨
漣にうしろ吹るゝ田植かな

さみだれや夜明見はづす旅の宿
掃流す橋の埃や夏の月
五月雨や川うちわたす簑の裾
角出して這はでやみけり蝸牛
化猫も置手拭やむぎの秋
かたびらの無理な節句や傘の下
松陰に旅人帶とく暑かな
飛石にとかきの光る暑かな
松明に雨乞行やよるの嶺
夕立や扇にうけし下り蜘
木枕に耳のさはりて暑き也

向陽軒にて

あつきひや明放す戸のやらんかた
鵜ぶねみる岸や闇路をたどりく
ゆふ顔のまとひもたらぬ垣根哉
帷子や蠅のつといる袖のうち
かゝる日や今年も一度心太
松かげにみるや扇の道中記

汗とりや弓に肩ぬぐ袖のうち
はや鮓の蓋とる迄の唱和かな
早鮓に平相国の鱸かな
ひとり言いふて立さる清水哉
關守の背戸口にたつ涼み哉
片道はかはきて白し夏の月
屋根葺は屋根で涼の噂かな
酔ふして一村起ぬ祭かな
虫ほしのすゞしさかたれ角櫓
むし干や秡(拔カ)身をさます松の風
まし水にあやうき橋を涼かな
鉾處ゝにゆふ風そよぐ囃子哉
老たりといふや祭の重鎧
まつりの日屏風合の判者かな
花鳥もうら繪はうすき扇かな
酒藏に蠅の聲きく暑かな
かたびらの癖はつきよき腕まくり
涼風に角力とらふよ草の上

土照りて裂るや草の生ひながら
むし干やむかしの旅のはさみ箱
水打て露こしらへる門邊哉
草の戸や疊かへたる夏祓

秌

眼ざましに入る背戸ながら今朝の露
木戸しめて明る夜惜むおどり哉
船よせて見れば柳のちる日かな
たま祭持佛に殘す阿彌陀かな
駕に居て挑灯もつやはつ嵐
君こねばあぶら灯うすし初嵐
めでたくも作り出けり芋の丈
浦風に蟹もきにけり芋畠
初戀や燈籠によする顏と顏
よひやみや門に雅(進)き踊聲
狼のまつりか狂ふ牧の駒
はつ秌や團扇の風をひいた人
手習子や門うつ子あり朝さむみ
夕されや軒の烟草に野分ふく
朝さむく蝠のわたるや籬の松
刀豆やのたりと下る花まぢり
夜の間の露ゆりすふる廣葉哉
吹倒す起す吹るゝ案山子かな
片足は踏とゞまるやきり〴〵す
初鴈や遊女にあぶらさゝせけり
はつ鴈や夜は目の行ものゝ隅
さはがしき露の栖やくつわ虫
脱すてゝ角力になりぬ草の上
着物のうせてわめくや辻角力
鬼灯や物うちかこつ口のうち
はつ雁やこゝろつもりの下ッ所
かけ稻や大門ふかき並木松
鉢の子ににへたつ粥や今年米
里の燈をちからによれば灯籠哉
立寄ば椎はふりきぬ雨舍

猫の庭ふむ音や木の實ふる
待宵やくるゝにはやき家の奥
手折てははなはだ長し女郎花
蚊のありつなかりつ月の船路哉
呵程紬さきへ出たき月み哉
あさ兒や小詰役者のひとり起
稲妻の無き日は空のなつかしき
いなづまのこもりてみゆれ草の原
いなづまやなきとおもへば雲間より
いなづまやよわり〳〵て雲の果
芋むしはいものそよぎにみへにけり
もるゝ香や蘭も覆の紙一重
芋の露野守の鏡何ならん
降れても行や月見の泊客
いなづまや雨雲わかるやみのそら
あと追ふてわめきくる也橋の月
名月や船なき磯の岩づたひ
日は竹に落て人なし小鳥網

聞はづす聲につゞくや鹿の聲
名月の晝迄大工遣ひかな
くさの戸の用意おかしや菊の酒
朝市や通かゝりてけふの菊
ひとり居やおもひもふけし十三夜
田舎から柿くれにけり十三夜
十三夜月はみるやとなりから
表から出汐告來つ十三夜
おもはずもよそに更しぬ十三夜
朝市や虫まだ聲すものゝ下
あさ寒や旅の宿たつ人の聲
打やまぬ堪(碪)たのもし夜の旅
枝裂てしろりと明る野分哉
よる浪やたつとしもなき鴫一ツ
白き花のこぼれてもあり番椒
中入に見まふ和尚や茸がり
うかれ女や言葉のはしに後の月
一葉さへかさなりやすき日數かな

家ゝや銚子のきくの咲さかぬ

しづめたるきくの節句の匂ひ哉

臺灣を當推量や十三夜

いく浦のきぬたや聞てかゝり船

馴て出る鼠のつらや小夜ぎぬた

庭のもみぢの染たるさて、眷庸もちきたりける。

やゝあつて水に生たるもみぢ哉

哲哉、倦を袖にし來て引墨を乞ついで、菊をおくりけるに、哲哉もさきくを養ひつくり得しが、今は平常のきくのみ愛すなどゝかたり出たるに、予も同意なるよし答て

中菊や地に這ふばかり閑なる

曉の籬をぬけけんむしの聲

寒きとて寢る人もあり暮の烁

氣のつかぬ隣の顏や暮の秋

雞頭やひとつはそだつこぼれ種

冬

水仙を生しや藥先枯る迄

木戸しまる音やあら井の夕千鳥

水仙や疊の上に横たをし

よるみゆる寺のたき火や冬木立

一番は迯て跡なし鯨突

宵やみのすぐれてくらし冬の雨

十月の籬の藥靑し肴籠

つめたさに箒捨けり松の下

人顏も旅の晝間や神無月

かみ無月旅なつかしき日ざし哉

御築地に見こす山邊やいく時雨

ひとの子の惡處戻りや門の霜

千人の日用そろふや雪明り

人去て曉くらき十夜かな

とする間に水にかくれつ初氷

千本をもどる。

霜をける畠の冴へや鍬の音
下戸ひとり酒に逃たる火燵哉
木葉散雨うちはれて夜明たり
人跡し落葉のくぼむ森の道
木がらしや手にみへ初る老が皺
木枯や大津脚伴(註)の店ざらし
ぬれいろをこがらし吹や水車
晝になつて亥子と知りぬ重の內
炭賣よ手なら顏なら夕まぐれ
たそがれに吹おこす炭の明り哉
獺に飯とられたる網代かな
水指のうつぶけてある寒かな
花もなき水仙埋む落ばかな
起うきを起出て冬のいさみ哉
飯喰ふて隙にしてみる冬至哉
掃けるが終には掃ず落葉かな
壁までが板であられの山居哉
鳴ながら狐火ともす寒かな

初霜やさすが都の竹箒
はつ雪や町に居あはす桑門
初ゆきや酒の意趣ある人の妹
末摘や炭吹おこす、鼻の先
はつ雪や醫師に酒出す奥座敷
醫師へ行子の美しき頭巾かな
盃を持て出けり雪の中
ゆきをみる人さわがしや夜の門
犬にうつ石の扱なし冬の月
かさの雪たがひに杖で打はらひ
よるのゆき寐よともいわぬ主哉
口切のとまり客あり峯の坊
寒ぎくや垣根つゞきの庵の數

一させ翁なゆめみ侍なおもひよせて

其魂の朱雀もめぐる枯野哉
今朝は先消てみするや初氷

冬の朝ひのあはれなりけり　さは

せた翁の句をおもひよりて

身をよする冬の朝日の草のいほ

藤棚のうへからぬける落ばかな

水せんや幸あたりに草もなき

くらがりの梢(酒)杪にさはる氷かな

さむき夜や探れば寒き老が肩

水仙や葉みじかくと己が園

腰かくる橋梁の霜や野のわたし

顔みせの難波のよるは夢なれや

寒聲や親かたどのゝまくらもと

寒菊や茂る葉末のはだれ雪

苞にする十の命や寒雞卵

親も子も醉へばねる氣よ卵酒

腰かけて紅葉みつらん炭俵

かれ芦や鴨見なくせし鷹の聲

鶯に藪の掛菜のにほひかな

木葉ちる風や戸をさす篭の前

あるほどの水を入江の氷かな

關守へ膳おくり來つゝゑびす講

句を煉て腸うごく霜よかな

枯くさや藪根の椿落る迄

雪見とて出るや武士の馬に鞍

ゆふ風や木吹といふて梅持參

獵人の鉄砲うつや雪の中

うまきとはいつはりがまし藥喰

(稚)雅子の寐て物とふや藥くひ

手燈しの低き明りやくすり喰

盃になるもの多し卵酒

魚ぬすむ狐のぞくや網代守

髮おきやちと寒くとも肩車

町中のあられさはがしひとの顔

かみ置やかゝへ相撲の肩の上

髮おきやうしろ姿もみせ歩く

それとみる松の戸尻や臺の桶

顔みせや状を出しあふ宇津の山

嫁みせに出て來る茶やの落ば哉

對にしてかぞへて歩く鴛見哉
霜の聲ひとの鼾で寐ぬよ哉
咲ていゐる梅にもあふや寒念佛
冬ごもる心の松の戸をほそめ
かたちして孤屋までぞ水の色
節季ゆややむときはやむ物の聲
狐なく霜夜にいづこ煤はらひ
樓に哥舞妓の眞似や煤拂
としゝゝや煤よう掃て手向水
道ばたの天秤棒や大根引
爼板に這ふかとみゆる海鼠かな
餅つきやものゝ答へる深山寺
とし忘扨もひとには精進日
餅の粉の家内に白きゆふべかな
二階から土器投やすゝはらひ
居風呂の底ふみぬくや年の暮
わびしさや思ひたつ日を煤拂
すゝ拂てそろりとひらく持佛哉
すゝはきの中へ使やひねり文
煤拂のあら湯へ入る座頭かな
すゝはきや挑灯しらむ門の霜
山ぶきのいわぬ色あり衣配
とにかくにたらぬ日數や年忘
眼に殘る親の若さよ年の暮
年とるや帆柱の數ありそうみ

安永丁酉秋八月

不夜庵
五雲撰

石（いし）の月（つき）

五雲撰

(石の月)

もとしのぶ草にぞ露のたまよばひさは是を序とやいはん。

東武散人菴々少
於花洛旅寓漫述

老師太祇三周の忌にあたれば、いゝさか上薦の一句をなし、はた太祇句集の初稿にもれし三十章あまりのほく(發)を祿し、知己および社中の人々の秋興の句を乞ふて、これを手向草となし侍りぬ

いよいよやすし蓮のうへにも烁三とせ　不夜菴 五雲

故不夜菴太祇居士は、そのさき東武詞宗の員につらなりし身の、いかに都の風土やこのもしかりけん、中年の頃杖を起し、この地に居をト、ほどふるにしたがひ、鳴もて行ぬるもとしあり。さるを古郷の五雲も何となく京住にかねて、友なつびむなしからず、遠き筑紫の船にも起臥をひとつにかたらひ盡せし果は、居士がいざなひにまかせ、文臺の主とはなりぬ。さてぞ往し卯の中秋初九、人はからずも居士世を辭しける其跡うちすてがたく、人〳〵ともに五雲をして舊菴に移住せしめ、かたのごとく俳事をとりはやすとにぞ、今はた三とせの懐旧に、こゝら門人・知音の吟を一冊となす。予もふるき因あれば、これがいとぐちを解よかしと菴主せちに勸られしが、老行としのとに懶く、もとより才薄く識なきをいかにせん。されど又あながちにいなむべきなからひにもあらねば、只ありのまゝをかひつけて、彼靈をなつかしむのみ。

炭太祇四季發句

春

院〻の春は見え來ぬ梅椿
はるの夜に飯綱の出した温飩かな
朝がすみ都は所〳〵に塔の尖
川越の肩で空見る雲雀かな
嫗鳴がさくらを覗く彼岸かな
情なの莟さくらや雛の前
ちりのこるほどの櫻は雨おもし
海棠や紅粉少しある指のはら
藤いけてしほれしまゝや旅の宿

夏

老て我うたがふ耳やほとゝぎす
短夜や雲引殘す富士の峯
眼の覺る時を朝なり五月雨
日ゝに切茄子に富る庵かな
むし干に雪沓かゝる垣根かな
こけとまる瓜にむかふて這子哉
身ひとつをやるかたもなき暑さかな
土照りて裂るや草の生ながら
手習子やの疊は黑きあつさ哉

秋

駕籠に居て挑灯持や初あらし
もぎ盡す梶のもとつ葉秋もはや
白露のしろきは假の光りかな
あたらしき板もまじりて鳴子哉
朝皃やはかなさいふはあとのこと
萩の花盗て逃るしなへかな
今朝みればこちら向たる案山子かな
明月や家にうたてきものゝ影
燒過た尻をとはる柚味噌かな
何事ぞ坐敷をはづす秋の暮

冬

口切のとまり客あり峯の坊
醫者へ行子にかぶせたる頭巾かな
けふの日もはや夜着かける巨燵哉
初雪やこちへござれと老が文
一輪をつまみ歩行や歸り花
云繼をこゝろの友や冬ごもり
夜あけぬと蒲團剝けり旅の友
峯入の強力來たり煤拂

歌仙

青き葉の吹れ殘るや綿畠　太祇
片山里に行わたる秋　五雲
鉄券も月に似た弓も借して　嘯山
きら〳〵敷も銀燭のさま　渡牛
落る汗もの書上へほつたりと　丑二
あそこやこゝに飛違ふ蝿　春爾
足引の漸ゝ來れば間の宿　德野
是が酒かと言つゝも呑　文皮
角内も少し出世の角左衛門　管鳥
吉原好の大殿ぞかし　德圃
美しく夜は紫に明はなれ　舞閣
後の袷の襟におもたき　明五
活僧の庵のぐるりは番椒　渡光
あれ三ヶ月といそぎあわてる　斜天
將棊ゆへ半年ばかり留られて　吳清
雪踏の音の村に珍し　丑二
花迄に紺屋の染の出來合ず　錦嶺
几巾に心はうはの空なる　德野
春からの新參ながら御意に入　渡牛
溫泉場へ飛脚の味噌も醬油も　舞閣
いつ上る雨ともしれずほとゝぎす　春爾
讀さしてある桐壺の卷　管鳥
あるへい糖せめて思ひの胸にさへ　文皮

氷もあづまの方へ流るゝ　德野
(草)夢寢から艸鞋になると共かるさ　德市(圓)
とらへて來れば狐付なり　丑二
(草カ)夢に見た昔より明し夏の月　花往
しやんと繻(子)伴の襴が能きく　文皮
香のもの刻て喰ふこそわりなけれ　明五
何をたのみの寺よりの狀　舞閣
百石のうちが半分山と川　管鳥
雪の斷の咥も一丈　春爾
眠り〱鋏子を替にいく度歟　渡牛
あたらし家の今に匂へり　明五
下駄はいて世界回つた花行脚　雅因
何やらゆかし越方の春　銀獅

秋興　社中

魂棚にはや來迎歟夢(草カ)の音　渡牛
しきりなる稻妻寒し瀧しぶき　丑二

操珠數の露のしめりや朝な〱　春爾
風の行聲や二夜の月の跡　雀皐
朝かぜや落穗の雀さはがしき　銀獅
灘越てのこる暑をゆふべかな　吾琴
落かたを寐ものがたりや雁の聲　芋舟
霧深く都の富士や數十程　德門
秋風や切籠のふさのみだれより　德野
朝皃や間に〱花の咲揃ひ　文皮
筈あげてもり來る月に素讀哉　德圃
抱籠のうき世はなれて今朝や秋　管鳥
猿の毛のあらくれたつや初嵐　舞閣
芋の葉の露もかたむく日ざしかな　雨朝
八朔や嵐のあしの供廻り　魯計
くちなわをことしもころす花檀哉　井魚
閇に來ぬきのふや鹿の聲の數　漢年
ゆくと來の人を土俵や辻相撲(撲)　明五

太祇師いつの頃にか有けん、我亭にて卽興の短册あり。

薺やはかなさいふは跡の事　太祇居士
人のこゝろの撓む白露　呑獅
三日月の舟もろともに棹さして　五雲
有やなしやと振る五升樽　嵐山
親も子も鷹野の供に召れつる　蕪村
霰こぼして雲は晴行　几董
茶にかうしたるよ詩にある住居也　多少
宗祇をとめて軽い寐道具　吾琴
臼うたも闇のひがしは聲高に　呑獅
杉苗匂ふ曉の雨　蕪村
千早振神に仕ふる古烏帽子　嵐山
臺に立たる若衆見初る　五雲
人のとふまでに細りし食の味　几董
今日で幾日の碧巖の席　多少
月朧町の中行流川　吾琴
八聲の雞や一聲の雉子　呑獅

花は櫻さくら散ともよしの山　几董
音色も若き法螺の厚總　吾琴
蓮帆も追風うけて奇麗也　五雲
金の箱を積かさねたり　嵐山
日來我が小太刀うれしき更衣　蕪村
名もなき樹〳〵の立伸る頃　几董
藥鑵とはあまりの事の藥好　嵐山
豊に翌の御幸觸來る　五雲
世の中は爰に日和の譽譏　多少
能キ鎌ほしく思ふ百性(姓)　蕪村
錦木ゝのこけてわびしき露霜に　呑獅
恨顔なき月の松しま　多少
句作りのおかしからざる秋くれて　几董
すなをにはしる亭の戸障子　五雲
懇なくすしも年の老にける　吾琴
あはや焦ぬと見ゆる挑(提)灯　几董
興盡る頃の咄しに實が入りて　多少
朝日に消ぬる雪の玉水　呑獅

中〳〵に遠きが花の友なれや　蕪村

摘む初むかし挽後むかし　嵐山

秋興

長うなる夜とや語らん星の闇　雅因

朝霧や二人起たる臺所　几董

繪行器の使に逢ひぬ古みやこ　嵐山

夜寒來ておれがからだを覺へけり　嘯山

隣にも木魚うつなり秋の暮　武然

明月や酒癖なくて七ッ迄　多少

手燭して能ふとん出す夜寒哉　蕪村

寐た人の家根へ石うつ月見かな　呑獅

蕣のはなや硫黄のほの移り　五雲

跋

太祇處士四時詠其徒乞余爲之跋余謂跋者猶燭之跋也富貴之家宴飮卜夜大設燈燭而火燼未央而換以他燭貧素之家亦燼及跋寸則復換之而已不侫寒陋今爲之跋不過數言已噫

癸巳之秋七月

葛陂野人題

印　印

春泥發句集

上・下

召波

柳維駒父の遺稿を編集して余に序を乞
序して曰「余曾テ春泥舍召波に洛西の
別業に會す波すなはち余に俳諧を問答
曰俳諧は俗語を用て俗を離るゝを尚ふ俗を
離れて俗を用ゆ離俗の法最かたしかの何かし
禪師か隻手の聲を聞けといふもの則俳諧禪
にして離俗の則也波頓悟す却問叟か示すところの
離俗の説其旨玄なりといへとも尚是工案
をこらして我よりもとむるものにあらすや

去て彼もしらず我もしらず自然に化して
俗を離るゝの捷徑ありや 答 曰 あり 詩を語るべし
子もとより詩を能す他に求むべからず 波 疑
敢問夫詩と俳諧といさゝか其致を異にす さるを
俳諧をすてゝ詩を語れと云 迂遠なるにあらずや
答 曰 畫家に去俗論あり 曰 畫去俗無他法多讀
書則書巻之氣上升市俗之氣下降矣學者
其慎旃哉 それ畫の俗を去だも筆を投じて
書を讀しむ況詩と俳諧と何の遠しとする事

あらんや此ことを悟す或日又問、いま
俳諧の名家各門戸をわかち風調を異にす
いつれの門よりしてか其堂奥をうかゝはんや
答曰俳諧に門戸なし只是俳諧門といふを
門とす又是画論曰諸名家不分門不立戸門戸
自在其中俳諧又かくのことし諸流を尽して
これを一嚢中に貯へみつから其よきものを
撰ひ用に随て出す唯自己胸中いかんと顧る
の外他の法なししかれとも常に其友を撰て

其人に交る人あらんなれて郷に至るをいとし
彼門其友とするものハ誰ゝや先其角を專とする
嵐雪を訪ひ素堂を得男貫ニ伴ふ曰く
此四老ニ會しうてつたに市城名利ノ域を離れ
林園に樵い山水みこゝと遊し酒を酌て談笑し
句を得ることハ專ラ不用意を貴ぶ如此
させる日々或日又四老ニ會ず幽賞雅懷
はあをとらし眼を閉て苦吟し句を得て
眼を開く忽四老の所在を失すまことすっ凡の

ところに仙化して去るや恍として一人自仙
時に花香風に和し月光水に浮ふ
是子が俳諧の郷也召波微笑すつゐに
我社裏に帰りて句を吐くことをやめす
且麦林支考を非斥す余曰麦林支考
其調賤しといへともに人情世態を盡す
されはそれもしも支麦の句法に倣ふる又一案の
一助なきにしもあらず詩家に李杜を
貴ぶに論なし猶元白をすてさるが如く

さよ波日傳文我をとおもひきて野狐禅よ
りことするハ画家の呉張を画鬼とす
支考ハ則俳魔なりくのみまたて支考を
罵て佳退て他岐を顧さてつゐに俳諧の佳境
をわすれむなしく一旦病にふして起つゝと
あらす形容日ゝにかはり漸衰ふるなす
及ふ所也頭ぬ移ね鳥入期をさ了んとす
拾て口をも伝て日根らくハ叟をもて何か
を用ひるまるとと言渥潤紙て

几下に帰りて余ニ示して曰我俳諧
西せりや俄に西せり已にあたることハ但半
落語と丹子の伸に記せる文と但半落語
ハ余か一己の謾筆にすゝむくも似くの
人と討論せしことを雜録せるものや
遙るに其文を更ましにて此集の序と
せることハすこしに故あり此文を見て序す
清韻洒落なるや甚ひさしきことを知てその
句れいたりくれさてさをも咬つかし　かれ

帰の後をとりつくる筆に類をへいら
ことくそとしか洛下入夜半亭に於て
六十二翁蕪村書

于時安永丁酉冬十二月七日

春泥發句選（上）

春之部

元旦

こと〲く中は盡じ花の春
けさ春の氷ともなし水の糟
春たつや靜に鶴の一歩より
素袍着た酢賣出こよ花の春

等持院寓居の頃

元日や草の戸越の麥畠

元日雪ふる

野一遍雪見ありきぬ雜煮腹

福壽草 ひともとはかたき蕾やふく壽中

鏡開 うれしさや養君のかゞみ割
擧茶や祖師の鏡のあぶり喰

寶引 寶引の味方にまいるおとな哉

羽子板 羽子板の一筆書や内裏髮

猿曳 猿引の村へ來たるよ呼子鳥
とし玉や抱ありく子に小人形

年玉 年だまやわび寐の菴の枕上

若菜 小わらはの物は買ひよきわかな哉
ほとゝぎすわたらぬさきに薺かな
御飛脚の堀河出てなづな哉

野老 ところ堀(掘)おのれが髮も結ふる

梅 此日ごろ梅にながるゝ野河哉
宦高き人のにがみや梅花
うめ生て是より瓶の春いくつ
梅白く藪の緣にさす枝哉
梅ほしの酒しほすゝめ寺の梅
梅折て斜にし見る木凷(ブリ)哉
梅の月源氏の曚女芳(房)達

御室の僧、梅花一枝なたまふ。

衣裡よりも得たりかしこし梅の珠
梅折ば先夕月のうごく也

梨園出て二度に逢ひぬ梅二本

二日目に葛家は成りぬうめの花

　伏見鶴英、任口上人の墓跡を尋ければ

短冊と伏見の梅を一荷かな

梅花美人來れり漸二更

嗅されぬ梅のあるじや道心者

歸さの棒の片そぎんめの花

柳

さし柳五尺の春を見せにけり

五條まで舟は登りて柳かな

青柳や堤の春のいく所

かたり合いかにもそこの柳哉

椿

我庭を既に憐む椿かな

里の子が拾ひ首する椿かな

落なむを葉にかゝへたる椿かな

黄鳥

鶯につめたき雨のあした哉

うぐひすの聲あはせけり春の臭

鶯の聲は戸にあるあした哉

うぐひすや銅蓮水を湛ぬる

無人境うぐひす庭を歩りきけり

御忌

八郡の空の霞や御忌鐘

土筆

つく〳〵しほうけては日の影ほうし

獨活

狙ばしやかづき上ゲしはうどの線

　所思

土筆經木のかゝる河邊哉

東風

東風うけて川添ゆくや久しぶり

餘寒

飲過た禮者のつらへ余寒哉

いかづちの後にも春のさむさ哉

思ひ出て薬湯たてる餘寒哉

からびたる竹の寒や春いまだ

　自悔

四十にも餘る寒さやものゝ悔

底たゝく音や余寒の炭俵

霞

望汐の遠くも響くかすみ哉

日三竿雨になり行霞かな

淡の寄ル小じまも見えて霞哉

海苔　生海苔の波打際や東海寺

若鮎　默〻と折敷に見せる小鮎哉

汲鮎や青山高く水長し

柴にとる海苔大分も見えぬ也

朧月　おぼろ月獺の飛込水古し

我影や心もとなき朧月

田園の趣さらにおぼろ月

土とりのあとの溜りやおぼろ月

囀　囀に獨起出るや泊客

春風　撫あげる晝寐の顔や春の風

帋鳶　暮かゝる空をかこつや几巾

里坊に兒やおはしていかのぼり

朝東風に几巾賣店を開きけり

此糊のひるま過せよ紙鳶

几巾買て子心ぞ憂雨つゞき

いかのぼり遠まさり行反古かな

白魚　白魚に余寒の海やいせ尾張

しらうをゝめづるや老のうん呑に

しら魚やつきまとはるゝ海の塵

蛙　こもり江や雲母うく水に啼蛙

西行の席さはがしき蛙かな

いづちともなくや蛙の在所

はじめから聲からしたる蛙かな

江の蛙生駒の雲のかゝる也

猫戀　木づたひにいどみより來ぬ猫の夫

思ひかね夜〻寐ぬ猫の眠哉

よく見れば乞るゝ妻やこちの猫

歸雁　あたゝかな雨間を雁の呼夜哉

沖に降小雨に入や春の雁

北そらや霞て長し雁の道

燕　古き戸に影うつり行燕かな

酒旗につばめ吹るゝ夕かな

幢の佛間へ這入乙鳥哉

蜆　みづうみの淺瀬覺えつ蜆取

和海藻　わかめ刈乙女に袖はなかりけり

春深く和布の塩を拂ひけり

わかめ刈竹枝のことば習けり

蕗臺　酒いたく呑ておかしや蕗のとう

晋人の味僧(噌)の酒落や蕗の臺

椿生てねじめに折やふきのたう

初午　初むまや足踏れたる中分

二日灸　鶯の灸に二日やいとかな

涅槃　天人の時に泪やねはん像

悼二北邑牽順一

苦き手の共人ゆかし蕗のとう

木芽　大原や木の芽すり行牛の頬

山葵　蕎麥打テば山葵ありやと夕かな

おもしろうわさびに咽ぶ泪かな

摘草　摘中やいとはしたなき包もの

蕨　野の河や蕨さはしてひたしもの

さし木　古箸に人をよけたるさし木哉

雀子　すゞめ子や書寫の机のほとり迄

人の手に巣へ戻されつ雀の子

雀子や並ビ居つゝも黄ナル觜

畑打　痩脚や畑打休ム日なたぼこ

蝶　地車に起行く草の胡蝶哉

はかなしや蝶の羽染る鳥の糞

屋根ふきのあがれば下るこてふ哉

上巳　雛の宴天井に雲書せん

曲水に病後の俳の苦吟哉

曲水や江家の作者誰〳〵ぞ

有常は娘育てゝ家の雛

雛の宴五十の内侍醉れけり

桃花盃疊のうへを流めり

雛店に彷彿として毬かな

鷄合　鷄合左右百羽を分チけり

遲羅がしは桃花の雨のみだれ哉

鴨のしはがれ聲に名乗けり

桃　劉阮の桃に泊るや撞木町

風呂に見る早き泊りやもゝの花

立よりて荳な荒しそ桃の花

雲雀　庵室や雲雀見し目のまくらやみ

島原に田舍の空や夕ひばり

耕

耕に馬持る身のうれしさよ
たがへしやいづこ道ある谷の底
耕や矢背は王氏の孫なりと
十津河や耕人の山刀

田螺

片口のわぶと答へよ田にしあへ
泥澄てそこらに見ゆる田螺哉

鳥巣

鳥の巣や誰か髪もじの一摑
此殿の古巣たづねつ鳥二ツ

花櫻

舟橋の勅使まうけや花の雲
定りの花見の日あり家の風
佗人の虱盡して花ごろも
いで花に君粮包め我は酒
花のため家に釀する主かな
哀れなる瘦地の麥や花の道

嵯峨にて

材木の上にあらしや山櫻
むかし道見上て過ぬ山ざくら
北谷は南谷はいま山ざくら
やま櫻うつぼに折て歸也
須磨寺のめしのけぶりや山ざくら

晩望

燒火かと夕日の藪や花に鐘
落る花ひとかたならぬ夕かな
莖ながら雨の日頃や落る花
菴の雨花相似ざるきのふには

御室にて

仁和寺やあしもとよりぞ花の雲
脫かけの袖や花見る舞子ども
ことしまた花見の顏を合せけり
西陣や花に夫婦のにしめもの
いとゞしく花に怠る箒哉
花踏て戻る公卿の中履かな
その寺の名はわすれたり糸ざくら
さくら狩古き手代や飯奉行
遲櫻驗なる聖住おはす

壬生念佛 山吹やいはでめでたき壬生ねぶつ

御身拭 乘物で優婆夷も來るや御身拭

御影供 北面の御堂かしこし御影供

人丸忌 石見のや月も朧の人丸忌

出代 出代や人の心のうす月夜

藪父入 やぶ入の枕うれしき姉妹

養父入や行燈の下の物語

山吹 折ばちる八重山吹の盛かな

山ぶきや雨水ひかぬ地のひくみ

苗代 宵月や苗代水の細き音

里の犬苗しろ水を嗅けり

松遠し苗代水に日の當る

春夜 春の夜や足洗はする奈良泊

春の夜もかたぶく月や連哥町

春雨 春雨や野老喰ふて見る女あり

最前に起きてもよきを春の雨

文ぬれしことはりいふや春のあめ

迎待つ母よ娘よ春の雨

春の雨あるじは留でおはす也

春雨や財布ぬらして節句前

春さめや暮を約せし妻戸口

春雨や谷の古葉も流出ッ

春雨の泥や棧敷の階子まで

はるさめや御の雫梅の塵

春雨に鐘のうねりや障子越

春水 しづかさや雨の後なる春の水

支水七十賀

まな鶴をほとりの友や春の水

探題

春燈 春の燈油盛りたる宵の儘

春深く蔀に透るともし哉

蠶 浴して蠶につかふ心かな

月更けて桑に音ある蠶かな

雉子 背のひくき木瓜に身を置雉子哉

いで共頃竹拔五郎きじの聲

菜花 菜の花の道行人の岡見哉

なのはなや此邊までは大内裏
菜の花に春行水の光かな

躑躅
白雲の根を尋けり岩つゝじ
蓄には皺を見せたるつゝじ哉

陽炎
かげろふや燃えてはしさる物のひま
陽炎に兎出てゐる檜原哉
かげろふを掻出す鶏の距(ケヅメ)かな
陽炎に美しき妻の頭痛かな

遲日
遲日を追分ゆくや馬と駕
枕して遲キ日を行のぼり舟

寒食
寒食や饐に馴れたるひとり住

爐塞
爐ふさぎや旅に一人は老の友
物くさく爐塞ぐとしも見えぬ也
爐塞て主おかしや力あし
爐ふさぎや招隱の詩を口ずさむ

藤
しら藤や奈良は久しき宮造
白藤や開帳前のひらき道
なつかしき湖水の隅やふぢの花
藤棚や小詰、役者の草鞋がけ

春暮
橋守の錢かぞへけり春夕

晩春
大原の千句過たり春のくれ
公家町や春物深き金屏風
ゆく春やいづこ流人の迎舟
狩倉の矢來出來たり暮の春
春をしむ人や落花を行戻リ
たんぽゝもけふ白頭に暮の春
ほし衣も暮行春の木の間かな
行春に流しかけたる筏かな

題 跆馬
ゆく春のとゞまる處遲ざくら
鷲尾は親子住居て春おしむ
八專の空たのめなくゆく春や
野に山に閑人春を惜みけり

夏之部

郭公
あかつきの一言ぬしやほとゝぎす

烏帽子にも耳は出るよ時鳥
ほとゝぎす我も都のうつけ哉
今宮の煤掃しばしほとゝぎす
貧乏性いたゞく星や蜀魂
うぐひすの箱根や伊豆の子規
ことかたを歩行て訪ふや杜宇
ほとゝぎす啼やあふみの西東
ほとゝぎす夜もいろ〳〵の物の音

更衣
遣唐のいとま賜ひぬ更衣
更衣ひそかに綿を着します
親殿の御物めかしや更衣
馬場騎の背中ふくるゝ袷哉

うのはな
卯の花や茶俵作る宇治の里
卯の花に貴舟のみこの帶哉
うのはなやかきあけ城の湛水

茨
道のべの低きにほひや茨の花

桐花
逞しき葉のさまうたて桐の花

ぎやう〳〵し
ぎやう〳〵し日高に着(著)て伏見哉

佛生會
灌佛や雲慶閑に刻けん
灌佛やわらぢも許す堂の椽

閑居鳥
さびしさの中に聲ありかんこ鳥
日くるればあふ人もなし正木ちる
峯のあらしの音ばかりして
晝日中逢ふ人もなしかんこどり

若葉
あはしまを女の出る若葉哉
水音も若葉も木曾の日ゝ〳〵に
題橋
虹たるゝもとや樗の木の間より

祭
加茂衆の御所に紛るゝ祭かな

牡丹
大坂の牡丹さゝげぬ本願寺
おめかけを牡丹の花の主かな
夜ををしむ筒のぼたんや枕上
嘗見しぼたんにめでゝ入院哉
御出入の李白を捜すぼたん哉
園廣し黄なるも交る牡丹哉

夏書
人しらぬ不犯誓ふて夏書かな
似合しき聟おもふ身の夏書哉

夏書さへ畫に成けり妾

麥

覆面の内儀しのばし麥の秋
痩麥や我身ひとりの小百姓
麥秋や聟殿ことしはじめぢやの
十津河や見込の武具も麥埃

題 豆査

余花いまだきのふの酒や豆査汁

短夜

短夜や老しり初る食もたれ
みじか夜をしらで明けり草の雨
短夜の獲見せうぞ桶の鮒
みじか夜や宿立出て小石原

蝸牛

かたつぶりけさとも同じあり所
夜〻の雨馬蘭に殖ぬ蝸牛

靑梅

靑んめや黄なるも交雨の中

燕子花

かきつばた深く住む戸に鳴子哉
鐘の手の寺前の池やかきつばた
小瓶もてみやげにくれし杜若
杜若門から覗く賣屋舗
女藺なら舟へと申せ杜若

幟

重五

齋に來て幟うらやむ小僧哉
ことし又おと子うみけん幟數

競馬

凄哉競馬左右の兒合せ

菖蒲

我牛をめで〻やふけるあやめ中

題 竹醉日

此日よと竹移しけり玄關前

杏

醫者どのと酒屋の間の杏かな

早苗

山城へあふみの早苗移けり
白雲や早苗とりさす水の面

田植

早乙女やひとりは見ゆる猫背中
けふも又田植あるやら竹の奥

筍

笋やしづかに見れば草の中
笋や脚の黑子も七十二

水雞

日も暮ぬ人もかへりぬ水鷄なく
月の出に川筋白しくゐな鳴

射照

百姓の弓矢古たるともし哉

十五から列卒にさゝるゝ射照哉
一雨を擲つ木香のともしかな
鹿遠しいでや射照の手だれ者

五月雨　さみだれの石に鑿する日數哉
五月雨や甍痲の夢にうつの山
兒につく幮のしめりや五月雨

農業
笠に入て燈うちけりさ月雨

螢　雨の夜や猶おもむろに行螢
行螢夜のみかうしまいりけり

夏草　夏草に狩入犬の見えぬ也

夏野　夏野ゆく村商人やひとへもの

夏山　夏の山しづかに鳥の鳴音哉

鮎　我井戸に桂の鮎の雫かな

河骨　水渉〳〵河骨葉をかくしけり

藻花　藻の花やわれても末に舟の跡

若竹　若竹に蝿のはなれぬ甘み哉
わか竹や村百軒の麥の音

麥粉　むせるなと麥の粉くれぬ男の童

梅漬　梅漬にむかしをしのぶ眞壺哉

靑田　むら雨の離宮を過る靑田哉

百合　ゆりあまた束ねて涼し伏見舟

麥　畦高く摘をく麥や雨の園

夏木立　夏木立いつ迺失て裸城

木下闇　下闇の三輪も過けり泊瀬の町
谷河の空を閉るや夏こだち
市人の爰見立けり夏木だち
夏木立阿闍梨の供の後ばせ

茄子　人妻のこれを饗應す茄子漬
茄子ありこゝ武藏野ゝ這入口
なすび賣一夏の僧を音信るゝ

蚊幮　うき人に蚊の口見せる腕かな
雪隱に信玄おはす蚊やり哉
世やうつりかはらの院の蚊遣かな
翌までと括りよせけり幮の破
燈に書のおぼろや蚊屋の中

待恩
苦しさや厨へも入らず蚊屋の傍
植込の蚊に罵ゝる女かな
物得たり厨のかくれの妹が文
いぶせきや子のあまたある厨の内
淋しさは天井高し寺の厨
蚊の聲の目口を過るうき世哉
蚊やりして武士守りぬ嶋ゝ湧
淺ましや蚊屋に透たる夜のもの
はづかしや朝るの厨を覗く人

蠅
詩にあらず錦にあらず櫻の蠅
あさましく蠅打音や臺所
羽チもいだ蠅歩行けり誰が所爲

毛蟲
桃原の岸に流るゝけむし哉

夏羽織
交れば世にむつかしや薄羽織

帷子
かたびらや浴して來し人の皃
新尼の着つゝおかしや繪かたびら

鮓
鮓壓て我は人待男かな
早鮓に王思は飯をあふぎけり
酒呵る人もや鮓に小盃

鵜
曲リ江にものいひかはす鵜ぶね哉
早瀬とは鵜の火に見ゆる進也
吐す鵜と放ッ鵜縄のいときなみ

夏月
夏の月よき人加茂の歩わたり
凉しさの日枝をのぼるや夏の月
少年の犬走らすや夏の月
ほのめけるはし居の君や夏の月
檀林に談義果しよ夏の月

川狩
河狩や身にそふ陰闇かたらひぬ
水更ぬ岸をうちゆく網の音

白雨
ゆふだちや市の中ゆくさゝら浪

雨乞
君王のゆふだち罸る臺かな
雨乞に夜ひと經よむ僧徒哉

暑
暑日や産婦も見えて半屏風
町あつく振舞水の抹かな

雲峯
假そめの涼廣がる雲のみね

艮のとに恐し雲の峯
兀山のうしろをのぼる雲の峯

題斧

つゝ立て雲の峯見る五・鬼善鬼

汗拭　目ざましに水ひてゝ來よ汗拭

團扇　うす雲に哥や望まむ白うちは
まらう人へ團まゐらせん白き方
前帶の友むつまじき團かな
面頰をはづして將の扇哉

蟬　さまかへて御庭拜むや蟬の聲
蟬鳴や黃麻しばらく旨かつし
啼蟬の岩くらたどる日疾哉
せみの聲茶屋なき岨を通りけり

夏虫　夏むしや夜學の人の皃をうつ

納凉　凉舟いとし若衆の小皷は
水練を舟の御遊やゆふ凉
うか〳〵と南草に醉ふや朝凉

簟　浴して且うれしさよたかむしろ
もろこしの夢はさめたり簟

竹婦人　抱籠や誰に倦れて拂もの

虫拂　筆のもの忌日ながらやむし拂
上野や足利代〳〵の虫拂

祇園會　かしこくも羯皷學びぬ鉾の兒
祇園會に曳や手摩ッ乳あしなづち

晝顏　晝がほや子を運ぶ鼬垣根より
とく起よ花の君子を訪日なら

蓮　麻頭巾蓮見にまかる小舟哉
瓶の蓮とても卷葉ばかり也
何いふて呼く舟ぞ採蓮哥

瓜　先すゝめ東寺はちかき瓜所
瓜刻むあした隣を聞れけり
冷し瓜加茂の流に枕せむ

醴　あまざけや盆に居並ぶ父と母

海松　汐滿ぬ雫うれしや籠のみる

ところてん　旅人の買はじめけんところてん
心太酒の肴にたうべけれ

夕顔　ゆふがほや古君今の名はしらず

夕皃や用所見て置旅の宿

施米　腰ぬけの僧扶ヶ來る施米哉

麻　なつかしき闇のにほひや麻畠

あさかりてかつはり淋し門の外

清水　川上は溫泉の涌なる清水哉

旅人の薬たてたる清水哉

かけ出の髭を絞ッて清水哉

常夏　なでしこや美人手づから灌ぬる

氷餅　あひにあふ氷をろしやこほり餅

夏祓　兒つれて法師のしのぶ御祓哉

白幣のはや西を吹みそぎ哉

春泥發句選（下）

秋之部

白馬寺に如來うつしてけさの秋

今朝の秋を遊びありくや水すまし

荒海に題目見えてけさの秋

秋たつやさらに更行小田の泡

初秋や薬にうつる星の影

六月閏ありけるとし

水なしの鵲橋越ぬ今朝の秋

厭はるゝ身を起されつけさの秋

水底に青砥が錢やけさのあき

一葉　褌の竿を落けり桐一葉

散柳　古御所の寺になりけり散柳

七夕　七夕やよみ哥聞に梶が茶屋

きぬ〴〵に鵲尻を向ヶにけり

七夕や藍屋の女肩に糸
あまさかる部を川下天河
とかくして夜とはなりけり天の川

魂祭

横貫て方士戻りぬ玉まつり
佗しさや寐所ちかき魂祭

燈籠

行ほどに上京淋し高燈籠
長旗の坂下へ出れば灯籠哉
高燈籠寺前の池に移りけり
つと立てあぶら浴たる切籠哉

踊

乙の君ある夜ひそかに躍かな
母式下閤よりやみへ踊かな
うかと出て家路に遠き踊哉
かの後家のうしろに踊る狐哉
霜天にみち〳〵明るをどり哉
うき人の兒猫深き躍かな

相撲

賭の御馬ひき出すすまひ哉
老にきと妻定めけりすまひ取
弓張に暮行角力柱かな

花火

花火舟遊人去ッて秋の水
花火舟家老ながらも叔父の殿

葬

朝がほや日剃の髭も薄浅黄
ひともとの葬や日に出來ふでき
あさがほや盥の前に新也
明暮と朝顔守るいほりかな

露

蛛の巣に露ふりよする響かな
露けしや朝草喰ふた馬の鼻
草高く露も穂に出る夕かな
庭ゆくも露に裾とる女哉
松明に露の白さや夜の道
蓮撫て鷺たちぬ月の露
狩入て露打拂ふ靫かな
膏薬になる草とはん原の露
むさし野や合羽に震ふ露の玉

萩

ほろ〳〵と秋風こほす萩がもと
爰かしこ小家隠して岡のはぎ
似合しき萩のあるじや女宮

明ぬとて萩を分ゆく聖かな

荻　なつかしき荻の葉伸や塀の上

一本の荻にも秋のそよぐ音

薄　山犬のかはと起ゆくすゝき哉

身がまへて芒かゝる也下男

苦蔵　鬼灯や老ても妓女の愚かしき

木槿　白木槿夏華も末の一二りん

秋風　物換る壁の夕日やあきの風

子の皃に秋かぜ白し天瓜粉

秋風や蚊屋に刀の鎮置ん

秋扇　秋かぜの閨に残せし要哉

蜻蛉　とんぼうや飯の先までひたと來る

白壁に蜻蛉過る日影かな

秋蚊　秋の蚊や默〳〵として喰ひ行

鱸　かゝる日に貰ひ鱸や生腐り

八朔　八朔や四座の登城の袖かへす

稲妻　いなづまや雨月の夫婦まだ寐ず

稲づまにあやしき舟の訴哉

いなづまや其はゝ木ゝの梢まで

稲妻や夜もをり〳〵の横渉し

霧　霧雨の外面にうごく曇哉

石火矢に出行船や霧のひま

山霧の梢に透る朝日かな

入相や霧になり行一ツづゝ

霧立て遠里小野となりにけり

秋雲　二色の繪具に足るや秋の雲

稲　稲の香やゆりもて運ぶ行逵

落穂　めでたさよ稲穂落ちる路の傍

稲ぶさや誰むすび置宮柱

何かせん稲刈比のかゝり人

あしあとのそこら數ある落穂哉

鳴子　野ねずみの逃るも見ゆる鳴子哉

引板　水盡て引とる息や引板の音

秋暮　加茂の町樂も聞えず秋の暮

婚禮の家を出ればあきの暮

寺子屋のてら子去にけり秋暮

短冊の屏風を見たり秋のくれ

秋旅

しられじと旅の身に添ふ金氣哉

名月や此松陰の硯水

月

唐秬に駒や繋ん野路の月

名月や懐帋拾ひし夜の道

名月に辻の出茶のともし哉

百貫の坊に客ありけふの月

橋の月裸乞食の念佛かな

東寺寓居にて

山ぶきは社家町に似てけふの月

名月や厠にて詩の案じくせ

名月や瓶子奪合ふ上達𨚫

夕月や轤鞍過ゆく轤鞍橋

月影や田をゝちこちの水の音

見るものにしてや月見の小百姓

名月や金拾はんとたち出る

月かけて砦築くや兵等

湖を月見の旅や友二人

ありときく兼栽松や月の前

後の月何か肴に湯氣のもの

悼二移竹兒一

硯箱ふたよの月を見納めぬ

同十三回忌

乙御前や顔見ぬばかり月の前

放生會

曉の露しづかに神の下山哉

浪黒き鰻十荷や放生會

山崎へあまれる鳩や放生會

秋夜

秋の夜をあはれ田守の鼓かな

秋の夜に江帥兵を談じけり

畑ものに秋の夜を守焼火哉

長き夜の寐覺語るや父と母

永夜にやゝ讀盡ぬ若菜の下

題妓

秋の夜を何かしろ女が丸行燈

長き夜やあらまし成ぬ翌の業

案山子

夕日影道まで出るかゞし哉

立されば形もなしたる鹿驚哉
をちこちのたづきなき身のかゞし哉
編笠のとにわびしき案山子哉
二ッあるかゞし容を違へけり

題俵

腰を折五斗の俵のかゞしかな
朝風に弓返りしたる案山子哉

冬瓜　よきものと冬瓜勧るくすし哉

糸瓜　汁菜にならでうき世をへちま哉

江鮭　あめ来るや普請半の川堤

下簗　またしては狐見舞ぬくだり簗

蕎麦花　そばの花畠の秋も後段哉

穂蓼　花を見て蓼の多さよ此邊

草花　あつめねば花にもあらぬ小草哉
折よりは行に慰む花野哉

野菊　かたはらにかぼちゃや花咲野菊哉

蘿　藪畳半は蔦のもみぢけり
代なしに譲らんといふ蘿の宿

野分　まひといき野分吹らん薄月夜
子狐を穴へ呼込のわき哉
雪隠のかきがねはづす野分かな
獨居の野分ながらに朝寐哉
宿までは闇の野分や馬の上

秋水　白髭の笠木も見えて秋の水

送蕪村先生之讃州

江山の助況や秋添て

葛蘭　くずの葉も吹や鳴子のうら表
栗に飽て蘭につく鼠とらへけり

柿　秋されや柿さま〳〵の物のしな

蕃椒　年よりの皆いやしとうがらし
蕃椒常世が鉢にちぎりけり

南草　た葉ことりて荒に就たる畠哉
南草干すとしても細の中たるみ

雞頭花　けいとうの宿や窓から答へけり

葡萄　ぶどうめす水銀盤をうたれけり

虫　乾きたる虫籠の草やあら無沙汰

虫聞てたつや野人の怪しむまで

虫籠の總角さめぬ致仕の君

蟋蟀

秋風に涕すゝりけりきり／＼す

九日

人心しづかに菊の節句かな

菊

宿のきく陶にさして憐まん

櫻井が跡に宗長菊持參

すがりかと思はるゝ菊の開きけり

菊の香や花賣が身の袂にも

初ぎくや九日までの宵月夜

土龍妹が黄菊は荒にけり

うたゝねの顏に離騷や菊の花

雛老ぬ茄子黄ゝぬきく畠

とく遲く菊此比のたのしさよ

草の戸の酢德利ふるや菊膾

殘菊

見る時は殘菊としもなかりけり

菊の香や十日の朝のめしの前

栗

料足に栗まいらする忌日哉

落栗や墓に經よむ僧の前

いがぐりに鼠のしのぶ妻戸哉

題 老坂

毬栗に踏あやまちそ老の坂

蜜柑

埋み置灰に音を鳴くみかん哉

擣衣

いねかしの男うれたき砧かな

小ともしの油あやまつきぬた哉

相住や砧に向ふ比丘比丘尼

山うばと兒見あはしてきぬた哉

牛祭

油斷して京へ連なし牛まつり

新米

船頭に乞とるめしやことし米

燒米や其家／＼のいせの神

新酒

父が醉家の新酒のうれしさに

買ほどは盡さぬ旅の新酒哉

新酒や天窓叩てまいる人

つけざしの穗に出る君やことし酒

母衣かけて新酒に醉る祭哉

初紅葉

いづちよりいづち使ぞ初もみぢ

照葉

切溜につふと見せたる照葉哉

銀杏

北は黄にいてふぞ見ゆる大德寺

秋雨 秋雨や四方椽にも濡るゝ方

揚屋から旅乗物や秋の雨

秋雨や旅に行あふ芝居もの

芭蕉 蕉の背にばせをの雨の雫かな

新綿 何となき綿のにほひや宿通

鶉 うづら籠棚の鼓に並びけり

夜寒 明ばまた夜寒の雨戸繕はん

ふさとめす地藏の綿も夜寒哉

怪談の後更行夜寒哉

月の洩穴も夜寒のひとつ哉

あとさして夜寒に慮外申ばや

題 妖もの

炭とりに早足のつく夜寒哉

鹿 鹿寒く月輪どのゝ寐覺哉

鳴川の戸に寄鹿や下駄の音

ぬれ色に起行鹿や草の雨

賓主鹿聞ぬ夜をかこちぬる

身は痩て草嚙ム鹿の思かな

小鳥 川上や黄昏かゝる小鳥あみ

鶁 逕とぶ鶁(ムク)一群や森の月

鵙 鬼貫も哥よみにけり鵙おとし

鵙鳴くや黍より低き小松原

瓠瓜 種瓢斑なつらを見はやさん

いつしかにうとろなものよ種瓢

木槿 木槿や禪をいふなる僧と我

雁 大宮や南がしらに雁の聲

初雁や目に相手なき海の月

はつ雁も春の覺えの舟路哉

低く飛雁あり扨は水近し

探題 鍛冶

月山の梢に響く秋の聲

茸 唐櫃の北山戻るきのこかな

さし上て獲(エモノ)見せけり菌狩

降出して茸狩殘す遺恨哉

茸山や売鐵砲の一けぶり

紅葉 紅葉見や小雨つれなき村はづれ

山づとの紅葉投けり上り口

吹さます酒や紅葉の燒過し

老母草

花の時は氣づかざりしが老母草の實

梅嫌

梅もどき我あり顏や・暮の秋

長き藻も秋行筋や水の底

枯てたつ草のはつかやくれの秋

暮秋

四町なる御哥使や昏の秋

題關

月影の不破にも洩らず九月盡

禪に贈別の詩や九月盡

石女と暮ゆく秋を惜みけり

冬之部

初冬や兵庫の魚荷何〳〵ぞ

はつ冬や戸ざし寄たる芳野殿

初ふゆは疊とのみぞ障子越

はつ冬や空へ吹るゝ蜘のいと

時雨

しぐれする音聞初る山路かな

傘の上は月夜のしぐれ哉

三度まで時雨れていとゞ黒木馬

生て世に寐覺うれしき時雨哉

夕しぐれ古江に沈む木の實哉

雲母行豆腐にかゝるしぐれ哉

江戸住やしぐれ聞こす人ゆかし

衰やしぐれ待身となりにける

喘息に寐つかぬ蟹や小夜時雨

山城のとはかは急ぐ時雨かな

妻木とる内侍か尼のしぐれ哉

むらしぐれ古市の里にしばしとて

寺深く竹伐音や夕時雨

爐開

爐びらきやけふも灯下に老の日記

爐開や庭はあらしの樅を吹

芭蕉忌

冬の雨しぐれのあとを繼夜哉

嵐雪祥忌

十夜
其集に洩せし十夜袋かな
人聲の小寺にあまる十夜かな
燒寺の早くも建て十夜哉

口切
口切や寺へ呼れて竹の奥
口切や彈正といふ人のさま

夷講
前髪に戀はありけり夷講
蛭子講火鉢うれしとこぞりぬる

達磨忌
達磨忌や和尚いづちを尻目なる

茶花
茶の花にきゞす鳴也谷の坊
茶のはなに文覺のやうな庵主哉

歸花
かへり花蟬のもぬけに薫す
はゝ木ゝの梢はこゝぞ歸花
雨雲の梢は奇也かへり花
咲出て心ならずや歸ばな
歸花桃李の美人覺束な

艸枯
いさゝかな草も枯けり石の間

霜
日三竿檜原に耐ぬ霜の色
羊煮て兵を勞ふ霜夜哉
手してうつ鐘は石也寺の霜
織殿の霜夜も更ぬ女聲

落葉
あちこちとして居りたる落葉哉
篦深にも射たる堞の落葉哉
寺ゆかし山路の落葉しめりけり
水含む落葉わび行草履かな
宮つこの闇の顏うつ落葉哉

大根
冬偶ある寺にひかるゝ大根かな
胡蘿も色こきまぜて大根曳

納豆汁
納豆汁比丘尼は比丘に劣りけり
反椀は家にふりたり納豆汁
翌といふ隣の音や納豆汁
齋腹の便ゝたりや納豆汁

海鼠
麗しく玉堂佳器にこたゝみぬ
憂ヿを海月に語る海鼠哉
海鼠たゝみの饗應(マウケ)しのばし聚樂御所

蠣
煎蠣に土器とりし釆女かな

冬至
雨ながら朔旦冬至たゞならね

よそながら冬至と聞や草の庵
天文の博士ほのめく冬至かな
百姓に浴ほどこす冬至哉
禪院の子も菓子貰ふ冬至哉

御火焼　御火焼や積上し傍へ先よるな

枇杷花　輪番にさびしき僧やびはの花

木枯　こがらしや瀧吹わけて岩の肩
凩や花子の宿の戸にさはる
木がらしの夜にゆたふる菴哉

皃見世　顔見せや伏見くらまの夜の旅
（浪花）顔みせや窑灶ものゝ舟一片

寒　さす敵に矢をとり落す寒かな
本陣に鼠の糞のさむさ哉

鐘氷　鐘氷尾上の寺や月孤ツ

氷　初氷許由此朝掬すれば
うすら氷や格子の透の器
琥珀には蟻氷には紅葉哉

水鳥　水鳥やかねて郷士の聟撰び
水とりや心の闇の流し鷄
浮鳥を石とあやまる水遠し

鴨　毛を立て驚く鴨の眠かな
水鳥に唐輪（カラワ）の兒の餌蒔哉
鴨の毛や笊打たゝく軒の水

鴛　かたよりて島根の鴛の夕かな

千鳥　江南は鳥飛也むら千鳥

雪　初雪に人寒からぬ御宴かな
客去て寺しづか也夜の雪
何を釣沖の小舟ぞ笠の雪
羽織着て門の雪掃く女房哉
雪の日や笠着た人をみさぶらひ
袖を出る香爐も雪の衙哉
ぬけがけの手綱ひかゆる雪吹哉
物焚て夜すがら雪の乞食哉
山買ふて我雪多きあるじ哉
都邊や坂に足駄の雪月夜
雪の日や隣家の童子欠木履

村人に雪の見所習らひけり
よき君の雪の礫に預らん
夜着を着て障子明たりけさの雪
初雪や既に薄暮の嵐より
雪の朝童子茶臼を敲く也

霙

霙して海老吹寄る汀かな

遠忌

その夜半の啼音は遠し浦衛

仙鶴追善

弔へば今もきませる頭巾哉

冬枯

冬がれの里を見おろす峠かな
家遠し枯木のもとの夕けぶり

冬野

枯野していづこ〳〵の道の數
伯楽が鍼に血を見る冬野哉
生て世に古錢掘出す冬野哉
枯野して松一もとやむかし道
上京の湯どのに續く枯野哉
枯野のや簑着し人に日の當る
闇屋より道のさだまる枯野哉

鷹

あたゝめよ瓶子ながらの酒の君
冷めしの霰たばしる鷹野哉
鳥叫や鷹にあたへる肉一臠
艸の戸に茶ひとつ乞リ狩の君

炭

炭うりや京に七ッの這入口
うき人の顏にもかゝれはしり炭
消炭に薄雪かゝる垣根哉
炭を挽く下卩ゆがまぬ心かな
炭取に佗しき箸の火ばし哉

榾

榾の火にあやしき僧の山居哉
榾けぶる住居佗しや疊なき

埋火

うづみ火に我夜計るや枕上
おの〳〵の埋火抱て繼句かな

冬籠

冬ごもり五車の反古の主哉
仁齋の巨燵に袴冬ごもり
思ふ事戸に書れたり冬籠
住つかぬ歌舞伎役者や冬籠

雉子一羽諸生二人の冬ごもり

隔なき友さとし向ひ、おろ〳〵の

みたるいさおかし。

何なりと薄鍋かけん冬座敷

水仙

水仙や室町殿の五間床

水仙や薬の御園守あたり

すいせんや先揚屋から生ケそむる

水仙や引きさき紙に珍重す

寒菊

寒菊や猶なつかしき光悦寺

寒菊やわきてかしこき茗がち

寒きくや四ッまで園の日のあたる

冬椿

冬つはき蝶波の梅の時分哉

冬木立

郊外に酒屋の叢や冬木だち

孟子讀む郷士の窓や冬木立

幕見ゆる貧乏柿や冬こだち

垣結へる御修理の橋や冬木立

綿帽子

里下りの野ひとつ越ュや綿ぼうし

綿子

留主がちの夜を守妻の綿子哉

綿帽子士農工商の妻の體

紙子

小夜更て帋子まいらす迎かな

弓の師の家中をあるく帋子哉

ながらへば紙子を貫ふすまひ哉

帋衣着てふくれありくや後影

紙子きて嫁が手利をほゝゑみぬ

足袋

扨あかき娘の足袋や飾どり

あききしつ足袋に足袋はく虚勞病

子の母よいく度結ぶ足袋の紐

革足袋で何あるかるゝ醫師哉

競べあふ賤の手先や寮の尼

頭巾

低

風に頭巾忘れてうき身哉

頭巾さへ多田の新發意の左折

酒臭やうかれ頭巾の行違ひ

異見など投頭巾着て馬の耳

頭巾着て法師か知らじ安良殿

頭巾深しとても聞えぬ老の耳

揚虎ぞと取違たるづきん哉

學して寐すや頭巾の影ほうし
袂なる頭巾さがすや物わすれ
頭巾着し冶郎に逢りうつの山
引かふて桟敷に忍ぶづきん哉

火桶

光茂が膠兀たる火桶哉
火桶はる暦わびしき月日かな
山伏も舞子も住て火桶哉
炭をふく紀の闕守が火桶かな

蒲團

身に添はで寒しやふとんの透間風
輕井澤君がきませるふとん哉
紡績に妻老けるよ敷ぶとん
旅の夜の我痩る蒲團哉

火燵

巨燵してくれる驛の馴染哉
山鳥の病妻へだつ巨燵哉
佗しさや巨燵に焦る蜘の糸

圍爐裡

大原女の足投出していろり哉

冬月

しづかなる柿の木はらや冬の月
質置のイむ門や冬の月

寒月や穢多が虎竹に肉の影
温石の百兩握るふゆの月

塞上燈

氈帳に短檠くらし藥喰

河豚

鈍あらふいつもの男まいりたり
ふぐと汁我が使に我ぞ來ぬ
歸らめや鰒喰ぬ家によせし身を
河豚汁鯛は凡にてまし〳〵ける
河豚しらず四十九年のひがごよ
廻文の點の長さよふぐと汁
佐殿に文覺鰒を進めけり

雞卵酒

玉子酒賓主を分ツ小盃
沫を消す内儀老たり玉子酒
草の戸や盃足らぬ鷄卵酒
寐酒せむ先たのもしき鷄卵百
玉子酒十重たる小さかづき

煮凍

煮凍を旦夕やひとり住
煮凍にともに箸さす女夫かな

藥喰

長言す人去レけり藥喰

葱　夕卩誰疊焦しつくすり喰
小灯に葱洗ふ川や夜半の月
僕等のよゝと盛けりねぶか汁

薹菜　重箱に錢(ワガネ)て賭る薹菜哉
後妻のことぐに問ふ薹菜哉
薹おしに寺中をめぐる老女哉

鯨　鯨舟新島守を慰めつ
一のもり突や日來の飯の恩

鰤　めでたしな御子達からの臺の鰤

寒造　碓の十挺だてや寒づくり

御佛名　佛名や柿の衣の僧ばかり

鉢敲　鉢たゝき頭巾まくれて髮の霜
愚なる御僧と申せ鉢叩
鉢たゝき右京左京の行戻

寒念佛　無緣寺の夜は明にけり寒ねぶつ
茶を申をうなの聲や寒念佛

寒垢離　寒垢離の風に乘行步ミ哉
病中吟

煤拂　鏡とらば雨の鬢や枯尾花
門口に歩ミの夜や煤拂
煤拂あやしの頭巾着たりけり
平仲が皃ともはやせ煤拂
一函の皿あやまつやすゝ拂
すゝ掃や宵のさむしろ大書院
煤掃やいつから見えぬ物のふた
きぬぐの鴛も過けり煤拂
何やらむ妻火ともして翌の煤

年忘　家中衆のしのびくや年忘
王子吸ふ女も見えつ年忘
宮方の武士うつくしや年忘
國衆は舞子が好で年忘
貝で呑ム人をあふぐや年忘
腰越や鎌倉は嘸年わすれ
醉臥の妹なつかしや年忘
燭まして夜を續にけり年忘

寒聲　寒聲や京に住居の能太夫

衣配　橘のむかし文庫やきぬくばり
百疋は握る使や衣くばり
餅搗　餅つきや焚火のうつる嫁の皃
節季候　恥しらぬ老の戯れや節季候
掛乞　掛乞や雪ふみわけて妹が許
書出しに小町が返事なかりけり
年木樵　うれしさよ御寺へ年木まいらせて
岡見　此村に長生多き岡見哉
追儺　追儺うらの町にも聞えけり
先生も人のすゝめや厄おとし
厄落し石女年をあかしけり
節分。　節分やよい巫女譽る神樂堂
寶舟御枕香ぞいや高き
やごとなき一筆がきや寶舟
節分をともし立てたり獨住
年内立春　宵闇に春ぞ立るゝ十日ほど
年ごもり　月もなき杉の嵐や年籠
歳暮　行としや月日の鼠どこへやら

春正があつらへ來しぬ年暮
口上のせいぼ使や古男
年のいそぎ聖の衣みじかしや
馬の背にまたるゝ銀やとしのくれ
行としやたゞならぬ身の妹分
錢はさむ下部の腰や年暮
ゆくとしや六波羅禿おほつかな
常よりも遊ぶ日多しとしの暮
年の市や馬士によみやる送ﾘ狀
名の高き茶入も見けり年の暮
竈塗の心しづかにとしの暮

井華集

春夏・秋冬

几董

（井華集　春夏）

蕎麥と俳諧は田舍ぞよきとや。しかつぶやかれし世をおもへば、都はなほ栛園のむかし口なる人もこそおほからめ。我難波のうら人も口網おもからぬ西山ぶりをまねぶには、蕉翁の雅致高情をも、人妻のよそばかりにや見過しけむ。是を恨みと歟、何某が十論・古今抄、俳家の說難數万言、むなしく紙墨を費えたりな。いでやそのかみの都人は、和哥の風姿に椋のはをかけ、手に楽は鼻油をすりみがけるも、きのふは里村の月次にひねもすうめきくらし、けふは貞室・重頼らが扉を推て更る夜を惜みしとか。今や和歌・連哥道場、おのがどち〳〵立わかれて、かりにも隣に遊ばぬげなり。於レ是みやこの俳諧もひとかたの道と成んてより、何がしくれがしの統をよばゝる人も、おほかたは蕉門の風韵をうつしまねぶには、爐邊のかけこ碗に信濃・伊吹の挽おろし、又なつかしまるゝみやびわざとなりんてぞ、夫も是もみやこゐなかにおとるべきかは。我友几董は、御溝水の流にうぶ湯をひきて、みどろが池の蘆の角髮より、俳句の長短（墨消シ）迄口に絕る日なき好士なりけり。しかも其雅致を師にまなび、洒落は父に傳ふのみならず、かねては晋子が風韻を宗とせり。むべなるかな、師は蕪村、父は几圭、此二老が師なる巴人は、むかしの晋子が徒弟にしあれば、墨繩の筋たがはずもぞある。畸人このごろみやこに遊びて夜半亭をとむらふ。何くれ物がたりのついで、一部の册子をとう出ていふ、是我二十年來の句帳也。社友らこれを江湖にせよとすゝむを、我まどひてはたさず、幸に事さだめせよと。畸人云、兄しらずや、世を見れば、詩文の自撰日を逐て戶〻にいづ。和歌に市賈の撰集あり、俳士のみ壁に藏むべきにあらず。さらば是をはしにことわれと也。あゝさしでの礒・川瀨の古杭、うたていはずばとひとり言しつゝ、この夜の旅寐に筆をとり侍る。此篇や師が雅致、父が洒落、かつ師祖達の風韻をも備へて、卷をひらけば彩色まばゆきばかり也。これやゐなかのはいかいの、今は都におよぶべからぬを、うまく讀て知る人はしらむ

ものぞ。かくいふは長柄の濱松陰なるゐなか人無腸居士
といふものなり。

自叙

明和庚寅のとしより、かりそめに記し置る家集めけるもの數冊子になれりけり。此頃秋の夜のつれ〳〵なるまゝ、とうでゝをり〳〵よみゝるに、うたて庭の木草のいや茂ッにはびこり、古井の水のながめに溢るゝが如く、いとわづらはしきばかり多かりければ、やがて筆とりてかたはしに墨ぬり打消しぬべくおもふを、其をりし人ありて、あなむざんや、そが中には年ごろひとの聞知たるもあらむ、又みづから頭いたむまで案じこうじたるも有べし。いかにさばかり無下の事はなし給ふやと、泣ばかり制しとゞめらるゝにぞ、亦此志をもうばひがたくて、さらば是を二卷ばかりに書約むべしとて、昔のも今のも、鈍き•さかしきに抱(拘)らず、淡き濃き打まじへ、つき〳〵しく撰びあらためつゝ、扨此双帋に名をかうぶらせよといへば、

かの人とみに井華集と号く。いかなる故やらむ我知らず。しらざれども何となくこゝろにかなひたれば、漫に表題となし置ぬ。于時天明七年丁未穐長月のはじめ、洛東聖護院の杜陰なる春秋菴にして、

几董詐善書

うぐひすの卯時雨に高音哉

鶯の隣へ逃てはつねかな

うぐひすやいせ路を出る暦彫

感偶

羽洗ふ鶯も見ゆ帋屋河

鶯の脛にかゝるや枯かづら

市中

鶯の二度來る日あり來ぬ日がち

鶯のたつ羽音して高音かな

初音して鶯下りぬ臼のもと

金衣公子

うぐひすや小太刀佩たる身のひねり

鶯や日の出の後の霜ぐもり

箱根にて

うぐひすに松明しらむ山路哉

新鶯

うぐひすの訛かはゆき若音かな

梅花見にこそ來つれ、とうたひて

鶯よ何がこはうて逃じたく

うぐひすの影ほし見えて初音哉

狂雲妬二佳月一

梅がゝに狂ふがごとし月の雲

埒もなき荊が中の野梅かな

見ぐるしき疊の焦や梅の影

梅ちるや京の酒屋の二升樽

山人に花咲ぬやとたづねれば

咲散もいさしら梅の伏見人

をちこちや梅の木間のふしみ人

遠望

しら梅に餘寒の雲のかゝる也

墻を蹈で罪得べしこの梅が宿

狼籍(藉)を從者とはるや垣の梅

白梅にこはそも氷雨の降日哉

佃間二人語響一

梅寒し奴にくるゝ小盃

ぬつくりと寐て居る猫や梅の股

から鶯や梅の中行懐手

さりべ野・舟岡の煙立さらでのみさ、無常迅速の世のならひながら、春の日のうらゝかなるけしきには、人の命ものばはる心地す。

野梅咲て挽哥きこえずなりにけり

耕さぬ人に見らるゝ野梅哉

木に殘るこゝろや手折梅の花

梅の春饅かくばかり白かつし

詩をうたひ、書を工のあまり、阮成が風流をたしむ者あり。

梅の窓に三線ひくや毛唐人

離別

戀々として柳遠のく舟路哉

若柳枝空さまにみどりかな

春水

わたりふたつ見えて夕日の柳哉

青柳やはつ神鳴の雨の後

寒かりし月を濁らす柳かな

辛崎の松は花より朧にて　といへるは、さゝ浪やまのゝ入江に駒とめて比らの高根の花を見る哉。たゞ眼前なるにとありけるとぞ。

比良の雪大津の柳かすみけり

犬に逃て庭鳥上る柳かな

さし木の柳の生立たるを愛して寓居の柱に書。

老そめてとにめでたき柳かな

しばし見む柳がもとの小鮒市

春風如レ刀

皃いたき風のよそ目に柳哉

子日

手を添て引せまいらす小松哉

まないたの七野に響くわかなかな

七草に鼠が戀もわかれけり

蛤の煮汁かゝるや春小袖

賣引の宵は過つゝあはぬ戀

さめたらんほど念佛し給へと、法

然上人の答給ふ。いとたふとかり
けり。

氣にむかばねぶつ申せよ御忌の場

着だふれの京を見に出よ御忌詣

やぶ入の脛をしかくす野風哉

やぶ入や命の恩の醫師の門

藪入やついたち安き中二日

やぶ入の我に遲しや親の足

五雲、東府の俳士を催して、北野
聖廟奉納の句勸進し侍りけるに

白梅や機婦にねたまぬ花一重

田家

大事がる柹の木枯て梅の花

園日渉以成レ趣

荒につく畠の柳みどりせり

賣家のいせが軒ばや猫の戀

轉び落し音してやみぬねこの戀

琴の緒に足繋がれつうかれ猫

余寒

よき衣に春の寒さをしのびけり

正月や髯いたましき采女達

春寒く二ッ殘りし鶏卵酒

春水滿二四澤一

あふれ越野澤や芹の二番生

日は落て増かとぞ見ゆる春の水

さす棹の拳にのるや春の水

五器皿を洗ふ我世やはるの水

川風寒み千鳥鳴也といへば、人を
して炎暑にも寒からしむとかや。
あるは蛙飛込と、水音を觀じたる
言外の余情、それらの妙境は及ぶ
べくもあらねど

夕されば千鳥とぶ也春の水

磯山や小松が中をはるの水

野も山も冬のまゝじやに春の水

雪に折し竹の下行春の水

畫に光琳有、俳諧に鬼貫アリ。

行水や春のこゝろの置所

市陌

煙草帋に鎭おく店や春の風
春風のこそつかせけり炭俵
途にあふて手帋披ヶば春のかぜ

少年行
春雨や簑の下なる戀ごろも
春雨に似氣なき雷の響哉
春雨や造化へもどす莖の壓
春雨や鼻うちくぼむ壬生の面

薄く春雲籠二皓月一
おぼろ夜や南下ッにひがし山
戲男に道蹈かへんおぼろ月
あじろ木のゆるぐ夜比や朧月

三盃の酒にうかれて風雲の癖しのびがたし。
しやせまし志賀の山越おぼろ月

塩山亭
落ぬべき西山遠しおぼろ月
春の夜や柚を蹈つぶす小板じき

海邊の曙といふ題に
むらさきに夜は明かゝる春の海
春の夜や蓮哥滿たる九條殿
欠盃のよし野もゆかし露のとう
物咎ム伏見の畑や蕗の薹

南都にて
熊坂に春の夜しらむ薪かな
元日の醉詑に來る二月哉
二日灸花見る命大事也
如月や一日誕す海の風
傾城に蒟蒻くはす彼岸哉
一休は何とおよるぞ涅槃の日

或山寺にこもりて
水に落し椿の氷る余寒哉

奉納いせ太神宮
有がたさ余ッて寒し神の場

畵賛
紅梅に睡れり衛士の又五郎
紅梅に衣もどし行や盜人等

野鳥の巣にくはへ行木芽かな

田家

乙鳥や雪に撓みし梁の上

燕や流のこりし家二軒

むら燕牛の胯ぐら潜りけり

市廊

つばくらや夜の酢買の驚かす

村深し燕つるむ門むしろ

淀・鳥羽のわたりにて

乙鳥や轍の小魚つかみゆく

旅意

三條をゆがみもて行霞かな

こたつ出てまだ目の覺ぬ霞哉

待日には來であなかまの蜆うり

干鰈やくつゝじの柴や燃んとす

遊糸白日靜

いとゆふにいとしづか也松の風

陽炎や酒にぬれたる舞扇

まさご路や陽炎を追波がしら

土脈潤起

燒寺も春來て萩のわか葉哉

かげろふや泥脚かはくくわい堀(掘)

晉子七十年懷古

夕がすみおもへば隔ッむかし哉

几巾の尾の我家はなるゝうれしさよ

海士の子や舟の中より帋鳶

颱のそなた長閑にいかのぼり

西行忌

骨をもて作れば和哥の聲美也

點印筥の裏書を望れて

濱の眞砂路の遠き近きをうかゞひつゝ、句の甲乙を撰に、丹青の色をもて分ち侍る。

えりわけむ眞蘇枋の小貝海苔の屑

倣二素堂口質一

雁がねも春の夕暮となりけり

風呂の戸をあけて鳫見る名殘哉

客中春遊吟

紅裏は屋敷女中歟遠雉子

きじ鳴や暮を限の舟わたし

虹の根に雉啼雨の晴間がな

句合に

三井寺の鐘はくるゝに雉子の聲

小松野ゝ蕨葉廣に成にけり

土を出て市に二寸のわらび哉

野を焼や小町が髑髏不言

野行

投捨し野葱土かはく春日かな

摘草や印籠提し尼の公

道の記に假の栞やつく〴〵し

たんほゝや五柳親父がしたし物

芭蕉菴の松宗和尚へせうそこに

椎の葉に盛こほすらし春の雪

山かけの夜明をのほる雲雀かな

起臥や身を雲介が友ひばり

應擧が畫に

春のあはれ雉子うつ音も霞けり

嶋原の歸さ

桐油喚き駕に蛙を聞夜哉

飛〳〵に芹の葉伸や鳴かはづ

啼蛙神もはじめて鳴ル夜かな

三日月の影蹈濁すかはづ哉

村落

さむしろや蝶も巻込俄あめ

舟につむ植木に蝶のわかれ哉

蜂の巣に愛源八の宮居かな

畑をうつ翁が頭巾ゆがみけり

苗代やある夜見そめし稲の妻

初草に心づよさよ春のしも

はづかしと客に隠すや田螺あへ

亡母二十五回忌

花の雲ほさちの數と經りにけり

咲をさへおどろくに散はつざくら

禁城の御みぎりを徘徊して

いとまあるけふまだ咲ぬさくら哉

散と見し夢もひとゝせ初櫻

そゝこしきあるじが接木おぼつかな

俏に成兒にはくれじ雀の子

上巳

雪信が屏風も見えつ雛祭

うら店やたんすの上のひな祭

雛酒や汐干を語る國家老

雛の日や翌旅にたつ客もあり

桃の日や雛なき家の冷じき

墨よし浦にて

落かゝる日に悋氣だつ汐干哉

鯛を切鈍きはものや桃の宿

もゝ咲ぬ誰喰さしの實生より

加持すとて群來る人や桃の宿

初瀬にて

こもりくの蜂にさゝれないと櫻

淵青し石に抱つく山ざくら

松伐しあとの日なたや山櫻

雨中名武傘

雲を蹈山路に雨のさくら哉

咲出てあらせはしなの櫻かな

夜は嵐の吹ぬものかは

けふ來ずて見ぬ友ゆかし山櫻

月のあかき夜はたのみある櫻哉

東山吟歩

大坂の遊女かしらずさくら狩

さむしろに錢置花のわかれ哉

勅額のたふとくかすむ櫻かな

絶壁懸河を凌て日毎に越來るは、いと危き世わたり也けり。

筏士の嵯峨に花見る命かな

はじめて吉野山に遊びける時、あけぼの・夕暮の花をおりきつゝ

二日見ていかさま花のよし野山

芭蕉翁百年忌

花といふ論定りぬさくら人

大和の何來といふ人、はつせ山のかたはらに蕉翁の碑を封滿し、こもりく塚と号く。翁や生涯漂泊を恒とし、五天に白髮の勞をいとはず。片雲の風にしたがひさゝまる所を知らざるがごとし。

雲水の香をせきとめて花の塚

雨日仁和寺に遊ぶ。

晴るよと見ればかつ散雨のはな
門賣の花屋が手よりちる櫻
かしこくも花見に來たり翌は雨
花過て雨にも疎くなりにけり
花に來て詑よ嵯峨のゝ艸の餅
葉櫻の中〱ゆかし花の中

須磨

秋といひし哀をすまの山ざくら
女夫して住持醉しぬ花に鐘

元日の雲かさなりてさくら哉
夜櫻に青侍が音頭かな

分題飮中八仙

宗之瀟洒美少年
擧觴白眼望青天

醉て猶眼凉しやさくら人
慮外して祿かづきたる花見哉
植木屋の花うれぬ間に盛かな

觀想

廿とせの小町が眉に落花かな
花競ふ寺としもなしひがし山
底たゝく春の隅より遲ざくら

少年行

花手折美人縛らん春ひと夜
打とけて我にちる也夕ざくら
君見ずや花に我等がおとし文

西行上人の意を追て鬼貫か口拍子に倣ふ。

來たか來い見ずに置てもちる花ぞ

識ニ盃處之有レ歟

百花咲てかなしび起るゆふべ哉
花過てよし野出る日やわすれ霜
長き日の脊中に暑しおそ櫻
遲き日やひとへからげる草履道
影遲し魚餌について日三竿

對酌

遲き日や清ルハ昇る酢あへもの
長日や宿替の荷の殿ス
長日を羽織着ながら寐たりけり

題しらず

塞の顔ほがらかに春日哉
出代の跡濁さじやぬか袋
出かはりし身のかたづきや草枕

佐久良太平之辭

かの大臣の都に潮を汲せ給ひし
風流には似氣なけれど、鯛の塩
竈焼といふ物を製して、をの〳〵
箸を下し、盃を銜むの興に乗じ
つゝ、やがて醉中の吟を諷ふ。

其吟二句。

腸を牡丹と申せさくら鯛
山葵酢に肝をねらふや丸炙

春眠不レ覺レ曉

春の泊鯛呼聲や濱のかた
門口に風呂たく春のとまり哉
闘札やどなたのとまり春夕
僕妻(ガメ)の絹着て歸る春のくれ
今着キし澤菴漬て春ゆふべ

無聲詩

山吹や胡粉の見ゆる雨の後

有聲畫

山吹やさしぬき濡るゝ歩わたり
棣棠の影さす扨は夕月夜

逆旅

山吹にめで損ひやわるい宿

白馬金鞍入ニ誰家一

すみれ踏で今去馬の蹄かな

菫踏で石垣のほる戀路かな
菫野や今見し昔なつかしき
五加木垣都の客を覗きけり
家ぬしの摘にわせたるうこぎ哉

奉納玉津島

おもしろき名の有がたやわかの春
青海苔や石の窪ミのわすれ汐
鮎汲や喜撰が嶽に雲かゝる

柑子を惜しみて砌を圍たる人の心こそいやしまるれ。

あだ花と聞ばけだかし梨のはな
いざ春に生のうら梨花は今
紺かきが竹虎がくれや花林檎
月中の盗人落よ李花白し

安良居祭

やすらゐや鬼も罷れる若草野
ばゝ嗅の肩ぬぐ空や御身拭

朱雀野にて

菜の花や雲たち隔つ雨の山
菜の花の紀路見越すや山のきれ
雪踏にて辷る山路のつゝじ哉

尋二蝶夢一不レ遇

草の戸や菜を菅に蝶の留主
爐ふたひで菜といふ病うつりけり
表具師が無沙汰呵りつ爐の名残

芳野の山廻りして

春過て夏箕の川や藤のはな
藤咲て田中の松も見られけり
白藤や猫さかのぼる淵の鮎
源氏などほのめく藤のあるじ哉
誰顔ぞ地模樣らし藤の花
藤橋やおもき身を越す孕鹿

花に醉、鳥にうかれ、あるは春樓の宿酒に三春の曉をおぼえざるも、又風流酒落のためにつかはるゝ奴なるべし。

死なでやみぬいたづらものよ暮の春

園の戸に鎖おろす春の名殘哉
春暮ぬ醉中の詩に墨ぬらん

對二大人一

行燈をとぼさず春を惜しみけり
大名のひと夜島原くれの春
暮んとす春の狂ひや雹ふる
草臥て寐し間に春は暮にけり
還俗のあたま痒しや暮の春
行春や狸もすなる夜の宴
めづらしと見るもの毎に春や行
おこたりし返事かく日や彌生盡
ほとゝぎす古き夜明のけしき哉
月よりは上ゆくものかほとゝぎす
子規颪おとしの折からに

靜座

睡氣さす魔を蹴て行や子規
ほとゝぎす啼かと待ば蛛の糸

芭蕉菴にて

時鳥あとは松吹あらし哉
ほとゝぎすいかに若衆の聲がはり
ほとゝぎす兕祖(叩)の釘うつ梢より

詩仙堂の邊にて子規のしきりに鳴けるにぞ、丈山先生の、わたらじなせみの小河の、といへる哥をおもひ出て

ほとゝぎす鴨河越えぬ恨かな
あかつきや地震の後の杜鵑
ほとゝぎす天狗の礫ゆるせかし

丹靑の彩をからず、うす墨を引はえたるごときよこ雲のたえ間より

探幽があけぼのゝ夢や子規
伏見の夜急に更たり杜鵑

峨山聞二子規一

まぼろしの花忘れめや蜀鳥
かさればうさしいざ二人ねん

寒しとは小町が嘘よほとゝぎす

曉のかねてしゞまやほとゝぎす

子規けふはきのふと成夜かな

あればとてたのまれぬ哉翌はまたきのふとけふは
いはるべければ　西行上人

亂鶯欺二子規一

飛啼の若音あやなし時鳥

松浦佳則亭にて、短冊かけに句を
望みけるに

とばしりし墨も頓阿の杜鵑

ほとゝぎす路通はもとの乞食哉

五斗俵の地をはなるゝや更衣

袷着てむかしごゝろや花の塵

病ム人のうらやみ顔や更衣

誤落二塵網中一

町内に家振舞ありころもがへ

馬の脊にかろく誇る袷かな

小褄より針ひねり出す袷哉

ある家にて

牡丹二代連哥は劣るあるじ哉

百兩のなき魂もゆるぼたん哉

ぼたん畑小草に箸を下す也

或御方にて

牡丹芳御坊主肆にさゝれたり

ねたまるゝ人の園生のぼたん哉

此寺のぼたんや旅の拾ひもの

閨怨

短夜や妹がほむらの有あかし

みじか夜に敵の後を通ッけり

旅泊曙

短夜や空とわかるゝ海の色

みじか夜を四郎兵衛が假寐かな

短夜や蟹の脫に朝あらし

後朝

短夜や伽羅の匂ひの胸ふくれ

みじか夜は犬の餌に雀かな

兵庫にて

短夜や蛸壺のぼる米俵

短夜の香をなつかしみひと夜臺

今少しなれぬを鮓の富貴哉

なれきとやいざとけ眞木の柱鮓

兼好法師の口まねして

下阝等に酒もり過そ鯖のすし

ほとゝぎす待比、北浮にて漁し鯖のうなに、活ながら薄しほきりたるものを旦鯖といふて、都かたにて初がつほに代るもの也。

沖塩のはやせを戀や蓼の雨

卯花に加茂の酸莖のにほひ哉

千里蓴羹未下鹽豉といふ題をもて、おの〳〵句を合せけるに

幽菴が便ゆかしきぬなは哉

かきれにきえぬ雪と見るまで、と詠じけん

うのはなに寒き日も有山里は

明いそぐ夜のうつくしや竹の月

白罌粟に煤はく家や加茂の里

たれこめて祭見る家や薫す

荒たる家の籬さし覗きたれば、いやしからぬ女の里居とおぼしくてイみゐたる、いとゆかしくおぼえけるに

卯花や薄痘がほにしろいもの

筍に括り添たりしやがの花

鳥散餘花落

かきつばた魚や過けん葉の動き

等閑に杜若咲く古江かな

伏水任口上人の旧房にて

よし吹やわか葉ながらの青簾

嵐して藤あらはるゝわか葉哉

祟なす樹もえだかはす若葉哉

わか葉して親と子踈き雀かな

葉櫻に一木はざまやわか楓

囀に虫も聲添ふわかば哉

奉納石清水

君が代や今もわか葉の男山
むら雨の音しづまればかんこどり
かんこどり樹下に虱を捫る時
ねぶの木のその花鳥や布穀

布引瀧

山鳥の尾上に瀧の女夫かな
瀧見して袖かき合すあはせ哉

郊外

麥うたや野鍛冶が槌も交へうつ
麥哥の聲まね行や琵琶法師
麥秋や埃りの中を薩摩殿
麥秋の草臥聲や念佛講

奏里が姉古友洛にて薙髪し侍るに

うき草を拂へば凉し水の月

家事の公務に就て東武に赴く菱湖に餞す。

旅凉しうら表なき夏ごろも

戀

しのぶ帰顔に墨つく夏書哉
すゑ摘の母屋の柱に飛蟻かな
小角力が旧きにかへる酒煮哉

端五

髭黒の上手又出よくらべ馬

此非言語所以居處ヲ子

菖蒲太刀芝居に近き家かへむ
さみだれや船路にちかき遊女町
五月雨の猶も降べき小雨かな
さみだれの夜は音もせで明にけり
さみだれの空や月日のぬれ鼠

二日さまろは下々の下の客

宗鑑が竹の挽香を蚊遣かな
蚊やり木にたま〳〵沈の匂ひ哉
我につらし起て蚊をやく君が皃
蚊柱や蜘蛛の工のうら手より
鶏の寐つかぬ宿の蚊やり哉
蚊はつらく蚊遣いぶせきうき世哉

君が手のつめたさ見たり幮の月

吹折て墓のむせびしかやり哉

夕殿螢飛思悄然

あるじなき几帳にとまる螢かな

うき舟や瘧おさへてほたる狩

水うみの低きに就て行ほたる

みたらし河に遊て

行水に誘れがほの花藻哉

川越し女の脛に花藻哉

葭雀や暁て一二のみをつくし

川風や鵜縄つくらふ小手の上に

廣ごらぬ網や貴人の肱白し

えものある網やうれしきひそみ聲

有レ感

生て世にひとの年忌や初茄子

初瓜の價きのふのむかし哉

白砧百ケ日に

橘のかたみの衣に夏書せん

放参の鐘鳴かたや夏木立

神鳴の上りし松や夏の月

古君の化粧上手や夏の月

拔身歟と鞘のひかりや夏の月

堀川百首に、ゆひもやさはで早苗とりてむ、とあるに

雇はれて老なるゆひが田哥かな

湖の水かたぶけて田植かな

玉苗やけふ手よごしの二三反

村居

かしこくも盗人は來で水鶏哉

神樂岡崎の隱士高橋氏、住る庵の四隅より望るところの山岳を題して、詩哥連俳の詠を集めらるゝに、予は生駒山を得たり。

角豆とる籬のそなたやいこま山

金福寺芭蕉菴再成

角文字のいほりに題すかたつぶり

三日月の木ずゑに近し蝸牛
ひよんの葉の落てありくや蝸牛
罪深く夜を寐ぬ蠅や瓜の皮
毛虫遣背中おかしや郭橐駝
いとし子に毛虫とりつくはし居哉
代官に妖て瓜喰ふ狐かな

扇合に

流れ來てなでしこによる扇かな
夜歩行の露にとぢたる扇哉

讀二李斯傳一

厠なる扇も喰らふ鼠かな
暗がりへ要のはしるあふぎ哉
うたゝ寐の夢想書とる團かな
秋ならぬ閨の團扇や君と我

祇園會

うす痘の見えずていとし鉾の兒
酒ゆるす醫師も見えてゆふ凉
凉しさや遠く茶運ぶ寺扈從

すゞしさや絹着ておはす老和尚

雨後、大德寺に遊ぶ。

凉しさやこぼれもやらぬ松の露
凉しさや花屋が店の秋の艸

醉登二高閣一

すゞしさや遣水うつるかけ鏡
凉しさや再びともす燭の下

あかしに遊ぶ。

こよろぎのいそ魚買んゆふ凉
夏瘦やあしたゆふべの食好み
撫子に龝見むまでの暑かな
水のめば腹のふくるゝあつさ哉
あつき日の都や鯛の耻さらし

金剛杖いかめしく突ならし、法螺貝かまびすく吹立行つらつき、いさ愛なし。

暑日や御嶽まうでのさばき髮

難波橋の邊に舟泛て遊びけるに、

江南江北の遊客の舟花やかに、所
せきまで漕出たり。

我を招く玉むし出よ涼ぶね

夜涼や露置く萩の繪帷子

醉中

葛水や王敦を憎む女あり

くず水やうかべる塵を爪はじき

我等亦佛子

譬喩品の虫殺さじと拂けり

贋物のいく代めでたし虫拂

着すぐれぬ伯母の小袖や土用干

かなしくす小姫が皃の熱痱(アセボ)かな

汗拭や左袒ぐ夏芝居

あとさまに小魚流るゝ清水哉

山寺や縁の下なる苔しみづ

穢多むらのうらを流るゝ清水哉

山吹のわすれ花さくしみづかな

田中勘左衛門が愛蓮は、周茂叔を
あざむくと聞え侍りしか。

茂助田に愛すともなき蓮かな

いゐの香に朝氣の蓮を愛す也

わけ入や浮葉乘越蓮見舟

けふもまた午の貝こそ吹つなれ
ひつじの歩みちかづきぬらし

夕だちやけふのあゆみも未申

ゆふ立やよみがへりたる甃馬

白雨や水晶のずゞのきるゝ音

夕だちや傘を借す世は情

夏日

雲峯大工屋根やを憐めり

飈のおし動かすや雲峯

かげろひし雲又去て蟬の聲

手に持ば手にわづらはし夏羽織

わすれゐし帷子ありぬ妹が許

難波梅女が母薙髮しけるよし告こ
しけるに

剃捨し髪や凉しき蓮の糸

夕がほや鼠葬るめくら兒

万民雨を悅ぶ。

喜雨亭に夕風わたる青田かな

雜題を集て探りけるに

桑の實や兒にまいらす李氏が環

瓜冷す井を借りに來る小家哉

待うけて醫師にすゝむる甜瓜哉

酢陶を水主あやまちそ沖膾

夏日鳥卵の羹を愛し、冬夜鯉鮒の冷味を賞す。よろづに珍しきを好むは、長安繁華の人氣なりけらし。

新芋に先六月の月見かな

夕がほやくれど呼るゝ油賣

晝顏にしばしうつるや牛の蠅

孤村

禰宜ひとりみそぎするなる野河哉

名越の神事終ば、やがて水面に立たる五十串を拾ひて農家の守護となす事、かれて近在の土人川岸に聚り居て、我一と爭ふ事也。

いぐし奪ふ人の羽音や御秡川

（井華集　秋冬）

あかつきの神鳴はれてけさの秋

秋たつや宵の蚊遣の露じめり

形影自相憐

起〱の鏡するどし今朝の秋

馬鹿づらに白き髭見ゆけさの秌

立秋の翌庚申なりければ

明てけさ鍋の尻かく秋の聲

初秋や旭出ぬ間の寺まいり

日々醉如レ泥

今朝秌の腹に酒なしものゝ味

乞巧奠

振袖の憂をはたちやほし祭

梶の葉に配あまるや女文字

浪越さぬかさゝぎの羽や天の川

事しげき女なあはれむ。

髪とくをせめて願や星あふ夜

星合も山鳥の尾のわかれ哉

乙未秌　十唱

よみ哥をひそかに星の手向哉

瘧落てあさがほ清し幗の外

彩らぬ切籠の總に秋の風

島原や躍に月のむかし皃

桔更(梗)ならをみなへしなら露にぬれて

やはらかに人分行や勝角力

花火盡て美人は酒に身投けむ

乞兒かへる徑の木槿しぼみけり

虫ノ聲非レ一ニおほとのあぶらしろき迄

賭にしてとうがらし喰なみだ哉

感懐

松風にかなしき聲や高挑籠

宵闇の氣のおとろひや高挑籠

死なでわれむかしの戀を魂祭

玉棚の親に見せけり錢五貫

魂だなや腰ぬけどのゝ居はからひ

攝待の茶にかき立る藥かな

やぐら・かたすかしなどは聞なれたる手なるを、著聞集に古き名の見えたるぞいさゆかし。

とし又きやつに勝れな腹くじり

御相撲や五年前見し美少人

胸あはぬ衣かづきけりすまひ取

關取や妻は都のをみなへし

遊ニ高臺寺一

萩に遊ぶ人たそがれて松の月

御しのびの下山や萩のから衣

荻の風北より來リ西よりす

優妓中村鯉長はかねて佛の道に志深く、四天王寺の邊に終の栖をもさめ、柴の戸に明暮かゝるしら雲をいつ紫の色にぞなさむ、さいへる法然上人の御詠哥を念じつゝ、終にめでたき往生の素懷をとげたり。かれが所緣のもの追悼の句をもとめけるに

むらさきに見よや桔梗を手向艸

きちかうの露にもぬれよ鞠袴

朝がほや稚き足に蚤のあと

あさ顔や悋氣せぬ妻うつくしき

朝いする人をおどろかして

蚊屋はづせ蕣の花の赤むほどに

鉢植の蕣も見ゆれ檜垣舟

ある人の別埜(墅)にて

葉がくれに虫籠見えけり庭の萩

おもかげの幾日かはらで女郎花

生添ふや小松が中のをみなへし

いせのつと入さいふ事を

頓入て望一に誰とさゝれけり

市に隱る二百十日はきのふ也

又平が畫もぬけ出ておどり哉

ふり附のめし喰こぼす躍かな

つゝみ合し夫婦出くわす踊哉

電光石火の世を観ずる人あれば、（慈）戀慕の闇に身を惑ふもの有。

いなづまやみそか法師は老なりき

稲づまや隣の藏も修覆時

いな妻や壁を迯さる蜘のあし

雨後

いなづまや空にも雲のわすれ水

稲妻や山城の山河内の河

稲妻のおさまるかたや月の雲

鬼貫五十年懐旧

淋しさのとし〳〵高し花すゝき

刈とりてもとのみだるゝ薄哉

東武よりの歸さ、しらすか・ふた河の際より、松間の不二をかへり見る所あり。

伸上る富士のわかれや花すゝき

朝露や膝より下の小松原

夜坐閑

虫の聲蚓のふところはなれたり

鳴神のたえ間や夜半のきり〴〵す

蘭の香や雜穀積たる船の底

蘭を愛す賓主の座いまだ定らず

窩居園中十三唱之内

物しらぬ妻と撰ぶや虫の聲

今借した提灯の火や草の露

旅せよと我脊にあまる蒸哉

稲荷山

とんぼうに蝨飛かつ朝日かな

古墳添ニ新土ー

なき人のしるしの竹に蜻蛉哉

燒捨の人のむくろに秋の風

つり鐘に椎の礫や秋の風

秋風や捨ば買うの越後縞

たかうなを握もちてさいへる兒さは、またやうかはりにたれど

露草や家中の兒の剃こかし

朝ぎりや施米こぼるゝ小土器
あさ霧や二人起たる臺所
霧こめて途ゆく先や馬の尻
雫深し何呼りあふ岡と舟

八月十四日新居會

八九分に新酒盛べし菴の月
待宵をたゞ漕行や伏見舟

月前懷古

名月や朱雀の鬼神たえて出ず
新月に蕎麥うつ草の庵かな
水ばなに月澄わたるひとり哉

湖上

名月や辛崎の松せたのはし

青樓曲 二句

名月や金でつらはるかぐや姫
月今宵やり手がうたのむかしぶり

途ニ夕陽ヲ迎ヘ妻月ヲ

艸の戸や秋の日落てあきの月

まつ毛にも露おく秋や夜半の月

清夜の吟

うち曇秋は多けれ月今宵
名月や蟹のあゆみの日は空に

良夜雨

見ぬ月の千々に悲しき雨夜哉
船頭と月見あかしや肴きれ
淺河や月をよけ行歩わたり

駿府の旅寐をおもふ。

名月に富士見ぬ心奢かな

わかのうら

ゆく月や國なきかたに田鶴の聲
欠して月瞽て居る隣かな

待宵は曇、良夜は雨を帶たり。

いざよひは雲ひとつなき寒さ哉
十六夜や闇より後の月の雲
いざよひやかざめを逆す汐がしら

悼ニ太祇ヲ

十六夜やひとり欠たる月の友

臥待月の夜、湖邊の水樓に遊びて

月しろや金の波をまくら上

黑谷の初夜きく月の野川哉

返照らす有明の月や小便所

戀

夜ゞ逢ていとゞなつかし秋の暮

何いそぐ家ぞ火とぼすあきの暮

かなしさに魚喰ふ秋のゆふべ哉

旅思

馬下りて馬夫がわかれも秋のくれ

朱をそゝぐ入日の後は烁の暮

衣着よと母の使やあきの暮

述懐

老そめて戀も切なれ秋の夕

白箸の翁といへるものは、元政上
人の隱逸傳にも見え侍りしか。

とうがらし賣白頭の翁かな

うき旅や酒に擲ッとうがらし

待戀

幾度歟碪うちやむよそごゝろ

人妻の隣うらやむきぬた哉

熟(ウミ)柿の落てとばしる砧かな

遊子

ひとの國にやゝ馴るゝ夜の碪かな

比叡に通ふ樵の家のきぬた哉

指うちてしばらくとやむ砧哉

行舟に遠近かはるきぬた哉

仁和寺や門の前なる遠碪

衣うつよ田舍の果の小傾城

矢背の竈風爐に、ある人を訪ひて

養生の夫婦別在鹿のこゑ

西行上人の、世にこのもしき住居
也けり、とよみ給へるに

柴の戸にいやしくもあらず鹿の聲

戀〳〵て田に蹈かふる男鹿哉

月と成闇となりつゝ鹿の戀

旋轉術仰發揮我巨巨之聲聲韻不凡

立されば五歩に聲ある添水哉
案山子から苗一筋や秋の雨
草取し笠の辛苦をかゝし哉

田晴荒蕪

燒帛のけぶりのするに野菊哉
あし早き雲の蹴て行鳴子かな
早乙女も引板曳秋と成にけり

題　美人

ことし米西施が胸に痞へけり
馬わたす舟にこぼるゝやとし米
犁入に樽提て來る新酒哉
駒迎當時の哥仙誰〳〵ぞ

源氏物がたりをよみける折ふし

物のあやも暮て猶吹野分哉
かなしさもやぶれかぶれの野分かな
野分の夕杜子美が褌はづれたり

乞食にも臥戸のあればのはき哉
雨風の夜もわりなしや雁の聲

題　雁字

きれ〳〵の雲や鴈ゆく五字七字
米蹈の腹寒き夜や雁の聲
井伊殿の御拳見ばや小鷹狩
落鮎や畠もひたす雨の暮
今は身を水に任すや秋の鱗
濫鮎を炙り過たる山家哉
捨るほどとれて又なし江鮭
萌わたる桂のあした加茂の暮

信濃路を過るに

蕎麥は畠ぬし也蕎麥の花
花そばや立出て見ればましろなる
二三升蕎麥粉えまほし我畠
花か穗かもみぢ歟蓼の紅キは
山河の野路に成行や蓼の花

九日

けふの菊秋の泣顏洗ひけり

太刀持の脊中に菊の日なた哉

愛レ菊

掛乞に八日の菊を見せにけり

不遠慮に公家の來ますや菊の宿

菊を見つ且後架借ル女哉

酒を出すうしろの音やきく畠

秋悲し白菊の色に染む事

田家

今いぬる隣の客に門の菊

此隣きくに琴彈ク門徒寺

丸盆に白菊を解く匂かな

わざくれに小菊買けり宵藥師

雲母坂を下りに

手折捨る山路の菊のにほひ哉

紫に似ずてゆかしき野菊かな

時雨のいそぎに此夜の月も曇勝なれば

空暗し月や最ひとつ牛祭

秋の月千ゝにこゝろをくだきゝて
こよひ一夜にたえずもある哉

月にたえぬ今宵ひと夜の寒かな

蕪叟判句合

後シテの面や月のやせ男

加賀の千代尼身まかりしと、息白鳥よりせうそこせしかば

來る雁にはかなきことを聞夜哉

二柳が東行に

椎の實の落て音せよ檜笠

芭蕉菴にて

白露の百歩に茸を拾ひけり

紅茸やうつくしきものと見て過る

嵐山一周忌

鴫立てひとゝせふりぬ此ゆふべ

夕闇暮鴫たつ澤のわすれ水
おもひ出てぬ袖はぬれけり　慈鎭和尙

蕪翁と曉臺が湖南の旅舍に遊ぶ。

さす月もあな冷じの九月櫓

後苑

ひとりはえてひとつなりたる瓢かな
夕かぜやしぶ〳〵動く長ふくべ
草枯て人にはくずの松むしよ

渭堤の輞湊亭に、東行の離盃なさりて

殘菊にさめじと契る爵金香

岬菴を立出るさて

歸來る日も松に見よ月の秋

於二粟津芭蕉堂一薙髮

稻刈て麥に田かへす我世哉

大脊判句合

瘦臑に落穗よけ行聖かな
しばらくは北へ流れつおとし水

亡父二十五回法會 小序略

雨露の舍あればぞ法の秋

由男が擬棄納に

色かへぬ松のはれ着や蔦紅葉

山莊

手折置し紅葉かげろふ障子哉

桂州和尙の隱栖を尋て

何の木ぞ紅葉色こき草の中
さながらに紅葉はぬれて朝月夜

遊二仁和寺一

君知や花の林をもみぢ狩

梅ヶ畑といふ山里にて

薪樵る山姬見たりむら紅葉

高雄山 二句

よし野ゝ櫻は一日に千もとの花を見そなはす。

一もとのひとめに余る紅葉哉
紅楓深しみなみし西す水の隈

長月の末水晉の溪に分入に、丹山碧水羇旅の目をよろこばしめ、將また迅逝の感をなさしむ。

かけはしにけふも翌あるもみぢ哉

周防國より信州へわたる天產僧さ

同行して、途中に別るゝとて

わかれ路や草の錦を裁おもひ

鳥岳嶺

椽の木の秋を剝るゝあらし哉

朝寒に鉈の刄(刀)にぶきひゞきかな

あさ寒や水曬ふ家まだ起ず

咳く人に素湯まいらする夜寒哉

めかれたる松茸市の夜さむかな

不淨説法したる僧にはあらで

市に出るひら茸うりは法師かな

茸狩の柴に焚るゝさくら哉

傚二七歩詩一

柚を燒や味噌は釜中にありて泣

柹割て右おもふやのうらとはむ

懷古

むかし誰この堀越えし鴨脚ぞも

出るかと妖物をまつ夜長哉

たばこ干す寺の座敷に旅寐哉

秋聲

逢坂の町や針研夜半の秋

わすれられし女の暫く北嵯峨のしるべに身をよせゐしに

妓王寺へ六波羅の鐘や夜半の秋

長月三十日須磨の浦づたひして

はるはると來てわかるゝやすまの秋

さらしな・姨捨の邊に杖曳けるは九月盡の日也。

月の夜を泣盡してや果の炁

あはれことしの秋もいぬめり

勾當の身をなく宿や暮のあき

蕣に鶯見たりくれの秋

醫得眼前瘡
剜郤心頭肉

行秋や五月に糶しとし米

冬を待といふ題にて

小鍋買て冬の夜を待數奇心

初しぐれ今日菴のぬるゝほど

野風ふく室町がしら初時雨
吹上るほこりの中のはつしぐれ
信濃ゝ文兆が夕陽樓にて
雪見ゆる峯をかくして初時雨
難波女の駕に見て行しぐれ哉
遊二金福寺一
しぐれ過て草に落來ぬ松の風
杉たつる門に蚊の鳴しぐれ哉
羽織着て出かゝる空の時雨かな
しぐるゝや南に低き雲の峯
ゐなかうどを西陣に伴て
錦織家見によればしぐれ哉
梅の樹の容（カクチソクリ）すはつしぐれ
疊屋のいなでぞありぬ夕しぐれ
芭蕉忌
俳諧に古人有世のしぐれ哉
義仲寺
枯〳〵て光をはなつ尾花哉

東武にありて深川芭蕉菴の正當會
にあふ。
はせを忌や木曾路の瘦も此ためぞ
善光寺の路人が家に客と成て、か
ゝる尊き御佛の邊近く旅舍せし因
緣のありがたさに
朝毎の法りや旅寐の一大事
布子着てうれし兒なる十夜哉
藪寺や十夜のにはの菊紅葉
上京や月夜しぐるゝ御妙講
春坡が小松谷の別莊に遊て
紅葉ちるこのもかのものわすれ花
散はてぬもみぢもあるを冬の梅
稻づまの見えし夜明てかへり花
愚なる僧の祈りや歸花
蓼太と東海寺に遊ぶ。
澤菴をやらじと門の紅葉ちる
東叡山
下りざまに又鐘きくや冬もみぢ

天府公侍座

しぐれ來て園のにしきを蹈日哉

長閑さに落もさだめぬおち葉哉

逊足に落葉蹈ゆく烏かな

此かぜの夏はふかいで落葉哉

草菴

二度までは箒とりたる落葉哉

伏水下村氏にて

日の影の枯枝に配る落葉哉

大村鶴汀興行

元服の面起すやゑびす講

貞柳が哥よまぬ日や夷講

淺艸寺前紫陌紅塵

十月の春吹風や海苔の屑

三阿法師が喫茶會に招かれしに、あゐじの風流、有馬涼及の趣にさもにたり。

口切の菴や寐て見るすみだ河

成美、あるじゝて、墨水の流に舟を泛ぶに、冬枯のけしきいさ閑に、幽懐却客情を携す。

我舟におもて合せよ都どり

闇を鳴く沖のちどりや飛ぶは星

水鳥や墓所の火遠く江にうつる

野の池や氷らぬかたにかいつぶり

春坂興行に

影うつる鶯のふすまやよばひ星

貫之が船の灯による千鳥哉

・明石の浦浜夕陽に映じ、淡路島山咫尺に有。

夕衢手にも來るかと淡路しま

鎌倉の袖が浦にて

裾ぬるゝ浪や七里がはまちどり

ゑのしま

霜いたし草鞋にはさむうつせ貝

不騫公へはじめて召されけるに、季吟・芭蕉・其角の三筆を御床にかけられたり。

俳諧の三神こゝに冬ごもり

書棚に塩辛壺や冬籠

さかしらいふ隣も遠く冬籠

長菜八尺窓自長

短檠は二尺のものでふゆごもり

自悔

冬の夜や我に無藝のおもひ有

まらう人に炭挽すがた見られ鬼

碧雲引風吹不斷
白花浮光凝碗面

茶の花の香や葉がくれの玉川子

茶のはなに喜撰が哥はなかりけり

對漆翁紹朴

爐びらきや紅裏見ゆる老のさび

口きりや此寒空のかきつばた

白石城主君の御需により、二見文臺のうら書をつかふまつりし御報ひに、竹島といふ所の竹をもて爲に製させ給ふ花器を給はりけり。はた松島と申銘字御名判等ら御染筆のよしきこえさせ給ふに、いと有かたく頂(戴)し侍る。

わが庵ににほひあまるや冬牡丹

水落石出

冬川にむさきもの啄む鳥哉

初霜や鳥を憚すからす羽に

はつ霜や野わたしに乗馬の息

舟慕ふ淀野の犬やかれ尾花

芝泉岳寺懐古

石寒し四十七士が霜ばしら

尾上鐘

此かねや袖が揩てもさゆる也

紙衣着ていろは教ゆる御僧哉

遠く遊ぶ子に囉ひたる帽子かな

四ツに折て行李にあまる衾かな

戀

恨寐の蒲團そなたへゆがみけり

疊むとて主客爭ふふとん哉

晝も見るつれなき人の蒲團哉

花美を好む老人の剃髮したるに

丹頂の頭巾似あはむ霜の鶴

箱根にて

關越えてうれしく被く頭巾哉

少年行

頭巾くれし妹がりゆく夜霙ふる

づきん憫く切られし髮を懷に

おちぶれて關寺謠ふ頭巾哉

頭巾着し戯男うつる鏡かな

紅閨の足につめたき頭巾哉

野　行

背に比叡のはなれぬ寒かな

明ほのやあかねの中の冬木立

冬木だち月骨髓に入夜哉

草の葉の霜より明て山かづら

結（構）講な天氣つゞきや艸の霜

海寶禪寺

鶯のうしろ影、見し冬至哉

いまぞかりし師の坊に逢ふ枯野哉

饑喰し犬狂ひ臥かれ野かな

皮剝の業見て過る枯野哉

大佛を見かけて遠き冬野かな

大根引といふ事を

水風呂の貝ふく迄や大根曳

大根引こゝら畠の字かな

淺間の麓を通けるに、燒亡の後三とせの春秋を經けれども、木草生ぜず、大石なども灰にうもれて、うすひ峠を越に、駕かくものゝ申けるは、一丈斗も下に赤き土の見え侍る邊りぞ其昔の道也と。田畑などは燒砂を高く搔よせたるまゝにて、只いたづらに荒くたり。

土までも枯てかなしき冬野哉

柏山眺望

こがらしや三ッに裂たるちくま川

凩にあらそふごとし鐘の聲

慶子上京に

顔見せや北斗に競ふ炭だはら

かほみせや矢倉に起る霜の聲

江戸にて

顔見せやしばらく冬の初日影

煎蠣に咲や此花蕗のとう

鰒を煮る汁なむ〳〵とこぼれけり

河豚好む家や猫迄ふぐと汁

燈下獨酌

煮凍や精進落るかねのこゑ

煮氷やもろく折たる萩の箸

活て居るものにて寒き海鼠哉

敏馬浦客中

痩葱にさかな切込礒家かな

砂を吹家の棟川や冬下風

島田の千布は驛東也ければ、臺輿
など下知して蹴車に大井河の岸まで送らる。

やすき瀬や冬川わたる鶴の脛

金谷の庄家河村氏は古卅といへる
俳士にて、曾祖父は如舟といふ芭
蕉翁の門人也。一とせ嵐雪此家に
とまりて、

大井川に舟あるごとし花の雪

といふ句を殘せりとぞ。予もせち
にとゞめられて

かさゝぎの霜のひと夜をやどり哉

駿府の時雨忌に三日杖をとゞめて、
一夜葛人が樓上に更る迄酒うちの
みて

沖津鯛冬の山葵もたゞならね

熱田奉幣

馳折をしばらくおろす神樂哉

夜神樂や水涕拭ふ舞の袖

華ニ大智一

人をして哭しむ霜のきり〳〵す

初雪のしるしのさほや艸の莖

はつゆきや青物市のよめがはぎ

甲辰冬、別莊になの〳〵なきれき、
一夜はいかい催しけるに、明がた
より初雪の降出ければ

幸のこぼるゝ雪や草の戸に

商人のよき藏いやしけさの雪

恐是五侯家

誰門ぞ雪に寐ぬ夜の魚の骨

盤銅の火は炎〳〵と雪見かな

たゝずめば猶降ゆきの夜道哉

原驛

富士に添て富士見ぬ空ぞ雪の原

薩埵峠望嶽亭

晴る日や雲を貫く雪の富士

鮮き魚拾ひけりゆきの中

鳥羽殿へ御哥使や夜半の雪

池水にかさなりかゝる深雪哉

鶏の戸の右も左もみゆきかな

いたく降と妻に語るや夜半の雪

靑樓曲

二日見る雪の迎や手代ども

做二古今集物名一 蕎麥

しなのぢや小田は粉雪に蕎麥畠

題 田家

柊の角をかくすや今朝の雪

旅人に我糧わかつ深雪哉

歸樂、芸子を養て老の後を樂しまるゝを、竹によせてことぶくとて

杖と成たかうな得しや雪の中

浪速人、手飼の犬を亡ひしを深く惜みて、追悼の句を乞けるに

足跡の梅花なつかし雪の朝

古硯銘

鈍きもの先氷るなる硯かな

題墨

平仲が空泣おかしうす氷

出る日や風に吹るゝ薄ごほり
かたぶきし水瓶氷る盥かな
わぎも子が油こぼれり玉櫛笥

郊外

寒き野を都に入や葱賣
春秋をぬしなき家や石蕗花
炭屑に小野ゝ枯菊にほひけり

昔哉名利人
樂矣乞兒身

から鮭に名利のあぶらなかりけり

去來七十年忌

乾鮭や挽ば木のはし炭の折
まねし人のゆかしや夜半の鉢扣

戀

凍へ來し手足うれしくあふ夜哉
畔の手を眞わたに恥る女かな

樗良が僑居を訪て

うづみ火を手して堀出す寒かな
妻の留主に煮凍さがすあるじ哉

辭義をして皆足出さぬ巨燵哉
夜着かけて容いぶせきこたつ哉
朔日や翠どのわせてたまご酒
納豆汁必くるゝ隣あり
をの〳〵の喰過がほや鯨汁
むづかしと今宵はやみぬくすり喰
藥喰おぼつかなさに人誘ふ

鳴海の千代倉が門前を乘打すとて

盃は預けおくなり冬の梅

所思　桑名にて

白魚やさぞな都は寒の水
寒月や行ひ人の赤はだか
寒月に照そふ關のとざし哉
寒聲やあはれ親ある白拍子
寒垢離やひとゝせ見たる角力取

畫讃

守武の水涕おとす火桶かな
火桶抱て艸の戸に入あるじ哉

跡拇の身を黒（墨）染や桐火桶

足袋賣の聲うち曇師走哉

水仙にたまる師走の埃かな

英が畵に

枯尾花醜き小町臥りけり

酒を聖賢として口かしこき男あり。

師走ぞと呵る妻あり舌ありや

餅搗の日も幸齋が茶湯かな

醉李白師走の市に見たりけり

亡父大祥忌

俤の三とせをいだく帋衣哉

、十三周

月雪に集てかなし筆の物

右は其雪影集に遺句七十余をもて、百韻を綴りし霊を遊侍る也。

、二十五回

寒月にうつし見む我かこち顔

哭二亡師一 紹悉記略之

から檜葉の西に折るゝや霜の聲

、期年

おこたらぬ月日の數珠や一廻り

松浦公甫選暦賀 寄レ松祝

松千とせ算へもどせや古ごよみ

人住ずなりぬはしらの古暦

老懐

わかき人に交リてうれし年忘

除夜、青樓に遊ぶ。

年かくすやりてが豆を奪ひけり

醉て寐た日の數〳〵や古暦

うそ寒う晝めし喰ぬ煤掃

行としや古傾城のはしり書

としの暮さる御方へ招かるゝ

春届く文したゝめつとし籠

大路のさま松立わたし、行かふ人のあはたゞしげなる中に、家〳〵の神わざいさまめやかに見ゆるぞ、きたなくめでたき心地のせら

ろ。

年ひとつ老ゆく宵の化粧かな

八十の老に親ありとし　木樵

夜半亭藏板

京室町通中立賣上ル　橘仙堂善兵衛

跋

昔の五元集は其角先生自撰び、みづから淨寫して匣底にありしを、傳て人の祕藏し侍し也。さるを年經て延享の比、旨原なる人乞得て梓行し、世にあらはれしもの也とぞ。夫よりかみつかた、あるは今の人も、家〳〵の句集すくなからずといへども、多くは後人の意に預る所にして、晉子自撰の如き花實配當變化自在なるは、彼五元集を權輿と謂つべし。吾師や春夜といひし弱冠の比より蕉門の深きを探り、晉子のひとゝなりを慕て筆意ル摸し風韵を學のこゝろざし大なりしかば、彼五元集に倣ひ家の集を筆記せり。人たま〳〵乞て閲せんことを望めば、師云、いまだ稿を脱せず、自得の期を待べしと。余其春秋を待に日あらんことを歎じ、しきりに勸て先初編を木にゑらせ、三都の書肆に託す事とはなりぬ。

寛政元年己酉春　門人　下村氏春坡識

平村氏杜栗書

蘆陰句選

大魯

むかし丹波のくにゝ、大なる璧もたるおきな有けり。そのたまうちにひかりをかくして、ゆかしさ云んかたなし。人共玉を百貫にかはんといふ。翁おもふやう、かくてだに有を光まさば、あたひなをかぎりあらじとおもひて、百貫にはえぞとてうらず。さて夜に日にすりみがきけるほどに、はつかに瑕あらはれ出ぬ。おきな、あさましとまどひて、いよゝすりみがくにしたがひ、きず大に玉はまめばかりになりぬ。はじめかはんと云し人も、今ははなおほひつゝさたなくなりけるとぞ。されや大魯が門流、芦陰遺稿といふものを出さんとして序を予にもとむ。予が曰、遺稿は出さずもあらなん。いにしへより作者のきこえあるもの、遺稿出て還(却)て、生前の聲譽を減ずるものすくなからず。大魯はもとより攝播維陽の一大家と呼れて、我門の囊錐なりし。さればその佳句秀吟は、人おの／＼膾炙す。たれか遺稿の出るを期せんや。はた遺稿を出して、かの玉もたる翁に倣ふことなかれ。門流背(キカ)ず。ひそかに草稿をあつめて、几董に託して校合せしめ、彫刻半ばにいたる。しかしてふたゝび序を予にもとむ。こゝにおいてやむべからず。取てその草稿を閲す。予嘆じて曰、遺稿出すべし。遺稿出て人いよ／＼その完璧をしるべし。是大魯が身後の榮、ます／＼そのひかりを加ふるに足らん。門流微笑して去。このこと又序とすべし。

安永己亥孟冬　　夜半翁識

蘆陰句選

春之部

初空や月にもよらずさくらにも

福壽中咲や後に土佐が鶴

四十九のはつ春に

ひがごのきのふのむかし明の春

人妻の老けり御忌の朝詣

高倉帝陵にて

宿直誰鶯とても留主の谷

うぐひすの呑ほど枝の雫かな

糸柳みじかきえだの狂ひ哉

崖落て半は水の柳かな

岡本の槑(梅)

此梅や摩耶ふく夕海にほふ

雨の梅しづかに配る薰かな

黄昏や楳が香をまつ窓の人

ちる槑よ春のゆくゑの始なる

浪花呉服町に卜居せし春

寒からぬはじめや旾(春)の呉服町

野 諺

春が來た梅じや芝居じやうかれ人

古草に陽炎をふむ山路かな

物おもふ人のみ春の巨燵哉

仲 春

きさらぎや人の心のあらたまり

鴈歸る夕や小田のはつ蛙

雉啼やけふも人なき關を守

双親の日に當りたる彼岸哉

春雨の奈良茶は古き趣向かな

埜 外

田の蛙足ぬるゝほどの水に啼

畔道やほの見て過る雉の聲

うしろより雨の追來ル燒野哉

歸雁

けさ見れば今朝たちけるよ小田の雁
等閑に立ゆく鴈も日和かな
耕すや世を捨人の軒端まで
をみなへし薄も春の小艸哉
いとまある春邊や水も田に遊ぶ
埋れ井の水あらはるゝやけ野哉

涅槃會

尼達の古き涙やねはん像
我友の鼓ふりけり昔の雨

上已（巳）

古雛や櫻がくれのうらみ顔
難波津の春四五日やかし座鋪
ふりたてゝ角落したる男鹿哉
正月を遊ばぬ人のさくら哉

三月九日兵庫七宮の祭禮、町〳〵幟・
挑灯、神輿御幸の行粧いさ見事也。

糸櫻神輿にかけん祭かな
こゝも又峠にあらず花の雲
桃さくやよき家建し梓巫女
海は帆に埋れて昔の夕かな
きれ凧や沖中島の船だより
足袋脱で小石振ふや菫草
鼻帋に物かく春の詠めかな
おもひ出て庭掃春の夕かな

入たる事を知べし

花鳥の揃へば昔の暮る哉
けふ限の春に駈騎武士よ
山陰や菜の花咲ぬ春過ぬ
ゆく春や藤にかす日のはつか也
松の月それさへはるの名残かな

閏三月の晦

花過て春にあまれる日數かな

春盡京上りして

筍のふし見を春のひと夜かな

うかむ瀬四郎右衛門に遊て

うつゝに蝶となりて此盃に身を投む

夏之部

ほとゝぎす二村啼雨後の月夜哉
すくなしと山僧いへりほとゝぎす

懐舊

牡丹折し父の怒ぞなつかしき
篩して厠かくせしぼたんかな
一もとはちらで夜明ぬけしの花
愛すべき中にも芥子のひとへ哉
雨を帶し若葉に春もきのふ哉
雨覆ひの廿日過ゆく牡丹哉
白勝ずくれなる負ず夕ぼたん

西行菴にて

人去てあたら櫻のわか葉哉
澁柿の花落したる若葉かな
脱置し家わすれたる袷哉
酢莖見て茶漬所望の御醫者哉

筍やひとり弓射ル星館寺
そら豆の花散里やいせまいり

謝友人

ゆかしさの心とゞきぬひと夜鮓
鮓の蓋とるや晝寐の夢心

病中ころ雄が三回忌を弔ふ

人の爲に靴しながら夏書かな
夏籠や小蕾頬ふ御僧たち
しらぬ字の大きに成し夏書哉
皐月待時宗やたけごゝろかな
夏草や野武士が持る馬の數

亡母正當

首筋の今猶寒し羽ぬけ鳥
念佛して庵の窓さす處かな

ころ雄一周忌

雨そへて一とせを經さつきかな
夏草や花有ものゝあはれ也

重五

さればこそ職立たりおもひもの

風下の黄檗寺や麥ほこり

蟵を出て物あらそへる翁かな

蚊やりして師の坊をまつ端居哉

感懐 八句

浪速津に庵求て五年の月日を過しけるに、さはることの侍りて、やどりたち出る日、友どちに申す。

濁江の影ふり埋め五月雨

久しく召遣へる少女に暇くれて

中〳〵に忘れじ瓜の漬かけん

庵の竹を切て筇となす

竹の子を殘してなれも旅のそら

妻兒が飄泊ここに悲し

我にあまる罪や妻子を蚊の喰ふ

いほりを出る

長明がやどりさへなし皐月空

行路茫〻然たり

夏艸やまくらせんにも蛇嫌ひ

舍もさめるさへ心をかれて

麥の粉をけふはいたゞくやどり哉

是よりしていづ地に行んと我に問ば、我答

萍に乘てわたらん風次第

右

難波を出る日、一本亭の賢息野外迄送られける。其すがたさへ我にひかれてかなしく

はるれどもさつきの簑の雫哉

たま〳〵に團扇もつ日を我身かな

夏川や棹さし得たる人ばかり

さみだれや三線かなるすまひ取

河狩や廿チあまりの國の守

早乙女やそこかしこ爰そこかしこ

參宮の足引ずつて田植かな

京に遊びて

目ふたひで鉾下りにけり兒の親

うそ〳〵と旅人ありく納涼哉
夕顔や浴をかくす古すだれ

兵庫に侈て

海を出て砂踏蟹が暑かな
午眠さむれば眞桑よき程に冷たり
かたはらに童手をきる甜瓜哉
旅人の錢おとしたる清水哉
悪僧の天窓冷せし清水哉
ふたゝびす夕立月のうしろより
西吹や白雨せまる野路の人
此里に醫師やおはす日の盛

秋之部

すゞろたつ秋や翁が珠數の音
華ながら秌と成けり池の蓮

浦邊初龝

浪ひとつ岸打こしぬ今朝の秌
朝東風やほのかに見ゆる秋日和

病少し怠(癒)と思ふ初秋

百日の枕洗はんけふの秋
星合の名所ならばよしの川
鵲の長柄もかけよほし一夜
ほし合や詩作る妹がつらがまへ

秋暑

盆過の都はげしきあつさ哉
凉しさや秋の日南の人通り
うかれ女の黒髮焦せ散花火
さればとて凋も果ぬ木槿哉
とんぼうや聲なきものゝさはがしく
蜻蛉や施餓鬼の飯の箸の先
僧正の榎實こぼすやはつ嵐
躍子や夕間昏して狂はしき

兵庫なる館にて

活魚のけふと過けり秌の風
七尺と巷の說や關角力

六に成子を失ふ人に

聞てさへ秋の暮むつあはれなり

稲妻の皃ひく窓の美人哉

いなづまや波より出る須磨の闇

きのふけふ靈棚にありきり／＼す

鱸の膾おもへども任せず

老杜親なし秋風を人の國に泣

眼の限り臥ゆく風の薄かな

釣瓶にてあたま破れし西瓜かな

正名、世をゆづりし賀

田も畔もとしある秋を讓けり

旅人よ何／＼花の草まくら

女媧が兒喰ぞめに

よき年の米喰そめつ豊の秋

秋興 八句

家在紅塵陌

夜は相撲晝は踊の噂さ哉

草生ふるに園なし

露結ぶ夕あしたのつる（原註）纒べなは

出戸澤河流

秋の河うき世の人に遠ざかる

かれてひがめる身なれば

蓼喰ふ虫花に來て遊ぶか遊ばぬ歟

夜坐妻子にこたふ

うき秋の長物がたりきく夜哉

老杜が擣衣に倣ふ

よその夜に我夜おくるゝ砧かな

一身有此處

ふらついて瓢かたまる軒端かな

國を辭して九年の春、都を出て

一させの秋

われが身に故郷ふたつ秋の暮

田家良夜

夏からの蚊屋はづしけり今日の月

名月や塵打拂ふ摩耶おろし

風たちて月うち曇る門茶哉

衣擣女疲れて月は西

追風や夜すがら月の走ふね

中秋夜半翁に申遺しける

廣澤はいかに鐵馬の月淸し

朝戸出に露引おとす鳴子哉

山畠や茄子花ちる秌の風

出て見よ秋の野守のしたり顔

眠はしや蟲飛ぶ屋のあきの昏

草菴小集

端居して主わするゝ月見哉

朝風や大名連てわたる雁

小原野や花喰ふ馬の親子連

宗高に妻射られしか(原註孤)ひとつ雁

兵庫草庵脊戸の半夜

船毎に蕎麥呼ぶ月の出汐哉

十三夜 二句

名月や兎煮た家の豆の出來

入までの夜も長月の光かな

目覺して旅僧坐し居ル夜寒哉

雨風の日和おさまる夜寒かな

禁城ちかくやどり求て、病を守る

重陽に

なめて見むかならず菊の御淸水

けふと成菊作らんと思ひけり　その翌日より菊つくりて

おもひ出て菊作りけりことしより

約束の菊見に來たりよしの人

落柹や水の上また石のうへ

かつ散て盛まだ來ぬもみぢ哉

雨の鴫一羽もたゝず暮にけり

家ぬしを大工の譏る夜寒かな

惜秋

起出て月を尋ん秋の果

社頭殘月

殘月や一夜の松の木の間より

冬之部

蔓ものゝつるのゆるみやはつ時雨

初時雨眞葦の道をぬらしけり

慈悲ふかき代官たちて初時雨

客中

北陸や冬と成來るものゝ(マヽ)音

よしなしや火箸ゆがみて炭われず

閨怨

夢やぶれ衾破れて君見えず

洛東金福寺の芭蕉庵にして

探題

山畑や麥蒔人の小わきざし

橋守よ霜掃をろす誰が爲

霜に歎ず蝟髭を握りけり

あさ毎や同じ道來る霜の市

病中京師の客舍に、祇翁の祥忌を勤て

十月や翁もとしをふる佛

梵論が笠吹上し枯埜かな

冬夜

ともし火に氷れる筆を焦し鬼

世の人の數にはもれぬ寒かな

凩や障子の弓のかへるをと

楠公碑

噫ゝと啼鳥の聲も寒さ哉

河内女や干菜に暗き窓の機

我ものと雁がね落る冬田哉

かたはらを雁がねすぐる千鳥哉

うめひらく軒に追るゝほし菜哉

深草元政上人の寺にて

月雪に竹三竿のあるじかな

早瀬川見るほど雪の流れけり

山風や霰ふき込馬の耳

荒畠やはつかに霜の折葱

船中

あら海へ打火こぼるゝ寒かな

着心のきのふと過し帋衣哉

埋火に梁の鼠のいばり哉

眼さませと母のきせたる蒲苞哉

病しきりなるころ京師に旅寐して

初雪じや大きな雪じや都かな

みやこは田舍に、かれに心せかれ、是に心せかる。

我にまた歸る庵あり冬ごもり

語不驚人華不休

横つらの羅も拭はず冬ごもり

年内立春

としのうちに春は來にけり薑の味

煤掃や思がけなき朝月夜

わがたのむ人皆若し年の暮

我を賴む人も有けりとしの昏

友人大魯、はじめ京師にありし時、夜半翁の門に入、後、浪速に移り蘆陰舍をむすび、また兵庫に退て三選居をひらけり。しばらく山河を隔といへども、とし〴〵のいきかひ互にしげく、實に知音の友なりしが、去年の秋病によりて再び洛に旅寓をもとめ、もしや此まゝに身まかりぬともあらば、金福禪寺なる芭蕉庵のかたはらにはふりしくれよなど、いと賴なきことまでつぶやき逝しも、俳諧に因と緣との深きなるべし。されば朝夕起臥の勞をゝ扶、終に遺言にまかせ、霜月十三日の夜野邊の露踏分つゝ、しも枯の草引はらひ、かの山のほとりに亡骸をおさめ侍りぬ。かくて月日のうつるにつけつゝ、疎なるならひなるを、いひ殘せる句〳〵を打うめき出ては、唯現に向ひ語るやうに覺え、親しみは在しにも猶まさりて、かなしきわざに侍れば、いかにやむべき。やがて草稿をつどり合せて蘆陰句集と題し、門葉旧識の人ゝと志をおなじうすといふことを、しりへにかいつけ侍る。

安永八己亥仲秋望日　几董書

安永八己亥年霜月

浪速書肆　石原茂兵衛梓

蓼太句集

蓼太集序

和歌國詩也變而爲連歌爲俳諧歌其猶詩變而爲騷賦爲律絕乎時有汙隆辭有長短俗有正變節有緩(綏)急體裁雖異其情一耳東都蓼太以善俳諧歌聞于世門生寓于崎陽以蓼太所著一章示之清人程劍南程賦一絕以寫其意且手書以遺焉時人艷稱之丁酉季夏蓼太載酒顧余牛門請序其集余與之對酌頽然而醉作而嘆曰有是哉昔者晁卿與唐人唱酬明人著日本風土記載和歌數篇然則彼知我有詩有和歌矣蓋未知有連歌也而況俳諧歌乎知有俳諧歌者乃自蓼太始今觀此集著作太富重以示清人則彼五言長城殆將失墨守矣蓋我日出之邦升平百五十年煥乎文教洋溢海內此事雖小可以觀餘波矣彼以其詩我以吾歌各稱盈耳哉是爲序安永丁酉夏六月南畝子序　印　印

序

まさきのかづら長くつたはり、青柳の糸絶ず、其片糸の俳諧あり。力をもいれずして夕だちの雲を起し、たけきものゝふも諸禮停止に、膝をやはらげらるゝは只此道なり。今や隈なく都鄙にひろごり、田面にかへる鴈の跡久しくとゞまる。それが中に予が師雪中菴の主蓼太は、はせを翁の願をさぐり、晋子の花をあらそひ、猶嵐叟の寂は我家にして、年ごろ櫻にうかれ月をかなしみ、郭公には寐ぬ夜がちに、雪のふる日は笻に笠に、隅田・眞乳のちまたに轉び、洲崎・日ぐらしの夕に食をわすれ、あるは途遠き蒼波に眼をあらひ、あるは山ふかき白霧に憂をしのびし口ずさみ、つもりつもれり。さるを書肆何某梓にちりばめんと、子規亭の扉を敲く事三たび五たびをかさぬ。師云、俳士に句のおほきは、硯に筆のおほきに似たりと誰やらもいはれき。ましていぶせき藻塩草かきあつめては、人のみるめもいたつかはし。さればとてひたすらに拒めるも又事がまし。聊其需を塞げよとて、十が一をあたへられし趣を　吐月述。

蓼太句集（上）　春之部

歳旦

元日やうつはの水も伊勢の海

誰ひとり掃とも見えずけさの春

筆捨ぬ松こそよけれはつ硯

初鷄や又市に住甲斐ひとつ

若水や升なき時の人ごゝろ

今朝の春鳩の三枝を見付たり

黒きもの又常盤なり初からす

万才や爰八橋に酔てゆく

鉢植の其形はてゝむしさいふものに似たれど、觸鑾のうごきなき此花のあけぼのを愛して

あらそはぬ國いたゞくや福壽草

五日　風枝をならさぬ此君が代の春をむかへて、ことしも東四の行脚をおもふ。

初空や十日は襲のきそはじめ

東叡山のうしろ、根岸さいへる所に、膝いるゝばかりの蝸廬をしつらふ。この地や、こと所より鶯の音色うるはしといへば、爰にことしの春を迎て田家の閑をうかゞふ。

しづかさの鍬にさし入はつ日哉

聖代

初霞長橋の橋もかゝるなり

摘ませて雪と八色の若菜かな

かゝる物賣ぬ代ゆかし若菜摘

人日

若菜そゝぐほどは解たり忘水

澤蟹の鋏もうごくなづなかな

裾野から山摘起す若菜かな

乳峯・如風とすみだ川に遊て

つまずとも爰を闕屋の若菜哉

子日

此君とけふはひかるゝ小松かな

削懸

正月も影はやさびし削かけ

梅

梅が香の岩にしむ時水の音
むめがゝや心つよくも厚氷
咲かねる梅とあらしの日數かな
詩にねぢれ和哥に匂ふや梅花
三絃も接穗時なりむめの花
香について廻ればもとの梅花
梅が香の外にこほらぬ物は何
むめ咲やとまるもの皆にほひ鳥
梅枝をはづれて寒き入日かな
むめがゝや衣桁にうごく袈裟衣

社頭

梅香や風に百度の向ちから
紅梅や神のこゝろも堅からず
紅をねぢれて梅のしほりけり

臥龍梅

道ゝも此木這てやむめのはな

鶯

うぐひすの九ツねりて初音哉
鶯の鳴そこなふてかくれけり
うぐひすや月の星のと日和乞
鶯の朝隈さぐるはつ音かな

春眠

鶯の中に戸明ぬ都かな

老鶯巣

端居して鶯に顏見しらせん
鶯の音にふくるゝ歟折〳〵は

柳

むつとしてもどれば庭に柳かな
青柳やとし〳〵老のつまさがり
いかづちのはるかにうごく柳かな
裾迄はまだ暮きらぬやなぎ哉
家ひとつ市にしづまる柳かな
二間三間影吹入るやなぎかな
ゆり分て北枝もはやき柳かな
此庭へ能は這入てやなぎ哉
柳見て柳ほしいとおもひけり
橋にして踏だものから柳かな

霞

洛陽の朝餉過たり春がすみ

かすませて子やおもふらん芦の鶴

行旅

馬借てかはる／＼にかすみけり

大井川

落來るや霞もあへず大井川

大和行脚留別

うしろにも前にも遠き霞かな

霞関

誰どのゝ御先追らむ朝がすみ

奈良にて

夕霞たきゞの鼓しらべけり

春月

五六丈瀧冴返る月夜かな

折ふしの衛も遠し朧月

鹿もよく寐て朧なり奈良の月

南から出たかもしらずおぼろ月

駿河の國に行脚しける比、女の琴
弾けるに對して

ふきといふ草のまくらや春の月

春の月櫻ひと枝ひろひけり

猫戀

柊ふむ夜半も育べしねこの戀

濡たらば露とこたへよ猫の戀

おもひ寐の尾に虵もしつ猫の戀

我庵の老猫にたはぶれて

鏡見ていざおもひきれ猫の戀

雪間樓

白魚

白魚やそれとしる火の凄からず

しら魚や波わけのぼる友ちから

淡雪

淡雪や側から青き春日山

淡雪の降すがりけり去年の雪

雪解

雪解ややう／＼四百八十寺

余寒

酢このみの跡から春の寒さ哉

春風

春風や一度に起る雪の竹

誰をたが待伽羅ならむ春の風

春雨

鶯のぬれて啼なり春の雨

双六を退ば音ありはるの雨

春雨や枯るものには簔ばかり

夜噺の傘へあまるや春の雨
春雨やあかつき見れば松の雪
はるの雨硯に請て假名かゝん

大津にて

三井寺の鐘きく春の雨夜哉

陽炎

陽炎の掃よせてある屑火かな

濱松犀崕

岩角に兜くだけて椿かな

凰巾

きれ几巾の夕越ゆくやまつち山
きれ凧に主なき須磨のゆふべ哉

海苔

此比の朝夕やすし海苔二枚
靑海苔をとゞけて白し礒の波

仲春

松梅と暮て正月二月かな
神事の跡はほとけの二月哉
紅絹裏のうつればぬるむ水田哉

筆捨山

筆取てむかへば山の笑ひけり

雉子

箱根

躑躅ひく人を笑ふ歟はこね山
錦木にその尾立る歟雉の聲
聲しほる諸羽に雉のあぶら哉
あけぼのや櫻をふるふ雉子の聲
たまごにはあぶなき雉のほろゝかな

涅槃

ねはん會やおくれてひとつ飛胡蝶

燕

どちらから化して禿ぞ燕ぞ

雲雀

朝凪やたゞ一すぢにあげ雲雀
ひとつ家に聲降くらす雲雀かな
夜もすがら空に居たかとひばり哉
菜の花に落て麥から雲雀かな

雀子

雀子や余寒の蝿を追まはし

蝶

植木屋の置て行たる胡蝶かな
寐る時はふたつでもなし飛胡蝶
蝶々や乞食の夢のうつくしき
つまむかと酢味噌を迯る胡蝶哉

蛙

つちくれにうごく物みな蛙かな

亭の燈の水にうく時かはづ哉
もとの繭に畳も荒て蛙かな
傾城の物ほすかたや鳴かはづ
種宝の夜〳〵にえる蛙かな
富士根方にて
畑うちや大藤内が丸はだか

菫

人ふまぬ都わづかに菫かな
池田の宿にて
先ゆかし熊野が摘たる菫かと
野の宮
そこらひく牛もなつかし菫草

菜花

菜の花にのどけき大和河内哉
春望
春の日や門ゆく梵論の影法師
八橋
杖立て春やむかしの橋ばしら
大磯
祐成が惜みし春の夜明かな

爐塞

爐ふさいで二日もどらぬあるじ哉

苗代

秋風の二葉に寒し苗代田

雛

桃櫻白髪の雛もあらまほし
消かゝる燈もなまめかし夜の雛
三日四日の細みも雛の月夜かな
つれ〴〵と月見て立り帋雛

草餅

たち屑も女なりけり草の餅
下草の桃にはなれぬ蓬もち

胡葱

胡葱や小野の小町が物ごのみ
あさつきやどう結ても女文字

桃

桃咲や牛のよだれもやまと哥

汐干

ふり返る女ごゝろの汐干かな

出代

出かはりや四月へまたぐ大男
出かはりや飛鳥井翦て櫻町

花

おれ〳〵と折せて花のあるじ哉
長閑さは夜にこそあれ花ざかり
花散て猶永き日と成にけり
かばかりの花に置らむ夜の霜

成佛の杣ゆくらん花ざかり

是ほどにちらずばたゝじ花の陰

身にしみて音聞花の雨夜かな

落たるを拾ふ鳥なし花ざかり

芝居皆やすむでもなし花盛

東叡山

雲雪や世に手をられて花切手

洛陽

哥一首もたぬ山なし花の雲

傘さして駕かく花のみやこ哉

旧都

紅葉より花にかしこし奈良の鹿

芳野

しら雲やちる時花のよし野山

梺にやどりて

めづらしや芳野を下りて花一木

花喰に鮎ものぼる歟よしの川

芳野大瀧

ちる花をあつめて瀧のみかさ哉

苔清水

苔清水花かきわけて結びけり

初瀬

むかし誰被はねてや峯の花

深草元政古墳

月に花に法の杖あり竹三もと

世の中は三日見ぬ間に櫻かな

我宿の櫻わすれてくらしけり

割あまる都の外はさくらかな

來た道を又奥にせん櫻がり

櫻

ちる櫻ねぢよる人に倦とき歟

物惜む老に見よとやちるさくら

夜ざくらや三味線彈て人通

しばらく芳野の山中にとゞまりける比、名ある所々の花びらつみあつめて、武江の詞友のもとに文遣すとて

ひとつかみしら雲贈る櫻かな
宿かして是へとちるやゆふ櫻
うごかせば月こそ出れちるさくら
辨當で夢見歩行や山ざくら

羨山居

櫻戸や腰にはつけぬ鎰わらび
日暮ては寺のものなり山ざくら
早蕨の爪はぢく間ぞちる櫻
けふばかり老につもらじ散櫻

庚辰の如月六日家を失ひける時

ちり果て火宅を出たり家櫻

海棠

海棠やおられて來てもまださめず
海棠や花の中よりうす紅葉

躑躅

旅籠屋の夕くれなゐにつゝじ哉

鹿島にて

人の代に成て見上るつゝじかな

若鮎

若鮎の鰭ふりのぼる朝日かな
若鮎の小太刀遣ふて迯にけり
水かへば駒のひま行小鮎かな

山吹

山吹や旭のまゝに暮てゆく
やまぶきや月も尋て澄あたり

藤

投かけてたのむ色なり松に藤
立さればまだ日は高し藤の花
山寺や一日ふぢの影ぼうし
春夏のおほつかなさよ藤の花

行春

夕雲雀落るや春のとまりより
ゆく春やどちらへ渡る瀬田の橋
あれ春が笠着て行はきてゆくは
行春や一聲靑きすだれうり

蓼太句集　夏之部

夏衣

橋ひとつ出懸に寒しころもがへ
我に綿ぬきすまさせて寒さ哉
武士の矢ばせに立て袷かな

鳥醉と洛西に杖を曳て

いざ嵯峨も廻らばまはれ衣がへ

時雨窓に隣て一老婆あり。よく樂天が句を聞。徳山の轉心をすゝめて其深切なるに、四十余里の勞を忘。

先門の姥に用ありころもがへ

白重

すき立て猶黒髪や白かさね
白かさねにくき脊中に物かゝん

若葉

鳥啼てしづ心ある若葉かな

郭公

見ぬ春をこがれ歩行歟ほとゝぎす
是からは鳥の曇やほとゝぎす
郭公一聲夏をさだめけり
耳すますけしよ牡丹よ郭公
釣かゝる幮から出たりほとゝぎす
竹植て寐ころぶ窓やほとゝぎす
鳥影に鳥またれけり郭公

京にて

君がため音や惜むらんほとゝぎす

嵐山にて

二の聲は手をる花なり郭公

箱根

雲踏で聞日も遠しほとゝぎす
ほとゝぎす鳴や氷室の一雫
遠寺から寐よとの鳥やほとゝぎす
かたはらに鳥なきそらや郭公
ほとゝぎす巣を蹴落して出ける歟
一とせに三ツの月見やほとゝぎす
木鳴して又物たらずほとゝぎす
世を鷺の五位ものぞまず郭公

灌佛

山寺や五色にあまる花御堂

牡丹　月はひとつ影は牡丹のひかり哉

櫻ちる果やぼたんの雪丸げ

花はまだ雨ほしあへぬ牡丹かな

白雲の窓ゆりすへてぼたん哉

鳥遠うして高欄に牡丹かな

明和九年四月廿五日、深川にせな庵再興成就の日　吏登翁十七回忌をまねきこして

取こして牡丹を蓮のうてなかな

青簾　爪さきを戀のはじめや青簾

葵祭　けに僧は木のはしとこそ諸かつら

杜若　何鳥の冠に着せんかきつばた

幮越に使は來たりかきつばた

罌粟　しらけしに續てもろき月夜かな

麥秋　乞食せん世はあたゝかにはだか麥

旅寐してしるや麥にも秋の暮

麥の穗も出揃ふ卯月八日かな

茄子　一富士の隱るゝころやはつ茄子

筍　竹の子や花ちるさとの男きれ

筍をゆり出す竹のあらしかな

竹の子や客にほらせて亭主ぶり

鰹　くれなゐは花にかぎらじ初鰹

面白の妻なき宿やはつがつほ

誰にたが宿かして此ひと夜鮓

鮓　津のくにの伯母にこりてや鮓の壓

蓼に露持せて長しすし一夜

いとはずと是にいひけんすしの飯

大礒にて

鮓に肌ふれぬもうれし虎が石

花柚　惟光をふまへて手折花柚かな

一枝はもらひ過たる花柚かな

葛陂山人の洛におもむくを送る。

柚の花や立場〳〵の詩百扁(篇)

或人のものいふ女のもてる貝ふたつもてつくりたる盃の形は、さながら棚なし小舟さいへる物に似侍

けろ。是に銘を乞れて

二へぎの花柚も嬉し星の舟

實櫻 實ざくらやなを賴もしき吉野山

下闇 下闇に乾かぬ閼伽のしづくかな

黒塚

桑子さへ齒音おそろし木下闇

和哥浦

讀かねる葉の茂なし和哥浦

身延

此山の茂や妙の一字より

宇津山

蔦に道習ふて越るしげり哉

後醍醐帝御廟

百官の高み低みや夏木だち

葭雀 よしきりや漸暮て須磨の浦

隱家は市こそよけれぎやう〳〵し

水鷄 日やけ田に水門たゝく水雞哉

菰草の奥は晝なき水鷄かな

翡翠 やどりぎの花ほど蓮に翡翠かな

蓮に居て蓮に遊ばぬ翡翠哉

川蟬の風かほるかとおもひけり

栂尾

新茶 唐土のさびしさ見せて新茶哉

しばらく洛にありて

嵯峨の柴折焚宇治の新茶かな

駿河の國におりける比、千來子が芦の湯の舍を音づれけるに、茶の一興あり。

三嶋から飛石いくつ苔のはな

絕ゝに温泉の古道や苔の花

閑呼鳥 我に來てとまりさう也かんこ鳥

竹靑し木靑しひとり閑呼鳥

桐花 酒桶の往中ほす日や桐の花

螢 うしろから胸はしり火の螢かな

追れては月にかくるゝほたる哉

遊ぶ手に闇の末つむほたるかな

傘さして螢の音を聞夜かな

闇の燈のひとつうごかぬ螢かな

端午

　難波津にて

幟見の果はありけり帆懸船

　京にて

ほどく時我手の黒き粽かな

常世かと古きも立る兜かな

　百練鏡

棟かけて鏡暮けり五日月

競馬

翠簾越の誰に落けんくらべ馬

　忍摺の石を尋て

見てのみやいさ帷子にしのぶずり

五月雨

五月雨やある夜ひそかに松の月

竹ひとつ書おほへけり皐月雨

さみだれや艪械にさはる芦の音

橋を漏水音暗し皐月雨

夜はせめてほたる飛なり五月雨

　旅行

川越る日も有なしや皐月雨

逢初川は伊勢・熊野の二神はじめてま見えたまふ所さかや。爰に霖雨の夕晴もうれしく

紀の月に逢初川や皐月晴

藻花

藻の花や隙なき水の中ながら

田植

松に日をうたひ出したる田植かな

遠里や二筋三すぢ田うへ笠

ひとりして月より淋し田植笠

山陰や人目おもはで田うへうた

乳守の遊女、此御田の乙女つさめてより川竹の名をのがるゝさあるも、ありがたきためしならずや。

住吉御田

神苗やけふをうき身の忘ぐさ

二刕橋のほとりに庵を結し比、山居せば上田三反味噌八斗小者ひさりに水のよい所、とある禪師の狂哥をおもひ出て、そこに商家の名のおかしければ

玉苗の門田持けりいくよ餅

南都覧古

青田 冬田より青田に悲し奈良の京

當麻

青田さへよし染寺の右ひだり

田草 物いはぬ夫婦なりけり田草取

山ひとつ脊中に重し田草取

秋の來る道つくるらん田草とり

若竹 それに競それにくらべて今年竹

岩を出て嬉しさう也ことし竹

どちらからつるゝぞ庭に今年竹

鵜舟 鵜つかひや朝ゝおもひ捨小舟

影も鵜に成てはたらく鵜飼哉

鵜つかひや其子に讓子にゆづり

つかれ鵜や遠寺の鐘も木の間より

句兄弟

照射 祐成がある夜戀せぬ照射かな

時致は山ふみなれてともしかな

蚊遣 隱家の暮て葉に洩蚊やり哉

蚊やりして後夜から里の月夜かな

爰かしこまだ寐ぬ里の蚊遣かな

蚊遣火やうらやましくも松の月

白骨觀

夏痩のわがほねさぐる寐覺かな

祇王寺

尼寺や紅粉白粉も蚊やり草

高野

紙帳 蚊の居ぬも浮世の外ぞ槇の月

我庵は紙帳かぶせて置うよや

業平の知て居らるゝ紙帳かな

夏草 菊作る思案の外や美人草

しのばるゝものや葵の五六月

花かつみを尋て

里人はわすれ草とも花かつみ

小夜中山

紫陽花や襟につらるゝ八から鉦

新州親しらず

荒磯や撫子しらず親しらず

秦徐福古墳

撫子の唐をやまとに塚經りぬ

庚辰の春家なうしなひて、鶯南紀
東仙が別莊にありける比

杖立てさゝげ這するやどり哉

晝がほやひとり横たふわたし舟

ひるがほやたま／＼むすぶ波の露

晝顏や明るう咲て戀しらず

夕がほや空也の目には卽菩提

瓜

はらばふて瓜むく軒のかけり哉

瓜畑やいざひや／＼と草まくら

氷室

六月を櫻に知るや氷室もり

六月の氷もとゞくみやこかな

祇園會

祇園會や人をもる燈の薄ごろも

祇園會や京は日傘の下を行

富士詣

其夜降宿の浴衣や富士まふで

白河關

竹婦人

片袖は秋の風なり夏ごろも

青きよりおもひそめけり竹婦人

曉は小町がほねや竹婦人

蓬生や手ぬぐひ懸て竹婦人

七符とも三符ともいはず竹婦人

簟

胸毛に風こそわたれたかむしろ

蚤

客ぶりに見送る蚤の行衛哉

團扇

雨の手にうちわ遣ふや小傾城

植つけの田づら見て來る團扇かな

讃

おもしろのうちわや、されば月、
罷ば影、おもしろの團扇や。

扇

もの書ばかつらに似たり白團扇

聽聞の跡は扇のあらしかな

いはけなき子にとられたる扇かな

洛より東武におもむくさて

清水

我影に先あふ關の清水かな

涼しさは千尋なりけり苔清水

暑

家ふたつ中に流るゝ清水かな

山伏の汲ほして行清水かな

遊行柳

ひとすくひ膓洗ふ清水かな

自得

晒見てなを惜まるゝ月日かな

市中

三味線にから臼のせてあつさ哉

大津繪に丹の過たる暑さ哉

捨苗の道ゝ枯てあつさかな

西陣

龍虎織手もあらそふて暑かな

貞德翁旧跡鳥羽日相寺(實)

夏陰や寺を御傘のあまやどり

かしこに招れて発膳にむかひ、爰に膝を屈しては美味に舌打すれども、枕取たる我庵の夕べは心やすきをおもひ出にして

帷子やぬげば風もつ物ながら

沖鱠 誰人の凱陣よりぞ沖なます

鯵 鯵賣の阿字と聞ゆる耳もがな

雲峯 のぼるほどつかるゝ日あり雲の峯

蓮 菅笠の影から蓮のうき葉かな

にごれるは葉とそよぎけり蓮の花

白蓮に人影さはる夜明かな

悼ニ吏登翁一

六月を經帷子に名殘かな

一周忌、畫像前

秋またぬ人のもぬけを泣日かな

三廻忌

似た人もなき六月の紙子哉

石碑造立

三伏の夏なき石の膚かな

夕立 夕立や相合傘は晴てから

ゆふだちや地には青田の篠をつく

納涼 皿ひとつ氷にくだく納涼かな

町の燈のひとへ櫻や夕すゞみ

足代に住持のしらぬすゞみかな

岩つたふうつり心や夕すゞみ

涼しさや寺は碁石の音ばかり

木葉の蓮葉闇なりゆふすゞみ

神奈川臺

ふところへ入來る帆あり夕すゞみ

白隱禪師相見

涼しさや富士と和尚と田子の浦

龍花寺

わがこゝろ飛かと富士に鷺涼し

下紐關

下紐の關もる母やゆふすゞみ

麻斤が田家にありて

牛馬のこゝろもしりぬ夕すゞみ

四條河原

風涼し扇の立葉浮葉より

六神宮法樂

僧に似たりとて、宮中をゆるされず。五十鈴川の流をへだてゝ拜したてまつる。

我影も鏡にいれて神涼し

ふたゝび武隈の松にいたりて

我老も松のおもはむ下すゞみ

不忘山

かゝる日も雪わすれずの山涼し

夏月

野山よりも市のものなり夏の月

御秡

人去て誠見えけり御秡川

白鷺に烏帽子着せばや御秡川

蓼太句集（下）秋之部

立秋

流ゆく茅の輪にしるやけさの秋
驚とめて誠にも立やけさの秋
秋たつや一むら雨の雫より
虫の音の下萠聞や今朝の牀
忘ては秋たつ朝なくかな

一葉

あけぼのゝ青き中より一葉かな
暦ほど音して桐の一葉かな
糸きれて琴にもしるや桐の秋

七夕

明やすき蕣つまん星ひと夜
鵲や橋にあまりてみをつくし
星に琴かりて更行端居哉
宵月や妻越舟のとゞく迄

星まつる夜殘の暑忘がたく、隅田川に小舟をさして

星逢に雪の橋かけよみやこ鳥

仙府の人々にとゞめられて

長居して星の一夜にわらはれん
七種や葛にうらめば萩に露

八日星

立琴も寐せるや星の二日酔

秋草

蕣や秋は朝からあはれなり
あさがほや猶まぼろしの幮ひとへ
我ものに手折ばさびし女郎花
姨捨によろぼひたてり女郎花
荒牧の中に瘦けりをみなへし

眞間寺にて

眞間の井や道を千尋にしのぶ草

阿房宮賦をよむ

鬼灯や三千人の秋のころ
蓼の花嵐ののちをさかりかな
松風の晝は根にある薄かな
淋しさの都へうれるすゝきかな
くれなゐもかくてはさびし烏瓜

魂祭　月見れば人の顔なり玉まつり
世の中や鬪もくさらず魂まつり
亡師の新靈をむかへて
迎火やこよひふきれぬものゝ影
此客に蝿つらばさぞ靈まつり
人のをく露としりつゝ玉祭

燈籠　夜ゝは松に秋あり高燈籠
燈籠の中からさびし揚燈籠
燈籠や手をつくしたる風の前

躍　秋風に人まづなびく躍かな
京にて
飛ゝに旅人黒きおどりかな

稲妻　稲妻や闇さへ洩て不破の關
いなづまや槇の夜雨のかはく迄

螽　刈跡の薄にすがるいなごかな
奥州野田玉川
追立て螽に見ばや川千鳥

稲　夕凪や鶴もうこかず稲むしろ

駿府竹林精舍
此こゝろ推せよ花に五器一具
紫陽花を五器に盛ばや草まくら
この二句を父母にして
刈かゝる田づらも嬉し五器一具

鳴子　引あけて松の月夜や鳴子繩
活て居る身のからくりや鳴子引

添水　秋風の水を切かと添水かな
月細うこぼし減して添水哉

案山子　人先にやもめの立る案山子哉
河内路を過るに
楠のよろひ着せたらかゝしかな

秋蠅　飯もれば追て来るなり秋の蠅

秋蝶　けふ見ればやもめになりぬ秋の蝶
草臥て土にとまるや秋の蝶

虫　日暮ても野は錦なり虫の聲
眼を明ば晝寐なりけり虫の聲
十ばかり耳ある夜也虫のこゑ

虫の音や道ほどあけて長堤

我影の壁にしむ夜やきり／＼す

冬瓜の腸たつ聲きり／＼す

あれ聞て痩ぬ虫なしきり／＼す

人ちかき命になりぬきり／＼す

蜩や蟬を洩來る秋の聲

文月十日あまり天府雅君に召る。御庭の月いさしら／＼しけれど、いまだ殘の暑堪がたき比なりければ、かたへの人々に仰事有て

虫ども〻末の露なり砂糖水

蜻蛉

うごく葉の日なたおさへて蜻蛉哉

覺束なはね橋ひとつ霧間より

霧

松嶋にて

朝霧や跡より戀の千松しま

秋風

秋風やかりそめ事の一葉より

秋風に片羽煩ふ胡蝶かな

秋風や人にかけたる蜘の糸

秌の風芙蓉に皺を見付たり

高舘懷古

前後の戎衣一におさまり、平泉のさかんなるを見るに、大路に車の行あり歸あり。左右の家々は軒むつび、はしらちぎりて、いさめでたしっ蟻のごくにあつまれる人も、顔あたらしう過がてに、いづち行らんもしらず。たけきもの〻ふは金鞍にまたがり、たをやかなる女房は銀簪をかざす。糸による柳の御所はみどりに、琴の音をたやさず。風かほる伽羅の御所には、袖をひろがへし裳をかゝぐ。猶四方の風色をいはゞ、衣の關は、も　さもにたゝましものを、さいづみ式部が離情をつくし、衣川は、たもとまでこそ波はたちけれ、さ源重之が涙をそゝぐ。衣が瀧・ころものさゝ・月の山は、ながれに迥、白山には

雲のあけぼのをおもふ。國見やま・室根山・たばしね山は、はなのくもにそひ、えいなせのわたりは、ほとゝぎすのいなせ鳴なり。いはぬの里に木立しくらみ、金鷄山はあかつきを報じて、時守かつゞみを和するに似たり。はた毛越寺の堂塔四十余・禪房五百餘字、中尊寺金色堂・經堂・吉祥堂、あらふる神社・佛閣、山々日に映じ月にかゞやく。なかんづく、ひばの柵は義士和泉三郎の砦にして、碧流岸をうち北上川に落て、高舘にそふたり。源廷尉にかしづきたる屋しき〳〵は、衆星の北辰を遶るがごとく、こゝに立かしこにわかつ。まいて秀衡一門の榮耀さらにいふべくもあらず。口をあまんずるには、鳳を裂、鱗をほふる。目をよろこばしむるには、炎天の梅花・芝冬のさくらも、すべてこのさきにおくれじとよそほふ。鶴は九皐のちまたに千秋を謳、龜は十符の浦に万代をことぶきしも、たゞ今たゞ

山そびえ川ながれたり秋の風

仙臺嘉定庵留別

名さり川細うながれて、桑乾の水をわたりしいにしへのひさの面影もおもひ出て

跡先にふるさと持ぬ秋のかぜ

秋浦吟

秋風や碇もなびくはなすゝき

必觀主人の閑亭に、半日の殘暑をわすれ侍て

干てある鎧に來たり秋の風

秋柳

いそがしや遊び過して散柳

花野

あだし野に行あたりたる花野哉

追剝に夜はふりかはる花野哉

秋夜

合歡の木の枕ひかせん老の秋

須磨

宿借て寐ざめしらばや須磨の秋

諏訪湖水

秋の水に富士をひたして猶寒し

ある人にもてなされて

喰てしる七玉川や鮎の秋

上總千種濱

しら波の染にあがるや千くさ迄

露

白露の果はありけり六玉川

農家に八十の老を賀して

米の秋杵ふりあける翁かな

秋暮

道問ば一里〳〵と秋の暮

鐘つきにのぼるも見えて秋の暮

潮見坂

舟くだく海とは見えず秋の暮

墓ひとつ顔見合せて秋のくれ

眠我と墨水に遊て

木母寺を力なりけり秋のくれ

我庵を客と立けり秋の暮

歸帆

捨て行歸帆ならねど秋の暮

高舘毛越寺懐古

礎をかぞへあまして秌の暮

蕎麥花

蝶鳥の目にも後段や蕎麥花

蕃椒

傾城の樂屋おそろし蕃椒

瓢

うか〳〵とまだ花のあるふくべ哉

雁

二羽〳〵とかぞへて悲し雁ひとつ

初雁や平砂にはやき月の霜

初雁や北斗と落る水のうへ

小鳥

連雀やひとりしだるゝ松の中

鵙の來て一荒見ゆる野山かな

ひよどりの一羽わたらぬ庭もなし

崩してはかぞへなをすや四十雀

文殊奉納

山雀や文殊の智恵のむきくるみ

武庫山

武庫山の眠さますなわたり鳥

下總浦つたひ 二句

朝凪や小雀のとまるみをつくし

鶺鴒や潮來をしへて岩づたひ

芭蕉

さびしさの來る橋懸て芭蕉哉

染かねて我と引さくばせをかな

柿

物荒て時めく柿の木末かな

澁柿や代々の哥にも撰殘し

待宵

待宵やところどころに女郎花

良夜ちかき比、蓼旦が温泉の山に行を送る。

月の時そちら向ふぞこちらむけ

良夜

月を出て月に野山の入夜かな

ひとつとはおもはぬ夜也けふの月

名月のさがして照や岩間水

名月や巢を守鶴もよもすがら

名月や汐滿來ればさゝれ蟹

名月やねぐらも見えて花に鳥

二州橋邊機石別莊

かつらからさす枝の橋やけふの月

田家にあそびて

浮雲に鳴子ひかばやけふの月

僧はたゝく八百屋の門やけふの月

深川舟逍遥

川上と此川下や月の友 さはせを翁の申されし五本松もたゞ一木殘れり。

十人の月見の友や松ひとり

鹿嶋

苫船を神代の宿に月見かな

名月や何つく音もさらし臼

名月や物うつさじと西へ行

名月や生れかはらば峯の松

名月や月より外にくまもなし

鬼啼て漁村の松の月夜かな

名月や燈をけす風もかつらより

一谷

ふるとの寄來る波や須磨の月

柴屋寺にて

いざよひや闇からあまる鹿の聲

十六夜
十六夜やこよひは闇の惜まるゝ

初汐
はつ汐や竹の裏行人の聲

野分
金屏に雨吹いるゝ野分かな
岩端の鷲吹はなつ野分かな

駒迎
旅人のはしり拔るや駒むかへ
駒牽や日やけて甲斐の黒おのこ

相撲
大内の砂を土産や相撲とり
しぼらしや灸すへたる角力取
女ほど櫛笥持けりすまふとり
みどり子や見る目の前に相撲とり

眠江亭

相撲とるおとこいくたり庭の秋

夜寒
半分は青き芦火の夜寒哉
竹賣て枝焚宿の夜寒かな
四十から酒のみ習ふ夜寒かな

新綿
里は今綿あたらしき日和哉

菊
荒ゝて露もさだまるや菊の花
ものいはず客と亭主と白菊と
傾城の枕ふみてや菊つくり
あの露にうがてる石歟蛆の菊
白菊や花のこぼれて葉の雫
蝶ひとつ菊に喰入日和かな
ひと雫葉から油やきくあはせ
舌たらぬ兒にもとらむ菊の酒

漁村東陽

魚の名も菊色々のしづくかな

木曾路

家ごとに祖父ある菊の山路哉

婆心公にて

しら菊やあるじの花に暮殘
白きにも浮世の善惡や菊あはせ

後月
若がへる菊のためしや十三夜
慚つらぬ心に野あり後の月

白魚のかいこうこくやのちの月
稻穗一里しづかなり後の月
　　金澤にて
隈〳〵は海士の焚火や十三夜

新蕎麥
新蕎麥ところ三盃の夢のゝち
新そばや座敷で悟る棒の音

茸
茸狩や月の干浮の小松ばら

尾越鴨
尾を越て命いそがし鴨の聲

うら枯
うら枯や逃ぬ水には丸木橋
うら枯や月の哀よりも日のあはれ

紅葉
九重を中に野山のにしきかな
掃音も聞へてさびし夕紅葉
影落て江はうき草の紅葉哉
　　諏訪秋宮
人あしの歸がちなるもみぢかな
花よりも紅葉にはこき涙かな
　　しもつふさ德聖寺の庭上に、七色
　のやどりぎあり。
やどりぎや幹を花瓶に初紅葉

碪
是よりして年波よせる碪かな
遠里の都に出來てきぬたかな
目にかゝる月の操や小夜きぬた
轉さうな家に碪の拍子かな
　　あるひとの閑居にいたりて
夜嵐や翠の柚味噌も梢より
釜かけて柚味噌のうらみ閑夜哉
　　菅野氏の遠勝樓にて
すさまじき長月比の花火かな

鹿
くれなゐの糸（京カ）とこそきけ鹿の聲
鹿の音や千尋におろすみなの川
　　山紫と千種の濱に遊て

新酒
新酒あり鶴に鮓の所望せん

濁酒
隈なきをのみくむ物數にごり酒

落水
帆のうかぶものに成けり落し水
秋風と木がらしの出帆入帆かな

九月盡
錦着て夜ゆく秋を惜みけり

蓼太句集　冬之部

初冬　初冬の機に入てやきりはたり

時雨　植ながら松にしのぐや初しぐれ

秋風は簑にのこりて初時雨

色かへぬ葉には露なりはつ時雨

鶯の笠さがしけりはつしぐれ

市中は茁蘿染てしぐれかな

夜座

傘たゝむ音にこそしれ初時雨

今朝見れば松の葉つもる時雨哉

夜もすがら我に髭ふる時雨かな

小春　祖師達の忌日〳〵を小春かな

葉を踏でおなじく惜む小春哉

山は今樵夫の笑ふ小春かな

冴返る日までよく似て小春哉

駿河の人〳〵にわかるゝ時

身ひとつの霞なりけり小春凪

十夜　我戀は婆〻になりたる十夜哉

口切　口切や苔の價も唐にしき

芭蕉忌

百回忌な七十年の今日にまねきこして、深川要津寺に俳塚造立の折から、西上人の花の陰にて我死んと詠ぜられしを思ひ出て

我ねがふ小春の望や十二日

駿河路や盧橘も茶の匂ひ　とありし桃舟亭に興行ありて

はせを忌や飯をゆかりの茶に染ん

掛川より贈れる布をまさひて

冬枯や人には葛の居士ころも

落葉　又春の來るとも見えぬ落葉哉

雜冬　さびしさの眼の行方や石蕗の花

十月のあらいそがしや花もみぢ

たくはへて罪なき菴の干菜かな

枯柳　枯柳筏の飯にけぶりけり

枯ゝて月を柳の淺夜かな

冬牡丹　富りとはこゝをいふらん冬牡丹
　姿よく柴のあみ戸や夕ぼたん

枯野　牛の尾の外はうごかぬ枯野かな
　馬と見て一里は來たり枯野はら

鷦鷯　夕暮の篠のそよぎやみそさゞゐ
　見ぬふりに物拾はせんみそさゞゐ

冬籠　灰占に先何待んふゆごもり
　おもひかねて月見に出たり冬籠

歸花　おもてきる地主の木の間やかへり花
　春雨とおもふ日もありかへり花
　夢に似てうつゝも白し歸花

火桶　こぼれ居る官女の中に火桶かな

巨燵　鎧着て須磨のみやこの巨燵かな
　長居して巨燵ら闇になる夜かな
　極樂の道へふみ込こたつかな
　木枯や瀬田行ものは月ひとり

凩　凩にこがらし焚てしのぎけり

水仙　河竹の名には流す水仙花

頭巾　さか嬢は先飼聖て頭巾かな
　傾城の市にかくれて頭巾かな
　千鳥鳴うしろ月夜の頭巾哉

紙子　羽二重の京に嵯峨ある紙衣かな

　客は半日の閑を得れば、あるじは半日の閑を失ふ。
　老鶯巣
　客の來て我に音ある紙子かな

衾　戸さゝぬを我錦なり紙ぶすま
　菜大根鶴見て老をやしなはん

網代守　世わたりのはづれ／＼に網代かな

ぬくめ鳥　爪たてぬ心もあはれぬくめどり
　ある時は一はい鷺やぬくめ鳥

顔見せ　顔見せや紅粉白粉も菊の水
　かほみせや誰に遠寺の鐘の聲

髪置　髪置やひと花さける肩ぐるま

霜　鍼立の門たゝくなり霜の聲

橋守へ橋はもどりて霜夜かな

氷

障子はるこゝろの水やはつ氷
鴨遠し夜半の氷いづこまで

つらゝ

一雫しては入日の氷柱かな

炭

賣よりも買人寒し炭二升
更る夜や炭もて炭をくだく音

身延七面山にて

榾火

榾の火や祖師の胡座も眼のあたり
ほだの火や家につたはる老ひとり

水鳥

たゞ一羽離別れて行歟鴨の聲
鴛鴦のちぎりや脊の右ひだり

鵆

押分て月こそ出れむらちどり
みを木にもちる物出來て鵆かな
蛤にならじ〱と千鳥かな
うごかずに居ればこほる歟むら鵆
千鳥啼夜や名月の照のこし
友見えて月夜の鵆嬉しい歟
吹上て汐くもりゆくちどりかな

雪

ともしびを見れば風あり夜の雪
降くらす雪の相手や水ぐるま
暮て行雪のかつらやひとつ松
雪折つ起つ棹さす小舟かな
白雪の中に灯ともす野守かな
頭巾の塵さらして木々の雪

僧に對す

掃よせん君いざつくれ雪達磨

途中吟

はるかなる火にあたりけり夜の雪
畠ほど八百屋さがすや夜の雪
簑脱でひとり湧けり雪の友
はづかしき飯くふ雪のあしたかな

鉢扣

鉢たゝき月夜は見えて哀なり
習はふとおもふ夜もあり鉢たゝき

はせを翁の一とせ冬籠ありし橘町
ちかく居をうつして

煤掃

袖の香の簑にもゆかしすゝ掃

衣配 今年あり裁ば去年あり衣配

年内立春 ことしとも去年とも見ゆる柳かな

年内立春の日、年わすれもよほし給ふかたにて

春の日をかりて遊ぶやとしわすれ

年忘洩來る椴の木の間より

夜半にくむ年わすれ井は誰が家

絶々に聞ふるしのび音に、ひさり寐覺る草庵のうち

三絃を廬山の雨やとしのくれ

光陰を觀ず

かくて世は雛つくるなり年の暮

年波の淀とこそ見れしゞみ汁

我草の戸は富家の肆にかくれて、麋鹿の遊びた妻こふ猫にかへたり。

金銀の氣に物こほる師走かな

浄破利の氷にうつる師走かな

起されて見れば粟蒸師走かな

酒肆は升にいさまなく、茶肆は秤に事しげしさ、師走は友のさぼしければ

鼓屋と浮世かたらむとしのくれ

草廬

節分 鬼は外月は内へともる夜かな

厄拂跡はくまなき月夜かな

大豆売に七步の吟ややくばらひ

寶船 たからぶね嵐のしらぬ一間かな

空の名殘惜まんさ、入來る客には葛巾の桑門あり、鉢たよこたふる武士あり、猗琵琶はさびしく、鋼ははなやかなり。

簑笠に庵の狭さよたから船

三芳野に旅寐して花の衾の下臥せし妹山・脊山の俤も、まのあたり立さらねば

櫻木と戀した文や古こよみ

基佐の風流たわが貧賤の荷擔にさりて

質にをく物に月あり年の暮

東方未明衣裳轉倒

祐成が蝶着て出たり年の暮

あしたそらにまごふが、曉かた
よりさすがに音なく成ぬるこそ

風鈴ときく時としの名殘かな

松の嵐　古菘子集ニ出　蓼太

今茲丙子年六月廿五日、我師吏登翁の一周にあたりて、像前に時菓の奠を備、紅涙に筆を染て、謹で尊靈に告。嗚呼不侫蓼太若かりし時、不幸にして薪を負事あたはず。故園の梅は昔ながらの花芳しけれど、軒はとし〴〵の秋風に荒て、終に世を墨染の袂にもとおもひ立ぬるは、かのいはほの中に住はかはとよみけむ人の心なるべし。かゝりける中にも、俳諧の狂句を好て隱遁のおもひ出とす。されど浮世の媚に蹈違へて、いまだ向上の一路はたどらざりしを、一日蟻考老人と新古の境を論ずるに及で、深川に此師ある事をしりぬ。予南人の指車を得る心地して、彌生の三日とみに小舟もとめて霞をわたる。故人家在ニ桃花岸ーとつくれる日のよそほひなるべし。頓て柴門をたゝけば、主叟幸庵にまかりありと莚をまうけ、寛語やゝ終て爰に師弟の恩を荷ふ。折節、莎青・葉五・平舍等落あひて題を探る。わが俳を試給ふなるべし。是ぞ師恩の始なりける。今なみ俤に立て懷旧に膓をちぎる。是より月雪花・時鳥、年にねり月にきたへて正斧をこふ。猶思ひあまりて奥の細道の跡たどらまほしく暇申入る。師とゞめて、其國や雪深うして秋より末の初旅心、いと便なからん。近きあたりに足かためせよと、みよし野のたのむの鴈の賴む方に文書てたまふ。此秋は玉川の月にふけり、高雄の錦を袖の面目にして、神無月のはじめいほりに歸りぬ。其比師は深川にいましけるを、川上とこの川下や月の友　とはせを翁の申されし五本松も程ちかきあたりに、若き人ゝ草堂を結て折ゝむかへてけり。常は空坊四壁のみにして、田夫の壤歌・葛西舟の咿軋、をのづからにかよふ。はた西北の山ゝは霞に消、霧にあらはれて、もとよりのどし。この庵守せよと招きたまへるより住る方は人に讓、こゝに菜つみ水くみ、其年も暮にけり。曾て蓼太松嶋に

赴けるは卯月中の三日也。小名木川を北へわたりて、先聰戸の瑞籬をぬかづき、長途の末をいのり奉る。師も此所迄見送給て繡柳の吟あり。折からの麥の穂なみ・ほとゝぎす・閑呼鳥とりつかねて唯うつたふるがごとく、離別のなみだ胸にせまりけらし。實其秋やおもひいで羽の國に在けるが、ほのかに傳ふ、武江の本所あるは深川わたりの人、魚鼈となるのおそれ有て、わがしれる堂社こと〴〵く軒をひたせりなど聞ゆるより、されば老師の覺束なさ、なを其人かの人いかに成行けんと、ゆふべの雲を望めども万里を隔たれば、風にむかふ馬もおよぶべからず。たゞ山かなしく浦おもふに絶たり。かくて蓼太江府にたどり入しは十月六日の夕月夜なりしが、先柴門の見しにかはらぬぞうれしかりける。師手を取て、汝が文月七日の文に葉月初の歸路を告たりければ、途中にして此變に逢ぬるよと皆なげきあへり、かしこくも面あはせたりと、よろこべる時も老は先涙もろなりけり。それより漸七とせあまり八とせがほどは須磨に暮、吉野に明て、吾春秋も三十あまりに指を屈す。あゝ師は古稀の齢を跡になして、かの蒼ゝたる髪は化して白く、動揺たる歯はぬけ落たり。まことにあはれむべき白頭の翁なりとひとりごち申されしが、此冬門人のあらましは吾にまかせ、罔兩の一句に南花眞人が風を慕ひ、蓬の心はとげられけり。されば蓼太去年の春は駿河路や廬橘の昔をしたふ人ゝの招について、卯月・皐月の境は其國に在けるを、葛才が文に師のいたつきをおどろかされて、心急ぎの旅はゝきながら、吾又藤枝の驛より暑濕のいたみありて、漸水無月の初草廬にまろび入ぬ。さははかく〳〵しくつかふる事あたはず。只緋にすがり空に望むのみ。悔てかへらぬ日數もつもり〳〵て、今年其時其日をおもふ。古人もいへる事あり、言はつくすべく情は終るべからず。よつてもつて五月雨の比より一日一口の歌仙をつゞり、往事をありのまゝに述ていさゝか師恩に報ふ。又此冊に茂松子が手を借て肖像をうつす。遠して相見ざるの門人、近うしてなつかしとおもへる旧知の人ゝ、一章の手向あらばかならず答あらん。其答るものは何。曉のかねの聲、夕暮の松のあらし。

發句集跋

守武の神告曰、俳諧は何にてもなき何となしことを好と、さるかたの言種なれど、何か又世の中それならざらんや。本より連歌に露かはらざる大事ならんかと、誠に雲井をかける時鳥、くゐぜをまもる蛙の聲、いづれか讃佛の緣にあらざるべきやは。家〳〵の風をあらそひ、蝸牛の角のつのめだちたる、何としてか神佛のこゝろに叶侍るべき。さるが中にも絕たるを起し、廢れたるを新むるは、正しく先達のしはざにして、彼是かよひてあるべし。其實みな落て、其花ひとり盛んに、其花かうばしからずして、その實もつぱらほしいまゝなるは、いづれの道にも取れぬにや。九ツの病をのぞき、三ツの品をそなへ、十七の句法をたゞし、おほくの手爾葉をわかち、あまたの姿を定る事はかたきことになん。堪能の人といへども、句ごとに秀逸にあらずとぞ。唯春の水とゞこほりなく、秋の風聞所あらんこそ句の成れるならんか。其なれる句〳〵撰び集ることは、むかしよりかはらぬものから、世〳〵の[illegible]風は猶有ぬべし。今をもて古にならふるに火水よりも異とは、昔の人もなげき申されしが、梢にほこる花の春をもむかしとながめ、深山に積る朽葉の冬をも古と見んに、取捨は其人の心〳〵に有ぬべき事にぞ。今の雪中庵主の句〳〵櫻木に移すよし聞ふるに、其流れ汲、我輩のさすがによしともあしともいふべきにあらねば、今なを古のごとく此道のあとなしごとにはあらじかしと、書林の乞にまかせて筆を取のみ。

時明和六丑の秋

時雨窓月巢

白雄句集

上・下

碩布編

身を煩ふて大事なる人有けり。なしの花の今を春と咲たるを見て、なしのほしきと乞わびしに、いかゞして持たり剣、ならの古葉に包みたるを、あとはなしとて只ひとつ遣ければ、かぎりなく嬉しがりて、あとのなからむとにやくらひもやらず。撫さすりつゝ抱きて寐たりなどしけるに、梨子の肌つや〳〵とかたまり光出て、家の隅までも照す程に、いつか玉にぞ成ける。つばくらが子やすの貝、たつのくびの五色の玉とも思ひくらべて、胸くるしく苦き時も、此玉を抱けば苦みもやみぬ。かしらいたく身ほとほる事もたくなり、常のやすきにかへりしとがや。しらをの翁をまねしたひて、花とりに思ひくるしむ人にも、此集ぞよきふところものなるべし。玉をもうまざらめや。只見人のせちとせちならぬによる事を。さてそも是をゑりまろめて、もろ人にあたへむとする毛呂のせきふが勤しは、あら川の莖藻より長く、むさしのゝほすゝきよりしげりて、雪降そらに瓜をさゝげ、花咲あめになしをおくりたるのたぐひにはあらぬのみ。

みちのくのみちひこ

白雄句集（上）巻之一　碩布著

春之部

歳旦

元日や大樹のもとの人ごゝろ

万歳の願ながき旦かな

あなげばいよ〳〵鳳凰城、俯してます〳〵國恩を思

若水やおよそ玉川猪のかしら

天鶏羽うつて萬鶏うたふの此曉、踐約せしみたり、沓ふみしめて山にのぼる田毎の日こそ戀しけれ。その田毎の日影戀しきが故也。山は姨すてしこころにて、何れの年の始の姿といふべくもあられど雪のむらぎへたるに、日のかげらかに光りあひたる、ものなつかしき

旦なりけり。

春いまだ田毎の雪間〳〵かな

勢大廟前元日立春

椙(すぎ)の木に今春たてる神路山

信中虎杖菴に春をむかひ、雪のき
ゆるを待て皇都に杖ひくべき趣を、
人々にさゝやきはべりて

初がすみきその嶽(たけ)ゝたのもしき

北總千葉、宗胤禪刹に春をむか
ふ

歳ありて般若の聲を三の朝

蟻道およびそこの人々が、せちに
霜雪の行脚を勞りしにぞ、はから
ずも甲斐の國栗原の驛に春をむか
ふて

身の春や遊ぶところに日かげさす

相中酒匂、南藏蜜刹に春を迎ふ

みなみどり松を見海をけさの春

武野桃原菴に春を迎ふ

主がせちより先招風の賞を忘

世とゝもに身のきそ始おもふかな

夜道の行かひしげきには、さしも
降つる白雪のあさかたもなく、長
閑也けり。

菴にのみふるとしの雪を門の春

法華書寫思たちし年の旦

心こめて筆試るとしかな

門人に草菴ゆづるべき年の旦

我と世をのがれん身にも初日影

歸童が家嗣佐太良の筆意常ならぬ
を祝して

天みつととつて七ッの吉書かな

陶水瓶といへる物を、まさ二がめ
ぐみける年の旦

日の句へ小瓶に椒酒花ぞかし

病中

梅柳はつ春の眼たしかなり

新居もとより煤竹を入れば、春の

あらまし又いふにやおよぶ。

人日

元政の松もかざらず老が門

葛飾(かつしか)に知人いくら梅わかな

朝の間に摘てさびしき若菜哉

隣〳〵うしろも隣なづなの夜

七種のそろはずとてもいわ井哉

薺賣餠の釣場をおしへけり

粥草や葛飾舟の朝みどり

うち囃し馬も嘶よ薺の夜

葛飾の菘菜なつかしき今日や、いやが上の白妙に、杖のみちもさだかならねど、更科川のさら〳〵さ澤邊にをりたち、袂をぬらさんとす。折から投ぜし文の奥に、見せばやなこれぞ信農の雪若菜 さ一句にそへて烏瀾坊が一籠をめぐみたるに

大雪の旦若菜をもらひけり

掛り舟岬のまつに子の日せよ

霞

國にそふ霞をはこぶ潮かな

遲日夢去て時さへば遙にこたふ

かた〳〵の鐘聞に霞める寢覺哉

醉ざめや嶋を見こしの波かすむ

二またになりて霞める野川哉

菴崎にて

うすみのや夕越くれば雨かすむ

より所なくて遠しや野のかすみ

梅おりに舟よぶ多摩の渡かな

馬の子の家にかへるや梅寒し

梅

遊台嶽

捨氷院ゝの梅さかりなり

朝夕や何れとならば夜のうめ

梅が香や餠ひつかけし釣の糸

宿の梅といはるゝ宿よ松もよき

ますら男の梅が香袖に射矢哉

うき艸のひさ葉なりさも礒がくれ
おもひなかけそおきつしらなみ

鷽鳴て梅おらんこゝろうせてけり

富家も乏き家もうめさきぬ
夜の梅寐んとすれは匂ふなり

閏月ありける年

加はれる睦月の梅花裾ゝたり
梅ゆかし薬猶そののにほひかな
うちひらけよき日あたりやうらの梅

酒たうべて病に勝べしさい玉ひける醫師の家にて、傍人に申。

ひとゝして酒のみならへ夜のうめ

初寅の日、人ゝ春おろし句いかうまつるに、都の友思ひ出て

便せよ麓はうめのくらま山
人にものおもふ顔なき星の梅

武野天満宮奉納

むさし野に松梅多きところ哉
麥のたけ梅紅に春ふけぬ
やなぎ風に裏おもてなき時節哉

柳

おもふ柳見にゆくころとなりに鳧
日永きや柳見て居る黒格子
眠るかと鶴見て過る野の柳
正月の霜ふりこぼすやなぎ哉
月遠く柳にかゝる夜汐かな
梅やなぎうめうつろひて青柳か
暗うつ門に暮行やなぎかな
夕汐や柳がくれに魚わかつ
的形の矢落の柳しづかなり
柳なをしりぞき見れば綠なる

つばき

鳥の脊白玉椿きはつきし
葉おもてにかまくら椿咲にけり
飽てたゞ鵯の咲花つばき
なか〳〵にはや散つきよ赤椿

木の芽

けしきたつ谷の木のめい盛かな
世の木の芽こゝろ鞍馬にかよふ哉
桐もやゝ鶏皂角も芽をぞふく

鶯

飛鳴に鶯の機嫌しられたり
うぐひすにすげなき聟のかつら哉

鶯に間すこしある屋敷かな
鶯のしら口にふくむはつ音哉
水あびて鶯となき脊はらかな
横に口のうぐひす見こむ書の小口
かならずよ鶯きかばやまの入
鶯の胸毛をこぼす春みなみ
うぐひすの今朝たく柴にとまりけり

蝶

蝶とぶやあらひあげたる流しもと
袖に來て袂にきへつみちの蝶
初蝶と見しより數の野つら哉
はつ蝶のちいさくも物にまぎれざる
酒くさき人に蝶舞すだれかな
から鮭にてふ舞晝の廚かな
二羽になりて蝶かへすなる野中哉
夕風や野川を蝶の越しより

猫の戀

猫の戀六日年こし更にけり
氷ふむ猫やゆく〳〵戀死ん
このほどやうとくなりゆく猫の妻
戸をあけてはなちやり鳧猫の戀

蛙

酒星を見に出て蛙きく夜かな
隣やあしたの小田のかはづども
はつ蛙水にはなかぬ夜聲なり
脫すてしみのにをかしき蛙かな
起ふしに床の薹追やもめかな
飛ちがふ蛙くらしや雨の噂

田螺

田にしわる野口の嫗のにくきかな
苞の田にし田へ戻すべう雨をなけ

蜆

土舟や蜆こぼるゝ水の音
泥はもとの海へ目指のあさり貝

蜊

われがちに數あるものを蜊とり

蜂

木ばさみのしら刄に蜂のいかり哉
蜂の巣も人たのめなる軒端かな

虻

馬は眠犬は追なる門の虻
舞すくむ虻や地にそふ影久し

春の雪

あれなるが安房の岬か春の雪
春の雪しきりに降て止にけり

海に見ん春の白雪地にあはき
とりさがし門にすさ切雪解かな
朝駒の朝川わたる雪解かな
海はれて春雨けぶる林かな

春の雨

春さめのこゝろながくも降日哉
春雨や小桶にかつぐかす小鯛
おもひ絶て梅さる宿に春の雨

鴫立澤にありしころ

春雨や傘さしつれし濱社

春の風

はるかぜや吹れそめたる水すまし
うら若き川原蓬やはるの風
濱つとや歸るさをふく春の風

畫の嶋にて

春風や潮に手あらひ口そゝぐ
はるかぜに吹るゝ鴇の照羽かな

柏木の衛門が鞠をさんさけたれば、まりは枝にとまりつゝ、花はちらりほらりさ

春の日

春の日を晉せで暮る簾かな

酒店

簾戸に鯛のこけちる春日哉
春の日や刀あづかる原やしき

長閑

のどけさや津ゝ浦ゝのおもはるゝ
長閑しや麥の原なるたぐり舟
遠干潟ふねのみよしの長閑也

ながき日

永き日や鶏はついばみ犬は寝る
うす曇同じ空にて日の永き

晝寝のくせな自はおて

永き日に我と禁ずるまくらかな

也寥禪師の消息に酬

ながき日やみちのくよりの片たより
みちのくやいく關の戸を初便

二日灸といふとを

母戀し日永きころのさしもぐさ

天眞禪刹

かげろふ

陽炎やしづかなる日の敷かはら

かげろふや一摑づゝすさだはら
陽炎のもえて地にたつ松葉哉

糸遊

糸遊にほどける艸の葉先かな
いとゆふやものによらねど角櫓
糸遊に兒の瞬きやさしさよ

紙鳶

舟にあげて舟ふりかはる几巾
几巾空見てものはおもはざる
いかのぼりきれての後の風ぬるし
たこみつよつ山邊の長が夕詠
夕ぞらや几巾見に出し酒の醉

初午

初午や七ッの年のくゞり道
はつ午や假そめゆけば七ところ
初午の日和は梅に柳かな
はつ午や小旗をつかむ舟上り

病後

はつ午や梅見ぬ年の梅を見に
初午に痘瘡かろき世なみ哉

涅槃會

梟のつらも佛のわかれかな
ねはん會や往來の人ぞひまの駒
涅槃會や身は寺入の穀つぶし

寉の林を思ひ合すもことふりにたれど

磯なれし松も見らるゝねはんかな

老ゆく身を獨ごちして

去年より今年佛の別かな

彼岸

吹つれて梵論も彼岸の歩み哉
山邊には桜の芽を摘ひがんかな

捨がたき妻や子や兵衞尉と聞へしも西上人ときこへしも、たゞかりそめの名なる事を

西行忌

花に死んねがひは欲のかゞみかな
みたり世に生れて世をや花の陰

出代

出かはりの酒しゐられて泣にけり

家婦入

やぶ入や桃の小みちの雨に逢
出かはりの一日にせまる誠かな
筑波根や世のやぶ入か遠霞

菫

なか〳〵によき衣はぢよ野の菫

花にうつる日

春ごとの野にのみ見しをつぼ菫

末黒野に咲ずともあれ菫艸

行や我すみれがくれの濱雀

病後の吟

菜の花

野ごゝろや篋の小菜の花を見て

かさね着や菜の花かほる雨あがり

菜の花のにほひは甘くにがきかな

茶店にて

摘そへよ膳のむかひの鶯菜

くゝだち

薹だちに春の地勢を見する哉

非のもとや薹だち摘ん寺泊

燒野

山燒やほのかにたてる一ッ鹿

越わびて淋しうなりし燒野哉

前書畧

山燒や有情非情ももとの土

春の艸

一色にいろ〳〵艸の青きかな

舟かけて草の青きを春の人

若艸や栞にむすぶ古すゝき

うら〳〵と草はむ春の野鹿かな

萍や生そめてより軒の雨

艸の戸や更行春の青かつら

鹿みちや韮に交りて露の甍

おもはざる瑠璃の内ぞふきのとう

うどの香や皿に下駄はく山の兒

たんぽゝに東近江し日和かな

石原やくねりしまゝの花あざみ

めぐる日や指の染までわらび折

早蕨や一日踏ならつくばやま

ふせ柴の十日たちしをつく〴〵し

閒からにしりぬ杉菜は土筆

杉苗に杉菜生そふあら野哉

水のほどとく角くみしかきつばた

野の窪み水うちふくみ茅花生

埜の朧つばな月夜といはまほし

出ばやな雛が野邊の麥踏に
苑豆やたゞ一色に麥のはら

苗代種おろし

鴈は歸鴨はいづこへ種おろし
いとまなき世や苗代の薄みどり
行水や苗代小田にせきそむる
水鳥の歸ていづこ種おろし
苗代のかけ水はかる五十串哉
なはしろに鷗追るゝ礒田かな

雉

雉子の尾の飛さにみたる野風かな
きじ啼て嵐の野土けぶるかな
日や暮る尾をうちかひて枝の雉
鹿垣に番かけ込きゞすかな
もがきてや爪根あらはに網の雉
羽やたゝで峽の橋ふむ夕きゞす
山里や馬槽にきじの歩みよる
瘦てたつ春の行衛や岡の雉子

歸鴈

歸る鴈みな菱喰に見ゆるなり
我こゝろ聲せで鴈のかへれかし
追聲のうしとや歸る小田の鴈

ひばり

明星やしめ野のひばり巣にぞ鳴
たつや雲雀すこし舞そふ濱雀
やぶかきや野越せうものひばり鳴
地蟹追ふて追そこのふてたつ雲雀

つばめ

軒燕八聲の鷄を聞おらめ
人住て燕すみなす深山かな
はしり帆の帆綱かいくゝるつばめ哉
巣乙鳥の下に火をたく雨夜かな
つばめ舞宿や日高に高木履
巣燕に雜巾かけし柱かな

鳥の巣

鳥の巣の明れば暮る日數かな
巣つくるやにくき鳥も親ごゝろ
巣鳥落ぬ木末にかへすよしもがな

拭ひ椽に塵をおとす罪ありて、こらいふぬ家の子が、もろ手な指入、さしもに厚きわらの圍を落したる

夕

巣はあだに軒の雀の聲高き

うそ

照雨や瀧をめくれば鷽の啼

鹿垣にうそ啼里のやすみかな

淺間山つなみせしおくる年、その
麓を過るさて

春の鳥

砂ふるへあさまの砂を麥うづら

馬客に舞入春のすゞめかな

足緒はゆるしら尾の鷹の後哉

物おもふ人に駒鳥鳴暮もがな

曲水

曲水はとても日和のゐんならん

きよく水やまさに小貝の蜷むすび

上巳

桃の日や下部酒もる蒸鰈

句はしや誰しめし野のよもぎ餅

雛

紙雛はあるがうへなるみやびかな

蠟燭のにほふ雛の雨夜かな

なにがしの一女に對して

綾にしき雛にあやかるこゝろかや

彌生一日一女まうけし人の許に

みなあらた産家に降る雛かざり

旅人の窓よりのぞくひゐなかな

さくより春あたゝかにして、桃櫻
やゝちりかひみだれたる三月三日
を

桃

世の雛にみな折とりそ遲ざくら

家あるまで桃の中みちふみいりぬ

里の桃蚕掃おろす日にあへり

うちそむき木を割もゝの主かな

崖の桃およひてもたゞすなをなる

あかつきや人はしらずも桃の露

かぎりなや堤より見るもゝの花

汐干

春干浮人の歩みのすぐならず

あと先の小舟をちから汐干狩

濱揚の牛はるかなる汐干かな

歩み來ぬ岬のなりに汐干狩

萬葉集の伊久里と聞へしも、今日
あらはなりけり。

ひや〳〵といくり踏しる汐干かな

あまのまてかた、いざ此日春の干

浮に杖をたてゝ

馬刀串(まてぐし)にあはれは馬刀のちから哉

花 さくら

花となかめさくらとなかめ日は暮ぬ

鐘つきを書にかく花の麓かな

人戀し灯ともしころをさくらちる

行勢さくらぬしつく一木かな

洛にて

寺々を通りぬけけり花ざかり

をちこちの櫻に舫ふ筏かな

瓶に酒いづこはあれど家ざくら

はりまの國わたらひせしころ

夕風や汐木のさくらちりやすき

花一河を隔さいふ題にて

水かさや香をのみ花の口おしき

ちる櫻嵐に答ふことばなき

酒の科家ざくらにて日暮たり

引あみの磯山ざくらちるを見む

借屋戸神社

神こゝに椄櫻も咲にけり

遠近やほの〴〵さくら風ぞなき

香に花につゝまれぬ春を桃櫻

春のあらしちらざる花はちらぬなり

(寄)奇朽木戀

世はさくら門は鯛賣日和かな

東叡王のみあらか營建あるその始の日まいりて

椄木に余所の花ちるうらみ哉

人の奥羽に行をおくる

地祭や松のひま又花のひま

松さくらまかせこゝろのみちのく歟

ひさへ山の邊にて

夕櫻夕越いざやひとへやま

道の爲には旅行をなすゝめ、酒に對しては杯をかくし、老がいのち長かれと切を盡せし保吉(やすよし)先生なくな

りて忽三歳、正當日の今日、北總
和暢亭にありて、亡から埋し一字、
遙に情心こがれ雅思ひな

椢寺も雨の降かに花のあめ

兄の七回忌にはる〴〵節曳つゝ奥
城所拝みけるに、やさせの昔は只
おもかげにのみ、初裏にかはらぬ
おもひ、我人にのみありて

ちからなき旅して花に墓參

梨花

花にけぶり軒の姨なしと詠りけり
朝雨や旅ごしなる梨の花

辛夷

雉子一羽起てこぶしの夜明哉
木末踏みちに辛夷の白き哉

山吹

山ぶきを喰折春のからすかな
根をたゝで山吹ながるかけ樋かな
山ぶきやあたらかざしのから車
やま吹にくちなはを追旅人かな

大和のくにわたらひせしころ、高
取の城らかきあたりにて

つゝじ

山城や紫つゝじかぎりなき
片皿のつゝじとざるゝ嚴(巖)かな
今さらに蔦あさましや岩つゝじ

藤

藤咲や鵤の背も末の春
物がたり讀さして見る藤の花
藤さくや人もすさめず谷の寮
月かすかに犬なとがめそ夜の藤
しら藤や月ほのかなる山の兒
筏くむ夕暮藤の落花かな

鹿の落角

雨の降日にひろいけり鹿の落角
影や見る水やのむ鹿の角おちて

暮春

ゆく春や鄙の空なるいかのぼり
葉櫻に山こゝもとのはる深し
明日よりは身を夏旅の今宵哉

已下不分題

先ゆくも歸も我もはるの人
餅酒に慍じて春の野づらかな

美しや春は白魚かいわり菜
こりずまの世に筆ありて水硯
春の水藻臥の蜷も得たりけり
風ひとふき酒にけぶれる松の花
松の花柳の花は手にもとる
庭中にあるじ酒くむ接穂哉
古き代のみちのく紙やかみかいこ

圓光大師御忌

遠霞智恩院の鐘かすむらし
煤ちるやはや如月の臺所
鴈小屋のあらはになりぬ別霜
簑市に誰ゝみのを春の雨

保吉を悼

逝し児を生残る我をなげく哉
三月三日、この人のうせし日なればこゝにひらふ。

聖護院御峯入、此春ありしさ人のいふに

峯入やおもへば深き芳野山
みね入や篠にかぶるゝ道ありと

師の單忌、鴫立澤にありし頃

おもひ出てさし木の五加木摘日かな
淵の水深きはふかくぬるむ哉
春の月山椒の皮にむせてけり
朧夜や誰か寐て行鹿島舟
鳥雲に入て松見る渚かな

春詠都三百二十句

白雄句集　巻之二

碩布著

夏之部

元日の舊服、今日に至りてなを垢つきたり。しかはあれどもわが菴中俳諧にさめり。

更衣

更衣簾のほつれそれもよし
かへるさや胸かきあはすころもがへ
衣がへぬき簀の水ぞいまめかし
袷着て卯の花折んこゝろかな
馬とりの込に入けりころもがへ

楚川がよき衣めぐみたるに

あたらしき袷に今朝のあさ日哉
綿ぬかん〳〵とて四月二日かな

伊勢の留主に招れて

たがはじな此日を淸のころもがへ

靑簾

薄くれや酒けしめさる靑すだれ
うら表おもてはわきて靑簾

灌佛

雲の歩み水の行かたや佛生會
灌佛や門を出れば茶の木原

一聯二句

御父の名はおろ覺佛生會
御母の名は人もしる佛生會
灌佛や芍藥園を見すかして

夏籠

夏にこもるこゝろは簾ひとへかな
鐘つきの妻にすゝむる夏花哉
何となく夏にいる人を見られけり

短夜

みじか夜や直宿袋のあけおろし
明やすき夜を泣兒の病かな

夏の月

みかき葉は椿なりけり夏の月
くちなはを踏しはたが子夏の月
町中をはしる流よなつの月

ほとゝぎす

起臥のこゝの夜待ぬ郭公
弓とりは弓持てきくほとゝぎす

夜の灯やこゝも住よし時鳥

あはれさの鷄鐘が中ほとゝぎす

子規なくや夜明の海がなる

舘の灯を待夜のちから時鳥

鴫たつ澤にありしころ

思ひよる門の榎やほとゝぎす

黑燒にせしは何もの子規

草菴に松樹植けるころ

をとしくるはわが松風やほとゝぎす

碓氷峠にて

鄙曇かならずよ山時鳥

あたみ入湯

有明や初ほとゝぎす槽ぶね

朝みどり庫裏の窓より時鳥

馬に鞍こはたが夜明ほとゝぎす

品浦海晏寺

江を採て似あはしの山ほとゝぎす

國中やかけ時鳥厚木川

謝尙なら眞似て告んに時鳥

啼らんと思ふ空八隅ほとゝぎす

鹿の子

八九間鹿の子見送る林かな

草の葉に見すく鹿の子の額哉

艸の原何を鹿の子のはみそめし

松魚

夜船とは僞ならしはつ松魚

夜松魚に裾ぬらしたる内井哉

三枝ぬしが携へし雨石老人の東武行は、やよひはじめになん參りあはせて、むまのはなむけせしが、ともに長居の老人は江戸に、我はしなのに、此日井ゝ亭をさひて、

噂盡べくもあらずなりけり。

嘸くさめ嘸ほとゝぎすはつがつを

閑古鳥

なけば啼ふたつの山のかんこ鳥

閑古鳥世は山鳩も啼頃か

白樫を花に啼かもかむこ鳥

しづかさの啼もそこなはず鳴鳩

閑古鳥啼林より落羽かな

牡丹　園くらき夜を靜なる牡丹かな
散さまや牡丹のぬしの物いまひ

牡丹花老人贊

牡丹袖に連哥戻りとしられたり

三河の國わたらひせしころ

燕子花　古道にかきつばたとふ日ぞ長き
雨のほどけふを葉のびの杜若
雨に人たちもとふるやかきつばた

芍藥　芍藥や四十八夜に切つくす
莟なき芍藥園となりにけり

人の京にゆくを送る

若葉　世はわか葉氣相(いきあひ)のわろき日はあらじ
見ありきて先間梛(なぎ)の若葉哉
國ゆたかに見ゆる若葉の關路哉
若葉して瀧のありたきところ哉
樹々のこゝろ若葉に遂(とげ)し氣色哉

うのはな　さかばきに卯花かゝる雨くるし
うの花や笆を見こしに夜の海
樹とりうの花を折南部かな
卯の花や折ての後のうら表

青あらし　かしは山夏の嵐をうち見たり

馬門亭

人の知る曾我中村や青あらし
沙川や梢をあはす青あらし
山の邊や天蓼(またゝび)拾ふ青嵐

罌粟　花げしにくんで落たる雀かな
けしの花見て居るうちはちらざりし
花げしやうしろさびしき階子賣
罌粟の花十日たちけり散にけり

竹の子　竹の子の萑の雨をかつぎけり

わか竹　わか竹や牛のゆく筋あらしふく

甲斐・しなのゝ國さかひを過るとて

白橿(しらかし)や篶竹(すゞたけ)原はわかばせし

紫陽花　あぢさゐやかれにうらやむ花あらん
紫陽花のすぐり寄たる莟かな

烏醉居士之墓

あぢさゐのかはりはてたる思ひかな

實相無漏の大海に五塵六慾の風は
ふかねども、隨緣眞如の波のたゝ
ぬ日はなし。

水艸

藻の花やみがくれてだに風さはぐ

水たゝへて水草うつす小沙彌かな

束鮒の刈藻にうごく門の月

うき草や同じ嵐のうき根莢

橘

老ふたり花たちばなに醉泣す

廬橘（たちばな）にかたちつくりす夜の軒

母の五十回な奠るも、たゞに命あ
りてよこ身のつゝがなきを歡ては、
乳房をしたひし恨も散ずるばかり
に

さつき

をぐるまの死なで母吊ふさつき哉

綠毛龜の蓬にこもる五月かな

五月雨

假そめに降出しけり五月あめ

八專のうちぞともいふ五月雨

五月雨やひと夜嵐のかへし雲

さみだれは時雨むらさめ夕立の
そらのけしきをつくしてぞ降

五月雨の音を聞わくひとり哉

もたれあひてみなもろかつらさみだるゝ

草菴客をとゞむ

君しばしさみだれの中の夕立ぞ

軒端の松の、雨に嵐にみどりうし
なひたるを

さみだれや枯なん松に普門品

焚火してもてなされたるついり哉

入梅

入梅の明遠かみなりを暦かな

入梅のひま鼻とをさるゝ犢（こうし）かな

やすみしろしめすみつば四つば
の殿づくりのためし多かる中に、
此日あやめのかづらかけざらんも
のは、宮中へ入をゆるし玉はずさ
や。是に傚ははゞかりあれど、佳

端午

節の句せざる者に、荆扉を訪と
なかれと戯て

かはる〴〵五尺のあやめ袖にせよ

軒あやめ市に牛かる思ひあり

塩竈にさうぶ葺居る童かな

家々にながき根ふきわたして粽め
くもの持ありくにぞ、深山の柏葉
も時に逢へる此日なるべし。

篠かしは葉ごに露の節句哉

草の戸や粽をほどく夜の露

長〴〵と肱にかけたりあやめ賣

菴の作事半なるころ旅に在て

小菖蒲に素建の我家なつかしき

さうぶ湯やさうぶ寄くる乳のあたり

世をまゝに隣ありきやさうぶ酒

麗水堂に朝祝の酒、よきものさか
なあざらけきをたうべて

いざやとて燗酒に交し菖蒲酒

世はあやめそけてひと日は花かつみ

むつまじのあらむつまじの軒あやめ

くらべ馬

髪づらは老もわかずよくらべ馬

むつまじきつねをば何とくらべ馬

思ひよらぬ哀を見るも、うき旅の
ならひならずや。

火串

もえさしの火串に鹿の血かな

火串ふつて獵矢をそゝぐ小瀧かな

獵の男が弓、蜘の網、ともに飢な
たすからんはかりごとにこそ。艸菴
にけふの糧をたくはひしかば

命毛やわれは網せず照射せず

伊勢にて

田植

御田植の酒の泡ふく野風かな

捨苗や田中の菴のはいり口

鳧の子を野水にうつす植女哉

早乙女の蓑かけ柳年經たり

早乙女のうしろ手しばし夕詠

青田

木のもとや松葉にちぎる田植酒

早乙女の葛葉ふみこむ山田かな

傘さしてふかれに出し青田かな

蝙蝠

かはほりの夕を宜禰がつぶみ哉

蝸牛

かたつぶり落けり水に浮もする

山齒朶や寸にあまれる蝸牛

煤茅にすゝけておかしかたつぶり

螢

飛やほたる夢人を訪夜の露

むら松やきえんとしては行螢

夏は夜と汝がとか飛ほたる

蟬

松の木や今日は朝から蟬の鳴

夕蟬の筏木に鳴ふもとかな

蟬鳴てくるしやみのゝむらかはき

蚊

蚊遣り火のけぶりの末に鳴蚊哉

竹切て蚊の聲遠き夕かな

しばらくは高きまくらを幮の月

蚊のさすや蚊火種ひらふ指の股

蚊に酒を吸さん夜半か蚊屋の月

ひとつ幮に僕も朝寐の枕かな

下京やかやりにくれし藍の莖

子をうしなひたる人に

蚊屋の月亡子かへせと泣おらめ

夏の虫

油火に蚊とはいはずよ夏の虫

水鷄

艸しげみくいなの道に鎌入ん

遠近のいはぬ夜を啼水鷄哉

鵜

鵜の嘴に魚とりなをす早瀬かな

數の鵜に鵜匠ひとりの目面哉

かはせみ

翡翠の筑波おろしに吹るゝ歟

中絶し橋を翡翠の小楯かな

氷室

世の貢多かる中に氷のみつぎ

雪の中の筍より、水無月の貢、闘鷄野ゝ間も遠きにあらず。

朔日の御内わたりや夏氷

雲の峯

雲の嶺白きはうそのはじめ也

雲の峯きのふに似たるけふもあり

川狩

川狩や鯰の腮さす雨の篠

涼

川がりやその夜〳〵の月四分
ゆかしとや人見む合歡の下すゞみ
すゞしさや藪の間より向島
梳る人もありけり門すゞみ
すゞし江に鯆をうつ竿の露
蜀黍のもとにかたろふ涼み哉
しき濤や杖一節の海すゞし

舟行まゝの富峯、市街にかくれたるな

うしろ涼し筑波はかくす家もなし

簟

舷に蓼摺小木や夕すゞみ
たかむしろ酒したむ事を禁じけり
行水にうちまたがせよたかむしろ

扇

片手綱馬上に扇見事なり
明てしれ淺黄うちはに夜の露

唐人の畫に

薫風

風かほれ唐とやまとの墨の色

虫干

虫干や花に久しき松ふぐり

暑

日の前の浮雲暑き蔭りかな
猶暑し貸干の魚にはこび雨

悼兒石

此界は暑し〳〵との眠かや

麻

麻刈の麻きぬあらみされぱこそ

夕立

夕立や流れ出たるむもれ水
風そひて夕立晴る野中かな

蜷のすむ數さへ見ゆる　さは師が遺草になんこ　さるなこのほど滯留なす福正蓮社に、一筋の流いさ清きあるな

清水

朝夕や戀る清水の蜷むすび
何なりと一木ありたき礒清水

祭

見あふぐ扇の箔もまつりかな
樹々深く祭のあとの野山哉

夕顏

ゆふがほに阿兒と呼子は女なり
夕顏や花の上なる籠り堂
窓のけぶりすゝけの花と觀じけり

葉がさねのひさごの花や石の露
夕皃や花の爲とてうえはせじ

晝がほ

晝がほや日のいら〱と薄赤き
ひる顔やわかちて擔ふ魚の露

蓮

白蓮に夕雲蔭るあらしかな

或ひとのもとに荷花ある事を

夙に起て蓮見ん爲ぞ夜訪し

瓜

蔓ながら都へなどか初眞桑
瓜の香にきつね嚏(はなひる)月夜かな
祖師堂にふりの香籠る曇哉

御秡

たゞこゝろ門の流も御秡の夜

雨にあひて

海川や御秡のあとの雨の聲

賀茂より七條の僑居に歸るに

川ぞひを戻るもよしや御秡の夜
篩けしてそれも流すか御秡川

不分題艸木

くるしくも雨こゆる野や夏蕨
訪ぬ人も葎の宿にかごへけり
蟻のより釣鐘草のうつぶせに
山百合や齒朶の間より一ッ咲

熊野路にて 三句

荵冬(にんどう)の花うちかほるむくまで哉
濱木綿(はまゆふ)の花はいつさく夏刈す
西日さす濱は柴胡のしげりかな
むら雨や見かけて遠き花樗
梅熟す折にふれたる曇かな
葉柳の寺町過る雨夜かな
岩はなや旅人勞ていちご食ふ
花柚水にうかべて晝の簾かな
歩み來ぬ早瀬はあとに夏木立
下闇や椎の葉がさね艸もなき

桐壷の賛

桐の花翡翠(ひすい)のすだれ猶あらん

山高み、二國の境に立せ玉ふくまの宮拜み奉て歸るさや、盤桓すれ

ば上毛、流憩すればしなのゝ山ゝ、眺望ひとなき至景なりけり。御愛樹のもとにたちて

かみつけや級木（しな）はしなのにしげみけり

葉櫻におくれ詣のこやたかな

合歡の木かげ人も日に〳〵夕なり

不分題鳥

大樹公の御船うかへさせ給ひしは、きのふと聞、綾瀬川にて

鶴一羽御狩にもれていく程ぞ

不破にて

松風や關はむかしに羽(拔)秡鳥

さやたかといふ事を

塒に聲なし雨にたれたる塒筵

ひとしきり竹に柳にぎやう〳〵子

すさまじや雀の甕（もたい）あらしふく

都ゝ鳥や木曾のうら山木皿に似て

沙鷄の聲人あきちかくなりにけり

蚊食鳥とてもくらはゞみなくらへ

雜題

木曾より舟を浮む

舷や年は四月のわかれ霜

笆ごしに青さし匂ふやどり哉

凶年を悲みては酔炙口に苦く、有年を悦ては雜食口に甘し。

麥の青さしをしいたゞきぬ掌

旅人に旅びと見せよといひけんも思ひあはすの折から、紀枝なる者青樽を携來るに、我人輿に入て

冷し酒旅人我をうらやまん

なき母の爲とかける笈摺のうしろさま、いとあはれなるに

夏旅や母のなき子がうしろかげ

夏之部二百二十六句

白雄句集（下）巻之三

碩布著

秋之部

立秋

梅牡丹萩おとらずも秋のたつ

馬買の小笠に秋の立日かな

はつ秋や片笘かけし舟ごゝろ

草よ木よ今朝秋たつと人の言

日に枯たる軒の小艸もいさわづらはしきを、むしり捨たるきのふは過て、花は覺束なくも

刈草の蘖（ひこばへ）に秋のたつ菴

はつ秋や誰先かけし笘根山

秋立日雨の降けり萱が軒

病後

つれなしや秋立ころのあぶら皐（さう）

山寺の入相の鐘の聲ごさにけふも暮ぬさ入相の鐘、いり逢のかれの聲ぞきこゆる。

桐一葉

鐘の聲かねの聲桐の一葉おつ

一葉二葉のちは桐ともいはぬなり

渡る瀬にあらしの桐の一葉哉

音すなり筧の口のきり一葉

うつせみの空數からは殘りけりきへてあさなき朝がほの花

なにと見む桐の一葉に蟬の売

七夕

七夕や桂に寄ば月落し

たなばたや蚤に目覺て夜の閑

ばせを葉に覺しほどを星の歌

宵〳〵に馴しかこの夜天の川

天の河星より上に見ゆるかな

旅につかれて宵より寢、あかつきの星にかこつ。

なにとなく曇て星のわかれ哉

天の川野末の露を見にゆかん

星逢の濱に杖曳て天の川うちわたりしは、はたとせまり一とせになん。老せまる事このひまにも一むかしなるを

星ひと夜昔にかへれ伊勢河内

萩が花尾ばな葛花
撫子の花女郎花また
藤ばかま朝がほのはな

秋海棠星七艸になどもれし

友なる雨石老人、七月七日の夜身まかりけるよし告こしけるに、なみだこぼれて

星の夜を臨終とや空をうち見たり

露

酒くまむあまりはかなみ枝の露

土橋の露ふみこぼす艸葉かな

草菴閑

露かくのごとく窓より傳ふ萑かな

朝露や砂にまみるゝむら小艸

釣人や聲だにたてず艸の露

むら露に艸のもとすへ見ゆるなり

露ちるや門は萑の籬つくり

題樂山子遺章露

なき友は一とせ先の草の露

いなづまの衣を透す淺茅かな

稻妻

暮ぬとて稻妻落す古江かな

稻妻や曦(しやくり)まぎるゝ宵の門

いなづまの闇にかぎらぬも哀なり

稻づまのおそろしうなる獨かな

いなづまやうしろになせば江に落る

稻妻に匂をつけし魚簗(なやら)かな

稻妻や障子さしたる虚勞病

いなづまや何れ礒家は淺間なる

稻妻やとゞまるところ人のうへ

世ははかな雷光石火酒酌ん

秋風

朝六や誰も通らず秋の風

秋かぜや蔦もたのまず濱庇（六）

吹盡しのちは草根に秋のかぜ

こもり江や嵐のあとの秋のかぜ

みちのく行脚のころ雨足山にて

門に入れば脩遥なり秋の風

初あらし

夜半晴て砂利の高さよ初嵐

流れ出る埴土(つち)水や初あらし

靈奠

みな子なり靈まつ門に草箒

身に覆ふ齢につるゝ盆ごゝろ

魂まつり貧家の情ぞまとなる

旅中二句

山かげや寐ぬをこゝろの魂祭

みの笠や我魂迎ふ宿は是

友なる鷺白が小萩にそへて、莞艸をおくりしまゝに

盆ごゝろうきわすれ草えしかども

魂まつや柱さだめぬ宵の宿

たま待や石町の鐘のひゞきさへ

魂むかへまち得顔なる我人や

市中にあれ是見ありきて

先匂ふ眞菰むしろや艸の市

従弟どち月にかたるや玉祭

先師、品川の菴に在せし昔なりけり。

むかひ火や上總へむけば月が出る

かく古郷をしのばれし事先おもひ出ぬ。我に師あり、親あり。三人をさきにむかふるこの夕や、そゞふく風も身入はべる。去年の秋も旅にありて、みそはぎの一枝を五果百味にかへつゝ、今年も信農(濃)のくににありて、人の田圃の早よれや青そばや、手をれば麻からの箸も有。ちぎれば蓮の浮葉もあれさ、亡魂迎ふる旅のあらましを

しばしもとなき魂やどせ艸の露

迎火はとりわけ娑婆の烟哉

袖や覆ふ雨の迎火見へざるは

むかひ火や父のおもかげ母の顔

土べたに辛子さめけり盆の月
魂むかひこゝろ碓氷を越る夜ぞ
この一句は師が身まかる年の古郷行脚せし反古の末に見へけるを

生身玉

うき我に誰とまつる生魂ぞ
塩魚の塩こぼれけり蓮の飯

燈籠

燈籠みなきへて梢の燈籠かな
露けしや高とう籠のひかへ綱
中庭の簾見へすく燈籠かな
うす紙の灯籠にてらす草葉哉
門守の油つぎたせ軒燈籠

踊

おどる夜を月しづかなる海手哉
ある人のまぎれて入しおどりかな

相撲

嵐雪がその店にしき角力見ん
西東あはぬ角力ぞあはれなる
甲斐なしやうしろ見らるゝ負角力
小手袖の昔にならへ艸角力

花火

知恵もなく舷てらす花火かな
川面や花火のあとの梶の音

淵の松のはづれをこゆる玉火哉
稲妻に花火はしばしたもつかな
夜は秋のけしき全き花火哉

朝がほ

あさがほに瘧のおちし内儀かな
朝がほや垣にしづまる犬の聲
葬に鬢干の魚も見て過ぬ
あさはちのゝ朝がほの花もあたらしき

木槿

花むくげたつ日の早き思ひあり
めくら子の端居さびしき木槿哉

すゝき

雨そゝぐ岡の小家や花すゝき
猪をになひ行野やはなすゝき
空くせや尾花がすへの猪子雲
一むらの尾花これあだし野のありさまなり
七條の僑居に住しころ、先のある
じが植置し籬がもとの風情を

萩

萩がきに萩咲そひしいほりかな
里うとし小萩が上に榾木つむ
もたれあひて一枝うごく軒の萩

芭蕉　露はれて露のながるゝばせをかな
ばせを葉やなにをちからに袋蜘
やれ芭蕉こゝろ此ほどものぐさき

蔦　壁の蔦甲斐なきばかり雨悲し
雨の壁淺茅の小蔦水こゆる
松がねの蔦に身をする猪子哉
美しう蔦はおとろふ人の秋
おなじながら稲葉の露ぞ潔き

稲　稲の花あらしの旬もはや過し
いね刈やのぼれば下る舟よばひ
粒々辛苦の種まく日よりも、雨風をいさびしこゝろ盡しを
かけ稲やあらひあげたる鎌の數

秋草不分題
さや川を下るころ
高水や蘆の白穂に雲おこる
あるが中に野川流るゝ女郎花
菱艸のつんつと秋も二十日たつ

對門人
こと〳〵に我もしらずよ秋の艸
山ふかみちるか凋むか葛の花
きのふけふ葛葉にあらし吹とよ
蘭の香に老も若きも寐覺哉
立出て芙蓉の凋む日にあへり
この秋もわれもかうよと見て過ぬ

古寺見鐘埋地といふ題
大栗や鐘は穂長の地におちし
末枯や坪前栽も世のごとく

きり〳〵す　きり〳〵す鳴止て飛音すなり
雨隣寐て月夜やきり〳〵す
寐もおしき夜や木槲(もつこく)にきり〳〵す
蝙蝠に鳴かはしけりきり〳〵す
きり〳〵す糧(かて)きる嫗にうたるゝな
我見しよ著蕷(いも)(薯)を喰居きり〳〵す

病中
衾(ふすま)ふんで霜の宿せうきり〳〵す

こうろぎ　縣井(あがたい)やこうろぎこぞる風たまり

蛼や一夜宿せし齒朶屏風

虫いろ〳〵鳴夜や宿にいとゞ飛

日ぐらし　とし四十蜩の聲耳にたつ

暮の雨日ぐらしも鳴ずなりにけり

蜻蛉　秋の季の赤とんぼうに定りぬ

蜻蛉に波の蔓艸亂るかな

秋の虫　虫の音や月はほつかに書の小口

草むらも艸むらも虫の詫音かな

鹿道(ししみち)や踏れんとばかり虫の鳴

聲さゆる虫は何〳〵銅(かね)たらい

艸菴閑

我あみ戸籠ぬけの虫をやどしけり

みの虫よなかでも秋のすがた哉

寐られねば、うき事ありて枕にな
づむ。

夜ながさや所もかえず茶立虫

八朔　八朔や旭のいろをたゝへ潮

鷹飼も出したのむの田づらかな

食てはこす世を八朔の日和哉

八朔のさぞ稲雀竹にさへ

野分　小夜中や野分しづまる夢心

水寒し野わきのあとの捨筏

艸の原きりはれて蜘の圍白し

霧　篶(すゞ)のしの家霧のかゝらぬ日はあらず

霧の香や松明捨る山かづら

人戀し杉の孀手に霧しぐれ

秋ぎりや簔きるばかり降しきる

朝霧や晴るに間なき山のきれ

秋の雨　秋の雨あらしは宵の事なりし

蕗の葉や馬もくらはず秋の雨

敷藁や艸もえ枯るあきの雨

白他共白骨

野ざらしを見て通りけり秋の雨

なり瓢さいふものありて、風月の
ため騒人めづる。何ぞ許子に荷瞻(擔)

せん。拭磬室中雨瑟くたる日なりけり。さかづきをひだりに、秋風の鱸魚を右の袂に、そのしたゝかなるを負もて來れる客あり。かならずかの坊にこそさ、思ふにたがはざる括嚢老仙なるを

浅からぬ瓢をいのち秋のあめ

待宵

待宵やひとりしぐるゝ芦屋釜

卜者平澤氏、我軒つゞきに居をうつしたるを

晴曇月まつ宵の卜(うら)たてよ

駒迎

中橋と京橋との間に菴造せしころ

待よひや何れの橋に栞(しをり)せん

貫之(つらゆき)の清水にたてよ駒迎

放生會

放生會このの夜鵜川も月夜なり

松高し月夜烏も放生會

月

嫗捨や松島やこよひ菴の月

名月や眞蛮になりて露くだる

名月や建さしてある家のむき

名月や夜網引かの芝さかな

嫗捨の松島や廣澤や石川の須磨や明石や黒戸のはま、むさし野はほどちかみ、清き渚ははるかなりけり。

名月や眼ふさげば海と山

名月や降らば降とは常の事

雨塘が午明樓上

月ひと夜出汐の森は忘れざる

澪(みを)竹におもひぞとゞく江の月見

長傳老禪師の隱室に遊ぶ

世は八重に捨し主と月こよひ

網引(あびき)せし跡しづかなり浦の月

宵のほどくもりしかば

月にそふ雲のみわたにあらしかな

良夜雨

おもへとや月滿雲の底あかり

多摩の横野ちかきあたりに宿かりて、五歩十歩月のかげわづかにゆ

きゝして

野を竪に野を横さまの月見哉

述懐

今むかし月はしらずも澄夜かな

照月の月やうらみん夜蛤

人〻清光をいふが中

名月や闌て琴かる罔雨

月こよひ爲にとならば竹きらん

（晴）陰清さだかならぬこよひを訪ける

人〻に對して

月に凝月にほどけんこよひ哉

名月や芦のひと夜を蓬庵

舟もよひなど聞へしも、おぼつか
なき空のやがて雨降出ければ、我
菴に頓の客まうけして

爰を舟とおもひ給へや雨の月

月晴なん雨に傘せで客來けり

桑路・山暉同舟、深川五本松にて

秋涼し月見をちぎる松がもと

良夜蝕の夜雨

蝕に雨に二夜の月を年ぞかし

月に影眷かむ駒のつかれかな

畫賛

名月や影四ッ橋の橋ばしら

春鴻が信中へゆくを送る

月嫗拾日出たき影をいのるなり

貞徳老人の天鷺緘の槻に名だゝる
風流にこそ。をのれ病ふにふして
この夜床をはなるゝ事、わづかに
にじり出たるのみ。

まくら肱に膝にせんかな月ひと夜

その名だゝるをむさし野に、そへ
て

をしかけやむさし鐙や月すゝき

既望

雨の聲いざよひの宵寐友あらん

くらふ夜やけしきばかりに月かけし

雁

秋既に鴈の行かふ江の月夜

初鴈やみつよついくら山のきれ

うなひ子どものうた唄ふをきゝて

かならずよ跡なる鴈が先になる

あの男ゆかばたつべし小田の鴈

淺茅が原にしるべありて、そこに

ひと夜を

鴈が啼君が四阿(あづまや)閼屋かな

しら濱や落ざま影を月の鴈

番鴈の面に風ふく芦間かな

きぬた

しるしらぬ里なつかしや小夜砧

相撲取も閑居る宿のきぬた哉

人や住桃のはやしの小夜ぎぬた

遠きぬたこの川越ん橋もがな

淺茅が原

闇き夜の紙きぬたさへ秋ぞかし

早稲酒

早稲酒にものゝゆかしき在郷哉

早稲酒に垂打(たれうつ)ばかり酔てけり

鳥儡

山畑や笊(ざる)もむしろもをどろかし

同じとを添水(そうづ)の縄や人の上

落る日に影さへうすきかゝし哉

日もなげにをどし作るや月明り

虫迯る夜や先にたつ鳴子引

うづら

網の目やうきあかつきを鳴鶉

土佐光廣の畫に

鶉日にうれしさこぼす毳(にこげ)かな

しらず我掴(つかみ)て見ぬを片うづら

鵙

漆掻あたまのうへや鵙のこゑ

藪かげや卵のからに鵙の啼

鴫

鴫たつて暮の焚火のもる夜哉

鴫たつや凡夫家路のいそがるゝ

夕鴫の淺瀬にたてる一羽かな

人稀に鴫啼て我夕かな

木實

毬栗の籆にとゞまるあらしかな

澁柿や背おしぬぐふ山がらす

牛の子よ椎の實蹄(つめ)にはさまらん

枝の柿鳥は追はずさりながら

尾長啼澁柿原の雨氣かな

菌

戸隱山にやどる

澁柿にしのびかねてや猿の啼

茸がりなうらやむ族のつかれかな

紅だけに山口しるき芝生かな

打杖に毒ある菌さくきかな

伐株や米かし水を茸つくり

なつかしや楓茸ふくきのこ山

三味泉に松のかつらや菌狩

露時雨

ものゝ音秋は露さへしぐるゝか

火ともしの何もかぶらで露しぐれ

露時雨しぐれんとすれば日の赤き

秋の魚

山風や世を鯖小家の影ほうし

さだめなや尾つれの鮭の死所

落鮎のあはれや一二三の簗

石おこす人をやうらむ鮖鳴

紅葉

浮雲の紅葉に晴る尾上かな

暮さむく紅葉に啼や山がらす

夕紅葉この川下は薄かりし

伏龜が眼病な

秋は紅葉眼にはれよ霧はれよ

正灯寺

門に入て紅葉かざゝぬ人ぞなき

后の月

不二晴よ山口素堂のちの月

老きはる人は誰ゝ後の月

後の月宇陀のむかしはいく昔

台嶽の鯨音、風翔てたみな歸りぬ。

室巾の甕いまだ盡ず。

閑てひとり見まじきは月の夕殘哉

江都のならはし、かならず蚌蛤な

貢歩行にぞ

はまぐりはそだゝぬものよのちの月

草菴の隣に、黄なる聲のものしり

のくすしをはしける。素堂老人の

ふる句さ、人いはゞいへ。

もろこしの書かた寄よ後の月

後の月わきて古人をおもふ事
へだゝりし人も訪けり后の月

旅中
后の月稲垣低き宿とりぬ

むさし甲斐の根行脚せしころ
山ひとへ二夜の月や甲斐武蔵
秋の夜を小鍋の[illegible]音すなり
長き夜を葉ずれに摺る軒の石蕗
傘に鼠のつきし長夜かな
燃しさる火や網ごゝろ夜半の秋
長夜の礒の匂ひのものにつく
秋の夜や秋のあはれは晝よりも

建仁寺の晩鐘は、子の刻にひとつ
なかぞへ、陀羅尼よみ〳〵卯の刻
を百八の数のおはりとす。ほとゝ
ぎす啼ころすらましてかなしき、
秋の夜や忘れさせては陀羅尼鐘
身ひとつはかねて夜寒の枕かな

臺小夜あらし、うすき蒲團に透す。
うぶ髪の古郷遠き夜寒かな
思ひ佗ころは夜寒の簀垣哉

病中
ちぎれ〳〵ものも思はず秋いく夜
牛の子の鹿見て逃る月夜かな
閑にたへて酒酌ば月鹿も啼
鹿の跡見よや葛葉のうら表
聲くらし晝はわかれて鳴鹿か
行鹿の萩にうたるゝ野風かな
追るゝとしりつも啼か畑の鹿
絶ずしも濱へ下りしか月の鹿

鹿

山家にやどりて
鹿啼てまとがましき旅寐哉

次の朝小萩がもとに杖をたてゝ
曉がたに聞し鹿かも蹄のあと

江都にたらぬものなしといひける
に戯れて

菊

花紅楓江都に鹿啼山もがな

里の女の木履をかしや鹿の啼

僕ひさりは持たれど風塵中に栖く
たるな

宿の菊と名のるよしかな田三反

黄々白々雄東籬

菊咲て花ともいはぬあるじかな

きくの香にそむく心もいづるなり

酒造る隣に菊の日和かな

白菊に北の御園は暮にけり

黄に咲ぬ酒卸ゆく門の菊

殊更に作らぬきくぞ九日なる

酔臥ば何の夢見ん宿の菊

養菊の老はさく來れども、艸菴わ
づかに履ぬぎのみ。この日客あり、
客に對す。

菊提て君老をとふ姿なり

何某の宮・何がしの君より給ふ住
節の菊に、業句へふうすぎぬうち
かけて、なか／＼に隱逸のさたに
はあらず。けふの御遊も思ひやら
れて

曉や菊の露ちる御幸町

この日の菊、瓶に滿りけるをよろ
こびて

艸の戸や隣／＼のはこび菊

勢南一葉菴にありしころ、さかり
なる桃の一枝を惠れつゝ、けふの
花にさしそへて酒酌けるに

桃に菊けふを盧生が現かな

台嶽にて

僧が供地すりに菊を提し

病中

菊や咲我酒たちて五十日

露の音菊の障子にこの月夜

雨蕭々たるばかり、虚明山人に訪
れつゝ席上の作ありて、はからず

も一軸・一瓶の稱嘆にあふ。酬に
と葉なし。薄酒の興をまうけて

菊の酒にちからある日の雨寒し

梅もどき

城うらや小さき牛に梅雄
梅もどき花屋の柳哀れなり
梅もどきある人に花を問れけり

秋の暮

鶴をりて人に見らるゝ秋の暮
口の色や蓬ふかるゝあきのくれ
秋の暮髮生て人に問れける

鳴立澤にありしころ

澤蟹（がに）のあゆみさしけり秋の暮
氣のつけば馬も通らず秋の暮
わけもなや虫歯のおこる秋の暮
大寺や素湯のにへたつ秋の暮
蓬生や人に聲なきあきの暮
語れかし秋のゆふべの籆作り

洛にありしころ、僑居のさまかく
のごしさ、友どちのもさへ申つか
はす。

小柴一把薪盡せし秋のくれ

行秋

行秋に鰷（ちゆ）のしら干哀れなり
ゆく秋やから板敷に風がふく
行秋の草にかくるゝ流かな
ひまの駒西へひがしへ行秋歟
鏡の聲ゆく春よりも行あきぞ
ゆく秋や情に落入る方丈記

已下不分題

秋日和鳥さしなんど通りけり
秋日和しるや河豚（ふぐと）のつれあそぶ
羽をかへす雎鳩（みさご）に秋の入日かな
秋篠に朝風わたる堤かな
いそ山や茱萸（ぐみ）ひろふ子の袖袂

荒藺が崎を過るに

通し鴨入江の秋をまち得しか

觀世音たゝせ給ふ吉見の里を過る
に、さきの年師とゝもに一夜をあ

かしつる宿の柱、處からわきて昔のしたはれ侍りて

宿の秋我泣なみだあやしみそ

淺間山の烟いぶせくも、みやにとがめぬと聞へしにことかはりて山つなみとかや、吾妻一郡の里〳〵馬、人流れうせぬと、追おひに告るものありて、まち〳〵噂こゝろならずも、そこの門人なかぞへて文の奥に

生はとく死は歷て告よあきの水

下毛無畏山普門禪寺朧望

階ひと歩〳〵に秋のけしきかな

籆なるや聖かたしくあきの霜

大家に旅して嘶のわかれかな

嘶のわかれ来し〳〵と老ぞゆく

病中

冬瓜汁空也の瘦を願ひけり

葉生姜や手にとるからに酒の事

九月朔日伊勢御遷宮

今朝の旭はつ日に似たる御遷宮

同四日

奏運神寶さぞ御せん宮

秋詠部三百二十八句

白雄句集　巻之四

碩布著

冬之部

馬菴に春秋菴ふたゝびなりぬ。詞友の丹誠大かたならぬを、この日わが二翁につゝしんで告す。

初しぐれ艸の菴にてはなかりけり
一袋松かさ得たりはつしぐれ
宿の時雨さつさ時雨とうたひけり
はつしぐれたがはぬ空となりにけり

草菴のさまを

しぐるゝや脚折鐺を炉にかけて

軒端の一木、やゝ二とせの星霜を經たり。

松のほど時雨の楯となる菴
行しぐれ簑着て追んおもひあり

宵暗を時雨わかるゝ小舟かな
芝うらや時雨て歸る牛の角
時雨るや舟まつ岸の戻り馬

旅中

刀根の二瀬しぐれわけたる渡り哉
猪に誰かけられし夕しぐれ
しぐるゝや鹿にものいふ油つぎ
椎柴に間なき時雨のはこび哉
見てたつやしぐるゝ櫓角やぐら
琴箱を荷ひゆくなり夕しぐれ

台嶺の鐘新に出來けるに

今年きく上野の鐘も時雨けり

よそ事にのみおもひしが、罪ありて友な　車來が八丈孤島にゆくを送さて

流人船實に時雨て見贈りぬ

十夜

年のほど十夜詣と呼れけり
榾賣家も十夜のともしかな

達磨忌

達磨忌に見やる經師が障子哉
達磨忌や寒ふなりたる膝がしら
達磨忌の口とりは昆布に山椒かな
だるま忌や苔ふみきりし箱根山

初祖正當日、ちかき友を招く。今晩このほかに寒し。

この日數の故人をおもふしぐれかな

芭蕉忌

朝六や啜りあひたる納豆汁
月は花はけふはしぐれの翁哉
つき哥のこれぞしぐれの物語

元祿(祿)の正風を世にひろめおこなはんとおもふもの、われのみかは、すくなからずといへども、ひろめおこなふにたらず。唯この翁にあるとを

霜ときへてきへぬ翁のむかしかな
元祿(祿)や見ぬ世語を降志巻

去來あり、丈艸あり、其角はいが山の嵐をうらみ、嵐雪の旅行には不二をだに得見ざりしと。すへあまんの門葉、葉をあげ葉をのむかなしみを、難波の芦のふしの間にこめてん。おもふにむかし八月今日

しぐれの句もて奠る事幾く年く
時雨行日をおもかげの翁かな

也葉(參カ)禪師の畫に

松島をよく見て何なき翁かな

武野中毛呂の邑長橋叅の碩布が、あるじして蕉翁忌いとなむ日、行嚢に蔵したる遺像を壁にたれつゝ、其德光の一燈をかいたて、謹て諸子と風運をいのる。

擔ひもて毛呂に翁のしぐれかな
靈まつや嘸かたぐへ我翁

こがらし

凩に笠一盞もほだしなる
こがらしや潮ながら飛濱の砂
こがらしや礒の水艸(みくさ)も盡ぬべし

枯野

木枯や市に業(たつき)の琴をきく
こがらしや大路に鶏のかいすくみ
木枯やいづことまりの柴車
猪の篠根掘喰ふかれ野かな
馬附の琴佗(わび)しらに野は枯ぬ
馬の跡枯野の野越いそがるゝ
七ッ子に逢ふて淋しき枯野哉
仕合のうしろ風かな野は枯ぬ
擔ひゆく沽鯛のぞく枯野かな
小ともしや枯野の末を人の行
地車の轄(くさび)ぬけたるかれ野かな
龍膽(りんどう)の何おもひ艸野は枯ぬ

旅寓

艸かれ

艸かれや風空ざまに脊戸の山
いちはやく枯てや折る芦のふし
草かれや鷲の居りたる濱庇
艸枯に雑炊すゝる樵夫かな

落葉

凩の木の葉行さま一葉掴ける
椋の落葉宿に磨ん物もなし
そむき見れば木の葉臺の林かな
夜の音木のは身を刺おもひあり
まかすれば落葉にせまる戸口哉
日に悲し落葉たゞよふ汐ざかひ
うら表木の葉浮べるさび江かな
村落葉鶏ころす人若し
脊につく霜の落葉や朝まだき

霜

此ほどや小蝿なせしも霜の道
何に身を寄すともなしや霜の雁

鶴見橋上

朝夕や鶴の餌まきが橋の霜

兎明樓

海かけて霜の晴見る檻かな
鐘の聲霜を知る夜の眉重き
夕霜の眼には見へで老が膝
燃てたつ燐に霜のけむる哉
鬼歯朶も蘇鉄も霜の旦かな

たゞばたて蓬がもとの霜ばしら

江府にひとりの母をもちて、住よき嵯峨の菴をだに人にゆずり、東道の行かひ身を安ふせしも、ひとへに至孝の爲ときこへし重厚入道や、ことしも來て、夏日のまくらに涼風をまねき、霜雪の床に埋火かきうがち、いたはりけるも老きはろこの度の別れ、

臥て號哭、天に叫ぶのなみだやますさなん。きく我すらむねつぶれ侍る。憶に秋の半にや、姨捨山の月かけて、そり捨し母のしら髪を襟になし、よし光寺へ詣んと、すゞろごゝろのすゞろにたのもしかりしを。噫

日に消ぬ霜とやかこつ母の髪

九月十七日、伊勢の呉扇老人身まかりけるよし、師が五組糸のひとりなるをや。それのみかは、一葉菴の古へ、なつめ菴の明くれ、何か心なき人はしるらめ。十月十七日人くとゝもに追善の席をまうけて

紅そめし糸よかつらよ霜悲し

大順居士を悼て子息に贈る

若き人の經よみ習ふしも夜かな

天明四年霜月廿七日

昨は葛の葉のかつ〳〵枯て、ものこひ鳴の啼かひなきゆふべなりけり。みちのく也蓼禪師遷化まし〳〵けるよし、おもひこまへ〳〵と、そこの門人よりつげこしける。禪師は伊陽の産、芭蕉の翁にゆかりありて、我爲に翁の枕香帯附屬の師、且參禪無二の師たりしをや。

みちのくの空たよりなや霜の聲

毛呂の里はづれに、たがなづけしや、丸木もてかりそめわたたる橋な

がら、琵琶てふ名あるを
橋の霜からげし綱を四ッの緒歟

住吉に詣りて
松風や霜にはゝきして庭神樂

霙

うき雲や霙月夜を鳩の啼
匂ひなき冬木が原の夕あられ
薄暮やあられ興ずる樽ひろい
小夜あられ起見んばかり降にけり
中空に降きゆるかと夕あられ
つぶ〳〵と蕗の葉に降夕あられ

みぞれ

みぞれてもしら〳〵つもる穗垣哉
莚戸やみぞれ一時人こもる
口おしくみぞれにぬるゝ女馬かな

雪

雪がちにみぞるゝ篶(すゞ)の篠屋かな
雪まつや我庭もせの笹(ささ)二ッ
門〳〵や積も定めず雪掻す
雪の聲篠三葉四葉のうごき哉
飛たつは夕山鳥かゆきおろし
かいきへてまたあらはれつ雪の鹿
潮ぐもりみぞれの色を浮の雪
橋の雪舟遣り過し顧(かへりみ)る
雪の松明たとはゞ夜の錦かな
吹こしの雪音たてゝ降夜かな
灯ともさん一日に深き雪の菴
ぬれいろや色なる雪の藪柑子
雪の野に雪をさゝげし荊棘(いばら)哉
雪の人桑たち丈にすゝみゆく
雪うちや七つの年を身のむかし
園の雪門の雪とて見はやしぬ
引すてし車の數よ夜の雪
降晴て雪氷るかに光さす

雪の日芦葉亭に遊ぶ
おもしろや旅に傘して雪の宿
見もしらぬ人にものいふ門の雪
川そひや脊ぐゝまり行雪の人

桐淵氏のもとに、さうなき筆の鑑

あるなや、貞徳翁およびも名だゝる誹士、もゝとかぞへ六そじにあまれり。この日故人を友とするのよろこび、花を吟ずれば香風坐にみち、雪を吟ずれば柳絮袂に入の思ひを

月雪の墨の香ふかみ古人達

百然が子をうしなひしを

兎小雪ふた親のこゝろ察し入

爐　城うらや爐の道に星光る

冬籠　冬ごもり籠兼たる日ぞ多き

冬ごもり瀧水の音夜に入ぬ

捨られぬものはこゝろよ冬籠

思恭亭

金屏に旅して冬を籠る夜ぞ

埋火　埋火や餠の中のほのあかり

火桶　人とひぬ火桶譲りて弱たかん

おしむ夜や埋火くらくいざり寄る

埋火やうちこほしたる風邪藥

埋火や夜學にあぶる掌（たなごゝろ）

遠つ人まつとしき〳〵几秋女、こたびはわざとしも人もて迎ひられつゝ、至りて面するに、きうけのホ付いさせちに、酒ときものすゝめものし、老のいたはりまめなり。蕉翁に園女あり、鳥酔に星布あり、几秋あれど、其師おとりぬるぞくちをし。せめて埋火のもとに翁のゆい章を夜話にとりまじへ

語る夜のつき〳〵しさよ桐火桶

巨燵　人老て巨燵にあれる踵（きびす）かな

湯婆　茶筌髮湯婆たゝきて寐ぬ人か

一夜ふた夜のちはたんほも煩し（わづらはし）

野火留にて

榾　妻も子も榾火に籠る野守かな

をかしげにもへて夜深し榾の節

いちはやくもへて甲斐なし榾の嶌

寒　くらき夜はくらきかぎりの寒哉

くちおしや寒夜にくぢく捨ごゝろ

氷

雷一聲まとしからず寒の雨
あかつきや氷をふくむ水白し
薄氷雨ほち〳〵と透すなり
鶏の背に氷こぼるゝ菜屑かな
氷る夜や諸手かけたる戸のはしり
菱の實の氷つきたる月かいかな

凍

目出たくも酒はこほらぬためし哉
梟(ふくろう)も死なねば凍ぬ梢かな
庭艸のよごれしまゝに風の凍
石に蝶もぬけもやらで凍しかな

冬の月

寒月や白紙の飛狩のあと
寒月や柴ぬすまれし咄し聞
淺からぬ鍛冶が寐覺や冬の月

鉢たゝき

川ぞひや木履はきたる鉢叩
野ざらしに何事いふぞ鉢たゝき

臘八

臘八にせめてうたがふ人もがな

帋衣

二冬やこそぐりなれし古紙衣

ふすま

すさまじや市の衾の風たまひ

網代

あじろ家の人住と知りて月寒し
網代木のそろはぬかげを月夜かな

寐

行もどり寐(ふしづけ)に啼いよめかな

河豚

ふぐ提て竹の中道誰が子ぞ
鰒汁やおもひ〳〵の八仙歌
ふぐと汁ひとり喰ふに是非はなし

冬の蠅

摺墨の香は忘れずよ冬の蠅
冬の蠅貧女が髪にむすぼるゝ
家の蠅凍て死たる骸(から)もなし

千鳥

兵庫の湊にて

酒桶に千鳥舞入あらしかな
遠淺や月の千鳥の舞もどる
あらき波風千どり聞夜の拾心
千鳥きく夜衣にたちし松葉かな
假まくら魚藏(なぐら)に千鳥降がごとし
小夜ちどり人喰犬も吼るなり
羽箒のふいと悲しくちどり啼

冬の鳥雑

鴨啼や浦淋しくもたつ鴫
日に鴫の白沙あゆむ尾ぶりかな
夜の鶴鴛鴦の中よりも哀なり
松二木ひと木にをしのやどるかな
をし啼や一節切ふく痩おとこ
落し來る鷹にこぼるゝ松葉哉
朝川や鷹野の躰を鳥の影
右になし左りにすらんぬくめ鳥
跡先に雀飛けりみそさゞゐ

冬 艸木

住ばかく茶の花垣ぞうらやまし
茶の花にたとへんもの歟寂栞
茶の花や誰が箒せし里の道
茶の花に今般の雉子かくれけり

かな川蓬谷亭
橙や藏にそふ江の寒からず

徐柳菴やぶれたるを、そこの左鄰なるもの、ふたゝびなせしよし告越けるよろこびを

枯しとてからしそ柳春ちかみ
鷄を盗しは誰かれやなぎ
びわの花汝みのるはいつの事
水仙や折葉もさらに濱あらし
寒菊や虱をこぼす身のいとま

かへり花

返り花いはゞ老木のおとろひ歟
かへり花咲よしもなく咲にけり
すかさずや道に酒賣歸り花
十月の櫻つぼめる木かげかな

麥まき

畑中や種麥おろす麻ぶくろ
しるやかぎり麥まく末の汐畑

掛菜

程あらで掛菜にむつぎ千家哉
里佗しかけ菜が下のつり階子
掛菜して世をやすげなる縣かな
みのむしの掛菜を喰ふ靜さよ

不分題
立出て鷄の雛見る小春かな

炭がまやぬりこめられし蔦かづら

引すゝむ大根の葉のあらしかな

おもひしか菴のうしろの瘦かぶら

あるかひも宿は志巻のやれ簾

組かけし塔むづかしや冬木立

から蠣の潮にもどるひとつかな

尭かきや世には出られぬうつほ舟

から鮭の口はむすばぬをならひかな

わだつみや餌だにまかで海鼠かく

冬の夜や鵂の聲をきゝわぶる

替履のうしろさびしや寒念佛

隣家のよろこべるさはぎに

寒梅に比す産聲は男かな

髮置は千代經て白きためしかな

旅中

冬の海見よむさし野の比企野より

旅翁の誹波及すゞ中、猗波及せんのれがひ、旦暮さふ友におつて係す。

ゆへに塵埃をまぬかれんさにはあらねど、市中のすみかいかんかせん。ひさゝせの塵埃今日にいたりて、はゝきはちびれ、さゝ竹のさゝほもこぼるゝばかり、是たが身につむ。積さもまゝ、それがし翁の誹波及せんの願ひ、市中の隱にしあらず。隱にしなきにしもあらずといふ事を、薄酒兩三杯ひさりほこりて

煤掃

掃からにおどろかれぬる菴の煤

歳暮

脊戸に門に師走月夜の米俵

つくろはぬものや師走の猿すべり

かぞへ日を雪間の霜のひかりかな

いろ／＼に追るゝとしをこよみ賣

年のいそぎ齋宮の繪馬やをしの縫

臘月今日、身貧にして濃酒・佳肴なうらむ。

行年やひとり嚙しる海苔の味

賓客あり、酒樽を携へ、我を酔しむ。

我爲には此夜の君子なることを、

酔をともに春待年をおしむ哉

鼠子も春待としの一夜かな

行や年また逢ふよしもうるま人

この句は寛政二年東渡の琉球人歸航のころの吟也。

月雪や旅寐かさねてとし一夜

伊勢年籠

とし籠もみ火の御灯拝みけり

年も良くたかけさそふ松の嵐

冬詠都二百十八句

寛政五癸丑歳十二月穀旦

門人　巣兆謹書　巣兆　秋香庵

下冬二十二大尾

師は日東の青蓮居士にて、一酒百詠と人申ければ、健なりける六十年が程の詠数句顆を思ふべし。しかるをかゝる豆喰鳥が、冬の日のみじかき觜にほく〳〵とのみ拾ひ得たるは、椎の實のしるてなるべき業にもあらねど、ひそかにおもふ事あり。昨日はよし野になど囲へて、一枝を贈りたらんに、誰かすくなしとするや。却てあはれぞおほかる。盃別に記行二卷あり。そは同郷交河が拾ひ得て、遅ざくら咲頃を見しらせんとなり。是又一枝を贈の意ばせにして、渠も此も只豆喰鳥が餌袋に多少をいはざる事を、そゞ〳〵師を自に吟じ花にたとへたるは、門生等がわりなきこゝろ歟。

橘寮　碩布

鴻臺處士

應需書

樗良發句集

天・地

甫尺編

南勢無爲庵のあるじ、しば〳〵洛に竊居の時、このかみ玄化なるものつねにゆきかよひて、主が句を集メ梓にせん事を乞ふ。主の云、我この一筋に心を遊ばし、或年はむさしのゝ露にわけ入、あるとしは越路の雪にさまよひ、興にうかれ時にのぞめば、いたづらに言出せることくさもあめれど、忘れがちにして、まいてとめをける物なく、今はたおもひいでんもむづかしなど、いなみ聞えけれど、そゝなかす事(る)またたびに及べば、是非なく筆を染て、心とめたるは何百吟かいつけくれぬ。時にこのかみまなく病伏て、つゐに身まかり侍れば、おこたりにして三とせを過る霜月、主ち古郷無爲庵に世をさり、今や亡主が記念といひ、かつは亡兄が遺志といひ、やつがれ其しりへにありて等閑ならず。此ことを社中何がしくれがしに告に、草稿を閲して、たれ〳〵のいへる、亡主風雅にとみて世のほまれめでたゝへ、名だゝる透(秀)吟多くは稿にもれたり。これみづからよしとせずして捨たるもあるべく、はたかいつけ落たるも有べければ、ほゐなしとて、人々の口にのこり耳にとゞまれるをあつめ、あるは文のはしよりも拾ひもとめて、そが中三百章えらび、乾坤の卷して樗良發句集と題する事を、甫尺序にいふのみ。

天明辰の春

樗良發句集（天）

甫尺著

春之部

あめつちや實もはへある春の色

相模國片瀨の里に春をむかへ、江の嶋山に神路山を思ひ寄て

ふるさとの伊勢なを戀し初日かげ

むつまじやもろ人競ふ花の春

熊野の岐川菴に春たつ日

山〱やさくらの中の花の春

ふるさしの儘にて脱かへもせぬ衣の袖に、ひがし山の朝日かゞやきて、けふや春の色のきよらなるにおどろく。

眼前に白根を見て春をむかふ

袖口に日の色うれし今朝の春

梅

心よりたつやしらねの春霞

鳥の羽に見初る春の光かな

白梅や春毎に見てめづらしき

谷口やこゝろすゞしき梅の花

むめが香に誰も來ぬこそうれしけれ

匂ひして隣の梅の見えぬかな

暮る日や庭の隅よりうめの影

白梅や響て這入らるゝ男どの

しら梅や垣の内外にこぼれちる

んめの花なかばひらきて盛かな

梅が香や風にみだるゝ糸のどし

梅が香や折とる心はづかしき

門あけて朝から梅のにほひ哉

閑居

梅が香におどろく梅のちる日哉

うぐひす

鶯の古聲したふ初音哉

しのゝめやうぐひす啼て松の風

うぐひすやよきほどヅヽの聲の間

暁に鶯なくや裏のやま
黄鳥の啼やきのふの今時分
うぐひすや春の山里風けぶる
　野外
鶯に山越見ゆる海のどか

柳

すかし見て星にさびしき柳哉
旅人の見て行門のやなぎ哉
花室や柳をもるゝはなし聲
白雲を日當に野邊の柳かな
もつれツゝ見事や雨の糸柳
はからずも見てもどりたる柳哉

霞

うた諷ふ薪士かすむ山邊かな
烏もろとも野に出し我も霞らん
殘月に日のうつりツヽ朝霞
　題混
きのふけふやゝあらはるゝ若菜哉
若菜つみ野になれそむる袂かな
春の雪風ふきあれて日の暮る
山寺や誰も参らぬねはん像
　今江浮に船をうかべて
船に病む我に過たる春の興
　秦夫亭を訪て
風流や窓の白梅軒の竹

春雨

鳥ぬれて猶色ふかし春の雨
夜はうれしく晝は靜なり春の雨
花鳥をおもふや夜のはるの雨
　旅宿
柳をり〳〵疊にふるゝ春の雨
　和哥浦にて
春雨や松に鶴なく和かの浦

山吹

水越して山吹あるゝわたり哉
　湯尾峠にて
やまぶきの花吹とぢよ雪あらし

花

雨風のあらきひまより初櫻
人傳に聞て悔けりはつざくら
花を照らし月又花にくもる哉

過行ば又見えそむる櫻哉
四五日や花に天氣の片心
花ざかり鳥のたよりに曇けり
油斷して花に成たる櫻かな
四方の花に心さはがしき都哉
ちる花やまぎれて見へぬ人の顔
一時やあたら櫻の咲みだれ
引組て轉たり花に酒の醉
見かへればうしろを覆ふ櫻かな
散さくらつらくもまさる見事哉

閑居

しづかさや散るにすれあふ花の音

御室にて

もろ人や花を分入花を出ず

嵐山にて

雲高く風たえて花のあらし山
めざむるや花吹おろす大炊川

草庵に隱吏をさそめて

食をわけて樂みたれり軒の花

前山花見

櫻はけふをさかりにて、麥畑の緑に莚をしき、空豆の中に盃をさゝる。山の半腹には幕をうち、峰には人ゐて人を呼人花をなぐさむならん歟。花の余情をそこなふならんか。

人のあたま花に隱るゝ埜かな

蛙

蛙啼や水玉うかぶ春の水

蝶

たはれ來よ袂に入ん飛胡蝶

野子が妻の身まかりけるに

まぼろしに痩顔見へて梅白し

名のみしりてま見へざる人の悼

逢はぬのみ歟遠き別を春の夢
蝶が身の人よりかなし春のくれ

暮春

花ながら春の暮るぞたよりなき
放下師の眠のひまに春ぞ行

安永七三越路行

こぞしの春は心おさろへ、筋骨か

らみ、たましゐの靜ならざれば、加賀の國山代の温泉にあそばんとおもひ立出る山路さむけれど、やよひのすゑなれば、桃・さくら・山吹など咲みだれたり。

花にこそ命惜けれ春の暮

夏之部

ころもがへ

春をおしむ心の外に衣がへ

ころもがへ鳥はくろく鷺白し

題混

つみ花や刀にむすぶ山法師

うの花の中に崩れし庵かな

世をいとふ我はづかしやかんこ鳥

時鳥

ほとゝぎすあやしく過る初音哉

はつねしてなをまたれけり郭公

時鳥晝の初音ぞうらみなる

ほとゝぎす二聲聞しはつねかな

杜鵑はるかにもどる深山かな

ほとゝぎす啼やちらりと月に移り

松の葉に下腹つくな子規

時鳥聞なをす間に遠音かな

ほとゝぎす曉にせまる高音哉

卯月十日、人〳〵にひかれ三條の西に出はなれければ、あけぼのゝ雲、山〳〵のこしをめぐり、畑のつくりもの、おのがさま〳〵に露を帶ていさぎよし。時鳥しきりにこひしくて

ほとゝぎす野山に聲のすがたあり

比叡山にて

大日枝や禁を横にほとゝぎす

須磨にて

郭公のなみだに曇れすまの月

串のさとにて

北國や雪の中なる青あらし

今江にて

裸身や水鷄を尻に蜆とり
くゐな啼や幽になりし我心
加茂川夜行
水鷄なけ夜の市人酒の醉
夏の日、竹の一むらかこみたるは、いさめざむる心地こそすれ。
めづらしや水鷄の遠音竹をうつ
病中
病中や旅寐の水鷄蚊帳に聞

まつり

吳竹のよゝにあふひの祭かな
中ゝ亭にて
繪にも響くまつり太鼓かな
題混
葵中むすびて古きあそび哉
かりそめに見て過がたしかきつばた
君が代や鉾たてかざるくらべ馬
五月雨や折〳〵出る竹の蝶
波泉の祝事有ければ
ことぶきや縋のひたひの花あやめ

金閣寺にて
こがね鋪て若葉にしのぶ昔哉

燕釣

おそろしや燕つる男妻はなきか

鵜飼

鵜遣ひか見に來し我ぞあさましき
蘭臺子へ留別
別かなし身は五月雨の菰一ッ
留別　三句おの〳〵前書略
まねきあふ扇に寒きうしろ哉
時鳥歟花歟繼踏か此わかれ
わかれ路や今朝短夜の夢千里
佛が原にて
おもかげや佛酒賣苔清水

ほたる

もつれツゝ水無瀨をのほる螢哉
山や水見えてはくらみ散ほたる
宇治川やよしのゝ花をちる螢
入佐山眺望
月にゆかし照射にかなし入佐山
櫻峠ョりのぞみて

納涼

六月や天の橋立しぐるゝ歟

涼風や我にふるゝもおしまるゝ

すゞしさや袖にさし入るゝ海の月

すゞしさや旅に出る日の朝ぼらけ

奥山や月花やかに風涼し

涼しさや松の木の間よりもるゝ風

加茂川にて

水音の袂にこたふすゞみかな

湖水に舟を浮て

すゞしさや船に吹入るゝ波の露

たえて逢ざりし人にあふて

嬉しさとすゞしさに心亂けり

都に庵をもとめて

みな月の朝皃すゞし朝の月

蕭平亭にて

梅が香も月のなさけも夏一夜

羅外上人の塚に詣侍りしに、愛し給ふ蓮はめでたく花咲て、おり〳〵ごとの風のかほりに、いにしへを我にかたるかと見えて

蓮咲て花物いはず泣もせず

夕皃

ゆふがほの中より出る主かな

瓜

水よりもわづかに涼し瓜の色

延々子の旅宿にて

涼かぜの尊き森の宮ゐかな

故山を中庵にとゞめて

稀人の旅姿うれし蚊帳のやれ

麻古庵に添書を貰て

わすれめや扇にむすぶ文の數

百史亭にて

言葉盡て扇に書し雪しぐれ

悼

今更や日にみな月の水寒し

六月晦日加茂の社に詣て、みたらしのながれにおそぶ

名越

泪して命うれしき御祓かな

上の卷終

樗良發句集（地）

秋之部

かくこそとわかで今朝より秋の雲
秌たつや雲はながれて風見ゆる
目に見えぬ秋にこゝろの弱りかな

あさがほ
朝皃や露もこぼさず咲ならふ
あさがほにあぶなき棒の稽古かな
葉の露に朝皃の花のうつりけり

悼

蕣やわづかのうちを日のあたる
あさがほにかはるうき世や七ゝ日

七夕
逢夜とてめでたき星のひかり哉
たなばたや皃の額に笹のかけ
露の間を世にふる星のあふ夜哉
かなしさをかさぬる星の一夜哉

魂まつり
なき父の膝もとうれし玉まつり
たま祭り茄子に見ゆる母の顔

南都より紀の路へおもむく比、旅宿の吟

奈良初瀬めぐりて旅の魂まつり

懐旧

巴雲老人が去年の旅姿、ことし難波の蘆のかげにあらはれ見えて、其魂のかへり来たるなしろ。

魂まつり雪も時雨も袖の露

秋かぜ
あさがほに吹そめてより秋の風
柳にも竹にもよらず秌のかぜ

鬼の畵讃

物のあはれは秋こそまされ
秋のあはれは夕こそまされ

なけ／＼と我をせめけり秋のかぜ

述懐

老が身やかりそめならぬあきの風

題混

すまひ取扇遣ひの見事かな
花桔梗名のみの色を咲にけり
見るうちや風の吹折女郎花
あはれさに折て持けり花木槿

萩

秋はぎのうつろひて風人をふく
戀よりもくるしき萩のみだれ哉
萩が根に月さし入て風ほそし
椽先やよべに見殘すけさの萩
風あれし萩にうれしきかぎり哉
吹分るひまもあらしの庭の萩

むし

虫ほろ〳〵艸にこぼるゝ音色かな
むし啼や木賊がもとの露の影

燕々亭にて

八朔

八朔やかたびらさむし酒酌む
あはれとも見るにたえたり三日の月

良夜

嵐ふく草の中よりけふの月
名月や只うつくしくすみわたる
雲を拂ひ雲にたゞよふ風の月
たのしみや松にかくれしけふの月
うらめしきまでに月すむ今宵哉
山風のあるかなきかに今日の月
年〳〵にこりて月見ぬ今年かな

畫讃

狩くれて馬のうへなる月見哉

石山にて

ことなるや實石山の秋の月

安宅の關は名のみして、海のおもて十余町を望む。

月のみぞ花の安宅は海の雲

更科にて

姥捨やあだにかなしき夜半の月

十六夜

いざよひや闇より出る木々の影

後の月

後の月水よりも青き雲井かな
見事なり薄雲はしる后の月

雁

はつかりや月のほとりより顯るゝ
雁金のかさなり落る山邊かな

鹿

うどん焚室や雨夜の雁の聲
落もはてず迷ひめぐるや雨の鳫
　　親しらずにて
荒磯や初雁渡るしほけぶり
　　湖水眺望二句
夕ぐれや露にけぶれる鳰の海
山も岡も芙蓉に露を置がごし
夜もすがらなかで曉の鹿の聲
おのれのみとかなしく鹿の嘯音哉
朝しかや樫の林を出るこゑ
秋の夜や時雨る山の鹿の聲
　　題しらず
切賣の鮫のあたひや大唐籾
籾だねに余所へ出かけの指圖哉
　　篠原にて實盛の魂をなぐさむ
命かな露よりもかろく月よりも白し
　　おなじく兜を見て
骨きえてかぶとに殘る烌の聲

菊

　　井波なる臼浪水
世に古し薄が中のいづみかな
　　忠度の孫にて
時なれやかほちやの煮入なみだなる
露の菊さはらば花もきえぬべし
しらぎくや心あまりてねたましき
夕風やさかりの菊に吹渡る
花と花さはりてきくのこぼれ哉
物入や屋形つくりて菊の花
白ぎくやあたりも倶にうるはしき
青竹にかゞやく菊の盛かな
菊の花こゝろ憎さに手折けり
　　おもふ事ありて
露ちちれうきがうへなる野分の日
なま中にしらでもよきに秋のくれ
　　斧亭にて夜話
ながき夜や眠らば顔に墨ぬらん
　　牛化房なたづれて

秋のあはれあるじはうらみ我は泣

越中の國井波なる所に浪化公、芭蕉翁の剃髪を埋み、碑を建給ひ、其角筆をとりて、はせを翁と書たり。なつかしき事のかぎりなければ

野ざらしの露よしぐれよ剃髪塚

おなじく此地に遊ぶ比、長兵衛庵より眺望して

時雨來よ花も紅葉も有磯海

楚丁亭にて

したしみは花八重菊のかさね哉

龍石にわかるゝとて

昨ぞかなし後の世の友に契り置ん

紅葉

見めぐるやもみぢ靜に色まさる

谷川や紅葉の絶間水寒し

落葉さへ紅葉の山の高雄かな

黒部川をのぞむに、愛本の橋は兩岸の巖より刎上て高き事數十丈、川水白波をたゝみ、早き事限なく、らまし、音は心を驚かす。水烟四方に起て、雨中の雲に交り、物凄くもいさぎよし。暫橋上に佇て

橋高しもみぢを埋む雨のくも

あらし山にて

花や紅葉松も常ならず嵐山

大炊川にて

暮凄し金氣あふるゝ大ゐ川

北國病中吟

骨をたゝき肉をふるふか北の秋

詩雀亭にて

まじはりやもみぢ照そふ小盃

留別

爰で死ねといへどもきかず行秋や

洛西にさまよひあるき秋をおしむ

嵯峨にさへとゞまらぬ秋の行衛哉

老懐

秋のすゑ身もふるはれて虫の聲

行秋やあはれ非情の草も木も

冬之部

しぐれ

秋のあはれわすれんとすれば初時雨
はつしぐれやむやしばしのから錦
降そめてふりもさだめずはつ時雨
此ごろは野邊にまたるゝ時雨かな
吸物を出せば晴行しぐれ哉
ゆふべより降まさりツゝ小夜時雨
立臼のぐるりは暗し夕しぐれ
雨にわかち風にまぎるゝしぐれかな

旅行

きのふけふ我身になるゝ時雨哉

題混雜

十夜とてかしこき法の敎かな
あきなひや店へ酒出すゑびす講
はつしもや飯の湯あまき朝日和
霜の夜や鴫の羽かき尙さむし

冬ごもり

風あらき曉よりぞふゆごもり
夜〳〵のおもしろければ冬籠

はせを忌　三句

旅すがた時雨の鶴よ芭蕉翁
はせを忌に薄茶手向る寒さ哉
木がらしに古人荷葉の夢さむし

ちどり

消もせん有明月の濱ちどり
小夜千鳥羽風もいとふ聲の瘦

須磨にて

一夜聞てほゐなきすまの千鳥かな

明石にて

日は落て波をあかしの夕時雨

鉢たゝき

まぎるべき物音たえて鉢たゝき
兄弟歟同じ聲なるはちたゝき
はちたゝき少し踊て廻向かな
さゆる音の雲井にかよふ鉢叩

寒苦

霜さむや小鳥の足も地につかず

雪

粟津原馬上の吟

こがらしや日も照り雪も吹ちらず

よきほどを越えて雪ふる夕かな

雪ふかし野寺の鐘の聲のみに

白ゆきやあまり深さにのどかなる

枯杉の赤葉さまくに雪うすし

立山眺望

立山や雪に分入鴈の影

立やまの雪白龍ののたり哉

富士山眺望

白妙や雪もろともにふじの雲

大嶋に庵を結て

心細し雪やは我を降うづむ

那谷寺にて

なた寺や池の毘沙門松のゆき

留別

雪によばふ我聲跡に屆かし

戀路のあはれなるも、貧のせつなるも、やまひのくるしきも、皆まとを題のひとつにして、病て死せざるは、戀て逢ざるに情ひさしく、加茂川の堤の家を賣たる貧女も、やまひにふせる武士に異なる事なけれ。予このごろ此ものに犯されて、これが爲にせめをたのしむ。

海老燒てやまひに遊ぶ寒の中

寒月

あかるさや風さへ吹ず寒の月

大日寺にて

寒の月川風岩をけづるかな

角立て居風呂のぞく雪の庇

太中蓰を送る

春來よとあふさか山のわかれかな

年暮

病中

月雪や酒を冬瓜に腫やまひ

とし忘れ廣野の鶴を見に行ん

ゐねぶれば誰やら起す年の暮

うき事はしらじ師走の鳶烏

白雪のつもる思ひに年くれぬ

我風狂いたづらに年くれて、軒の梅さへわすれがちたり。

ゆかしやと見れば見えけり除夜の梅

下の巻終

句々三百詠は、亡師樗良叟のほ句なり。いたづらにならん事をかなしみ、甲辰の春玄化堂天つちの集を著す。けにや此法師古里無爲庵をいでしより、大嶋に九尺四方のいほりをたて、月雪の夢をやぶり、はた南紀あたしかのさとにあだなるすみとをまうけ、二また庵となむ号。爰に三とせ四とせの春秋を過し、いづこかつゐの住家ならんと、この庵をも藁沓の如くすて、夫より洛木や町に寓居して、浮世の嵯峨の花もみぢをながめ、世を宇治川の螢見に、よしの丶花のちるかとあやしみ、みやこの雨にうどん焚夜の雁を愛し、粟津の旅行に木がらしの姿をのこし、立山の雪に西行の魂をさぐり、雨にあらしに心をあそばし、句はあだにしてあだならずとやいはん。只情をかんじ實をうつし、利をいはず巧を求めず、艶をきらふ。花鳥にたはれては、句のおくれん事をなげき、萩薄に姿情のまさらん事をねがふ滑稽の道人なりけらし。嗚呼かりそめにいひ出せる平話さへもおかしかりし。まいて吟章におけるをや。是に洩たるもあまたあるらめ。されど、ものは只と丶なふらざらんこそよけれと、此叟も常につぶやけるをもて、もら丶してんやと、予同友のゆかりなれば荷擔して捆筆をとる。なまじゐにいはゞ拔舌の罪ふかく、かつは高風にたがふなめれば、三ツ二ツをあげて跋書す事しかり。

城南春風亭　秦夫

青蘿發句集

天・地・人

玉屑編

玉ちはふ神ひじりの大御代ときより、敷島の道ひろく君が御代〳〵につたはりて、とのみやびたる中より、たはやきぶりのたはやすき道なり出て、上がかみゆ、下がしもまで、心ひとしく芭蕉葉の風にうちなびきて、人のこゝろの和がざる隈はあらじ。爰に亡師青蘿、そこの山あひかしこの浦軒に、杖を曳ける事あまた度なり。其道すがらあめつちの心のまゝなれる句の、麻もさわたもあまたの夏冬をたちかへつゝ、ふみのはし〴〵に聞へけるを、あが友淡路國なる柴山・青岐・寫凉がこゝろを同じうして、まめに書あつめし草稿あり。亦居士をしたへる人〴〵が玉箱におさめ置るあり。あるは滄海に網して拾ひ得たるあり。是をつらねて六もゝあまりのほ句あり。そを杜魚の爲に失はんもほゐなく梓にのほせむと、姫府の社友玄駒ひたぶるにせめけるを、玉の緒のみじかき心にもあらでうち過ぬるが、(栗カ)桑の枝葉につながれる人らが、庭のをしへのたづきともなさまく、ことふりをもせず、四つの時の季を分、あるは神・釋・戀・無常・名所・羇旅等のそのもの〳〵にあたれるを、あらかじめ部をわかち、栗のもと青蘿ほ句集前の巻とし、玄駒がになき心にまかす。猶此ふみに洩ぬるほ句、野に山にひろひ得たる人あらば、必風のたよりに告しらせ給へよや。のちより〳〵几上にあつまりなば、志し深き人いできて、あとの巻となさむとおまつほの浦の藻くづ書あつめるものは、後の栗本玉屑觀應

寛政八年孟八月 〔玉屑〕〔無爽菴〕

序

世に得がたしとこのめるものは、おほかたはまことなき事にて、つばめの巣に貝を求るごとく、火ねづみのかはきぬも、めら〳〵とぞ焼ぬべき。たゞいつはりなくて、くちずたえせぬは、こと葉の道なれとて、青蘿句集をあめる人あり。此叟世にありし時は、ひたすら芭蕉の方寸にせまり、その實をまなびうつせると、氷と水晶とのごとし。かの晋子が申せしやうに、時代蒔繪といふものゝ、年へ

てちそこねやぶれざるごく、風情の實を載せる言葉は、なき世のいまになりても、かく天に求め地に拾ひて、やがて人のたからとなれると、ありがたきわざなるべし。これをよみ是を見ん人、また叟がまどの心をつたへ、はがひの中の玉を得、かはぎぬの火にいりても燒うせぬさかひに至るべきものをや。此集のはじめに一語をそへよと、遠き國まできこえこしける、いまのくりのもとのまどの心をあはせて　かつしかの野人

贅亭成美誌

四山　成美

播姫府玄駒書　玄　駒

雲水の吾みかのしは播磨の國に、みやびのまじらひ深かりし鹿兒のわたり幽松庵のぬし青蘿詞宗、五とせあとに世をさりぬとなむ。こたび同國姫山なる玄駒のもとより、彼叟が生涯の發句をかいあつめ、とぢぶみとなし、此すゑに詞かいつけよと、吾が長門の國に卓錫の日、はろ〲と贈りこせり。是を閲せるに、心崑崙の麓をめぐりてしら玉を拾ふがごく、大液に舫を浮めて黃鶴の麗はしき聲を聞にひとし。誠や夢に白鳳を吐、金鼇をのみし人の遺章とやいはむ。今更むかしを思ひ、藻にすむ虫のわれからといなみがたくて、へみをゑがくに足を添るのあやまちもかえり見ず、みじかき筆を採りぬ。これを櫻木にゑり殘さむは、蕉門の正風を學ぶもの丶ひとつの梯ならむか。寛政七ツのとし花見月三日夜、東都行脚花縣、赤間關田東菴のともし火のもとに書。

栗本青蘿發句集（天）

春之部

歳旦

曙や淡路を春のしなさだめ

初日かげ人に先さす惠かな

誰戀ぞ田毎にみつる初日かげ

予が栗のもとなる三眛庵な、尾上・高砂のながめ近きかたへうつして、香松庵とも呼そめぬ。わきてひがしのかた打ひらけ、春なむかふたよりも、先、淡路島な心にとどむれば

青海の春よりうつる草の庵

關東の古郷もわすれがたく、關西のしたしみもわすれがたし。光陰我おもふ事なきまたず。

鹿兒に十とせ綱手にかへす今朝の春

蓬萊に眼をかよはすや淡路しま

散ればさく春に今朝逢ふ命かな

鹿兒のわたりの綱手に引とどめられて、この里にかくれすみけるも、はやはたとせ近くなん侍れば、替らぬ春なむかへし事のうれしさな、先なきちゝはゝに告奉るさて

蓬萊のうへにやいます親二人

初日影鶴に餌を飼ふ人は誰

薄雪の戀寐かなひて花の春

世ないたふ身は我としなさへわすれたりしに、ある人より法師は初老のはるに逢ひ給ふさて、衣服なご惠まれけるに、さもありやさて

十德のうしろに來たり今朝の春

題若水

草庵に梅あり、梧堂あり。うめは春のこゝろな句はし、梧堂は薪水

に信なつくす。

若水を汲につけても庵のはる
明星の色を外山のはなの春
蓬萊やおのころ島をつみ得たり
まめやかに是も春たつはね釣瓶

立春

春たつや楢の雪にひかりさす
華に先二日ちかよる二日かな
雪を出て雪よりも青し松の風
三反の田麥みどりに庵の春
先春に空はあは雪梅つばき

かの極樂といへるは、杉葉立たる又六が門、と詠給ふもいと尊し。

子日

酒屋出て我は杖引子日かな
子日せむ鶴見る岡のとまりがけ
引添て杖にもむすぶ小松哉

人日

七種や七日居りし鶴の跡
七草やなくてぞ數のなつかしき
なゝくさや明日は野寺の初藥師

薺うつ遠音に引や山かづら
薺けふ六葉七葉にもさかへけり
薺つむ野や枯荻もおもひ草
まな板にうすくまかるゝ薺かな
薺うり我子になれよ錢くれん
薺うつさとを見るかに小田の鴈

若艸

若草やあるがなかにもしら菫
春もはや十色にあまる小草哉

左義長

おどろかすとんどの音や夕山邊
正月の榮花にほこる爆竹かな

梅

しら梅やたゆむあらしにほの匂ふ
梅さくやうときもおりに小盃
宵闇の名もある里かうめの花
梅がゝのちかまさる時薄月夜
あざやかに一輪づゝやうめの花
白梅や骨正月の塩かけん
節の日やあらかた開く梅の花
草庵の東隣は野梅かな

四方より道踏よする野梅哉
夜あらしの皆花となる野梅哉
能なしも寐ぬ夜がちなる梅の月
月の梅匂ふは花のひらくかも
梅をしたふ其夜の夢や嵯峨のあたり
闇の梅日頃の辻子にたもとほり
やり梅の流れし先や淡路島

柳

水の氣の取付初るやなぎ哉
けふ既に寒皆盡る柳かな
山かづらかけて遠目の柳かな
打かけて月をゆるがす柳哉
ひかりさす闇のあらしの柳哉
月もやゝほのかに青き柳かな
月花の外をおぼろの柳かな
青柳や折らんとすれば枝もなし

芹

淺澤や雪かた〳〵の芹の花
消る雪の沫やとゞまる根白屮
我影の白髪をつまむ田井の芹

鶯

天地に今朝うぐひすの初音哉
初音して鶯たれをおもひ屮
うぐひすの木瓜もいばらも初音哉
鶯の池をかゞみにはつ音哉
うぐひすのあたり見廻して初音哉
黄鳥の音や雪の戸の玉箒
朝風呂にうぐひす聞や二日醉
黄鸝にさげものやらん屠蘇俗
うぐひすの茶入を覗く水屋哉
鶯の聲白梅歟紅梅か

白魚

しら魚は梅につれだつ盛哉
餅の雫や春の薄氷

春風

春風にのべふすいろや淡路島
散のこる葉を春風のもみぢ哉
あるが中に蒟蒻玉も春の風
春風にさかふて濁る野川哉

春雪

春の雪梅には深きけしき哉
降込や棚なし船に春の雪

山茶花のおはりしほらし春の雪
梅が香のつもれる物か春の雪

雪解
雪とけてみどりの色や圃土。
月けぶりて夜もとけ行野川哉

凍解
凍とけや野づらに高き雀の脛

陽炎
陽炎や春の汗干下小袖

西行庵にて
かけろふを手に取ほどや柴の庵

霞
行さきや限のあたりなる野の霞
高根まで青麥の世や夕がすみ

涅槃會
ねはん會や散飯に誠をなく烏
傾城の拜んで笑ふ涅槃哉
幾春の繪の具や兀し涅槃像

春月
淺川の末ありやなし春の月
野は燒きて雲に雪もつ月夜哉
春の月さすがに障子一重かな
雪のまゝに竹うちふして朧月
梅散りて古郷寒しおぼろ月

藪入
藪入やつゐでに古き墓參り

出替
出替の笑にふくむなみだかな
養父入やうきを五日のわすれ草

雉子
雉子啼て跡は鍬うつ光かな
已が音に驚き顔の雉子かな
子をおもふ聲とやけはし夜の雉子
麥によき雨をきゞすのうらみ音か

春鴈
春の雁立さはぎては日をおくる
行こゝろさえかへる日や小田の雁
なき友を算へて立か小田の雁
鴈人に馴る兒なるわかれかな

雲雀
時雨ほど聲ふりかゝるひばり哉
はなのさく草は巣にせであげ雲雀

蝶
蝶ねぶれ薄衣きせん日の最中
風の蝶きえては麥にあらはるゝ

蛙
田の水の高ふなるかも啼蛙

田螺
からすきにからき日見たる田螺哉

猫戀
のら猫の畏にまたるゝ戀路かな

角はゆる迄啼つらん猫の戀

菜の花

雨に暮るゝ日を菜の花のさかり哉

菜のはなを見て來て休む野寺哉

よしの出てまた菜の花の旅寐かな

雛

はなさけり古きを祝ふ雛の宿

雛戀ふる親のこゝろや夜の鶴

汐干

遠島や汐干にかける牧の駒

うれしさについつかれたる汐干哉

網のうちな、智あるはされ、おろかなるはとゞまれ。

かしこくて蟹は遁行汐干哉

春日

春の中のけふは誠のはる日かな

鶺鴒のみだれ尾に引春日かな

春雨

降ごともしらで暮けりはるの雨

はる雨や接木見に行園の奥

落つみし椿がうへを春の雨

春雨や茶に呼東舍と西隣と

寐つかれて月のはる雨見る夜哉

はる雨の赤兀山に降くれぬ

桃

色深し今年よりさく桃の花

桃山や行盡されぬおぼつかな

櫻

月も山も共ほとり也はつざくら

此景色誰三日月のはつざくら

寺も世をたのむこゝろや八重櫻

曙を深くかゝへて山ざくら

人をまたで散るはさくらの誠哉

松の奥うす〳〵暮る櫻かな

さくら見るけふも時雨のやどり哉

定なきをさだめ、窮りなきをきはむ。

定なきをさだめて散る櫻かな

花

春の夜のみじかきは花のあたり哉

浪の間はさくらうぐひや岸の花

散る花や夢かとぞおもふ袖袂

はなの中折〳〵曲る小坂かな

花守の折らるゝもしらぬさかり哉

ひや／＼とこゝろ静りて夜のはな
ぬれ雙に落花をかづく山路哉
盃の流るゝはなの絶間かな
散はなによき人がらや黒小袖
散花のはなふり起る嵐かな

須磨・あかしのはひわたれるほどを、舟にて過るとき

花曇　潮曇あわぢのさくら散やせん
満汐に持あふはなの曇かな

棣棠　山吹や池をへだてゝ入日さす
山吹も世につながるゝたぐひかな

春水　淺茅生にめぐり初けりはるの水
すゞりにも茶にもうれしや春の水
庭掃かぬ我名やたてそさるたづま

殘春　柳芽をふきて又一日はたひら雪
春秋も常のこゝろを松のはな
あまのりは江戸紫の匂ひかな
夕汐や月踏碎く小貝取

如月に取つく野邊の景色哉
きさらぎや山茶花寒きわすれ花
井のもとも菫薺のはる邊哉
はるの山何事もなきながめかな
雀子のもの喰夢か夜のこゑ
はるの海遊びわすれて啼鳥
いかめしき聲や日すがら花の虻
おもしろふなれば別れや桃さくら
野の梅の咲よりかよふ田打かな
門なみにさくや山家の梅椿
はるの海鶴のあゆみに動きけり

暮春　からし菜の花に春行なみだ哉
行春や飛かふ蝶の心はしらず
わざくれに酒のむはるの名ごり哉
ゆくはるは麥にかくれて仕廻けり

夏之部

更衣　君が世の治まれるけしきは、何事

につき侍りても、難有さいやまさ
れるを
鎧着る世ならばいかに更衣
蝶ひとつ竹に移るや衣がへ
あさ兒のはやおもひあり更衣
更衣うすき命を祝ひけり
綿ぬきて水になさばや花の夢

佛生會
散けしの中に生るゝ佛かな

奉扇會
摘ずとも花あり香あり白扇

牡丹芍藥
はなのうへにこゝろ皆還牡丹かな
芍藥はかよはき花のうてなかな
袷着て牡丹にむかふあしたかな

芥子
色罌粟の巧みに見ゆる蕾かな
白芥子や美人かくるゝ草の庵
しらけしの崩るゝ程の天氣哉
白罌粟に照りあかしたる月夜哉
たがき日のあたりな芥子の一重かな

杜若
杜若ものゝすゞしきはじめ哉
鴛鴦のかざしの花かかきつばた

卯花
風寒し卯の花原の明くらみ
卯のはなのさなみに登る澤邊哉

杜鵑
花の夢の薄雲さらでほとゝぎす
我宿の山梔子しろし杜宇
夜の一聲こゝろにをくるほとゝぎす
蜀魂なくや矢をつく雨の中
千度なけば憂を添るぞ郭公
横雲に耳つけて寐むほとゝぎす

閑居鳥
衰ふる春より啼ぬかんこ鳥
日たゞ啼を日たゞ聞身よ鳴鳩
山一里われを送るか諫鼓鳥
はなのあと枯よと啼歟かんこ鳥

菖蒲
あやめ草綾の小路の夜明かな
戀のはしもかくるやあらむあやめうり
あやめふくけふもはなより草の庵

田植
植つけし夜は三日月の門田かな
松かげに遣〳〵かゝる田うへかな

青田

覺へんとすればとぎるゝ田唄哉
夜は君が手枕の手を田植かな
我庵はひる寐する間に青田かな

螢

藪かげやさゆりの花にとぶ螢
月の夜は地に影うつる螢かな
瀨の螢水を羽音にみだれけり

竹裏舍にて

笹の葉の夜散ほどや飛ほたる

鵜

鵜のかゞり消て曉の水寒し
晝の鵜の現に鳴か籠のうち

あら面白の川なみや、あらうの世の中や

世わたりや鵜繩の上も十二筋

水鷄

聞うちにすへまぼろしの水鷄哉
おもしろやふりむく鵜あり行鵜あり

瓜

あだ花の猶なつかしや瓜のはな
瓜の葉の瓜をつゝみて冷しけり

納涼

すゞしさや八十島かけて月一つ
松一木馴てすゞみのたよりかな
舟に病みし身をうし窓の夕凉
笹折て赤蟹なぶる夕すゞみ
すゞしさや惣身わするゝ水の音

道をあらそふは隱者のたのしむところなり

雜夏

三つよれば其間やあらん蝸牛
我隣蚕に交る麥の秋
角あけて牛人を見る夏野かな

誰知盤中餐　粒々皆辛苦

田中取うた泣にはまさる夕景色
鍬を取業はこまかよ豆のはな
葉には其うらみもあらむ葛の花
若竹に月のうすものかづけけり
口なしの淋しう咲り水のうへ
夏やみやこゝろをすゝむ鉢の菊

飲酒一盃の雜覺、去此不遠の淨土たしれり。

寐ごゝろや萠黄の蚊屋の薄月夜

暑き日や捺子つまむ山のかげ

ゆふ立や秋を催す桒ばたけ

萍やはづれては又月のうへ

蚊一つに身をくれかねて宵寐哉

人は皆横に目がつく横に行芦間の蟹のあはれ世の中、とかく貴き御製、あへて人のなしへさなるは、蟹の事なりける事を

よしあしの其まゝすぐし蟹の穴

秋近し露に溢るゝつゆの月

李雨のぬしが初旅のいへづさゝて、よしの山の花屑・伊勢の濱荻の葉など送られける。さすがに風雅のしれもの、かの富てつたなからざるの人か。

狂へとて夏の胡蝶に花の塵

栗本青蘿發句集（地）

秋之部

秋

ぬけて行茅の輪の先や夜の秋

松の蟬啼つゝ秋に移りゆく

あなめ〳〵秋風たちぬ竹婦人

草の戸の見事や今朝を露の秋

秋たつや人さめわたる中の庵

蚤ふるふ袖行合ぬ今朝の秋

夏痩のふし〴〵高しけさの秋

起臥に立添ふ秋歟庭の中

土用より朝皃咲て今朝の秋

七夕

盡ぬ世のためしを星の逢夜哉

草の戸の年のわたりや萩の反

海士が子の乾かぬ袖をほし迎へ

曉の簗に落けり天の川

魂祭

空蟬を見るにも星の別れかな
賑しやよき世の人の魂祭り
ほし合のうらさびしさよ魂まつり
なる〻間のなきもはかなし魂祭

野分

芭蕉蕣の野分見に來よ坊が庵
岩角をふみかく駒の野分かな

相撲

母親に見送られけり角力取
勝角力花も咲べき男かな

秋風

あぜ豆の黄ばみ初けり秋の風
一さかり萩くれなゐの秋の風
朝兒も實がちになりぬ秋の風

稻妻

いなづまのむら穗に通ふ田面哉
稻妻や今朝より森の薄紅葉

露

風の間や置ならべたる草の露
大粒に置露寒し石の肌
朝兒や淸きかぎりをさき出る

蕣

蕣や横日すゞしき花の上
梅の後蕣のはなの一輪ぞ
あつき夜の朝兒の花に明にけり

蘭

蘭の香も闇を破るに似たりけり
らにの香やをとろへ初る日の移り
蘭の香や糸なき琴のしらべより
らにの香や碁盤の面打かすり
蘭の香は薄雪の月の匂ひかな

女郎花

霜にそむ秋に逢けり女郎花

蕃椒

兵の矢先に似たり唐がらし

秋蝶

秋の蝶いかなる花を夜の宿
しら〳〵と羽に日のさすや秋の蝶
秋風に白蝶果を狂ひけり

秋蚊

秋の蚊やおのれつらしと聲もなく
むしの音やこぼれもやらで萩の上

虫

我夢の化してや床のきり〳〵す
虫の音に折〳〵わたるあらし哉
聞となく耳に置けりきり〳〵す
棚もとや處もかへず蟋蟀
忘想の寐覺預けんきり〳〵す

萩　月

松むしよ美人の袖に落て死ネ
吹分る中まで萩のさかりかな
暮るゝ間を錦繡に染ん露の萩
しら萩やいざよひの間を散初る
月と我中に今宵のけしき哉
我門を踏出すよりけふの月
こよひ更て月のこゝろを離れたり
花ほとゝぎす今宵の月のほとり也
名月や地に引替る天の川
名月や宵は夜中のひとむかし
名月や松にかゝれば松の花
名月やふくるにつけて泣上戸
坐に老し人花咲て月見かな
筆とりて四隅にわかる月見哉
松風の寐覺ばかりか軒の月
有はかたりなきは數添月見哉
雑水に月のあかりの榮花かな
癖になりて寐られぬ月の夜頃哉

天明らかなる年にあたるといへども、巳午五ツ六ツ未の春に至れる迄、風雨のいくたびか人のこゝろを驚し、五穀も是が爲に實をむすぶ色うすく、高きいやしきに及べるもいと謙すしく、すでに下れる世ともなりなんとせしに、久方のあめの惠み、夏夕立に秋早して、殊に月見る夜ごろは田毎の三ふし草みのりて、いとめでたきけしきにめでゝ、芝駒・洸洲あるは東圃・淇筍・黒寒かいわたこゝろを船につみて、あら井川のながれの上に今宵のかげを待ゐたり。予も淡路の法師を携へて此船の客となりぬ。

稻の香の滿るを今宵月の雲
十六夜や闇かと見れば花すゝき
いざよひやすこしはかゝる柿の澁
旣望は葉がくれに見る蘭の香ぞ
いざよひや芭蕉の上は皆月夜

居まち月や友ます庵の夜の庭

秋雨

秋の雨月に對して猶悲し
秋雨や一羽鳥の歸るそら

砧

ともし火に風打付るきぬた哉
うき身うつと人や聞らん小夜砧

蕎麥花

此頃の銀河や落てそばの花
月を實にむすびやすらんそばの花

雁

春秋と移る夢路や雁の聲
羽音さへ聞へて寒し月の雁
いくつらも雁過る夜となりにけり
おもひなくて何やら雁のなつかしき

鶉

栗の穂やひとほしづみて啼鶉

鹿

鹿の聲高根の星にさゆるなり
寐時分や戸に吹付る鹿の聲
町中へよごれて出ぬ戀の鹿
角の上に曉の月や鹿の聲
驅やちかふ宵曉の鹿の聲
そけ〳〵と痩し皃なる朝の鹿

菊

三日月にかいわるきくの莟哉
憎きまで菊に戀ある隣かな
雨の菊かくれ過たるけしき哉

市中閑居吟

菊の香も市のへだてや下地窓

後月

曉はまことの霜や後の月
後の月蕎麥に時雨の間もあらね

尾花

秋の日やうすくれなゐのむら尾花
既になき色を秋ふる尾花かな

鷄頭

鷄頭の黄なるも時を得たる哉
鷄頭や倒るゝ日迄色ふかし

秋の暮

戸口より人影さしぬ秋の暮
柱にもこゝろもよらず秋の暮
秋の暮誰まことよりさびしきぞ
ながむれば海また海や秋の暮
秋のくれこゝろの花の奥を見む

雜秋

中〳〵に月は入日の秋の山
おそはれし夢よりつのる夜寒哉

秋風をあやなす物か赤とんぼ
身にふるゝ秋は露哉小萩かな
引かひもなきや鳴子のばらゝ黍
落栗や翌の命も山の奥

紅葉

水よりや染けん岸のした紅葉
見るが内に霜置月のもみぢかな

嵐山にて

山も川も谷もあらしの紅葉哉

暮秋

秋の月五ッよさかけて鳴ちどり
うつりあし冬の來ぬ間に今朝の霜
せまり行秋や晝なく岡の虫
行秋や雲はあはれに水はかなし
風たへて小春ごゝろに秋くれぬ

冬之部

竹裏舍にて

時雨

初しぐれ自在の竹に吹かゝれ
簑むしの死なで鳴夜や初しぐれ
梅擬小粒、に赤し初鐘れ
しぐれけり土持あぐる芋がしら
二夜三夜寐覺とはるゝ時雨かな

こゝろおさまりて時雨聞夜は、墨繪の竹のすれあふ音も聞ゆなり。

何所やらに花の香すなり小夜時雨

芭蕉忌

瘦像に魂を入歟小夜しぐれ

あかしの浦に、初てはせを忌をいとなみ侍りて

淡路より時雨もすなり月も照

夢にだに芭蕉翁を見ず

翁見む夢のしぐれは誠にて

茶花

茶のはなやありとも人の見ぬほどか
ちやの花のからびにも似よわが心

麥蒔

蒔つけし夜より鶴鳴岡の麥

蕎麥刈

そばかりやよごれし袖もなつかしく

大根引

雪前や岡の月夜に大根引
忠度の腕これ見よと大根引

枯野 三日月に行先暮るゝ枯野哉
茶の木見て妻に取つく枯野哉

木がらし 木がらしや二葉吹わる岡の麥
雪を催す夜の木がらし面白し

氷 氷夜や疊にしぶる上草履
松風の落かさなりて厚氷
あぢきなき朶を添水のこほり哉

千鳥 冴かへる空音は星かさよ千どり
なく千どり廿七夜の月の海
あけ月や風のひかりに啼ちどり
おもふ事吹取夜半や啼ちどり

水鳥 水鳥やのこらず守る人の顔
おもひ羽に月さす鴛のうき寐哉

斤鷃 袂まで來て歸けりみそさゞゐ
黄葉赤葉それかあらぬか斤鷃
捨石のかげで飛けりみそさゞゐ

生海鼠 苦しみをはなれて動く生海鼠哉
うき人のこゝろにも似しなまこかな

霜 初しもや水ひた〳〵の芦の葉に
燈火いすはりて氷るしも夜かな
しら菊に赤みさしけり霜の朝

炭竈 すみがまや燒人みえて猶寒し
炭竈や雪の上行夕煙り

埋火 埋火に松風落る響き哉
埋火や梅の苔もあたゝまれ

花の散には春をうらみ、月の曇には我身をおもふ。

埋火やいく夜かあぶる鼻ばしら

長明の紀(記)に、かせきのちかくなれたるにつけても、世に遠ざかる程をしる。あるは埋火をかきおこして老の寐覚を友とす。

火鉢 うき時は灰かきちらす火鉢哉

火桶 桐火桶役うぐひすのこゝろあり

鉢叩 白髮より細き世や經ん鉢叩
鉢たゝき老の力のありたけ歟

冬籠　たる事や世を宇治茶にも冬籠
冬籠米つく音を算へけり
冬籠夜をりの病時を得し

雪　初雪や實は降のこす藪柑子
しは〳〵と降に音あり夜の雪
暮の雪水にもつもるけしき哉
面白や袖をはらへば樓の雪
雪の夜やわすれ〳〵に梅匂ふ
雪の人見ぬ世の友の風情かな
こゝろ皆竹にふすなる夜の雪
別莊や膝のかよひも夜の雪
こゝろだに置處なき深雪哉
大雪の夜を打崩す景色かな

寒念佛　まよひ子を呼聲たえて寒念佛
川筋や千鳥にかする寒念佛

寒月　鳥飛て高臺橋の寒の月
荒海に人魚浮けり寒の月

雜冬　岡の麥茶の木は古き眺望哉

炉びらきや先ありつきし母の顔
罌粟苗に今朝いたゞきぬ霜の花
薄雪に甘みやさゝん梅嫌
今朝もまた霜はねかへす蕪かな
山茶花や雀顔出す花の中
曉のなみだ氷らん網代守
初雪の跡さかりなる枇杷のはな

年忘　夢の世の夢を見る間や年忘
年わすれ忘寐に着る蒲團かな
うき戀に似し曉やとしわすれ

歳暮　行年やかしらをあぐる田のひばり
行としや馬をよければ牛の角
ゆく年やとても難波の橋の數
世の外の身にも師走のあらし哉

淡路の法師、我庵をさぶらひけるに

年の市にまぎれ出けり峰の僧
きのふけふ枝ぶりかえつ年の梅

千尋あれ硯の海も年の波

かくれても望たへず。あらはれても又おなじ。

年〳〵や年の麓のあすならふ

匂ひしは夢にや見たる除夜の梅

松の悲しき秋風の楽にたぐへし水の音に、流水の曲をあやつる藝は是つたなければ、人の耳をよろこばしめんさにもあらず。獨しらべ、ひとり詠じて、自からこゝろを養ふばかりなり。

おもしろう松風吹けよ除夜の闇

栗本青蘿發句集（八）

寛政二庚戌冬十一月十七日

紅葉之御會

かけまくもかしこき

御神の御末にあらせらるゝ雲の上までも、芭蕉てふ翁のたはやきぶりのめで度聞しめさせられて、こたびそが道のつかさなさせらるゝに、いせをの海士のかづきすも、須磨のもしほ汲つるも、あるは鹿兒のわたりの網手ひきけるすら、やどなき

御庭のみまへにおしのぼりて、鶯蛙のうたさなふる事の、さゞれ石の千世經べき數〳〵、生ふる草木の葉どのすゑ〴〵までも、有難き色は冬のけしきもなげなるにぞ、そ

のこゝろを賦して奉るとて

日をいたゞきて冬もます穗の薄哉

御宿題

殿前紅葉

眞砂までてりしく園の紅葉哉

落葉支流水 といへる御題を、あるかたより給ふに

吹ためて水に色添ふ落葉かな

辛亥春三月十七日

花之御會御宿題

殿前花

我等までや御目通りの花のかげ

神祇

菅神奉納

しら梅に散り込られて心清し

岩上奉納

岩上やかみさびませせばほとゝぎす

神路山にいたりて、はやく髮おろせし罪をかなしみ、五十鈴川に和うちしぼりて

我眼には霧のみ拜むなみだ哉

釋教

他力安心のこゝろを

彌陀にすがる姿を風の柳かな

當麻染井寺

つゝじ折て染井の雫結ばや

如是相

うき寐すなりひとつ湊の鴈と船

達磨忌や夜は更るとも更ぬとも

戀

妹がりや宵更初るうめの月

戀をせば滋賀のあたりや朧月

うす雪の曙を我こひ寐哉

かたおもひ歯にも合ざる鮑哉

雜　此部に出すは無季の句のみにもあらず。いさゝか心をかはりたるを出す。

かゝるうき世の中にも、佛は其まゝ物にさはらざりけるを

さきかゝる梅風の朝雨の朝

其日暮しといふ事のたふとく、何事もたゞ今たゞ、時の外なき事を行ずるうちに、年くれ春きたりて年く新なるこゝろを

青柳にむすびかゆるや柴の庵

蝶となる虫かひ得たり草の庵

月を見るうしろは寒し草の庵

搔槌辭

世に搔槌といふ名さへおかしきに、たゞきへらさるゝは彼も不仕合なるべけれど、長日の畫休みには、若おのこに引よせられてかりの枕をかわす時は、逢戀・待こひの夢をもちぎり、またに足なき碁盤のかたすみに雇れては、仙家の交りもなせど、朽折たるためしも聞ず。かくて彼れほどかたく目出度物はあられど、生涯木枕をたゝく罪ありて、假にもやさしき女の手にふれざるなこそ恨なるとや。ある夜ひそかに彼が後の世のれがひなきくに、かくて生涯の罪人なれば、衣うつ槌に生れんよいは、畑うつ鍬に生んか、たゞしはもとの搔槌か。

花のさく奥に何する槌の音

題　雲助

長持や身はとんぼうの露の旅

世のうきにうきともしらで、うきはわかれの雲轅し、と諷ひけり。

たはれ女の頰先赤し雪の朝

人の用ざる時は畫寐を友として、一飯をたくはふ。渴するに眼を明けて生涯の貧しき事をしれども、五器携ふ乞食にもあらず。只諷諫を腸にして、今日より死るまで、

おのれを慎まんと、天にちかひ地に俯すのみ。

きかさねて後ロの見へぬ寒さ哉

はいかいの道は例の自問自答の執行より、人和のひとつを守るべきおしへなりとぞ。此道をよくたもつべし。よくたもたんやいなと、心にこゝろの戒を立て、常に我髪を結びなれし彼石松が剃刀をいたゞき、其石の名のかたく、松は千とせの色をかえぬ例しなれば、今月今日翁の忌日たるをさちに、四十九年の先はいさしらず、廿九年の罪をあらためんと、世の中よかれの樂坊主とはなりぬ。

けふよりは頭巾の恩もしる身哉

炉一ツをむすびて、月雪に人をもふくる處とし、さらに世の富貴と車馬の諠すきはしらざる也。こはもさひさりを慎めてふひじりのふるとをこゝろざしとす。

後の世のおもはるゝ時峰の松

燈火のおのれもしらぬひかり哉

世の諺に龜の甲より年の功といふ事侍る。そは智ありてかたきてふことにや。又老ぼれたるもあなれば、其たのみもすくなかりけり。しかあらば年の功より龜の甲なるか。龜はもと此爭ひをしらず。唯波にかくれて我をうしなひ、泥に尾を引てまたあらはる。是を書ものは几にかくれて分別をなさゞれ。

萬代もたのまねばこそ池の龜

離別

君が吾妻のかたへ駒をすゝめ給ふに

不二は白雲櫻に駒の歩みかな

此程是非亭にやどりて是非を諍も

の無量・青岐・其然、其外儒あり、僧あり。この是非によりて三日四夜なかさぬ。いまだ是非の盡ざれども、今日は、はりまのかたへおもむかんと名殘をさゞむるに

盡ぬうち散りて見せけりけしの花

道の邊の柳かげには、しばしさてこそたちどまりつれ。予は此三伏のあつきに、こゝの柳澤の山陰に十日あまりの旅寐しけるが、けふは新友にいさまをこひて立さらんとするところ

結びさる清水かるゝな柳澤

別いふ手すさびなくて蚊遣哉

文月のはじめ嵯峨の、落柿舍にたび寐して、朝とく別るゝに

秋たつや起出るかたにあらし山

玉屑法師の旅におもむきけるに、

小硯をはなむけして

墨坪の奥はよし野と姨捨と

脫負が西國におもむきけるを送りて

日くれなば花をあるじの首途かな

羈旅

牛窓

春の夜やうしをうしとも夢心

象頭山

はるふかく眞晝も杉のあらし哉

落馬して腰うつ影もさくらかな

丸龜を船出すに、蒼海旭に映じて瀲々たり。讃岐芙蓉このかたにさしむかひ、備の二州のかたは遙に山をつらねて霞み、伊豫路は白雲のかゝれるあたりにして、吳楚東南にわかれたるもかくあらん。乾坤眼に極がたし。

こゝろ問へいづくとまりの春の海

白石

白石の影砕け行海月かな

内の海といふ隙戸の迫戸ちかく船の往來も、わきて潮のかけ引をよく得ざれば危事おほしとぞ。かくて月はひがしの遠山にいさ赤〳〵とさし出れば、親あるも子をもてるも旅のこゝろあらたまりて、十日あまりの浪の上の明暮に面テ日に焦したるを、人もこちぬる体にて古郷のかたを打ながめ居つゝ、月のいつか丑みつをすぐもしらざりけり。

身一ツは浪も寐よげに春の月

いつくしま

廻廊や潮滿月にさくらあり

千疊敷

うみ山を霞いれたる坐敷かな

社頭鹿

枕にもなれよ旅寐の春の鹿

連歌堂にて

散る花を墨に摺り込め旅硯

宿とりて風呂に入間も山ざくら

手枕松

すゞしさや松の響きを夢ごゝろ

二軒茶店

行春もしらぬ往來や下河原

杜宇古郷をめぐる夢ぞきく

天明らかに五ツの年にあたれる良夜は、但馬の國なる人〳〵に契りて、温泉の里今津てふ河邊に舟をうかべ、彼北國日和定めなきと昔翁も心に遊び給ふは廿月の夜頃のごさく、さなる古事のかうがへもいさいみじう覺ゆれば、先待宵より月を弄びて猶翌の夜を約せんとす。

待宵やおろかに契る月の雲

夜明れば酒さかなゝどあらため、

いさおかしかりけるに、おもふごち數まさりつゝ、日もいまだ暮ざるより月は東にあらはれ、眺め又新たに、船はさゝの浦左りに、來日の嶽右になし、江の上にむかひて漕いぼるに、波は金のごく花を散らせる上に居たり。

こゝろ皆浪にながれて月の京

名月や更て來日の峰高き

佐野の八幡寺のけしきは、あさもよひきの浦〳〵も、うたかたのあはぢの、あはれなるけしきなりけるを

さのゝ小春和哥の浦邊は鶴あらん

四條河原のほとりなる水月樓にやどりて

乞食の五器に求食るか小夜鵆

伏見船中

苫船や夢に時雨るゝ八幡山

名所

幾人か千世の古道子日せり

芹川のあたりは深し春の水

短夜や夢さき川の朝わたり

蒲公英や音なし川のへり塘

立雁の負ても行かで浮御堂

鰹つり妻はまつほのうら船か

春の夜や雨をふくめる須磨の月

須磨のうらにいたりて壽永の昔をおもふに、出て遊ぶ胡蝶、人にかくるゝ雉子のおもかげも、いかなる夢のはしにやあらんと、あはれか催し侍る。

陽炎の夢をつなぐか須磨の花

よしの山

七夜寐ても花の半ばやよしの山

夜ありきもはなのあかりや芳野山

あらし山の花は、水淸くさびしく、松朧〳〵と深し。さらに我境とおもはざりけるに

花にさはぐ都の人よあらし山

はな散りて三日月高し嵐山

心敬僧都の、散花の音聞程の深山かな、と唫じ給ふ寂靜谷にて

わくら葉の落る間宿る太山哉

水鶏なくかたの〻さとは薄月哉

なちにて

白瀧や六月寒き水煙り

室津臨江庵にて

すゞしさや繪島をひたす月の海

生のびよ尾上の松の下すゞみ

秋たつやいなの笹原うつり來る

橋立や夜明〳〵の天の川

舞子の濱にて

名月や松に名あらば祇王祇女

やるかたのなきに見て泣須磨の月

立出ていざ久間見川けふの月

射おとすか夢野の鹿の夜の聲

高雄にて

紅葉踏て攀る寺の禁酒哉

曉やしほたれ山の秋の霜

難波津や橋めぐりして夜の雪

哀傷

墓原や是をうき世の山ざくら

門人奥村耳香を悼

わすれては坐をあけてまつ夕凉

羅來を悼む

魂を招かむ月や荻のうへ

桃如を悼む

なみだには染ずもまつの秋の風

梅谷氏脫質がひとりのみどり子をもてり。去年予が見しころは、小

田の早苗のとりぐに、すゑつむ花の色を添て、いさまめやかに生たちけるが、今さし又問ふに、梅の苔のひらきもあへず、夜のあらしのいたく吹て、佛の別れの跡をしたひ、共に涅槃の誠に入ぬさや。げにかた身の箱のむらさきも、この曉のなみだなりけるを

ものいはようしといふらん箱の雛

雨人が妻身まかりけるを悼む

夜は猶おもひゆられて五月雨

夜半のぬし、共に風雅を相かたろふひさりなりけるが、おのれに先だち身まかりけるをかなしみて

燈もたよりも消る霜夜かな

綠翁を悼む

死ぬとをしつて死けり秋の風

三木氏美喜女を悼

胸あはぬ日もありつらん花衣

鼠爽を悼む

菊よ月よ我ひとり泣友にせん

重羽を悼む

花とさくもなき俤歟われもかう

玉のごくなるみどり子の身まかりけるをいたみて

菊桔梗いづれか顏に似る花ぞ

きのふ見し人にはけふにわかれ、翌にいかなる世のありさまならん。我はたゞ父もなく母もなく、したしき友を柱の如く杖のごく、おもふかひなく今年は無一房にわかれ、薪水にはなる。唯さへ秋のひさかたならぬ物から

あの譯を聞たし秋の鳥啼

雪中葬をいたむ

我おもひ雪の箱根を越さで泣

淇園を悼む

我なみだ地にしむ時か曉の霜

宗保を悼む

二十五年今朝あだしのゝ塚の霜

扇塚開眼 松帆浦願海寺にて

聲を添て塚の名ひゞけ青嵐

佐居の水鷄塚にて

俤や藪あり月あり水鷄なく

初秋の四十もうとき寐覺哉

贈答

半生堂の病床を叩て、主の閑をやぶる

やむ人によしのをかたる春の雨

睦月四日のあした、雪のいさふかく降けるに、杖笠とりあへずうかれいづるつゐで、茶をたしめる法師を訪ふに、さみに釜たぎり、宵の挽ためありとて、見ぬ世の友のなつかしげに、こち居たる躰にてもてなされけるに

梅柳の故人茶に又雪の朝朗

初て藜庵を訪ふ。誠にあかざの枝をもて梁となし、葉をもて雨をしのぐの栖なりける。春夏は其芽を摘て三日の粮となし、かるゝ時は雪の日の杖とたのめるよし。清貧誰かうたがはん。

夏草やうき世を覗く窓一ッ

可群が酒店に遊ぶ

酒の香を松にかこみて青嵐

初て是非亭に來りて主と是非をあげつろふ。そも何の是非なるや。天をこゝろとし、地を身となし、四時に随て四時を友とするに、何の是非なるにや。道を守りて道をうしなひ、道にそむきて道に叶ふ。是滑稽の是非なるにや。予はたゞきのふも非にして今日も又非なり。いつかは是なる時を見ん。唯人情

の止事を得ずして、みじか夜の賦を催せば、主にかづきものをかふて是非もなく打ふしぬ。

我儘のひとり寐うれし旅の蚊や

無量亭にはじめてまかりけるに、ほとりの池水に卯花咲そひて月もいさゝあかゝりけるに、子規・水鷄の聲をまちて夜もいねがてに、聞そらすまじなどいと興ありける。

短夜をきそふこゝろよ老の夢

うさければうさし、問るれば又なつかし。

花菖蒲津田の細江の便かな

蝸國が父の閑亭にて

すゞしさや垣のとなりは極樂寺

柏木何某の栖る方は、海前にたゝへ、山後に聳てさこしなへなり。仁智いづれによるにや。主の心ばへいさ風流にして、庭前の樹〱もそれに倣にや。天つちのまゝな生いづる中に、古松二もとの屈曲、千とせの色をかこみ、蓬萊のしま根もいづこならん。さりや世〱に聞傳ふ武隈・あれは・曾根・辛崎の松といへども、明暮の眺とする事の遠く侍れば、主のこゝろざしの如くする事あらざめり。かゝるたのもしき旅のやどりを求しは、柴山の主のおもふどちの情なるめり。よては句一くさをものして筆をさゞむ。

千とせ經ぬらん涼しく宿る松の蔭

佐用の久保軒に主せられて月の客となる。この里は朝毎に霧ふかくたちて、蒙朧たるけしき、さながら春の俤にも似たりけり。

薄霧に花の香あらんけふの月

明月亭

橙の色を木の間の冬の月

ある人に對して

もの凄き道のこりけり岩の霜

千鳥聞共ちどりこそ生き佛

鶯里亭

うぐひすの巣の隣あり冬籠

丹波なる誰かれの社中を示して

たはむ程力いれけり雪の竹

竹裡舍

客あれや雪ふらぬ夜に竹の月　主人

客となりて雪降迄は竹の月

畫讃

海老　言花が一軸に

髭にまで孫子重ねつかざり海老

西行の畫に

花の香や袈裟も衣も腸も

十牛　巴紋亭一軸

牛の尾も殘らぬ色や春の草

一圓相　松蔭舍一軸

花の中牛追ふものは牛を追ふ

行平贊

時雨聞て腸さぐる寐覺かな

峰入の畫

貝吹て雲踏わけよ花の跡

かよひ小町の畫

百夜かよふ初廿日は白牡丹

布袋

空も又空をやぶりて時鳥

脫負きたりて、瘦法師があやめ刈

居る畫に讃たる乞けるに

いつの世に戀せし人ぞ菖蒲刈

東園亭　鵲の畫

揚まりや暫しかゝりし月の雲

寒山十德

夜遊びや二人が心月一ツ

瓢の畫

人ありて琵琶にや作る長瓢

小原女の畫

野の道を傳ひて山より薪をかつぎ出る明くれの姿は、ともに孝ある人と見へ侍れば、いみじうなつかしく、戀はかゝる女にこそあなりけり。

親も夫もいたゞく柴の木實哉

福錄(祿)壽賛

此人のこぼせし種か福壽草

達磨の畫

見盡して不斷櫻と成にけり

林間燗酒畫讃

霜きえて酒の煙れる紅葉哉

我白に自畫自讃をつかはして

月今宵故人まぶたにうかむや夢

螢狩の畫

小坊主の智は水によるほたる哉

通玄の畫

一陽を出て走るや瓢の駒

賀

野上を賀す

五十まで母もつ人ぞ花の春

常和八十の賀

山鳥の尾のながき日を鳩の杖

初雛の末永き心を

桃さくら共奥床し夜の雛

何某が初の端午を祝して

家も身も幟立世を得たりけり

布舟が暮櫻亭にかくれ住けるを賀して

春に逢ふ奇(寄)居虫の宿や梅さくら

茶人宗巴八十の賀

千年の緣を松の自在釜

三木如三七十の賀

つたへ置け桃咲宿の不老不死

岸本社甫七十の賀

茶と酒の世の中あかき帋衣哉

五斗米のために腰を折ざるが故に田園のあるゝ日なく、常のこゝろなほ靜に、おのづからながき齡ひのはじめさいへる、むそじあまりひさつの春をむかへける農家の翁、風席雅子をにはさごすさて

耕して鶴をまねけよ杖の友

晩頁ハ雛にはじめを賀して

鶴ゝ巣を今日かけ初めむ雛の宿

たれをこひかれをまつべき身にしあられど、此頃頭癰さかいへるやまひ大瓠ほどになれり。身にせまりていかむさもなしがたかりけらし。此大瓠の用ひかたあらんや。智あらばたぞ用る事を知らむ。是おにくは黄泉に歸る船につくらむか。

船ばたや履ぬぎ捨る水の月

世の人の風雅になげける、柳さくらのにしきをあらそひ、蝶鳥のおのがさまざまなる其風情の、いさゝか實におち入、虚にそこなふもの數をしらず。むかしの人のいさ筋を傳へつゝあるかなきかにして、糸によるものならなくにさ詠じ給ひしは、其頃のうた屑にといひもてはやせしも、今はその屑なるものも床しくぞ侍る。俳諧の句を求るに、遍照があだに黒主がいやしきさまも、こゝろをさりはせられざれ。唯そのさま、人の面のごとくしからざるのたさへならんか。此心になく姿は千々にわかつ。是幻術第一の糸筋なりけり。しかも血脈をつがざれば、土梗芻駒の、朝に形を得て、夕の雨にうちくさりたるにやあらん。風調より入も

のは、我集風にあらざれば他の自在を知ず。こゝろより入ものは、幻術自他におよぼすなり。予人に會するとの夜、此幻術の箱をひらきて、眼前に海山をつくり、嚴寒に花を咲せ炎天に雪を降す。是無幻の幻なり。幻人幻境に對し、幻境もまた幻なり。何がしの翁の句ゝ、皆この境に入て玄くの玄なり。我又此境をしたふ。是が爲に月花のつぶれとなる。廣く衆に交りて此道に遊べる人を友とせんと、かけまくもかしこき天滿おほん神にちかへて筆を染侍る。

花も實もたのまぬをとへ栗の本　青蘿

題青蘿集後

青蘿集二卷。其門人玉屑之所輯也。青蘿世仕我藩。爲人灑落。好作諧歌。常放浪乎山水。未嘗以憂樂經心也。有故落魄爲僧。遂以諧歌自任。於是一時崇尙之徒。推以爲宗匠。後被有得出入于　藩。ゝ中之人。師事之者多。今玆遺稿成。書肆玄駒將梓之。携來請余一言。余於靑蘿爲姻族。喜玄駒之擧。因書卷末云爾。

寛政七年乙卯中秋

姫路　鈴木呂則　印　印

齋藤生厚書　印　印

寛政九丁巳歳

書林

京寺町二條下ル　橘屋治兵衞

大坂順慶町心齋橋東へ入　柏原屋與左衞門

播州姫路元塩町　隅屋喜右衞門

半化坊發句集

上・下

闌更

風曉夢を破て、遊子關を越んと聞へしも、實や我半化翁も、其はじめは中比の風に遊び、加の淺野川の二夜庵に三とせあまり結びたる夢も、古調の爲に破れ、終に深雪ふる越路に立出て

苦しさに休めば蛔のたかりけり

姨捨や石に置身も月のため

漏さるをたのみぞ雪の蔦かぶり

など風吟し客中に年を越て、霞たつ春は都の花にうかれ、ほとゝぎすの一聲は淀の渡りに聞、月の淸きには須磨の浦をたづね、橋立の詠には無季の格もしからんと、

橋立や守神なくば波越ん

かくいひ捨て、暫く此邊りになん周流せられける。とりが啼あづまの方もしたはるゝ折からは、甲信の音信に笠をかたぶけて、此間に年をかさね、ふたゝび武城に二夜庵をいとなみ、漂泊の勞を養れけるが、例のうかれ心より、しらぬひの筑紫がた見まくほしと、又もや都にかへり給へば、したしき人ゝの杖をとり笠をかくすに任せ、市中に居をしめられしが、名利のさはりもあればと、東山にかくれて故翁の、

柴の戸の月や其儘あみだ坊

と聞えしさびをつぎて、南無庵の古しへを慕ひ、其地に芭蕉堂を結び、閑ならん事を願ふといへども、門人・遊子日ゝにつどひ來り、閑居のいとまもなきに、うかれ神の立さらでや。ある日は湖邊に吟ひ、或時はいせ路をたどりて、何ひとつ書集たる句もなかりしが、年比よみ捨られし種ゝを拾ひつどりて、好士の爲にもやとおもふ折ふし、予が同友の車蓋、東行脚のかへるさ、四山に一囊をひらき、師の句ある事を告る。そが中に

三ヶ月の片羽でありく浮巣哉

仰向て水のうら見る天の川

宵闇洸ゝ眠らんとすれば月我にてる

星石と成秋天高く風あるゝ

是等の舊作をはぶくといへども、ともに聞知れる句をかぞふるに千餘章に及ぶ。しかはあれど多きは紛るゝ事もあらんなれば、纔にあつめて、滿ればかくるのことはりも

あればと、余は後篇にゆづるにはしかじと、
四山亭の蟠水禿筆をふるふ。

于時天明丙午春

半化坊發句集　上

狐狸屈仙ニ一樹有。其大ひなゐ事
は

立春

海も山もみな下陰やはなの春
元日や此心にて世に居たし
元日と思ひの儘の朝寐かな
見る物は先朝日なり花の春
元日や松靜なる東山
正月や三日過れば人古し
正月や皮足袋白き鍛冶の弟子

当年は東西に行脚の志有ければ

我惠方多し松しまいつくしま

梅

梅が香やおもふとなき朝朗
梅咲や藪に捨たるすみだはら
山陰や烟の中にむめの花
折盡す鬼もなき世ぞ野路の梅

軒の梅彳ば犬の吼にけり
村はしや竹につらなる梅椿
口の影や我肉ゆるき梅が下
夕暮や飼猿下りて梅の月
梅の月消へて窓もる匂ひかな
折音は誰ぞや寐覺に梅匂ふ
梅咲て門は海老やくにほひ哉

臥龍梅

角たれて香に眠る梅の形かな

若菜

若菜野や赤裳引づる雪の上
筐もる雪も若菜の野末哉

鶯

黄鳥や起れば枝に狂ひ居る
鶯やひとくと啼て籠の內
朝朗去年の鶯啼にけり
黄鳥の鳴かで來にけり臼の上
鶯やうぐひす來啼餌摺鉢
うぐひすや谷の下音を聞初る
黄鳥の初音聞らんほとゝぎす

松

靜さやゆふ山まつの若みどり
あらしにも直なる松の緑かな

柳

青柳や酢賣の潜る門の內
釣人の蚓堀けり柳かげ
舟留て語や嶋の柳かげ
透し見る舟景色よし江の柳
二本の柳吹結ふ風情かな
遠里や柳一もと打曇る

霞

海の日の半見るよりうす霞
山霞み海くれなゐのゆふべかな

春の雪

都邊や小袖に消ゆる春の雪
春もまだむなしき雪の田面哉
日晴ては燃るがごし春の雪
春の雪仰向うちの眺かな
白波となり行磯の雪解哉
雪解迄は往來の踏し野竹かな
雪消へて麥一寸の野づら哉

春風

春風に雪踏ぬらすや東山

はるかぜや草木に動く日の光り
春風や肩に乘子の襞ミ

春日

春の日や夕賑ふ海の幸
春の日や鷗ねぶれる波の上
脱捨し田簑に春の日影哉
薪盡て門を出れば春日哉

雉子

草による駒驚かす雉子哉
顔かくす雉子に日のさす野中哉
何事の寐覺なるらん夜の雉子
聲たてゝ水飲む谷の雉子かな
雉子啼てうらなき所としられけり
日を覺す雉子も有らんきじの聲
曙や里はくだかけ野は雉子
飛退て雉子啼けり野べの杌
雉子のみ曇らぬ雨の野面かな

雲雀

月に啼心はなき歟夕雲雀
雲雀啼て三つの光も見る日哉

駒鳥

駒鳥の日晴てとよむ林かな
高〳〵と駒鳥啼けり夜の松

蛙

月の夜や石に登りて啼蛙
山里や盥の中に鳴蛙
並び居て鍬にかゝるな田の蛙
腹動く蛙にうつる夕日かな
蛙啼田の水うごく月夜哉
夕雨や水田溢てとぶ蛙
山もとや蛙啼江も家の間
むし追て日南へ出たる蛙哉
今土を出てまじ〳〵と蛙かな
蛇は串にさゝれて啼蛙

地虫

行とゞく春の日影や虫の穴
今出し地虫哀れめ道の中

蝶

風止て蝶の出て來る野原哉
木ゝ小草いろ〳〵の中に黒き蝶
ぬるゝ日をそこねもやらず蝶の羽
蝶飛や小狐狂ふ岡のはら
日の影や眠れる蝶に透通り

陽炎

川波やあやぶく越る蝶も有
道のべや馬糞の胡蝶花の蝶
陽炎やはかなきと見る人もなし
かけろふや消へてはもゆる波の隙
陽炎の外は動かぬ景色哉
かげろふは眠る狐の魂なる歟
陽炎の跡に氣を吐宮守哉
陽炎や黒きをもゆる灰汁の糟
糸遊によろづ俤行都哉
糸遊の亂〳〵て静也

朧月

興盡て山下る暮の朧かな
朧夜やみなあらはれし月ながら
有明や朧は消えて立烟
春の夜や月に移れるさゞれ波
おぼろ夜や淡路の灯岸の松
築地より風匂ひけり朧月

春雨

春雨やのた〳〵歸る孕鹿
春雨や土あらはれし北の山
春雨や編笠着たる物嚔ひ
春雨や曉晴て花一つ

涅槃

古寺や泪に兀るねはん像
かゝる世に出ても説ず涅槃像

蜂

六尺の人追ふ蜂の心かな
似我蜂や己が姿もかへり見ず

田打

鋤鍬も今を春邊の田面かな
艸〳〵の根を逆さまに田打哉

春の雁

つく〳〵と海見て居るや春の雁
砂はむと浦人いへり春の雁
堅田に至りて、故翁の吟をおもふ。
病雁も殘らで春の渚かな

猫戀

一ッ家の猫も啼る春邊哉
けふははや忘れにけりな猫の妻

菜の花

菜の花や遊女わけ行野の稲荷
菜の花や千里をくまに咲續

菫

うつくしき道有世也すみれ草
菫野やいざ胡坐して笛籟ん

ぬしや誰垣よりうちも菫のみ

鳥巣

鳥の巣となしけり妹が髮の落
鳥の巣や或は木蔭中の蔭
鳥の巣や梅ぅのはなもしらぬ内
こゝろこめて巣作る鳥歟茨の奥
鳥の巣やひとつ太きはほとゝぎす

桑子

我儘に這はで飼るゝ桑子哉
太布の袂に馴るゝ桑子かな

櫻

櫻咲これぞ和國の景色哉
入山の櫻咲たつ朝日かな
御車や櫻が下の牛の聲
根をよけて火焚〻櫻に狂ふ人
世を捨る山陰もなきさくら哉
行暮て櫻にむせぶあらしかな
醉覺て起れば月の山ざくら
したはしきものや櫻に白拍子
磯山や櫻過行釣小舟
雨の日や旅人越る櫻山
散かゝる櫻抱けり酒の醉
戻りなば人にも告ん初ざくら
糸ざくら身にふるゝ日はあらし哉

知恩院に至りて

町中に櫻分入るや知恩院
散さくら我醉顏に冷たかれ
散果し櫻に啼や山がらす

御室にて

櫻にも人にもうつる心かな
我〱も花に袖する御室哉
一日もかけずに來てや散さくら

はじめて花供養いとなみて

活て居て望の日の花備へけり
櫻咲さくら散つゝ我老ぬ

芭蕉堂にて

時なれや花の中なる翁堂
花戻り錢落したる坊主哉
夕暮や花に猪追ふ嵐山

ふたゝび嵐山にいたりて

花に並ぶ松風光る夜と成ぬ

雨そほ〳〵花の梢に猿の尻

故翁の吟を思ふ

湖てるやまた吹入ぬ四方の花

脚下清風にまかせて、東關の方に
葛坡君を携ふ車蓋を送る。

道のため花に寐初よ岩まくら

いろ〳〵に見するを花ぞ不二の雲

山吹

山吹や終には流す花のかげ

山ぶきや花ふくみ行魚もあり

やまぶきの花の下ゆく芥かな

やまぶきや暫しかけ置洗ひ衣

躑躅

逆さまに咲や端山の花つゝじ

夕山を根こぢて戻るつゝじ哉

雜

若草や臼をころがす翁有り

柴垣や匂ひゆかしき蕗茗荷

藪かげに延過しけり蕗の臺

青海苔や葭簾に付し蠶が軒

春の野や鳥うつ人に我うとき

鞘赤き長刀行や春の野邊

川越て鳥の見てゐる燒野哉

川中島にて

川しまやつばな亂れて日は斜

兩國なる遊水樓にて

橋長し人多し實春日哉

ゆふべ〳〵靜まる春の心かな

驚かぬ風渡りけり春の暮

海棠や戸ざせし儘の玉簾

隱家や梨一もとの花曇

岩端や五六寸なる藤の花

摘〳〵て人あらはなる茶園哉

田樂に土焦したり春の庭

旅人の米ほしがるや里の春

大津畫の鬼も佛も春邊哉

夕川や鱒にうたれし獺の聲

櫻過菜の花越て金閣寺
鷄のよごれ來にけり春の水
あかねさす藪を出けり春の水
底のなき柄杓流れて春の水

留別

いざ行ん魂花に染るまで

婁州に訪れて

春雨や老鳥は塒に眠るのみ

留別

ほどもなく又歸り來ん彌生山

桃里亭に杖をとゞむる事三度

留主に來ても居よき花の軒端哉

養老亭に遊ぶ事三日

起ふしに眺る春の野山かな

棧谷亭を訪ふ

鳥啼て谷間も春の木立哉

眞蝶が本腹(復)を賀して

春一の日や風におそれぬ床ばなれ

病中の吟

寢骨に梅が香うつる朝かな

夏

更衣

拔し綿や鼠の巣ともなさばなせ
寐て見れば疊のかたき袷かな
晝過や何もせぬ身の更衣

客中更衣

きれ〴〵の綿流さばや衣がへ
更衣我にも着する主かな

初夏

産湯かけし佛にうつる朝日哉
九日の蹴鞠しはびし卯月かな
高からぬ花となり行卯月哉
蚊の聲もうつ心なき四月かな

旅行

山陰や蕗の廣葉に雨の音
青葉若葉下は玉ちる岩の水

時鳥

晝も啼里には聞ずほとゝぎす

伊勢にて

芦原や神代はしらずほとゝぎす

時鳥啼戻りけり山かづら

ほとゝぎす古き言魂思ふのみ

待甲斐有二羽啼過るほとゝぎす

郭公聲有かげの地を走る

ながなけとおだまきくる賤杜宇

各靈山に登りて

俳諧の羅漢ならべりほとゝぎす

室の津

室の津や千舟啼越すほとゝぎす

我がわれをうらやむ去年の時鳥

ほとゝぎすなかでさへよきに鳰の海

閑居鳥

大寺や京に來て啼閑居鳥

胸をうつ思ひぞ旅のかんこ鳥

山もとや市にきこゆるかんこ鳥

啼并ぶ友どりいかに閑居鳥

閑居鳥ましらも叫ぶ小雨かな

いまだ白頭の雲水にもあらねば

なまなかに耳も聞へてかんこ鳥

蚊喰鳥

雨の夜や軒下かける蚊喰鳥

牛吼る窓飛さるや蚊喰鳥

牡丹

花にまけて花も俯向牡丹かな

白牡丹只一輪の盛りかな

芥子

二三本芥子作りけり弱法師

散にけり芥子のみに吹風も有歟

白芥子の花透朝日夕日哉

まだ咲ぬ芥子倒しけり柱賣

芥子咲て狐の嫁入月夜かな

百合

星の夜も月夜も百合の姿哉

百合の花畫の姿はなかりけり

俯向し百合に雨降垣根哉

忍草

忍ぶ釣軒に寄添ふ女かな

釣忍ぶいづくの岩を離來し

嵯峨も今酒賣軒の釣忍ぶ

葎

古寺や葎の下の狐穴

隣にはかなぐり捨し葎哉

小北山にて
髪あはれ葎の奥の梓弓

葵

くれ行や日陰の葵花直し
日に動く葵まばゆき寐覺哉
髭づらに葵かけたる祭かな
神の葵地にかへされぬ後宴哉

若竹

竹子や月を左右へ吹なびき
竹の子らほど有らじ土のわれにけり
篁やわけて今年の色緑り
若竹やふしみの里の雨の色
今年出し竹もかたまるあらし哉

節句

十万の軒やいづこのあやめ艸
四辻や匂ひ吹みつあやめの日

客中節句
分越し笹を粽に見る日かな

夏中

夏草や所〳〵にはなれ駒

奈古眺望
夏艸もはつかに浪の汀かな

川中島
川鵙や夏かれ草に鳥の糞

五月雨

さいながら雨くらからぬ五月哉
ひた〳〵と着物身につく五月雨
漸有て又登りけり五月雲
山寺や軒の下行五月雲

田植

田植哥中〳〵古き詞有り
蛭游ぐ中にも馴て田植ける

蝸牛

登りつめて落たり竹の蝸牛
這渡る式部が筆やかたつぶり

火串

角も牙も今朝哀なる火串哉
曉は土にもへ入火串かな

水雞

敲ともきかじ野川に啼水鶏
溜池や漬木のうへに水鶏啼
曙は水門潜る水鶏かな
仰向て啼か水鶏も月の下

螢

更行や螢地を這ふ町の中

草うてば螢亂るゝ古江哉
飛螢舟に扇を揚にけり
碎よと打さるものを螢かな

蚊

開車の子の門に泣ゐる蚊遣かな
釣佗て水にぬれけり舟の蚊帳
蚊の聲のむら竹洩るゝ烟りかな
蓬生や君がためとて焚蚊遣
下蔭や帋帳の中に鉦の音

水鳥の巣

つゝかれる迄魚のよる浮巣哉
ゆられ〳〵終には鳰も巣立けり

夏虫

片羽燃て這あるきけり夏の虫
筆留て打拂ひけり火取虫

蟬

はつ蟬の今這登る榎かな
所〳〵啼さす蟬に照日かな
蟬啼て杉にも脂の流れけり

團

軒に立て裾抑るゝ團かな
水うつてあふぐもよしや澁團

兩國にて

金銀のうちわつらなる小舟哉
口の影をおさへてねぶる團哉

川狩

川狩や君と匍匐岩の上
川狩や魚串立る石の間（画）

鵜

つく〴〵と鵜の留りけり魚の籠
鵜の面に川波かゝる火影哉

晝皃

晝顏やきのふの花は日に焦れ
晝がほや花吸ふ虫も飛かへり
晝皃は日のそみかゝる色なる歟

夕顏

夕顏や花より外はわきがたき
夕がほや無二似氣一人の里わたり
夕がほや鼠の傳ふ軒のつま

涼

あら涼し眠るためなる月の下
ひとり居れば涼みの留主も涼しけれ
涼風に眠り上戸のうねりけり

暑

ほくち搗臼のわれのく暑哉
暑き日や降レばふるぞと云ながら

雜

目覺けりうつゝに打し顏の蠅

蒲蓆や身をかざるべき事でなし

夏川や馬繋おくみをつくし

夏川や岸に漁火の燃殘り

夏川や笊抱へてゆく女

慰に川渡りけり夏の月

馬柄抄の錫こゝぎ行清水哉

大木を見てもどりけり夏の山

たぐひなく夏の山水を見る日哉

神子村や椿の下の紅のはな

右左四角に麻の茂みかな

丹波路や綿の花のみけふもみつ

君とよむ竹にも啼やぎやう〳〵し

夏の夕吹倒さるゝ風もがな

日盛りや半バ曲りて種胡瓜

山かげやふるめ童の蓬つみ

水無月や屋根なき舟に身を焦シ

水無月の限りを風の吹夜哉

草津にて

六月やいたる所みな溫泉の流

溫泉はあれど六月寒き深山哉

溫泉の瀧

溫泉も涼し我はた走る瀧の月

日光中禪寺

あら涼し四十八湖を渡る風

同日光

蚊も喰はで慈悲心鳥の鳴音哉

日は更に月もかゞやく山涼し

うらみの瀧

ことによし裏みて潜る夏の瀧

室の八しま

煙たへて久しき宮の茂り哉

親しらず

親しらば通さじ夏の海ながら

甲斐しら根

百里來し甲斐有夏のしら根哉

禪林家

心すむ水有うへに夏の雨

禪林

降にあらず消ゆるにあらず夏の霜

白山奉納

神の柞雪の麓に茂りけり

江の島

嶋涼し汐うちあはすうへの月

戸隱

此山や夏のさくらに夏の雪

淺間

夏は猶もゆるか雲の淺間山

殺生河原

暑き日や蝶鳥落て石黄ミ

留別

炎天のくるしき數を便りせむ

風薫る所〳〵に寐て行む

或人を訪ひて

風薫る奥の木立は何〳〵ぞ

越の雪嶋の邊なる斧久の日光に住けるを尋て

夏は猶思ひ増らん雪のしま

日光にて身まかりける大路をいたむ

なき跡に散るわくら葉を見る日哉

半化坊發句集　下

初穐　何となく秋も一日過にけり
とく起て鼻ひる僧や今朝の秋
　深艸にて
秋立や店にころびし土人形
秋もまだそことしわかぬ夜也けり

七夕　今宵なくば石ともならん二ッぼし
年〳〵に思ひ増らんわかれ星
またるればまたるゝもの歟ほしの戀
星の戀容には老もなきやらん
僞の世にまつられて二ッぼし

灯籠　切籠消えてあなめ〳〵や草の原
露わけて切籠結ぶやうなひ松
夕晴や切籠提行京の町

玉祭　夢に見るも魂棚近く寐し夜哉
　有時はあるのすさみにして、隔りがちなるうち、世を去し妻の塚に詣て。
腹立る顔でも見たし玉祭り
送り火や埋れぬ石のまだ煙る
　柳亭を訪ひて
息災な我も來にけり玉まつり
　かのなき魂ならばかへらんと詠ける、あはれなど思ひ出て
死なで歸る此夕暮に蓮の飯
蟻の來るばかりぞ墓の瓜茄子

朝顔　葬や手拭提し花見達
土に這ふ朝顔は猶哀なり
朝顔や淋しう寐れば起安く
朝皃や同じ心の友も來ず
凋までは朝顔だにも見ざりけり

萩　枝に葉に花の付たり雨の萩
垣荒て犬踏分る小萩かな

押花となれり猪の臥野邊の萩
捨石に花うつ萩のゆふべかな
散にけり咲にけり萩の動くうちに

旅行

萩はらや花身に付けて分出る

荻

荻の聲舟は人なき夕ゞ哉
波越や雫ながらに荻の聲

薄

朝あけや薄がもとの道者笠
半散る尾花吹やむ月夜哉
取付て地に付鳥や薄の穗

木槿

露の木槿おもへば朝も哀也
禰宜達は何觀ずるぞ木槿垣

艸の花

雨の野や人もすさめぬ女郎花
折て見たり捨たり道の中の花
山もとや馬沓の中に中の花
武藏野や雲に咲入る中の花

露

しら露やうつくしき夜と成しより
椎の葉に露のみ盛りし旅寐哉
谷陰や草ゞより下の松の露
露ちるや桂の里の臼の音

霧

傘さして霧分行や山法師
朝霧や濡て起行野邊の駒
舟漕や薄霧洩ゝる火はいづこ

稻妻

稻づまや靜ならざる秋の空
稻妻やよく寐る人の草まくら

秋風

秋風や酒の過たる顔もなし
星多き夜はつよからず秋の風
秋風や山邊に動く火の靑き
松杉の常盤も秋は秋の風

鳥羽の浦に至りて

秋風や浮身を波に走りかね
秋風にしら波つかむみさご哉
秋風や蜑の呼聲械の音

あふむ石にて

秋風やうきはうつらぬあふむ石

虫

埋もれて啼や芥のきり〳〵す

いとゞ鳴地を吹にけり夜の風
折〳〵や藻に啼むしの聲沈む
月消へてむしはあらしの下音哉

羅生門の邊にて

簑虫の鬼の子も見ぬ九條哉

雁

月ひら〳〵落來る雁の翅かな
はなれじと呼つぐ聲や闇の雁
仰向てまづ風情也雁一羽
あれほどにひとしきもの歟天津雁
天津雁小田に見る日は亂れけり
夕暮や啼過る雁小田の雁
初雁の痩て餌をはむ礒田哉

稲

風流も先是からぞ稲の花
見ぬ人のためにもなるや稲の花

湖のほとりにて

植たしや稲葉によするさゞれ浪
見人もなき月の田毎を苅身哉
夜田苅や明て休らふ身でもなし

瓢

今朝からは土に付けり種ふくべ
蔓ながら瓢を抑く童かな

月

けふの月容はかぎりもなかりけり
明月や座頭の妻のかこち顔
海原や日のをよばぬを月の隅

良夜の雨

月こひて雲も百度見る夜哉
恨まじ月の桂の花の雨
今宵なれや月にむかふも月の上
名月や入山までもたどりつく

阿漕が浦にて

月に猶哀あこきが海の底

再び此浦に來りて

十六宵も月に阿漕はなかりけり
十六宵や山にむかふて眠るうち

野分

戸明ば月赤き夜の野分哉
海山の中に野分の庇り哉

砧

吹すれる竹の奥なる小夜砧

薄月や水行末の小夜ぎぬた
松風やきぬた幽に谷の里
浪高き夜や衣うつ蜑が軒

客中

身のうへも人にまかせて砧かな

川鹿

つたひ來し石の下より啼鰍
聲かはす鰍隔る早瀬哉
釣人にならびて川鹿聞夜哉

鹿

啼止て鹿二ッゆく谷間かな
岩端にいとゞやつれて雨の鹿
山里や軒に來て啼夜半の鹿
聲絶て足音近き小鹿かな
數十疋峯越ゆくや晝の鹿
見廻して又啼にけり月の鹿
山はなやたちかへりつゝ鹿の鳴
こがれ來て水にも入や谷の鹿
啼絶て鹿のつくばふ夜明哉
小男鹿のよび下る月の尾上かな

鳥

耳立て啼音にむかふ男鹿哉
秋も猶鳴のゆふべぞおもはるゝ
うづら啼野を走りけり赤鼠
木つゝきや何の味ある山木原
百舌啼て風腥き木の間哉
日のさして鵙の贄見る葉裏哉
風に猶あとなき鵙の印かな

雞頭

鷄頭は動きもやらず臼の音
鷄頭や種のためとて打たゝき
鷄頭に秋の哀はなかりけり

菊

菊の日や盛りは後の事ながら
千世を經し古根も有らん谷の菊
作り倦て今年は菊の山路哉
菊の酒醒て高きに登りけり
綿とれば菊となりたる韒かな
一尺の菊の花見る浮世かな
むさぼらぬ花の價や市の菊
酒瓶に興じ入けり菊の花

後の月　十三夜と見初しもかくの空ならん
我衣に洩る思ひ有り後の月
後の月水を束ねしどきかな

木實　雨毎に澁や拔なん柿の色
青柿の落盡しけり谷の坊

苧生のうらなしと詠る邊にて

有なしの實にも歯のなき翁哉
秋の暮片枝の梨も落盡す
守人なき木の實はみけり山鳥
我ために椎を器にもる山家哉

素山亭にて

命永き樹や殊更に實を結ぶ

露時雨　露しぐれ時雨し跡の照る日哉
折さして枝見る猿や露しぐれ

秋雨　秋雨やけふ菰槌の鈍作り

或寺に老僧の佛彫居けるに

秋雨に焚や佛の削り屑

四山亭に遊びて

秋雨や追出す壁の濡鼠

紅葉　紅葉ゞや雲の下てる高雄山
紅葉見や顔ひや〳〵と風渡る
紅葉散て竹の中なる清閑寺

長岡に至りて

長岡や蔭行我をてる紅葉
山里や畑斜にうすもみぢ
水鑄江やうへは柞の薄紅葉
ほの見るや岩にかゝれる蔦もみぢ

さし出の磯

黄昏や水にさし出のうす紅葉

雜　むら端や黍がら折て風さはぐ

穂屋の祭に至りて

御射山やきのふは薄けふは里
苅萱はまことに秋の花なるぞ

石尊

雲霧の袂に入や雨降山

磯邊に至りて

穂並よき秋に鶴聞宮居哉

酒折の宮もほどあらざれば

火ともしの神もめづらん月今宵

永き夜や目覺ても我かげ斗

中の實や空しく土と成ばかり

卯辰山麓にて

花の香や桔梗にうつる人通り

飛鳥山

秋の日やたることなくて飛鳥山

卯山眺望

山もとや櫻にかゝる秋の雲

角田川

聲も立ず野分の朝の都鳥

行秋や見歸れば舟の跡もなし

留別

名殘多し秋もよし田を出る時

散にけり柳縮ぬる時なれば

夕雨や奥野ゝ里の忍ぶ中

剃髪

剃捨る白髪に露のうく日哉

髪なへして間なきに

別れ蚊のつよくさしけり捨坊主

終に身を啼破るらん秋の蟬

旅行

草臥て月にも啼ず旅烏

布施の海

いにしへも月いにしへも布施の秋

越中馬見井

簗小屋の火にもならぶや溜り水

只ならぬ蹄の跡や水の月

南坡庭を訪ふ

おもしろき庭や花野の中舎り

けふや仲春下のまれきにしたがふ
といへ共、眠るのみ余事なければ

木兎や何きゝためし事もなく

留別

便せん月に二見の硯石

過去し楽然、夢に發句を語ける
に

なき人の發句きゝけり秋の雨

小町有り式部ありて、たゞみなの才
ある國なりければ、今もまなばゞ
なんぞおさる事のあらじと見へ（マヽ）婦
人に送る。

筆取て千艸の花におくるゝな

稀月亭にまねかれけるに、酒は常
の産にして、菊は主じの愛す所な
れば

流るゝも酒の泉歟菊の奥

高野尾村にて椿の直なるを見出し、
主じに是を望むに、こゝろよくあ
たへければ

杖に切て實は捨て行椿哉

皷が浦

くれ行や皷が浦も秋の聲

斗疊庵にて

秋風や川邊の庭に老二人

東溪亭にて

枕して紅葉見初るうらの山

冬

時雨

湖口や日の有うちを夕時雨

初しぐれ目にふれ身にもふれにけり

驚かぬ網引のさまや初しぐれ

時雨ゝや角まじへゐる野べの牛

時雨ゝや竹かつぎゆく鳥羽縄手

時雨ゝや牛に付たる油筒

行雲のはし亂ッ、初しぐれ

土山や唄にもうたふはつしぐれ

神祇釋教といふ題に

御首てる正面通りしぐれけり

しぐるゝや宮に兀たる鬼女の面

こがらしや日の梟の地に羽うつ

凩

木枯の中に靜けき朽木哉

枯野

木がらしや西山淺く夕附日
かれ〳〵し野中に松のあらし哉
枯て猶淸き野守が鏡かな

冬木立

拾果し景色でもなし冬木立
此うへは折るゝばかりぞ冬木立
雲起る谷の上なる冬木立

炭

きり〳〵す振落しけり炭俵
何事もいはず炭賣翁かな

千鳥

聲立て氷を走る千鳥哉
住なれし人はよく寐て小夜千鳥
貫之のうき旅ゆかし啼ちどり
聲かれて朝日に眠る千鳥哉

水鳥

水鳥や何はなくとも夕ながめ
浮寐鳥岩に身をうつ夜もあらん
月澄や音なき水に浮寐鳥

霜

霜滿て竹靜なる夜也けり
初霜に木の葉撥搜し百舌鳥の啼
山里や焚木の霜のもゆる音
赤〳〵と霜氷りけり蕎麥の莖

妙義山

橋の霜誰が落してや炭一ッ

岩鼻にて

白雲や埣は岩に霜柱
霜氷る岩の下道踏日かな

四條川原にて

ならはせや霜夜を舁く薦かぶり

氷

更行や氷を渡る獺の聲
折沈む竹のうへなる氷りかな

砥澤

切くだく上は氷の砥山かな
氷りけり實のらぬ稲の臥しまゝ

我門にひとつの駒を得たり。千里の行先を壽く

氷にもおくれはせまじ駒の聲

衣が崎に至りて

かく見るは氷らぬうち歟浪の不二

諏訪湖

雪

不二見んと氷に立や諏訪の海
星きら／＼氷となれるみをつくし
白妙は遠山而已ぞ小雪ちる
薄雪やまたかたちよき峯の松
所／＼雪の中より夕けぶり
おなじ色を重／＼て雪の山
更行や雪に羽抑く鳥の音
田のうへを啼迷ひけり雪の雁
住ばすむ事ぞ谷間に雪の里
沈ゝほどは積らぬもの歟雪の舟
猪の倒ふしけり雪のはら
角振てあゆみもやらず雪の鹿
雪ちら／＼日に降暮て月に降
此ために根はしがらむか雪の竹
北山は小雪散らん軒端吹
夕暮や雪を抓て枝の鳥
北の雲黒きより雪の降初る
見るうちに降うしなふや雪の梅
曙や所／＼に雪の塔
舞扇雪にかざすや下川原
日比見し松も深雪の高根哉

其雄に訪れて

踏分て何見る人ぞ雪の山

文鵰亭にて

閑さや垣の外なる雪の舟

留別

驚てたつ日も遅し雪の山

安田の綱渡りにて

降ふるや雪をたぐりて渡し守

鉢扣

いかならん祖師の心ぞ鉢扣
鉢扣月下の門をよぎりけり
竹買に來た親父也鉢たゝき

臘八

臘八や今に迷ひを傳へツヽ
臘八や仰向ばはや星もなし

冬の月

たゞひとりすめる景色や冬の月
寒月や狐なが啼地に倒る

雜

車蓋が艸戸を扣きて

寒くとも戸ざすな庵の松の月

枯芦の日に〳〵折て流れけり

かれ〴〵や竹の中なる草の蔓

歸り花一輪をしむ薪かな

更行や机の下の桐火桶

こつ〳〵と咳する人や帋衾

欅やことにをかしき野夫の様

日影もる壁に動くや冬の蠅

矢田の橋の邊にて

冬の野や何と臥べき中の莖

素然一周忌に

廻る日や雪の樒に泪そむ

留別

語り足らぬ朝戸出寒き山邊哉

一艸亭

氷柱なき軒にふたゝび入日哉

有る宿に立よりて

舍りうれし時雨乾かす我衣

甲斐より信州へ越る

一本岩又は天の柱ともいふ所にて

數十丈見上れば岩の垂氷哉

雲かゝる天の柱の冬木だち

神無月廿日あまり、故翁の湖東行脚の跡を慕ひ、日野山の邊を過るに、剝れたる身には砧の響哉　さ聞へしも今はむかしにて、目出度御代のしるしなるにや。山も岡さなり、林も畑さかはりて、しら波の煩ひもなき折から、紫英亭にいたりて、暫く時雨をはらす。

剝れざる身に冬しらぬ舍り哉

臘月曾陸亭をさぶらひはべるに、よろづまめやかにて、日もゆふぐれになりければ

かへらむとおもへば寒しやまの庵

雜之部

日もたゆし白雲動く不二の形

つゝしまん物聞山も軒近き

江島

去がたや夕日の不二に汐がしら

中嶽

つく／＼と岩立神の杉間哉

日光

日面も日うらも照す宮居哉

不斷櫻

咲ば散散ば咲つゝ此さくら

上諏訪

俯向て聞やふしきの神の數

七面奉納

月花に神も數有面かな

善光寺

よごれたる我にも法の光りかな

杖突坂

歩行にせん杖突坂のためし有

送別

旅はさぞ土に臥日も有ぬべし

金洞山

雲埋む岩木の下の旅寐哉

或人の宿にて

木に草に花も實も有合り哉

車蓋、三聖の像を彫て、開眼の句を乞けるに、故翁の吟をおもひて

月花の道守初ん聖達

客中

雲水やよろづに心とゞまらず

（跋）

天飛や雁の翅の我にはあらじを、針目衣引つくろひ、武藏野の月見まく、秋風たち初る比よりおのがすみ所出て、式しまの流汲こち〳〵の人〳〵を驚かし、一夜二夜と日をなんへにけり。こゝはも我大人十とせ餘り先に、杖曳給ひけるとなん。そが時書給へるとの葉ども見るにあやに、あやしきまで雅かに、艸〳〵のさまありしを、こと〳〵にかひしるして、立歸る波の磯づたひ、拷領巾の白子なる宮崎氏に立よりて、そを白地に謡に主じ早く近比の作をも集め置れければ、よろこほひあはせて櫻木にえりぬ。おのがともがらは見るともあかめや。

亭ゝ坊車蓋

牛化發句集　後編　未刻　車蓋
牛化文集　未刻　全
俳諧世説　牛化房選

天明七丁未正月吉日

皇都書林
御幸町姉小路上ル町　菱屋孫兵衛
三條御幸町西へ入町　菊舎太兵衛
合刻

曉臺句集

上・下

臥央編

臥央曰、世に三傑集といふもの有、とりてよむ。雪中・半化・暮雨二叟の句集なり。半・雪二叟の句、我是をしらず。吾暮雨叟の句をとる事、わづかに六百餘句、その馬の烏に啼、烏の馬に嘶もの、百七十餘句、いかにしてか其謬を正すべき。予曰、暮雨巷句集を木にえらば、世おのづから其訛を知べし。央曰、さる事有、師世に在せし時、これを梓上せん事を問、師いかゞおぼされけむ、許し給はず。予又曰、其事ありてそのことをなす、はゞかりなかるべし。央、よろこんで暮雨巷句集を梓す。

士朗

曉臺先生發句集　上

春之部

歳旦

ふり袖のやまとに長し日の始

太箸や後トにひかへし檜木山

鏡餅母在して猶父戀し

神の春楠もいはほと成てけり

人中の龍駈出む四方のはる

物わかれ、人語はじめておこる。

元日やくらきより人あらはるゝ

元旦龍門にありて、十峯の初日をあふぐ

忽然と活たり〳〵はつ日かけ

武陵迎春

さしの名殘をしまむと再可子が樓上に遊ぶ夜、門〻に鈴ふりならし、清祓して大路をわたるものあり。

とし越の旅ゆきなりに辻はらひ

猶曙のけはひ見てむさ酌て、大(太)陽を待ふたりみたり。樓は隅田川の西岸に造り掛て、下總の國の限を見さけ、十字街頭に市聲をさぐれば、さながら清して閑なり。

我と人と深山ごゝろや初日影

よろこびの雲見えそめて花のはる

いはゞいはむあら玉の夜のはじめとも

年頭元三の日每に蕉翁の筆跡を開て、心ばかりの鏡もちひなど備へ、花の壽を調るに、去年はつゝむる事の有て、かの一軸は宗祇法師が露の一字よりも、はかなくなしつ其料に宛ぬれば、きたなくも一行を謹書して、改る心の玉さもなせるなり。

此心我蓬萊のはな柑子

(偶)寓樂府臺に歸れば、年の壽をもてなさる。思ふ所紀氏が客中にあり。

おしあゆはなくてもあらん干頭鱠

松のひまほの〳〵見ゆるはなの春

甍甍うごめきて春陽を伺ひ、閑人鏁て御慶を避く。

むしけらもさし覗け此初霞

元日の子の日めづらしさて人〻を具し、東野に出、さもに小松をさりて

根つかせて見せばやけふの子の日草

若菜

若菜舟一ふしあれや歌之助

京縞の頭巾で出たり薺うり

わかなつむ人をしる哉鳥靜

若菜つむ人落合ぬ紙や川

わかなの日晝から雨と成にけり

はつわかな鯉も切べき日なりけり

此門を名乘してゆけ若菜摘

雨中人日

褄(ツマトリ)や傘をさゝせてわか菜つみ

松かけにならびてうたへはつな摘

わかなの日三輪の酒うり出初たり

腰みのや己が磯田の若菜かり

この宵、朝はひさきは事替りて、さかゆく民の薺打はやす音のあやあるも、手つゝ成もさえ／＼しく、一入ゆたけきおほむめぐみの　皇朝こそ有がたけれ。

玉簾にきこしめすらむ薺打と

年のはるに春たちけるを

けふの春きのふと過し初若な

うめ

もどかしき梅二三日の莟かな

梅咲て十日にたらぬ月夜かな

火ともせばうら梅がちに見ゆるなり

曉のうめがゝふくむ板戸哉

御文庫のこなたおもてや梅の花

かなぐつて捨る蔓ありうめのはな

長嘯の名殘もあらむをかの梅

浦のうめ花片つらにさきにけり

梅折て偕歸るかたは雲深し

突立てぬしなき杖や梅がもと

うめちるや草堂に燈歸し行

我宿のうめはいつさく梅の花

ふし見にて

梅林を出て懷に梅のつぼみ哉

梅林によるのほこりや薄ぐもり

正月十一日熱田踏哥

梅がゝに鼻息寒し笏拍子

うめがゝやつぼみはさまるはかま腰

聖廟法樂　四句

信仰を漢土までもうめのかぜ

うめさくら落花を踏ぬはやし哉

手向山有明ざくら咲に皃

花鳥のまことを筆のはやしかな

八十賀

梅柳八十からも壽む

柳

大黒の讃

うめやなぎ二にさかづき初音の日

題　壽梅

水潜る節くれうめのした枝かな

花はひとへふしくれうめの古根より

ほつかりと黄ばみ出たり柳の芽

二日見ぬ程や柳のおもかはり

やゝしばし氣ぶりをふくむやなぎかな

のら〳〵と柳見に行つゝみ哉

太刀の柄に手かけて潛る柳かな

吹あるゝ竹の中より糸やなぎ

籬前孤柳

見所はきのふをとつ日柳の芽

さし柳はかなきものゝ氣力かな

青柳に山路のこゝろはなれたり

人去て野中の柳風くらし

火燈があぶらかけたるやなぎかな

篝火のとほり付べき柳哉

武州八王寺(子)　星布

曉のほしを綰りしやなぎかな

隆達が破菅笠しめたのかつら長く傳はりぬ。是からみれば、あふみのやあだし涙、寄せてはかへる涙、淺づま舟の淺ましや、嗚呼、又の日は、誰にちぎりをかはして色を、まくらい恥かし、僞がちなる我床の山、よし夫とても世の中。

こは北窓散人が已圖して、自此ばさら言を其肩にものせし風情もしたはしくて

しのばるゝ人聞そへて柳かけ

題　里祭

藪入

藪いりを獅子の口より見初けり

やぶ入や木履踏かく人ごゝろ

はるのゆき扇ではらふ衣紋かな

春雪

春の雪飛鴈の行ヮ降崩し

馬の尾をむすび揚たる雪間哉

雪解 雪解て沖中川を行方かな
ゆきとけや深山曇を啼烏
月曇る端山の雪解なくからす
古草やはるをり〳〵は雪の露

春日 日の春のちまたは風の光り哉
はるの日や梅のあたりのつゞみ箱
袖だけのまつの中行春日哉

秋は暮なむとする程燈とく立たるがよし。遲ければ老の心をへらして悲し。冬は又猶寒く、夏はうち渡る人のたそやかれやと定かに見わかるほどに、遠くも近くもきよげに、燈しきらめきたるぞ涼しさ又あらじ。春こそ夫にはかはりめあなれ。柳のをぐらく、花のしら〳〵とにほひ殘つ、見やるかたはものわかず暮しづみて、風のさゝやかにおもてはこび、水は音のみ山ははるかにひさるまでも、はしゐしたる春のこゝろこそいさふかけれ。膝のまはりかいくらみゐるまゝ、燭などとり來たる本意なし。

春のくれ 我ためにとほし遲かれ春の暮
こゝろほどうごくものなし春の暮
古琴やねずみ出て行はるのくれ
はるのくれよめりぎつねのくさのあめ

春夜 春の夜の月も推なり梅柳
はるの夜の月より明て天龍寺
春のよを雁おひあかす野守かな
はるの夜ぞひとつは雁もかへり來よ
春の夜や何事もなき三輪の杉
はるのよのうそひめ戀ふる梟歟

伊勢神宮參する人をおくりて
春の夜の月に宿かれ花柑子
はるのよやぬしなきさまの捨車

春閨怨
閨ふかく牡丹にいどむ春の情

ともし火にこがるゝ蝶を夢路かな

春月

竹の葉の重るやとしの二日月
うぐひすの魂ゝも奪ふかうめと月
うめに月月をうらなる夜なりけり
梅に月朗詠うたふ人あらむ
松とりて朔日ごろの松の月
くらき方はけぶるがごとしはるの月
へつたりとかすみかゝれり二日月
おぼろ月浪のうき網よるさへや
おぼろ月宇治の山邊を行ひとり
おぼろ／＼ゆき一すぢのほそ江哉
大ぞらにかりがねくらし春の月

竹にふくろうの畫讃

衆鳥花に醉り。ひとり竹間にすめるものは

つく／＼と何おもふ竹の月朧

鶯

けふはとくはつねうぐひすねぐらせよ
鶯の觜あらひせり紙や川
うぐひすの聲くれて後日は入ぬ
鶯や竹の園生に何のたね
うぐひすのほそ脛高に山路かな
うぐひすやものゝまぎれに夕鳴す
鶯と兒見合する折戸哉
軒ちかしきのふの初音うぐひす歟
うぐひすの七ッとまりや清閑寺
鶯や人やり過す跡の聲
うぐひすの鳴てかくれる伏家かな
鶯のひよひと兒出す枯葉哉
うぐひすのけろ／＼と初音つくり哉
うぐひすはみだれ聲なり小關越え
うぐひすや日をほちつかす風のさえ
鶯の咽ふくらめしゆふ日かな

霞

八重霞日落ていまだ夜ならず
來てみればかすみの松に日暮たり

湖上吟

霞凝てものあらはなるうなへ哉

春風

山くれて霞下せり大炊川
水の面にかすむ日の形みえにけり
涌くれてかすみながらに火灯りぬ
かすみこめて薄むらさきの匂ひ哉
はる風の夜はあらしにみだれけり
里の子の松葉いたゞく春の風
春風や淺田の小浪あさみどり
はるかぜに吹れて落す羽織かな
高圓や峯の春風くも結ぶ
雛の尾に見るまでぞはるのかぜ
はるかぜにおさるゝ美女のいかりかな
明る野や兎の尻に春の風

春水

鳥の羽をみれば行なりはるの水
春の水東寺の西にみる日かな
うと／＼し日の形みえて春の水
頭巾着て誰やらわたるはるの水

亡父三十三回

めぐり來て髮膚にかゝる春の水

烏雀、屋をめぐつて噪ゝと鳴、葛藟、根を絶て末葉色を失ふ。平安に夜半亭蕪村子なく成ければ、俳諧の子等妙福の志を山のごと積て、台嶺の麓金福精舍に法莚をまうくときこえしかば、年頃交游(遊)忘年の情に堪ず。手のものかいやり、國を出るより耳後に風を起し、其日をあてゝ洛に至り、ともに追慕の營をなす。又うへもなき峯のあらし、法は一味のともし火にかゝれば、梵聲岩にあたつて清響あり。人語水に落て烟霞を披く。是皆故人が趣なればぞ、岡雨そゞろに我を牽て對するを觀れば幻ゝ、たゞ孤松高調有のみ。

影とらむとすればはるの水黄なり

隅田川漁火

白魚

しらうをの骨身を洗すかゞりかな

しら魚やうき世の闇に目をひらき
軒うらや干鱈かけたる鹿の角
信樂の茶うりがさげし干鱈かな

春雜

春の海邊何に集る人一里
はるの海の眞中に有て目覺たり
鼻啜ふ顏に罪なしはるの人
口くれたり三井寺下る春のひと
春の情うち返す三井のあらし哉
はる寒し凪の笹山ひるがへり
春さむし貧女がこほす袋米
人疎し蚕飼ふ女賢ならん

七條あたりにて

夕がほの種うゝや誰古屋しき
花か實か接木をめさる人心
涅槃會や雲下り來る音羽山

椎嚢子七十賀

千代傳ふ親は親なり芋がしら

凧巾

切てやるこゝろとなれやいかのぼり
松かぜのうしろになりぬ几巾

出代

出かはりや君が花田の五尺切

春雨

たれ／＼が夢うらきかむ春の雨
春雨や枯木の上を降くらし
旅人の夜川や越るはるの雨
はるの雨肝積(癪)持をなだめけり
春雨や猿子をいだく齒朶の露
手はじめは翌の茶山をはるの雨
蓴あり藻魚いとより春の雨

木の芽

倒木の芽を厥岸のくづれ哉
蘆の芽に鴈の古屎なつかしや
若草の中にこもれりをみなへし
わかくさやくづれ車の崩れより
青艸の上につもれる日數かな

龍門

誰人ぞ芹をさげこむ竹の門
蛭肥て芹ふしたちぬ日向水
茅ばなぬく小婦が禿いや瘦し

蕨

夜あらしや光偃す茅花原

負ふた子に蕨をりては持せける

わらび折に來ばこよ菴は叩鉦

菫

奥山や人住あればすみれぐさ

菫つめばちひさき春のこゝろかな

二軒茶屋といへるを皆ゝ題して

打ちらす酒千變すはなすみれ

竹の葉の花にかさなる菫かな

組落て雀はなかむすみれかな

燒野

なつかしや燒野のすみれ活かへる

人の親のやけ野の雉子うちにける

雉子

夜のありか又鳴かはすきゞすかな

つま戀やひと羽に雉子の山移り

ねむり／＼さして行方や雉子の聲

三弦の川舟過てきじの聲

きじ鳴やうしろは須磨の藻塩草

夜をこめて關屋にさむし雉子の聲

茨五尺雉子のとまりあらはなり

名しるしの詞

道能つとむる時は名四隅に渡り、人能和、和ればよく人を益す。よく勤て風雅の信を忘れざれとなり。

雲ひくし日暮てくれぬ雉子の聲

雲雀

雨雲やをぐさかざして鳴ひばり

猪垣の崩れ口よりあげひばり

舞ひばり山ゞ家の煙はなれたり

園外に一室あり、号て松齋といふ。

四壁三疊、めぐりに春艸なびき合て、水南にながれ又東に流る。菜の花ちら／＼と咲まじれば、田土叩く女どものだみ聲に古唄うたひ出、兎とらへるあらし、このまふしかくれ、雲雀鳴夕ながめも、倉廩はつかにそむけ、市聲百歩を隔ざれば、かならずひとつとして打見うち聞にはあられど、閑にひかれて唯我おもふ所也。顧るゝもの、き

はめて盡る期あり。心に觀るものは春の日の長しさ、いづれしなあらたまり、夜色又情を移せり。松齋とゝ一松齋、一躍して雅境に入。

陽炎の物みな風のひかりかな
かげろふにほの有明の月高し
かげろふの中來てくらむ戸口かな
陽炎やはや水蓼のけしき立
かげろふの蜉蝣を育る晴間かな
陽炎やまだかた形のむしの息
かげろふや卵の虫の巣を出る

琴字が墓前にて

かくばかりかげろふも胸をさすもの歟

猫戀

戀ねこのほだしも廿日ばかり也
こひ猫やわが古寺になき別れ

胡蝶

蝶とんで風なき日ともみえざりき
掬はれて行風情ありかぜの蝶
ともし火にこがるゝ蝶を夢路かな

春鴈

歸る雁蝦夷が矢先に待るゝな
ゆき果しとおもへば雨夜の雁ひとつ
春寒し比良の日向歸るかり
西山や日の上を行雁のすぢ
わかれ〳〵まつ山越えて歸るかり

おのれ曉臺、いへの國に母もたり。夜に添日にそひ、おもひまぎるゝかたもなくて

啼こゑの母ありときこゆ雲に雁
降雨は夜を行鴈のなみだかも
雨夜の鴈なきかさなりて歸るなり

紅梅

紅梅や照日降日の中一日
はなみちてうす紅梅となりにけり
紅梅や檜垣崩れておぼろ月

椿

赤椿咲し眞下へ落にけり

梨子

滴せばしづくと絶むなしの花

海棠

海棠や誰が置たる稽枕

田にしうる聲や竹田の遊女　と臥

央がかつぎ出て、是におさの句あれといへるに
親なしと答ふ淀野の田螺うり
水口にころがりを打田にしかな
田にし鳴を田のたむぼゝ打ほけぬ

蛙

蓬生に身をうち付てなく蛙
簪にかはづの小腕おさへたり
果なしや今朝に成てもなく蛙
へしをれの河竹傳ふかはづ哉

菜花

菜のはなや人遠く藪疊はり
なの花や牛見え行葬の人
菜のはなに目當の柳風くらし
轍ゝ雨の菜のはなながるなり
山吹の小家なの花の街かな
菜の花や市なぐれ行餒（アヂレ）烏賊
なのはなやかへり見すれば邯鄲里
菜の花のはつ〳〵にみゆる都かな
なのはなやくるればもとの朝ぼらけ
城春にして菜のはなさきぬ外廓
なのはなにしのび女の戸出哉
菜の花の脊戸を流るゝ雨間かな
なのはなや南は靑く日はゆふべ
菜の花や是等も地主の木の間より
なの花や盃持て畈（アゼ）うつり
山もりがなのはなさきぬ鯨汁
年〳〵や里の山畑うちのぼり
畑うちや鳴呼陵のまつの陰

臥央が住居ましける時
子母錢や置て巣立る軒乙鳥
燕の面なぬらしそ浪がしら

柳に燕の畫讚
花の醉さましに來たか夕つばめ
しのび路のやまぶきかゝる髻かな

山吹

題 山家
芋汗に八重山吹の詠めかな
白雛の山ぶきちらす逆毛哉

散ときはやまぶき低きうらみ哉
おほかたに山吹ちりて起ならひ

三月

鳥賊の暑ながるゝ小家の節句哉
雛

雛の間にとられてくらきほとけかな
ひなの間の客や桃かたさくらかた

不夜樓にて

雛のうたげ齡（トシ）の欠伸ぞ恨なる
醉ざめやほのかにみゆるひなのかほ
宿坊を今朝は雛の一座哉

加茂の下流に遊びて

誰か有汐干うつさば河原松

ある人の曲水の宴まねびて遊ぶと聞えけるに、句を乞れて

曲水に秀句の遲參氣色あり
雛合
とり合せ目もみえず成て哀也
桃
關守は〱いづこもゝのはな
四五尺の桃はなさきぬ草の中
神垣にもゝみる里はなかりけり

ふと見にて

桃つら〱花盡る處水長し

梅さくら、多く名のためにめぐりな圍れ、あら垣結そへ、時世に朽なむごすゐ程、若やかにうゑつぎなどせられて、人のため又苦しき類ぞ歟。

桃のはなひとり古人を名乘せず

堀尾氏が室六十賀

うはさせば桃に王母が影さゝむ
桃の花折手はづれて流しけり
月による氣色ともなくもゝの花
此ごろは夜雨〱や桃のはな
華
初はなや花の邊の落葉かき
花のゑとたちされば四方は夕曇り
土佐が書の顏に扇やはな見幕

雨日花鳥山に遊ぶ

中〱に寒きぞ花にたのみある

鴨の下河水樓に遊びて、廿日の月霞いさ深く負ひてなぐらく、さしのぼるをみて

春の哀れ花の東に見る夜哉

洛東寺院に遊ぶ

はなざかりさゝらに狂ふ聖あれ

東山の花見にまかり、やすらひなれる程、雨のさゝと降出ければ、手にあふもの引かづき、我も人も木がくれぬ。

花人をうづみてひとりまつの雨

夕雨やはなのあたりをうちかすみ

ものなしが世を行形に花見がほ

都貢が宮所に赴くを

華を踏て岩に角なし鈴鹿山

樂馬が一周忌

花鳥の中も亡日はめぐるかな

故常が父身まかりける悼

春のはな法りのたすけとみるまでぞ

（維）惟駒が別業に遊ぶ

花に來て我は都のたらしかな

再び家の國にかへりて

華は根に我に五尺の地を得たり

入門の其風・子富によす

おもへたゞ心はなれてはなもなし

大膳詢大いたはりに臥て四十余日、復せず、ついに沒す。我相ちなむ事四十余年、悲しいかな、共に客中にありて夜に日に抱きたすけ、終に臨終の唱名なす、むつ嗚呼、天年こあらば、さすがに交情の思ひたれりさせむか。其友を待て櫬のうごかざりし遠きためし、今日唯今の上にもしからん。悲しい哉、客中鳥雀屋をめぐって其蘗隈く。　予時天明壬寅二月廿日於ニ東武ニ亡命

哀傷櫻十詠

野送りして歸りあひけりはつざくら

目にいたきけぶりの末やゆふざくら
夜ざくらにむかし泣よるひとり哉
風のさくら祈も終に見直さず
雨のさくらきのふをおもふ現人
さめ〴〵と涙ふくめり朝ざくら
嗚呼さくら枳ともならで江の東
かはり果し杖よわらじよやま櫻
きさらぎの有明ざくら見果けり
をらばをれ遲かれ疾かれ散さくら

双か岡懷舊

華と我とわれと櫻の影ふたり

鈴鹿山にて

深山路やさくらは花にあらはるゝ

山中辻堂に憩て

千日の櫻さき出ぬ叩鉦

鈴鹿峠は伊勢こ近江にさかふ

花のうへに海少あれいせ櫻
寒くあれど走井のさくら咲にけり

嵐山

けふ來ずばきのふの花のあらし山
花に歎き又花を呵す天龍寺
戀とはなにしづめりあらし山

日くれて稻荷山にあそぶ

散をこそ夜のさくらの誠なれ

やすらひ祭見にまかりて

やすらひの花よ踏れなあとなる子

春も三日立ぬ。つさ鷗巢を訪ひ侍りき。主は梁塵抄なむ顏の邊りに押當、轉寐なれりけるに

西寺のさくら告來よ老鼠
下臥やさくらをいだく月の暈
半天やさくらにかゝる月の暈

廿年を經て老婆に逢ふ

散につけさくらにとしを語り合
ちるは〳〵嵐に峯のはなのころ

遊二古嶺一

うへもなき此世のさくら咲にけり
をとつ日の花の中より遲ざくら

枇杷園中花見

ほつとりと咲しづまりぬおそ櫻
磯山やさくらのかげのみさご鮓
影すむやうぐひながれて散さくら
我に續でうろたへものや夕櫻

園亞相公の御前に有ける日、南園堂の櫻の色もうるはしきを、紙におしたるまゝにたびたまひける時

むかし今のにほひいたゞく櫻かな

寛政庚戌二月、みよしのゝ山ぶみせばやと思ひたてるより、くつあゆび片結びに結びもあへず、先佐屋さまりに仙兒亭を驚かし、旅心定れば

家ざくら有明の月とみて立む

みよしのゝ山踏してはるかに、南帝の御廟を拜しけるに、納言宰相の名をだに見る影もなき叢に埋めば、往來悶雨さし、幻にむかへてたゞ恐みかなしめるなり。

鳥聲を吞て地に有春の雲

いかひ・轟の里を隔し櫻の渡しをこゆるに、山は遠からず近からず。妹なり背也心通はして

山鳥のねに行かたやよしの川

事紅子東行をおくる

君きそと待か御坂のおそざくら

東行留別

この別山ぶき鈍くふぢ愚なり

宇都の山にて

うつの山一日春と別れたり
行春やつひに根付しさかの松
ゆくはるや駈出しがほの古兜巾
風おもく人甘くなりて春くれぬ
どちへ行雲とも見えず春一日

春なしと見やれば落る木の葉有

とりよれぬ春の行方や雲に鳥

生洲に遊びて

鱗や理の命をくれの春

春の名残水がくれて香はよもためじ

はるといへど火ともすほどに暮し哉

倫五が一周忌

新茶古茶夢一とせをかたる日ぞ

春は行何やらひまの明ごゝろ

夏之部

更衣

更衣ひとり笑み行座頭の坊

更衣いきたうなりし隅田川

まり子にて

更衣まづ宗長の塚に詣ッ

袷買ふて京を出たり姿もの

幸の謡講なりころもがへ

酒飲の膝豊過ぬ更衣

むかふ宵のひとり落たり更衣

武藏の玉川を越る日

玉川の浪かけてけりころもがへ

よしのゝ山廻りせしに、清閑忘れがたきは、圓居の旧栖、とく／＼の清水。

かへをしの衣や苔の露しめり

郭公

ほとゝぎす其夜を風のさわがしき

郭公野山をものに戯れす

時鳥なき行夜半の一かすみ

長安万戸子規一聲

ほとゝぎす南さかりに鄙くもり

東都の子規へ啼かさなりて、風情おされば

かつしかに行てきかばや郭公

かはかふの聲やつゞきて時鳥

蜀魂古巣は泊瀬かみよしのか

ほとゝぎす翌も忘れな嶺ばしら

都貢が挽歌

ほとゝぎす楮に物を書やらむ

子規憎しとおもひ捨し夜に

時鳥終に憎しとおもふ夜や

日比經て鳴日に疎し郭公

ほとゝぎす聞おくるゝも今幾夜

ほとゝぎすあらしにかゝる夜の聲

聲くらし人まどはせのほとゝぎす

子規啼やぬなはの薄加減

故人台界子は、もと錢おさへもしつゝ、くつばみかいさらへし友として、しかも道の兄なり。ひさゝせ我身上の變にかゝりて、他の國にさすらふ事廿とせあまり、亡人嘗て俳諧にすゝみ一派に名あり。我再び鄕に歸る。台子沒す。されば一旦一夕雅情をまじへざる、千歳の遺恨是也。其男岱青子繼て風流にすゝみ、道を予に隨て學ぶ。道の巧拙をもて靈、不滿の白眼することなかれ。予ひさたび天下の會頭と成て、嘆ければとも名四方に有。是をもて足れりとせよ。聞、ことし今月忌辰にあたつて孝子岱青旧知を催し、法莚の俳諧をつとむと、頓懷旧不レ堪。往事渺茫三十余年。

ほとゝぎす返せむかしをしのぶ山

子規啼や有磯の浪がしら

郭公鳴や虚空を大ごゝろ

蜀魂ひるはねぶりも落ぬべし

暁に魂入ぬほとゝぎす

十日ほど淡路をさらず郭公

天明己巳二月夢想 一題二句

御庭上の二樹 此所夢中に不調

橘やまたうへもなきほとゝぎす

花さくら時に左近の子規

六月八日大津より古園越えして初て郭公を聞

うぐひすのみだれごゝろやほとゝぎす

焦尾塞前

逢ぬうらみ血を吐までぞ郭公

得がたき香に一片なわかち給へけ
る菊溪の主へ申送る

うすけぶり雪にきくかなほとゝぎす

閑古鳥

ほろ〳〵と夏の落葉やかんこ鳥

客中

閑こどり我行かたへなきうつり

かんこ鳥啼や花なき野にもあらず

人見ずば汝もなくまじ閑古鳥

草ほこやゆふ越えゆけばかんこ鳥

都鳥の我を呼かも松の奥

家に答ふ聲ともきけり都鳥

牡丹

華暮て月を抱けり白ぼたん

はなやかにしづかなるものは牡丹哉

罌粟

かげろふにゆらるゝけしのひとへかな

露たかき麥の見こしや芥子の花

銅駝坊中にて俳諧つかふまつりけ
る日、老人白圖が此道に志深かり
けるによりて居士さ申事、
台命にまかせて

龐居士が衣に倣へひとへけし

嵯峨にて

しら芥子に焚火移ふや嵯峨の町

汐かぜや砂ふきかゝるけしの花

めら〳〵と火さゝば燃む一重芥子

けし咲て並能なれば散初め

杜若

鼻紙に足ふく人や杜若

鏡立て見ばみむ花よかきつばた

むかし女はらからすめり杜若

わりなさや道〳〵開くかきつばた

すつかりと切ものにしてかきつばた

かきつばた穗麥の髭に立ならび

芍薬やはきもの失る水驛

芍薬に褻するゐたる旅路かな

夏艸 壁やれて有たけ艸の四月哉

宰馬が身まかりけるを悼 壬寅三月廿二日亡命四月四日東武ニ告

死のみちや我も百里は遠からず

あはれ野や五形にもどす花の露

卯の花 卯の花の草にかゝれりにはか水

うのはなの中行嚢のしづく哉

山家にやどる

うのはなや妻木が中の爐の明り

夏野 麥かれて夏野おとろふるけしき哉

麥 宵闇ぞ最中也けるむぎの秋

灌佛 花御堂賣僧が工ミ凡ならず

一夏 はつ瀬山一夏詩病僧あらん

短夜 みじか夜や人現なき茶師が許

月は月夜は短夜と別れけり

短夜やいつ薙のかいわり葉

冷酒一盃 鮮肉十片

松魚 板の間のはな盜人よはつがつを

又嬉しけふの寐覺ははつ鰹

鰹よぶ浪よあらしよ屋かた舟

葵祭 下ゝの下のかざしもあふひ祭かな

若葉 花七分若紫にわか葉さす

人媚て朝安す新樹陰

わかばして浮世に心うつり哉

若葉山ほとけとみしは古狸

雨雲のかき亂し行若葉かな

わかばして水とり雲のいそぎ哉

葛のわか葉吹切て行嵐かな

夏木立 雪を嚙て一峯こえぬ夏木立

夏雜 みどり長く夕雨廻るあらし山

桑葉こく盲かはゆき蠶飼かな

伊勢世義寺にて

水札の子の淺田に渡る夕かな

筍 牛舟やたけの子時の佐渡便り

笋やひと夜にかつぐ八重葎

若竹 わか竹は月に養ふ氣しきかな

若たけや一宇の灯深からず

百合　草臥や百合になぐさむ鳳來寺
容ざまにゆり咲て日を葉るかな

金銀花　見る人のみるものにせよ金銀花

蓼　針の有こゝろに蓼のほそ葉哉

安也免　きのふ見し妹が垣根の花あやめ
花あやめ五尺の露をあぐるかな
はなあやあ五尺曇りの薄匂ひ

蟹取歌

蟹とり〳〵渥蟹の　さわたるきはみさわたりて
渥の小つゝら花あやめ　あやめしどろにふんとろん
扱しもいくら苅得てし　子をとられぬるおや蟹の
八ツの足ずりあはれしも

温泉の水を出て、さゞれ石の巖に巾を並べしが、今は龍門の泥に眼をぬぐひて、鋏いさ鈍からむ。聲あらば汝あなうさ音にも鳴らし。子をとられぬる親蟹の、泪や泡と吹ぬらん。仇かは腰の黍團子、蟹取〳〵猿が島をおもひしるらめ、思ひわくらめ。

夕雨やをかに出揃ふ蟹の穴

端午　淺香にて
かつ色やかつみかけ行負具足

客中
あやめかけて草にやつれし枕哉
一町の貧者先だつのぼりかな
草の戸のくきより出て蓬ふく

薬玉　薬玉やむすびてひさるみだれ箱

粽　粽はけて淀のゝあらしわたるかな

競馬　くらべ馬神たのみとぞみえにける
埒明て目の塵はらふ競馬哉

竹酔日　竹植て注連にさす(さゝ)はや琴の糸
竹うゑて元政坊をおもふかな

女子をうしなへる沙漠を悼
辻がはな目なくなりたき思ひあらむ

帷子　かたびらに松葉さゝるゝ空寐哉

五月雨　塩鮨のあぶらたるなり五月雨

行方なき蟻のすまひや五月雨
五月雨やひとりはなるゝ弓の弦
文車や寄ては返すさつきあめ
さみだれや岸の山吹ふりしづめ
鳥の子の卵出しより五月雨
燐(ヲニビ)ともしらでなつかしさつきあめ

五月闇

しら紙にしむ心地せり五月やみ

蝙蝠

かはほりや古き軒端の釣しのぶ
蝙蝠や月の邊を立さらず

螢

貴なき夜學と見ゆる螢かな

蚊

蚊ばしらや棗の花の散あたり
かの聲の夕に雲をおこしけり

利は得べし、むさぼるべからず、

世上の人

樂しいか打手の下の蚊のこゝろ

蠅

唐までもうつり行らむ蠅の足
はへにくしこゝろの先へたち廻り

丈芝坊がみちのくへ歸るを送る

二とせや身に添ふ蠅も打て去し

伊豫の國松山の蘭芝、大和の國廻りして再び都に歸りのぼり、兎も角もし書集めし日記やうの物を見るに、思ひさす端々　能意に協て聞ゆれば

袖に見むみよしのゝ蚤三輪の蟻
蚤を追ふこゝろや唐のよし野まで
朴木瓜や蟻の巣作る五月山

蜂の讃

身の露の甘さには似ぬこゝろかな
纔なる身のたのみより蜂おこる

蟬

安達が原

黑塚や蚋族人を追ひまはる
初蟬や初瀨の雲のたえ間より
薄雲の山路をすますせみの聲
せみ鳴て梢の蛙おちにけり

螢

ほたるうりすゞしの頭巾着たりけり

螢三ッ二ッはもの丶なつかしき

舟中

盃のうへに吹る丶ほたるかな

いふことのきこえてや高く飛ほたる

螢火や風の筐山吹おろし

瀬多・石山のあたりの螢を狩て、はる／＼人のつとに得させけるを日頃籠にやしなひ、夜毎母のながめに備置つれど、ひたと死うせけるを悲しみ給へば、ある夜こと／＼く籠をふるひてはなちやるとて

魂ならば歸らめ草に行ほたる

水雞、水雞啼宿とこたへり妾もの

我やどの澤淳さきぬくひな丶け

蝸牛 たのみなき角としおもへ蝸牛

おもひ得たり竹三竿にかたつむり

墓 深草の鶉ともならでひきの聲

田植 田うゑ女のころびて獨かへりけり

かづらき(ミコ)の皇子よりや奥の田植うた

酌つ丶や奥の田うゑのにひしぼり

つらり／＼うゑ田の緣の百からす

我ものに植田の蛙啼つのる

つまなしのさす手引手や早苗舟

越の磯輪づたひに

さをとめはみな海士が家の出立かな

海士が業濱田のさなへとりにけり

さなさめの讃

鳰の巣に吹とらる丶な田うゑがさ

紫陽花 あぢさゐやよれば蚊の鳴花のうら

紫陽花の日和なるべし村ぐもり

あぢさゐに喪屋の灯うつるなり

紫陽花やおもひ忘れし跡の色

あぢさゐや葺も蚯蚓のくもり聲

とりよれぬあぢさゐ花のこ丶ろやな

蓮 葩を葉におく風の蓮かな

清水 草あらふ流の末や苔しみづ

汲てしれ命にかゝる苔清水
此奥に聖おはしぬ苔の花
桐のはな寺は桂の里はづれ
色に香に桐控(ウツロ)してはなに凝(コル)

鹿子
さをしかの子を立かくす箭先かな

鵜川
山本や鹿の子迷はす鵜のかゞり
曉は寒いやうなりうのかゞり
はなれ鵜の火を得さらぬも泪かな
雨一時ゥのかりなづむにごり哉

覆盆子
山ふみの錫にかけたり莓いちご

李子
李子や供箭をこぼるゝ敷かはら

柹の花
鞍つぼに酒吸ふ門やかきの花

志賀の山ぶみして

澁かきの花ずり衣名のりせよ、

樗
鮓うりのかざしにとれや花樗
瀧水の雫かすりてはなおほち
孤鞍の見せ馬たてりはな樗

五月十四日也けり。故もなく餅搗まいかさ人々がいひあつまりて、

二日三日搗

青梅
青梅に臼まはしこむ餅あそび
十ヲたらず野中の梅の黄ミけり

海松
浮海松のしほよりからきよるべかな

藻花
藻のはなに水とり雲のかゝりけり
もの花や引かけて行ぬれ鐙

萍
萍や夜は稲妻の只をかず

麻
すは〳〵と夜は明安し麻畠
麻かりや白髪かしらのあらはるゝ

夕皃
ゆふがほの花立されよ夜の蝿
夕皃のはな踏盲すゞめかな
ゆふがほの華曉にうち見たり
夕がほや花の外には露ばかり
ゆふがほのはなをちからや木曾の奥
夕がほやあからさまなる閨むしろ

晝がほ
ひるがほは酒をのむべきさかりかな

瓜
初うりやまづ畑ぬしの茶振舞

瓜ばたに月夜の株瀬守りけり
冷し瓜宇治の里にかゝりけり
瓜の香や逢たき人の跡座敷
むだばなやわかねて仕舞瓜の蔓
干瓜や汐に流れしうつせ貝
ほしうりや身はかた／＼の汐衣

一度他郎、我名い他郎さつく、今法師身まかりけるさ京にありて聞、何な宅の連衆に送る。是なもて一回忌の俳諧なす。

我名ひとつ枯て露けし瓜の蔓

氷室

鳥飛に倦て氷室に落すかな
氷室守龍に巻れしはなし哉

圓芝、假に居ける桂輪亭にて

日は氷室夜をなけ加茂の川ちどり

雲峯

ふけば散ものゝ冷まじ雲の峯

白雨

夕立や只一抑に野べの灰
見つゝゆけば夕立きえぬ清見浮
白雨や鼠巣に死ぬ茶木原
夕立や一棹岸へたらぬ舟

天明はじめ丑の年六月二日は、平相國信長公の二百年にめぐりあたらせ給ふさて、尾張の國總見禪寺に儀法供養な、その外にさりおこなはるゝな、はるかに聽聞つかうまつりて

けふの御法鳴いかづちも艸の露

暑

糸ぐちのみだれて暑き手もと哉

遊行、日の岡に到て感慨懺愧

世の中の汗は石にも轍かな
よにふるを何にたとへむぬれ扇
六月の埋火ひとつ靜なり

みちのくの完山、今年　蕉翁百回の法筵にあはむさ、都にまかりのぼりて一七日の俳諧なつさむ。嗟ゝ其信いふべからずさ、都鄙群集の風容涙な揮て是な感す。花はお

はよそに盡し、青葉がちなるより
都を立はなれ、しばらく爰の龍門
にとゞまる。日ならず又行装を告
ぐ。去年はみちのくに渠、我を送
り、ことしは暮雨巷に我かれを送
る。渠も老へり我もおいぬ。けふ
の離別一千五百里、今世の再會期
べからず。

夏雲　世のうつゝ隔てあはむなつの雲

懐古

大坂や霜幻の夏のくも

鄲の圖に

いびきの闘夢のうき橋とみる世かな

納涼　夕すゞみ紀の岸や崩らむ

竹涼し故人迎る意あり

すゞしさや腮さげて行夕肴

丈芝が薙髮せし時

髮の落見れば涼しき泪かな

針させばすゞしき鯛の眼哉

五明樓夜坐、酒宴又はじまれり

すゞしくも明行月を照日かな

はだか子に乳の毛ひかれて夕涼

草の戸や柳すかして夕すゞみ

みちのくにて

陸奥殿の涼臺なり千松島

夫よりして人のまよひや川涼　さ

彪門がかつぎ出るに次

水音や琴を下樋に夕すゞみ

腹赤き蟹つり出さむゆふすゞみ

簟　廬山寺の僧似合しや簟

冷酒　塩島の歯にこたへたり冷しさけ

冷さけや一順果し廻りはな

祇園會凝雨樓對酌

山おろしの風みどりなり唐錦

月鉾や人聲起る山かづら

己、湖南幻住菴に在て、故郷に父
を失ひし臥央を悼。

眼にいたき風も吹つらん蚊やり草

此日は六月晦日也けるが、我はらからの者獨は三十三回、今獨は十七年のけふに當りたりければ、月を同じう作善ないとなみ、何くれとものかなしき今宵也けり。

うつせみや何を活甲斐に我はたゞかなしびにひかれてかなしび侍るなり

沖鱠　沖なますはやきをもつていさぎよし

御祓　追かけよ五串にかゝるひやし瓜

曉臺先生發句集　下

秋之部

日ぐらしの今朝しも鳴ぬ秋は來ぬ

鶯の淺茅かくれや今朝の秋

ころ〳〵と轉り出たり露のあき

芝前の箭拍子さえてけふの秋

初秋や友まして夜の靜なる

けふの秋死とも聞し人にあふ

知多の浦一草亭にやどりて

けふといひし秋は今宵の五位の聲

丈州が身まかりけると聞て

秋二日身をそぐ風も吹ヶばふく

士朗・岱青に別るゝ時

うつせみの現に秋をしる日かな

七夕　萩桔梗星に貸べく野は成ぬ

麻ひめのをしへ成らん貸小袖

玉簪のはなに迎む星のねや
竹取が由緣なるらむ女七夕
龐居士も娘もちけり天の川
江にそふて流るゝ影や銀河
戯にあふぎながさむほし迎
さす汐や玉藻つかねて星むかへ
廿年あとのまつりやほし今宵
ほし逢や我は嬉しき親になひ
星あひやものめかしたる不二筑波
七夕や世に大かたはまさな事
さゝまくら星に一夜の名なるべし
ほし逢や心の友は伊勢小町
病ばたゞまくらの上ぞほし祭
星今宵夢みてはらむ人あらむ

酒星あれば地に酒泉なからんや

七夕や流るゝほしは酒くらひ
羅の袖や裂らむわかれ星
明がたや七夕つめの閨の雲
別れ星今は木隠れて見ゆるなり

ひさゝせばせをの翁、此國にたどりて、うき身の宿てふことを雨にそへて、かなしみ申されしを、ふと星の夕に思ひ出て

下り帆にほしや迎ふる浮身宿
星の精や八日にさける白芙蓉

六月十日、國に、中將の君うせさせ給ひければ、民の心灯火盡しやうに昏闇し、敬ひ愼しみ、蟄して悲しみ奉るなり。

おしなべて月なき盆となしにけり
艸まくら故鄕の人の盆會かな
盆ごゝろ夕がほ汁に定りぬ
蚤の子や何はなくとも盆扇

貧家

たま棚にくさのゆふべのけぶりかな

題魂棚

鼠尾草や身にかゝらざる露もなし

美しや月の中なる盆の人

盆の月市に隱るゝ人は誰

送り火やなきは誠の跡座鋪

魂送り身にさふくさの夕かな

靜さや町なき里の高灯籠

つく／＼と雨見上るや高燈籠

踊

おもひきつて出れば出すますをどり哉

まくり手が踊崩してをどりけり

唐崎へ御渡りか、山田へ舟をやりけはん歟、

秋風

秌の風三井の鐘よりふきおこる

秋かぜや火燈しのぼる浦の山

滿山秋雨の時、春風落花をおもふ。

秋かぜの吹につけても長等山（イ本閑）

巣に籠る蟻のいそぎやあきの風

あき風や鷹に裂るゝ鳥の聲

秋かぜや鷹飼そむる酒の君

藤の實の鳴出しにけり秌のかぜ

あき風や寄かひもなき竹柱

市にふる鯛の尾かれてあきの風

井澤といふ所より竹の下こゝへに行。此わさは川は鶴道ふたのこの貴き御法にあひし經石など、今もたま／＼拾ひつる人もありといふ。みさか峠越てあやしき田家にやどる。

猪垣のむすびめきれて秋の風

客中

切角と野分追るゝ旅ね哉

左中將城破れて、洪鐘此金ヶ崎の海に沈しと言傳れば

鐘はふかし浪近ければ秋の聲

木曾古城

水は日の西に落けりあきのころ

瀧谷慈光禪寺は澗をめぐりて入と三十餘町、雲霧の中をたどり、はじめ楠氏が三男庄五郞、入道が禮

正禪刹にひらいて、風水清音に終りをされるのみ。

稻妻

雲起て寺門を出る秋の聲

鉦の緒にいなづまつかむゆふべ哉

露

酒くさき人の寐がほや松の露

夜前亡八斗拙　夢見

逢ふはうれし夢絶てのち露を呵す

淺草の街に假にかりほして、月をかされ住居れるかたを、元のぬしへ返しあたへ、翌れば引はなれて又東の國わたらひす也。人〻かくて其庵すゑ置べきよしなしさて、やがて跡なくかひほごき、暫、鶉なく野等となしてむとぞ。すはされば槇の柱つれなくも我をわするらん、軒のばせを葉あだにものゝあさつきやすき、うらみのはしくれに思ひ詫て、それさへ今宵のかぎ也けり。

けふは我翌は庵なき露のはな

木槿

もとの露すゑのしづくや花木槿

日の照や一雨殘るはなもくげ

蚤ふるふ願人坊や花木槿

二日咲木槿となりてあさ寒し

白木槿糸瓜の中に咲にけり

散柳

柳ちるや少し夕の日のよわり

信濃の道下り、甲斐のさかひに入

川風のうつりも行かをみなへし

女郎花

秋かぜをかつぎてふせり女郎花

をみなへしあやうき岸の額かな

傾城園梅てふをみな、つくし琴の曲あやしきまで妙なりけり。極て夜明なんとすなり〱、かきならすわざをこのめり。鳴らせば必玉うつ蕉草の上の露を飛ばし、或は閨怨の情を動かし、忽閑雅のさかひにいらしむ。明れば又青樓上

朝皃

あさがほの蔓もすくふか琴の爪

蕣はいなづまに見る苔かな

ばせを風過て朝がほのさかり哉

朝がほのはなこそみゆれ奥山家

あさがほの花はぢけたりはなひとつ

桃明ないたむ

露はら〳〵槿に翌のたよりなし

月くさ

野上にて

月くさの野上とやいはんよしもあれば

月草の色見えそめて雨寒し

月くさは露もてはなをくゝるかな

伊勢の山田のみの手やさいふに、人々さゝもに酒たうべ遊ぶ。園のめぐりいさきよらかに、東うちひらけて先朝熊ないれたり。このもかのも皆此亭のながめなさりよろふたり。ひさり直下千尺秋色遲しさからびといひ出たる有。よくいへり、誠に直下千尺

霧

霧色あり百樹の上に酒吹む

山中

霧にぬれて我酒は酢し塩からし

きりこめて那須野狩野の犬の聲

霧雨の降崩したり餓鬼灯籠

亡母野送り

霧煙今や骨ならむ肉ならむ

收骨

露肉なし目もくらまりて相狹

初七日

はな芒九品のおまし告たまへ

なき聲のこゝろ耳にあり秋の風

うつり行日に衰へて夜は長し

かはる夜や心寄せなき秋のくも

萩

右裘中

風なぐる萩の欠山日のかすり

かぜなりやうち返る萩のほの白し

しら蟷や水打越えし萩のうへ

色みえて萩のり越える燃しかな
はぎ原や花とよれ行爪さがり
小比丘尼の折て捨行野萩哉

偶成

一夜とめて向ふ柱のこぼれ萩

桔梗

桔梗咲て何れも花のいそぎかな

芒

犬の聲しばし里ありてむら芒
はる〴〵と雲のかけりやむらすゝき
色もなく水おしかゝるすゝきかな
夕闇を靜まりかへるすゝき哉
長詣の紫かゝるすゝきかな
あらし立夜比の芒黄みけり
蛇のきぬかけしすゝきのみだれ哉
日も寒氣たちぬ芒の花の上
村をばな夕越えゆけば人呼ふ
むらを花夜のはつ〳〵に鶉啼
を花散や髪の毛を吹風の筋

上總の國を行脚して山邊さいへる
所に出づ。かの赤人の古墳ら拜み
てやゝ過る程、山邊さいへる名の
おもひすてがたくて

つたの葉の水に引るゝやま邊かな

蔦

蔦たれて千尋尋見る滴かな
垣のつた濡重りぬへちまの葉
つた紅葉下戸を住する扉哉

蜩

ひぐらしじや明るき方へ鳴うつり
蜩のなけばひさごの花落ぬ
日ぐらしのなけばつら〳〵古鄕を思ふ

蜜清淨の蘭若にのぼり、午時一睡
清閑に入。

聲しみ〴〵浮世に遠し秋の蟬

秋蝶

秋の蝶日の有うちに消うせる

秋蚊

あきの蚊や香の烟の前を行

秋蠅

蠅たゞに死ぬ日をみたり秋曇

虫

鈴むしの鳴やころ〳〵と露の玉
すゞむしや手あらひするも蒔繪（マヽ）の

蟋蟀

寒き聲や敷居をくゞれきり／＼す

きり／＼す日のさすまでの古むしろ

琴爪を礫にうつやきり／＼す

寐ぐるしや鳴そなゝきそきり／＼す

二日見る佛の飯や蟋蟀

立出て鎖せばあとはむしの聲

夜あらしをあふせかけたり虫のこゑ

曉や雨も頻にむしの聲

たよりなや水押かゝる虫のこゑ

常盤塚にて

虫の音や美人の涙いきかはり

秋のまと虫ほどに鳴物はあらじ

亡母三回忌

みのむしのさらに喪籠る思ひ哉

くつは虫いつかはかなきしもの聲

秋雲

しづけしや隺に定るあきの雲

あら浪や波を離れて秋のくも

秋水

秋の水竹の根からみ流るなり

あきの水こゝろの上にながるなり

茫々と芒折ふす秋の水

黒血川

かくばかり秋の色またあきの水

秋寒

二日咲木槿となりて朝寒し

秋寒し立出てみれば袖の桶

よし田・山中・砂走などいへる所は裾のゝはしりに、家づくりせる村々なり。芭蕉翁、武陵天和の變にあひて、暫留錫ありしも此あたりなり。

山中にて

山かつの顔さちるむぐら哉　翁

川口にて

勢ひあり氷柱消ては瀧津魚　仝

雲霧の暫時百景を盡しけり　仝

是等の吟をさゝむ。百景盡すに今猶不ㇾ盡、夫より山深く入て

秋寒し日陰のかづら袖につく

是から越にかゝる古道、艸をむすんでしをりし老樹枝乾て自寒し。

秋深し松はむかしの具足ずれ

篠の中道胸わけしてやう／＼東海道梅澤のささにいづる

さゝがに姫といへるみめあしき姫のいまぞかりけるが、糸のわざにはいと妙なるまでたくみなり。しかあれど織姫などのあやにものなす類ひにはあらで、色ある蝶の翅にかけ、玉むしの玉の緒もそがためにたえてん。只ものれたく心恐しければ、ふつに戀わたるかたもなくて、身をいたづらに葉がくれ、やゝ秋風の秋にあひて、ひとり夜寒のわびしらにまぎれ出ぬる折ふしは、あいなくゐごころに火さゝれて、うきなさへえながずて逊まどひつゝ、いづちにか住果てん。世人の上にもあらんかし。

しみ／＼と夜寒き蜘のあゆみかな

音になかぬこゝろたくみや夜の秋

椎の實の板屋を走る夜寒哉

海近き雨や夜寒の濡むしろ

影見えて肌寒き夜の柱かな

秋野

秋の色野中の杭のによひと立

あきのゝやはや荒駒のかけやぶり

秋山

秋の山ところ／＼に烟たつ

雨三粒降て人顯るゝあきの山

きのこ

雨はやし松茸山のすてかゞり

おくれ馳に魚さげゆかむ菌山

松茸や小法師どもが朝はやり

まつだけの灰やき寒し小のゝ奥

八朔

八朔や旅は寐がちにもの忘れ

田面の日壽ぶく馬醫の家婚哉

相撲

神妙に古き代したへ角低(抵)士

亂髮風情なるかな勝角力

寒ければ衣着にけりすまひ取
すまひとり死なで歸れり伊達の木戸

三日月塚懷古

大曾根の成就院、今は悉皆頽廃佛跡地を返して種粟畝をたゝみ、彼三日月の碑はものゝ隅に押入、うしろざまにすゑたるなど、いと哀に覺えて

ありとだに形ばかりなる三日の月
蜀黍の穗首になびけ三日の月

六祖讃

三日月の光さしけり精米

八幡宮千百年法樂

若みこや月にかげさすをとこやま
狼の吼うせてけり月がしら
月みえてふり替りけり浪頭
けふの月雲井の龍よ心あれ

獨坐

月と我と物おもふ頃雲おこる

仲秋無月

月や雲跡よりせむる雨の聲
月の匂ひみちたり雨の高砂子
うちむれて詠むともなしけふの月
大かたは美女なりけらし月のまへ
夕がほも地に見えて月の今宵哉
月滿て芙蓉の花のすわりけり
折箸に萩垣ほどく月見哉
田鼠のわらひ出たりけふの月
酒啖ふ蝦夷もくもらじけふの月
人遠く水長うしてけふの月
杜若又さく水の月夜かな
石山やのどかに出る秋の月
さをしかの角にかけてや峯の月
地はものゝ懷せましあきの月
大空や月はこゝろの上に置
月見して餘り悲しき山の上
雲はやしいろ〳〵に月を過す哉

けふの月橘色に出る夜ぞ

月の隈十圍の杉の匂ふ夜ぞ

月の桂かたむけば叉あらたまり

まどかにて二夜も三夜も秋の月

香千里目にやしむらむ秋の月

北海

月ひとり荒海をすゝむ今宵哉

池邊

人をいかる遊魚あるべし水の月

良夜滿興、川原乞食に酒のませて

月に酒おのれしのぶの亂萩

曉月鞍上吟

夜すがらや曉の鐘にけふの月

湖の面雨むらふりて月をうつ

仲秋ふたむら山にのぼりて

奥山は霰雲なりけふの月

口ずさみに

あらし吹雲のかよひにたちくれて
わけ入みちも二むらのやま

大阜に父に別れ、我に母に失ふ。さもに仲秋喪に籠りて

思ふ處ふたつなき夜の月くらし

ひとりこよひの月に對すれば、おもふ所さし頃睦まじかりし人〻の八九は亡失せて、さありかゝりさたゞ其俤をむかふるのみ。己いそぢもこえたらん齡のほど、こさしや月の見果ならん、けふや清光の名殘ならむかさ、去年は旅棌に一入思ひ入て、袂の露も深かりけるが、何くれさ同じさまして叉この秋にも逢るなり。さてしもつれなき命さもおもはざりき。

大かたは逢ふまじと見し月を友

十六夜のやみいよゝ降くらしつゝ、誰〱も戸さし、うちこもりて去年今年など言くらべ、こぞりぬけるに、ゆくりなくの月の光さし出

たりさ人のおごろかしければ、そ

こらおしひらきて

中天をいざよひの月の出かけ哉

風かなし夜ゝに衰ふ月の形

早稻の香や藪を一重の莖談議

いなご　道のべやいなごつるみす穗のなびき

野徑

月よしと小椰をのぼるいなご丸

秋雨　山鳩の脊中干なり秋の雨

秋の雨深草の町に行かゝり

あきの雨胡弓の糸になく夜哉

秋の雨ほね迄しみしぬれ扇

（原註）しぐれイ
秋の雨懶きかほにかゝるなり

信濃の道くだり、甲斐の國に歩み

を引ちがへて行ほど、藤田の可都

里は年頃文してしれる好人なれば

尋ぬ。其夜ごろにもあれば、月を見

せばやなどわりなくさとめられ、

望の夜もこゝに遊ぶ。士峯の北面

まちかくひたひにかゝるやうなり。

高根はれて裏行月のひかり哉

今宵空のきよらなる、十させにだ

もえこそ覺えなど、誰かれさ共に

夜更るまで興ず。

堪ずしも薄雲出るけふの月

あたり近き市川へまねかれ、社司

芦南子のもさに、むかし新羅三郎

より給りの、ゆへよし正しくあり

て天國の劔を重寶す。謹て拜見す。

秋の霜三尺の龍やこもりぬる

其餘にも巨勢大納言の書は、頼朝

公の賜のよし。今千歳の家名をか

たぶけす、國にめで度譽なりけり。

酒折の神社は甲府の東はつかに去

て、山の邊にたゝせ給ふ。こは日

頃まうで侍る我國熱田のおほん神

さ一躰におはしませば、禰宜のう

へたもさもぬるゝばかり、猶有が

たう覺えてぬさ奉る。

小墾田（ヲハリ）のをはりの初穗かくもあれ

客　中

我きけばをはり田をさす雁ならし

甲斐の國市川なる芦南子がもとにやどれる夜は、しく／＼雨の降出つ。空は月の出づるかも、うすあからみたるに、雨いよゝふりつのる。夜坐閑しづかにおもふ所感あり。

雨くらき夜のしら根を鳫わたる

甲斐の國道くだり、いぶせき山中にやどりて

いつの世はとありとしのぶふる里を

ひとり門田の月になかるる

出國　夷等道のほどをしへ迷はしなどしければ、あられぬ方に日くらしたり。いさゝかも情あるやう見えざるも又哀なり。

道くれて稻のさかりぞちからなる

東方天の極れるや、海の極れるや、神さいへどもはかるべからず。仙さいへどもしるべからず。

星盡る處まどかに出る月

途　中

歸り來れば淺田の早稻田穗にみゆる

風行や濱田にしらむ穗のなびき

稻の香のねざめて近し五位の聲

引狼の田守をにらむ庇根哉

ひたぶる船頭に句をたれて

川稻の香とりをさして潮來船

わりなしや法師夜田刈月の前

色ふかし田尻の小穧かくてかれ

唐崎の松に日ざしや秋の雨

鮫の尾の遠く沈めりあきの雨

翌は藤歩子のもと立出べきこよひ、其家の人〻打かたらひて、又くるさしのちぎりなどはかなくいひわたりて、山川百里の情只今にせま

る。

心からの雨も降らむ夜の秋

秋夜

秋の夜や力の火かげ跡になる
草の花愁るあきの夜と成ぬ
あきの夜や膝こす水は渉られず
秋の夜もそゞろに雲の光かな
烋のよや心盡しの默りもの
あきの夜やひらき協へし笛の孔
秋の夜は梨子の齒冴の寒さ哉
烋のよや杵おし削る爐のあかり
玉むしの活るかひあり夜の秋
あきの夜やそろりと覗く君が門

擣衣

をとめ子が御衣打らし神の石
遠砧夜のおとゞに聞ゆべし
西谷の衣うつ夜や焙り芋
山姥とみし人きえて遠砧
柿の澁ぬける夜冴や遠碪
うつら／＼月見つゝあればきぬた打
悲しきは上手なるべしさよぎぬた
砧打てつれなき人を責るかな

鴈

南にも初かりがねの聲すなり
はつ鴈の信濃にかゝる夜は寒し
初かりや高ねを左右へひるがへる
きゝそめし夜より亂れて風の鴈
遠山や身をうちつけてかぜのかり
亂雁となるや靱の雲うつり
やう／＼と立あがりけり小田の雁

渡鳥

京ちかき山にかゝるやわたり鳥
夕あさり鴫の目はやく鶩鈍し
おのれのみ食る鵙の眼ざしかな
かけなみに追れて高し鴫の尻

秋暮

犬蓼の節をれしたり秋の暮
鷹の眼の水に居るや烋のくれ

烋畑といふ題して

人の上に畑かゝれりあきの暮
象潟やいのちうれしき秋のくれ

梅干で酒吸ふてみん秋の暮

鹿

山鳥のさわぐは鹿のわたるかも
鹿の聲をばなの末にかゝるかな
こがれてや淺瀨見てゐる鹿のつま
あなう／＼射よげに見ゆる萩の鹿
こけ猿も夜たゞ佗らむ鹿の聲
鹿の鳴音引結ぶ夢のたどり哉

閑坐所思

ある夜ひとり鹿の鳴音も六かしや
病鹿や霜に狭りし明の聲
鹿追ふや曉聲に雲を裂
別鹿霜の笹山わたるなり
ぬれ鹿に有明の月のひかり哉

九月朔日吾初て知命の日なればとて蓬宮へ詣づ。川のほとりはつ穗ひた刈て、道せきまで干置るを、尊く侍りて申。

として又命は續り稻むしろ

菊の九日遊二大津舊邸一

けふの菊なき世の都めぐり哉

きくの日淸見寺に詣て

雪舟が筆の走か菊の露
籬菊や花のうら道一通り
山風や板戸たふれて菊の上
痩ぎくや只一もとのまさりがほ
みだれ箱菊折入て參りたり
白菊は露の泉とみゆる哉
しらぎくのおなじ色としもなかり鳧

夜宴菊

月しろし此はな燭を恨むべし

題百菊

華の色香我思ふ菊は只一種
はなひとり黄菊神妙にみゆる哉
燭とり／＼夜坐亂れけり菊十種
香にふれよ菊のあたりのゑの子ぐさ

十三夜の月は矢作の橋の下に遊び

て、かの上るり姫の舊跡にいでゝあれば、おもふこころたゞ管と絃と、見る所帥頭の白露・秋聲・人語に對るのみ。

秋の花みなうつゝなし后の月

后の月すゞむうちより衰ふる

月の余波關守あらば蕉枕

のちの月客に呼るゝ病あり

十三夜戸塚の驛にやどりて

月にゆかば鐘に夜明む建長寺

古園百里を去て故歩子のもとに二させの秋にあふ。しかも九月十三夜なりけり。

雲百里今宵ふたゝび月の閣

九月十三夜もこよひになりぬ。今宵の清興、うたげきうけは好く舍中のともがらなり。共に手からみて科野川の支流にのぞめば、獨ひそかに古園の感あり。

水日夜北にせまりてのちの月

十三夜に亡母六七日にあたりて

后の世の月ならば母の影もさせ

末枯

うらがれや西日にむかふ鳩の胸

何草の末がれ草ぞはなひとつ

葛

人目も草もしどろに葛の枯葉哉

葛の葉や篠田男の魄をなみ

霜

くずの葉をおさへ付たり秋の霜

紅葉

うす紅葉するよと見ればちりはじめ

門叩狂脩憎し夕もみぢ

何とみても紅葉は松に極りぬ

紅葉散や髮かれて我けふもあり

後ト先に人聲遠し柿紅葉

蓼太の畫讃

木食のわけ入かたや秋のいろ

三浦氏蛙聲を訪ふ

先門に入れば柑子の色にみゆる

途中

藤の實に小寒き雨を見る日哉

　于東三回忌

三ッ栗に中の七日をおもふ夜ぞ

岩の窪衣の袖の木の實哉

夜もすがら鼠のかつぐ棗かな

むづかしや茱萸にからまる蔿蔓

茱萸の木のしこかれて行野間哉

　洛の夜半亭主人、幻住庵のかり栞訪れし時

木實

丸谷の椎にむかしゐ音聞むさきこえしに、かたみて月を松もさの山　さかい付侍る。

日頃おもひきうけし事ども、さひもしいらへもしつ。月は四更にかゝる。夜のかされいさうすく、繻引かくし肩おしならべて夢境に入。

　寞がしわぶきに目ざめて

曉の寐すがた寒し九月嶠

秋雜

秋暑し水札鳴方の潟ひかり

腸ざしの柄うたれ行栗穗哉

　はなかつら背きあふ野邊の初あらし

野路の雨刈萱獨ありのまゝに

鳩鳴や藪山口のつぶら家

蕎麥の花眞晝に暮ぬ不破の雨

鋭き物のかくは有まじ長瓢

むら雨を面白さうに芋畠

芋黒く竹黄になりて鴫の聲

　嶋臺圖に

清げなる老のみさをや竹の春

さし鯖やかさねはいつのはたら塩

　水涯夕陽

秋のなみ星うち返す折もあり

落鮎や潮の閤に沈むまで

　老情旅にせまりて再び白川の關をこゆる

見つゝゆけば茄子腐れて往昔道

　志賀の山ごえせんさ、あられぬ道にまどひ入ッゝ、高萱胸わけして

やう／＼と如意嶽に出づ。

眞蛇鳴花の古道風かなし

龍膽や岩のへげめの日にうとき

ばせを葉に落かゝりけり鬼がはら

山中や別當殿のことし酒

遇貧夫

肱に一囊をかけて、はつかに滿るをもて樂しびとする、誠に樂しび哉／＼。淸うして貧し。かくてあらんより世になくてあらんなどつぶやく人は、常に金壁に面を照し銀盞に哥舞せられむ事を事とし、必其患のしりへに廻るをしらず。そは是常に哀しびの迎る也。たゞ樂しび哉淸うして貧し。

身のほどや落穗拾ふも小哥ぶし

うらさぶる日、たどり／＼木母寺にいきて、佛念しツゝあはれ成くま／＼をも見めぐり、日くれんとするほどに、鐘も鳴鴨なきさわぐ、此日は秋のなごりなりけり。

木母寺の灯に見る秋の行方哉

風あらに雨さへ降そひてやゝ寒し。誰かれも心ひとしう、いざわび寐してんと、むしろの端のやどり乞て臥ぬ。三更の頃さえ／＼しう空うちきらめきて、翌れば又うめ若の古墳に詣づ。

みの虫を擊ことなかれ落葉かき

すみだ川のわたりにかゝりて、いにしへをしのび今をおもひ、ともなふ人とも歎く也。我もなく

日たゞ夜たゞ都をさしてかもめなく

長月も廿日あまり八日の曉がた、夫と見るばかりの月いとかすかにさしのぼれば、秋の名殘も一しほあはれに覺えて

ほの／＼を名殘と見つゝ秋の月

暮秋

塩負ふて山人遠く行あきぞ
秋の名殘山田の添水いとまあれや
あき余波夕日の前に小雨降
あたら夜をゝじかゞなけば秋は行
火ちら／＼秋もゆくなり峯の堂
山風や兎鼻つく九月盡
綿弓の弦引きれて九月盡
宗且の大工遣ひや九月盡
九月盡遙に能登の岬かな

冬之部

初冬や二ッ子に箸とらせける

湖上吟

霞日も又初冬のやうすかな
冬の日のさし入松の匂ひ哉
鳩の巣のあらはなるよりしぐれそめ
しぐれねばものあらたまる日もあらず

時雨

漁父畫讚、

鰯のこゝろはふかしはつしぐれ
しぐれそめてばせを葉翌を繕はず
一むらの畑はなれて行時雨
しぐれ行果は一むらのけぶり哉
鐘の音やしぐれ降行あとのやま
しぐれけり尾根のすかひにわらび焚
つら／＼と杉の日面行しぐれ
夕川や霧のしらみを行時雨
さし越ゝや深山時雨のぬれ筏

若狹國にて

沖の雲しぐれて歸れ後脊山
鳥羽田には時雨ふるらし水菜船

酒星あれば地に酒泉あり。溺て泥のごさし。

眼にのぼる花かき交て一しぐれ

右うかむせ四郎右衛門亭に遊びての也

挨拶

霜

我ためのひと夜は菊の殘あり

義仲寺蕉翁牌前

霜にふして思ひ入事地三尺
けふの今いまより後のかれ尾花
霜の庵旅寐まねびに佗中
雲はしぐれ鐘は其世の感に伏
障子まで來る蠅も有翁の口
蕣の花つむしもの鼠かな
霜冴て雀ひそかに鳴夜哉
つや〱と柳に霜のふる夜哉
霜滿る夜たゞ樟の匂ひかな

途中

霜に行草鞋のつまを焦しけり
しもを燒篩に寒鴉の聲くらし

空谷寒艸

草かれて深谷の霜にあへりけり
霜枯て鳶の居る野の朝ぐもり

賞學

行燈に藥鑵釣りたる霜夜哉
夢人の浮橋かゝれ霜の間
おもしろう嘘つけ霜の濡頭巾
しる人はしるらし霜のぬれ頭巾

文字摺石

草よくも生たり霜のすり衣
曉や鯨の吼るしもの海
夜の霜齒に答へるよ荻の聲

妻におくれし亞滿をいたむ

兩袖に泣子やかこふ閨のしも
目じるしの枯木たふれて霜の月

木がらし

ゆかしき物にてつれなきもの

木がらしにむかひかねたり辻謡

愛し悲しくて心ゆかぬもの

只一輪木がらしの風にさくら散

こさわりと思ひ辨へつゝ、胸安からぬもの

うらみねや又凩の吹夜なり

木がらしの只は置まじ花ひとつ
凩や木から落たる猿の尻
こがらしに豆の葉荷ふ人をかし
こがらしや灯心賣のうしろ影
凩の苧かせをみだす眞柴哉

御堂の十夜にまゐりあひて、又あひがたき法燈のかげにかゞまり、通夜の人〻とゝもに念じつ。こよひ此みあかしに別れ奉らん事、名殘なしう唯心細う覺て

十方十夜御佛の前去がたき

小春

海の音一日遠き小春哉
魚つりの編がさひとり小はるかな

歸花

わすればな忘れぬ宿の栞哉
歸花祖父が戀の姿かな
住の江や一もと草のわすればな
夫そこに草の中なる忘れ華

茶花

茶の花に兎の耳のさはる哉
ちやのはなや雲雀鳴日もあれば有

冬夜

ふゆのよやまとしからぬ稲光り
冬の夜や曉かけて山おろし

冬月

月の情冬を定めり樫木原
月寒く出る夜竹のひかり哉
冴きつて檜裂たり冬の月
砂に埋須磨の小家や冬の月

登山雞鳴

寒月の額にちかしをとこ山

寒

屋根うらに鼠鳴夜の雨寒し
寒きよの枯竹藪に明にけり
さむそらやたゞ曉の峯の松

幽溪

山寒し出るより入日のあした
辻能の矢聲もかるゝ寒さ哉

妙義山に詣しかへさ

おもひ寒し峯の白雲吹わくる

寒天の行脚ならひにいたれば、白

糸老人にいたはられて爐火右にかまへ、夜のかされ猶薄からず。しば〱安き思ひを得たり。
寒しとも思ひわすれて谷の聲

冬紅葉
十分に紅葉の冬と成にけり
東都に遊慰して郷に歸りし宰馬を訪ふ
ありやいかに隅田川邊の冬紅葉
知多の浦台中亭
汐風の吹よわるかたや冬紅葉
霜にぬれてもみぢ葉かつぐ小雀哉
雪後眞如堂の紅葉見にまかりて
めづらしや今朝みる雪の下紅葉
なつかしや雪見し後の下もみぢ

冬木立
冬木立馬一寸の行方かな

冬川
冬川や籔に捨てやる鳥の羽
川中に川一筋や冬けしき
夕川や動かぬものゝ又寒し

冬枯
ふゆがれや寺門かすかに人を呼ぶ
何おもふ冬枯川のはなれ牛

枯野
出る日のと拍子もなき枯野哉
葎さへ枯て出ぬる戸繭かな
けふも折翌もかれのゝ萩の長々
ぬつくりと夕霧くもる枯野哉
人目も耻もしどろに葛の枯葉かな

枯蘆
蒼天に河邊の蘆のかれは哉
錦浦夜泊
枯蘆やしるべして行雨の聲

枯尾華
水際の日に〱遠しかれを花
芥火の烟の中に枯尾花
中〱に根づよく成ぬかれを花

落葉
おち葉落そめて夜を鳴鳥かなし
落葉おちかさなりて雨雨をうつ
蒸ものや落葉堤の蔭かこひ
あみ笠におちばかゝれり占や算
木の葉たく烟のうへのおちば哉

炬の火に落葉ふり分行夜かな

與板留別

此別梅も葉おちて柳ほそし

冬構

越ゞ人は斯ても經けり冬がまへ

みそさゞゐ

壁くろや鼠行あふみそさゞゐ

冬籠

人嬉し京の眞中に冬ごもり

去君が車寄たりふゆごもり

冬ごもりとかくして世の情に落

蠅一羽我を廻るや冬籠

冬籠一字に迷ひ夜戸出哉

世を蟻のすさび悟らん冬ごもり

衾

さるにても輪回きたなし文衾

紙衣

腫物をかゝへる紙衣ざはり哉

我かみこ鴨の足水かゝりけり

山居三日一日對客

山寒しせめて火桶の燒蜜柑

火桶

うき人の額にあてる火桶哉

捨られし人の泪に兀火桶

えびす講

堂上に御沙汰有けりえびす講

屋敷から梅もらひけりえびす講

冬至

日は冬至埋れ蛙も目覺なむ

利にうときすね人醉り冬至酒

殿下に召れ參殿つかふまつりて

あまつたふ星の御かげになく鵆

冬嶺江上を臨さいふ鳥羽の湊を見廻りて

夕闇のまつ風のぼるちどりかな

鵆

蠣売や下駄の歯音に飛鵆

濱ちどり雪の中より顯はるゝ

風はやく二ツにわれてむらちどり

心われしてや二瀬に鳴ちどり

月も見え雪も降出てなく鵆

曉をまぐれて行やむらちどり

闇明てかいくれみえぬちどりかな

水鳥やさすがに雨をうちそむき

水鳥の巴になりて狂ひけり

水とりの立行程や淀の松

人をたどうらみ空也はなれ鶴

しいびなに鳴夜もあらん離れ鴛

うか／＼と日に照れ居るやはなれをし

曉の山を越え來てうきね鳥

かひつぶり浮出まで見て過ぬ

雨もふり風も吹瀬のうきねどり

浮鴨や戯男に射崩され

鷹

出羽の國にて

あら鷹や山を出羽の朝曇り

鷹組て雀の毛散すみそら哉

たかそれてむなしく月と成夜かな

蠣

いり蠣に軒の松風奪ふなり

煎蠣の跡しら雪となりにけり

空也の痩にたくらべられつ、或は

増賀の腰にふれしは、汝がいみじ

き冥加ならずや。

から鮭

から鮭や汝も木の端炭のをれ

からさけをしわふりて我皮肉哉

河豚　今はなき身をもて鰒のいかり哉

身をまゝに沈めかねたり河豚の腹

生海鼠　生海鼠千仲良吉が崎の二日風

昏く冥くとして蒼海の涙にのた

れ、あるは沙上にころがりて、終

に庖丁になはりな取汝な憐む。

くらきよりくらきに歸るなまこかな

網代

槇の嶋見ゆる網代のかどりかな

春日野の片端麥を蒔そめぬ

冬田刈夕ぐれ人のひとり哉

炭がまや翠の畑の榛原

寒鳥の日を追入ぬあだゝらね

坂鳥の胸をうたるゝ笞（シモト）かな

納豆叩粥や四百八十寺

風さえて今朝よりも又山近し

神樂　太郎吉が鼓うつぞや里かぐら

鉢叩　にが／＼しおのれ二代の鉢たゝき

煩惱の犬にかまれなはち叩

冬鹿

はちたゝき今はむかしの忍び路や
愚に歸る曉ごゝろや鉢たゝき
さめ〴〵と鳴か冬のゝ離れ鹿
人をさへなつかし氣なり雪のしか
きのふ見し木下もさらずゆきの鹿

榾

曉や榾燒そへる山おろし
ヌほだの火や曉かけてやまおろし
雉子兎釣しかけたり榾あかり

畫讃

親と子のうき世やかたるほだの影

寒菊

寒菊に南天の實のこぼれけり
かんぎくや更に花なきはなの後

水仙

水仙やうき世小路の玉すだれ
薄雪や草の茆さへをれかゞみ

雪

雪もてる雲の尻兀ちからなし
ゆき空やおのれさかしき卵子うり
青雲や大虚に雪の降のこり
空高く低く雪吹を廻るかな
あやなくも霰降かつ小雪哉
鴈は悲し罟するは哀れ雪の人
柳折て雪を戀慕のわかし酒
鳥の売叩谺やよるの雪
雪はやみて猶ふる雪のあらし哉
猪突の控に立る深雪かな
雪の人母や養ふ子や育つ
日くれむとして又雪の降初る
降行や又みえそむる雪の人
不破の雪さながら晝の色ならず
鉢の僧歸り來よ雪に物問む
積雪や紅粉吹かけし小傾城
月もれて雪の降迄も見ゆるかな
雪は降流るゝは漁父が火影かも
簑の裾に小魚付たり市の雪

金閣寺閣下に老樹あり

月雪をこめて櫻の牒かな

佛魔窓馬州が十七回の句を乞れて

佛も魔も曉は雪の十七年

人の妻を失ひけるに

けふよりや月雪泪針目衣

雪の深かりける霜月、さりがたき夕よしありてともなふ人ふたり、かよはき從者ひとりぐして會津の山ぶみす。其日おもひさすかたまでは行もやられず、山賤なたのみよりて、よすがら焚火のもとにかいつぐみ一夜を明す。風の吹入破れば菰なごはりてふせぎとす。

人として雪に巣作る類ひかな

雪深く人は世渡る楫をたえて

老て壯なるものは白雀のきよげなる也。かどまざるは竹節のみさをなり。老人木吾子に廿餘年を經て對話す。さらに今日白頭をいはず。

雪中に梅あり我にしのぶ草

霰

あられ降軒は黄めり正木つら

冬の情月明らかにあられふる

玉霰思ひまをけし竹柱

静さや枯藻にまろぶ玉霰

たまあられ水に沈めば消ぬべし

氣たるみし鷹の面うつ霰哉

縄ふしに霰はさまる垣根かな

玉霰鍛冶が飛火に交りけり

氷

稽の何をちからに薄氷

はかなしや童文字書うす氷

大谷の御堂に母の骨をおさめ奉りて

氷なみだ御歯にしむな山おろし

寒夜

鉄床の音も捗まぬ寒夜かな

師走

さく〳〵と粟搗師走月夜哉

百姓の板戸負行しはすかな

旅行や一とせはたゞ茶一ぱい

落る歯のはじめて年の惜きかな

ある日嵐月一瓶の花を携來しを謝して

予が病を憐みて園中に數種の花採て起臥を慰らるゝ。其句ひいさふかく露のきらめけるをうちみるより、頭のほさぼり胸のあつしさもすゞしくめざむる心地すれば、いさゝか筆をもさり見むさするにつけてもおもひよりぬ。まとや輞川の畵圖をひらきて病をわすれたるも、げにさる事ぞかし。先水仙の冷かに咲出たるひかりには玉の簾もしのばるれど、杜若のわすれ顔もなく朧氣ならぬ色にこそ猶し心はひかるれ。何〱一室はつかに丈にみたざれども、花一筒に四季をこめたり。依てひさりおもふ。

齡延枕上盧生夢　蝶舞枕邊莊子魂

咽なかまくら街道さいへるは、天下老和尚の頓坐也。我久しく病勞れしそがうへに、彼街道ふさがりて苦痛する事十餘日、夢さなくうつゝさなく今は蔦のほそ道のほそきかぎり、命にかゝるものさては、はづかに露のうるほへるのみ。

冬ごもりうき世の道はたえ〱に

降は雪よ起返るちからむづかしや

感慨慚愧

あたゝかに着て耻かしや年忘

おもひ出していふ事なかれ年わすれ

賀初老

とし忘れけふ白髮の仲ま入

なやらふや今宵しのぶの戀もあらむ

遙見簾前十峯

年忘れ不二をとりまく坐敷哉

歲の暮隱者かたぎの耻かしき

年迫て風大虛を鳴らすかな

としのくれ鏡の中にすわりけり

拾遺

（佛山）都の冬集序

北海に一仙あり、常に舌頭に有聲の花をあらはし、牀前無形の月を照らす。時に高吟舞踏して西に走り又東す。こゝ〳〵市中の優游にまじはりて他の風詠を甘じ、猶長安に入て宏く麗景にとゞまらず、熱燗三盃引かたけてついと飛揚す。しりへに一冊子を殘せり。とりて周擧はじめに贅す。

蒿里歌

夜半の鐘の　おと絶て　めにみるよりも　霜の聲
きく耳にこそ　しみはすれ
友ちどり　呼子鳥　都鳥　はかなし　はかなしや
みやこ鳥
きのふ墨水に杖を曳て　柳條に月をかなしび
けふは杖を黄泉に曳て　弘誓の棹哥に遊ぶかし
夜半の鐘の　おと絶て　むなしき松を　まつのかぜ
聖護院の杜の空巣には　妻鳥こそまどふらめ
難波江の芦の浮巣には　友鳥こそわぶらめ
わぶらめやいた〳〵し　伊丹のいめちいた〳〵し
さらでだもしぐれの雨は降ものを
心に雲の行かひて　晴ぬは誠たるかも
友ちどり呼子とり　あゝ都鳥はかなしや　都鳥はかなしや

右畢夜半亭几董

蘇川の東涯にひとつの樓あり、望嶽と名づく。山は青き程に隔り水は長く其終を盡し、孤村の烟は征客の蹤をかくす。尾遠のわたり、駒墳の渡舟、寸馬豆人おのづから畫中にあそぶ。遊ぶ方乏からず。今宵は水上の月に清興あらせんと、酒携る僧あれば佳肴を器にす俗あり。糸あり竹有。三舟の才待におそしなどさゞめきあひ、一葉をうかべて千里に游(遊)むとす。あらうたて、雲のはたてのむら〳〵とうち

しらみて、雨聲しきりに川づらを這ひのぼれば、莚をまた望嶽にうつして

筏士にとへば遠山も雨の月

世繼集小序

煙客を率て十洲に游吟をおもふものは、湖東日野の梨丈ぬしなり。頗披煙弄月の士、常に淸閑を吐て悟とす。此春齡老のはじめにかずまへられしより、遠近交游の文音同郷忘年の友生、毛伐洗髓をもてほぎことをよす。其辭嘹ゝとして鳴隺穿雲の聲あり。余韻あやなる哉。あやをあやとして一卷をあみあらはし、是に名あらむことを告ぐ。おもふに始あるものは必後なからんや。猶一紀にあふごに此卷の後へを繼出さば、さながら壽に從ふなりとすゝめて、世繼集とよばしむ。おのれ曉臺、鳴隺穿雲の聲を合せて龍門の南窓にかく言。

今はむかし、先師机下に一冊子あり。こは折にふれたる自詠を筆し、或は門人等打聞まゝにしるしおけるを、ほど遠き朋がらは見聞のつぶさならざる事をうらみ、あながちに木に彫む事を乞侍れど免し給はざりしを、師遷化の後程なく三傑集に、何くれと是がなかばを出せり。剰うち聞のわいだめなく、頗誤りをつたふる事、三に一ッは師の本意を失へり。今其誤を正しさとさしめむと、天地の二卷を著す。但古く冊子に出たるは、おほやうは再びせず。且かなたこなたに落散所の句も又鮮なからず。こはより〱に渉獵して、もれたるを掬ひ遺れるを拾はゞ、再び翕然として彌全を得むと、

暮雨臥央しか云

文化六年
己巳仲秋日

書林

名古屋本町一丁目
風月堂孫助

同杉之町
吉田屋惣吉

同本町十丁目
松屋善兵衛

江戸書林

湯島切通町下
須原屋文五郎

葎亭句集

伊勢路記行

春・夏・秋・冬

李流校

（注）鈴泉寫 村梓

卯花の句の前の詞

殊に珍重〳〵

いせ路の記としるしたるも

尤なれど

鈴鹿越と題号を

しるし度〳〵

　　　　　　　　　止觀房（花押）

嘯山へ

まいらせ〳〵へ

〈

清助へ

序

凡俳歌之難非我言之難能明我心之難也洛陽嘯山者可謂執古御今能得我心矣嘗著俳歌古選而名動於海内與余爲千里知已以俳歌故也雖然豈謂比局哉今茲嘯山知命歳始謁勢南之祖廟而其途中記行文爲小册屬予爲序予已爲千里知已不可辭愚聊叙其由授之耳

東武守愚庵山人

印　印

東岳平惇德書

印　印

鈴鹿越 卷之第一

崔亭句選

洛 李流挍
三宅嘯山

いせへ、いまだ詣でざりし事のおぼつかなくて、此とし比近き邊りの人々のもてはやすなる大々講とかやにくはゝり侍りけるに、ことし其滿るにあふて、うの花月の中の三日をなん首途とは定ぬ。睦じき友の馬の餞しつるほく多かれど、事しげゝれば洩しつ。講衆の一つれならんは余りにらうがはしかりなんと、したしき限り七八人引わかれて出たちぬれど、それさへまだ冠簪せざる類のあなれば、連たる駕よるの服雨具などかつげる者三人、それに便りて跡追來れる者二人、何くれと十六七人ばかりに成ぬれば、なを賑しからずもあらず。月の山の端に傾く比所〳〵誘ひ合て、明がたに東の河原おもてより岡崎村を南へ蹴上にかゝれば、家〳〵の扉もみな明揃ひにたり。送り來し人すべてこゝより返る。さし上る日の岡より天の帝の御廟對を過て、やがて、大津に打出の濱風も和ぬれば、舟にのりて湖水に浮ぶ。空快く晴て遥なる島々も計へつべく、辛崎の松はたゞ掌の中の物を見る如くにぞ思ふ給へらる。ある人の云ける、松島・象潟・嚴島等の名だゝる所〳〵普く見侍りしかど、猶此湖のうみに似る物こそなかりつれ。壯麗優美、連なれる山のたゝずまい、洲崎のさま・城樓・長橋、物として備らずと云事なしとぞ。げにさなりけんかし。

夏山の光を湖ゝやさゝら波　嘯山

又いんじ年春を稱して舟遊びせし詩

琵琶湖上晩霞開　碧水春光照酒杯　、
桐柏山風吹不盡　落花片々逐舟來

しばしが程にやばせにつく。舟を上りて廿町余り行ば追分のうばが餅屋也。

夏立てねばりや出るもちつゝじ　山

草津川水かれたり。目川村の豆腐は世にひろごりて、いづこにも其名いちじるし。庭なる棚藤盛り近く馬駕のり捨てこゝにいこふ人いと所せし。

大きさの花かくれなき牡丹哉　山

一里ばかり行ば梅木村也。和中散をひさぐ家五六軒もあるが中に、ぜさい定蔵今一ッ何とかいへるいづれも高樓作りにして、街の左に築山面白う、遣水の傍に瑠璃光如來の堂を搆へ、生墻低ふ、三上山はたゞ此庭の物かとぞ思はる。車にて藥をはたき、ふくろに入、目がけ、たゝむ杯それぐ〵の人居並べる。かうやうにも世に行はるゝにやとうち驚る。

靑梅の苦みやうつる湯の香ひ　　省我

袷着て心ぞうつる和中散　　山

七ツの頃石部につく。伴ひし人のしるべある所なればこゝに泊る。櫻川と云る銘酒を出されたり。

舌ざはりこのごろや煮し櫻川　　山

十四日、何村とかやにかの櫻川の酒店あり。壚の頭リに胡姬の色どれるはあらで、むくつけなる男のつい居たれど、朝たより夕に到る迄、人これが爲に足をとゞむとぞ。横田川舟渡し也。水口の驛、

泥龜を問ふは誰子ぞ鱉汁　　山

松尾川流れ淸く、山の樣もゆるやかにして賀茂に似たり。

土山にて今一組の人々の一日先立て、多賀の宮に詣でたるが、けふ關の間迄に逢んと契りしに出會ぬ。宿をはなるれば左の方の山手に田村の大鳥居あり。ひとりのぼり見れば宮居は三丁斗奥也。此神の傳にのする所を見るに、弘仁元年九月任大納言兼右大將薨年五十四身長五尺八寸胸厚一尺二寸目如蒼鷹重則二百一斤、輕則六十四斤、怒則猛獸忽斃、笑則稚子早懷、武藝絕倫など書り。眞に本朝無雙の豪傑、みちのく又は淸見關のいさをしおもふべし。

廟上深林映白雲　登臨萬古憶功勳　　山
英靈如在應無極　樵牧齊知田將軍

蟹が坂の澗に蟹が石塔也とて松二本あり。いづれの時の事なりけん。

下闇を横に登るや蟹が坂　　山

猪の鼻山中村の前キに近江、伊勢の境あり。三子山、さは高し共見へね共、志賀の山越よりも望み、又いせ浦の船の目じるしにも、此山の雲のさまを見て晴雨を定むと聞ば、此わたりいつとなく上り來しにやと覺ゆ。

誰取三峯嶮　浪爲髻髦形　不知兄与弟　　山
各自倚空靑

鈴鹿山は古き書〻に出て哥詠多し。我も昔あづまに下りし時、こゝを過し事を數ふれば三十年に近し。貌は老にたれど心のさまで變れりとしも覺ぬは、げに昔の今になるにやあるらん。

うの花のしら髮となりぬ鈴鹿山　　山

八十瀬の川は名のみしてさもあらず。筆捨山を見て關の驛にかゝるに、右の方に伊賀・大和への道印あり。こゝに見にくからぬ女の古き薄べりに座して、膝の上につゞれ引ちらしたるが、顏色只ならぬ樣に見へて往來の人に憐をこふを聞ば、けさこゝにて子産たりといふ。夫やありととへば、あたりへたふべものこひにまかりしと答ふ。土佐の國の者なりとぞ。あはれ世にはかゝる事も有けるよと、人みな鼻うちかみてあしとらせぬ。

芋が子の街に生へしあぶなさよ　　山

十五日、此宿は東海道との別れ也。かの古へはいせ道を右に見て東に下り、今は吾妻を左に見やりて南にかゝる。懷舊の情一かたならず。

ふる事や橋も柚も句はねど　　山

關河を越る比に、

みじか夜の日も關さずて明に梟(飛)　　山

楠原迄一里にたらずといふ。さゝ餅と書る店あり。

さゝ餅と聞ば粽かとぞおもふ　　山

又一里斗にして椋下村より窪田の間に、とよく野の松原あり。錢懸松もこゝなり。

松朽て蚰ありげなる野原哉　　山

左の方に一身田の堂高く見へたり。部田といふ村の左へ少しさし入て、きれいなる橋あり、白子へ行道也とぞ。津の町の長さは日比聞しに違はず、城は右に少し見ゆ。

町數も四月の中の十日かな　　山

出はなれの八幡の御社の左の方五丁斗に阿漕が塚ありとぞ。折ふし酒店に鮓の見へければ、

簀卷漬阿漕が塚の近ければ　　山

雲津の驛のあなた左の方半丁余りに忘井の水あり。さるべき名所にや石に彫付し哥　過來つる都の方の戀しきに結びやせまし忘れ井の水　甲斐　少し遠ひたりげなれど得しも思ひ出ず。松坂の町作りいと美〻し。人〻がうじにたればとて日高くとまる。十六日、

新茶屋・明星茶屋を經てくし田を跡に宮川の渡しにつく。清冷にしてしかも深し。吉野川・熊野川と源を同じうすとぞ。舟を上ればやがて中河原の茶店也。內宮より爰迄人を出して迎ひ持せの酒飯こゝろよく、しばし憩ひて町の左より二見へゆく野道長し。何のわたしとかやを越て程なく浦に到る。山の麓に大きなる巖立連りたる間を傳ひて、汀に出れば佳景云ん方なし。沖の方に飛島・潜島・興玉石など態求め置たらんと見へわたる。東の方は渺漫たる波濤の際りも見へざる中に、洲崎の處々さし出たるは、桑名のわたりより尾張・參河、遠くは遠江の灘にもこそあめれ。あたりの子共の代垢離かきなんとせがめば、錢くれて見るに、とみに赤裸に成てする〳〵と海の中へ走りこみ、おのが長のたつ程迄歩み行るが、いつしかかばと飜りて泳ぎ回れるさま、げに所にすめばとぞ思はる。

島光橫海上　日氣翠嵐催　帆影時々隱　山
潮聲續々來　峰巒紀山接　浩蕩遠灘開
巖古神威在　采蘋漚水隈

濱邊に小貝うる者多く並び居たれば、人みなつとにと買袖にす。けふ朝熊へも登りなんと定めつれば、余波をとゞめ顧み勝に杖を引て行、濱荻は道の田の畔に一構茂りたり。

蚊屋釣ていせの濱荻折しかん　山

朝熊の麓にかゝる。此坂は三十余丁にして甚嶮しと聞ば休もてのぼる。あるは女童の腰おしなど笑ひさゞめくに紛れ、辛うじて峯につく。高うしつらひたる茶店の牕によれば、山海一瞬に歷々たり。實に三楚盡九江平と云けん思ひ合ぬべし。霧も霞も立ざる日は、重なれる尾越に富士の頂の見ゆと、人の語りしもむべさる事ならんかし。例のと申さまほしけれど、口ごもりたるははた多景に思ひ惑へるならん。御寺迄は猶七八丁も有ん。虛空藏丼の御戸開かれて此程人のむれ來けるも、けふははや日晡時に傾き、內宮迄七十余丁なんありといへば、寶物拜も大かたに拜みなして下り來るに、夕日程なく嶺に含みて山路とく暮ぬ。折から月の出しほうち曇れるが上、嶺橫をれてかいなければ、省我、用意せる提灯にて纔にてらしたれど、九折なる路を廿人に近きが下りもて行ば倚たど

〳〵し。とかくして半過下りし比、御師よりの迎人來りぬれば、やゝ力を得て、靜にあやまちなせそと云もて、そやの前宇治橋のつめに出得ぬ。御師何某德大夫に着て皆うちくつろぎ休む。一組の人々はとくより爰に來居たれば、出合てかたみに笑ひ悦ぶ。風呂・夜食のもてなしも亦事の樣替りて京のことおぼせらる。十七日、空ことに快く晴たり。御神樂は未の刻と聞ゆれば、其程に外宮詣せなんとて行。間の山の女共、所がらとて白粉あつうけはふて、三線轟く斗彈立たるはいとおかしきに、片へに莚しき並べて三ツ四ツより七ツばかり迄の稚者の是も皆、顏白うつくりなしてさゝらを摺、甲ゝ高なる聲を上、額に筋して拍子取、旅人に向ひうたふ。それが後にすへて母めける者の添居て口々に錢をせがむ。又膝にふしたる孩あれば、此樣(コナイ)に踊くたびれて寐ましたに下アさいやせ、本ンのこれが慈悲で御座アいすと、舌だみていふ。向ひの側にはこれも物しける比丘尼共の手に短き錫杖を振鳴して、ゆきゝの衣裳を目當に云並ぶるを聞ば、日比の事にてよく打揃ひぬ。郡さん、花さん、島さん〳〵、ゆかたさん、先ヶなァ姉さん捉さんせ、中なァ兄さん、鉢卷さん、跡なァ婆々さん捉さんせ、と耳とよむ迄云もてさはぐが中を少し出拔來れば、こたびは今少しきたなげなるびくにの數十人むれ立てみそこしをもち、前後より取圍み、推て袖にすがり貪る事、ひとへに蠅の腥きにつくにひとし。これ皆彼等が群ありて昔よりかう也と聞ど、いつの比よりの事にやしらず。外宮迄五十丁の間は町つゞきにて、中にも古市といへるには、青樓も見え戲場もありて賑し。既外宮にかゝる時、間の山以下の先黑く前に同じ。宮殿すべて去年作り改られしかば奇麗倘いとも賢し。

筍の直なる事を忘るまじ　山

宮回りしたる樣こそいとおかしけれ。扉に畫る圖は大かた大津繪にひとし。宮守の人を見かけて示し說る神号の牓に顯せるとは、おほかた違ひたるにぞ、猶事さめにたり。

葭原をくゞりて啼や宮雀　山

天の岩戸は七八丁の坂なるを、岩を疊み垣粘していと滑也。此道つくれる者也とて、あそこ爰に座し居て心あれ

といふもおかし。すべてこれらが様のかうやうにおし立て、余りにけしからずと見ゆれど、思ふ事を其まゝにうち出たるや、却て淳朴の餘風なりけむかし。午時迄の約にて出ぬれば急ぎ御師の元に歸るに、やゝ有て三汁十余菜の饗應あり、吾儕にはいとめづらしう興じき。

箸取て江戸を思ふや初鰹　山

酒數巡過て膳を徹し衣を更めて神迎に詣す。先五鈴川の流に盥漱して一の華表にかゝる。諸門宮殿みな萱葺也。杉の林森々と物深し。あないの人廣前の傍なる扉を開き入レて、第二の御ゝ前にぬかづく。人々御供參らせられしかば祭文ありて三寸頂戴す。奉納の吟、

生れると飛蝶にも日の光かな　山

京をたちし時、瓜流より送別の句ありし返りに、

榊取てせちにいたつき祈來ん　山

其去年より病るをもてかくは云り。今はた其事の思ひ出られて、

病ラ葉のとく青かれや夏木立　山

宮回りは同じ様なれば浪しつ。御師の元へ歸ればいと早う神明を勸請し奉り、注連引はへ柱巻立て、乙女子・神樂男あまた左右に居並べる後に、其ゆかりの者也とて膝押合て居ぬるだに、けしからずと見ゆるに、玄關・臺所・表口まで尺地も余さでおし入けるを、などてかくやと問へば、御神樂うたるゝ所にはいつもかうと覺へて參る事也と、主かたの長なる人のいふ。さて御神樂始りて一段づゝの太鼓を相圖に、兼て大なる器にあし七八百疋とき亂して入たるを、座の眞中にさし置たるを手ごつかふで、あそこ爰へ蒔ちらすに、彼後につめ居たる者の奪ひあふ様のけふがるに、主かたの人たつて表の方へも投やるに、押合つきやりて息まき罵りたるは今一入らうがはし。それはさる事なめれど、老たる巫のわが座のあたりにちらかりたるを、人目忍びつゝみそかに膝の下へ掻もて入たるおかしさ堪べうもあらず。舞樂の後、祭文よみ果て事終りぬ。直ちに賽とて打連て又御山に參る道すがら、あたりの姥・嚊、大勢の童を呼立、吾黨を取回し、まアかしやれ〲とおめく。さし心得し人、あし二三百ばら〲と打ちらして、そこをつと通りける様、そぐはぬ事なれど、待賢門の

夜軍の落口に、八瀬にて寶螢が砲を投て山の衆徒を欺けん古への風と思はれておかし。宇治橋の下には長き竿の先に大なる網を結びて、上より投る鐵を自在にうけ留るが中、まれにはづれたるが川に落たるをば、童の手ごろの竹にさん俵やうのもの付て透とて押へ取ける様、かゝる業にもけに修練は有けりと感ぜらる。黄昏の比歸りていこふ。つとめてのあした礒邊へ志す。朝熊の道三四町ばかり登りて右りに分れ行。すべて山間の徑也といへどもいたく嶮しからず。杉原・笹原など云所を過行に、溪川清く流れて左に成右に成て越けん數をしらず。いづれも橋はあらで平めなる石の薄赤きを尺斗づゝ置てたゝみなし、そが上を渡りて行。水淺ければ危からざれど、雨の降たらんにはとみに水かさや増りなんと覺ゆ。此わたりの山松蓋たれ枝斜にして、態作りなせるやうなる甚多し。あはれ都近くあらば抔誰もいふめる。巖うち登りてあやしく妙なる峯〱見過れば又いで來て、更に應接暇あらざらしむ。

似た様で其山でなし夏みどり　我

かむこ鳥音せぬ水の流けり　山

かゝる山中にも倘住へる人の有けるや。しゝ垣も所々に見へ、牛追て耕しつゝおのがじゝ烟輪に吹て語り居るは、繪などのさまにも似たりかし。あふ坂といへる峠七八町の上り下り有て少し嶮し。爰より猶五十丁ありといふ。此峯を過れば、大かた原らにて野也。巳の半刻斗に礒邊につく。こゝは志摩の國にして鳥羽の城へは三里也とぞ。里の入口右りの方に楠の大木あり。左にも亦同じ木二株あり。昔かの元樹の枝地に垂て自然に根を生じ、今かく榮しをもて一連三根の楠と号て當社の神木也と語る。元樹は十三抱ありとかや。誠にためし少き事成べし。こゝには物うる家もあらねば、ある御師の元へ入てしか〱の旨を談じ、御あないとして十二三ばかりの童に袴着せて出したり。御宮迄は倘六七丁も有なん。反橋を渡りて茂れる森の中に入る。こゝも亦内外の宮を分てり。外宮は額に國中社とあり。内宮は猿田彦太神を祭る。猶此伊雜宮の事には異説あるよしなれど、それはとまれ角まれ靜にすせうの地也。人〱神樂參らせたれば、翁三たり

ゐほしかづけるもかづかぬもあるが、笛・鼓・太鼓にて何かは諷ひたる、ひなびにたれどすせうにおかし。此御宮は一とせ前に御すり有しとぞ。さる故こそあらめ。彼御師の元へ歸りたれば、早うひるのかれいひしてさし出たり。中〻思ひしには增りてきよらかに面白しとばかり有て、硯こひ出さきに思ひよりし神木の詩かいつける。

豫章元一樹　一樹作三根　長幹靑天接
驚風白日飜　　　　　山
霜雪尙凛然　亭々幾千尺　更經數百年
知作大磐石

脫け出て幹に定るわか葉哉　、

ゆるやかに休て、元の道へ十町ばかり歸り鸚鵡石を見る。大なる巖也。前に四間ばかり置て藁屋をかけ、男一人守居たり。今來し岨に小さき岩の有により居て、うたふをかのわら屋にて聞ば、石の內に人の居てうたふ樣也。小屋を出て石の下へよれば、ふつと聞へず。尤怪むべし。主の男かの岩の下にくゞまりて、唯地聲に山の謂れにおのが事抔取まじへ云つゞけたる、譬ひ兩方に人ありて連いふ共、かうは一ツものならじかし。さは倚これにも聲ハ遣ひの侍るにぞ。

鸚鵡石金がほしいと呼ふ也　山

此わたりの民の子供も亦旅人とだに見かけぬれば、馬にも駕にもまつはれて錢をこふ。其諷ふ事もまた同じ。あとも先も覺へねど、おかねもたァんと設さんして、お藏もたてゝ、とやらん云もて三五丁も付添來る。すべて關の別れよりこのかた、からくり的・豆切・水嚢入、その餘の乞兒(カタヘ)數へがたきが上、つらの皮厚うさり付て他トを貪るは、國のならはしにこそあめれ。つら〳〵思ふに、御ン神の光をもて、あまたの者の朝な夕なの烟をも立けんは、誠に限ッなき御ン惠みならんかし。ある山田にわかめにて烏つくりたる鳥おどしのいとよく似たるあり。崑崙山には玉をもて烏をうち、松前には昆布にて屋根ふけるとやらん。みな所から成べし。

腹淋しわかめの烏割喰む　山

抔戯れて杉坂迄來ぬれば、御師より迎の人さゝえやうの物携へてこゝに待居たり。思かけず嬉し。酒少酌て暮ぬ

うちにと急ぎにし程に、戸ざし比歸り來ぬ。一組の人ゝはけさ道より別れて朝熊越にかゝりたれば、道も遠きが上嶮しければ初夜の前に來ぬ。今宵はからずもこゝの風人左竹にあふて語る。

短夜に睡たひ事を忘けり　山

みじか夜や睡らんとすれば時鳥　左竹

五に脇の句もあれど例の洩しつ。

十九日、よべより雨降出たり。省我と守武の社を尋て、

此道よ茂りの深き葉の雫　山

西行坂は寺ありてさびたる所也。近比庭に芭蕉翁の碑をたてゝ槿の句を刻めり。

葉櫻や絶ず流るゝ水のさま　我

きしる戸を明たつや雨のかんこ鳥　山

吟じ捨て舍りに歸り、蓑笠に雨を侵して歸旅に趣く。已刻ばかりに中河原に來ぬれば、例の送人こゝに待うけて酒をすゝむ。されど未其興もあらねば一二酌にてたつ。

齋宮懷古。

祭場縱跡樹森ゝ　客子忽ゝ一訪尋　山
不是風流親祭使　何看玉簪別離吟
紀綱長斷齋王卜　詞藻偏憐異代心
臨眺聊將歌下里　宮前淒雨思難禁

雲出のこなたより香良洲への道あり。馬にあないさせて野路を行。二里ばかりもやあらん、星合社と云る前を過て、

蜘の子も願ひの糸を學びけん　山

香良洲は平沙渺ゝとして松林深う茂り、渚清らかにして松露多しとぞ。ちか比入口の堤數丁が程に並樹の櫻を植渡したれば、春の比は津・松坂わたりの人來り賞すとかや。

鼃の子潮に打れてまろぶなり　山

椋下に舍りしに、あるじ狂哥好て多く語り、あがやどせるまろうどには、誰にまれ狂哥を望み來し習ひなれば、一首せよかしといふ。其事に得ざればいなむといへども、とかく免るさねば、ぜひなく其屋号によりて、

いろは屋と家名を聞けば御亭主も
かなに埒あく人とこそしれ

明和七年庚寅四月

此紀行なりて後、ゆかりの者の俳優をもて、冷泉入道の君へ参り馴奉りしにつけて、潜に御覧に入まいらせしに思ひ懸ず御筆を染られて、題号のおほせ並につゝみにかうなん御戯れの侍りしを其まゝおくりこしたり。いと辱くてやがて此書の首に冠らしめぬ。人のおこ也と云なんは、とまれ角まれ大ぞらの風にまかせ侍らなん。

嘯山書

蓰年

我師嘯山老先生、初老の頃より長者街に居をトせられて、其風韻をしたふ人すくなからず。誕は享保三年戌三月廿五日とかや。齢八十四にて簀を易られしは今享和元酉四月十四日なり。先生の岳父望月素竹は芭蕉門人木節の息なれば、翁より傳ふる處の家藏多し。著述あまたあるが中に、寶暦十一のとし古選を編シ華言をもて句毎に評あり。見る人其和に漢に文の縱横なるを知るべし。安永二の比新選を出さる。こゝに至りて獨唫を校して納とす。先生天（性）姓眞卒不羈にしてよろづ物にかゝはらず。學あり才秀て識尤高きは、諸好子の耳にふれ口にいふ所なり。弱かりし時富鈴門となられしは寛保三辛（癸カ）酉の年にして、ことしまで六十二年也。富鈴初てのげざんに、似我〳〵の葎を習はん穴の内　とあり。紀行は雪の跡身延山紀行・再度越有馬紀行・湊圓坐讃岐紀行・薪日記大和河内紀行、省我子を悼ふ・其外莵道・淡海・若狭・芳野・兵庫等それ〳〵和漢の文あり。中にも此いせ路の記は亡父省我同じ旅寐なるが上に、予も稚かりし時杖にすがりて詣ぬれば、かた〳〵のがるべうもあらず。あら

ましをしるせよと李流兄のすゝめもだしがたく、拙き筆をとるも此故なりとゆるし給へ。題号に冷泉爲村卿御稱嘆のあまり御筆を染られ、鈴鹿越となん遊ばされ、嘯山へ參らせゆへ／＼清介へと仰ある。（清介、晉則といふ老師[illegible]なる人なり。星野山路家の門にして狂言をたしまれしかば、卿の御心に叶ひけるにや、度々御膝近く召れけるとなり。參らせゆへ／＼は彼狂言ことばにての御戯れとぞ。）有がたしと共儘に題号とせる。序文は幕府の龍眠君にして、書は消日主人の男淳德なり。紀の文も老師自筆の儘にして木に上さる。しかのみならず興にふれ事に感じて咏唫あげてかぞへがたし。こたびの集は序幷端書等ある句はしげ／＼しければ洩すをもて、其おくふかきみちのくの果までも、老師の名だゝるは實德の高きなるべし

享和紀元秋八月

李遷謹識

印　印

華亭句選 鈴鹿越　卷之第二

洛　李流　校

三宅嘯山

春之部

歲旦

明の春世に葛城の神もなし

宇太村は何處に隱れて花の春

名と利との中へほつとり花の春

元日や何さま宋の政事

人毎に妖直しけりけさの春

なつかしきみちのくぶりや鴨雜煮

雜煮椀おれも持丸長者かな

國の春虎のなきこそ久しけれ

初空や馴ていたゞく日枝颪

古きより曆もたちぬ三ケ日

京に春何處の浦の蛤ぞ

脊戸口の塵末もおかしかざり繩

寺ゝのあらもの／＼し門の松

引道具門の松原明にけり
僧正の兒祝われぬ福壽艸
主人先眞似て退れつ鏡割
ひらく日も莚にうつる鏡かな
昆布はさむ箸にまつはる野老哉
初寅や衣の裏の玉かしは
いかい事千代をたばねる卯杖哉
福藁や誰取初し早苗より

歳玉　とし玉や童ごゝろの玉手箱

玉打　玉うちを避て行ない御寮達
たまうちや抱たも踊る男の子

羽突　奥庭や羽つく中の笑ひ聲

寶引　寶引や柳したゝる君が膝
寶びきや高野小性(姓)の里下り
きげん取乳母が手くらや胴ふくり
寶引やめまぜをねだる娘どち
寶びきや女の肘もたつか弓

節　節の日やくらぶるとなき娘どち
節の日や手まりあてがふ一座敷

七艸　なゝくさやきぬたに得ぬる家童子
四五錢の薺買れつ長者殿
叮嚀に薺はやして又寐かな
薪すらけふは役ある薺哉

万歳　萬歳や素袍の袖も青によし
万歳に腹かゝへけり取揚婆ゝ

春駒　春駒や若衆をつくる玉くしげ

猿引　人に似た姿便なや猿の舞
猿ひきや三筋足たる頬がまへ

傀儡　一芝居歩行〳〵やくわいらいし
おづ〳〵にでく呼れけり夫の留主

御修法　抱た子もぬかづかせぬるみしほ哉
たどりつゝ御修法拜みぬかり袴

左義長　左義長やいともかしこき庭の鬼
御代繼の吉書にどよむとんど哉

春燈　灯やおぼろながらに君が兒
月花と燈立たり御師が宿

厄参　厄参り思ひつる事果したり
鶯卵やよき序なる厄参り
後厄芹の羹めづらなり

東風　東風颯と調べかはりぬ琵琶の湖
胸髭のちゞれや伸る東の風
遊べとぞ東風の聞ゆる人の耳
降ながら東風に替りし風見哉

凍解　筋違に土橋とけぬ日のうつり

氷解　搔つ撫つ氷をほどく柳哉
な寄そよ氷のひまのさゝら波

雪解　こそばい鱗雪解のかゝる牛の皃
川口や雪解に水の共濁り
解たりな男は右を雪の道
来る水によその雪解を量けり

残雪　残雪や松の梢のつくり道
何送る文字に残りし如意の雪

木芽　雲透に木の芽ぞ光る豐後橋
月暗し未芽をきらぬ寺はやし
木ゝのめや庭付柱水をふく
鍬箒木の芽面倒見てやらん
池水もみどりに返る木の芽哉

下萠　下萠や土かく鶏の蹴爪より

蘆立　くゝ立や縄の付たる捨氷

芹　芹焼や主手づから火ふき竹
水に濺ぐ根芹や鶴のきれい好

蕗薹　進初し杜[illegible]も未なり蕗のたう
蕗のたうとくと咲たる花白し

草芽　草の芽や火桶の割の二ッ三ッ
艸のめや去年に變りし遠干潟
くさのめや未巻たらぬ牛の舌
草の芽や後はいとはんものながら

若艸　若草や人の来ぬ野の深みどり
わかくさにかゝれる沙や雨の朝
弱草の上流れけり馬の尿
わかくさやざぶ〳〵かゝる磯の浪

春艸　身を撫る洲崎の魚や春の草

藪入

公家方の野袴風俗や春の艸
やぶ入や雲井の月の物がたり
やぶいりや輿添男いかめしき

二ノ替

うき事の骨我けいせいや二の代り
妻娘花見に替へつ二のかはり

御忌

うるはしき念佛行者や御忌詣
畫舟の帆を送り來ぬ御忌の鐘
さはいへど御忌奥深し華頂山

梅

梅さくや箒掃てゐるよすて人
嗚呼の者寄來て梅の花見哉
うめさくや角ミを拔あふ肴賣
どれ〳〵と灯下に見るや楳一枝
梅さくや駒下駄なりの畑せゝり
熊の手の蟻も盡た歟梅の花
薄霄に紛れて梅の吹雪けり
雛の蚯蚓堀當ぬんめの陰
うめさくや塀を直す組屋敷
侍きて共催ありや雨の梅

紅梅

紅梅のしらけ仕回や雨つゞき
紅梅や兒の文書く椽の端

未開紅

朝腹の人のながめや未開紅

鶯

鶯やうきに曇らぬ籠の聲
うぐひすやこたつの上の小盃
うぐひすや地に一寸の日の寛ミ
鶯や回れば遠き池の嶌
鶯や護摩修せらるゝ殿の上
うぐひすや未だ霜腫の人の耳
うぐひすや小雨打ちる園の中
うぐひすや出家さす子のなづけ物
鶯の啼仕舞ては光りけり

柳

青柳や三日見ぬ間の薄綠
あれる日もひとりあしらふ柳哉
茶をくんで柳に向ふ獨座哉
生けた跡は突さいて置柳哉
日毎醉主に似たるやなぎかな
投入に鼠のつたふ柳かな

案内に五本の柳静なり
酔てはいるのら友達や門柳
嚙で見て馬の嘶くやなぎ哉

冴歸

啌ついた様に春なき寒さ哉

余寒

未寒しふるひ捨たる炭俵
年の上獨りにあまるさむさ哉
暗がりの鰈に余寒の光かな
いつ去る事も白根の寒さ哉
出くすみの褌しめる余寒哉
二三日富士の余寒や旅の肌
冴かへる空もやうそを月の風

暖

桑植す背あたゝかし十万家

麗

浪うらゝ船にあゆまぬ山もなし

春日和

春日和肱も机をはなれけり
未死なぬ粘うり婆ゝや春日和

霞

山城に似たる大和やうす霞
上京や霞の奥に雪白し
砂道に歛ぬかしけり夕がすみ
ほの明し霞に酔る月の皃
長橋の行人征馬霞けり
寸馬豆人峠に變る霞かな
朝吹や霞の底の三保の松
よべの雨蒸て外山のかすみ哉
富士の雪雲井にのせて霞けり
薄霞む間いに水の光かな
ほけやかに京の京たる霞哉
弓張の入日を追ふやうす霞

薪能

させんせしの論や薪の能のもめ

涅槃

下にゐる二王の顔やねはん像
遺言に金の事なき佛哉
生れたり死で見せたり釋迦如來

雪果

見よとてや生れ來し身の雪の果

朧月

まほならぬ匂ひなつかし朧月
さゞ浪も朧の音や月の下
たらしやる酔たんぽあり朧月
朧月小町が哥の風情あり
朧月あやしき人の薬草履

なぐさみの念佛もやみぬ朧月
朧づき還御は先も追ざりけり
朧月幾度雨に流しても
音のなき巨椋の沼や朧月
横に見る五條のはしや朧月
おぼろ月夜風の毒は離れたり

初午

初午や小鍛冶が館へ夜の殿
下ざまの初午競ぶ日和かな
初午や蚕飼ふ家の物いはひ
はつ午や手紙封じる赤の飯
はつむまや祭り捨たる野の祠

社日

鳶ついと社日の肴領しけり

彼岸

心行ひがんの空や天王寺
散事は梅をかゞみのひがん哉
何よけむひがんにあたる妾
物種の器に氣さすひがん哉
時正の日獵師の茶の子貰ひけり
賃とらぬひがんのけふや渡し守

鳥巣

鳥の巣や一筋づゝの菊仕事
巣つくりて鳥もよい子を祈けん
たしかなる鳥の産家ぞ角やぐら

囀

囀の中にひろごる日南かな
妻鳥の囀る方へ遷りけり
細川や囀りながら羽そゝぐ
囀りやそれを商ふ店の籠
囀や園の行衛は裏の町

接木

こゝろもて心に傳ふ接木哉
我手のみ知るや接木のしめごゝろ
かいくゝりきゞす隱れぬいさり松

雉子

雉子啼て烽の野面艸青し
しづくたる雨もうつくし雉の羽
野をわたる雲を蹴て立きゞす哉
それ程に雉も逃けり子供業

燕

逆ひつゝ乘つゝ風の燕かな
つばくらやあれも妻子を置所
紛らかす江戸の軒端やつばくらめ

燕のまゝふた兒や舟やかた
廣ひ家の望もなしやつばくらめ
水に見る己が自在やつばくらめ
つばくらの身をりん〳〵と往來哉
燕の瀬田を越ては戻りけり
燕やあら血の上も只は居ず

歸雁

歸る雁病て殘るもなかりけり
暗き夜を日に續雁や鄕心
米踏の見送る空や歸る雁
面白き空より鴈のわかれ哉
行雁や余波に一夜隱岐の嶋
歸る鴈童目さとく見留たり

雲雀

遠眼鏡上るひばりを寄にけり
四ッ五つ空から繫ぐ雲雀かな
瘦骨の風に任へ居るひばり哉
土邊より扇ぎ上たるひばり哉
立時は疾くて見へざる雲雀哉

雀子

親すゞめくゝめる中で養けり
雀子や川を越たる嬉し聲
すゞめ子や見るを見まねの獨はみ
すゞめ子や机の糊に引れ寄る

子鳥

子鳥やさしそろ〳〵舌の廻り椽

鳥子

柿の枝折や鳥の巣ごしらへ
雛鳥を己が巣に飼ふ鳥かな

蝶

近よりて蝶肝潰す野風呂哉
つまみ來て女蝶男蝶の僉儀哉
障りてや馬の鼻ひる蝶の舞
てふ〳〵や共夜〳〵の花の宿
蜘の圍に粉して遁るゝ蝶ゝ哉
蝶ゝの草拾ひ行野面かな
音なせそ蝶の眠りを折取ん
蝶の舞上羽も聲はなかりけり
花の蘂にこそぐり合歟蝶の髭
花の蝶蜜作る氣もなかりけり
舞のぼる初瀬の廊下や蝶一つ
血の出ぬ蝶ゝの腹や茨かき

蜂

静なる娘の鳴呼や蜂の聲
狭き巣や子にはさはらぬ蜂の針
蜂の巣にいつくしむ子や一間づゝ

虻

花をのく拍子なりけり虻の聲
花の香に酔てや虻の跡しさり

蛙

啼継で人を送るや野の蛙
まじ〳〵としては蛙の歩きけり
小うれしき夜は可愛き蛙かな
啼立て離家ゆるぐ蛙かな
連るともなく音かたまる蛙哉
なく蛙机の眠り引にけり
蛙来て坐禅の床へ上りけり
船に付て矢橋へわたる蛙哉
又氷る池や蛙のかこち聲
飛で見つ這つゝ草の蛙かな
春浅く鳴ル子に似たる蛙かな
野宿して一夜蛙にまぶれけり

陽炎

かげろふに小首かたむく烏哉
陽炎や良分れ来る酒旗の文字
活石に陽炎もゆる野中哉

糸遊

糸遊や雪の白山越るけふ
いとゆふの日ぼしにまつふ夕かな
雲心なくて糸遊隠れけり
いとゆふやうかれ心の空をふく

地虫

出かけたる地虫びんなや鶏の觜

猫戀

やぶ入のたらずや猫のうつら顔
いつくしむ猫のつはりや物思ひ
板葺をうしとや猫の忍び足
屋根を追ふ日高の川や猫の戀
猫の戀かまはぬ事のいと憎し
逢度に女夫喧嘩やねこの戀

聖廟忌

東風に通ふ心つくしや聖廟忌
見しりある屋根屋の兒や聖廟忌

白魚

白魚に老たる親の機嫌哉
白魚にいとゞいぶかし海の潮
白魚や戸の上の名もしるし

鯛鱠

兵庫の醉醍醐の獨活や鯛鱠

子は親に離れぬ物歟ふなゝます

諸子

門川や諸子釣子のみだれ髮

未だわかき苣の苦みやもろこ汁

飯蛸

飯だこや人一口に喰てけり

飯だこや殊に晴なるほんのくぼ

蜆

又兵衛が自慢の味噌や蜆じる

小息子の短氣呵りぬ蜆とり

石山や田上近ししゞみぶね

とけしなき業に老けり蜆とり

田螺

ゆり出たる田螺の泡に入日かな

山下る僧の憐む田にしかな

泥手ふく在の馳走や田にしあへ

初雷

はじめての日は鳴神もやさしけれ

初櫻

うか〳〵と涅槃も過ぬ初ざくら

降雨に程拍子あり初櫻

山櫻

荷ひ來し水の淸さよ山櫻

婆〻嗅の人評しけり山ざくら

淋しいは己がこゝろぞやまざくら

やま櫻罪を思はぬ風情哉

若ひ柴の雪踏や憎し山櫻

おしげなく折て哭けりやま櫻

段〻と目にほどけゝり山ざくら

暮おしや舟へ下りたつ山櫻

糸櫻

糸ざくら裾を合せてほめにけり

いとざくら枝も散かと思ひけり

椿

春もはや椿にこぼすうこん哉

落椿春の湊をゆられけり

花も葉もひかる月夜の椿かな

椿落て小魚日影にはしるなり

燒野

程を經て雉子立戻るやけ野哉

革鞋の鋲もてはいるやけ野哉

夕月の燒野の灰に曇りけり

逃て出て狐見かへる燒野かな

出代

打泣て出代りにけりけなげ者

出かはりや女あるじの心添へ

出かはりて来て初ゝし箸も名も
出かはりや塗て見えざるつらの皮
出代りに四鳥のわかれ見たりけり

種下シ

相應の田園樂や種下し
藏もある門邊の川や種下し
種まくや醸した酒の口明ん

畑打

畑打や明暮わたるよしの川
畑うちや鳥の馴たる影ほうし
白雲や山畑かへす雨あがり

耕

かへす田やよそにも牛を呵る聲

苗代

苗代や家内を祝ふ妻の酌
苗しろや良雄屋敷の水かゞみ
なはしろの澄きる朝や露の音
のら付て太郎が苗代後れたり

摘艸

つみ草や男をよける長堤
摘艸や青侍のまもる堤口
つみくさや後姿のくるゝまで
つみくさも相合傘や稚子二人
摘揃ふ草もしめれり夕けしき

獨活

山うどの莢苦し間の宿
淡しさの尋常なれや名護屋うど
薄及日にうどの曇りや夕月夜

虎杖

春ちやゝ酢め立にけりさいたづま
折分て虎杖喰ひぬ女の童

土筆

唱うたふ遊女日早きつくし哉
土筆戰書下せる野原かな
摘て焼船のけぶりやつくづくし

慈姑堀

花に行群集の道やくわる堀
掻ゆくや空だのめなる慈姑ほり

菊苗

菊苗に雨を占ふあるじかな
きくの芽や薬の袴を未脱ず
貰ばへ菊主寐(寢)食わすれたり

蕨

石がちの崖路の末や痩蕨
塚原に空しく肥し蕨かな
上童わらび指手の染りけり
喰よりは折手嬉しきわらび哉

寢わらび事なく枝を出來しけり
紅粉さいた指に音なす蕨かな

薊

切取て和紙にひんまく薊かな
倒れたも除て通るや鬼薊

木瓜

木瓜の花童すかさん樣もなし
垣にせぬ主ゆかしや木瓜の花

菜花

なのはなのたりひすみなき盛かな
菜の花のいつこぼれてや小石原
なのはなの雲を蒸なる匂ひ哉

海雲

らうたけに參り佗たる海雲哉
潮海の黑みのうつる海雲かな

鳳巾

居る鳳巾出てある月と並びけり
樓をゆらめき出けりいかのぼり
鳳巾あけて君が船出を見はやさん
朱雀野の鳳巾見る客や膝枕
ふは〱と關屋の上やいかのぼり
二三町空に規矩あり鳳巾
寄見ては又のく鳶やいかのぼり
うかれ行煎餅おかしや鳳巾

鹿角落

尙淋し角落したる鹿の兒
角搔て弱まつ鹿の睦みかな
鹿の角芽だつ紅葉に代りけり

桃

目覺の木もなかりけりもゝ林
日傭共桃もらひ行夕かな
よべの雨遠目にさめぬ桃林
もぬけたもあらずて桃の林かな
藥つく水碓やもゝのおく
咲立て日を蒸る桃の匂ひかな
飛ゝに高低の家や桃のはな
買足せる在鄕酒や桃のはな

雛祭

しのびつゝ雛突て見るや男の子
深窓や雛の竈の煙たつ
爺親は臺所にあり雛まつり
紫の上なきひなや夜の榮
雛にも人の奢のうつりけり
御雛出す音や手くりの長廊下

草餅
蓬餅そぐはでおかし内裏びな
摘よせた家内の精や草の餅

上巳
桃の日や水を脊にせる家作り

曲水
曲水や二首つくりたるしたり顔
盃を膝から膝へ流しけり

汐干
京童手に手取行汐干哉
むら鳥思ふ處へしほひかな
算術の今更こはい汐干哉
汐干たり海も底ある物なりかし

鷄合
二人して膝鷄さする褒美哉
負雞の是非もなく／＼寐入けり
彌夏の兒も距やとりあはせ

寒食
寒食の暮や鴛飛ぶひがし山
寒食の晝のひかりや無盡灯
寒食や朝鮮人のながめがほ

鞦韆
ふらこゝに望て出たり男の童
ふらこゝや花を洩來るわらひ聲
ふらこゝに乙子の愛のこぼれけり
ふらこゝに猶ゆられけり夢一夜

安良
安良や愚に直な神祭
安良やこまかにしれぬうたひ物

壬生念佛
つく／＼と啞の笑ひや壬生念佛

御身拭
御身拭佛の胸の廣さ見ん

御影供
御影供や子を賣にたる人ごゝろ
京や猶いろはの恩を御影供
曉を松に月あり御影供

遲日
遲き日や土に腹つく犬の伸
客留てひけらかす日の遲さ哉
留主番は妻の常にて暮遲し
寐もやらぬ狂女の番の暮遲し
船頭の寐兒に春の日脚哉
空に月きよろりと待せ暮遲し

永日
永き日も馬は追れて暮にけり
生れ子の永き日を寐て暮しけり
ながき日や二百町坂を杖二本
雛上る堦にながき日あし哉
御番衆の欠びもながき日影かな

爐塞

炉ふさいで何やら物を忘れたり
爐塞で居つて見たるあるじ哉
炉ふさぎや淋しがらるゝ老ひとり
爐ふさいで童四五度かけりけり
爐ふさぎや膝に馴たる此櫓

桑

桑摘や馬下り來るは何處の殿
安んじて蠶は桑に付にけり

若鮎

上りやむ鮎や山路の溜り水
二ッとはかさねぬ鰷のひかりかな
若鮎や蟲に飛つくはなれ物
打明る獲のあゆや姉がもと
小あゆから育わかりぬ東川
女の童上る小鮎や松浦川
くみ鰷や人の工の隈もなき

若和布

雨の日や礒のわかめの潮しづく
餓鬼引に引て裂とるわかめかな

海苔

氣短に海苔焦しつる男かな
荒磯の匂ひや海苔の焙より
品川は海苔の海なり東海寺

花

花守にいつと問なん雨の暮
待花に勢ひおくれの寒さかな
待花の遊ひ昔來ぬ嵯峨使
待花に古老の噂又聞ん
稚子は乳をくわへて花見かな
公家衆と幕一重なる花見かな
門を出る風情に知るき花見哉
髮かたち飯もはれなる花見哉
ほら〳〵と男追はゆるはな見哉
つるべ鮓てうど屆きし花みかな
手車に座頭うかるゝ花見哉
垣間見る目ぞ變り行花の幕
病にたる人も見へけり花の幕
花見幕にも家風あり後家の君
忘たるわさび買けり幕の人
田舍人の遠くためらふや花の幕
甘き香の窓に滿けり花曇り

櫻

羽ぶき來る蜂に花の座頽れけり
花守やむかしは烏帽子今は棒
翌の花白春炊ぐきおひかな
母らしき人の居にけり花むしろ
庭の花下戸な入そと書れけり
來た犬の主得皃なりはなの下
惣門の輾りや馬場の花の雪
まぶれずも飛かふ鳥や花の雪
夜ざくらや朧に照らす壁の下
夢心夜を守りけり家ざくら
嚴然と關所に白きさくら哉
さな吹そさくらの下の火吹竹
櫻よな流石こもくは捨ざりけり
いつとてもさくらに書は女文字
朝ざくら素皃の皃の彳めり
一ぱいに櫻散しくや持佛堂
禪僧の濟したらしや散さくら
陰に寐て落花のふとん被りけり
する墨に落花の雪のまぶれけり

櫻鯛

百限に著る日傭やさくら鯛
腐つても鯛遲ふてもさくらかな
吹散し花や海にもさくら鯛

海棠

つゞりさす糸海棠のはな衣
雨請て海棠壁を照しけり

梨花

梨の花凍にし膚忘れけり
靑なしや花にも水の有がごと
咲立て太しき枝や梨のはな

山吹

やまぶきや藤の抱つくうしろ影
やまぶきや水の銀光りあふ
山吹や柴橋輕く懸なせり
やまぶきや沓うちかゆる殿の馬
山ぶきや小竹筒を洗ふ暮の川
やまぶきや爪上りなる寺の門
やまぶきの盛りは水をはじきけり

連翹

連翹は花壇の空で咲にけり
連翹やよしある園の裏築地

連翹や秋の風情を催ふかと

藤

ゆらめくや藤の英ねぢれずも
折佗て藤をかこつや女わざ
藤さくや欠てとれたる崖の上
白沙を拂ふ枝末や藤の花
ふじの花雨の降日も自得かな

躑躅

あたふたと折ば短きつゝじかな
山買ふた初手の眺や花つゝじ
呼かはす寺子の聲やつゝじ山
岩つゝじ言はで過けり位負

茅花

暮る野につばな落ちる光り哉

五加木

人近し五加木は針を持ながら

霜別

おく霜も橋有たけのわかれかな
百性(姓)の心つもりやわかれじも

茶摘

手拭に素顔めでたき茶つみ哉
川舟の櫓に響きけり茶摘哥
何某の娘木深く茶つみかな
柴舟の譽てわかるゝ茶つみ哉
茶乙女と世に言ぬこそ恨なれ
出在家の物なつかしき新茶哉

春野

春の野や妹負渡すさゞれ川
春の野や草一面の淺みどり
春の野や丹波の和尚出られたり

春山

雨後更に遠目賑はし春の山
欄干にのせてゆたけし春の山
京の山温泉のなきこそうらゝなれ

山笑

妹脊山笑ひを川へこぼしけり

春雨

汲上る水はつめたし春の雨
うたひゐる飴屋が傘や春の雨
年越た蚊の出初けりはるの雨
物しりの朝寐好あり春の雨
濡つゝも足代組やはるのあめ
春雨や蓑着ぬる子の嬉しがほ
春雨やならず息子の二日ゑひ
粉灰たつ空を流すやはるの雨
はるさめや宿とく取し腹ふくれ

春さめや二日目はもう呵らるゝ
笘葺て呑利く舟や春の雨

春水

游ぎ越獵師が犬や春の水

春風

甘みつく店の密柑や春のかぜ
はるかぜやこまかに光る市の塵
春風や動くともなき鳶の羽
薄綿のあたり心やはるのかぜ

春夜

はるの夜や短ふなると思はれず
春の夜や男とおゝないくつれ歟
よき人の住居静けし春の宵
春の夜や女のうたふ熊野の文

春閨

はる深く閨に樞を落しけり
獨たつ妻戸の影や梨の月

春雑

枯芦に伏れる春や波のおと
うま過ぬ夜の化粧や二月頃
治聾酒や假令斗の座敷形
積塔や古風傳へし膝と膝
野鼠の長ほど草の若葉哉
船過て又起たちぬ芦の角
春もはや半すぐろの薄かな
蓮瓶に萍生ぬ二葉三葉
江口今土百性(姓)や西行忌

暮春

ゆく春や心に野路を書の窓
行はるや夜の錦のほつれより
行春をあれもおしむ歟鳶の舞
行春や花をやりしは今の事
のぼり目にとゞまる春の余波哉
子心に春おしとてや筆すさみ
一とせの前ぶりとりぬ暮の春
暮る春をはやし行也太神樂
彌生盡物うしなへるこゝろかな
閑ながらせまらぬ春の行衛かな
手ひろげて蕨も春を送りけり
やがて脱布子に春の光かな

萑亭句選 春之部 終

葎亭句選 鈴鹿越 巻之第三

洛 李流 校
三宅嘯山

夏之部

更衣 鳥の羽は落し捨なりころもがへ
こゝろせく娘のたけやころもがへ
機織や更た衣にたまだすき

袷 初袷薫籠さまして召れけり
袷着て見合す皃や子三人
いづれをと妻の間なる袷かな
胴の間へ家中出仕や初袷
關取の膝撫て見る袷かな
りゝしげに魚すくう子の袷哉
袷着た朝や机のより心
護持僧の有紋ゆゝしき袷哉
律院の齊と成けり初袷

牡丹 是がそも町家の庭かぼたん畑
狼籍(藉)のない花見かな牡丹哉
牡丹見や沙糖こぼるゝ児の膝
金雞のさし覗ひたるぼたん哉
白ぼたん月の圓みに向ひけり
清談家家に替たるぼたん哉

芍藥 散ぬれば牡丹芍藥紛れけり
芍藥の役目ぞ重き天が下
しやくやくを日ゝにほどくや蟻の舌
芍藥に鄭の國風俗吟じけり

灌佛 灌佛や寺の祭と覺へたり
灌佛に母御たづぬる娘かな
誕生のほとけ指さす人もなし
灌佛や人を教の口ひらき
くはん佛やちいさい子にも衆生緣

山王祭 峯どよむ祭や湖の水なれ棹
祭見る鼻猶高し山法師

葵祭 白髪にもかゝる葵の緣かな

炷しめた扇に請ふ葵かな
目出度も輾る車や賀茂祭
葵橋一ト日斜に掛流し

八瀬祭
数珠かけた直衣姿や八瀬祭

地主祭
揚々と家老の鎗や地主まつり
何某の株の遊女や地主まつり

麥
から竿の麥に走れるしなへ哉
佛檀に白く置けり麥埃
麥うたや離宮に近き村の長
麥秋や一揆起した村ぞこれ
音なして麥うつ藁の碎けけり
はじらい歟犬も出て寐る麥の外
麥秋や思ひ出申す鳩雀
麥秌やおしかけ客に何處貸さん

燕子花
朝居して目を刮ひけりかきつばた
ふき〳〵と兒に水あり燕子花
妊ぬる葉を痛はるやかきつばた
水に寐てつぶり上けりかきつばた
かきつばた千度濺ぎて開きけん
瓶にして猶優美なりかきつばた
旗下に鳶尾菖蒲あり燕子花
かきつばた紫ほどのくらゐかな
手伸して折ばひしけぬ燕子花

若楓
石山の堂のしめりや若楓
妖の出さうな溪や青楓

若葉
しづくする艶もわかしや一葉づゝ
旅人の若葉蹐る山路哉
もまば皆水に成べき弱葉かな
汗かいた峠冷つく若葉かな
白けゝりわかばの陰の小豆餅
野水白く若葉を拆て流けり
漣も緑に立し若葉哉

夏木立
楼の欄這ふや夏木だち
夏木立眞葛が原を鎖しけり
なつこだち深く春日を拜みけり
松杉の淺き緑や夏木だち

水走る石の徑やなつ木だち
泡盛の氣に移り來ぬ夏木立
夏木だち黑塚遠く雲濃る
山寺の茶をもむ場や夏木だち
大坂を出はなれにけり夏こだち

桐花

桐咲や去年の臺を付ながら
桐の花局に惱む美人あり

棕櫚花

毛むくたつ中から黃なり棕櫚の花

卯花

うの花のこまかに咲て白みけり
うの花やおれが下葉に闇もあり
うのはなや出店に月とほとゝぎす
暖にうの花の雪こぼすなり
卯の花や障子の白き比丘尼でら
見ずしらぬ人にうの花乞はれけり

葉櫻

葉櫻の黑みに瀧の別れけり
葉櫻や盜人もなし番もなし
葉斗も櫻なれやこそ名は殘れ
葉櫻に寺号斗の燒地かな

苔花

庭出來て物待たれけり苔の花
着た形に花さく苔の衣かな

罌粟花

牡丹さく隣に輕しけしの花
葉にも根にも打こぼしけり芥子の花

蓼

蓼青し鴨をつらぬく泉川

合歡花

味爽や合歡の葉閉ぬ夕曇
月白し障子にうつる合歡の花

笋

笋や納所坊主の腰の鑓
竹の子に黑木の華表ゆがみけり
雨晴や笋藪のうすけぶり
筍や兒も和尙も鍬遣ひ
笋や重なる石を被き投
竹の子に光の陰を感じけり
殺生と我笋は思ひけり
笋に一月肉を忘れたり

杜鵑

月花は雨が禁物ほとゝぎす
杜宇乞食のつかぬ野はら哉
一点の不二の明りやりほとゝぎす

人立て傾く舟やほとゝぎす
子規可愛がられて人遠し
ほとゝぎす待乳に雨のこぼれけり
うかされた茶の嬉しさよ杜宇
さま變る酢吸の皃やほとゝぎす
子泣せぬ妻を譽けりほとゝぎす
焚糊のまゝ子に成りぬ杜鵑
風と寐覺とたんの拍子子規
近く啼て深き姿や杜宇

鷭

雨催ひ鷭の翅に猶暗し

行々子

四五町は耳にありけり行〱子

鳲鳩

かんこどり一代小判見ぬところ
淋しがるも人有てこそかんこどり
かむこどり高野の公事は未濟ず
馬糞なき路の細りやかんこどり
鳲鳩麥にもつかで啼居れり
山法師おとなしき世やかむこ鳥
溪水に我影法師やかんこどり

蝙蝠

熊坂は蝙蝠、中うに掴みけり
かはほりやよし有家の建くさり
かはほりや不受不施寺の堂の軒
蝙蝠やむら雨過る夜の傘
かはほりに鼻なかゝれそ眞の闇

螢

奉るほたるや握りこぶしから
はら〱に逃るも赤き螢かな
逃るともなくて空へぞ飛ほたる
石山の月の先追ふほたる哉
下陰は月にも嬉しとぶほたる
京中は一錢づゝのほたる哉
螢起て心ぞはしる川の上
燃る身を浸しては飛ほたる哉
飛ほたる尻の短き光かな
葛の葉のどちらも見へる螢かな
抓む氣のなくも老けり螢狩

蝸牛

行先を角に捜るや蝸牛
てゞむしやかけ引橋の堺川

つまみ上で見れば隠れぬ蝸牛
しづくしこでゝなしの國かくれけり
身の筋の貝に通りぬかたつぶり
戰ぐ葉や移らん事はかたつぶり

飛蟻　庭もせに飛蟻散こふ行衛かな
辭宜なしに穴を出て行飛蟻哉

孑孑　得もふらぬ孑孑や石のうへ
棒振や少し日のさすたまり水

蛻　袴腕で長う成けり蛻袋
樹ゝ深し蛻の落たる傘の上
是にさへ身の毛立けり蛻の衣

蚊　吸せつゝ蚊を吹やりぬ書の窓
二つ三つ四ついつしかにときの聲
蚊をうてば我血も共にあやしけり
喰ふた蚊のあちらの舟へ退にけり
蚊の觜の糸筋に血の通ひけり
打て來る蚊の尋常に名乘けり
未覺ぬ戸あり蚊のたつ山かづら

蚊帳　蚊帳狹し十うを頭の木偶箱
蚊や取て朝寐の兒へ被せけり
蚊帳釣た舟にくらしや薄月夜
寐て戻る親に蚊帳なき遺根[illegible]哉
小夜更て戻る男や蚊帳の音
酒臭き夫の鼾やかやのうち
灯や蚊帳にゆかしき假名草紙

蚊遣　あふぎつゝ机を通す蚊やり哉
蚊やり火に物言せけり君が方
駿河臺富士を見越る蚊遣哉
蚊遣りたく火入や二人かたるほど
手傳ふて客も蚊やりや水驛

夏蟲　武藏野や聲せぬ虫の夏を遊
水垢の上を渡るやむしの脚

蚤　瞬ゝの蚤に怒りや人ごゝろ
ふためきて我とおかしや蚤と指

毛蟲　流しもの枝もろともに毛虫哉

初鰹　京者の口を閉けりはつ鰹

生鰹

生ぶしや早剛べき姿あり
生ぶしや黒木の御所の臺所
なまぶしに直ひの錢の交りけり

鮓

昨日ならず翌ならぬ鮓のかげん哉
鮓押て待事ありや二三日
幾夜經て一夜を鮓のなれかげん
眞丸に鮓の今樣亦皆し
肌輕く鮓にうつりぬ人ごゝろ

短夜

みじか夜や抱起したる稚兒
短夜や東へまはる日の不思義
火とぼすと早初夜告る外面哉
捨られし月や短夜の蒼海原
みじか夜や子と脊合せの母の樣
みじか夜や日備來る頃日三竿
衍してみじか夜明けぬ日本橋
短夜や貝にふくみし宵の藥
血走れる眼や短夜の宿酒
みじか夜や綠に明る庭のさま
短夜や未濡色の洗ひ髪

夏書

武士の袴いみじき夏書哉
嫉き夜の夏書の筆の踊けり
蓮生が眩の血しぼる夏書かな
若き身は夏書も人にかくしけり
梵字漢字かなや夏書の皆共成

夏籠

夏籠の願ひあやしやうら若し
夏籠や種ゝに聞なす鐘の聲

菖蒲

高ゝと檜皮日出たし葺あやめ
少しふくあやめ長きを選びけり
形斗ふくや闕屋のあやめ草
曉や菖蒲漬たる門の川

菖蒲湯

菖蒲湯や壁のこぼれに是當ん

幟

懷に國主かしづく幟かな
山里や幟ゆらめく藏の間
壁越や幟吹合ふ家中町
丁どけふ五日の風や幟竿

粽

呑やうに粽喰ふ子の不敵哉

うかれ女の笄遣ふちまきかな
麥粽耻がはしけに持來たり
卷立て陽の余れる粽かな

藥玉
藥玉や五色の糸の香に匂ふ

競馬
競馬にもこゝろの闇や絹かつぎ

印地打
勝鬨をきく負腹や印地打
大膽の生ひ先見へつ印地打

藤森祭
馬馳る陣のゆかりや藤の森

夏至
日枝を出て愛宕に夏至の入日哉
遠騎の所〻を戻るや夏至の暮

若竹
若竹の白粉ちるや露の珠
弱竹よ子と呼けんは昨日今日
わか竹や惡さする子の指の跡
伸る竹今年の用は免しけり
一代を伸て置けりことし竹
其色も眞竹は深きみどり哉
今年竹裏も表もなかりけり

木下暗
木下闇人もうれしく又こはし
下闇や子をてうらかす熊の親
下やみの覺束なきや丸木橋

五月闇
梟の鳥を追ふやさつきやみ
有てなき月の力やさつき暗
眼力も程あるものよ五月やみ

五月雨
さみだれや賀茂の社のみほつくし
飼鳥の日にもつ露や五月雨
立ぬれの牛靜なりさつき雨
さみだれや耳に忘れし鳶の聲
さみだれや蜘出て見ても〳〵
さみだれや座頭の袴水をうつ
五月雨や親の建たる家の內
さみだれや築地の內に霧の海
さみだれや足弱連の物もらひ
五月雨槎ｷ流れん天の川

入梅
灯にも朦かゝりけり入梅濕り
掃寄て立ぬ埃や入梅じめり
入梅曇富士見ぬ旅をかこちけり

入梅の風物に至らぬ隈もなし
糊の毛の青う伸けり入梅の中
爲朝の弓の戻りやつゆの中

乕雨
妹殊に哀がりけり乕が雨
東人とに言けりとらがあめ

富士垢離
富士垢離の系圖もたるよ近江人
不二こりや朝風寒き濡褌

鷺老
鷺の羽披や老をかみの梅

立葵
堀川の水のうつりや立あふひ
咲滿て末一段やたち葵

茨花
花茨灯かげに針のかくれけり
芋蟲のあぶなきさまや花茨

百合花
鬼ゆりの開き濟せば反りけり
物おもふゆりの袂や露走る

紫陽花
栽成して世を紫陽花にひようけたり

蓴菜
御遊びや小柄に蓴めされけり
山寺やぬなは流るゝ筧水
長ゝと蓴恐ろし水の底

海松
みる房や笘屋の軒に月の鎌
海松房や潮の底に清水あり
生貝と海松をごた煮の驛かな

萍花
萍の花に一夜やかゝり船
萍の月をゆり出す嵐かな

藻苅
藻の花をつい吐く魚や呑つゝも
藻の花やちればぞ誘ふ潮がしら
藻苅舟しづくを湖へ戻しけり

早茸
早松茸他國の水のこゝろかな

茄子
誰畑にゆかりの色ぞ初茄子
百切日二百きる日や茄子畑
老なんとして忍ばるゝなすび哉
小言いひつゝも亦買ふなすび哉
茄子漬あやし一夜に瑠璃をなす

橘
橘やイみ寄りし古手店
橘や又思ひ出す左大臣

樗
立寄らば樗のかげや辻談義
主のある池の緣や花樗

青梅　青梅や酢い皃もせず男の童

煮梅　寒かりし花や煮梅の白沙糖

何阿彌の祕めし煮梅の加減哉

早苗　誰渠のけじめも見へぬ早苗かな

植余る早苗あからむ徑かな

莞筵當た脊のしづくや早苗哥

植濟す田面に富士の光かな

九重を青きに包む田植かな

田植歌　媳二十ャ姑五十田うへうた

風颯と鷺の見へ來る青田哉

翠がねに青田見せ居る機嫌哉

まくはりし青田打合茂りかな

兄弟の田に水分て戻りけり

草取　苗程は蛭も肥たり田草取

夏艸　夏草やありとも見へぬ埋れ井戸

なつ艸に追失ひしひよこ哉

夏月　向ひ居て頭痛揉すや夏の月

月夜よし是こそ夏の命なれ

膝に來るおもかげ嬉し夏の月

移り來て葉に流るゝや夏の月

文ャなすは樹に水なれや夏の月

旅人の笠は手にあり夏の月

夏月の輕くさし來る葉越かな

獸狩　眞の闇子の器を樣す照射かな

玉うけて脊をする猪や鼻嵐

權兵衛で戻る夜ある照射かな

火串さして嚏を谷へこぼしけり

蠅　退やらぬ障子の蠅や物ぐるひ

つまゝれて手をする蠅の命かな

立聲の尙暑くろし瓜の蠅

いぶせくも老馬の蠅の羽吹けり

蟬　棹さすや蟬啼つゞく初瀨川

蟬立て物忘たる梢かな

來惑ふて蟬樓を回りけり

啞蟬の徒に這居るやあそこ爰

じり〳〵と啼山蟬の動きけり

翌もある身ぞおしめかし蟬の聲
岸根打小舟に蟬の時雨かな
蓑虫の被ひで居るや蟬の雨
日は嶺に大原七ッや蟬の聲
つまみ來て押せば出るなり蟬の聲
有明に蟬のしづくや沙の上

水馬

水馬園の風に走るなり
もつれつゝ散歩行けり水馬
かつをむし塵にまつうてゆられけり

水雞

覺へても寐覺にまどふ水雞哉
石走る水を蹴て啼くるな哉
明近く水鷄を追ふや鐘の聲

羽抜鳥

ぬけた羽をくはへて見けり妻の鳥
抜た羽を大切に見る孔雀哉
ぬけた羽の直に流るゝ鷗かな

鵜飼

あの中をくはへ煙管や鵜かひ舟
鍛練に鵜繩も生て動けり
うしと見る月に飯喰ふ鵜舟哉

川狩

漲るや寶鐸受てたつ力
さゝ濁小暗き月の夜ぶり哉
川狩や若衆の脛のしらま弓

氷室

荷ふにも踏心地あり氷の使
二日には高枕せんひむろもり

氷餅

箱王は三枚喰たり氷餅

帷子

帷子や隣似付ぬ加賀越後
かたびらの胸合がたき晝寐かな
帷子のちゞけをくねる女房哉
かたびらを誰に裂れて夜の樣
羽衣に干帷子やいさり松
絺やおもきが上の墨衣
病人のかたびら着たるどよみ哉
かたびらを帆にして行や牛遣ひ
絺に小さく成りぬ老が膝

夏羽織

常はぬぐ肩に着にけり夏羽織

白雨

夕立や家鴨呼とる小傘
ゆふだちの日をおさへたる響かな

夕立や醉も凉しき夢ごゝろ
ゆふ立の痒ひ所を流しけり
ゆふだちをまつ江の鱸踊けり
夕だちや具足に嚢の在祭
白雨に借り帷子や妹が下
夕立や内へ引入る書の窓
ゆふだちや上みは澄ぬる桂川
ゆふだちや烟逆だつ淺間山
夕立や猛く鳴來る竹林
白雨來ていさかふ鷄の離れけり

祇園會

素麪の淀を上る歟祇園會
祇園會や厨の煙八雲たつ
祇園の會兒出した家見て行ん
余所借つて母の見居るや鉾の兒
膾聞く日枝は靜けしぎおんのゑ
乞食も着かへていでよぎおんのゑ

嘉定

饅頭の穴美しや月の顏

天滿祭

天滿祭靜に見るやひとゝなり

冷汁

流れあり馬はそちらへ冷汁
冷汁にあらとけしなや女客

一夜酒

醴やおつはら髮が欠茶碗
あまざけや舌やかれける君が兒
夜更人靜て醴のわく音す也

扇子

隱し畵の主まどひぬる扇かな
みどり子に甜り取れし扇かな
投打の障子を拔るあふぎ哉
さし置つ取つゝ鳴らす扇かな
乞食も古き扇を頼みかな

團扇

護摩の跡本尊をあふぐ團かな
嚙勝てる犬愛し居る團哉
ひろげたる文あふぎ遣る團哉
客毎に團參らすや家の風
牛遣ひ土邊に座して團哉
忍びよりて脊中を風はとうちは哉

抱籠

抱へ來て妹がたはれや竹婦人
ぬる時に尸せずとは何竹ふじん

抱籠や妻とも別のふし所
老人の能入まへや竹ふじん

涼

涼しさや青き筧の水の音
堂の椽すゞしき道の出店かな
涼しさや主と病のない所
涼しさや燈暈遠き白書院
門すゞみ子を抱て居ぬ嬶もなし
人のせた床几舁なり涼川
すゞしさや柳に音はなけれども
涼しさや上へ撫たる兒の髪
後生氣を離れて涼し哥念佛

暑

乗物に衣冠正しき暑かな
皆よつて二王彩るあつさかな
氣違の默然とたつあつさ哉
比丘達の衣を解ぬあつさ哉
暑き夜のくらきを引や牛車
觸るもの暫くすれば皆暑し
あつき夜や油入たる古行燈
雲厚き夜を戻り來し暑かな
暑來て京の水際立にけり
法の師の聲立祈るあつさ哉
坊主子の日南を通る暑かな
鋸屑の汗に流るゝあつさかな
角力とりの獨り暑がる座敷哉

薫風

あつちから給はる風は薫りけり
山寺や浮世の外の風かほる

土用干

誰やらに逢た香もあり土用干
こて〳〵とうしや寡の土用干
まろがたけ思へば伸つ土用ほし
遣らばやと思ふもの出つ土用ほし
虫干や世に蓋ひけん緋の衣
むし干や日南に伏る米からと

炎天

炎天や虱掻出す赤がしら
炎天やから身も何ぞ荷ふかと
炎天や鳥も障らぬ石佛
炎天や三弦習ふ賤が宿

雲峯　尚暑し雲の峯たつ江戸の町
大江山余所に恐ろし雲の峯
太白星白け行衞や雲の峯
有と有水吸上て雲のみね
樓の屋根に人あり雲の峯
山みへぬ南の潮や雲のみね
鳥の羽の障らば焦ん雲の峯
雲の峯海に移りて居りけり

瀧殿　瀧殿やさし來る月の薄烟

泉　簾上て美人の夢や泉どの
ひた〳〵と沉枝をひたす泉哉

清水　はなれ來て馬の嘶く清水哉
はしたなく遊女の結ぶ清水哉
斜に構へ蟹のト居る清水哉
行ことを清水が下に忘れたり

瓜　早瓜に酒くむ君子誰ゝぞ
淺瓜も老極りぬ尻くゝり
山の井や深き思ひを冷し瓜
一ト切はいざ腸をひやしうり
射付れば水ぞたばしる瓜の的

葛水　葛水の通るや腹の九折

心太　女夫居る柳の陰やところてん
心太放せば水にゆられけり

麥粉　麥の粉や古代の哥のこまやかさ

香需散　水呑ぬ京巡禮や香需散
香需散乞食の子にも呉にけり
草の家の水の清さよ香需散

蓮　蓮采や美人の手にも水馴棹
音なして人に浴せつ蓮の露
蓮切て直に散かと思ひけり
蓮見にと朝寐の扉押きけり
こぼす時長けに伸けり蓮の露
廿日若一日蓮のさかりかな

河骨　河骨や黄陵廟の女巫
がつしりと河骨咲ぬ水の上
河骨や水にこはげな雲の陰

枇杷　枇杷黄なり町家に交る門徒寺

杏　花の痩はどこへやら往て杏かな

紫薇花　弓張にさめるほめきや猿辷り

鷺艸　鷺草の水干す池にみだれけり

鷺草や風にゆらめく片足たち

瞿麥　なでし子や根ながら抜る小石原

撫子や濡椽先の捨そだち

鼓子花　野川皆鼓子花咲てからびけり

夕皃　夕顔や黄昏を世の油賣

米切れた家に瓢(簞)の盛かな

御秡　年も瓜も二ッにわれぬ御秡川

茅輪　茅輪越て乳母がこけたるどよみ哉

御秡する岸やあつさの底筒男

形代　形代やつくれる罪も夏痩も

夏之雜　燦めば子返りもせん川柳

鐺艸打入て後の春城落にけり

梅青し此花に見し月も今

庭石を抱てさつきの盛り哉

六月會雲母の雲も拂けり

葎亭句選 夏之部 終

雪亭句選 鈴鹿越 巻之第四

洛 李流校
三宅嘯山

秋之部

初秋

上りつく年の峠や今朝の秋
秋たつや東へなびく蚊帳の香
ひとりあきひとり立戸やけさの怀
江戸住や庭少しあるけさの秋
風ふはときぬがさ山やけさのあき
水漬を母しかりけり今朝の秋
初秋や水まさ白き星月夜
初秋や蚊帳に透来る銀河

一葉

先散りぬ黄みも果ぬ一葉より
暑ひ中にかさと音せし一葉哉

桐葉

桐の葉の大きな手本出しけり
桐のはの屋根迄落て戰けり

散柳

散初て柳に明り付にけり
寺に來た朝氣の風や散柳
さゝら浪しよろ／＼立やちり柳
一葉散て後は久しき柳哉

揚燈籠

眞夜中の月ごまつはる高どうろ
住持數代古にし寺や高灯籠
一羽行後れ鳥や高どうろ
高灯籠雨の降日は尙淋し
高どうろ夜半に分るか出羽が宿

攝待

攝待や鵜飼が妻の施亡し
せつたいの宇治拾遺にも似たりけり

七夕 星合 銀河

七夕やこれもはづさぬ世間寺
たなばたに借りてたゝむか小夜衣
川越が宿におかしや星祭
ほし合や雞飼はぬ里のあけ
ほしあひや代り行世の噂物
星合や念佛手向る尼御前
天漢居つたなりに動けり

白露の源遠しあまのがは

鵲橋　願糸

鵲や橋をわかるゝ勞れ聲
七つ子の何を願ひの糸捌き
かさゝぎの橋から啼て明にけり

立琴

心ある手むけの琴や想夫憐

梶葉

しほらしや梶を賣子のつなぎ錢

槇

槇の葉にかゝる埃や夕月夜

魂祭

魂棚に散や麻木の箸の音
蓮の葉のうすき設やたま祭
三女夫の手操目出度し魂まつり
魂棚や我も維摩の亭主ぶり
なき魂の何を耻て歟立屛風

刺鯖

さし鯖や棟餘多ふる子福人
さし鯖や能登とし聞けば愛せらる
大名に高ひさし鯖貰ひけり
さし鯖や澁き舅の酒きげん

送火

送のいて尼の諷經や魂送り

大文字

天津風桂やこぼす大文字

燈籠

物好の白きにもどる燈籠かな
なよやかに切籠のもすそ戰けり

躍

隣同士子の評判の躍かな
睨にいつくしむ子や組おどり
よい娘鱐のつくおどりかな
主の子の後には邪魔な踊かな
踊の夜田に乞ふ雨をいとひけり
おどり髮屆かぬ伊達をせがみけり
師の影に遠慮のならぬ躍かな

音頭

鉄仙が音頭に老を惜みけり

地藏會

脊の子は夢路を廻る地藏哉

花火

こらしける花火の工夫散にけり
散時に橋を見せたる花火かな
月出ぬ花火の跡の物しめり
初雁の亂けて避る花火かな
野袴で恩地も出たる花火哉

角力

幕際を阿波の鳴門や角力取
豊さや抱へ相撲の長がたな

事柄のまつりごとめく角力哉
關とりや奥ある腹のゆたかなり
立て分る羅漢の肘や土俵入
おくれても上手は久し相撲取
庇外に遣つた角力の見へにけり
拾ひ出る憎まれ相撲や今二日
年月の己にはやしすまひ取
やゝ老て妻もてりけりすまひ取
よき相撲無理せで我を備へけり

初嵐

筋引て湖をはしるや初嵐
大木の請ておろすやはつ嵐

秋風

夕ざれや髪のかたまる秋の風

殘暑

秋風の立そゝくれし暑かな

露

牧馬の尾髪に露の亂れけり
露けさに武具や錆けん不破の關
狗の子の母やたづぬる夜の露
上る露薄ゆら／＼と動けり
活石の露けく立り草の間
草の露はかなき物もたんと有
露けしな軒端に淺き書の窓
朝露のしづくの田井や枯槔
むく犬の露にふす毛を舐りけり
朝露や堤の沙の底じめり

霧

夕霧や一筋射來る日の光り
霧こめて大河静に流けり
朝ぎりや關の戸ざしの開く音
薄ぎりや川添邑の炊烟
霧雨や人降おとす九折
下り日をつゝんで霧の落しけり
荒海の霧にむせぶや浪の音
山人の皃さへ霧に染りけり

稻妻

いなづまに松明持手下りけり
稻妻をうけて開くや向ふずね
いなづまの海を救ふや夜もすがら
いなづまの身にのみさすと思ひけり
稻づまの人にかきつく野原哉

草花

稲妻の戸ざしを漏るうねりかな
有し野の樣や千草の摑ざし
呑の分る肴の市や艸の花
折溜て薄をねそや草の花

女郎花

そも是が野に育た歟女郎花
折持る手に又折ぬおみなへし

蕣

あさがほや朝の雲のわかれ時
齋偕の蕣ほめる手水哉
きぬ〴〵を朝皃の猪口の覗きけり
朝がほや本トつ枝の實はからめけど
蕣は其日を假の舍りかな
あさがほや夏に切るゝ耻もなし
あさがほの當意に咲てしぼみけり
朝皃や主ひとりのたばこぼん

瓢

酒好の佘の望みなきふくべかな
塀裏に鎖を付たる瓢かな

萩

羽箒に粘らぬ雪やこぼれ萩
萩臥や海へながるゝ深谷川
山萩のばらけ仕回や雨の後
古き根や低う咲たる萩少し
白萩の沙にわかれてこぼれけり
散た枝をしごひて萩を轉しけり

荻

船窓や荻に吹るゝ人の夢
夜に添ふて苦み出けり荻の風
荻一本役にさゝれて吹れけり
陸奥殿の同勢きれぬ荻の聲

蕙蘭

花の付く蘭に割なき楽じ哉
蘭陪へて喜ばれけり母者人

芭蕉

ばせを葉の心ンより練て出しけり
下葉からそゝける風の芭蕉かな
ばせを葉や秋に逢ても疊まれず

西瓜

喰入て西瓜に兀げぬ作り髭
道滿も西瓜の目利違ひけり

絲瓜

ふらめけど糸瓜は音もなかりけり

刀豆

刀豆の肌も銹行垣根哉

番椒

辛き世をわたるや店の唐がらし

よき人や思ひの外にとうがらし
おとなびて娘も喰ふや番椒

冷麥　冷麥や御庭日傭のけふの錄

殘蟬　秋の蟬啼さかりても淋しけれ

秋蚊　蚊の聲に秋の元日明にけり
秋の蚊の聲細りけり夜の風

蜻蛉　とんぼうや羽に夕月の透る迄
孳居て雨方へとぶとんぼかな
流川に尻をうちるる蜻蛉哉
蜻蛉や延す屆かず追へ行

松虫　まつ虫や籠出かしつる齊藤吾

蛬　虫籠からひらめく髭やきりぎりす
繪に似たる妻戸の人やきりぎりす
きりぎりす裂たる口の聲やさし
鳴時の腹のすだきやきりぎりす
其色青油掌（書）た歟きりぎりす

蟷螂　心あり蟷螂つまむ人の指
蟷螂や物にねぢむく眼ざし
かまきりの面をはじけばかゞみけり

螽　己が妻負て飛なる螽かな
終夜狐喰なるいなごかな

虫　むし啼や草葉にかゝる纖月夜
虫聞や世に有兒の子細らし
下り日の廣野に明し虫の聲
虫聞や能揃ふたる物いはず
移り來る礒邊のむしや泊り船

虫狩　虫狩や火縄にむせる美少年
むしがりの案内や嵯峨のお百性

八朔　八朔や出直して來る秋の空
八朔ややむ時はやむ浮藏主

繪行器　繪行器や是も目出度かけ流し

放生會　放生會漁村の扉閉しけり
耳なくも經聞鳥や放生會
落し來る鵙を追けり放生會

紅葉　虻蜂のおもひ絕たる紅葉哉
花添へた薪にも今もみぢ哉

紅葉見の夜から夜に成にけり
律院の後淋しきもみぢ哉
紅葉して地を縮けり淡路島
はへあふて雪の裾野の紅葉哉
もみぢ見や寺の屏風のやまざくら

蒲萄

瓦師や物の上手な蒲萄だな

花野

紅るに入日うすづくはな野かな
雨さつと古道匂ふ花野かな
だゝ廣き花野に淋し日の力
花野行川の光や帆かけ船
分てやる花野戻りや辻の月

薄

三日月を撫落したる薄哉
さからはぬ薄は草の柳哉
薄見る内氣息子や椽の先
うらがれの先うつりよき薄かな
風負ふて野末の薄星を打
風よれて小雨を弾くすゝき哉

蔦

古宮や蔦を力のくづれ垣
石佛にかゝれる蔦や値偶(遇)の緣
こまやかに這て恐し蔦かづら

葛

葛堀るや櫻に染るよしの山
葛ほるや深山持ぬる寺の所務

野菊

野ぎく折る心祝ひや旅の空

鬼灯

鬼灯の立ながら蚊に吸れけり
つまみ茶や行燈の下に媳娘

撮菜

撮菜の世に時めきぬ二三日

間引菜

間引菜やそゝぎ上たる鴨の水

雞頭

鶏頭や中門迄のさゞれ石
けいとうのねつ〳〵赤き日數哉

葉鶏頭

彩れる傘着て立り葉雞頭

蓼

行水に濺ぐや蓼の自ら
一つ家の戸にはさまるや蓼の花
面白や蓼喰た舌の茶を弾く

烏瓜

染上て蔓やそろ〳〵烏瓜
待占や玉章生けて肱枕

冬瓜

冬瓜や棚におのれが霜の儘

冬瓜の針立にけり君が指

芋

芋貳舛文學夜食集られし
引て來て側る馳走や畠芋
人先に上戸は芋にあかれけり

零餘子

どふした欺ぬかごこぼるゝ滌（遲）

藥堀

年号もわすれて久し藥堀
日枝坂に矢の根を得たり藥堀
へら持て童も來たりくすりほり

芺莨若

うつくしき姿に脂や若たばこ
若莨若欠き行末やすほろ坊

稻花

稻の花もるや猪追ふ老の聲
あはれ稻くらべん花はなかりけり
腹つゞみ打や門田の稻の出來
いねの香や泊り合せた家の門
いね見よや金子は餓に當られず

鳴子

風吹けば夜とも分かで鳴子かな
口喰ふて二十が賃や鳴子引
よい程におどしていなす鳴子哉
更る秋にちゞみかけたる鳴子哉
畑有れば鳴子もありて浮世哉

案山子

御園生や案山子の袖に紅絹の端
間ゝには片足ながきかゝし哉
時の用に鼻紙さくや鳥おどし
湖や案山子の裾にさゞれ蟹

引板

雨強く引板に力を盡しけり

添水

裏川に添水もありて能衆哉
鳥立ちぬさも僧都とて鳴居れり
これも亦流れの身なる添水かな
添水成て丈山枕變られたり

落水

水落る田づらや堀のぐるりより

田苅

壷折て院の田苅やおもとびと
數灯す庄屋の家や田苅時

秋入

秋入に乙女の臍はなかりけり

龍田姫

一夜さを一入づゝや龍田姫
醉兒にお腹は立たじ龍田姫

芙蓉

露と日に光りわかるゝ芙蓉哉

笄に芙蓉の落花集めけり

佛手柑

佛手柑や土を去事遠からず

常山木

せめてもの葉は喰はれける常山木哉

箒木

箒木は捨られもせず箒かな

新蕎麥

新蕎麥に納所が手際見たりけり

階子田に根の透く雪やそばの花

蝶〻や今に達者で蕎麥の花

砧

呵けば砧も共に音低し

四手打や戻る男は門の外

鼠居て聞耳立るきぬた哉

尼寺に沙彌を憐む碪かな

晩鐘の間に大津のきぬた哉

飼犬の遠く戻れるきぬた哉

衣うつ田舎遊女やいとまなみ

(鈎)釣簾の外に召れて嚬の砧哉

姉は早母の手に成るきぬた哉

うち入て乳の走りけり夫の衣

露の華飛やきぬたの響より

煤たれて屋根裏くらしさよ碪

横槌の手前耻かしつゞれ衣

三日月

三日の月秋の風情を初けり

晝中に捨も捨たり三日の月

みかづきのゆすらば落ん梢かな

三日月の木傳ふ風の林かな

月

澄月を味方が原の夜道かな

月更て阿彌の棹さす小舟哉

夜〻變る月の出汐や東やま

月の友豆腐一丁倒しけり

待宵

まつ宵や丁と驛の風呂上り

待よひや正しく翌の冠下

まつ宵やほのめき出て日に向ふ

名月

名月を捧てたつや汐がしら

名月や一時づゝに舟しめり

名月や雲の變化の無窮なる

名月や風の力のはれ曇り

めい月や哥よむ妻の見斗ひ

めい月や机の上の須磨の卷
めい月や有とは見へて銀河
名月や御靈祭のすゝ拂
物かはは上京にありけふの月
常の日は出て名月は明にけり
名月や白きをさらす賀茂の水
嫦娥今宵世界に見せる化粧哉
唯一夜月の三十二相かな
月の香も今宵有なんよしの山
海底をさがすもさんご夜中哉
雛の音に海動き出る月見哉
月見れば昔なつかし酒呑たし
御月見や儒者に禪師に能太夫
若ひ者更て少なき月見哉
抱下ろす君が輕みや月見船

十六夜

十六夜に落る潮なし鴉のうみ

立待

たちまちの深つゝとくと欠にけり

下簗

下りやな時は來にけりつかみどり
垂髮子も器さゝげつくだり簗
下り簗年經る鯉にくづれたり

頽簗

頽簗族僧笑ふて行れけり
手叩て皆戻りけりくづれやな

初汐

初しほや島に俊寛只ひとり

野分

門をふさぐ馬に鞭うつ野分哉
立樋に木の葉流るゝのわき哉
乳呑子の泣やのわきの掛り舟
棒さして方丈移す野分かな
人穴の一しほ怖きのわき哉
町中を犬かけ回る野分かな
女同士膝さし寄る野わきかな
野分して七堂がらん〳〵哉
低く行水にはあてぬ野分哉

駒迎

清水屋に仕丁が夢や駒むかへ
引駒や近江大豆のほてつはら

漸寒

人皃にやゝ寒すいと移りけり
やゝ寒や賓客立る大廣間

朝寒

漸寒を蚊幮に覺へつ犬の聲
朝寒や七社に幣の山法師
あさゝむや矢橋へ向ふ小松原
朝寒や庭樹の梢日つる〳〵
あさ寒や見返る伊勢の海曇
朝寒や上京裏の畠もの
朝さむや被き出たる宿直もの
大勢の朝寒永し所化はつち

夜寒

隙人の夜寒を早うしられけり
更て見る空に夜寒のわたりけり
山風の何やら落す夜寒哉
引綱に通ふ夜寒の響哉
糊強な夜着を抑し夜寒哉
喧嘩して跡の夜寒や小提灯
舟窓に月の氣疎き夜寒哉
夜寒來て槇の板戸の見られけり
寐に斗行なる家の夜寒哉
ぱつちりと夜寒の星や水のうへ

牛祭

牛祭尻、張聲の事ゝし
所化達の笑壺の會や牛祭

狼獸ヲ祭ル

烏來て豺の祭を覗きけり
狼の祭や猛きこゝろにも

鶉

奇楠留た鶉に粟のおかしけれ
朝寐すな鶉は床が贖のもの
鶉籠眞紅の總も秋のいろ

鴫

鴫たちぬ居たとも見へぬ澤邊より
晝なる如し終日鴫ふたつ
見返れど〳〵未鴫たゝず
水流れず鴫たつて又夕かな

雁

雁の聲ふとんの上にこぼれけり
初雁や雁門のなき國をしれ
庭の池に雁着初て祝ひ哉
初雁や旅人身を灸くふし三里
旅烏の哀は雁にとゞめけり
初かりや鵜殿わたりの虹の末
天津雁か程晝に似た物あらじ

手引子に雁の行義を教けり

渡鳥

異なるもつれてむつまじ渡り鳥
渡るにもさすが小鳥の人近し
風どつと口を覆けりわたり鳥

色鳥

色鳥や假に伏見の杜の暮
押合に日白も秋を渡りけり
網纂き路に馴來る小鳥かな
川せみの共身を切て放しけり
湧て來る小鳥や雨の晴間より

小鷹狩

御容分の牢人衆や小鷹がり
七ッ子の野袴ゆゝし小鷹狩
燒鳥や犬にも一ッ小たかがり

小鳥狩

弓張も空にかゝるや小鳥狩

鱸

手紙やな巨口細鱗と書れたり
不斗鱸思ふて江戸へいなれたり
鱸得つ我赤壁は妹が宿

鮭

初鮭の子も紅葉しぬ此便
初鮭や易牙が塩を覺へたり

小鰯

小鰯や布施に積たる寺の門

鰯雲

鰯雲立塞けんふねの道

落鮎

落鮎や投は水にも露しぐれ

在祭

祝り子の柿かぶり居る祭かな

鹿

引入て啼音や深き萱の鹿
鹿聞の炙るや餉の一夜塩
鳴鹿や寐入た犬の耳うごく
好た餌のあらば蒔なん峯の鹿
鹿の聲杉本左兵衛泣にけり
鹿待夜祭の行燈出されたり
さう鳴かば今夜に痩ん鹿の夫〻
長島の風に折けり鹿の聲
求聞持の後夜の勤や鹿の聲

重陽

人の氣も臍におさめし節句哉
いざ菊に節句させなん擱ざし

菊

けふ咲ぬ恨やきくにひとりど
化粧のみ菊の小袖や靡越
菊作り子に叮嚀におしへけり

埀合す菊や活るを守がごと
今様の花形を說や菊づくり
露はらりけふこそ菊の天氣なれ
灯移りを妻子に見せつ菊畠
筒の菊所を替てながめけり
菊の花主の根をうつしけん

後雛

奈良里や世に叮嚀に後の雛

栗

福僧や小山が末の栗ばやし
栗飯やよろこぼひたる祖母が兒
捨栗に薄及の妙を感じけり

煖酒

あたゝめる酒間遠しく又樂し
語りつゝあたゝめ酒や火吹竹

御香宮祭

もし降らば干珠投ませ祭の日

大津祭

穗芦原枝操かはつて元の湖

後月

調し豆腐の味や十三夜
光猶奥ある月や十三夜
おもかげに霜の苦みや十三夜
寐覺して子も起居けり十三夜
打つけに片面寒し後の月
枕とる夜は殘りけりのちの月
異國人眼有てしらぬ月見哉
跡脚のかくるゝ月の兎かな
院宣や今に二夜の月の眉

色不變松

色かへで空をさしけり松の針
崖頽れ根逆に垂つゝも松の色かへず
姫松の秋に變らぬ操かな

鴨脚

鴨脚葉や唐の倭の書の腹
いてう葉や止まる水も黄に照す
山下に近く見なせるいてう哉

椎

椎柴を焼けば音して走るなり
所化寮や書をこぼるゝ椎の殻

呉服祭

娘連て呉服祭を示しけり

照葉

岸なだれ踏止める樹の照葉哉
露霜と手を替へられて照は哉

綿取

綿くりの種喰こぼす工合哉

蘆花

吹れ行向ひ近江や芦の花

ゆられ來て小舟かくれぬ芦の花
夜はしんと月を籠けり芦の花
港に迷ひ入けりあしの花

裏枯

うら枯や終に化粧ぬ石地藏
夜道にも野のうら枯を覺けり
うらがれを鉢に憐む住居かな

柚

柚の林おの〱劒樹搆へけり
妹が手に鳴るや柚の酢のほど走り
皮と肉別れて逢ふて柚味噌哉
市の柚の寺や揚屋と別れけり
皮燒ば肉の音なす柚みそ哉
柚も既甘きにうつる風情かな

柘榴

さと割ば迸りけりざくろの實
紅ゐやざくろの皮のあつきにも

柹

野烏や熟柹の觜のさし所
川留に荷ながら柹のつはり哉
勞はりて取けり柹の休み年

梨

又花を見するや梨の切小口
梨燒て風邪平らげん丸かぶり

菓

聞となき菓の音や座禪堂

蜜柑

良藥口に苦み出けり燒みかん
乕のみかみかんも皮をとゞめけり

松露

松露取眞沙の下やさすの巫
行つゝも松露取けり杖の先

菌

問寄れば木の子定める叟かな
くさびらや人氣うとさにいぐちけん
茸狩や鯛の鱗にかたつぶり
おきなさび幕の留主居や菌狩
平茸や朽木を楯の片びさし
茸市や指に彈ひて音をなす
茸狩や鼻働かす坐頭の坊

新米

手ぬらさず今年の米もたうべけり
齋僧も世の中いふや今年米
先わたる禰宜の竈や今年米
詰かへる御城ゆゝしや今年米

新酒

新酒少し色に出けり百の媚

手短に新酒の醉の男らし
一盃に貝つくりたる新酒哉
八庄司新酒擯めの喧嘩かな
うけ持た盃輕き新酒哉
一ッづゝ新酒の醉の跡ぞ追ふ

新絹

新絹や一二里づゝの在の町
引はへて波寄見るやことし絹

秋雨

秋雨や薄あかつきの雲一重
じめ〳〵と秋を深めつ雨の音
起出て油さす夜や秋のあめ
秋さめや苅庵に起る人の音

紅葉鮒

紅葉鯽是にもおかし錦織寺

尾越鴨

尾をこしぬ北斗を跡に鴨の聲
旭さす尾越のかもや羽の光

霜踏鹿

霜踏て鹿の細脛侚佗し

露時雨

澄月にかゝる曇りや露しぐれ
使した犬を撫るや露しぐれ
露しぐれ我目にのみや虹のさす
蟷螂の羽も染にけりつゆしぐれ

秋暮

道なしと書る山路や秋のくれ
秋のくれ子持ぬ宿の物足らず
秋の暮毎日有て侘しけれ
人を見る鼬あやしや秋の暮

秋夜

秋の夜を咄寐入や子期白牙

長夜

長き夜や旨く寐る子の病なし
信濃路やながき夜落る月早し
ながき夜や花の街のうかれ聲
ながき夜や烏一羽の麁相より
あらぬ事ましくし秋の寐覺哉

秋閨

冷じき琴の埃や我ながら
旅寐嘸はかなき夢をわれもかう
長き夜や耳痒き夜の空だのめ

秋聲

柝の聲楚辭よむ窓を渡けり
來さかりて荻を離れず秋の聲
さゞ浪やあやしき辺に秋の聲

晩秋　月も世に捨られ兒や暮の秋
行秋や霜の袴のきそはじめ
虫売を啄む鶏やくれのあき
虫は皆節に死けり暮の秋
眉樂に樹は成にけり晩の秋
秋くれぬ淋しい物ら止らず
歸ろとは鹿に言はせて行秋ぞ

萑亭句選　秋之部　終

萑亭句選 鈴鹿越 巻之第五

洛　李流　校
三宅嘯山

冬之部

神無月　里の子のこま狗抱や神の留主
古寺の障子も染ぬ神無月
月も雨も森の社や神の留主
達磨忌　達磨忌や峯のしら雲川の音
達磨忌を避て一休出られけり
老和尚身を達磨忌の起居かな
十夜　下司近く誓ひ音き十夜哉
若人や親十代の十夜講
高く澄月を譽行十夜かな
日和さへ法華と競ふ十夜かな
若者の嗚呼なる尻や十夜鉦
靜なる十夜籠りや古簾
御影講　御影講やさゝはりなしの松が崎

かたまりし善哉餅や御影講

蛭子講

武士客の上座に卑下や蛭子講
くり言を壽く乳母やゑびす講
蛭子講や大坂陣のまへの家
古妻に琴望けり惠比壽講
上人の戯れ文やゑびすかう

巨燵

鈴引て鼠のくゞるこたつ哉
人踏だ事思ひ出すこたつ哉
口に賃飼つゝふかす巨燵かな
手の奴夜は休ませるこたつ哉
せがめども小鍛冶動かぬこたつ哉
頓阿來て雙の岡の巨燵かな
わたましの共夜親しむこたつ哉
丸薬のちるや巨燵の前うしろ
謎に負てまくつて逃るこたつ哉

爐開

炉開や數代得意の疊さし
炉びらきや常の不性に似も付ず

圍爐裏

御忍びに一夜泊りの圍爐裏哉

火桶

手そほりを我は覺へぬ火桶哉
裏文字の反古なつかし張火桶
合せ燒心づくしの火桶かな
手あぶりの火の用心や書の窓

火鉢

客去て撫る火鉢やひとり言

時雨

しぐるゝや颱子をひく軒の端
小夜しぐれ竹に入おと幽なり
浮出し海人佗しげな時雨かな
しぐるゝや窓を搔居る虫の鬪
根はなしと罪ゆるさるゝしぐれ哉
きら星の雲は見へずも時雨けり
落日の稻妻なして時雨けり
尼御前の塗笠したふ時雨哉
屋根取た菊の姿や村しぐれ
しぐるゝや網しづくたる烏羽走り
離別荷の滯にぬれるしぐれ哉
東人窓に時雨を見とれけり
振うては居眠る烏や村しぐれ

霜

時雨ても仕回ず月の薄曇
葉の霜を指に寄見る垂髪哉
高霜や廣野にかゝる夜の旅
霜高く折燒柴の手に走る
灯のほち〱と鳴る霜夜哉
小一時旭を蒸しぬ霜くもり
横雲の明わづらひぬ霜くもり
あたゝめた碁石湯氣たつ霜夜哉
撫て見て夜着に覺ゆる霜夜かな
六地藏並んで冴る霜夜かな

落葉

雨落葉走る兎の辷りけり
殿守や落葉分出る酒德利
土橋や落葉吹わたすあらし山
かけり行犬にむらだつ落葉哉
落葉掃淨衣の姿古風なり
銅佛に吹て音なす落ば哉
宮に着く笠に三河のおちば哉
貰馬の落ば蹴上るひゞきかな
友どちや落葉かく子の後ロ紐

木枯

こがらしと揉合ふ松の響きかな
こがらしに吹上らるゝ小鳥かな
木がらしや大河の水の鳴てたつ
木枯や面被つてもあるかれず
こがらしを開きに請る脊中哉

枯柳

枯ながら時雨をしほる柳哉
小春ぞよ綠を返せ糸やなぎ
降雪に請身覺た柳かな

冬野

むら鳥つくや冬野の髑髏
冬野行女あやしむ男かな
狐火燉しらず冬野の小挑灯

枯野

筋違に日の落て行枯野哉
輕石の草にとゞまる枯野哉
出合たる人を見返るかれ野哉

くだらの

くだら野や草薙村の朝烟
くだら野や日のさす方に鳥の聲

枯草

枯草や物の住なる大屋しき

かれ艸や洲崎しらんで細永し

冬木立

雲散て喰入る月や冬木立
うき物を冬樹せぬ葉の拂けり
三笠山さすがに深し冬木立
冬木立中堂深く闔されぬ
渡舟つなぎすてたり冬木立
黄檗の聯のからびや冬木立
吹れ來て雀生りけり冬木だち

枯菊

きくかれぬ枝の莟はそれながら
枯菊や金を土に預けぬる

枇杷花

己さへすさまじ皃や枇杷の花
道場の土藏作りや枇杷の花
久しきに任る曇りやびはの花

茶花

茶の花や疾く昇る日の朝曇
茶の花を折行人や物靜
茶の花や土取男たばこふく

歸花

稀〻に聲せぬ虻や歸り花
物いはず笑はぬ皃やかへり花
歸り花余程楽じた風情哉
日の艶の紀の路は深し歸り花
かへり花共梢とは見へざりし

寒菊

寒菊の堅く定めぬおのが色
寒ぎくやつゝら短き首の骨
寒ぎくの錦の市や朝日かげ

石蕗

石蕗咲や日南をさがす蠅一つ
丈夫なる石蕗や葉と言花と言

莖菜

洗得し皃見せ莖や鴨の水
春迄と妻のこゝろの莖菜かな
柴小屋に空風わたるくき菜哉

麥蒔

麥蒔や白髪をつゝむ頰かぶり

蕪

煮かぶれず實も蕪のあふみかな

大根引

あやまちの若きは多し大根引
一俵は雜煮の料や大根ひき

聖一忌

國師忌や通天橋に雲わたる
昨日過し誕生日や聖一忌
聖一忌佛祖不傳と殘されし

納豆汁　會我殿や忌日に當る納豆汁
律僧の腹の太さよ納豆汁

初雪　初雪や箕にてひた程草のうへ
はつ雪の撫もさすりもならばこそ
初雪や今に取べき笛の上
はつゆきやほゝ笑來る無二の友
初雪や疾く御格子を上られたり
はつゆきや今年七十五日あり
はつゆきや御灯の殘る八王寺
初雪や順禮の居ぬ紀三井寺
初雪や訪んと思ふ人が來たり
狩衣やけさ初雪に源三位
はつ雪や土邊にとゞく雞の觜
はつゆきや世に尋常な朝の様
はつゆきや侍從拜賀の階の下
初ゆきや綿屋の店の笑ひ聲
初ゆきに酒屋來て酒買せけり

寒　貴船鞍馬南に見たる寒哉
腹帶に夜學の僧の寒さ哉
寒き夜や琴彈指の風だにも
狼の人に喰るゝさむさ哉
孔明はけふも在ざるさむさ哉
出ぬべしと思ひつゝやむさむさ哉
膝にある手を失ひし寒哉
灯にうつる鐵の光りの寒哉

凍　生ながら凍る獣と思ふ途中哉

冴　冴る霜もしもや鳴らば初瀬の鐘

鐘氷　氷る鐘客にちぎれて幾度も

冬至　復の卦を机にひらく冬至哉
手細工の偕立て見る冬至哉
井の蛙冬至を腹に覺けん

千鳥　村千鳥早風をかはす羽音哉
亭の戸の一重に近しさよ鵆
月晴し鵆の遁す羽のおと
成ぬべき鵆よ盲ら摑にも
木の實にも麥にもつかで小夜千鳥

さよ千鳥何やら袖にこぼれけり
油筒提たは蜑黙濱千どり
濱嵐衛を吹て囘しけり
松明の跡のくらさや村千鳥

水鳥

水鳥の橋をぬらして歩行けり
古町や鳥の着なる池もあり
鳥滿て氷らぬ夜や水の音
水鳥の胸に突行や薄氷
水鳥を糸もて引獣嶋根より
水鳥の取も遣へぬ女夫かな
水鳥の背さへ丸きちぎり哉

鴛鴦

尋常に余所心なし鴛二ッ
たはれ男よ鴛の契を思へかし

鴨

群鴨の逝れ行江や流しもち
鴨啼や皆寺附の濱長家
たま味噌に鴨や山家の柊籠汁
青首や妻を追ゆる水の筋

生海鼠

海鼠たゝみや香の日出度きに今一拢
投て見る生海鼠に妹が笑ひ哉
狃に生海鼠ははねもせざりけり
薄氷に落たなまこやともぬめり

鰒

鰒好と名だゝる人や園に杖
世の中や鰒禁むる僞もなし
河豚喰はじ我身も親の片われぞ
醫心の生マ兵法やふぐと汁
ふぐと汁正成は座を立れけり

鱈

能鱈の舌にしよりゝと別けり

炭

本尊や火桶も炭も参らせず
小野炭や哥人の家の小鋸
引留る下に炭つぐ主かな
丹薬や炭火の音の夜もすがら
炭立て關守鼻をあぶりけり
夜隣や炭もて炭を叩く音
元政の母と語るや炭のおと
鹿の角にかゝるゑにしや炭俵
炭吹やほしたおゝなのふくれつら

炭竈

消炭のさそくの利や客の前
炭竈や煙仕舞へば月白し
すみがまや鞍馬の奥の別世界

紙子

むまご來て膝にまさぐる紙子哉
四天王むかし語りの紙子哉
産むとやる子も福人の紙子哉
傾城の比丘尼老ぬる紙子かな
少し世の燈に殘る紙子哉
中年の伊達も定るかみこかな
むづかしき致仕の太(大)臣の紙子哉

綿帽子

榮合て目出度美目や綿帽子
吹て着る美人の息や綿帽子

綿子

糊水の艶走るなる綿子哉
綿子見て時代を呵る翁かな

綿

打綿や空にしられぬ内の雪

蒲團

兩頭のふとん佗しや木賃宿
生男の蒲團投出しぬ關越し
飯びつにおのれぬくもるふとん哉
足に寄て出女のきせる蒲團哉
重ねても透間覺ゆるふとん哉
押付て葛籠ほうばるふとん哉
肉屛に寄まとはるゝふとむ哉
子三人いまだ稚し敷ぶとん

衾

後妻の起るや古き衾より
すかし得た子を奥の間の衾かな

頭巾

味噌舂の松にかけたる頭巾哉
脫んとてづきん被りぬ稚顏
わか者のいつか癖つく頭巾哉
土佐坊は病者に見へる頭巾かな
人しるし頭巾に兒はかくれても

足袋

强からぬ絹やおゝなの足袋なれば
親指の隔を足袋の風情かな
むすぼれやいたく醉ぬる夫の足袋
脫である足袋なつかしき細み哉

湯婆

寐がへりに音をあやしむ湯婆哉
丑三つを夜ゝに覺ゆるたんぽ哉

冬籠

冬籠別に愛する佛あり
今少し天井高し冬ごもり
冬籠書窓に錢の音すなり
人入れぬ門設けりふゆごもり
鼠追ふ火吹竹あり冬籠
冬籠銀もてる子の京にあり
活僧の打てかはりぬ冬ごもり
出たひ時出もして先はふゆごもり
冬籠厨に狸釣れたり
そき尼の故こそあらめ冬籠
時津風斗吹けり冬ごもり

顔見せ

顔見せや灯立たる物の榮へ
顔見せの我をおかしう歎きけり

髪置

髪置や頓て柳の淺みどり
置綿や國の重りの下白髮
髪おきや出られぬ母の余所ながら
置初る髪は貌のはじめ哉

被初

かづき初跡をしる子の光かな

袴着

袴着や殊更初瀬の御告子

子祭

子祭や大根白く神黑し

子灯心

いと易き貯へものや子灯心

火燒

御火燒や後藤の圖子に魚の腸

鉢叩

鉢叩聖の君や聞し召
鉢抑顧る時聲低し
行先に鷄うたひけり鉢叩
御物見に心な止そはちたゝき
鉢たゝき報謝の内も諷けり
江戸人を留た夜嬉し鉢叩
手を止て過るを聞ぬはち扣
月かげや左利なる鉢たゝき
景清か赤穗浪人歟鉢たゝき

茶筌賣

艶あるは妻の手業か茶筌賣

御霜月

しみ込だ平信心や御霜月
隱元の評判おかし御霜月

大師講

智惠粥や今朝看經の圓頓者
ちゑかゆやどの大師とも知らぬ勝

細〱と日枝の煙や大師講

御神楽

御神楽や南の庭に月の澄
里神楽それ相應の願かな

雪

大嶽に向ふ窓ありけさの雪
酒ありや雪に成べき此嵐
日うつりや障子にかゝる雪の影
雪竿や御哥所の物がたり
面白や都の雪は人死なず
坐して待と往て訪ふ友や朝の雪
野の鳥の翅に重し暮の雪
妻出て庭へ拂ふや肩の雪
雪晴て湖北へ貫けり
三越路や驛へ下りる雪の階
掘置る狸の面ラに雪ぞちる
馬の尾に雪かゝりけり拂けり

雪見

供先のさがなく語る雪見かな
雪御覧下郎に酒の流けり

雪丸ゲ

人の手にあやしき聲や雪轉し
長橋の詰に着けり雪こかし
二三日川に立けり雪こかし
まろげたる雪のよごれや京の町

霰

吹れ来て珠簾にはさまる霰哉
狗子の目をしばたゝくあられかな
酔きげん霰に傘をはづしけり
記録所に目を留らるゝ霰かな

霙

日のさして雨になり行霙哉
袖褄に付て離れぬみぞれかな
重ゝしみぞれの中の鳥の聲
灯かゝげてみぞれに凄き局かな
暮にけり霙降日の物いらち
傘持た指のにどけぬみぞれ哉

吹雪

ふゞき来て耳に音あり夜の空
猪一つ野へまくし出す吹雪哉

氷

梅苔む下や氷のにはたずみ
童のたゝく氷や蒴の門
殿守の掃や氷の散松葉

道中に氷捨けり繩ながら
抄をぬく眞田が鞘や厚氷
初ごほりさればよ夜邊の鐘の聲
歩行つゝ鳥のすべる氷かな
濺ぐ夜の手障りや薄氷
一莖の鷺の力やはつごほり
片隅に日を經る雪の氷けり
うすら氷や皆折伏せる芦の湖
抑見る火箸のゆがむ氷かな
小兒等の嘴で吹合ふ氷かな

氷柱

山寺やつらゝに移る人の兒
萱が軒ほつけて結ぶつらゝ哉

早梅

早梅の霜に馴たる白みかな
早梅や竹葉の灯に影うつす
から風に早梅骨を顯はせり
冬梅や此ごろつゞく海の荒レ
冬楳やくれて伴ふ月ひとり
寒梅や久しく立てば母の聲
野陣から一番鎗ぞうめのはな
早梅のするどき影や月の弓
冬楳に細ひ流の咽びけり
梅寒し葉の粧ひをからずしも
寒楳にうつり習ふや昏の月
寒梅や小高き原の吹放し
寒梅や鶯も子に見せて置
かん梅や花も噓の出ぬべし

水仙

水仙や武士風俗の美少年
水仙の世を見濟して咲にけり
水せんや藜携ふ足帶頭巾
おもかげの透通りけり水仙花
行燈とれ水仙に月うけて見ん
水仙の器用に厚き光かな
水仙の寒き骨髓ひらきけり
すいせむの黄は分かれけり灯影

葱

青眼に葱の白根を喰けり
葱もまいる禪師が手ひどき示哉

わゝしさの知られし嗅の葱哉
里下りや心の闇の根深汁
三筋ほど葱喰美女のひそみ哉
葱の香や馬士の罵行暮の辻
葱喰ぬ御兒や法のうつはもの
から風や葱折ふせる西の京
なだれ込森の小鳥や鷹の聲

鷹

鷹匠や田は損はぬ國の守
鷹疾くも風を切行や升搔羽
居たつや血にまみれたる鷹の觜
居鷹の羽打て人を休めけり
澤庵の寺に飯たく鷹野哉
鷹の目や靜な時も猶さかし
骨を折る犬や狩場の握りめし
取鷹の拳に聢と覺へけり

暖鳥

ぬくめどり胸合がたき一夜哉
あぢきなやぬくめられ鳥暖めどり

寒苦鳥

寒苦鳥よその事ではなかりけり

鯨

迯伸た鯨にかゝる曇りかな
未おめく鯨に濱の木やり哉
建て追ふ彌陀の幟や鯨舟
初くじら星にさかふて下りけり

鰤

福ゝし厨に肥た鰤二本
すゝ掃の中へ使や鰤壹本

煮凍

煮凍や夢の通ひ路あらさもし
煮こゞりやおもふ圖へ來る夜の風
にこゞりや行通ふなる妹が宿

乾鮭

干鮭の虫粉の穴やところ〴〵

石花

石花汁におろし大根の古風哉
煎蠣の土器とるや友ふたり

藥喰

君來ませ鷄割んくすり喰
箸紙に若菜の唐名藥くひ
別家持大和ぶり哉くすり喰
垂こめて内に笑や藥くひ
避て居る妹が潛みやくすり喰
藥くひ栗生篠塚參りたり

胼

胼やかい灯し行長廊下
僧正の胼脚や所化嘶し
小灯しに夫の胼そくひけり

事始

事始年に和らを入にけり
能杖を買や宗祇の事はじめ

寒月

寒月や三絃高く陰に入
寒月や野の一ッ家に子なく聲
待出てしばし拜みぬ冬の月
寒月や空へ取らるゝ小室ぶし
寒月や頽れ塘に獺の穴

寒聲

寒ごゑや尻から付る御曹司
寒聲を空へちらす歟日枝颪

衣配

長岡へいかなる哥を衣配り
衣配り美目よき使選れけり
末摘の宿は暮けり衣配り

年忘

常好む事に落けり年忘
舟着て室に寐る夜やとし忘
後世咄し法度にせばやとし忘
年わすれ樂屋に鶏がうたふなり
けふばかり人は譏らじとし忘
とし忘されど我家へ戻りけり
來合せる百里の友やとし忘れ

寒念佛

樽つけて行や月夜の寒念佛
題目はいかで賣ぬぞ寒念佛

佛名

佛名は法の誓文拂ひかな
聽衆皆心の禮や佛名會
板敷に光るつぶりや佛名會

年木樵

おもしろやとし木樵得し庭の山
作りして酒も賣家や年木樵

節季候

節季ゝや天下晴たる諷ひもの
節季ゝの伏勢見たり塀の外
節季ゝと聞ふる窓や靈照女
節季ゝにうそ恥しき借屋哉

煤拂

帷子に寒月白しすゝはらひ
煤掃や花子がもとへかくれんぼ
何ひとつ捨る物なしすゝ拂

すゝ掃や先生けふも下袴
すゝはきや潮を游ぐ舟鼠
神寳の御煤いたゞけ御溝水
すゝ掃て隱居へもどす隱居哉
すゝはきや文取かへす鼠の巣
煤掃や都の月の不破の關

餅搗

餅搗やうら若き手の艶をなす
竹林に餅の衍や乞食村
餅つきや舟に向へる娘だち
もちつきや上戸一日なぶらるゝ

年内立春

内ゝの春よ何やらたのみあり
根には皆春を含みし野づら哉
年の尾の永ひに春のまかれけり

節分

しのびやかに儺ふ聲の密深し
武内はいかでかそへぬ厄落し
厄落しいみじき妾遣られたり
心せし鬼杉原や厄おとし
やくおとし堂上方の狂哥哉
厄おとし金四萬斤出されたり

寳船

乙御前の樂しむ夢や寳ぶね
片戀のそぐはぬゆめやたから舟

古暦

巻果る暦は糊も離れけり

年籠

相鶴や神は請すもとし籠
美女ありと初瀨に是沙汰年籠
閑帳の金の行衛や年ごもり

師走

律僧の歩み間だるきしはす哉
ものしりの假名文多き師走哉
牛頭馬頭の怠り責る師走哉
かくれ家もやはり浮世のしはす哉
指南琴殺聲交るしはすかな
円下りて彌陀も手傳ふしはす哉
淀舟の俗になり行師走哉
寒(塞カ)翁も底意はすまぬ師走哉
憎さげにものよしの乞ふしはす哉
牛馬にもいらちのわたる師走哉
ほう鱈で犬を追遣る師走かな

行年

似た様で皆變りつゝ行としぞ
筆勢の机はなれやとしの暮
行としや長きを呵る瀬田の橋
よい年で春はと思ふ油斷かな
檢非違使の大赦もどりや年の暮
としの暮春日の灯炉見に行ん
形のつく日頃の伺（マヽ）やとしの暮
計へ見る身の過ちやとしの暮
ゆくとしやいつ不肖なる顔もせず
行としや浮世をのぞく書の窓
濱屋敷立派に年の暮にけり
來る春を松前ものや市の樣
年の華かざして闕を越にけり
月雪の壳や五尺の米俵
とし波や隱居の行灯先白し
年浪やおさめ過たる鶴の皃
としなみの筏に乘りぬ論語よみ
切先に廻る物なし年一夜
筋ふたつ殘るやとしの車道
とし波や餓たる鼠の牙をかむ
數十本我としの矢ぞちぎれ筆
とし波の沖中川よ浪の音
つもる年俊足の齒のゆるみけり
粉灰たつ月も十二の街かな

大三十日

大としの嵐となるや人の息
仮綱遣ひ已が家鳴や大三十日
大三十日祈る貴船もあらばこそ

混雜

寒垢離や身を切る風にのりの道
一陽や疊に廻る雪月花
猫の聲うがれ初けり寒の雨
かばかりの報謝は輕し八日粥
杉燒の皃や伺候の俳諧師
黐木させば狐寄來ぬ闇きより

葎亭句選 冬之部 終

俳歌者國風之變。雖雜哉俚言。要主性情。苟有得風流雅思。又則詩歌何擇乎。俚言又何傷乎。而今之言俳歌者不少。又皆以風流自處。或以詩俗。及見其人。太率孟浪不文。不足與語。風流雅思何以窺墻耶。故爲少習章句者所蔑視焉。吾京嘯山翁獨不然。雖宗俳歌。其生平操履。自實學中來。加之有詩有文。書法奇雋。我翰藪之選首載之。綜之皆風流雅思之涵融。自然而然。視彼區〻章句輩。大有間矣。余也閒散。周遊海內馳騁藝林。歸京之後。於翁得忘年之交者。亦唯以此耳。於俳事則不關。翁今年八十有四。夏四月易簀。予適以西遊不在。及聞訃不得爲之不潸然。〻晨花夕月樂以終其生。淸詩風俳傳以遂其性。如翁在。可謂死生無憾哉。男匡敬李流繼其緒。孫乙龍童年善書。庭訓之所效也。諸子弟壽梓遺稿。徵予一言。予不知俳事。而不辭此言者。以有所知。推及所不知也。翁姓三宅。名芳隆。字之元。平安隱君子也。今也則亡

時

享和改元秋八月　松窠杜書澂于眞賞雨窓之下

［杜澂之印］［松窠道人］

葎亭嘯山翁選書目錄

俳諧古選　古人名家句集

俳諧獨喰　古今句集

葎亭嘯山翁句集　全部五册

附錄 伊勢紀行

通俗女仙外史

俳諧新選　諸家句集

葎亭畫讃集　李流校

嘯山翁句集後編　未刻

奇談さのゐふみ

書林

京室町一條下ル　平野屋善兵衛

同寺町夷川上　西山屋岩吉

葛（くず）箒（はゝき）

樗庵麦水句集

葛箒

春之部

歳初

門松や臼も七世の孫に逢
はつ夢や巨燵の裾野おもしろき
すめるもの登つて嬉し井戸はじめ
春たつや其儘の松も又嬉し
大服や我乞ふものはうた袋

ふるさし不二に登山せしを

思ひ出るや山をひがしにはつ霞
はつ鴉月あきらかにかゞみ餅
庵の春かけ物棹も杖はじめ
たはら藻や龍宮ならば掃捨ん
よみ初もうらからおかし茶道口
春たつや朝夕はまだ海の音
口〻に指折人や夢はじめ
書初や窓も丁字に梅のかけ
いせ海老につかへる庵の御慶哉

楞庵のよみ初も例の杖笠に心さうごき

花の春まこ見ぬかたの國戀し
梅に來る鳥のあと也初懐紙
靜まつた障子の咳やはつ懐紙

新宅にうつりけるさきに

一枝は梅も頼むや下地窓
東風吹や年と〳〵の透間より
春もさぞ先づはいつもの初霞
門にたつ松の葉ごしや初懐紙

七草　子の日

普請にも引松ありて子の日哉
我は又留守の賓野や若な摘
井手はまだ耳の障也わかなつみ
見めぐるも七野やしろやわかなつみ
田の中の山越やすしわかなつみ
みづがき外へ百度やなつみ籠

逢ふ處で御慶濟すやわかなつみ
ふり袖にあらしの岡や若なつみ
七草やあらしの底の人の聲
庵の戸はねながらとゞくわかな哉
脫捨て笠は雪間ぞわかなつみ
七草や留守のあたるも君がため
我がひく松のまくらやはつ子の日
木つゝきの人影見やる子の日かな
蓬萊は遠山にしてわかなかな
七艸や音羽の音はまだ寒し

浦牛の人のもとへ約ありて

鶴のあとゝめて行ばや磯な摘
七艸や明けてのものゝかぞへ初メ
丑の日の野邊に人あり梅の花

蛙

化された人ではなふて蛙かな
春雨の　(原註)本ノマヽ　神たつかはづかな
松原に日のはさまりて蛙かな
次の間はかぶろかたまる蛙かな
虫にして月は短きかはづ哉
袋にはわかなるものをかはづ哉
火をくれぬ里まで來る蛙哉
闇の夜の日毎も人や啼かはづ
麥の穗の茶せんに音や鳴蛙
つけて置種にふくろや啼蛙
村松の一むら消てかはづ哉
夕暮に都をたつて蛙かな
飛び飛んで水に延たる蛙かな
唐崎の道問ふ人や啼蛙
井の水は井ほどの波を鳴蛙
人影の障子に出來て蛙かな
馬は田をつかれて上る蛙かな
鳴蛙こたへぬ友の吾にこそ
蛙啼夜やひら〳〵と凉

花

月あらば松は木陰ぞ山ざくら

鹿の來て啼たる寺やはつ櫻
八景は比良にかたまる櫻かな
見處の有る禿也はつざくら
手皷や鳩の峯ごし山ざくら
鐘の尺扇でとるや山ざくら
しら雲に誠の帶や山櫻
狂人の鐘をとゞむるさくら哉
休みたる薪のあとや山ざくら
人なれて山あたゝまる櫻かな
花の降る庭をしづめて机かな
月は入るかぎりもあれど櫻かな
傾城の所帶もどかし山ざくら
初花や鞍馬のかたへ駒むかへ
橋はまだ霜も折ゝはつ櫻
見おろせば人里深し山ざくら
さそへばぞ座頭も見へて山櫻
年禮も羽織でいふや山ざくら
うか〳〵と日の減り行や花の守
茶に減つて音、羽は細し山櫻
袂から下着を脱でさくら哉
ちる花に蝶も重たきけしき哉
汝にさへ（原註）本ノマヽ耻かし花の山鴉
花生けてきの事は遠寺や

柳

いつもある舟をまねいて柳かな
人買の舟にはらだつやなぎ哉
ころび木に手はかけながら柳哉
しら露の寒さくらべる柳かな
置ぬものさがすは我と柳かな
青柳も巴に吹や水の上
舟關の人をかぞへる柳かな
關越えて髮結直す柳かな
裾上げる事も覺へず柳かな
渡る瀬に人聲深き柳哉
鳥さしに手を合したる柳哉
網打はあちらへたぐる柳かな

川舟の四五丁出ればやなぎかな
道に鳥のとまりて柳かな
月ひとつ水へ掃込む柳哉

繪のかたに

忘れては柳を越える柳哉
逢坂の琵琶にさはりて柳哉
青柳や野馬の結ぼれず
橋守の隙ては遣ふ柳かな
青柳のあふ（虫喰）

春題混雑

兀山の所〳〵につゝじ哉
きじ鳴や山の藥屋はうす霞
駕で行旅人の夢をきじの聲
朧夜や横に御燈の星ひとつ
悟りにはまだ紙ひとへ霞かな
はりの木の陰は田舟やふきのとう
田につもり都につもり霞かな
雉子鳴や空は正しく月日星
佛法と鳴くを破してやきじの聲
眠藏にたばこの匂ふつゝじ哉
大根の岡のあらしや春の空
若竹や遠きこゝろも此葉から
春風や一葉二葉の青みどり
行春や一鎌殘す草むすび
ひそ〳〵と青ふ吹けり遲櫻
苗代や菅簑に早や一そよぎ
海松に引日もありて汐干かな
僧正は叱り好きにやしでこぶし
見る人に呼子の聲や壬生祭
蝶ゝの店おろしあり藤の花
空也派の夫も持て茶摘哉
まだ夢を見る心なき蠶哉
糸遊のきれやすうして行春ぞ
鶯や水も葉色の竹いかだ
鶯に留守も尊し宇治の庵
紅梅や雛も笠持てこそ

山寺に何待つ人ぞ春の雨
鳥かけの北へ消へたり春の水
茶ばたけの木陰れ笠ぞ春の暮
門に待つ駕の欠伸や藤の花
ものごし(聲)の京に欠たる雛かな
三日月もやねのたはみやもゝの花
あのうへも世はいとまなき乙鳥哉
弘法の水のすへ也田にし取
行春に被うやりはや(二字缺)い人
置合す石の窪みや土筆
梅が香の吹て風折烏帽子哉
梅咲くや夜着垂たかる江湖寺
白雪や白根の影のほつれそめ
爪づいた人を蹴ぬけやふきのとう
春雨や今日は道庫の棚さがし
蝶〻や晝は朱雀の道淋し
曲水の客ながれ込雛かな
湖へ城はくだけて霞かな

梅咲くや初日(鈎短)にかゝる薄氷
鍬の刃にはねだす石やきじの聲
くれて知る比叡の般若や夕ひばり
初午や遣り人の鍵は置て出る
水茶屋の簾もおろす日やねはん像
苗代や角力は京へ出るとき
桃咲くや寺を見廻す講がしら
曲水やひとりは醉て折烏帽子
袖笠の難波はあとに汐干哉
山吹や水のぬるみも佛肌
水鳥や聞上げもせぬ春に啼き
山畑に種のはしきや雉子の聲
猿の手も目にはつかりや涅槃の日
鶯の巣にくせものや朧月
山吹の水に籬や障子骨
藤の花道から醒て戻りけり
春くれぬよしのゝ蝶の行所
入かねて日もたゞよふや汐干浮

梅が香に襟引しめて一ッ橋
朧夜や誰を迎ひのこし車
鶯は此木によればあれに啼く
まだ鶯の耳にもどらぬ餘寒哉
八日より塵塚青し鶯よ
人待ぬ心は高き木の芽哉
猿の手は欠伸に延て木のめ山
若艸や笛の尾山は牛の聲
鶯や雪の雫も光りあり
若竹やことしも城にならぬ山
鶯や熊をやしなふ人も出る
若艸の押てのぼるや白根まで
茶かぶきに欠伸もひとつ春の雨
折人の（むしくひ）
春の夜や眠らぬ人は我と誰
遺愛寺に晝の枕や春の雨
柱から芽を出す庵や春の雨
やれ窓の格子〳〵や猫の戀

北東風は雪も交るや梅の花
悟らねば戻さぬ橋の霞かな
雪中に朝古道やふきの花
淡雪に茶店は出たり初芝居
しら魚や延ぬ藻にはや花の色
舟はまだ疊も入れず春の月
茶に醉て宇治を立けり桃の花
桃さくや飛べば近しと道をしへ
汐干潟是も一夜の裾のほど
春風や嗅で見る人心あり
行春や人は柳を折ぬとき
鶯や一冬越る葉はかたし
雪見えて笠の端かろし春の山
朝夕にかはる衛や春の海
若艸や水を隔て駒の聲
淡雪や檜原のおくの酒ばかし
うぐひすや水のつかゆる淀づゝみ
鶯や竹田の里は留守ばかり

まだ行ぬ鳥かけ白し春の水
雉子鳴や持こたへたる朝ぐもり
うぐひすの啼静めたり海の色
おもしろき鏡にやがて春の水
照されて雪をくゞるや春の水
山吹や野は行水の九折
物洗ふ脛にはあらず梅の花
如月やまだ蝶ばかり山おろし
傾城の傘の上へ行胡蝶かな
水鳥が啼は何〳〵鴉の春
道かへて庵へ戻るやすみれ草
若艸や古葉は化して雉子と成
寺を出て料理好みやふきの花
木ゝを出る香はまだ辛し春の風
春風の吹通してや種ふくべ
梅馨て物申し置く折戸哉
行道やふりむく顔も風巾のうへ
禪定の替み見へぬはこ蝶哉

涅槃會やものゝ重なる影法師
逆に掃(箒)木入れけり藤の花
水のない川堀る人や桃の影
道作る一僧あはれ雉子の聲
筏士の陸をのぼるやきじの聲
只ひとつ杣うらやまし鳴ひばり
深山樹や霞は裂て經の聲
糸に咲黄に咲春の垣根哉
分行ば桃にやあらん朧月
曲水の一葉流るゝ扇かな
うつむいた草はまだなき雲雀哉
一圍ひ茶の木ばたけの雲雀哉
卜野行紫野行ひばりかな
藤咲や餌に投込む葩煎の上
如月やまだ燒草のよしの山
一日は人の藻にすむ汐干かな
行春や足あとまでに花の塵
笠は皆胸にかぶりてひばりかな

春雨は裾から晴れてつゝじ哉
干ればこそ波の音なし朧月
蜂の巣の笠は小さし庭櫻
雀子の御供こぼすや梅の花
雛棚に綿入るゝ日は餘寒哉
鹿の喰ふ短尺もあり藤の花
出て遊ぶ繪馬の沙汰あり朧月
物とへば小供ばかりや桃の花
見る人の腰にふくさや梅の花
粟嶋の留守へ來初る乙鳥哉
佛檀を見せる馳走やもゝの花
泉水の橋姫いかに猫の戀
古鄕の山にも似たり朧月
初午やまだ蕨手のかゞむころ
八十は梅の日數や涅槃像
雨の日に使は來たり木の芽漬
下萠となる戀もあり春の雨
笘船にだまされて出る乙鳥哉

菩提寺の腰ふさかなや田にし取
繩ぬふて張す普請や桃の花
乙鳥や何を蹴て行水のうへ
蚫も來ぬ藪や李の花の晝

田家春日

鳥啼や藪は菜種のこぼれ咲

富山葉性子庭にて

立山をのけては春の夕部哉

神通川にて

風鳴て春草白し神通川

途中吟

鷗啼く方に日あしや朝がすみ

小貝塚

種とりて櫻さかへん小貝塚

水場のわたし

葭の芽も北をさす日や雁の背

馬城

松櫻こゝや心のうき沈み
たてがみ山を越る

茶の花や横向いて峰越る人

七面明神アンネン坊にて

桃柳茶も見おろすや七面

高丘櫻の馬場にて

雪と成作や泥障のあらしまで

旅の部（校訂者曰、こゝに附記するは稿本夏季の部に混入し居るを、便宜春季の句のみ抄出したるなり）

途中

木曾殿を訪へば鳴出す蛙哉

禿の宿にやどる

玉川の耳に毒なし初蛙

紀の路にて

雀子や柱のふとき八庄司

嵯峨雅因亭

大井から音を納めて蛙かな

さが野

雉子鳴や今も浮世を舌鼓

茶店にて感あり、三軒茶屋と云ふ

白髪まで人にさがなし小鮎さき

祇王寺にて

とてもちる夕部ぞしばし遲櫻

三本木茶屋

石川や雪踏馴て上り鮎

洛にむかふ西海道越、はじめて過ぐ

晝からは日も西道や鳴蛙

かへる山はかつらと云ふ里の上なり

鹿の音に聞置く里を春越へぬ

山中越へ、牛馬の駄多く出る

鶯も連牛づれや櫻まで

まのゝ長者やしき

窓の影おもふ霞の野梅かな

白髭明神

幾度ぞ霞とく／＼あしの角

途中吟

酒好のおくれやすさや遲櫻

肌島

行雁や我日も暫し嶋めぐり

竹の浦にて

春も老てかゞめる竹や水の上

蓮如山花瓶の松

幾春にかわるも松のほまれ哉

御腰掛石と人々になづる

あたゝまる石も尊し春の草

洛外を過ろ日

錢百の開帳多し山ざくら

圓山ばしの寮にて

春雨や給仕も立て座敷鞠

遊里

傾城の別れ見習ふ柳哉

泉州堺

古郷は路の千尋ぞ汐干浮

篠原の邊に逍遙して

池水に踏皮洗はせて梅の花

吉崎三谷氏の庭にて

捨石にかしまもひとつ庭の花

宇治のほとりにて

吹落ちて水やわらぐや花摘哥

今江浮にて

蜆取臂やもたせて鷺の上

笠取山と云ふ處にて

笠取や松吹荒て春の海

くず篇　夏

子規

曙やあし毛の駒とほとゝぎす

茶の杜はまだ朝寒し子規

夏草の星にしらみて子規

竹葉も伏た藪なりほとゝぎす

それて飛ぶ矢數の雲や子規

牛で行道ほのくらし郭公

ほとゝぎす麥の月夜は薄曇

衣〳〵をひやして行や子規

ゆり起す舟もこゝろや郭公

子規几張はなるゝ人のかけ
蚊屋ごしに月のくもりや子規
ほとゝぎす竹の植處定りぬ
觀音の灯に舟見えてほとゝぎす
寐ぬやせも夏のもの也子規
草踏て一夜給仕や子規
傘持の眠りは白し子規

相如の首途は涼し

擬寶珠に一首残すや子規

常陸坊が仙にぞ

我ひざの足高山や子規

志賀上人の木の端にあらず

觀念の横へ心やほとゝぎす

盧山の三笑

長尻にどちを庵主ぞ子規

盧生が書寐好き

草枕耳も芳しほとゝぎす

楠は朝寐嫌ひ

藥にふの人とも見へて郭公

賈嶋が推敲のうつゝ

行當る人も心や子規

麥林叟がしたふ

麥畑に尋る人や郭公

都因坊が風流

十哲の祭りはさびし子規

餘興

よみ飽た欠びにくれてほとゝぎす
水まさの雲や流るゝほとゝぎす
鳴たればあやふき道や子規
關守は晝の寐覺や子規
折箸も片〻筆や子規
墨算筵でをかしほとゝぎす
鰹木の枕に高しほとゝぎす
朝草に人數出すや子規
灌佛や和尚の指はほとゝぎす

獨千句題有合書意に任す

在中將は旅好き

駒も夜は雲井にかくれ子規
子規明ても橋の小提灯
明ぬ戸にはし立うちやほとゝぎす

納涼

涼しさや嵯峨のいかだの捨泛
すゞしさや船に射そうな扇影
いつのまに帶のとけたるすゞみ哉
涼しさや傳授もしらぬ流れあり
寐た下へ月流れこむすゞみかな
くつさめを廻して戻る納涼哉
僧一人水かみへ行くすゞみかな
家明て蟬も夜聲や川すゞみ
川下は酒の香の吹くすゞみかな
琴の手は横に流るゝすゞみかな
涼しさや手合で舟をのける道
すゞしさや幾間のおくの灯の光
夕ぐれの星よみかゝるすゞみ哉

降晴も脊戸では知れずねぶの花
蓮はまだ柱も立ず花御堂
僧ひとり門にイむ水鷄哉
乞食の脊中も敲く水鷄哉
まだ青い西瓜流るゝ夕立哉
兀山のかげを青めて田うへ哉
卯の花に鵜飼の星は寐過しぬ
戀ひとり折ゝだまる田うえ哉
早乙女や跡を追ふ子のつまみ結
門建て落付日あり今年竹
夕顏や聞耳たてるくれの蝶
ゆふ顏や經の隣に笑ひ聲

獨千句　懷旧

葉ざくらやむかし戀しき道すがら
葉ざくらや今は鳥井の色ばかり
實櫻や何心なく鐘の聲
實櫻やいにしへきけば白拍子
葉ざくらや暑らるゝ日は忍び道

はざくらや花は鵜舟にもどす時
茶の秋の朝さめにくしさくらの賣
はざくらや青き巖に青き影
はざくらや伐るに忍びず人心
葉櫻の奚も筑波の葉やまかと

軸余

はざくらや我に千句の青幣
芦は皆男ざかりの鵜舟哉
初蟬や加茂の祭りは幾日から
千本は京の梢ぞ青あらし
杜若硯石にもしとわたり
ほつゝりと汗一雫浮葉かな
尼寺の御所の末葉ぞ杜若
片側は藪にくれ行蚊やりかな
夕顔に園車を預けてかやり哉
迷子の泣き〳〵つかむ螢哉
裾野にも二十の揃ふ田うたかな
鐘鳴つて林の青き鹿子哉

うき草や扇流しは知らぬ里
綿貫の日からかぶるや鹿の角
湖は里へ廣がる青田かな
もゆるときはつと涼しき蚊遣哉
月花の都は知らじ氷室守
うき草や鵜に出る舟に取りすがり
砧聞く夜には短かき水鷄哉
能因の顏見忘れず若楓
夏山のふところ深し佛生會
卯の花を窓にあつめて夏書哉
人は蚊帳かぶり初寐や袋角
痩せたがる姿もありて牡丹哉
茂りから鳥の音近し練供養
葛袴ほす家もあり杜若
さうふ湯や八棟深き草枕
麥をまく里かけぬけて水鷄哉
實櫻に又白雲の織かな
雨に寐ていつを節句や忘れ草

蘆刈や葺た蓬の落てから
藻の花も朧のものや水烟り
月ひとつ落して行や眞菰刈
河骨の花守おかし裾に笠
螢待遊びも笹や一夜酒
洗濯の姥を引手や花茨
紫陽花とかはりくらべやはつ(二字蝕)芝居
竹の子の角は延たり小先達
跡に見て地藏いたゞくいちご哉
虫の火や蚊屋釣草も有なれば
夏草やわかなに來たる道はなし
一休みあせぼの花の日陰かな
蝶ゝの五月つゝじに又夢か
あぢなもので酒呑家や花ざくろ
此おくの寺は紫衣也花樗
山梔子や築地の崩れ咲か(かくす)へし
衣張も九(九十九折)折ほど雲の峯
夕顔の姉か妹か竹婦人

落書の石に足おく淸水哉
虫干や此處へも通ふ天津風
其水に我は筆かむ夏花かな
蓮の花琵琶にほろりとはづれけり
川狩やいろりにつもる岩の屑
しだり尾に柳ながれてうき巣哉
風蘭に雲吹や早や湯のいきり
五月芽の松に朧はなかりけり
朝の日やかた野を出る紅粉の花
下戸ひとり庭を歩行や葛の花
凉しさの思ひがけなし綿の花
夕顔や駒の出て行垣つゞき
空也寺の兒をなぶるや靑瓢
苔の花やよひのものゝこぼれより
ひる兒や跡になり行朝日山
尼寺や干瓜の手も歌がるた
誦さして經に拂ふや灯とり虫
帶もたぬ人斗也舟あそび

凌霄や龍の上つた手洗鉢
此垣の西は法輪風車
經の聲入て玉まくばせを哉
ねぶの花茶挽坊主はいつとても
桂男にかして戻るやさらし搗
山びこに鶯も音を入にけり
まだ忍ぶ小袖あらはせ今年竹
青鷺の植たでもなしあまり苗
外井戸はすむも甲斐なし青ざん桝
舟ゆりて子は寐入けりみるめ苅
芦は今ちからざかりや(鈍)
鈴懸や峯越て行人の影
獵人の念佛を聞新茶かな
はつ蟬や麓の流れ踏で行
踏分てつゞしを走る鹿子哉
蝙蝠や何心なく風車
入梅や乾キ眞砂も持た家
桑の實や紅粉(つけ)が過る里の嫁
皆わたる蟬の小川は足ぞろへ
賤の女は引わづらはぬあやめかな
青梅や適晴るゝはつ日影
早乙女や乳の下におく月の影
浮艸のうら形りは有水かゞみ
灯ともしの僧も見なれて今年竹
姑をふすべ返して蚊遣かな
築山もけふ奥深し虎が雨
あびるほど酒呑神轡あらひ哉
奉る手もとふるふや氷室守
撫子やあらき詞のわたし守
合羽干す川原表の暑さ哉
夏艸や小虫吹やる一あらし
物問ふて蠅に追はれて戻りけり
惠心寺に歌聞ぬ日や蟬の聲
夏艸や今はなにしに奈須の原
笈摺に杖たををく也苔清水
卯の花やイむ人の透通り

百里まで行心なり更衣
切〻に橋を見渡す螢哉
凌霄や家は夕日の入廻り
夕顔や虫はら〳〵と人の音
夕陽の九重の堤や花葵
芥子の花見て慰みぬ兒の親
卯花や蝙蝠さがす小僧共
霧に似て茶がら立けり若楓
鳩の聲肩にとゞくや夏木立
柚の花や庖丁持て緋のはかま
掃よせて耳塚おかし桐の花
矮鶏の來て飛上りけり手鞠花
長椽に茶はさめて來て椶櫚の花
陵の色どり淋しさくらの實
竹の子や草の袂をふらつかし
碑の銘はなでゝ讀みけりかんこ鳥
山崎に茶舟はなふて行〻子
蝙蝠は開張の日をはつ音哉

葉にも又陰口ひるや雨がはず
蚊柱や大佛とても此通り
簑の音けふもうの花くだし哉
麥秋や踊のしまぬ音斗
下闇や桂に月の香はあれど
實櫻の雨やあられと矢數哉
水鏡川へ出初る袷哉
ぬれて來る人傘しやあやめの日
湖も里へ根のさすぬなわ哉
おもだかにかゝるや水の一めぐり
おそろしう町を見に來る螢哉
こらゆれば世に逢ふ日あり氷室山
夏草や晝寐のなかも又樂し
夕顔や物着に宿へ歸る人

旅の部

途中より古郷へ言傳にて

夏山や遊び〳〵の旅に肥へ

義仲寺翁の像を拜す

猶見るや昔ながらの夏木立

旅舘

短夜や翌を書に足す文ひとつ

山崎にて

唐室の調度のうちや閑古鳥

鷹が峯の禪林にて

春過は此軒になし峯の月

山河にて

庵の陰痩せて芽だつや杜若

なら井波

市中もへたでものよし雲の峯

加鶴のもとに田子吟行を拜す

夏山やあふげば高き鳥のあと

斗升坊とつれ立

合歡の花もすゝめて一夜やどりけり

穗浪河別莊

朝月や入帆は涼し穗浪河

塩尻峠

諏訪のうみ鷲より上の浮巣哉

湯尾峠

さびしさは足のうらまで閑古鳥

伊吹山　此山の神姿など思ひて

朝虹は伊吹に凄し五月晴

青野が原

物好も替えず青野の夏木立

物見松

我はその松に物見や晝すゞみ

青墓の宿にて

あをはかや夏とぶ蝶の物がなし

長良川の茶店にて

いざ頭陀に鮎干せばやながら川

かゞみ野にて

夏艸や我影うつす野は永し

岩頭いわや觀音にて

空蟬に似たり窟を出る人

蠏藥師

あつき日をはづす岩間や蠏藥師

いづみ式部廟所
門の外響でもなし風車
琵琶坂
びは坂のよの手も涼し松の聲
西行塚
吹返す笠も御影や青嵐
峡中水勢
卯の花に聲はあらしな瀧津波
御坂越ていふにて
夏藤や石も亂れて御坂越
木曾のやどり
ほとゝぎすことにほいなき木曾の空
福嶋の人々に
夏の夜や早吹分けて草枕
小野の瀧
五月雲墨すりうけて小野が瀧
ねざめの床
ほたる火も細しねざめの床の松
木曾のかけはし
かけ橋や水とつれ立影涼し
朝とく出るとて
短夜を空も急ぐか駒が嶽
草柳にめぐり逢けるとき
行逢も跡は知れよしかたつぶり
つばい峠にて
馬の耳足にさはるや子規
卯月の末都に歸る
この關も秋風ぞ吹く麥のくれ
希因に逢ふ
子規木曾路の笠の手に斗
東行の思ひたちて菅神の宮柱に一章を殘す
我は梅の青みに飛や旅ごろも
金城留別
水鳥のけふ巣ばなれや朝あらし
松任千代に
紅粉畑や尋ねて鹿の足がため
木吉百草園

青田から誠の浪も見こしけり

世尊院翁塚

青葉若葉若葉日影も深し翁塚

三葉庵大睡子

夏草や何ゝ譽めん三葉庵

旅舘（むしくひ）

短夜

旅客の魂眠るあたはず、一夜車羽所々の樓に遊びしを思ふ

かんたんの夢に遊ぶか金銀花

凉袋と道連にさそはれ

いざともに秋むかはゞやうつの山

八幡にて

水鷄にはこちらもなれてあふむ石

隱士のもさを尋ねて、其の人は已に從り出でたりと云へるに

茶の下の建仁寺風爐に鐘凉し

芝のあたご

雲の峰海の小さし旅硯

品川の朝夕庵

千鳥はまだ浮巣で嶋にかよむけり

東海寺の池庭にて

河骨の箔さへ古りて靜也

梅兒塚

撫子や振上て打掉の露

泉岳寺義士塚

夏陰やまだ山彥の相ことば

望月牧

夏萩の鹿かと見せて牧野哉

淺間の麓

撫子や馴ればもゆる淺間にて

白雲山妙義堂

五月雨や雲も尊き杉のをく

途中の吟

馬ながら軒へかけこむ夕立哉

本鄕の武門に參る

汲水も巢鴨は凉し森の音

山中十景

醫王の林花

花の日や迷ひに上る藥師山

湯屋烟雨

湯のうたによそのさなへや五月雨

(無水)毛小の鳴猿

何々の足らでや月に猿の聲

富士窩雪

湯けむりのなびくは遠し岑の雪

螺蜂の橋霜

かふろぎの細るや霜の橋ばしら

高瀬漁火

いさり火や荻の紅葉に人の聲

道明淵月

水底の月や下へも山ふかみ

大岩紅葉

日も岩をめぐり果すや蔦紅葉

黒谷の城跡

香の園に堀が殘つて野菊かな

桂清水の螢

月待ぬかほる清水や飛ほたる

小松神主松木氏の旅舍にて

其伊勢をうつせば寂てしげり哉

あたかの關を須叟にうつしける帳に

名(季)置ても甲斐なし夏の梅に鳥

汐越にて

今朝見れば潟は遠し松の蟬

玉江橋

玉が淵に沈めて涼し橋の月

白兎女の邊り雨に逢ふ

合羽にも足もつるゝや羽秋鳥

葛篙　秋

さわの岡

鳥わたる梢の底や市の聲

山路

けふ菊の巖やいつのさゞれ石

府中妙國寺

佛殿をくゞる夕日やにしき草

八幡にて

菊咲くや津田の細江の源問ん

こゝしも帝京に杖をとり、又この聖城の友に送られて、各ゝ筆を嚙む、縮柳もこゝふりにたれば、只秋興このみのぞみて、余もこゝに野行を記す。

秋風は吹くともひくき牛の耳

中の河内松柏亭にやどる。一夜急雨の過こ聞て、窓を開けば秋聲のみ。只爛々たる星、洸々たる水

物すごき旅寐を栗の笑ひけり

瀨田眺望

横に見て舟の薄さや秋の水

平野の社頭にて

むら鳥の平野に裂けて秋の風

洛西

秋行や小倉高瀨の手をつくし

洛東

砂につく紅葉は古し下川原

將軍塚

爰ばかり秋淋しかれ松の聲

八景山寺夕照題

夕照や寐つかぬ秋の山がらす

港の濱を馬上にて過ろさき、折節白根川の秋水出て、空さひさしき蒼浪に横はりけるに

水はなの雲横たふや秋の海

野水のほとりに

逆におもだか吹や秋の水

大聖寺冏々庵

行秋や水はもとより橋の人

日の岡にて

秋立や京のあつさをふりかへる

嵯峨野にて

飛入た虫の音流す筏哉

安宅の水戸にて

あら浪に山やはなれて鷹の影

山陰の寺にて

折ゝの水のものあり村もみぢ

北浮安樂寺に西金剛の旧物あり

秋風を押返す手や枯木立

此邊の寺に便て

行秋や一入塔の延上り

東都に秋たつ日

秋たつもうれし上野とわかる鐘

山中の湯を別るゝとて

行秋の青う別るゝ尾上哉

すみだ川にて

問はで濟む鴫猶淋しすみだ川

しのばず池

朝霧や蓮の白帆も見えかくれ

上野淺草に杖を引て

おそろしきひとつ家もなしけふの月

深川のほとり

舟に寐た城のうごきやけふの月

東都より江の嶋に詣づとて

あと向て旅立つ今朝や舟の露

百川を過る

よし秋の日にはかさゝじ袖の浦

能見堂に八景を見る

月ひとつ石に圍むや嶋の數

稱名寺青葉紅葉

鐘にそふ葉は青きにぞ秋の色

瀨戸明神汐木

月にされ汐に老てや瀨戸の松

朝比奈の切通し

葛ならぬ葉も裏見えて切通し

建長寺にて

初雁や古り行くはおしき額の文字

やすの河中にて

松消えて川原は高しけふの月

洛の高雄山にあそぶ

我を打ち込むや紅葉の九折

一路の寒溪に

谷水を包んでこぼす紅葉哉

大和の古山と洛に逢ふ

菊水や互に老をくらべ合ひ

東山にて

見つくさぬ伽藍のおくや秋の風

小松よし島と云ふあたり舟をめぐらす

押廻す水や幾すじ芦の花

うち柳と云ふに雨に逢ふ

茸狩や除つて家さへ見だし物

菊の日住よしのほとりにて

菊の日や我は歩行くを生くすり

近きあたり行脚して

秋吹や日なたに笠を敷わすれ

なた寺にて

叱つても石は石なりしかの聲

湖來長勝寺の古鐘を見る

鐘は古りて昔告ぐるや秋の水

硯の宮

松古りて黒むや宮の露雫

（貝）其の多羅園

松が枝も左りに縄や葛紅葉

山森稲荷

あらはれて尾花の上や稲荷山

途中吟

穂の上に鳴戸の日あり秋の風

同

蜩や女子の連はあとの宿

國をうつしたるあさの野にて

女郎花心とむなと野分哉

途中吟

倒に稲は立けり鴫の聲

深木山妙行寺

山につき山にはなれつ秋の雲

府中色紙塚

薄いろの紅葉も爰や色紙塚

しら山の宮に詣でゝ

階は坂の仕廻やしかの聲

あふむ石
この石の自問自答や秋の聲

山中の湯にて
湯にばかり月は長居やおとし水

有明の岩路
行秋や蔦の手を引はなるべき

神護寺にて高尾
染殿のむかし聞日や初紅葉

清水奥院牛尾
よく青き紅葉覗くや繪具合

うたの中山
九重は名にも塔にも紅葉哉

鎌倉に秋を迎へて
谷づゝに日なた細めて今朝の秋

建長圓覺寺の諸寺に詣て
樓閣の風やことさら今朝の秋

星月井
七夕も近し浴が星月井

海上寺
木犀や碁にも木魂のひゞく庭

羽衣の松
取れそうなものなきけふや松の露

久能山
石壇の伊豆へも行か薄紅葉

うつの山
蔦の手の笠に這ふまで休まばや

きく川の驛
菊川に先づ長いきや秋の蝿

さよの中山
日ぐらしも共命也さよの山

汐見坂
近ふ成遠ふ成月や汐見坂

途中吟
雁はまだ我そら耳や高師山

八橋無量寺
澤は田と成つてむかしの男郎花

見が淵より日暮の不二を望む
染負ふて日はかくれたり富士の色

江の嶋

蓬萊の外に千種や嶋の秋

舟行海安寺にて

海ごしに日の行過る紅葉哉

護國寺開帳

うつむいて(入)水の分け入るもみぢ哉

染井にて秋氣寂寥を見る

人の來ぬ道のしるしや露時雨

飛鳥山秋雨に逢ふ

石ぶみも露の淵瀬や飛鳥山

道灌山

指まねく萩に付かばや城の道

城跡に舟繋石といふあり

滿干知る千鳥も早秋の暮

日ぐらしの里

色ゝに秋を仕分る花野哉

れづ

この一木枯て名高し蔦紅葉

笠寺

笠寺ぞ降らば、宿らん紅葉陰

阿漕浦

淋しさも度かさなるや浦の秋

己巳七月うちさの神の御前にひざまづけば、松杉のあらし何となく尊く、ことさらあらたに遷ります宮殿も、かたへにかゞやきけるに

秋の山に向ふ見越も有がたし

首途の心なく秋郊外に出づ

さびしげな野にだどり行鶉哉

麥林塚

さびしさは其の日といづれ秋の寺

旅舍

名月や友もとむれば　(むしくひ)

ゆわくの湯もとに

溫泉の花の流は高しそばの花

遊山

分入るや湯のいきりほど秋の山

藥師堂

薬師山湯にしむ人の薄紅葉

葛篇　冬

旅の部

途中

霜多き山路になりぬ猿の聲

玉造りにて

片しぐれ幾日つゞくぞ小町寺

旅中

朝霜や袖もうごかぬ志賀越ぬ

同

竹の雪勸學院もこのあたり

同

日の岡を跡に見る日の寒さ哉

社頭にねむる

松ひとり風のこたへや神迎ひ

途中

走りつく里は物干すしぐれ哉

大和の古山と洛に會す

落合ふや雪も一すじ下川原

中の河内に行きなやむ日あり

このあるも鳴戸の波ぞ一雪吹

三保の松原

鷹もまた富士おもふ顔や三保が崎

北浦冬景

巻おろす外山の雪や浪がしら

佐州武の杜にて

吹返す鴛のふすまや朝神樂

夢想の後會

千本は今朝も氷柱や梅の花

いなり橋のほとりにて

日に透いて落葉のうすて白根哉

十月北地より歩して、又八しまの湖中に遊ぶ。この夏納涼の遊びの猶忘れがたくて、後赤壁の興なからんやと、夜話に人々を催す

氷るとも又水莖の岡の月

長命寺のほとりにて

枯芦や低ふ鳥たつ水の上

三四坊四國へおもむく。此の行や只浪花の芦のちからを頼みて、杖笠もさめて労れなき旅と聞けるに

鳴千鳥杖は名所をさす斗り

中の河内雪の隔てられしに、碁の敵手ありて、雪路忘れし頃、十余日の逗留多くは是に戯る。

雪深し石は碁盤に見る斗り

歸路雪中行

目のすへの酔てしらむや雪の暮

しのばず池のほとりに居せし日

朽蓮や葉よりもうすき初氷

こゝにも歸を思ふ

ため息の遠山へ行火桶哉

信中の搖落碧潭の上に吹廻りて、山のすがたいふ斗なし。驛馬の疾過るをいそがんともせず。

木枯よ削り過すな山の形

山の下あら波、

打よせてわらぢに残る落葉哉

加越　平原を過る日

よは／＼と日の行とゞく枯野哉

心のしたしき人々に會す

冬枯やうつゝの末の富士筑波

冬野眺望

枯て行野にかすがひや橋幾つ

隣人を尋るとて

朝毎に橋は短し竹の雪

越の寺泊りに妓はつ君、大納言爲兼卿に別るゝ時、其の思ひこし路の浦の白浪は立かへるならひ有とこそ聞、と云ふを、今爰に石碑に銘して、是に句を添へんと乞ふ。

百敷も千鳥聞夜や濱びさし

歸庵のあした雪ふりけるに

いづくにと見やりしが今庭の雪

洛西にあそぶ

鉦聞に都を出てゝ初しぐれ

芙蓉のぬし、癸未の秋、北浦に杖を曳、琵琶洲路山入る。楓に對せんとさ志は發しながら、旧里の招きもだしがたく、路の波路を立かへるこさゝて、又金城に笈をひらく。白根の風の寒けきにも、忽俳門の壯志を發し、西京南伊丹踏巡して、東海の風友に刺を投じて、雅章を乞ふて、生涯の臥遊になさんとなり。其の風流にたゆむことなきをよみして、さばかりに送り出づ。

紅葉焚頃をちかくや幾やどり

古人を古とするに、眼うとく心せばくて、氣高き人のふみなんどは深くもたどられ侍らず。只ちかくありふれたる俳人などのものしおきたるを、さま〴〵見あつめなぐさむことこそ、これに過ぎたる樂しきわざやあるめれ。此頃古き屏風はりかへ侍るに、はり交たる反古に發句など書したゝめ有をあやしみ、眼をとゞめ侍れば古りにし樗庵麥水が手記なり。こはよき得ものをと殘りなくとりあつめ、よごれたるは洗ひそゝぎ、いさゝかのとぢ巻にはなし侍れど、きれ〴〵にてたらぬがちなるこそ遺恨なれ。されど日頃好める古き友ひとり得たる事よと、明暮くり返し、彼翁の風雅にたどりての剛壯感慨のあまり、余紙あるにまかせて此事を記すにぞ。

嘉永三庚戌年夏　　青城

素丸發句集

春夏
秋冬

絢堂編

刻發句集序

蓋聞其隱士而教授人者目曰山長矣。今察素丸先生之爲人。致仕已降遊心於無何有之鄕。開目於象外口談風雅行能化人也。其於教授也。始者以苦而後教人入佳境。是以擧世稱山長不亦宜哉。蠧書魚者餘數萬指。夢香魍者門於艸廬。先生可謂爲勤矣。惜哉先生。以往歲乙卯之秋歸於道山焉。今茲丙辰之秋。冠首之第(弟)子等撰出先生平日之錦腸餘稿。編發句集二卷。傳之將來以計不朽。且欲令門風永扇於海東也。其志亦至哉。編成同好者來而乞序。余不辭者。欲報其嘗傾蓋而有故情而已。寛政八年夷則東都含海峰釋斗山撰。

叙

素丸先生沒。而徽音將絶。其門人相與。集錄先生之遺藁而補之。名曰素丸發句集。其功蓋勤矣。先生之爲人也。溫良閑雅。抗志淸妙。容人以寛。誨人以忠。其行敬愼篤實。未聞有過失也。性嗜風流大究蕉翁之意趣矣。當今悠揚蕉門之遺風者。未有盛於先生者也。是以其名振於四方。其功遺於後世。到于今。縉紳之士唱於上。市井之民和於下。其德尤大矣。詩曰。自西自東自南自北。無思不服。先生有焉。吾祖妣素篠夫人。大得先生之旨。吾聞其書之成而大喜。因略書其蹟以爲序。嗚呼若先生者。可謂死而不朽。碑頌亦無愧矣。

寛政八年丙辰秋七月　鶴齋源長世撰

長世之印　印

素丸翁發句集序

大和うたはさらにして、風雅に心をゆだぬる人、いづれか家の集あらざらん。されどもこれを梓に鏤め不朽に遺さずんば、むなしく蟫魚のためにこれを失はん歟。茲に東武葛飾の素丸子、若かりし時より常に滑稽を樂しみ、正風のこゝろばせを慕ひ、其道は、素堂隱士の流を汲め

る馬光先師より連綿と傳へ、卒に此道の蘊奥を極め、自然に蕉翁の深志を得給へり。しかのみならず、和漢の正史に廣くわたり、及び内外の諸書に通じ、俗談平話を正すまで、道の事に夜日を厭はず、教誨に倦まず。しかも其性恬靜にして言語少く、才を裝る事をせず。こゝにおいて四方の好士、嚢を擔ひ笈を負ひ、いたつて以て師と仰ぐもの郷閭に餘れり。されや年頃錦心繡口より吐給へる句ゝあまたなる中に、かの野菊に市女笠のすがたおかしく、あるは礁に都を向て國恩をおもふ心深き句なんど、和歌の道に賢き雲の上人の御耳にもとゞまり、著述なる所の芭蕉翁發句說叢大全は、東都のやんごなきみかたはらにも侍りしとぞ。誠にこれ當流の譽れならん。しかあれど、自らを飾り世に聞へあらん事を憚り、これを語り給はず、ゆへに知る人罕なり。予年頃師の句集あらばやと翼しが、名利にかゝはりもやせんと深く愼み、兎角して許し給はず。漸く遺章にいたつて、日頃の望みにまかすべきよし託し置玉ひぬ。されば世にいますかりし時、人も賞しみづからもよしと思ひ給へる句は、まれ〱に爪印ありしを基とし、其余は人口に膾炙せるを撫ひ、はた累年月、艸庵の榻下に乞ひ求て、かいつけ置しもの十に三ッかふたつあらんを、それかれとて二三子の衆議にまかせ、四季の景物雜句にいたる迄篇集して、あめつちの二卷に涉れり。げにも師翁齡ひ久しく、萬の言種につけ物換り星移り行句ゝ、いはゞ文車の七車にも積あまりなん。こゝに出せるものは九牛が一毛なれば、金玉の埋もれしもまゝあらん。後篇にいたりて全かるべし。頼ィに亨堂主人かねてよりちからを添んとありしが、半はこの人に助られて其功なりぬ。よて今櫻木にうつさしめ、永く世に傳らしむ。しかし傳寫よりのあやまりも多からめ、もろ人これを正し給はゞ幸とせん。只ねがはくば此集の末廣く、蕉門一派をはじめ遠き國、津浦〱までも、至りいたらば、師長の恩波に報ずる一滴にもやと、影前に拈香頓首して、愚なる言の葉に述おはんぬ。

寛政八年歲次丙辰秋七月

東武かつしか

如是庵

絢堂沐乎書

印　印

凡例

一 四季の題部類をわかつといへども、季節の前後詳ならず。神釋等のいにしへより季となるもの題別に出す。夫も句數あらぬ物は神釋の部に入、芭蕉・素堂・馬光忌等は懷旧の部に入。年〳〵の事なれば、句は唯其一二を載るのみ。

一 四季のうち、歳旦・歳暮は、年〳〵の春帖に出て、普く人の知る所なれば、又唯其二三を擧ぐ。

一 明和の頃よりの句は、予書集めて置きしが、其以前寶暦の頃までは、拔萃のみ有て具ならず。又他に贈り給へる所の卽考、及び返し等の句〳〵は多く洩るゝも侍らん。

一 紀行旧遊の唫、小記に數多あれど、大かたは此集に省く。去ども題ある句は讃み加ゆるも有。

一 文章の長きは後編に讓りて爰に略す。たまさか前文等略し出すもあり。此事見許し給へかし。

一 賀章・神釋・送別・留別・追善・懷舊等は、初躍の其事〻のぞんで句案の助にもやと、一〻部類をわかちぬ。

一 假名づかひは唯見安からん事を要とす。ゆへにしいてこれを正さず。正字・俗字もまたこれに做ふ。

以上

目錄

春之部（校訂者曰、季題の下の數字は原本の丁附なり）

素丸發句集（春夏）

歳旦

朝彦の殿ぶり清し松の春

まつは左右に開きて通す初日哉
常盤さや茶も齊らず幸ィ籠
はつ空は欲なき人の鑑かな
元日や此氣で居たら九千歳
春なりと玉の璽のはつ日哉
減れば來る年も藤太が俵哉
器〴〵すたる人なし君が春
春來たり星はそれともわかぬ間に
人も今朝餅に正しきはじめ哉
雪搔て小弓はじめや村すゞめ
初空や富士を瓷にかざりもの

御材木藏にて

万歳に頬はらせばやはしら數
はつそらや徳ある方に棚かすみ
春たつや空に翠の磨泥鏝

大慾は無慾に似たり。至誠は大愚のごとし。

嘘つかぬ顏にまづ照る初日哉

子の日　綠からゆびさす人よ小松引
腰を捫る簡單かろし小松引

遣り羽子　やり羽子や笑ふ透間を袂へ來る
遣りはごやお杉お玉が撥のさえ

猿曳　かしこきに我も移さん猿廻し
猿曳や朝三暮四の腰かけ茶

七種　七くさや粥の名字の品さだめ
七草や翌日舞ふ鶴のしら拍子
なゝ種に天ヶ國打し拳かな
みどり子の土一つかみ薺かな

薺　淡雪の箸さはりなり薺粥

若菜　庖丁に氷の音の若菜哉
大津繪の道行笠や若菜摘
袖濡て來るや若菜の熨斗包
針程も虫さへさゝず若なかな
合ィ駕籠におさる娘とわかな哉
あつらへは誰人の賀ぞ若菜つみ
塩魚の片荷に清きわかなかな

芹

芹つみや柳ふまへて及ごし
おもひかね階子をかけて根芹哉

淡雪

あわ雪やおづ〳〵積る艸のうへ

春の雪

木を辷る肌のゆるみや春の雪
紅梅に及ばぬ戀やはるのゆき

雪解

制札のあたりから先ッ雪解哉
鳶鴉日早き春戸の雪解哉
このうへは鷺もあぶなき雪解哉
富士川や岩の逆まくゆき解水
ころばして臼井峠の雪解哉

削掛

素麪の看板ちかし削かけ
短かきは唐松の葉や削かけ

若惠比須

愛敬に能ィ客つるや若惠比壽

梅

むめの花寒さも唐紙一重哉
梅さくや一ト皮むけし宵のやみ
木がらしの痩も直さず梅の花
香に追れ〳〵て梅の這ける歟
有明に梅は及鋏とはがねかな
梅が香のもふけや下司の一寸戸
名人の色香にさくや梅の花
遠里やむめはき〳〵と夕ぐもり
月の水硯にとらん梅の花
すねた枝から色正し楳の花
咲事の極め所やんめの花
梅の花ぬかつた枝はなかりけり
年寄て龍も齒錆や梅の花
梅咲ぬ此頃のやみ凡ならず
神道のまことの木なり梅の花
梅のはな天下の春を磨きけり

臥龍梅
梅老ぬ登るに踈く臥まろび
世の紅にそまぬ友たり梅の花

海苔

日の影をしほる簀海苔の雫哉
うす霞ふき流れてや磯の海苔
一疋のかさに欺すや封じのり
取あへず海苔に書遣る一首哉
さま〴〵に漂ふ海苔の裂目哉

下萠
下もへや日のこがれ葉の菰の下
下萠の愛こそ蘂の谷の戸か

菊苗
名聞に遣はれそめぬ菊の苗

若艸
若草や風呂湯流るゝはたけ條
若草や最ふ元結のかゝる程

寄若艸戀
若草や乱毛よれる風の道
若草や余寒を恨むよぢれもぢれ

薺草
竹釘に繋合せて野老かな
白髪と洗ひ落せば野老哉

鶯
うぐひすやこたつの人を呼おこし
鶯のはつ音に虫も目覺すか
うぐひすや鳴うとすれば人とをり
鶯のはつ音や筵を切手水
黄鳥やたちまち冴へる二ッ聲目
うぐひすや日毎〳〵の音の位ひ
春鳥の寝合ようて初音哉
鶯やけふはとゝのふ節曲
鶯の聲ふきはれし三保にいづれ

白魚
白魚や是ら雪解の水溢し
白魚や升に買れぬ身の清さ
白魚や反古に並べる直な文字
餡やまだ行先も鷺鷗
和らかな川へ〳〵と白魚哉
白うをや月の中より撰出し
さかづきに幸頭の皮す白魚哉

猫の戀
一ト刀ゑぐる聲ありねこの戀
築山に浪は越へじと猫の戀
戀猫に死ねとの鐘の雨夜哉
柱にも百夜の數をねこの戀
氣の付かぬ鹿に閏とや猫の戀
曾根崎の邉り尋ねよ猫の戀
粥杖のあまり喰せん猫の戀

凍解
凍解やいつか倒れしつぐみ罠
凍解や入らぬ薺の下駄に付く

東風
東風寒し水にさかろふ余りより

春風
ひき立る艸の父母たり春の風
春風や襦袢(注)の汗を一ト拭ひ

凧巾
天地の釣り合ものやいかのほり
風の子の名も仇ならず凧巾
いかのぼり乙女さびすもうなりけり
しやくる時鵜の聲あり凧巾

餘寒
梅もまだむめと分らぬ余寒哉
鶏起人起るまでの余寒哉

偶案
かざしたる扇子も腰に余寒哉

題　道中双六
朝夕に二ツ餘りて余寒かな
水凄く春まだ寒し北の溝
鶯の里ごゝろつく餘寒哉
持あきて山吹おろす餘寒哉

柳
正月を羽織にしたる柳哉
梅椿利口ばる世を柳哉
人中に千年經たる柳哉
十丈の純子にさわる柳哉
山かづら附け〳〵伸る柳哉
よい所ばかりすぐりて柳哉
老荘の堺に立て柳哉
靜さは爲さずしてなす柳哉
垂るゝにも背と腹のある柳哉
去ながら一ト角ほしき柳哉
青柳やいかに吹ても菩薩嚢

初午
はつ午やどちらがほんの畠道
初むまや蝶となる羽も小忌衣
はつ午やほぐるゝ艸の一字二字
初午や野末あやしく殘る雪
はつ午や跡先になり行女

彼岸
だましよき櫻と餡に彼岸哉
梅櫻かた〳〵寄らぬひがん哉
足を空に鉢を飛して彼岸哉
おこのりの岸に這寄るひがん哉

涅槃會
用はみな濟んで雙寐のねはん哉

ねはん會のある所みな雲深し
大きさに木の下もよし涅槃像
世話やきのよい頃にしてねはん哉
西行のけなりがりたるねはん哉

水取

水取やはる〲來ぬる水の脈

春雨

山眉の這ふて出たり春の雨
宵やみの紫ふかしはるの雨
あたらしくもの着て寐たし春の雨
行わたる物とて細しはるの雨
一粒も庵末に降らず春のあめ
春雨やふるとも見へず木ゝの露
筆結ひの毛すじ通るや春の雨

木の芽

夜の雨にほどる出る木の芽哉
こと〱く佛生見ゆる木のめ哉
手廻しにもみぢぬもある木のめ哉
ふでのさや一チ度にはづす木のめ哉
我がちに一派〱の木の芽かな

雉子

一聲は杉にくらべて雉子哉
五十町すぐに打けり雉子の聲
柴の戶や痞のさがるきじの聲
二十五弦一度に切れてきじの聲
ゆりわたす雉子一ト聲や長柄川
ふじ橋のまだゆれやまずきじの聲
聲の幅野ゝ幅にしてきゞす哉

雲雀

已れ程に人も見ゆる歟舞ひばり
うつくしき聲ふりくだるひばり哉
聲に乘り〱終ひばりかな
舞ひばりもるや日暈の破れより
舞ひばりそれより上の空寒し

乙鳥

釣鐘に入るよと見せて乙鳥哉
石壇を平ラにおりる乙鳥哉
つばくらの矢返り早し角ミ櫓
尾も羽根も削り立たる乙鳥哉
乙鳥や漕船笑ふ最上川

蝶

咲程の花にふれ行小蝶哉
夕凪や牛に乘行蝶ひとつ

市中の棟から落す胡蝶哉
こほれ米拾はで淸し艸に蝶
蝶〳〵よ一日に吸ふ露何斗
はつ小蝶風腫ものにさわるかと
さぞな蝶若紫の色ならば

霞

山かづらほごれて沖の霞かな
いろ〳〵の物を引出すかすみ哉
跡追ふて來るとも見へず遠霞
曳て行船の跡からかすみ哉
歸る波裾へ這こむ霞かな
半面ンの富士美しや夕がすみ

陽炎

陽炎や稈代畠の一ト郭
陽炎や見れば反り橋登りかね
かげろふや鳥の落毛の地に付ず

朧月

ひとつふたつ蛙鳴より朧月
木戸〳〵に札張る人や朧月
咲たかと水へひてゝもおぼろづき
戀せじとこりた夜もあり朧月
初夜過の戸敲くは誰朧月
しめるかと羽織撫けりおぼろ月
須磨明石卯のうちや朧月
交りはこの腐なりおぼろづき
戀そめて言ぬ思ひや朧月

春の月

雲と咲上に匂ふや春の月
世は若し影取しめす春の月

田打

獨りして假り初ならぬ田打哉
田打日に堅牢地神寐覺けん

耕

耕や馬合点して折かへり
田がやしや蹴上の泥の地藏へも

畑打

畑打や二町にひとり二人づゝ
はたうちやいくばく起す虫の夢
畑打の墓に念佛唱へけり

摘艸

つみ草や初手の堤は一里跡
摘草や戻りはこはき溝の水

土筆

竹の子の出る所から土筆哉
つみまけて返す〳〵も土筆哉

蕨
早蕨や女蘿をなぶるその拳
早わらびやまだ若猿の爪はづれ
沖まねてたつや蕨の波がしら
たばねたる屑掻よせるわらび哉

山葵
濱燒にむめの匂ひや摺山葵
土龍の鼻吹て居る山葵哉

和布
兩端はしるしに裂てわかめ哉
船人の十餅にさがすわかめ哉

芦の角
螺売に角組む芦の恨みかな
芦の芽やゆふべ迯なき水の皺

春の水
泥龜のしさるらしさや春の水
江戸川や夏へ〳〵と春のみづ

呼子鳥
覺束な田舍按摩の呼子鳥

駒鳥
鷄合見て駒鳥のたけりけり
こまどりや聲清澄の五十町

歸鴈
囀りの世もむづかしと歸る鴈
行鴈やけふは何國の島畑
ゆく鴈や我一景は捨て行

若鮎
わか鮎や笹に付れば共葉ぶり
塗物に次のはしりの小あゆ哉
若鮎や鳥影にさへ岩がくれ

蛙
梅よりは與ある闇や鳴かわづ
その腹は鳴ても減らぬ蛙かな
雨の夜を笑ひ崩るゝかはづ哉
せゝなきも油うく夜の蛙時
一寐覺身の輕ふなる蛙哉
我に向て事語れとやなく蛙
己がはく泡にむせてやはつ蛙

蜆
淺瀨きく生醉もあり蜆とり
しゞみとる頃も青砥が差圖哉

蛤
蛤の扇子をひらく日和かな

田螺
遁る時柳頰ばる田にし哉
いつとなく烏芋に染る田螺哉
木曾殿となりぬ深田のたにし取

蜂の巣
蜂の巣や地藏の笠を笠に着る
はちの巣や親は鎧ふて口の番

蚕
蜂の巣に三間竿の夜討かな
二三日世をうつゝなき蚕かな
唐の姫の肌見る蚕かな

鳥の巣
鳥の巣や塵ひとすじの工夫より
鳥の巣や人はたやすき産所

角落
つの落て鹿は淋しきはじめ哉
今落た角嗅ぐ鹿や何ごゝろ
あやからせたき人もあり角落し

種蒔
種蒔や資盡しのかんぶくろ
種まきや此後女の手に渡し

藪入
やぶ入りの腹に長もの語り哉
藪入の肥りを母へ土産哉
やぶ入りや罪つくりたる文ひとつ

接木
小刀も左りの利た接木かな
浦嶋が明て悔しき接木哉
無分別に分別有て接つぎ哉

椿
抱き留て蛙のうくや落椿
目高浮く最中へ落る椿哉
散るを見て咲もつら〳〵椿哉
笑ふとも舌の重たきつばき哉

松の花
仙人の茶うけに咲や松の花
常盤には合ぬもろさや松の花
まつの花さくや机に三十韻

小米花
糧刻む向ふにちるや小米花
小米花鄭の團子のかざし哉

曲水
曲水や鮎も七歩の詩のはしり
盃のうづ卷席やひなの前
雛の酒呑んで放下の手妻哉
白酒に金時わざと召れけり

鶏合
血しほちる木爪は物かは鶏合
蠟燭の晝に寐かねるひゐな哉

雛
梨壺のむかしを今やひな祭
箔を着る世も羨まず紙ひゐな
組あげる雛や摩耶天忉利天
ひな立て錦の中に寐る夜哉
つと入に見む物ならば夜の雛

二ツ星春祭る名はひゐな哉
花咲の莊を附たきひいな哉
鳥鐘のつらさをしらぬひゐな哉

艸餅

くさもちや神農に似た髭の口
草餅や砂糖の霜は置次第

汐干

杖で探る心長さよ汐干貝
ありたけをまくつて見せる汐干哉
能ものは引て取たるしほ干哉
生嗅ひ香ばかり殘す汐干哉
風落て命ひろいや汐干狩
仲人の拾ひ物ある汐干哉

出代

出代や世に拾はるゝ哥がるた
出代や雨〻着てあるくあだ心
出代や世をうき橋のたゝずまい
出代や鳴も來ぬべき流し元
出代や思はぬ戀にめぐり逢

櫻

入月を綿に仕舞ふや山櫻
山ひとつ鋲打にして櫻哉

護國寺にて
七寳の裟婆になしけりやま櫻
散る櫻見て居ながらよ咲櫻
山の笑ひ木に鏤てさくら哉
此上に置美人なし山櫻
見て居れば物いゝたけに櫻哉
哥仙達舌を巻れし櫻哉
山櫻盛りに山はなかりけり
空を醉せ人を醉せて櫻哉
拾ひけり適に出る日を初櫻
うかれ立人遣り過し遲櫻
櫻狩五障の雲のはれ間哉
木に歸る巫山の雲や朝櫻
生醉の女幾人りやまざくら
見せばやの女房つれて櫻哉
名にほこる櫻ありとも山ざくら
櫻さく春に夕べはなかりけり
見上れば見おろすよりも櫻哉

あそべとの浮世の民にさくら哉
下馬札のなくばいよ〳〵櫻かな
言ふ事を櫻教しゆるさくら哉

花

媒を仕あふせ顏の花見哉
手を引て耻かしくなき花見哉
ぬり樽もよはり臥たる花の蔭
明星の花眼ばゆしと消にけり
樽次が五ヶ條出さん花の山
花盛天下晴ての醉日かな
名どころを娘聞かるゝ花見哉

桃

五ツ子の四ツ竹うつや桃の家
菌し焚く香に曇りけん桃の花
大枝に折る鄙振りやもゝの花
桃さくや左りは厩右厠
牡丹より牛に付なばもゝの花

海棠

海棠や何所ぞに逢ふ唐の紅
海棠や水晶のすだれ照返し
海棠や笑はんとする時を花
海棠や業平竹と私語
海棠や銀鼠の褥珊瑚盃

糸遊

糸ゆふのおだ卷にせん三輪の杉
糸ゆふや天を縫にし其あまり
糸ゆふや雲雀の空にからまらず
糸ゆふや却つて木の芽綻ばし

櫻艸

福壽草抜た茶碗ぞさくら草
打水の七日七夜やさくら草
盛り切りの飯賣鄽やさくら草

苗代

苗代や堆にせかるゝ水の月
苗代や飽ず飢ずの水積り
苗代や是にも欲器の水加減

日永

雁はれて寐た子の側に日永哉
五里の道四たび物くふ日永哉
永き日や命を洗ふ海と山

長閑

長閑さや鯉の水切る四ツ時分
長閑さや雁身重けに百羽搔
長閑さや出支度すれば女客

麗　うらゝかや歩行て見度舟の内
美女ならぶごとき野山の麗哉

暖　あたゝかや田に鉄漿のうきあるく
暖や夢の覺たる茄子室

春の夕　粧ひ行く人に下戸なし春の夕
錢遣ひあらくなりけり春の夕
月も戻る人に酔らん春の夕

山吹　山吹に染飯ねだらん黄蘗派
やま吹や馴合ふ影も魚と水
山吹や築山廻る亭の道

蒲公英　張つめて咲や日中のつゞみ艸
たんぽゝや芝生をしめる花の鋲

木瓜　もみ仕出す甚三が門ドや木瓜の花
木瓜咲ぬ折べき寸ンの透間なし

菫　古御所やいまも菫は蝶の夢
順禮のへたりと居るや菫艸
壺折の裾のこぼれや菫ぐさ
明ぼののこぼれし露かすみれ草

菜の花　菜の花や奢りの果の賣屋敷
なの花や鷄の照羽にてり交り
菜の花や中に金魚の池ひとつ
なの花や麥四五反の及こし
菜の花に紙煙草入薫りけり

梨子の花　血の氣なき笑ひは淋し梨子の花
むき立た色に咲けりなしの花
化粧ふてもほくろは抜けずなしの花

人丸忌　合躰の神秘は花とさくらかな
人丸忌仰ぐ蛙の我らまで
獨かも三人の中の人丸忌

御身拭　世の肌の奢り初めや御身拭ひ
移り香も三世の緣ンや御身拭ひ

躑躅　物干に襦伴(袢)は兀てつゝじ哉
文盲な築山ありてつゝぢ哉
ぬり樽の売こけとまるつゝじ哉

藤　加賀骨の尺取虫や藤の花
それが此池の深さかふぢの花

むらさきの降るかとばかり藤の花
藤錚〱蛙の目かる夕ぐもり
傘に附て戻るや藤のはな
長ひものみじかきとても藤の花

茶摘

器量程聾は薫らぬ茶つみ哉
手も鷹の爪に名のたつ茶つみ哉
撰り取の娵とて極の茶つみ哉

彌生山

蒔く金に拾ふ錢あり彌生山

三月盡

三月や隣へ戀の懸ヶはづし

行春

鐘鳴て春行かたや海のいろ
かまくらの魚呼出して行春歟
葛西へも鯛落ぶれて行春ぞ
むら雨のあわたゞしさよ暮の春

書賛之部

西行に柳賛
西行に名を流したる柳哉

布袋の賛
長閑さや玉取り得たる臍の垢

蔓家に鳥の諷ふ躰
鴉より常盤や鷄の諷ひ初

花生に梅に雀の賛
雀子や犬公が手から床柱

柳に野馬
春駒やふり分髪の振くらべ

梅に苞の賛
苞の内梅花の易に占はん

柳に鴉の賛
青柳に居り乘たる鴉かな

西王母の賛
三千年に一度の雛や西王母

唐書虎の賛
寐覺する虎の欠びや眞東風吹

壽老人梅を嗅ぐ畫賛
此星の香や木に分て梅の花

三平二滿の賛
身をつみて戀ふ人なければ、人の
また我れを戀ふる事なし
娵入らぬ身を一ッ葉の春邊哉

かし鳥の賛

此鳥春の囀りには能諸鳥の眞似なすと聞き侍りしかば

かし鳥や聲色つかふ花の宴

東大黑對話畫賛

誰が爲ぞ千金の夜の長咄し

畫賛

富士咲んで三千の山は顏もなし

壽老人に鹿の賛

馴れるのも戀せぬ內ぞ春の鹿

畫賛

大竹にすゞめ二羽、白く隈どりたるを

忍び逢ふすゞめや竹の朧かげ

布袋の指さしたる畫賛

あの花にむざと開くな此俗

柳に牛の賛

牛は柳やなぎは牛のこゝろ哉

蕉翁・其角・嵐雪・三人像

接得たり右と左りに桃櫻

畫賛

鐘つかぬ間をはぐらかしちる櫻

柳に燕の畫賛

靑柳を撫付に來る乙鳥哉

猫眠蝶飛ぶ

蝶を撲猫の工みや空寐入

風鈴の短册に燕の戲れる畫賛

短册に巳が墨たす乙鳥かな

布袋の賛

此袋ありてこそ世の月花も

慶賀之部

八十賀

連翹を熨斗のかざしや八十の杖

東川・陶雅兩人の万句賀

とこしなへに藤山吹を二見哉

濱堂觀音寺へ移轉を賀

日を撰み〳〵て登るひばり哉

業孝亭の稲荷の七五三繩より、初

の芽の七本出たるを賀せよと、望
れて

万句賀
七五三繩の籾や加增の苗配り
櫻さく門〻や言葉の菌生守

讓德布ニ絢堂號　文略
送るなり雪のあやある鉢の梅

野逸落髮の賀
是からは無紋もよしや染柳

八十賀　題松
腰を摩千代の根生や杖の春

古稀賀　寄松祝
後も見ん猶七曲り若みどり

八十賀
行春を八重に十返れ松の笠

五十賀
千代は空にしるや五葉の若綠

東川七十賀
蒔そへん心の儘に米の種

布袋の畫　六十賀
耳たぶに隨ふ年や千ゝの秋

六十賀　丹羽鶴如翁題寄龜祝
春積ん龜甲ことに六十圖

米の賀
米柳さし木に白髮あやからん

素孝子嫡元服賀
千代かすむ額際よし男山

八十八の賀
米の芽や又萠返しいつ迄も

仝
八十島の先もはるけき霞哉

素花七十の賀
七十字を又三圍や小田の春

咫徑・楠賀万句
我門の孫枝美し桃李

雜春之部

人は居所を撰ぶべし。孟母の賢なるも眼のあたりに、道ばたの草は

多く踏にじらるゝに

世を安く木の根篠の根すみれ艸

四十五年ぶりにて、中の町の櫻見しも命冥加なれば、いろ〳〵の事思ひ出すさ吟じ置れしを、今我うへに觀じて

よし原や花は昔の花ながら

二見形文臺裏書

流行と不易や松のふたみどり

千住逍遙

後の夜も光れ茶釜の朧影

題しらず

柳から巨燵へ貰ふ眠氣哉

遠里の眺望

竹烟り木の芽の霞犬の聲

日和乞

長閑さをふじに貰はん日和乞

江戸川は玉川の末なれば

鮎喰ふこに我も登るや川傳ひ

房州紀行の中　文書

蝶よりも海鹿の夢のはかなさよ

はる深き庭やそてつも富貴艸

吉濱の白雲庵を訪ふに、主は此頃禪旨を學ぶさ聞傳へて

浮世氣の朧すゝがんはまの浪

挨拶

三月廿五日、稻中庵の扉を敲きて、昔い交りを冴返らせんさ物語りて

遊ぶ日の杖取かはせ皿わらび

有梅亭

底拔て語らん水のぬるむ迄

舜民子に永き日を暮して、無事庵に其夜をあかすも、すぐせいかなる藤かづらのゑにし有けん

行春や此下陰を一ト夜たび

素舟對面

むつみせん海苔白魚の幾年も
搌枠の近月庵に、半日の閑を偸むに、利根の水はいまだ涸て、土橋の草の黄ばみ、遠里の杉の村立、げにや黄石公も待たる風情なりし。

水朧橋は唐繪の人通り
都靜亭の扉を敲て
ぬるみ合ふ池の心や筆硯
那古かまやにて
海少し木の間の華や透ㇱ塀
飛び込でたすけられたる蛙哉
波光亭にて
汲めやくめ硯に霞む沖の色
得ゝ庵にて
念力のつゐに舞込む乙鳥哉
百丸老母に初めて對面、八十八歳健也。頭巾を送るを謝して
着せわたのわけ根や菊の丸頭巾

鬼越村淸泉亭
素通りもならぬ軒端の乙鳥哉
曾我野の眉丈亭に、一夜をたのみて
山吹の簑より借らば箱枕
湛露亭にて
けふこゝに腹は蛙となりにけり
孤水亭にて
ゆかりとてめぐり久留りや藤の宿

神祇釋敎之部

根津淸水觀世音奉納
千手にも折らぬ誓や山ざくら
護國寺開帳
尊うとさの御顏や玉の朧影
茅野天神奉納
誓にも梅を兄とや松さくら
奉納
鎌倉子安祖師奉納
咲まぜて眞名と假名とを神の梅

催生より雨のくぎりやはつ櫻

上總鹿野山藥師

垂れ給ふ藥の餌はや糸ざくら

天滿宮奉納

白梅は中にも花の聖かな

房州市井原山神奉納

神の氣も鯨魚に凪や春の月

龜戸天神奉納

宰府の飛梅も今又當社の廣前に榮へて

つくしから二度飛梅ぞ御約束

笑天滿宮奉納

天滿や香も行渡る梅月夜

廿五日奉納

白がちの日和や梅の大自在

鯨巴、天神を信じ、廿五社を參詣せし摺物に望れて

梅が香の利キ札いづれ二十五社

宣明亭稻荷奉納

春幾代御燈は消ず月日星

西行忌

霞炷く富士を香爐や西行忌

春雨の日やこのもしき山家集

菩提樹をさくらにかへぬ西行忌

彫うつす影や柳に西行忌

常陸平左衛門が犬、伊勢參宮の物語りを聞きて

參宮の犬を宿せん春の雨

子の年閏二月妙音辨天贊

妙なりや霞める花の波の音

餞別留別

雪中菴行脚餞別

梅柳筏に組んで大井川

二六庵奥羽記行餞別

霞行やその末の松合歡までに

謙堂俄に日光へ發足すとて來

雲雀たつ足もとよりの首途哉

松夫身延詣餞別

行春や甲斐〳〵しくも雲の裾

留別

鴈行や跡の便りは筆つ花

無事庵を歸るさて

詞にも土筆にも盡ず春遊び

留別

藤に我尾も斯やとて行春ぞ

宣明より使來、餞別の句あり、返事に

何よりの日和貰ふて行春ぞ

懷旧追善

睦月初の五日妹に別れけるに、火は元の火に歸るとおもへば、愁傷いとゞしきりに

さればこそ岩も驚く雪解哉

大川戸百丸母追善

聲悲し紫雲に歸る雁のこへ

瓢水旧友追善

陽炎のあへなき世也風の前

時人追悼、

この余寒揉み和らげる人戀し

柳几追悼

惜しや柳月日の鞭に折れけり

竹阿追悼

江戸へ植て散るや枕のやま櫻

東陸百ヶ日春の雪にて句を乞ふ

寒さにも果の日はかなはるの雪

蒲丈媼追悼

いたましや睦まじ月を別れとは

春之部終

夏之部　目録

素丸發句集

更衣

花脱で山又寒し更ころも
寒いかと居はつて見たり更衣
朝ぼらけ大手際だつ袷哉
そら錠の明く音佗しころもがえ
伊達に出て戻りの寒き袷哉
裾細く小鹿に似たりころもがへ
けふからは葛の葉なれや更衣

時鳥

郭公わたるや聲のすみだ川
時鳥闇のかけごの薄ぐもり
雨に月に相手きらはず子規
時鳥一聲四百八十寺
時鳥その時地には花の王
時鳥なくや無疵の朝ぼらけ
子規空に鷺派の笑ひ聲
時鳥鳴や眞晝の空とぼけ

青葉しかせ白雲かざし時鳥
曙の折紙つきやほとゝぎす
時鳥鳴や濁れるすゞり澤
鳴くと聞く聲はゝき木や時鳥
時鳥梢に鳴はちるとき歟
欄に酒こほれけりほとゝぎす
不二とともに湧出た鳥歟時鳥

鷦鷯

寸ゝ〱に葉を鳴裂か行ゝ子
獺の出た騒ぎや夜半の行ゝ子
傍に鳥なきごとし行〱子
行ゝ子鳴くや野澤の夕ぐもり
葭雀や阿字〱と鳴慶養寺
筏士の喧嘩買らん行ゝ子

水鷄

庇よりも庵の寐覺は水鷄哉
金のある町はたゝかぬくるな哉
傍輩の水鷄にしたる妻戸哉
まつ人を秋の夜にして水鷄哉
腹立て後はせはしきくゐな哥

鳲鳩

ちらすべき酒なき山や閑古鳥
羯皷鳥此曲和する詩哥なし
かんこどり鳴けや白髮の拔る程
雜念を打るゝ杖かかんこどり
耳ふさぐ羅漢も一人かんこ鳥
大極の中にものあり閑古鳥
かんこどり戀の浮身に砭(イシバリ)す
山水の眞ンに成たり閑古どり
淋しさは一羽でも多しかんこ鳥

蝙蝠

蝙蝠や鎌倉どのゝ節木より
蝙蝠や夜の働きは八天狗
蝙蝠も蚊を吐く鳥かふる社
かはほりや夜を己レが鶴が岡
かはほりの羽や岩茸にあやかりし

牡丹

さしわたす扇子の影や白牡丹
阿とひらき吽ンと苔でぼたん哉
ちる迄は身も動かさず牡丹哉
袖香爐しべにも持てぼたん哉

淸盛の前にずつしと牡丹哉
夕陽の湖水を花にぼたん哉
釣臺に一輪君がぼたんかな
蹴鞠をうけ留て居る牡丹哉
耆にも日數さだめて牡丹哉

卯の花

卯の花や妻の網すく火の明り
卯の花や姫のりうりの姥が門
卯の花や川から夜るの明ぬうち
卯の花や八日の垣のかづけ綿
卯の花や闇に見分る山堺

杜若

虛無僧の立留りけり杜若
かくてこそ朧とれけりかきつばた
杜若しのゝめのうへにたゝんと
乙鳥に鍵裂してやかきつばた
このうへの若き物なし杜若

若葉

子鳥のづぶと濡たる若葉哉
三味線の山落つけて若ば哉
山をもくれて風輕きわかば哉
市の塵あつく隔て若葉哉
朝寐する鳥の世廣き若ば哉
邑角の針も袋に若葉哉
吹けば薄く止めば手厚きわかば哉

夏木立

名のあるもひとつくるみや夏木立
七ッから窓有てなしなつ木立
風の音にむかし聞ばや夏木立
花は淺しと奥作る新樹かな
四方からあふむく寺や夏木立

木下闇

樂書の祠は黑し木下やみ
錫杖の折を拾ふや木下やみ
休む間に髮切られけり木下闇
下やみやかき消すごく僧みへず

蝸牛

むづかしき角ふり落せ蝸牛
蝸牛すゞしや家の引どころ
あら磯に有べき形をかたつぶり
手遊びに交て置けり蝸牛
釘打に登るや垣のかたつぶり

水すまし　やさしさは月うつれとや水すまし

雨蛙　唇のたゞれて白し雨蛙

鳴てしりぬ石踏の若葉の雨蛙

橘　橘や曉の夢にもとの主

たち花や昔ぶしんの太子堂

花柚　印籠の壹分をちらす花柚哉

小刀も小柄も譽てはな柚哉

鰹　網を出て東雲消へずはつ鰹

朝比奈は五木喰けん初松魚

初松魚我も晝寐をはね返る

夜がつほや目利は極印専右衛門

いでや汐の花摺衣はつがつを

走り込牡丹の家やはつ松魚

ながらへて憂しと住世もはつ鰹

藤澤に泊りはやめん初松魚

初鰹此尾に付けばちから紙

干鰒　買ふ時の氣強くなりし干鰒哉

斯て身の蝶に喚るゝ干鰒哉

青簾　朝風の雫垂かと青すだれ

青簾水氣をしとふはじめ哉

紙帳　戯れ男のさび矢射懸る紙帳哉

辨慶に二タ夜と持たぬ紙帳哉

淋しさに蚊屋も葎の軒の月

蟵(幮)　初蚊屋や我さへ蜘のかけはづし

しのゝめの竹洩來るや旅の蚊や

爰に又壺中の天や蚊やの月

灌佛　丈六に成る指さしや佛生會

灌佛や墓目の役は摩利支天

活花に灌佛の水分ばやな

麥の穗も指揃へけり佛生會

灌佛や悪人投ん手のすさび

鶯の老　鶯の老や切句のせはしなき

春鳥の老てや低き枝ゑらみ

練雲雀　戀るとも及ばぬ空やねり雲雀

塒鷹　一器量たはうや鷹の塒籠り

羽根ひとつ拔るを鷹の衣がへ

茄子　茄子出て豆腐古る妻の思ひ哉
文箱に供御の殘りや初茄子
一トロに喰ふは愛なしはつ茄子

短夜　みじか夜や富士まで夢の屆かね
短夜や箱根の腰の急へ合す
短夜や鳥鐘の間も水車
夏の夜や短かくてこそ人の爲
短夜や鼠も民に引あてず

麥秋　人らしき髮ひとりなし麥の秋
どれ／＼も褌黑し麥の秋
竹林の名もしたはしや今年麥
麥搗やふましした顏の娵自慢
茶筌艸爰も利休が領地哉
　。時門古城一見の時
米かみの動きや麥の穗の戰ぎ

麥焦し　泣にかへて咽る別れや麥焦し
水の無き三里繩手や麥こがし

若楓　はや秋の紅粉ちよろ／＼と若楓
植かへて一屋根ふくや若かへで
薄やうの紙のもめたる若かへで

葉櫻　葉櫻や娘もみへず破れ埃
葉櫻や凡に歸る山ざくら
葉櫻や長臺門の薄ぐもり

松の落葉　折ふしは立にも松の落葉哉

竹の落葉　已が子に着よとて竹の落葉哉

棕櫚の花　庭を掃く拾得淋し棕櫚の花
心の臟出して見せけりしゆろの花

茨の花　茨さくや茶碗のかけも散まじり
夜更ては火の飛塚や茨の花
盜人に月夜の垣や花いばら

筍　筍やかき揚城の簀の子より
筍はすゞめの色に生ひ立ぬ
竹の子に白眼之介は留守居哉
筍や鍬を打たる根の〆り
筍や虫の明けたる笛の穴

若竹　わか竹の塩ふみ習ふあらし哉

若竹は割たる竹の戰ぎ哉
若竹や延て身振りは後の事

藻の花
藻の花や一筋殘す魚の道

萍
蘋や一期は風に兎も角も
萍やたちまち綴る竿の跡
うき草の浮世と明て通しけり
萍や夜〱に虫ばむ水の月

河骨
河骨や水ひた〱と緒〆際
河骨や落たきせるも側にさく
河骨やすつぽんの膽を花に咲

紫陽花
あぢさいや夜雨〱の染くるひ
紫陽花や荒し名主の揚疊
あぢさゐや余り厚さに饐る色

芥子
風もいざさはり三百けしの花
二日とはせいいつぱゐや芥子の花
蓮よりも因果は早しけしの花
蠟引てやりたきけしの盛り哉
けしちるや一トへら殘る帆立貝

花葵
登る程足もとくらし花あふひ
咲登る艸の雲雀やはな葵

苔の花
槇の雫一ト吹落てこけの花
露一ッ千にも割て苔の華
腹冷す宮守うつくし苔の花

芍藥
芍藥や上陽宮の蟻のみち
しやくやくの花や局の氣の位ひ
芍藥は純子なりけり花も葉も

石竹
石竹や朝寐に馴るゝ奥の緣

撫子
撫子や風に逢ふてもこけやすき

夏菊
夏きくや前髮のある角力取
夏菊や此下露の鉢さかな

庭前菊
夏菊や山路もしらぬ盜もの

玉卷芭蕉
何事の傳ぞ玉卷はせをの葉
操り出す純子一卷ばせを哉

虎耳草
海老の髭に小貝咲けり虎耳艸
雪の下さくや小紋の菖蒲革

紅の花　眉掃は白髪と老ぬ紅の花
頬先に誰戯れけん紅のはな

鹿の子　乳の汁をちよ〱とつけて鹿子哉
白萩の花摺着たる鹿子かな

端午　山風を揉んでは捨るのぼり哉
木の間からみなぎる瀧の幟哉
山ひとつ軍書に見たるのぼり哉
かゝさずに葺て行けり菖蒲賣
八十氏の神風わたるのぼり哉
使にも教へ安さののぼり哉
結納の品にそへたき粽かな
折からや鶏のかざしも菖蒲の日
茶を漏るゝ山まゆなれや柏餅

五月雨　五月雨や戀に流るゝ角力取
五月雨や干鱈引裂く老の力
五月雨や寐倦て蛭の延ちゞみ
五月雨や風は息つく時も有
燼開てこまかえらせん五月雨
五月雨や本船町のあらひ桶
五月雨や出られぬ老も繭ごもり
五月雨や三世を經たる心もち
五月雨や膝に置手を枕にも

早乙女　早乙女や日やけの顔を笠に着る
早乙女や宵の男をふり返り
早乙女や濁した名迄植そゝぎ
植負て舞ひもふ早苗乙女哉

田植　戰ぐ手に疵のゆがまぬ田植哉
ふしあひに伸もあやかれ田うへ唄
目ざましく水活かへる田植かな
嫁喰ひし口の御祓や田うへうた

田艸取　聲はすれど居るか居ぬかの田草取
田草取る手やへら鷺の背遣ひ
一錢を耳に拾ふや田艸とり

青田　御祓せん日をも青田の浪のうへ
空と分り海と分りて青田哉
波立る風ありてこそ青田かな

蚊遣り

手配りは風にまかせて蚊遣り哉
眞ン中へ蛇の落たる蚊やり哉
側杖の蜘へもまはる蚊やりかな
鳴り渡り貝飛ぶ蜑の蚊やり哉
取越して槇に霧たつ蚊遣り哉
雲吐て山も夕べのかやりかな
よい程に風もる不破の蚊やり哉

團扇

日の影も眞紅に殘る團かな
風の出るすじ／＼清し奈良團
繼母の口に垣する團扇哉

扇

耻かしき時にはたらく扇かな
水はしる音や扇の十二間
諫言を疊んで戻る扇かな
手自慢の淺さしらるゝ扇かな
御意うけて我風遣ふ扇哉

競馬

我戀る月毛のきみや競馬
一番は燕のかちぞくらべ馬
年しるや陰陽の鞭にくらべ馬

梅雨

入梅空や脱だり着たり眠りたり
入梅晴や駕とかちとの替せ道

鵜舟

面白き浮世のやみの鵜舟哉
みづ底へ世話も屆くや鵜の篝
形代をたはしに拾ふ鵜舟哉
うつゝなや鵜の吐鮎のまだぬくし
入相の無常過して鵜ぶね哉

翡翠

かんざしをよくも落さぬ翡翠哉
川せみや千尋の藍もひぢたゝず
川せみや曲尺ははづさぬ水の音

螢

十丈の太藺を登るほたる哉
白露に魂入りて螢哉
追ふて行背中に一ツ螢哉
吹もどす風を身方や螢狩
打落しやゝしばし有て螢哉

蠅

蠅打に起て鬼一が笑ひ哉
一ツ家や蠅で塗たる酒の升

蚊

から紙に蚊の茱萸一ツ捕へけり

飛蟻　晴上る軒を霞める飛蟻哉
蜘の子　蜘の子や最ふ怖しき網細工
毛虫　笈摺にたがい吟味の毛虫哉
火取虫　明やすき夜を何事ぞ火取虫
百合　咲寄る艸の上見ぬ百合の花
　　裂てねぢれねぢれては裂け百合の花
　　雨の日をしたり顔なり百合の華
鳶尾の花　神の矢の白羽や家根の鳶尾の花
　　蛙呑む蛇の舌ならし鳶尾の花
靫艸　尋行武庫の山路や靫艸
眼皮　行丈の意氣つまりたる眼皮哉
仙翁花　丹ねりて盛りも久し仙翁花
忘艸　咲く頃は覺て何を忘れ艸
桐の花　何の代の破風や朝日に桐の花
　　桐咲くやそれがましくも尾長鳥
　　翠簾の房うばふ夜明や桐の花
合歡の花　ふり落す店のかしらや合歡の花
　　入相を葉とすれ〴〵やねむの花

花石榴　照さける宮のあつさや花柘榴
　　水打ば妻戸にちりぬ花ざくろ
百日紅　敷石の勸化も久し百日紅
　　暑き日を集てさくや百日紅
栗の花　思ひ出す年や實植の栗の花
　　其實とは氣のふり合ず栗の華
　　くりの花落ちる店や切火繩
青梅　青梅や虫に恨の一斗程
青瓢　腹帶の跡やくびれて青瓢
大角豆　折ふしは花蔓に結ぶさゝげ哉
　　闇二本出してとらるゝさゝげ哉
　　盆に置音やさゝげの笹すだれ
川狩　川狩や隱居して居る相撲取
　　活キ死も風のかゝりや夜川たつ
　　川狩や泥龜の子をかどわかし
沖鱠　とりあへぬ小刀すゞし沖鱠
鮓　笹の葉にむかし忘れず雀鮓
　　鮓見世の夕汐時を最中哉

過不及の間の寐心や一夜鮓

晝顔

晝顔の華や日やけの石の上
晝顔や瀨戸の素燒の花の色
ひる皃や喉筋ばつて咲ごたへ

夕顔

夕がほや入相の鐘に無分別
夕皃や已が瓢の色に咲
夕がほや葛さらす家の表垣
ゆふがほの花やはづれし何の切れ
夕顔や紙に漉たき花の色

蟬

いかばかり漆しぼるや蟬の聲
赤松に見分られねど蟬の聲
素麪の二尺垂る間や蟬の聲
竪に水流るゝ杉や蟬の聲
石車地にめりこむや蟬の聲

暑

用心の堅い住居のあつさ哉
石垣に鼻のつかへるあつさ哉
金屏に二十五菜のあつさ哉
裸身に鋸屑かゝるあつさ哉
いろ〳〵の物飲んで見るあつさ哉
眞赤なる海道へ出るあつさ哉
蟹の眼の抜出る濱のあつさ哉
行廻りては打轉ぶあつさ哉
そへ聟になつて一間のあつさ哉
戀にせし夕暮凪てあつさ哉

蓮の花

喰ふて寐て佛もならぬ蓮見哉
咲時に水もこぼさず蓮の花

古柳亭を訪ふに、夕可庵の旧地その邊りに見へる斗成ければ

香を傳ふ道の隣や蓮の風
蓮さくや日に諸菩薩の山かづら
君子には危き蓮の咲どころ
此娑婆にかゝる夜明や蓮の花

石菖

石菖や後家の鋏の一戰ぎ
石菖や鉢に造りし十二峰

太藺

涼しかれ〳〵とて太藺哉
横に降り横に吹てもふとゐ哉

曲らぬは君子の池の太藺哉

凌霄　鐘も湯になれとさがるや凌霄花

葛の花　咲うちはまだ表なり葛の花

鐵仙花　鐵旋の花や雛の破れ草

唐かみの引手にもあり鐵線花

氷室　仙人になる氣も付ず氷室守

一日の飯をたばふや氷室守

だまされてまぼろしの世の氷室哉

嘉祥　物安きむかしゆかしや嘉祥餅

夏籠　夏籠やほどよく貰ふ麥袋

安居　貸本や筆やとり巻安居哉

富士詣　雲も風の垢離や日和の不二詣

浴衣から晴る雲ありふじ詣

葛水　葛水やよしの丶雲を一茶碗

くづ水や影の手にみつ夏の月

葛水やまだ醉覺の裏の紫

補　さゞれ石の丹精清し道明寺

道明寺皿鉢に冬の渚かな

水飯　水飯や腹は悟つた心もち

水飯やゆめの覺たる一味禪

瓜　剝ぐさきに空色涼し眞桑瓜

斯うむけと筋迄引て眞桑瓜

市中に香の横とふや眞桑瓜

馴安きあすは檜木や籠眞桑

市中は嗅ぐ鼻多く早瓜哉

胡瓜　取あへず臂かひて見る胡瓜哉

大津繪の彩色見ゆる胡瓜哉

這わたる閒にちぎらるゝ胡瓜哉

掛香　掛香や寐覺に梅の咲たかと

掛香やうつゝに如來きますかと

竹婦人　ある時は猫も入けり竹婦人

寐た肌の冷たいもよし竹婦人

うなされて取つて押へつ竹婦人

襁褓干す晝を恨むや竹婦人

(但二)

旄想して見喰れけり竹婦人

籠枕　忘れ安き耳又涼し籠まくら

抱籠　蹴飛して冷しては又抱籠哉

簟　松風のうへに臥夜や簟
さゞ波に寐たる餘情やたかむしろ
蚤に夢の雪折れもなし簟

帷子　帷子の朱鷺の羽に透く夕日哉
かたびらやさはやかに着る風一重

辻が花　着せて出す親の欲目や辻が花
さらしても草のゆかりや辻がはな

汗拭　汗ぬぐゐ引れた袖の餘りかや

晒　直なる艸とて涼し奈良ざらし
たはれ男も杵を媒や晒搗

夏野　横に出て來る人凄き夏野哉
馬ともに人の香るゝなつの哉
たまさかな風を息とも夏野哉

夏山　山〳〵や富士から雲の蚊やくばり
木〳〵負ふて臥まろびけり夏の山

青嵐　吹く果は波と遊ぶや青あらし
葛の葉の麁想折〳〵青あらし
雨運ぶ汐先の空青あらし

薫風　船つけて晝寐には又薫る風
濱を前寺をうしろやかほる風
乙姫の袋やとけてかほるかぜ
橋の小島が崎やかほる風

納涼　國一ッ湧出る舟のすゞみ哉
鵜の眞似の淺瀬に老のすゞみ哉
人中を猿にも見せる涼み哉
寐た形りで轉び落たる涼しさよ
涼しさや一ト艫に走る山幾つ
すゞしさや月の光りを浴て居る
きのふ出てけさ戻りけり夕涼み

題二大工一
引手から出る浪涼し清鉋
我が內に吹風置て夕すゞみ
夕すゞみ厄介背負て戻りけり
往來する品定せん門すゞみ
合圖したやうに落合ふ涼み哉

清水　岩一ツ歯の根のゆるぐ清水哉
立寄れば蛇の横切る清水哉
吸ひ筒に入替て行しみづ哉
眞ッ立て清水の中の清水哉
山路來て佛に逢し清水哉

泉　菊の香も有たきものよ湧く泉
何所ぞでは銀吹出さんわく泉

虫干　虫干や今入らぬ物みな寶
土用干女を入れぬ一間哉
木の陰へ祖母一トむしろ土用干

雲の峯　雲の峰糊の利たる日和かな
くものみね立草臥て腹ばひぬ
家根舟に爰赤キ壁や雲の峰
水かけて見度もの也くものみね
風のなき國から立や雲の岑

白雨　夕立や打割て行松の琴
夕立や行にはげみて尻しらず
天地の日和を盗む夕立哉
白雨や鯉登るかと一頻り
夕立や黒髪亂す山の相

夏の月　縁へ出門田へ出てなつの月
須磨明石這わたる間や夏の月
蘇生る人聲しばし夏の月
水にひてゝ千度上たし夏の月
みづ賣の我物顔や夏の月

御祓　歸る迄心のひまな御秡哉
流したと思ふをすぐに御秡哉
麥飯に五臓の走り御秡哉
金かしよつれなさ流せ夏はらい

茅の輪　何べんも鵜飼の潜る茅の輪哉

畫贊之部

松に猿猴の下りたる贊
ふらこゝは人にましらの涼み哉

柳に清水西行之贊
柳かけ清水に足を活しけり

丹波國水澤寺鐵聞和尚畫、杖ニ拂

子贊

虫ぼしや悟た禿の古道具

猿龜に乘贊

乙姫に呼れて行や夕すゞみ

巣父許由贊

瀧よりも一ト意地づくの友凉し

文臺裏書

動かぬと動くと二見くものみね

二祖斷腕の贊

さつぱりと片枝折ば月凉し

六祖の贊

碓にしらけて凉し胸の月

瓜に鼠贊

猫の目の闕やしのびて瓜畠

杜若に傘の贊

傘かりた詞の橋や燕子花

岩に竹の贊

念力の岩を通すや今年竹

雨に時鳥の贊

山を出る淸めの雨や時鳥

慶賀之部

人の許へ立身を祝ひて

ゆたかさや門は牡丹の鞍餝

孤螢改名

誹諧は連哥より出て、しかも連哥によらずとかや。

名も聲も（筑）波に習へ時鳥

八十賀

八の字を車につむや蝸牛

茂楓改名

植かへて一ト家根ふくや若楓

初幟を賀して

尉が代の板行久し紙幟

六十一本卦返り加增ありし賀

六十圖加へ積なり車百合

今年の皐月、土水の二性有卦に入さかや、我も其數に祝ひ、はた五十ぢの賀を述侍る。

夏桃をうけばや袖に又五十

李郭親父七十賀

夏桃や西王母から七車

新宅の賀　雪月花文あり

雪は嘸涼む月夜を宿の花

南臺七十賀

矩越ゆる七瀬幾度夕すゞみ

石漱剃髪賀

捨心涼し欲垢髪あぶら

桂洲万句賀

歌口の世にひゞくべし今年竹

餞別留別之部

竹阿九狢行脚餞別

時鳥ゆけ天晴の文字赤間

留別

行〱子程聞たしや跡便り

常州久下田千賀餞別

道の記の料紙に咲くや白牡丹

布川の人〱に謝す

草臥ぬ駕の榮耀や蝸牛

鴻の巣布袋庵にて

撰り溜の袋さがさん麥の秋

練戸奥州へ歸鄕の賀

舞戻る笠のかろさや風車

布袋庵留別

夏の日も馴染ば足らぬ別れ哉

蓼太松嶋餞別

涼しげや頭陀も月見が崎の秋

挨拶

咄ばや百日紅を夜にも灯し

神祇釋教之部

結ばぬを神の吟味や筑摩鍋

煮しめには蒲鉾もあり祇薗の會

雷石を鞭うつさかやは唐土の事、吾日の本には、一言祈れば其しるしある、異石あり。

打ずとも石尊サの夕立かな

秋葉奉納

紅葉する奇特もやがてわかば山

社中の誰かれ、天滿宮社頭へ額を捧奉るを壽て

かけて待恵みの露やわか葉陰

水戸城下観音奉納
鳥も巣立つ大悲の陰や夏木立

不動尊奉納
暑さ涼しさ心の色や兩童子

湯嶋天神奉納
夜學にも初いなづまや神恵み

坂東札所四番、立崎村龍藏寺古木
櫻
涼めとの千手の枝やさくらかげ

下總法花寺日蓮奉納
世に薫る衣の玉の青柚かな

新田大明神奉納
涼しさや利生は早き箭の如し

十奇大明神奉納
むき立て瓜一トかしら青幣

懐舊追善
馬光老師七回忌
道涼しけふ七度の苔の華

六月廿五日東登齋遠行之由文通有
蟬も聞け鳴く音に煮へる我泪

闘了追善
糸切れて裳ぬけの蚊やや無東西

馬光老師十三回忌
橘や肱に摺たる卓の跡

朝霞子亡父追善
岩鼻も清水にすゝる泪かな

最愛の子におくれて、萬事忙然た
る夢内にも其俤は
卯の花にそれかと余所の子の笑ひ

雪丸追悼、五月四日なれば
はかなさは葺かで枯たる菖蒲哉

俳友合浦の柔雲、老母の裳（喪）に籠れ
るを
哀さに兒も見上ず百合の花

上總海龍寺臥雪追善
さつぱりと五蘊崩るゝ牡丹かな

老獅一周忌 前略

笋や此人にして折るゝ事

今年は老師十七周忌にめぐり來たれば、古連の同士ともに、墓所にいさゝかなる竹の垣を結びかこひ、松一もとなも植そへて、貧女の一燈にもとおもひ寄侍りぬ。けふや法莚の靈前に初めて、雑の句なさゝげて、懐旧の余情を述

谷の戸や雲ふり向ば十七里

先例之ごとく、今年、株青ずに馬光忌を執行して

墓にけふそゝぐは元の清水哉

泥山子の別号にもとづきて

泥の山仰ぐなり夏木立

今も見るや浮葉卷葉の繪讃數

墨直す蝿や硯の行もどり

松かげの深し硯の磯の波

觀ずれば松答へけり馬光の會

夏之部終

穐之部

目録

素丸發句集（秋冬）

初穐

秋立や池から風も澄で來る

秋たつや沖行雲のそゞろなる

葭垣に宵の團扇や今朝の秋

あさ皃のもの言はぬばかり今朝の秋

秋立や起て箒のさへごゝろ

初秋や木陰〳〵の風の味

水からや立けん今朝の秋の風

はつ秋やゆふべはいづれ錢の裏

一葉

分別を切て投出す一葉哉

正直の梢は今朝のひと葉哉

とり納むものゝはじめに一葉哉

散柳

しだり尾の木も鳥屋時かちる柳

かつら向入らぬ時とやちる柳

七夕

夕月のさしかけ傘や女七夕

まだ宵の世は曠がまし天の川

野は艸の心〳〵や星まつり

葛ならぬ裏や八日の天の川

手操よる莚や願の草の糸

三布よりも芭蕉葉かさん星の床

葛水の百筒の池や錫茶わん

寐よかれと世を冷しけり天の川

盡せぬは空を鏡や星の床

殘暑

駿河丁本丁ながき殘暑哉

朝夕をちゞめて晝の殘暑哉

船は夜に數〳〵殘るあつさ哉

秋風

秋風や一ト桶打つたしめりより

黍の葉のさゝら摺る也秋の風

起ごゝろかろく成けり秋の風

蕣

朝皃や晝は袋の口かゞり

あさ皃や蔓に齢ひは持ながら

蕣や松と竹とにからみても

朝がほやあしたの事はいふなとて

朝皃のいたまぬ霧の如雨露哉

ひや／＼と朝皃水に咲にけり

あさ顔に水鶏ありたき朝寐哉

寄葬戀

あさがほやきのふの湯女は古さるゝ

葬の人を見はづす人若し

あさ皃や私の影あたへても

葬や酒を酌みたき花の形

踊

たち並び花野の伊達の踊哉

振り落す髭をもしらぬ踊哉

なびく手もくねる手も有踊哉

奥の手の岩戸を出るや伊勢踊

帶むすびやる人にくき踊かな

蘭

蘭の香や何丸どのゝ學文所

浪花の世交公の許より、寒製の玄

雲ふたつ給はりし拜謝し奉りて

蘭の香にけおされて筆のおよぎ皃

篁の手をかけものや蘭のはな

蘭の香や夜はやま姫の臥し處

蘭の香や爰第一の山の裾

女郎花

月夜程わらひは白し女郎花

袖にふる葉さへすげなしおみなへし

二重ふく風にすねるや女郎花

吹しほる腰の細さよおんなへし

わけまよふ蕊もあるを女郎華

桔梗

咲中に家中めかしき桔梗哉

萩

しら萩に雨の寒さのうるみけり

白はぎやあつめて露の花盛

露ともにかぶつていたし萩の花

月をよぶ式部に似たり萩の花

脛見せぬたしなみ深しはぎの花

つよからぬ蹴出しや萩の一戰ぎ

間違ふて犬の出けり萩の花

芙蓉

欄干にちかくかしづく芙蓉哉

芙蓉さく日とや曇りもつよからず

背に四十ぢの皺のふよふ哉

秋海棠

あま肌に風のしみるや秋海棠

針で血を絞りて見たし秋海棠

曼珠沙花　捨曲突の春やむかしにまんじゆ沙花
曼珠沙花狐の嫁入に灯しけり

丈菊　丈菊や日におひまけぬ花の首
丈菊の花や淵明がさかな鉢

木槿　咲捨て翌の慾なき木槿哉
あさ皃を笑ふ間に暮る木槿哉
けふは又けふの工夫の木槿哉
一日は木の意地でもつ木槿哉

靈祭　靈まつり奥歯に物の淋しさよ
靈棚やおもゐ艸また忘れ草
たま祭三夕暮をはじめけり
靈棚や細工過たる苧から垣
夕暮の人しづまりぬ靈まつり

燈籠　裏見せる風に裏なきとふろ哉
千種みな夜花咲てとうろ哉
くり言のまぎれ種とや花燈籠

指鯖　さし鯖や庖丁さびる越の塩

生身魂　紛らはし佛のまへの生身魂

蓑虫　みの虫の音や子なりけり鹿よりも
みの虫や乙はゝその森に啼

蟀　蟀や髭より聲の細く寒し

秋の蝶　こまかへる艸の遊びや秋のてふ
女郎花にや染りけん秋の蝶

秋の蟬　世のほどもしらで誇るや秋の蟬
行秋の杉につく〳〵はうし哉

渡り鳥　空に聞流れや鳥の渡る音
其中に四十五十も小鳥哉
下り所の得報果報やわたり鳥
椋鳥の羽音や松の風二タ重
着かへても摸様は同じ渡りどり

梟　梟や渡り初めは頭陀ぶくろ

木兎　耳づくの無一物なる晝寐哉

虫　明がたは霧と登るや虫の聲
夜は野のあゆみ來るかと虫の聲
艸のうへ風の下なりむしの聲

斯あれば武藏野狹し虫の聲
虫の音や笛と太皷のない斗り

蜻蛉
とんぼうや急に干上し羽の皺
とんぼうやなめて紅葉ぬ木ゝの露
艸に倦て大地にひらむ蜻蛉哉

蟷螂
蟷螂や何を敵に斧二挺
蟷螂や追れて向ふ捨車

螽
一群に羽に霧立ていなご哉
相たがい穗で穗を拂ふ螽哉

糸瓜
行秋に五臓の見ゆる糸瓜哉
編出しもあみとめもなき糸瓜哉

艸
遠廁もとの渡を蕊ぶくさ

葎
そく聖窟ぬ火もれたり八重葎

稻の花
何神の見出し初めけん稻の花
寐て見るは勿躰なしやいねの花
万倍の露で返すやいねの花
まめやかに一粒づゝや稻のはな

粟穗
杵遣ふそよぎもありて粟穗哉
己が欲に腰を折らるゝ粟穗哉

茜堀
そめ色の山の麓や茜ほり
美しき石拾ひけり茜ほり

新米
粉に成りし骨肥らせん今年米
一鉢も釋迦も微笑や今年米

西瓜
小たゝきに色を問よる西瓜哉
窓明て膓覗くするくわ哉
小笠原出して喰れぬ西瓜哉

葡萄
愛敬の色なる波や櫚ぶどう
夜〱月の雫や凝て葰ぶどう

秋の山
欠びする時か雲はく秋のやま
笑はぬも一位けだかし秋の山
分別の居りにけりな秋の山

秋の空
氣儘さよ其日〱のあきの空

花火
年寄の隣りをそしる花火哉
身の秋を穗に出て見たる花火哉
下陰の吹雪はこわき花火かな

八朔
八朔や御製の露の置所

手枕の作りとり有田面の日
八朔や狀のしめりの青俵
八朔や鵜も腹のはつた聲
繪行器の往來の富や今年藁

相撲

一ト拍子ぬけて笑ひの相撲哉
負た時にも地の震ふ角力哉
撫上て猛き腹なり角力取

雁

棹に成り筏に組んで渡る鴈
はつ鴈や雲に水氣の滿た朝
初鴈や空にしらるゝ秋の道
はつ鴈やそはついて田に片付ず
雁來るや袷かさねの濕の雲
初鴈や小社通す雨後の風
はつ雁に帆をくるみ寐の夜明哉

稻妻

いなづまや寐鳥を卷てとらんとす
稻づまや寶藏の戸の開くかと
いなづまや晝て見せる九折
稻妻に休めと雲の消へにけり
いなづまや仕かけする間は余程づゝ
稻妻は呃りの出る間かな

初嵐

丹波路へ伯母の戻りやはつ嵐
照りつめた其返報や初あらし
起て居る艸は何〳〵はつ嵐
秋となる膂のかためや初あらし
いましめの杖や草木にはつ嵐

野分

一むかし見たる野分のあした哉
古家を隣にもつて野分哉
晴嵐の漁村なくなす野分哉

待宵

宵月や松はあしたの居へ所
まつ宵やあしたの事は秋の空
待宵や女にも盞〻の品さだめ

名月

風も波をなだめしもふてけふの月
名月や一しきり夜の明るかと
葉落てもさくら定んけふの月
　猿江の猿池といふは古跡なるを、
　しる人もまれ〳〵成りしが、此秋

は聞すまして、今宵四五疊さ杖を曳て

名月や池にもひとつ月の面ッ

新奇を好む人をいましむ

新らしき道からも出ねどけふの月

入る迄は人にあづけて月今宵

名月や夜更は水に居る心

名月やわが國ぶりのすゝきうり

影は瀧と流れあふれてけふの月

名月や水の中なる哥舞の聲

名月やさがし當たる鵜鮓

花よりは歩行かで濱の月見哉

名月や更ても色はうつろはず

雲がくれせし人算ふ月見哉

名月の眞ッ中なれや清見寺

名月や奪ひ返して芳野山

富士少しよけて通すやけふの月

月見せん一陶有すみだ川

小溝まで水鯹し月今宵

猿が餅かへて入日やけふの月

名月や日を汲こぼす水車

十六夜 いざよいや前彈濟で雲を出る

十六夜や雲も一夜の老の皺

駒曳 駒引や髪もおどろの艸いきれ

駒引や尻を怖がる岩傳ひ

放生會 放生會子どもにいとま放しけり

山崎の翌日は穗拾へ放生會

尾花 風の道しるや尾花の片ひづみ

里へ〱と吹向ふ尾花かな

沖の日に手をかざしたる尾花哉

風を取迯した形りの尾花哉

薄 月乘せる撓み忘れぬすゝき哉

初汐 はつ汐や月もあふるゝ三保が崎

はつ汐や蟹ののさばる畑の中

初汐や飛れぬ老を孝行ぶり

落し水 鷺に鼻明せて淋し落し水

竹の春

落し水是も半季のいとま哉
野分から骨は堅めて竹の春
紅葉する木にたてあふや竹の春
虎の口の晴るきほひや竹の春

夜蛤

仕切場の妻待受や夜はまぐり
泥町の未だ寐ぬ聲や夜蛤
手品にも升の滿干や夜はまぐり

蛩

夜着出した跡に笑ふやきりぎりす
蟋蟀我も木賃の裾寒し
鳴止むは夢つゞる間やきりぎりす
酒藏に居ても寒いか蛬
かくれたり般若の櫃にきりぎりす

鶉

その聲も尻の切たる鶉かな
粟の穗も震ふうづらの高音哉
海よりは心のさえや朝うづら
喰過て聲立かねるうづらかな
梶原が公事聞聲のうづら哉

鳩吹

鳩吹や是からものゝ枯るゝ聲
鳩吹やおのが頰骨吹細め

鴷

啄木鳥や釘に當つて恨顏
きつゝきや胡桃も榧も有ものを
啄木鳥や常より凄き貴船山

初鮭

初鮭の荷や銀さびの夜明ごろ
はつさけや松魚仕かへす川の意地
はつ鮭や淀まぬ旅の松戸馬

鱸釣

鱸釣やひねたる形の行もどり

鯊釣

鯊釣や芦分て三人ふたりづゝ

紅葉鮒

紅葉鮒瀬田の夕日の染にけん

小鰯

小いわしや金もる網の夕日影

芭蕉

張笠の音きく雨の芭蕉哉
しいし目の狹さに裂るばせを哉
窓に吹風も防がずばせを哉
其儘に額に懸たき芭蕉哉
今朝見れば長柄の橋や破ばせを

柹

三日月もさはらば落ん熟柿哉
澁柹を嗚呼と鳥も歎じけり

澁がきや大の男の杵の音

柚

切口もいさ白きくや柚の薫り

胡桃

山がらの思ひくだくや姫くるみ

穗蓼

藍の花よりはしこさや蓼の花
飼家猪の鼻吹音や蓼の花

蕃椒

辛ひには天井もなし唐がらし
金平を泣せた種に唐がらし
美しい色で怖ろし唐がらし

木綿取

とんぼうにそれる手も有木棉取

蕎麥の花

己が雪にさらし上てやそばの花

新蕎麥

新そばや行水疊む重の内
しんそばや刻む日毎のさゞれなみ
新そばや看板ばかり月の色
しんそばや運さぬ膳に落し水

案山子

かゞし作る家も雨月の謠かな
捨たるもの捨たらぬ御代のかゞし哉
吹折て今朝は背むしのかゞし哉
いなづまの矢面にたつ案山子哉
辛苦する其形代の案山子哉

鳴子

腹立た時手のさへる鳴子哉
いたづらも夫としらるゝなるこ哉
輌痲する聟へもあたる鳴子哉

霧

宇治川や夜を打碎く霧の波
影行かいや幻か霧の人
薄くもる山〳〵澁し朝の霧

露

急がしや登るにせかれ落る露
白露や刄をわたる葉のしなひ
取ためて鏡磨かん艸の露

置扇

起〳〵や蚊やにくるまる置扇
秋の雲起つてからを置あふぎ
書畫すでに屏風と成ぬ捨扇

秋の夕

溜め息の石も徹すや秋の暮
かんこ鳥鳴物ならば秋のくれ
泰着りたるこらしめや秋の夕
何となく入うつむくや秋の夕
目をわたる曇りかぞへて秋の夕

秋暮有幽情と言一句を得て、いまだ足らねば

なきやうで何かものあり秋の夕
世に喩ふべきもの更になし秋の夕

三日月

有時はあふぎに乘せて三ケの月

初月

初月や影まだしまぬ地のくもり

菊

當世の隱者咲けり菊のはな
さかづきを鎔に咲やきくの花
九日とは程しるきくの齡ひ哉
浮た事しらぬふり也きくの花
きくの花奈良の古風の殘りけり
さま〳〵の名も人柄や菊の花
又類ひ一荷の菊の小口かな
其相のおもふくら也きくの花
單過給過けふの菊の八重

後の月

澗の水居りけり後の月
名月の后やきくに後の月
鴨の音に側り減らして十三夜
世の空のつましくなりぬ後の月
見くらべん今宵を須磨に十三夜
女郎花ふけたり後のかつら影
膝に猫火桶に替ん後の月
雲かゝる見上の鐵や十三夜
醉ふてから障子を明ん後の月

砧

夜をかさね月を打かく砧哉
折〳〵は鳴子にからむきぬた哉
一夜づゝ梢をからすきぬた哉
松風のあらく聞ゆる砧哉
紙を打ゆふべは淺し小夜砧
假りそめも都を向て砧哉

長き夜

永き夜や覺れば男ほしうなる
かなしくもおかしくもなる夜永哉
灯火に算盤あてる夜永哉

野菊

市女笠着て行人に野菊哉
寐たければ寐て咲たけりや野菊哉
鉢の子の米に生たる野ぎく哉

花野　遠く見る所を命のはな野哉
　　　行ぬけて山から見れば花野哉
　　　朝夕は雲にうつろふ花野哉
　　　二三尺上にのみある花野かな
　　　いづれ皆神代の染や艸の花
鷄頭　鷄頭やいつをさかりの日勘定
　　　織姫のお召おろし歟葉鷄頭
　　　鷄頭はみな伊勢方の出立哉
　　　鷄頭や扇子の形りはまだ捨ず
　　　百日の行とて強し鷄頭花
梅紅葉　櫻より酢の過たりや梅紅葉
櫻紅葉　秋とても唯居ぬさくら紅葉哉
末枯　うら枯や隈〱の水澄かへり
　　　末枯や靑き畑は十分一
　　　うらがれや段〱人の吝くなる
紅葉　似る雲のいたづらもなし山もみぢ
　　　はつ紅葉遠山松の透間かな
　　　又伊達にとほけて返る紅葉哉
　　　花よりは人そはつかぬもみぢ哉
　　　其山の茜を吸ふて紅葉哉
梅嫌　鵯の目も未だ枯れず梅嫌
　　　紅葉せぬ葉とすれ〲や梅嫌
木犀　木犀や降神香を吹ちらし
瓢　淋しさに頬ふくらして瓢哉
　　　ある人の尻のうわさや種ふくべ
　　　何になる果とて長きふくべ哉
　　　腹形りは子ゝ孫〱のふくべ哉
　　　所〱灸の跡あるふくべ哉
茸狩　飛車に行桂馬に飛や茸がり
　　　枯た葉に費な手あり菌がり
　　　松にすがり片手さがりに木の子哉
　　　拍子よくころんだ手にも木の子哉
　　　茸狩や引まくり行山の裾
松茸　まつ茸や傘に受たる松の露
　　　松だけやむぐら持上る土加減
澁鮎　さび鮎や今は紙衣にもまれ行

鮎も染れ草の葉のさび水の澁
さび鮎や早瀬に負る取廻し

鵙

尾の反を聲にも打や鵙の聲
今朝はまだ木ゞ角ド立ぬ伯勞の聲
ずん切の聲朝寒し竹の鵙
鵙なくや笑ひけうとき小傾城

鴫

何おもふ田水の月に鴫ひとり
淋しいと走りて見るや鴫ひとつ
鴫たつや淋しと蟹も眼を拭ひ

鹿

行秋にすがれて細し鹿の聲
曉は胸もさけよと鹿の聲
はら卷を徹して悲し鹿の聲
酒一升呑んで聞てもしかの聲
鹿鳴や葛のうら吹夕ドより
琵琶とても調べ及ばじ鹿の聲
鹿聞て行燈急にかすかなり
谷へ渡す心の橋やしかの聲
思ふ程屈かぬものか鹿の聲

新酒

夕暮を味かたに出たる新酒哉
末とげぬ人にたとへて新酒哉
神奈川へ持たぬ戸塚の新酒哉

冬瓜

よい程に我霜置て冬瓜哉

南瓜

ころげじと裾廣がりに南瓜哉

秋茄子

何ねたむ槃若の口や秋茄子

木の實

七かます市へ一木の木の實哉
童ドのよい錢拾ふ木の實哉

柘榴

折る兒に吹かけ顔の柘榴哉

栗

落栗や鬼の口からあまりもの
おちぐりや更る庇に狐かと
いが栗のさし出す竿に怒り哉

柚味噌

どの祖師の工夫に出來て柚味噌哉
所化寮の二日一釜柚みそかな
傳法の加味も廬山の柚味噌哉

夜寒

色〳〵の具合の違ふ夜寒哉
苅上た田から初る夜寒哉
痒き虫の紛れもなくて夜寒哉

肌寒

肌寒や縞に月洩る板びさし

はだ寒や日の落かゝる山の風

肌寒や霧雨暮る馬の上

柿榲柑酔ふて浮世は肌寒し

秋の雨

鮓そこなふ醤油も佗し秋の雨

火鉢抱て身を片付ぬ秋の雨

椎樫に庵も壺中や秋のあめ

酒呑ぬ家に倦れつあきの雨

露時雨

東雲や八十坊の露しぐれ

鳥立て魚おどろくや露時雨

行秋

南天の實に鵯や九月盡

胡蘿蔔に紅葉とられて行秋歟

蔓ものゝ裾をからげて行秋ぞ

居風呂の口切そめつ暮の秋

さもと見る鳴さへ秋の行衛哉

持て來た淋しさに倦て行秋歟

閑居の秋

初汐の蔽ては行折戸かな

素風假庵にて

漏入て奥ある月の住居哉

病中の吟　委合一册あり

簑虫や粥焚くほどは樵らせず

楚茗へ挨拶

つゞりため聞ばや今宵きり〴〵す

推敲菴の額裏書

おし敲く心察せよ小夜きぬた

素川亭へ招るゝは文月五日、七夕も近ければ

むかはれて竪に漕來ぬ天の川

曇華齋の會にまかりしに、おもわずも杖た惠まれ侍りしに、即興に謝すのみ

千里遊ぶ腰押す杖や竹の秋

房州旅行延引之時、日和乞

神風に吹破りたまへ秋の風

此琵琶は弦は四ツありて糸巻一ツなり。いかさまにも壽永の亂に紛失しけん古びかなゆかしきかなや

經政の調べしまゝか松の秋

胡麻売や矢筈にはいでいかめしき

戸ヶ崎八景之内　常樂寺秋の月

凡煩(煩惱)の胸澄月や常樂寺

大山八景之内　鎌倉夕照

大鉢に盛る夕照や秋かつほ

幡ヶ谷不動の邊りにて

染はやき爰に紅葉の葉月哉

高尾山

霧深し今朝迄夢も七曲り

高尾山天狗櫻の句を乞れて

おそろしき山や櫻の霧くもり

琵琶の瀧の句を乞れて

木兎の觀じて聞や琵琶の瀧

甲信記行之内

富士しらね献立そろふ月見哉

同大木の柳ある所にて

柳陰しばしあふぎも忘れ川

同音取川にて

瀬〳〵つよし夜更は虫の音取川

同笛吹キ川にて

小男鹿の笛吹川や幾めぐり

同稲中庵門下の二橋子に始て對して

からみ合ふ枝のゆかりや道の萩

正法寺に一夜を明すに、翁の庭掃て出ばやと申されしを思ひ出て

掃殘し拾はん寺の栗の毬

甲斐の山〳〵目前に横ほりふせれば

山〳〵や童のむきしつくねいも

教化石にて

とんぼうや立かねて居る教化石

穗屋大明神の神前、石垣の上にはせを翁の牌あり。雲ちるや穗屋の薄の句有

我とても穂屋のいなごぞ飛めぐり

信州上諏訪朱雀亭

菊と酒の香をしたい來ぬやつれ蝶

曾良の後裔李郭の許にて、翁の眞跡餘多一見して

藥艸の根の薫りしる花野哉

祖翁北國行脚の日記を見て

この日記や嚙でくゝめし筆の露

素鳳と云名を送るとて

俳諧に鳳凰となれ葉鶏頭

唐澤法岡山阿彌陀寺にて湖水眼下に見ゆれば

唐澤や爰洞庭の秋日和

湖水眺望

美しや湖水の咲る秋のなぎ

甲相記行の中

物淋し木の子と替る星かぶと

唐柏盛來亭へ着、今日は歸路に赴んとするに、盛來の主人ひたすらに止めて、是非に一夜の宿をなんなどいへるに、唐柏に泊りて

行杖をからみとられぬ蔦もみぢ

箱根路途中の吟

岩からむ杖もぬきたや箱根越

記行之内

汗ながら休めばさすが秋の風

眺望

瓢程に江の嶋黑し垣のうへ

名月の影のあまりか二重瀧

素眠より鰹を送

庭に痩し腹若やぐや秋かつほ

山里主人の前栽なる落栗を拾ひて

拾ひぐり子を思ふ猿の土産哉

奥戸觀月庵にて

硯にも救世あまねし芋の露

同室戸杢之臺　辭文略

又類ひ月に一トはけ杢目雲

出水をのがれて要津寺に宿す。爰

にも水押上て、庭の面渺々たり。
此庭に富士をまねかん秋の水

餞別留別

千亮餞別
追々に問ばや雁の跡たより
日夜庵歸鄕餞別
彩色はすとも忘るなきくの宿
三笳五雷古鄕へ歸るを送る
わすれずば八ツ橋わたせ雁の文
甲州記行之内素英留別
待たまへ土産に不二と十三夜
朱雀主人此ほど淺からぬ饗應、つさ〳〵心を添られし事ども、更につくしがたく、わらんじはきながら
禮言はゞ湖の水あきのくも
素柏素鳳主人え
假着にも名殘はつきじ菊の露
甲相記行之中素明亭
着て行や厚き情をきくの笠
大山の人々に別るゝとて
身にしむや我さへ雲の山わかれ
田村の人々に別るゝとて
老て行鮎の名殘や田村川
房總記行之中留別
恩は濱の眞砂に盡じ歸る雁

慶賀之部

古稀の賀　德布父は三河なれば
七戻り八ツ橋越へん藜杖
養子を得られし人を賀して
實入さぞ繼木の柿の榮へ哉
初て彦孫をまふけ侍りて
珍らしの彦ほゝ咲や菊の千代
蓮花院八十賀
幾八重もからみ留めばや蔦紅葉
天元聖寶の古錢を拾ひし人に賀を乞れて
一錢も千箱の秋や鼠算

畫贊之部

二見賛
陰陽の二見や神の清の秋

不二賛
置綿の雪見る不二の九日哉

沖の舟に帆掛寄夢想書贊
寄せ來るや諸國の秋の寶船

畫賛
瓢から出た賤野菊の花の紋

葡萄賛
とんぼうの目にくらべたるぶどう哉

紅葉を焚仕丁酒を呑贊
餘念なや顔も紅葉の御傘持

山水の贊
哥よりは詩に痩たりな秋の山

菊兒童贊
倭漢の書に、此童子の事見へず。ばせをの精、女と現ぜしに託して、何人か菊の精作り出しけん。
菊の兒狩野家の手より育けん

案山子に鳥畫贊
君が代は鳥驚かぬかゝし哉

月に雁声の贊
初雁や塒見立る江の月夜

芋莖の贊
葉に延て根に心なきずいき哉

俵に打出小槌
舟まつや打出の濱の年貢俵

伏羲の像
伏して小田の雁に八卦の工夫哉

北祿神玉を持贊
壽の玉得し菊の莟かな

獅子の子投の贊
薯蕷のむか子をためす岩根哉

虎の子渡し贊
工夫して虎の子わたす秋の水

布袋蹴鞠贊
指さゝぬ月や蹴上の秋の夕

唐子團扇の贊

團扇に撰蝶もなし秋の夕

狸の腹皷打贊

秋ゆたか狸のつゞみ聞夜哉

芙蓉の贊

流しめも玉光る歟木芙蓉

芭蕉翁贊

稻妻や仰げば高き道ひとつ

鴫立澤に西行畫贊

鴫よりはうしろ姿ぞ秋のくれ

座頭ひとり、木はしをわたる贊

きり〴〵す這ふや嵐の丸木橋

猫・狸・狐・の踊畫贊

佛氏の方便も老莊の皷舞も、世に人をあやなす噓ながら、そのうそも早古しさ

よしや世を化して廣し己が秋

（補綴）北條時賴、諸月に書を讀贊

世を惠む靈苻讀らん月の前

名主の贊

名に富ムや百挺鍬も軒の月

柳に牛の贊

心合ふ遊びは牛と柳かな

猩々の贊

紅葉する慾のはじめや小盃

寒山の畫贊

栗ひとつ拾はで淋し竹箒

布袋袋を負ふたる畫贊

秋とめりせなと腹とに二タ袋

瓶に菊の贊

水かめにおくや小ぎくの活殘し

鳩の贊

親待や二タ枝よけて秋の夕

神祇釋敎之部

牛御前奉納

澄ばこそ神慮も月の綾瀨川

奈良輪山田村明神奉納

汲めやくめ神やどります菊の露

牛御前奉納

秋配る惠みや神の牛ぐるま

金町香取大明神奉納

世に惠むかほりや菊の星兜

新川大神宮奉納

桿かざし俳優(ワザヲキ)舞ん御遷宮

篠塚稲荷奉納

月高く帆柱揚て宮うつし

諏訪上社へ參詣

捜し出して鵙の早贄備へばや

佐久野神社奉納

あらがねの芋も氏子や此惠み

追善之部

默齋先生十三回忌　文略

思ひ出す恩よ涙よ露のかず

鬼丸ゆかりの人追善

黄金の肌に返るや女郎花

琴長歸人一周忌

めぐり來る目尻の露や花芙蓉

宗瑞七周忌

友戀し月うつむく事七度

蛙水一周忌

菊月や苔む泪の一トめぐり

甲の琳鯉追善

秋つれなしなど此人をさそひ行

蓼太三周忌

くりかへしいとゞ鳴なり三部經

民志息利名追善

盛りすてゝ行人はかな菊の水

伊豆素健父追善

手をあてし柿も梢をわかれ哉

素堂忌

雁もけふ初音の松や素堂の忌

蓑虫の辭やけふの千部經

良夜絢堂の會にまかりて、黒露の著まか十五夜を熟覽するに、其日は素堂叟の忌日なれば

此翁下谷に月を見果けり

素堂忌の夜話に德あり摩訶月見

感應寺深川の月それながら

秋之部終

冬之部

目録

素丸發句集

初冬

冬たつやはやくも霜の髭鏡

初冬やしらぎく恨み葱白し

時雨

濡がみに日は包まれて時雨けり

こちからは琵琶であつかふ時雨哉

雲折〳〵溜めてはこぼすしぐれ哉

　時雨十哥仙の内

八景を能はあしろふしぐれ哉

麓より遠く遊ばぬしぐれかな

山を出て船に曳るゝ時雨かな

時雨るゝや日をだましたり透（賺）したり

一ト時雨翌をたはふや嶺の松

けふ斗水に綾ありはつ時雨

皺ひとつけふはまふけぬ初しぐれ

樫の葉の髭こほるゝやはつ時雨

海山に一ト錆浮きてしぐれ哉

旭にもいざよふはあり片しぐれ

いろ／＼に人をくるはす時雨哉
袖を出てから心ありむら時雨
萩分て来る音細し小夜時雨
山折／＼物の怪付てしぐれかな
私のしぐれは惜し箱根山
妹脊山何を不足に時雨けん
行戻り紙衣ですみぬはつ時雨

冬の雨

さむいやらつぶ／＼重し冬の雨
ある夜半は鍑にもわけて冬の雨
何とやら黒み付けりふゆのあめ

凩

木がらしにいよ／＼杉の尖りけり
こがらしや吹廣げては仕舞かね
凩のはたらき所や水ぐるま
こがらしや富士をめぐりて水の上
凩や日の入空のけば／＼し
木がらしや馬上に赤き使者の顔

小春

礒家堀る鴉の聲や小六月
此日より鶴も拾ふて小はる哉
吹晴て梅に室する小はる哉
貫たきものや小春の日向ぼこ
いつとなく夕日の黄ばむ小はる哉

神送

伸上る松や葉守の神送り
手をかざす猿や梢に神送り
飛ぶ木の葉いづこいかなる神送り

神の留守

腹淋し財布の中も神の留守

爐開

爐開や牛には早き宇治の狀
爐びらきや隱居の金の動く時
爐開や障子を張れば椽古く
爐びらきや半切紙も幾通り
爐開やあぶりこに餅試みる

埋火

うづみ火やかき起す手にうつゝなき
埋火やうもれ木灰に花さかせ
うづみ火や足に小春の日向ぼこ

口切

口切や濁らぬ水の友ゑらみ

落葉

花や實の榮耀も終に落葉哉
掃立た都に麁朶のおちば哉
氣のつかぬ夕凪をそと落葉哉
雨の手をはたいて見せる落葉哉

焚人なき江戸に毀のおちば哉
追ふ人の有よゝにちる落葉哉
一袋森うちはたくおちば哉

達磨忌

達磨忌や虫も答へず西東
だるまきや三千棒の蕎麥の音
達磨忌やこは無功德の硯ぶた
だるまぎや柚みそ一味の舌ざわり

十夜

御迎は來ずと十夜も月夜哉
かたましき隣を照らす十夜哉
小短ひ日はたらぬとて十夜哉
蠟燭に鶴立すくむ十夜哉
寐もせでや餘所の十夜を作り花

御命講

襟元に油のぬけぬ會式哉
かれて行人目を紅に會式
冬枯の世を花にする會式哉
下戸ならぬ餅も咲けり御命講

夷講

夷講鯛の色なる朝日かな
ゑびすこう女房は夢を賣にけり
風を買ふ浪も手打や夷こう
鮟鱇の布袋は來ずやゑびす講
魚賣や山の奥にも惠比須こう

麥蒔

麥蒔や不思儀に拾ふ甚の風
麥まけと雀から貰ふ日和哉
麥蒔や茶筅の露の振り心
むぎまきや身を風よけに山なだれ
麥まきやみやこの手ぶり思ひ出し

大根引

相撲から居へた腰なり大根引
大津繪に書せて見たし大根引
踏直す足はぬけずや大根引

干菜

掛菜にもありて寐覺の荻の聲
囁きに能陰つくる干菜哉

枯野

おそろしき物もみへ透冬野哉
居る鳥の名をさす迄に枯野哉
波と見し草も皺なるかれ野哉
竹つけて馬追ふ音のかれ野哉
くだら野やもんで捨たる化の皮

冬木立 動かぬや誠の骨の冬木立
栽松の工面は黑しふゆ木だち
日の目見ぬ道や常盤の冬木立

枯芦 招きしも世に枯蘆の骨ばかり
枯芦や夜〱に折込む鴨の上

枯尾花 振り切て無ひ袖寒し枯尾花
月の影は思ひ捨ずやかれをばな
蜘の園の綿弓はるやかれ尾花

水仙 何として下界に咲くぞ水仙花
水仙や是より物の氷るおと
波たてに柄杓あたらし水せん花
水仙やまさに淸水の花の艶
水仙やもとより脛は雪の肌
水仙やさのみみづにも片寄らず

吾丸新宅にて
礎の玉動かぬやすいせん花

石蕗の花 淋しさやまだ蠟引かぬ杜衡の花
墓も出て寂くらべるやつはの花
うら枯のおもむき咲や石蕗の花
梶右衛門が細工見よならつはの花
西行の氣に入る花か石蕗の花

歸花 歸り花來た時ほどの人もなし
家柄や不斷櫻のかへり花
もみぢする葉や羨て歸り花
歸り花惠比須に笑ひもらいけり
櫻さへ夢見る物歟歸りばな

茶の花 茶の花に焙爐かけたる旭かな
ちやの花や水を撰まぬちり所
茶の花やその上川の水の色

山茶花 山茶花やみがき芦垣小柴垣
山茶花の石に搔餅ちらしけり
山茶花や片われ貝のちりかゝり

枇杷の花 木〱枯る頃を壽永やびわの花
綿賣の調子も添て枇杷の花

枯柳 曲らぬを裸で見せぬかれ柳
風をのがれ垂尼となりぬ枯柳

霜月五日、大川戸光嚴寺へ牡丹見にまかりけるに、和尚對面ありて、句を望まれければ

冬牡丹 霜の世を見くだして咲はなの王

佳日庵より、丸ぐけの帶を送られしに、かの翁の、活や我れと申されし句を思ひ出て

富や我能帶したり冬ぼたん

室咲 取とめて丹精さくや室の梅

見性も爰の事なり室のむめ

黄花にもまさかあやからず室の梅

鷦鷯 何が足らで年の小藪のみそさゞゐ

藪を出て脇に這入けり鷦鷯

稻妻の鳥と化しけんみそさゞい

鶺鴒 せきれいや百間はしる棟瓦

鶺鴒や飛ぶ時の尾はしづかなり

せきれいの濱を八丁礫かな

笹啼 さゝ鳴や何喰ふてその舌鼓

笹鳴やをのれもいそぐサゝ菩薩

寒 湯を呑んで言傳屆く寒かな

菰のうちに動く達摩の寒哉

簔脫で圍爐裏へ寄ると寒哉

波高き船に米とぐさむさ哉

笹明て時見る星のさむさ哉

紙衣 こがらしの音を着て行紙衣哉

勿躰を彩色したる紙衣哉

切張にして見せ給ふ紙衣哉

裏表なき老の氣の紙衣哉

綿子 老も身を菊にゆだねてわた子哉

拜領の手にへばりつく綿衣哉

頭巾 角ほしき日もあり風の投頭巾

白髮を染るに替へて頭巾哉

こゝろ〳〵葱ぶの里の頭巾哉

紙衾 繕ひも落葉朽葉や紙衾

破れる時南無と唱ふるふすま哉

同宿のいたづら書し衾かな

蝙蝠となりし夢見る灸かな
破れめに鍾馗の見ゆる灸哉

炭竈　炭竈の櫻焚日かうすぐもり

火鉢　倹約の異見ゝにしがみ火鉢哉
考へて石取おとす火ばち哉

火桶　わづかなる氣の手にみつる火桶哉
彩色の手に馳走する火おけ哉
掌能おもひやる火おけかな

葱　冬枯るゝ日もまだ伸ぬ葱ばたけ
葱汁や今朝迄夢の一文字
いく重にも包んで霜の根深哉

納豆　賣聲に糸引て行納豆哉
霜消へぬ間を花にして納豆哉
納豆やさゞ波の裏打返し

蕎麥湯　一茶碗混沌としてそば湯哉
取あへず雪の雲汲そば湯哉

火燵　獨居の谷の戸にして火燵哉
唐紙の帯にはづるゝこたつ哉
出仕度をしてまだ〳〵と火燵哉
しかれども纖しき物や置ごたつ
不作法なもてなししたるこたつ哉

冬籠　そこに置け〳〵とて冬ごもり
冬籠紙衣衾共の住居哉
悟りたる顔でぶせうや冬ごもり

見ぬ事清し　聞ぬ事閑也
（泰）
臺然と座し　卒然と筆を取

塩からき學問止ん冬ごもり

冬の月　山鎣へ木枯れて冬も名月ぞ

詩哥老莊の糸筋をつたひ、向上の一路を開き、古今集の血脈を得て、寂色の風流、一派の元祖は是はせをの翁。

世の人のしらぬ色あり冬の月
冬の月さはらば指も切れぬべし
すさまじく堅く成けり冬の月

霜　下草の霜や朝日に荵ぶ摺

下駄の齒の碎てちるかしも柱
瓦にも撰りきらいあり今朝の霜

世交貴舘に初[illegible]推參し、其饗應にあまへ侍りて

金屏の室に忘るゝしも夜哉
野を向て行眼の淋し今朝の霜

冬至梅

梅にけふ魂すはる冬至哉
春の事を梅に腰押す冬至哉

冬至

日移りに蝿飛上る冬至哉
今來たと炭火のはねる冬至哉

髪置

かみ置や稚心の奢りそめ
髪おきや咲兒は雪のはつ櫻
かみ置や高砂かむる松の雪

水鳥

水鳥や兒見合ふては浪の底
水鳥や洲に入替る眠りばん

鴛鴦

鴛鴦や十二の裾のはねかへり
おし鳥や洗濯しては岩の上
寒き日や作り付たる岩に鴛
おし鳥に巫山の雨のねたみ哉

千鳥

氷らせに干浮を廻る千鳥哉
枯盡す世を波に咲千どり哉
よもつきじ酒買ふ人も川ちどり
飛は洲のけんさうかわる千鳥哉
一疊磯に網うつちどり哉

生海鼠

爼板にまだ眼の覺ぬ生海鼠哉
解もやらず氷りもやらずなまこ哉
料られて利口に成し生海鼠哉
信玄も箸に工夫のなまこ哉
なまこくふ齒音や雪の高木履

石花

いくつにも打欠く蠣の岩戸哉
から蠣や地借數多の裏合

鮟鱇

あんこうや敲けば腹の波大(太)皷
鮟鱇や價につのる道具數

霰

おもしろき愛宕の坂の霰哉
水はきの地形を追ふてあられ哉

霙

奈漬とも粥ともつかず霙かな

氷柱

夜の内に鬼の家となる氷柱哉

子庇の夜〳〵の涎のつらゝかな

暖鳥

死んでこそ活る瀬もあり暖鳥

葱に鰒こや元ぶねのぬくめ鳥

神樂

一年の清めや雪の里神樂

雪に灯の竹もる影や里神樂

夜神樂や氷の岩戸まだ明かず

吹革祭

はやされて風だる吹革祭かな

氏雲が榓柑降らせる祭り哉

飾ひあきてまけるや雪の糟ぐるみ

雪

櫻より立田は雪の梢かな

ひとつ〳〵衛見わけつ今朝の雪

貢する常盤は寒し蓑の雪

有ほどの色に分りて今朝のゆき

酒相手かきさがし行雪見哉

降れや雪葱畑二反かまへたり

深雪ふる野山に今朝は松もなし

はつ雪や木〳〵しらむ迄は緣に居

臘八

臘八や心は梅も水仙も

臘八や貧女の悟る物着星

寒梅

寒梅や酢でいためたる花の色

寒梅のまたゝきしたる日向哉

寒梅や夜越しの月の露氷

早咲

早咲や凍付て咲く花十日

寒菊

寒菊や下葉〳〵は染紙衣

かんぎくや酒の香しらぬ寮の庭

かん菊や握つた花のほぐれかね

藥喰

料理場を見せぬ家傳や藥喰

聲聞たさむさもどるやくすりくひ

むざんやな幾世活んと藥くひ

夢いかに老の夫婦のくすり喰

乾鮭

空鮭やその山川の岩の肌

鰒

振廻ふて左右聞もおかし河豚汁

世の中や鬼の女房の河豚汁

鰒汁やあしたの原は雪の旅

身を捨てこそ寐る夜あり河豚汁

氷

ふぐ汁や雪ともしらで戻り橋
盗人の崩して迯る氷かな
波の綾のし仕廻ふたる氷哉
濁らずに月を隔る氷かな
來る水の居る氷わたる氷哉
風も斯く積るものかや厚氷
風の皺雨の瘦まで氷けり
南天の葉は裏につく氷かな

寄氷神祇

正直は氷る時とて氷かな

奥戸遊行之内

日にわかれ月に寄添ふ氷哉

寒聲

かん聲や身をそらし行橋の上
寒聲は永閑ぶしを鳴戸かな

寒稽古

雪霜の磨を梅の寒稽古

寒晒

縄を綯ふ爺を案山子や寒ざらし

鉢敲

凍る夜の聲から割て鉢たゝき
瘤も斯なる身のたねかはちたゝき
胸の塵拂ふ茶筌や鉢たゝき
粥腹はさも鳴るべきを鉢敲
節季ゆの夜をしづめけり鉢たゝき

寒念佛

寒念佛寐て聞我は牛ならん

石腸鐵心の語を思ひて

たじろがぬ心の鐃や寒念佛
我が罪をいでや念佛に寒ざらし

煤拂

月雪の煤いでとらん反古さらへ
煤拂や山海經の道具立
さりとては捨る物なしすゝ佛
雨晴の松や清洲の煤はらる

節季候

算盤の玉飛せけり節季ゆ
節季ゆやはるかに春を呼子鳥

うはら

諷へ〳〵うばら美し餅のつや

餅搗

餅春や莚の中のよしの山

年忘

湯豆腐の濁らぬ同士や年忘
分別の無ひを上座や年忘
醉ばやな年忘艸の花ほどに

寶船

鄰から老の笑顔やたから船

風呂出炬燵に寐るを寶舟

節分

是も又夢くふ物歟赤いわし

我かつしかの里には、今宵菊の枯枝を焚くも、その所のならひなるべし。

菊灶やけふは蒼朮の神事の夜

豆蒔や六十を又ひろいぐひ

咄し合ふ門や悋氣のさし柊

節分の行燈に虫を感じけり

歳暮

鶯の笠は紛れじ年の關

松はしらぬ振して年の尾上哉

馬で行年見送らん日本橋

掛乞に我はかむらん我が面ン

木槃子どふ磨ても大晦日

挨拶も喩嘲になりぬ年の門

七曲の玉くゞる夜や大晦日

應秤春から掛ヶつ大晦日

世の人を昔にくらべつゝ間見哉

縱横に踏んで越へけり年の關

のがさじよ的の裏なる年の鬼

花に行過る人の心よ、實にあさしら波さも見返らぬを、立田越の危き闇夜なるべし。

行年を手もと八筆の步行哉

行年に春の日一日拾ひけり

金持たぬ人佛なりとしの暮

恙なく入日唱へぬ大晦日

一とせも既に和布苅の目端哉

我が黑きこゝろを梅に岡見哉

天地庵の納會を壽く

春をはげむ朱の蓍や年の梅

畫贊之部

山水贊

氷るやら鐘の音白し寒山寺

落雁に雪笹の贊

鴈一字誰が雪の詩の踏落し

雪中東陂驢馬に乘贊

素襟雄の馬は急がぬ雪見哉

川渡布袋贊

年の瀬や頭巾に替へて米袋

三聖人の贊

あると無と中に小はるの衍哉

三笑の畵贊

誘ひ出して小春の中の笑かな

枯蓮に蛙の贊

色と香のかれ蓮に觀ずる蛙哉

宗祇一軸の贊

さらに時雨の宿り哉　この給ひし

にすがりて

墨色も更に世にふる時雨哉

賀之部

四十の賀

醉ふとても迷はぬ年を祝ひ酒

南壑六十の賀

萬代も耳にしたがへ濱ちどり

八十八の賀、徐風取次

ふり添へん米の貢の年の雪

白芹名弘メ摺物題、燒もの

かけしほも年の手爾葉ぞかながしら

冬至の日娘をもふけて

産顏の梅に照る日の冬至哉

雜冬之部

霜月十五日神田明神へ參詣せし折

から、歸りに風聲亭を尋て

不沙汰して今日顏見せや八十二

留　別

立歸る春は間もなし歸り花

信阿伊豆へ趣くに送る餞別

煤掃て歸りをまつの寐覺く

蓮佐別莊

富りけりしぐれ霞の小はる凪

神祇釋教之部

館林聖天奉納

抱付て竹臥雪や歡喜天

下野湯泉大明神奉納

民救ふ壺あり雪に湯の泉

上州桐生大明神奉納

惠みとや世の梶とりの暖め酒

摩利支天奉納

りゝしさや陽をふまへて冬至梅

栗津が原義仲寺の芭蕉堂へ納んと、關東の好士の吟章を進め集めて二册となすは古桃子也。誠に後世の執心の名を殘さしめんと厚き志、此趣を記すはかつしかの曇華齊素丸なり。

搔よせて共木の下に落葉哉

中峯和尙座禪論

外於二一切善惡境界一不レ起二心一念一爲レ坐内見二自性不動一爲レ禪

是を題にして一句あたへよと、万各望申されしかば

張つめて居れば底澄む氷かな

追善懷舊之部

貞德翁忌

此翁の書たまいし天水抄を開きて

天水の氷柱しぼらん硯にも

芭蕉翁忌

圓〳〵の硯に廻るしぐれ哉

五十回忌

郁郁は借らす枯野の夢もけふ

ばせを忌や鴈も旅寐に寺の前

孫彥枝覆ふや桃の小はる影

西上人の像を倶に移して

寂同士の中よくいませばせをの會

はせを忌の古則や茶食茶の羽織

今年七十年なれば

芭蕉忌や古來稀なる道の德

百回忌引上

佛の百年高し蓑のゆき

正當百回忌

濱ゆふの頓寫經木やはせをの會

言の葉の霜覆にせん檜がさ

寄そふもけふを柱や芭蕉の會

隨心院様十七周

十七年あとは兄弟時雨しに

信夫追善

笹鳴の子やしたふ其月日〳〵

四十余年斷金の友、白華園主人に
おくれて

此別れわれに身を裂く霜氷

敬林鳥追善

丹誠の氷も室のわかれ哉

常州久下田鶴遊婦追悼

化粧のみはかなく殘る霜の艸

子光追悼

落葉朽葉ふさぐ筧の別れ哉

白寶追善

色付し葉も凩のわかれ哉

閑流子亡父追善　生前に立花を愛せられしと聞て

雪折も眞たしかなり西の空

素陸一周忌

魂いかに霜は歸るを小祥忌

素曉一周忌

けふにめぐる去年の轍の霜悲し

豆(頭)陀袋の銘

人和を襟にかけたら自慢の底をとれ

口をひらけばおかしく　唯此蕉門の頭陀袋

素丸發句集　冬之部　終

跋

莵堂弊聴。風雅正之玖。雅播眞言安理登會。萬澤路本莵久世盤。句中耳魂入天。天地達貫久妙用達奈壽弊之。師七十有余年俳諧三昧。花丹唫之月遁詠之。森羅萬象丹牟可布。其心能凝麗樓也。彼山水丹非數佛像丹安良須。師感鐵心石腸與理出當屡文章句ゝ那利。葦萬葛飾能正風布羅津當幾亭。遺命越堂感弊數。如是菴主人可誠遠盡之。故ゝ耳尋年感之降耳求女。日遠可撮補月達經亭。也遠羅稿南理。精選之天集作類能功。丕久楚奈盤麗理氣耳毎。師能精靈在可如玖。語屡感故東辭。是我門能心法登以飛都邊之東。亨堂菊露志遠同之亭。謹而後耳採毫。

寛政八丙辰秋七月

撰者絢堂德布、日比野勝なれど、師命を重んじて既に句集成ぬ。祖翁の吟すら句屑などゝ先哲の批判も少からず。ましてや素丸をや。劣きあれば衆議の列にも加はらず、たゞ今より後の名匠譏り給らんとを恐るゝのみ。かの百庵が、師に罪を課せるといひしにもあたらんか。然どもよくは天地よりよく、あしくは天地よりあしく、多句吐ざれば秀逸もなし。仕損じに何の苦しみあらんと、師は敢て得失にかゝはらず、弟子を導くを専らとし給つれば、末期まで俳意他事なし。我黨の及ぶ所にあらず。近來名人と呼れしも、晩年に至りては、あだなる句もまゝ有し、褒貶はしる人ぞ知べき。予七句に及て、漸是をおぼゆ。老俳何かせん。すなはち毛のぬけた犬也。佳句有は壯年のうちぞ。若き人ゝつとめたまへと、其夜坊の燈下に野逸跋。

通説

本卷は明和安永天明の俳諧中興時代に於ける諸傑の俳句集を編輯したものなので、現代の俳人――大體に於て俳句のみを主眼とし且つ天明調の感化を多く受けてゐる私達には、直接の興味が深く讀まれるものだが、所謂、天明調と云つても、決して一樣ではなかつたのである。

天明時代の俳傑として第一に指を屈せらるべき作家は勿論、蕪村であるが、之は『蕪村一代集』として別に一卷となつて編まれる筈であるから本卷には省いてある。蕪村を除けば、蕪村一黨に屬する太祇が作家として最も傑出してゐる。次には蕪村門下の召波と几董とがやはり擢んでゝゐると思ふ。此二人は嘗て正岡子規に依て推擧されるまでは、蕪村の陰にかくれがちであつたものだが、本卷に於て、當時の天下諸方の英雄の作品を集めた中に肩を比べて見ても毫も見劣りしないだけの實力はある。曉臺と闌更とは關西を根城とし、蓼太は關東を本陣として俳名を天下にとゞろかした。此三家の句を輯めた三傑集といふものが夙くから作られたのを以ても、其俳名の大きかつた事はわかる。關東に於ては蓼太と並んで、白雄が一家として堂々たる地步を占めてゐた。で、當時の「俳壇」といふ情勢を重心として史實的に考へるのと、「俳句」といふ藝術を重心として批判的に考へるのと、大分に違つたものになるが、此『日本俳諧大系』の骨子を立てる上では、後者の見方を取つたので、さればこそ中興の諸傑を統輯して之に「蕪村時代」の名を冠せしめたる所以である。蕪村一黨と先後それ〲に連關ある宋屋、嘯山、大魯の三子、外に樗良、赤羅、麥水、米翁、晩得、素丸等、それ〲に一家の風を備へてゐる人々の句集が夫々の後生に依て錄成されてゐたのは喜ばしい事

である。それらの各家の作品に就ては、通讀の上の印象的批評を以下に述べたいと思ふのであるが、その前に作家が句集を出すといふ事に就て一言したい。

芭蕉は自分の句集を作るといふ事をしなかつた、門弟が編まうといふことをも拒んだ、それは名聞がましいことを嫌つたためであらう。其爲に後世になつて芭蕉の句を研究しようといふものが、どれ程不便を感じたかしれないであらう。然し、句を作るのは人に示すが爲ではなくて自ら樂しむにありとすれば、後世の研究者などを眼中に置かなくとも好い譯であらうが（又後世の事を考へるといふ意識そのものが見方に依つては一種の俗でもあるが）正確な句集がない爲に作品自體が訛傳せられたり誤記せられたりせざるを得ない事實は、作家自身としても、若し後世で知つたならば決して氣持の好い事ではあるまいと思ふ。ともかく、芭蕉からしてさうである爲に、俳人は兎角、自分の句集を自ら上梓するといふ事を非常に遠慮する風が出來たのであつて、本卷に輯めてある句集の大部分も、其歿後に門弟の編んだものなのである。蕪村は「新花摘」に斯う云つてゐる——

　五元集は角が自選にして、もとより自筆に淨寫して、剞劂氏にあたへ、世にひろくせんと思ひとりたる物なれば、菱柞の法も嚴なるべし、さるを其集も閲するに大かた解し難き句のみにて、よきと思ふ句はまれ〳〵なり、それが中に、世に膾炙せるはいづれもやすらかにしてきこゆる句なり。されば作者のこゝろに、これは妙にし得たりなどうちほのめくもいとむつかしく聞えがたきは、闇に錦着たらんに類ひにて、無益のわざなるべし。家々の句集を見るに、多く歿後に出せるものなり、ひとり五元集のみ現在に出せる也、發句集は出さずともあれなど覺ゆれ、句集出でゝのち、すべて日來の聲譽を減ずるものなり。

日來の聲譽を減ずることを氣遣ふが爲に、自分の句集を出すことを好まないといふ心ならば、自ら句集を出さぬこ

とこそ名聞の爲だと云ふべきで、芭蕉の氣持のやうに名聞にかゝはらぬならば寧ろ進んで句集を出すが好いといふパラドックスも成立するであらう。私が思ふに、或意味に於て俳句は、自分の境涯の見解であると共に、自分の心の懺悔である、自分の句集を出すといふ事も、之を懺悔と考へるべきである。自分の俗情淺解をみな投出して行き、投出しぬいてこそ、自分が純化せられ深化せられるのではないか、それも亦句作精進の一つの道ではないか——。蕪村は上文に續いて云ふ。

玄峯集、麥林集などもかんはせなきこゝちせらるれ、況や汎々の輩は論ずべくもあらず、よき句といふものはきはめて得がたきものなり、其角は俳中の李靑蓮と呼れたるものなり、それだに百千の句のうち、めでたしと聞ゆるは二十句に足らず覺ゆ、其角が句集は、聞へがたき句多けれども、讀むたびにあかず覺ゆ、是れ角がまされるところなり、とかく句は磊落なるをよしとすべし。

いかにも、一家の句集の中に、佳句といふものは少いものだ、むしろ讀み通しえぬ程に退屈を覺えるものが多い。さういふ點から云つても太祇の句集は確かに異色がある。「太祇句選」の序で見ると、太祇といふ人は非常に句作の多かつた人で、其句集の草稿を積重ねると人のたける肩ほどもあつた、嘯山、雅因の二人が之の選にかゝつたものゝ、疲れきつてどうにもならない。で、蕪村は、いゝ加減にしておくが好い、四季のはじめの所だけを選みて初稿と題して出しておけ、二稿三稿は數年後に出したとてもいゝものだといふたとの事である。之は此言葉のまゝが事實だつたのか、或は此句集を以て太祇の全體と見てくれては困ると、彼をかばふ意味の序文的文飾を以て書かれたものだつたのか、其は解らないが、試に其後に出た五雲編の「太祇句選、後篇」及び「石の月」と較べて見ると、大體に於て前編の句の方が立ちまさつてゐる。して見ると、前編を選む時に、彼の句稿全體を通じて、かなりすぐりぬいたものと察

せられる。中には前編後編を通じて同じ趣向のものもある。

夜を寝ぬと見ゆるあゆみやかたつむり　（太祇句選）
今朝みれば夜の歩みやかたつむり　（同、後編）

醫者へ行く子のうつくしき頭巾かな　（同、後編）
醫者へ行く子にかぶせたる頭巾かな　（石の月）

之を較べても、前に出したものだけで足りてゐる。後出のものは却て其を悪く傷つけてゐる觀がある。とも角、太祇の句として特色のあるものは殆ど前編に收められてゐる。

春駒や男顔なるをんなの子　太祇
東風吹とかたりもぞ行く主と從者　同
うぐひすや聟に來にける子の一間　同
來るとはや往來數ある燕かな　同
塀ごしに柄から參らすうちはかな　同
水の中へ錢遣りけらし心太　同
痩たるをかなしむ蘭の莟みけり　同
みか月や膝へ影さす舟の中　同
かぶりつく柿のしぶさや十が十　同
おどすなり年くるゝよをうしろから　同

それ〴〵の星あらはるゝ寒さかな　同

うつくしき日和となりぬ雪の上　同

太祇の句には幅がある、厚みがある、どつしりとしてゐる、しかも滑かである。巧みである、しかも臭みがない。「うぐひすや」「東風ふくと」「樹越しに」の如き人事を詠じては或は複雜な場面をこなし、或は纖細な趣味を出し、又「それ〴〵の星」「うつくしき日和」「痩たるを」の如き自然を寫しては、或は壯大な風景を捉へ、或は微小の生命を活かすといふ風に、縱横に行屆いてゐる觀照と表現とは、まことに練達の士なることを思はせる。嘯山の序に太祇の句作ぶりに就て、「其好るや樂るや尋常にかはりて、行住座臥燕飲病床といへども、日課の句を怠らず、まいて誰某が會など云には一の題に十餘章を並べ……いつも沈吟する事他に倍せり」云々とは、さもあらうと思ふ事である。彼の句が何れも練れてゐて、しかもねばりがなく垢ぬけしてゐる事も所以あるかなである。此ねばりがなく垢ぬけするといふ事は、言葉にリヅムを持つ事でもある。「かぶりつく「おどす也」の如き、平常の何でもない事が斯う云ふとちやんと句になつてゐるのは言葉にリヅムをもつてゐるからに外ならない、彼の句の何れにも讀後の快さのある事も此點からである。「太祇句選後編」からは

見へそめて夕汐みちぬ蘆の角　太祇

吹倒す起す吹るゝ案山子かな　同

初雁や遊女にあぶらさゝせけり　同

十月の笹の葉青し肴籠　同

句を練て腸うごく霜よかな　同

「句を練て」とは太祇その人の意氣軒昂たる姿をさながら見るが如くである。太祇の句の粒の揃つてゐることは上にも述べたが、さりとて全然批難のないでもない。それは人事趣味を詠じて失敗したものにある。

はねつくや世ごゝろしらぬ大またげ　太祇
鰒賣に喰べき顔とみられけり　同
あまた蚊の血にふくれゐる座禪哉　同
着物のうせてわめくや辻角力　同
下戸ひとり酒に逃たる火燵かな　同

後世の川柳趣味と類似があるとも云へよう。さうすると、太祇の師たる慶紀逸が「武玉川」の作者で、此書は川柳の起源とも云へる、その点に或脈絡が考へられなくもないのである。又、「太祇句選」一通讀中、氣がついたまゝに

勝逃の旅人あやし辻角力　太祇
飛入の力者あやしき角力かな　蕪村

幟たつ母なん遊女なりけらし　太祇
更衣母なん藤原氏なりけり　蕪村

此句兄弟では、何れも蕪村の方が勝つてゐると思ふ。

召波は小蕪村といふ感がある。その「春泥發句集」に蕪村は序して「一旦病にふして起つことあたはず、形容日々にかしけ、湯藥ほどこすべからず、豫め終焉の期をさし、余を招て手を振て曰、恨らくは叟とともに流行を同じくせざることを、と言終て**涙潸然として泉下に歸しぬ、余三たび泣て曰、我俳諧西せり、我俳諧西せり**」と書いてゐる。

召波が殁した時、蕪村が片腕をもがれたやうに感じて嘆いた氣持も尤もである。召波の句はすべてかつちりと出來てゐる、そつがない。何よりも美しさといふ事を好く出してをり、而してさらりとしてゐる、感覺的であり、且つフレッシュである。

元日や草の戸越の麥畠　召波
蕣に獨り起出るや泊り客　同
すゞめ子や書寫の机のほとり迄　同
地車に起行く草の胡蝶かな　同
ゆく春やいづこ流人の迎舟　同
たんぽゝもけふ白頭に暮の春　同
行螢夜のみかうしまいりけり　同
まらう人へ團まゐらせん白き方　同
荒海に題目見えてけさの秋　同
乾きたる蟲籠の草やあら無沙汰　同
寒菊や猶なつかしき光悦寺　同
子の母よいく度結ぶ足袋の紐　同

「元日」に麥畑、實に無心の取りあはせであつて、然もかつちりとして動かない。「行螢」の「みかうし」と云つたゞけで平安朝時代の局でも思はせるやうなそつのない云ひ方、「地車」に蝶、「寒菊」に光悦寺の美しさ、「すゞめ子」「まろ

うど」のさらりとしたる、此調子で彼は「蟲籠」「子の母」の如き身邊の瑣事を淀みなく俳化して行くので、あら無沙汰、けふ白頭になどいふ言葉を驅使する上では實に其こつを得てゐるものである。此點は太祇もうまいが

山吹や葉に花に葉に花に葉に　太祇
落なんを葉にかゝへたる椿かな　召波

召波もうまいものだ。前句は如何にも山吹の姿であり、後句は如何にも椿の姿である。

凪の箱根に澄むや伊豆の海　太祇
波の寄ル小じまも見えて霞哉　召波

此二句は實朝の歌（箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ）から來てゐるとも限らないが、假に之を較べて見ても此二作家の行き方の差は解る。卽ち太祇には大きさがあるが、それだけ所謂大味だといふ物足らなさもある、召波はデリケエトであるだけ、感覺的にぴつたりと來るやうに出さうとしてゐる。

かの後家のうしろに踊る狐かな

どうしたものか此句は「太祇句選」にも出てゐるし、召波の「春泥發句集」にも出てゐる、句振りから云へば太祇らしいが――。

羽ネもいだ蠅歩行けり誰が所爲　召波
茶の花に文覺のやうな庵主哉　同
名月や金拾はんとたち出る　同

かうした俗談も皆無ではないけれども、惡い句の少い點では、召波の方がむしろ太祇より勝つてゐるであらう。

几董は蕪村の嫡流だけあつて其句風はしつかりしてゐる。召波が蕪村を小さくしたといふ感じがあるのと對して云へば、几董は蕪村の模倣をしてゐるといふ所が目立つ。然し、其「井華集」一卷を通じて見ると、なか〳〵佳い句には富んでゐる。

戀々として柳遠のく舟路かな　几董
日は落て増かとぞ見ゆる春の水　同
あとざまに小魚ながるゝ清水哉　同
睡氣さす魔を蹴て行や子規　同
桔梗なら女郎花なら露にぬれて　同
蟲聲非一おほとのあぶらしろき迄　同
こがらしや三つに裂たるちくま川　同

「戀々として」「蟲聲非一」などゝいふ漢語はよく使ひこなしてゐるものゝ、一句としてのリヅムに几董の個性とも見るべきものは甚だ乏しい。「こがらしや」の句も蕪村の「こがらしや岩に裂けゆく水の聲」からヒントを受けてゐるのではないかといふ氣もする。

梅の木の容（カタチヅクリ）すはつしぐれ　几董
沖津鯛冬の山葵もたゞならぬ　同

「容（カクチヅクリ）す」「――もたゞならぬ」など面白い言葉があると思ふものは、大抵蕪村にもあるものなので「いざ雪見容（カクチヅクリ）す蓑と笠」「大文字やあふみの空もたゞならぬ」などゝいふ句がすぐ手繰られる。之はどちらが先かを文書的に考證した

上でなければ、輕々しく模倣よばゝりは出來ない譯であらうが、几董の大體の行き方から見て、獨創的な所の少い人だとは云はれると思ふ。

水底に青砥が錢やけさの秋　召波

貫之が舟の灯による千鳥かな　几董

召波の句、靑砥の錢にけさの秋とは凡々の輩の捕へ得ぬ所である（且つ此句は詠史ではなくて、現前の事をかうしやれたのであらう）、貫之の土佐日記に千鳥とは好く出來てはゐるけれども、一寸是ひ付きさうな所である。

島原の歸さ

桐油くさき駕に蛙を聞く夜かな　几董

年かくすやりてが豆をうばひけり　同

かうした所が几董の彼らしく正直な面目であり

大阪の遊女がしらずさくら狩　几董

冬の夜や我に無藝のおもひ有　同

後の句は「自悔」といふ前書があるが、是等は俳句になるべきものではあるまい。

大魯の句は手堅い所がある。上手といふ味はないけれども、眞率なといふ德はある。其句集「蘆陰句選」に蕪村は序して「大魯はもと攝播維陽の一大家と呼れて我門の嚢錐なりし」と云ひ、此「遺稿出て人いよ〳〵其完璧をしるべし、是大魯が身後の榮、ます〳〵そのひかりを加ふるに足らん」と賞めてゐるが――。

おもひ出て庭掃く春の夕かな　大魯

山陰や茶の花咲ぬ春過ぬ　同
そら豆の花散る里やいせまいり　同
さればとて凋みも果ぬ木槿哉　同
あら海へ打火こぼるゝ寒かな　同

斯様に佳吟として拾はるゝものは多くない。蕪村の言にはやはり序文的の御世辭があるやうである。然し

牡丹折し父の怒ぞなつかしき　大魯
われが身に故郷ふたつ秋の暮　同

是等の句から想像される其人がらには誰もが好感を持ち得るであらう。「われが身に」の句には几董が「新雑談集」に「大魯は阿藩の士、公務の餘力風流に志深く、晩年に及び致仕して京師に住し、余と膠漆の友なりしが、また浪華に遷て三とせの秋」と書添へてゐる。

宋屋は蕪村と同じく巴人の門であつて、蕪村の先輩であり、巴人が歸東後、蕪村がまだ若くて畫筵をもつて放浪してゐた頃既に、京洛の地に中興新風の地盤を築いたものは彼である。此意味から其句集なる「瓢簞集」は俳史的に重んぜらるべきものである、

烏たつて雨のこぼるゝ柳かな　宋屋
馬の尾に拂ひゆくなる時雨かな　同
隣にも雨夜の手燭ほとゝぎす　同

之を景色として見れば趣のある所を捉へてゐるのだけれども、其表現にはまだあくのぬけてゐない所がある。然し

吉野出て虻の離れぬ袂かな　宋屋

印籠の薬も湧や雲の峰　同

かうしたすつきりした作もある。好く旅行をした人で、此集にある蕪村筆の彼の像も行脚姿に書いてゐる。

嘯山は、その宋屋直流の俊才であつて、「俳諧古選」「俳諧新選」の編者として著はれてゐる。其總論に見える彼の言葉「風雅に流儀を立るは一反の事也、實事に至てはいはゆる眞劍勝負にて唯上手と下手の二つのみ也」は意見としてうなづかれるが、嘯山その人の技倆は上手とは云ひ難く、その眼のつけ所も概して高いとは云ひ難い。「葎亭句集」(鈴鹿越)を開いて見ても

鳥の巣や一筋づゝの藁仕事　嘯山

雛にも人の奢のうつりけり　同

又花を見するや梨の切小口　同

虎のみかみかんも皮をとゞめけり　同

の如く理に落ちたものが多い。然し、此集の澤山な句數の中から相當の句を拾ひ出す事も出來る。

うめさくや堞を直す組屋敷　嘯山

枇杷黄なり町屋にまじる門徒寺　同

朝がほや朝の雲のわかれ時　同

吹れ行く向ひ近江や蘆の花　同

蕪村一黨の一人として、その才學の外に、作家としても認められてゐるたゞけのものはある。

次に、蕪村一黨ではないが、蕪村も相應に敬意を拂ひ、相携へて俳諧中興運動に於ける本質的の業績を遺した人としては、誰よりも曉臺を擧げずばなるまい。「曉臺句集」二卷を見て、彼の力量は充分に知る事が出來る。

火ともせばうら梅がちに見ゆるなり　曉臺
涅槃會や雲下り來る音羽山　同
ほたるうりすゞしの頭巾きたりけり　同
すは〳〵と夜は明易し麻畑　同
日ぐらしのなけばつら〳〵故鄕を思ふ　同
九月盡遙に能登の岬かな　同
初冬や二つ子に箸とらせける　同
障子まで來る蠅もあり翁の日　同
落葉落かさなりて雨雨をうつ　同
年迫る風大空を鳴らすかな　同

これで見ると、曉臺にはかなり包攝力の大いなるものがある。彼が一家として大いさをなした所以もこゝにあらう。しぜん蕪村等とも影響しあふた事も明かで

頭巾きて誰やらわたる春の水　曉臺

「烏帽子きて誰やらわたる春の水」は蕪村である。曉臺の句ぶりは大體として揃つてゐる中に

さをしかの角にかけてや峯の月　曉臺

腫物をかゝへる紙衣ざはり哉　同

二日見ぬほどや柳のおもかはり　同

ほとゝぎすつひに憎しと思ふ夜や　同

の如き幼稚のものが、まゝ眼に觸れるのは年代として彼の初期のものではないかしらと思ふ。之はひとり曉臺ばかりでなく、誰の句集にでも同樣の事がある譯だが、之も作者自身が生前に目下の句集を作ることを好まずして、其歿後になつてから、門人が掻集めて編輯する事の弊である。その爲に却て、故人を傷つける事がどれだけあるかしれないと思ふ。

闌更の「半化坊發句集」は好い句として感ずるものよりも、悪い句として眉をひそめしむるものゝ方が目立つ。之も好意に解すれば、彼の初期のものが多分に混じたものだらうと思ふが、編者は「舊作をはぶく」といふ方針で輯めたとことわつてゐるから、さう好意に見る要はないのであらうか。好い句と思ふのは平淡にして無心なるもので——

春の日や夕べ賑ふ海の幸　闌更

鵜の面に川波かゝる火影かな　同

夕晴や切籠さげゆく京の町　同

紅葉散て竹の中なる清閑寺　同

時雨るや角まじへゐる野べの牛　同

悪い句と思ふのは、甚だ平俗にしてあてぎのあるもので——

元日や此心にて世に居たし　闌更

眼をさます雉子も有らんきじの聲　　同
仰向て鳴くか水鷄も月の下　　同
今宵なくば石ともならん二つ星　　同
明月や座頭の妻のかこち顏　　同

最後の句は「名月は座頭の妻の泣く夜かな」と更に一層平俗化して人口に膾炙されてゐる。闌更は復古運動に眼をさまして伊勢風から脫出し、芭蕉の正しきに歸らうとしたものだが、もとの伊勢風が全然脫けきらなかつたか、又、花の本宗匠の名を得てから、しぜんに俗化した所もあるやうである。

樗良も亦伊勢風に反抗して立つた人である。尤も乙由一派に屬してゐた事はないから反逆者ではなく、已は已として初めから自由に、世間にかゝはらず大手を振つて行つた。其句風にも、さうしたのび〳〵とした、物にかゝはらぬ風の見える所が好い。

山寺や誰も參らぬねはん像　　樗良
雲高く風たえて花のあらし山　　同
秋たつや雲はながれて風見ゆる　　同
はつしもや飯の湯あまき朝日和　　同
海老燒てやまひに遊ぶ寒の中　　同

彼には無我無心の句が多い。中には小さな巧みを思はせる句もあるが――

うぐひすやよき程づゝの聲の間　　同

萩が根に月さし入て風ほそし　同

これらは彼らしくないものとして見捨てゝおきたい。

青蘿は美濃風から反抗して出た人で、其氣質としても其句風としても樗良とは合つてゐたらしい。

なゝくさや翠は野寺の初藥師　青蘿

ゆくはるは麥にかくれて仕廻けり　同

我宿の山梔子しろし杜宇　同

角あけて牛人をみる夏野かな　同

初しもや水ひた〳〵の蘆の葉に　同

此人にも舊いくさみの脫けきらぬやうな句が集中に殘されてゐるのは惜しい。

雪を出て雪より青し松の風　青蘿

傾城のをがんで笑ふねはん哉　同

或句の端書に「松の悲しき秋風の樂にたぐへし水の音に流水の曲をあやつる藝は是つたなければ人の耳をよろこばしめんにもあらず、獨しらべ、ひとり詠じて、自からこゝろを養ふばかりなり」と、之が此人のしんしようである。

麥水は伊勢風を捨てゝより虛栗調を喜んだ人で「新みなし栗」（第九卷所載）で見ると、そのぎごちない調子をしきりと宣揚せんとしてゐるが、其句集「葛箒」に輯められてゐるものは

いつもある舟をまねいて柳かな　麥水

糸に咲黃に咲春の垣根哉　同

湖は里へひろがる青田かな　同

よは〳〵と日の行とゞく枯野哉　同

斯うしたなだらかな調子で、眼前の風景を捉へても其見方と言葉とに一技巧あるところ、彼が伊勢風の感化を受けてゐた跡は明らかである。しかも乙由よりずつと素質の好かつた事はやはり是等の句でわかると思ふ。

轉じて江戸の俳壇を觀よう。

當時、江戸の俳壇に隆々たる盛名をかちえてゐた蓼太は、其句ぶりを見ても、如何にもくせものである。善にも向けば惡にも向く男である。其「蓼太句集」は生前に出たものなので、門弟が編したことにしてあるが、作者の意圖があらはれてゐるものに違ひあるまい。

あれ春が笠着て行はきてゆくは　蓼太

鳥遠うして高欄に牡丹かな　同

あけぼのゝ青き中より一葉かな　同

岩端の鷲ふきはなつ野分かな　同

夕暮の篠のそよぎやみそさゞゐ　同

斯うした句だけを拔いて見ればソツがない。華麗にも壯大にも纎細にも、當るを幸とやつてゐる手際は上手だと云へよう。けれども、どうだ自分は上手だらうといふ氣持が其句の裏にくつついてゐる。而して面白く味はせようといふ作意も隱されてゐない。一體、句作は自分を樂しましむるものといふのが芭蕉の行き方なのだが、更に進んで萬人を樂しましめる爲に作つてもいゝではないかといふ論も成り立たぬ事はあるまい、――私は此後說には贊成しないが

――即ち大衆文藝的の行き方であつて、通俗に、一般向きに誰をもうなづかせるやうな趣味を提供するのである。蓼太はそこを覗つてゐる。

むつとしてもどれば庭に柳かな　蓼太
南から出たかもしらずおぼろ月　同
寢る時はふたつでもなし飛胡蝶　同
世の中は三日見ぬ間に櫻かな　同
我ものに手折ばさびし女郎花　同

斯ういふ所が蓼太の世間にもてはやされた所以であつて、藝術的に見れば低級俗惡なる所以である。「かしこに招れて珍膳にむかひ爰に膝を屈しては美味に舌打すれども」と或句の端書に彼は書いてゐる。美酒佳肴的生活そのものが何の非難すべきいはれはないけれども、其と均衡するだけに充實したる精神的生活のない事が、彼の作品から見えすくのである。兎も角、彼には才氣と覇氣がありすぎていけない。それは何の上にもやはり出てゐる。

凩にこがらし焚てしのぎけり　蓼太

火がめろ〳〵とする事を斯ういつたのだが、輕業も調子に乘りすぎると危い〳〵。次の句も同じである。

若鮎の小太刀遣ふて迯にけり　同

若鮎が身をひら〳〵させるのを小太刀の動きと見たので、其をつかふのもやつぱり若鮎（即ち小太刀）だから、をかしくもあれば、馬鹿々々しくもある。

うぐひすや小太刀佩たる身のひねり　几董

鶯を金衣公子といふ事からの着想だが、蓼太の句と見方は似てゐても句品は天と地とほど違ふのである。

白雄はすなほなる所を取りたい。此人の句もかなり世間的に歡迎せられたが、それは平明にして安易なる句調が喜ばれたのであらう。

二またになりて霞める野川かな　白雄

月の朧つばな月夜といはまほし　同

菖蒲湯や菖蒲よりくる乳のあたり　同

めくら子の端居さびしき木槿かな　同

しぐるゝや鹿にものいふ油つぎ　同

其集「白雄句集」を通覽すると、彼は所謂上手な作家とは云ひ難い。されば其上手ぶらぬ所が好く、あてきのない所が好い。

のどけさや津ゝ浦ゝのおもはるゝ　白雄

一色にいろ〳〵艸の靑きかな　同

春の嵐ちらざる花はちらぬなり　同

朝はものゝ朝皃の花もあたらしき　同

米翁の「蘇明山莊發句藻」は江戸座風のなげやりがつまらなく、且つお大名藝のやうなもので、評するほどのはりあひもしないが、あたりまへ千萬の事だが、それが理屈にわたつてゐないだけ、不愉快な感じはしないのである。

傳奏と吾妻へくだる雛かな　米翁

道哲へ横すぢかひや天の川　同

の如きものは同感出來る。尤も作者自身の得意とするものではあるまいが――。

片肌と襷と井戸の御慶哉　米翁

春雨やものかたりゆく簑と傘　蕪村

見方は似てゐるものゝ、俳句になるとならぬとの境、現今の人には説明するまでもあるまい。

晩得の「哲阿彌句藻」は宗因が檀林の句風をついだものであるが、純粹の宗因風のみではなく、當世の美濃伊勢の風もあり、江戸座風もあり、中には芭蕉風も見受けられる。

梅翁百年忌

梅散や既に宗因矢のごとし　晩得

よく人にもまれた上の紙衣かな　同

魂棚やせまいところは御堪忍　同

柿ひとつ殘る梢や百舌の聲　同

尤も

雪の日や觀音のうらによき泊　同

句調から見れば芭蕉風だけれども、「觀音のうらのよき泊」とは卽ち吉原を指して云ふのだから、うつかりした評も出來ない。

素丸の「素丸發句集」も素堂の葛飾風を承けてゐるといふものゝ、やはり當時のいろ〳〵の句調がまじつてゐるのは、むしろ自然の事であらう。その中でも

海どうや笑はんとする時を花　素丸

耳づくの無一物なる晝寢哉　同

行く秋に五臟の見ゆる糸瓜かな　同

是等が素丸らしい口調でもあり、句としても、さして惡くないものと思はれる。（荻原井泉水）

日本俳書大系第十一卷　終

昭和二年三月五日印刷
昭和二年三月十日發行

非賣品

日本俳書大系
（11）

著作者　神田豐穗

發行者　神田豐穗
東京市日本橋區數寄屋町一番地

印刷者　谷口熊之助
東京市牛込區早稻田鶴巻町四〇三

印刷所
春秋社印刷所

發行所
東京市日本橋區數寄屋町・春秋社内
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手 二一二四 二二二四

